

私は教授じゃないよ。  
大袈裟だよ

西の家

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

教授？大袈裟だよ。

私は至って平凡だよ！

ちよっと数学と読書が好きな女の子だよ。

恋愛はまだ早いと思ったので話の内容を少し変更してみました。

# 目次

外伝		外伝：さあ、りこりん!!?事件が私たちを呼んでいるよ!!?	相棒	理子	
編		外伝：ダークナイトはすぐ目の前だ!!			1
?	相棒	理子編			16
外伝：アメリカよ!わたしは帰ってきた(嘘です)	相棒	理子編			24
まずは拠点確保だ!	相棒	理子			32
編		外伝：食後の後は観光?いいえ、しませ			32
んよ	相棒	理子編			47
外伝	○○の星よ。金次&				53
外伝：ミスコン殺人事件	相棒	金次			53
&カナ編					70
原作前					
プロローグ					94
ペーパーテスト……		だよね?			112
始まる学校生活					132
食堂					142
探偵科の授業					161
相談という名の講習					173
部屋まで					181



それぞれの12月	498	送り迎え	672
本当の相棒	522	負の遺産(プレゼント)	693
武偵殺し		前準備	716
新学期の始まり	541	バスジャックその1	724
キンジの部屋にて	551	バスジャック その2	747
空からアイツがやって来たーローピンク	564	バスジャック その3	758
の悪魔が		病室にて	795
神崎・H・アリアアアアアアアアアアアア!!?		推理の時間ー『武偵殺し』に迫れ	
	590	815	
新しいクラスメイト	610	計画始動	836
ももまんの滝よ金次君!!?	622	思い通りにいかない人	849
ホームズ……いいえ教授の帰還で	646	初めての疑い	866
す。		アクロバット飛行は好きかい?	

空からまた降ってきたー今度は2人

して仲良く ————— 930

魔剣殺し編

会いたかったのは巫女さんで — 938

アドシアド ————— 964

新装備を貰いにいざ「工房」へ

973

何事もイメージトレーニングから

982

お金の貸し借りは慎重に ————— 991

外伝

外伝・さあ、りこりん!!? 事件が私たちを呼んでいるよ!!

?

相棒

理子編

武偵高校女子寮にて

「この事件も見捨て難いね」

私は部屋の壁に貼られたヨーロッパ州の地図を見ていた。

ヨーロッパで10〜20年前に起こった連続誘拐事件を私なりに調べてみたのだ。

地図には様々な新聞の切り抜きはもちろん、当時の証言を纏めた調書、誘拐された被害者の写真なども貼ってある。

「この犯人は何が目的なんだろうネ」

誘拐された被害者は全員、年齢、国籍、出身地などバラバラだ。しかし、共通するものが2つある。それは、全員が血統書付きと言ってもいいくらいのサラブレッドであることだ。

1つ目は先祖に高名な人間——武闘家、科学者、スポーツ選手、政治家など

C…… 決まってそういった人間だけが誘拐されている。

2つ目は保護された被害者は全員、身体から一定の血液が抜かれている。

「先祖に高名な人間がいるか…… 前にりこりんが相談してきたAさんの事例と似ているネ。この誘拐犯はVの可能性が高いな」

改めて、事件を推理してみると、誘拐事件とりこりんの友達のAさんの過去が類似している。おそらく、誘拐犯はVで決まりだろう。

「りこりんの友達のAさんに直接会って、話を聞いてみたいな」

Vー連続誘拐犯

Aさんーその被害者

調査では保護された被害者は全員、犯人の姿は見ていない。いや、覚えていないそう  
だ。

被害者の身体からは薬物反応は無かった。ならば、催眠術だろう。

しかし、前にりこりんの話からVを分析してみたが、Vは他人の力で強くなろうとする人物、しかも自己中心的。

催眠術は他者の心进行操作する為に、デリケートな作業が求められる。

つまり、相手の気持ちになれて尚且つ、人間の心という、決まった形の無いものを相手する高度な知識が求められる。



「私の見立てでは、Vはそこまで頭がいいとは思えないな。どちらかと言うと大雑把でガサツな性格だネ」

Vには少なくとも、2人の共犯者が存在する。

1人は高度な知識を持つ人間——科学者か教師タイプの人物かな。

二人目は難しいな。催眠術を使える人間……これは全世界の人間に共通することだ。

催眠術は資格などいらぬし、ネットや本で調べれば知識は簡単に手に入る。訓練すれば誰でも簡単にできる。

「被害者の記憶を操作するとすると、高度な催眠術が必要になる。自分の身元を隠させる——重大な仕事を任せられる人物」

Vに親しい人物？友達？——好き好んで犯罪の片棒を担ぐ人間はそんなにいない。

絶大な信頼を得ている——Vの身内——記憶を操作、高度な催眠術を操るとすると、高度な知識と知能、技術が求められる——女性の可能性大

「Vには年頃の娘か妻がいる」

再び地図を眺める。

誘拐事件のある時期には女性、それも年頃の若い娘が大勢誘拐された年がある。

Vと似て、妻か娘もほぼ同じような性癖——他者を痛めつけ、監禁し愉悅に浸るよう

な性格?それも相手は女性限定?

「Vは妻か娘、両方いる。妻子持ちか……」

しかし、女性を狙うなんて変わった性癖だね。まるでハンガリーのエリザベート・バートリーのようだ。

彼女は頭痛がすると、年頃の女性を殺害することで頭痛を治めたという。殺害する過程で様々な拷問器具や殺害方法も開発したそう。

あつ、でもアイアンメイデンは作っていないそう。

ちなみに彼女は『吸血鬼カーミラ』のモデルだ。

『吸血鬼』。その瞬間、私の頭にピキンツと閃くものが!

「そうか・Vのアジトは吸血鬼の故郷、ルーマニアだ!」

私は何かに取り憑かれたように壁に貼られた事件の関係図を洗いなおした。

糸で繋ぎ、繋ぐ、繋ぎ直す、それを繰り返した。

結果、糸はルーマニアに結びついた。

「ははは、できたよ。そうか、Vは捜査の手など恐れなかったから、ルーマニアでも犯行に及んでいたのか」

ルーマニアでも誘拐事件は起こっていた。被害地の一つだと思っていだが、違ったのだ。

Vは捜査―警察や武偵など恐れていない。だから、ヨーロッパで大胆にも犯行を重ねていたのだ。自分のアジトがあるのであろうルーマニアでもね。

しかし、ルーマニアから。吸血鬼の故郷と呼ばれているけど、あれはルーマニア、ワラキアの君主であるヴラド3世が『吸血鬼ドラキュラ』のモデルになったことで、根付いたイメージだ。

「吸血鬼か…… 　　そういうえば、被害者からは一定の血液が抜かれていたネ」

Vの正体は吸血鬼だったりして…… V a m p i r e なんちゃって♪

私は吸血鬼に会ったことはないが、存在するなら会ってみたいネ。

吸血鬼という十字架架、聖水といった聖なる物が苦手と言われている。気のせいか、

Vはヨーロッパの中でも、イタリアやバチカン周辺では犯行に及んでいない。

Vの正体―吸血鬼？もしくは吸血鬼のなりきり屋さん？

「…… いれい！れいれい！」

「うわ？？何？？」

私が思考していると、突然後ろから声が聞こえてきた。

誰だ貴様!!？と後ろを振り向いてみると、そこには、

「さつきから呼んでいるのに、無視なんてヒドイよーれいれい」

「あつ、りこりん」

ほっぺをぶつくりと膨らませた、りこりんが立っていた。

何だかご機嫌斜めだね。私、何かした？

「どうしたのりこりん？私の部屋に上がってきた？何か用があるのかな？」

「もう！忘れたの〜今日、学校でクエストと一緒に受けようって、約束したじゃん！」

あー、そうだった!!？専門科で一定の授業を受けた後、何かクエストを受けてみようと思つて、掲示板を見てみると、りこりんがやって来て一緒に受けよう誘ってきた。

それで、何にするかはりこりに任せていたんだった。

「ごめんね。りこりんが来るまでの間、過去の事件を調べていたんだよ」

「へえ〜、つまり何かな。りこりんとの約束を忘れるくらいに夢中になってたんだ〜ヒ

ドイぞ〜」

「本当にごめん!!？今度、ケーキ奢るからさ」

「もうヒトコエ!!？」

「りこりんの気の済むまで食べまくっていいよ」

「いいよ、許してあげる」

よっしやー！りこりに許してもらったよ。

彼女は甘い物に目がないからネ。知っていてよかった。これぞ、知らぬが損。いや、知らぬが仏だったかな？

「それで何の事件を調べ…… れいれい、どうやってここまで調べたの？」

うん？ りこりんが私の作った事件の関係図を見て、呆然としている。

特にルーマニアに焦点を当てた結果に驚いている様子だ。

「ああ、それね。私なりに推理した結果だよ。この事件の誘拐犯と、りこりんの友達を監禁したVは同一人物。そして、アジトはルーマニアにあると判明したよ。いやー、まさか吸血鬼で辿り着くとは思わなかったネ」

「どうして吸血鬼で辿り着いたの？ Vと何か関係があるの？」

おや？ 何だかりこりんの様子がおかしいぞ。うーん、まあ、いいかーこのまま続けて、話そう。

「私の頭にピキンツと来るものがあつてね。最初はVの共犯者を調べていくと、犯人の家族に辿り着いた。ヤツには妻と娘がいるとね」

そして、私は自分の推理ー辿り着いた結果をりこりに語った。

Vには共犯者がおり、最低でも2人。

共犯者は恐らく、身内。妻か娘。或いは両方とも共犯。

ルーマニアにアジトを構えており、武偵や警察など恐れていない。

しかし、イタリアとバチカンでは犯行に及んでいない。

この二つを恐れている。吸血鬼のなりきり屋さん。

「辿り着いたって、それだけで? ねえ、れいれい…… いや、零。お前は何者なんだ? あたしが言うのも何だがお前は普通じゃない」

突然、りこりんが男口調で喋り出した。

驚いた、えっ? 何なの一体…… イメチェン? 遊びでやっているのかな?

「うーむ、普通の定義はわからないな。ただ、私は推理、いや、分析しただけさ」

「嘘つけ。分析にしても限度があるぞ。1人の力でここまで辿り着けるワケがない。お前には協力者がいるんだろう? でなきや、これだけの資料が手に入るわけがない」

りこりんは床に散らばった書類、壁に貼られた写真や調書に目をやった。

「協力者かー、まあ、いない事はないね」

協力者といっても、探偵科と鑑識科、諜報科と尋問科、通信科と情報科の皆から資料を、貰っただけ。あとは、自分だけで纏めただけさ。

彼らは私の協力者というより、友達だよ。

「お前はこの事件を調べてどうするだ? まさか…… Vを捕まえる気か」

「そうだね。私は武偵、正義の味方、だから犯罪者は捕まえるよ。だって、Vのやっていることは、立派な犯罪だからね」

なんだろう? 正義の味方って単語を自分で聞いているとゾクゾクしてきたぞ。

「やめておけ、Vには勝てないぞ」

「おや？まるでりこりんはVと面識があるような感じだね。友達のAさんと一緒に会ったことがあるのかい？」

「…… ああ、そうだよ」

うん、素直でよろしい。

りこりんの様子からして、前にアドバイスした通りに、りこりんなりに計画してVに戦いを挑んだが、この様子を見る限り負けてしまったようだね。

しかし、よく生きてたな。Aさんは兎も角、りこりんが生きているとはね。VならAさんを生かしておくだろう。りこりんはそのまま殺されてもおかしくない。

もしかして、Aさん||りこりんの可能性が大かも。

「それで、りこりんから見て、Vはどのくらい強いのかな？ 私なら捕まえられそう？」

「無理だ。零でもVには勝てないし、捕まえられない」

今、噛みそうになったね。いや、別の言い方をしそうになったから、言い直した感じだね。

「ねえ、りこりん。これが何だ分かる？」

私は本棚からある本を取り出し、りこりに渡した。

「何これ？えーつと、『吸血鬼ドラキュラ』？」

りこりに渡したのは、ブラム・ストカー作の『吸血鬼ドラキュラ』だった。私はこ

の本、結構気に入っているんだよね。

「その本に出てくる吸血鬼ドラキュラと呼ばれる怪物は、それはそれは恐ろしい怪物だね。夜中、人間の生き血を啜り、自分の犯行は人間には悟られないようにする。まさにVと似ている」

「だから何さ？吸血鬼の話でもしたいのかよ」

「落ち着きたまえ。ここからだよ」

私は続けて、りこりに内容を説明した。

トランシルヴァニアに住むドラキュラ伯爵はイギリス人の弁理士ジョナサン・ハーカーを雇い、ロンドンに屋敷を買って移住してきた。

ロンドンに移住したドラキュラ伯爵はジョナサンの妻であるミナ・ハーカーの友人のルーシー・ウエステンラを襲い吸血する。

ルーシーの婚約者であるアーサー・ホルムウッドは原因不明で衰弱していくルーシーの事を友人であるキンシー・モリスとジャック・セワードに相談。ジャックはさらに自分の恩師であるヴァン・ヘルシング教授に助けを求め、ヘルシング教授は原因が吸血鬼にある事を突き留めますがルーシーを助けるには至りませんでした。

その後、ヘルシング教授たちはドラキュラの住まいを発見しますが、逃亡されてしまいます。



ドラキュラ伯爵はロンドンからトランシルヴァニアに撤退し、その際に気に入ったミナを誘拐して連れ去ります。

ミナを連れ去ったことがかえって仇になり、ドラキュラはジョナサン、ヘルシング教授一行に追い詰められます。

そして決戦が行われ、ドラキュラは夕日の中、胸を刺されて塵になり滅びました。

「ここまでの話で私が言いたいことは何かわかるかな？りこりん」

「……怪物は最後は必ず倒されるってことか？は、そんなの作り話だ。現実の本みたいいはないぞ」

「怪物は人間に倒されなければならぬ。私はあの言葉は好きなんだけど……おっと、ごめん、ごめん。さっきのりこりんの答えだけ違うね」

「策を練ったところか？」

「おおー、いい線いつてる。しかし、惜しい。本当に惜しい」  
「なら何だよ！お前はわかるのかよ」

やばいー！りこりんが怒っちゃったよ。意地悪し過ぎたな。気をつけないと。

「この話にはヘルシング教授一行が出てくるでしょう？つまり、ヘルシング教授は仲間を集めたということさ」

「自分だけじゃ、勝てないと思ったか？それが何だよ。早く答えを言えよ」

「つまり、怪物と戦う上で、一対一で戦う必要はない、と言うことさよ。」

怪物と呼ばれる連中にサシで戦うなんて、私から言わせてもらえば自殺行為だ。そんな役は勇者と呼ばれる生贄だけで十分。

身近な例を挙げるなら、教務科の先生たちがまさに怪物だ。

私が戦っても、かすり傷を与えることもできないだろう。しかし、先生たちといえど、武偵学校の全生徒を相手にはできない。

皆、強かれ弱かれ鍛えられている。中には先生から直接指導された者も少なくない。そんな生徒は自ずと恩師の弱点も知っている。

その弱点を全員が知っていたら、勝てるかと私は思っている。

おっと、話が逸れてしまった。いけないネ。また、悪い癖が出てしまった。

その後、りこりんにある程度のアドバイスしていると、

「うわ〜れいれいって、えげつないね。りこりん怖くなっちゃたよ」

何時もの口調に戻っていた。よかったー。やっぱり、この感じこそりこりんだよな。

「参考になったかい？」

「うん！れいれいは本当に頼りになるよ。もし、よかったらさ……」  
犯人のプロファイ

リングとかの相談に乗ってもらってもいい？」

「プロファイリング…… 犯人像を分析し、どんな人間かを分析していく技術だったね。」

「いいよ。それだけじゃなく、私でよければ他にも力になるよ」

「ありがとー！じゃあさ、この犯人なら、どんな手口で犯行に及ぶ、かも相談してもいい？」

「うん？つまり、どう意味だい」

「だからさ、れいれいなりに、犯罪をするならどうやるか、を聞きたいんだよ。もう！鈍いぞ、武偵ならこれくらい把握しないと」

「あー、なるほどね。まあ、あくまで考えーアイデアだからね。実際に犯罪をしたらダメだよ」

「うん？何かな、まるでりこりんが本当にやりそうに聞こえるけど？」

りこりんが疑問に思っている。

何かはつきりしないけど、りこりんは犯罪者の気がありそうなんだよね。あつ、これは失礼か。りこりんだって武偵だし、これはあくまで私の考えを聞きたいだけだよね。

「そんな事はないよ。おっと、話し込んでしまったね。肝心のクエストについて話して

くれないかい?」

「そうだったね!突然ですが、れいれいには私、りこりと海外に行ってもらいまーす!」

海外…… ほか国外でのクエストか。まだ、受けたことがないね。

しかし、海外となると他国の言葉が喋れないといけない。

私は英語くらいしか喋れないぞ。

「クエストの内容は?」

「アメリカで誘拐事件だつて。何だが地元の武偵もお手上げみたいでさ。それで日本にまで依頼が回ってきたみたいなんだ」

へー、珍しい事もあるんだね。アメリカの武偵は仕事を取られるのを嫌う傾向があるのに、日本ー他国にクエストを回してくるなんてさ。

「どんな事件なのかな?」

「誘拐だよ。何かストリートチルドレンを狙った連続誘拐事件なんだつて」

誘拐…… 丁度、私は過去のヨーロッパでの誘拐事件を調べていたのに…… こんな偶然もあるんだね。バタフライエフェクトってやつかな?

「なるほどね」

私はテーブルの側に寄り、トン、トン、トンと、指でついて、思考する。

「れいれい！また、考え事してるでしょう!!? 帰ってきて、れいれい！」  
りこりんの声でハッと、私は我に返る。

いけない…… また、夢中になってしまった。

まだ、りこりんから詳しく事件の詳細を聞いていないのに…… 早とちりし過ぎた。  
「ごめん、あーそれで？アメリカの何処かな？」

「ふー、帰ってきてくれたね。じゃあ言うよ」

りこりんは額の汗を拭うような動作をした後、

「アメリカのニュージャージー州 ゴッサム・シティだよ」

# 編 外伝：ダークナイトはすぐ目の前だ!!？ 相棒 理子

## 理子視点

東京 成田空港・第2旅客ターミナルの3階——国際線出発ロビーにて

「れいれい遅いな〜」

あたしは旅行カートの腰を下ろして、足をプラプラさせながら零を待っていた。

これから私たちはアメリカに向かう。

表向きは武偵のクエストだが、裏では『教授』が関わっている。

これは『教授』からの命令だ。零の実力を図るための仕事。

玲瓏館・M・零

高校からの編入生で、入学してすぐに数々の未解決事件を解決している。中にはあたしの所属しているイ・ウーが関わった事件すら解決してやがる。

あの『教授』が自ら立案した計画すら暴き、そして解決した。

自分では動かず、他者に現場に赴かせて犯人を逮捕させている。自分はただ事件を解き、結果を伝えるだけ。

何故、自分の手柄にしないんだ？

「やあ、りこりん。お待たせ」

あたしなりに考えていると、ロビーの正面入り口から零がやってきた。

服装は武偵制服ではなく、黒のスーツを着ている。スラツとした身長の零には不思議と似合っている。

おまけに銀縁の眼鏡までかけて、肩まで伸ばした黒髪は後ろに上げて纏めている。

「どうしたの？その格好はイメチェン？」

「私の仕事着ならぬ仕事姿さ」

「それって、防弾性？」

「勿論さ。装備科の特注品だよ。スーツは戦闘服ってね」

「ふくん…… あつと、その荷物は何なの？多過ぎない？」

零の姿にも驚いたけど、特に目についたのは荷物の多さだ。

ボストンバック3個、キャリーバック3個、アタッシュケース4個

あたしはキャリーバック2個だけなのに、零の荷物の多さは異常だ。何なんだ？まさか全部銃器なんてオチはないよな？

「これらかい？私の秘密兵器さ」

「中身は何なの？りこりん気になっちゃうなく教えて」

「それは向こうについてからのお楽しみさ。時間が迫っているよ？急ごうか」

零の言葉にあたしは腕時計を見る。時刻は10時30分。

マズツ！飛行機は11時に出発するから、30分前には乗り込まないと。

あたしと零は荷物を持って出国ゲートに急ぐ。零と話していると時間の感覚を失う。こいつの言葉は聞いていると、夢中になるといふか集中せざるを得なくなる感覚に見舞われる。

まるで学校の教師が「テストの範囲はここですよ」というのを聞こうとするかのようだ。

「りこりん！待ってよ。もっとゆっくり走って〜」

あたしの後ろで重そうにカートを押していながら、零が話しかけている。

そんなに荷物を持ってくるからだ！カートからはみ出てるし！

「れいれい、おっさきー♪」

今は急ごう。もう搭乗案内中だ。あたしは海外慣れしているのに、まさか慌てるハメになるとは思わなかった。

ANA NH2 ワシントン行き

ギリギリで飛行機に乗り込んだあたしたちは、ビジネスクラスに座り込んだ。飛行機



の旅は快適にしたいから、贅沢しないとね。

あたしは持ってきたお菓子をバリバリと食べていると、隣に座っている零はカバンからノートパソコンを取り出して、カタカタと当たり出した。

パソコンに何を打ち込んでいるんだ？

「れいれい、何やってんの？ ツイッターかな？」

「個人的なスカイプだよ」

あたしが画面を覗き込んで確認してみると、なるほど、確かにスカイプだ。

誰と話をしているんだろう？ 相手のハンドルネームは…… 『ハンニバル』？ ローマ史上最大の敵といわれる軍師の名前じゃん。

零のハンドルネームは…… 『数学教師』 って、なんか似合ってるな。

「マイクは使わないの？ キーボードオンリーとか疲れない？」

「キーの方がしっくりくる。私はこっちの方が好きだよ」

あたしと喋りながらカタカタと打っていく。早っ!? 情報科でもこんなに早く打つてないよ。しかも、すべて英文…… 相手はアメリカ圏か英国圏の人間か？

文章を見てみると、えーつと…… 人喰いレクター、アート、音楽、作品、内臓、分解、心理、調理、食べる、敬まわない、人は物、神も人を殺す…… 意味がわかんない。暗号か？

「この『ハンニバル』って、どんな人なの？はっ、まさかきれいの彼氏とか!!? 遠距離恋愛だ！」

「違うよ。『ハンニバル』とは……意見交換の仲間かな？彼女は精神外科医をやっている。心理学などでアドバイスなどを貰っているんだよ」

ふーん……女で精神外科医ね。零って、意外と外との交流関係が広いね。

武偵高校だけでなく、個人的なネットワークがありそう。これは、さらに調べる価値がありそうだね。

画面を眺めていると、写真が出てきた。どうやら相手を送ってきたようだ。これは……料理かな。

写真には、見るからに美味しそうな料理が写っている。

魚の内臓かな？内臓はプルプルだけど表面に程よい焼き目が付いている。血の滴る感じが伝わってくる。

「懐石料理じゃん。うわー、美味しそう。これって、『ハンニバル』が作ったの？」

「だろうね。『ハンニバル』は料理が趣味だね。古今東西、様々な料理を作っては写真を送ってくれるんだよ」

「彼女とは直接会ったことはあるの？」

「いいや。まだ会ったことはないね。でも、近い将来会おうよ。必ずね」

どうしたんだ？まるで会うことがわかってるような言い草だ。

気のせいかな？あたしにはワクワクしているような顔に見えるぞ？まるで心理戦を楽しむような知能犯のようだ。

あたしが疑問に思っていると、零はスカイプの画面を閉じた。

「あれ？れいいれい、もういいいの？他にも話すこととか無いの？」

「うん、ある程度の意見を聞けたから十分だよ」

そう言つて零は新しい画面を開いた。今度はなんだ？スゴイ勢いでキーを叩いていく。パスワード画面だ……あたしが見ている、零は何も言つてこない。見られても構わないってか？

「これって……何なんだ」

暗号を打ち込んで、零が開いた画面を見てあたしは驚いた。

そこには犯罪の分布図―犯行現場、犯人像、容疑者の写真、事件の関係者、犯行手口、逮捕した武偵などのデータが纏められている。

中にはイ・ウーや蘭幫の関わった事件もある。これは……パトラが関わった事件だ。こつちのは夾竹桃の事件、つてカツエとココまであるじゃん？

「リストと言えばいいかな。部屋以外でも目を通せるよう―私なりに犯罪者のデータを纏めてみたんだよ」

「これも協力者のおかげ？ 入学して数ヶ月でこれだけの情報を集めるなんて……誰にでもできることじゃない」

「そんな事はないさ。人との繋がり……. なんと云えばいいかな。今、私はりこりんを見ている。りこりんは私を見ているね」

なんだ？ 突然、零は私の両頬に手を添えた。

その手は気のせいか……. 触れられていると安心する。

「お互いが見ている光景は違う。ここまで言えばわかるね？」

「何なの？ りこりんにはわかんないよ」

「いづれ分かるさ」

そう言つて零は画面にいくつかのデータを打ち込んだ後、「ふあ」と大きく欠伸をした。

「ごめん……. りこりん。着いたら起こして」

「あつ、うん。いいよ、お休み〜」

チャンスだ！ 零は人一倍、脳が疲れやすい。

『脳の疲労』これは衛生科で手に入れた確かな情報——確か一度、眠りにつくると簡単には起きない。今なら荷物を物色できる。

イ・ウーの事を何処まで掘りだせるのか調べてやるぞ。

あたしは零のカバンをガサゴソと漁った。パソコンの中身が一番に気になるが、どんなトラップが仕掛けられているかわからないので、保留にしておこう。

荷物の中にはパスポートと財布、万年筆に『家庭栽培』の本など、どうでもいいものばかりだ。

あたしがガツカリしていると、フツと零のスーツの内ポケットに入っている赤い手帳に目が止まった。なんだ？

抜き取って開くと、中にはたたくさんの数字の配列が書かれている。

これも暗号か？あたしにはわからないが、『教授』ならわかるかも。

外伝：アメリカよ！わたしは帰ってきた（嘘です） 相

棒 理子編

理子視点

ワシントン ダレス国際空港ー

アメリカ合衆国バージニア州にある国際空港。

メイン・ターミナルは、出発階、保安検査場階、到着階、地上交通階の4層からなり、すべての航空会社のチケットの発行、手荷物検査、手荷物の受け取りなどの機能を担っている。

天井の低いターミナルは、珍しくない。成田・羽田のような高いターミナルの方が珍しいくらいだ。あたしは見慣れているから驚きはしないが……

「おおく見てご覧よ、りこりん！天井は低いし、おまけに薄暗い」

零は空港に到着して早々、はっちゃけた。アレよコレと見て回っている。

あたしが言える立場じゃないが、聞いていてうるさいよ！

何なの？学校でのクールなイメージがぶっ壊しじゃん！

アメリカ内外の観光客がチラチラと見てるし……

「れいれい、早く入国審査の列に並ぼうよ」

あたしが零に審査待ちの列に並ぶように促す。

このまま放っておいたら、1日が空港内で終わりそうだ。

入国審査を待っている人間は観光客だけじゃない。

商用で来ているスーツ姿のビジネスマン。出稼ぎに来た中国人。里帰りしてきた学生。厳ついスキンヘッドの男。お互い仲良く手を繋いだ男女。松葉杖をついた北欧系の女性。

指紋と顔写真の撮影で、蛇行する審査待ちの列で零は、

「入国審査なんてワクワクするネ。見てよ。審査官——白人の女性係員さんの目つきが怖いね。勿体無い……。笑顔なら可愛いのに」

またしても、零ははっちゃけていた。お願いだから、静かにしてよ……。あたしがそう思っていると、零は突然だんまりを決め込んだ。目を細めて、自分の前にいる入国審査待ちの列を眺めている。

どうしたんだ？

「どうかしたの？れいれい。あつ、もしかして、順番が回ってきたから緊張したのかな」

「あー、そうだね…… 国外なんて初めてだし…… ここもまた、ワクワクする場所だ」

零はニイツと笑った。まるで新しいオモチャを見つけた子供の目をしてる。

何がそんなに面白いんだよ……

「おっと、私の番だ。それじゃ、りこりん先に行くてくるよーっこんにちは」

そう言うと、スナック菓子を食べている入国審査官の女性にパスポートを渡し、流暢な英語で挨拶している。綺麗な英語だ。日本語訛りが全くない。

「ーっ入国の目的は？」

「戦争」

「…… は？」

「…… へ？」

零の発した言葉に、思わずあたしと審査官はマヌケな声が出た。

ちよつと!? 零おお！入国して早々になんて事を言つてんの！

「聞こえなかつたんですか？」

「い、いや、聞こえましたが…… もう一度お願いします」

審査官と零の視線がぶつかった。気のせいか？審査官は零に恐怖を抱いているように見えるぞ。



「ニカツ」と零が笑った。それは、微塵も悪意のない笑顔だった。

もし魔王が笑うのであれば、こんな感じなのかな……あたしはそんな事を考えてしまった。

「し、失礼しました……もう一度。入国の目的は？」

「仕事ですよ」

零は真顔になって、マスターズから発行された依頼書と入国要請書を差し出す。

本当は『教授』が発行したんだけどね。

「……」

しっかりとそれを熟読し……考えた挙句、カウンター上の指紋読取機に指をかざすように手で示した。さらに、デジカメで零の顔写真を撮る。

同時に宿泊先や滞在期間を尋ねられると、「ゴツサム・シティにいる同僚の家。仕事が済み次第帰ります」などと答えると、審査官は零にパスポートを返した。どうやら入国OKらしい。

はあく、よかった。一時はどうなることやら……思わずドキドキしちゃったよ。そして「次の人」とあたしに声が掛かる。

入国要請場の先にてー

開けたホールのど真ん中に零が待っていた。

あたしはズカズカと近づき、

「ちよつと、れいれい!!?なんて事言うの!」

「なんて事とは?」

「戦争だよ!なんで戦争なんて言うの!?!?下手したらテロリストと思われるじゃん!」

「あー、アレね。ちよつと審査官を分析してみたんだよ」

分析つて、何で審査官を?なんだか今日は「何で」と質問してばかりな気がしてきたよ。

「彼女が胸に付けていたネームプレートはピカピカだった。あれは新品——この空港に配属されたばかりの新米。目の下にクマ——ナイトクラブに出入りしている。過食症の兆しがある——ストレス気味。最後に運動不足——彼女は来年、肥満体質になるよ」

零はその後も自分の分析結果を語った。

空港内——審査官、観光客、清掃員など、あの場にいた人間についてあたしに語る。

嘘でしょう…… 入国審査の僅かな時間で空港内の人間を分析したっていうのか!!

?

こんな芸当ができる人間をあたしは『教授』くらいしか知らないぞ。

まさかとは思うけど、零は『教授』と同等の能力があるのか?

「あと、私が戦争と言ったのは、分析がしなかっただけじゃない。入国時間を伸ばすー  
後ろにいた人間たちを遅らせたかったからだよ」

「どうして？嫌がせのつもり？」

あたしの問いに零は「NO」と返してきた。

「私たちの後方の列ー後ろから7番目にいたスキンヘッドの男。奴は国際指名手配の凶悪犯ー公共施設専門の爆弾魔つてヤツだ。武偵と警察の両方から追われた。中々ガッツがある。私は御免だがネ。6年前に死亡した事になっているが、それはフェイク。おそらく、替え玉の死体を使って逃げたんだろう」

零はパソコンを立ち上げ、あたしにくるりと、画面を見せてきた。

そこには犯人のデータが載っていた。飛行機で見せてくれた項目とは少し違ったが、顔写真・本名・国籍・所属・手口・家族構成・経歴などが事細かに記されている。他にも知らない犯罪者の名前もあった。

零……これはリストだよ。多分、FBIやCIA、武偵庁が把握してない犯罪者なんかもチラホラある。

チラッと見た限り、殺し屋・スパイ・政治家・テロリストっぽい人もいるし。

「それってヤバくない？早く逮捕しないとさ」

「今、私たちはゴッサムでの事件を担当している武偵。私たちが出張する必要はない。

さつき地元の警察に連絡を入れた」

ロビーで待っていたのは、警察に連絡を入れていたからか。それなら安心……：「が、取り合つてはもらえなかつたよ。いや／＼参つたね。私つて信頼がないのかな」

じゃなかつた。「ははは」つて、ちよつと待つてよ零、それつて笑い事じゃないよ!!？「代わりに武偵には連絡は入れたよ。匿名でね。奴が化学兵器を持つている事と、共犯者、犯行現場について話してあげたら食いついてくれた。ヒーローに手柄を取られたくない、という私欲もあつただろうが、アメリカの武偵は仕事が早くて助かる」

零はチラリツと、ロビーの奥を眺めた。

誰かいるのか？あたしも見てみるが、そこには誰もいない。

「どうやら、残念な事に地元の武偵の皆さんは、ヒーローに手柄を取られるようだ。さあ、行こうか？りこりん。ここから先は、彼と愉快な仲間たち、に解決して貰おうか」彼と仲間たち？どういう意味だ？零とあたしたちが見ていた場所には誰も……いや、前にイ・ウーでアメリカが光学迷彩マントとかいうモノを開発したつて、ココが言つていたぞ。

まさかとは思うけど、それを使って隠密活動している奴らを零は見破つたつても？改めて、ロビーの奥を見るがやはり何も見えない。

「ヒーローなんて、コミックだけの存在かと思つていたが、いるもんだネ。さて、地元の

武偵さんも加わって大混乱にならなければいいけど」

「うん？それはどういう意味なの？れいれい」

「何でもないさ♪」

まずは拠点確保だ！

相棒 理子編

ゴツサムシティ

凶悪なマフィアや犯罪者、そしてそいつらを遥かに越える怪物共が跋扈する超犯罪都市である。

取り締まる側の司法・警察も一部の例外を除いて汚職に走る有り様で、正体不明のヒーローの手で辛うじて治安が守られている（それでも滅茶苦茶悪いが）。ちなみにニューヨークの別名でもある。

マフィアがはびこり犯罪都市となった19世紀初頭のニューヨークを「愚か者の町」という意味で「ゴツサムシティ」と呼ぶようになった。

米国で危険な都市ランキング1位を常にキープしている。そんな町にあたしと零は記念すべき第一歩を踏み出した。

高い高層ビル・マンションが建ち並び、右車線の道路にはタクシーや二階建てバス、一般車が忙しく走り回っている。

違反駐車しているドライバーから賄賂だろうか？お金を貰っている警官の姿を見て

しまった。通行人は何も言わない。恐らく、こういった不正がこの町の日常と化しているのだろう。

その証拠に通行人の女性がバッグをひったくられたのに、警官は知らん顔でコーヒーを飲んでいるし……絶対にも面倒くさがっている。

歩道には路上販売店がちらほらと4店——コーヒー・ホットドッグ・サンドイッチ・クレープなど店ごとに販売している商品はバラバラだ。

通行人——サラリーマン・学生・作業員・タクシードライバーなど店に並ぶ人は様々だ。そんな人混みの中で、

「おじさん——このハム&ガーリックとコーヒーをそれぞれ2つお願いします」

零が路上販売店——販売店に改造したキャンピングカーでサンドイッチを注文していた。小太りでベースキャンプを被った中年の男性店長が「はいよ」と手慣れた手つきでサンドイッチを零に渡す。

「はい、りこりん。食べて私の奢りだよ」

「おー、ありがとう！ れいれい。いただきます」

ご丁寧にあたしの分まで買ってくれた。

うん。ガーリックが少し強めだけど、我慢できないほどじゃないね。

モグモグと食べて、コーヒーで流し込む。砂糖が入っている。甘さは丁度あたし好み

だ。

「りこりんは砂糖は一杯だったね。角砂糖だと一個でよかったかな？」

「あれくらいいいは何でりこりんの砂糖量が分かるの？前に話したっけ？」

あたしの記憶では零にコーヒーに入れる砂糖の量を言った覚えはない。

前に一緒にカフェでお茶をしたことはあるけど、その時は砂糖を入れる姿は見せてないぞ。

「りこりんはコーヒーを飲む時、一緒に付いてくるクッキーやチョコレートをコーヒーに軽くひたして、口溶けを楽しんで食べるでしょう？そういうった人はコーヒーよりもお菓子を楽しむ傾向が強く、コーヒーに入れる砂糖は少な目にする事が多い。砂糖にお菓子が味負けするからね」

相変わらずコイツは人を観察するのが、人一倍ずば抜けている。

でも、そんな技量は探偵科なら誰でも身につけている。あたしだって技量——観察目には自身があるぞ。

「因みにお菓子をコーヒーに浸して食べるのは、フランス人に多く見られる。りこりんは確かハーフだったね——日本人とフランス人。多分、お母さんが日本人じゃないかな？化粧の仕方が日本風な所がある。女の子が化粧の仕方を教わるのは、母親からと相場は決まっている。コーヒーの飲み方はフランス人のお父さんの影響。お喋りで自分の



意思をしつかりと主張する所もお父さんの影響からだね」

間違つた……コイツは桁違いだ。

確かに化粧はお母様から教わつたし、性格はお父様似だと自分でも思う。推理通りで怖いよ。

「はは、すごいね。れいれいには何でもお見通しなんだ」

「そんな事はないさ。私にもわからない事の100はあるよ」

100つて、零。その言葉、説得力が皆無だよ。ジョークのつもりかよ。

「りこりんを分析したお詫びと云つては何だけど、私の事も話そうか？りこりにしか教えない秘密とかさ」

秘密だと。あたしはその言葉に食いついた。色々と聞き出したい情報がある。これは丁度いい機会だ。

「それじゃ、教えてよ」

「いいよ。まずはコーヒの好みから言おう。私はブラックが好きだ。砂糖を入れる際はコーヒを飲み干してから、底に残つた砂糖をスプーンで掬つて食べるのが好き。以上！さあ、行こう！」

ちよつと待つた!?？教えるつて、コーヒの好みかよ！あたしが聞きたいのは、そういった事じゃなくてさ……… もっと、謎めいた秘密だよ！

それに行こうって、どこにさ？

零はズンズンとカートに入れた大量の荷物を引きながら、歩道を歩く。そのカートは私物だったんだね。

「ねえ、れいいい。何処に向かっているの？ホテル？それとも事件現場？もしかして、依頼人に会いに行くとか？でも、依頼人は匿名で頼んできたから会えないかもよ」

「どれも違うよ。今から向かうのは拠点さ」

町を歩く事30分ほど

マンハッタン島の東を流れるイースト川にかかる大きな橋——ブルックリン橋を渡る。

ブルックリン橋は長い。海風に吹かれハニーゴールドの髪が乱れる。零の漆黒の髪も揺れるが、本人は御構い無しのご様子。

ようやく渡り終えた。

川の間こうから高層ビルが陳列するマンハッタン島が見渡せる。

「さあ、こっちだよ」

橋のたもとから右折し、川を右手にして走る。

零の案内されるまま、あたしは付いて行く。一体何処に向かっているんだ？空港で零は「仕事仲間の家に泊まる」と言っていたが、まさか本当に仲間がいるのか？

左に曲がると、どこか精密な玩具みたいな街が現れた。

「何だかグリム童話に出てくる街みたいだね」

「いい例えだ」

3階から5階建てぐらいの縦長のアパートがひしめく。玄関前には5段ぐらいの階段。小人が現実にはいたら、こんなアパートに住んでいるかもね。

その内の一軒一軒アパートの玄関前で零は止まった。どうやら、ここが目的地らしい。

あたしは玄関のプレートに目が止まった。

プレートには「ニューヨーク・ブルックリン22番地」とあった。

零が玄関をコンコンと、ノックする。すると、ガチャつと音を立て真つ黒なドアが開く。

「あらまあ！ゼロじゃない。お久しぶり！」

「本当にお久しぶりです。バートンさん」

あたし達を出迎えてくれたのは、年齢は50代風の女性だった。髪は赤毛混じり茶髪で、顔には少なくないシワが目立ち彼女がどれだけ生きてきたか物語っている。

「あら、ゼロ。こちらの可愛らしいお嬢さんはどなた？」

「こちらは私の学友で名前は……」

「ご紹介に上がりました！ きれいなのお友達の峰 理子ですー！」

あたしは何時ものノリで挨拶した。

「まあ！ ゼロのお友達だったの。初めまして、このアパートの大家をしています。ミラ・バートンよ」

「バートンさん。突然で悪いんですが、部屋は」

零が会話に割り込む形でバートンの前に出てくる。

部屋？ まさか零が言っていた仕事仲間の家ってこの事か？ 知り合いが部屋でも借りているのかな。

「もちろん用意しているわ。さあ、上がってちょうだい」

バートンはあたし達をアパートに招き入れた。

あたしは遠慮なく、土足で上り込んだ。日本だと玄関で靴を脱がないといけないが、海外ではそんな事はない。

薄暗い廊下は、玄関を閉めると殆ど真っ暗になってしまった。

「もっと早く連絡してくれれば、昼食を用意したのに貴女って人は忙しい所があるんだから」

「すみません。急な事件の依頼だったもので」

零は「ははは」と愛想よく笑う。バートンもつられたように「ふふふ」と笑う。

「ねえ、れいれい。バートンさんとはどんな関係なの？海外で接点とか無さそうだけど？どうやって知り合ったのさ？」

あたしはヒソヒソ声で零に話しかける。

「ああ、バートンさんとはスカイプで知り合ってたね」

「スカイプって、飛行機の中でやってたアレな事？」

「そうだよ。そのスカイプを通して、バートンさんが事件——夫が強盗を働いたと相談してきてね」

「わかった！れいれいがその事件を見事に解決——真犯人を見つけて旦那さんの無実を晴らしたんだ！」

零も武偵だから、依頼人には分け隔てなく接して事件を解決しているんだね。

「違うよ。旦那さんの犯行を立証して、刑務所送りにしてやったのさ。因みにバートンさんはそれを境に離婚して、新しい旦那さんと再婚。元旦那さんは懲役15年の刑に服しているよ」

前言撤回。あたしの勘違いだった。

「そうなんだ…… あっ！でもさ、ただのスカイプで知り合っただけにしては親しそうだね。玄関での話の様子から部屋まで貸してくれるなんてさ」

「ただのスカイプじゃないよ。私個人が作ったスカイプ——『スパイダー』を通して事件

の経緯を知ったのさ」

個人で作ったって、どんだけ万能なのさ!?!?

それにしても『スパイダー』か……それが零の情報源かもな。

もしかしたら、零はその『スパイダー』を通して世界中に情報網を張り巡らしているかも……名前の通り蜘蛛だ。

待てよ。前に『教授』に零の事を話したら、「彼女は蜘蛛のようだ。自らは計画を立てるだけ。しかし、時には自ら行動する大胆さも持ち合わせている。どんな細かい情報でも網にひっかけ、徹底的に分析する。まるでかつての宿敵をそのまま女性にしたような子だ」と面白そうに話していたな。

「そのスカイプにはどんな人がいるの？よかったら教えてよ」

「いいよ。高所恐怖症な暗殺者、結婚詐欺&年齢偽証姉妹、料理が趣味な精神科医、気の弱い恐喝者、自称魔術師、麻酔など要らねえ外科医など……」

零のお友達って、ヤバそうな人ばかりだね。きつとハンドルネームだよな？

話している内にバートンの姿は消えていた。何処にいったんだ？

零はバートンが消えたことは気にしていない様子で階段を上がる。

階段はギツギツと古い木材の軋む音がする。

上がった先は2階の表通りの部屋。色褪せた黒のドアを開け、入ると

「ここが私たちの拠点なる部屋だよ。こちらは居間」

零は自信満々に言った。

部屋にはまず大きな窓が二つある居間があった。家具はすでに備えられていて、使い込まれた絨毯と二人がけのソファ、そして一人がけのソファが3つある。

零はその一人がけのソファを一つ眺めている。真つ赤なソファだ。どうしたんだ？

「やれやれ……これを持ち込んだのは君か？レクター」

零が奥にあるキツチンに向かって、誰かに向かって問いかけた。

一体誰だろう？あたしは気になってキツチンに目を向ける。

すると、キツチンから優雅な足取りで一人の人物が居間にやってきた。

浅葱色のスーツとブルーのシャツを着て、胸元には真つ赤なネクタイ。

身長はスラリと高く、零よりもある。

顔は色白くウエーブのかかった金髪を肩まで伸ばし、目は吸い込まれそうになる程綺麗なグリーンだ。不思議と知的な印象を受ける。胸の膨らみから女性だ。

「いいじゃないかゼロ。僕と君の仲じゃないか。家具の一つくらい多目に見てくれよ」

発した彼女の声は、優しく聞いていると安心感を与える声だ。

「私のセンスではこの部屋に赤のソファは似合わないと思うけど、まあ、別にいいよ」

「れいれい。こっちの人は誰なの？」

「おっと、僕とした事が自己紹介も無しに登場とは失礼だったね。初めまして、お嬢さん。僕の名前はレクター、ヘイゼル・レクター。よろしくね」

「おお！ボクっ子だ！初めまして峰 理子です。りこりんって呼んでね。ハイハイ」

「ハイハイ？それは僕の事かな。それじゃ、僕は君の事をりこりんって呼ぼう」

お互い自己紹介を終えた。

握手を交わすが、あたしとレクターは身長差があり過ぎる。レクターが屈んで握手する形になってしまったが。

「ハイハイはれいれいのお友達なの？もしかしてスカイプで知り合ったとか」

「そうだよ。僕とゼロはスカイプを通して意気投合してね。彼女とは、よく心理ゲームなんかして遊んだりもするね」

「飛行機の中でやりとりしていた『ハンニバル』が彼女だよ。レクターは心理ゲームに関しては天才だよ。私なんか足元にも及ばない」

「おいおい。そんなにひげらかささないでくれよ」

レクターは困ったように苦笑する。

ふーん、飛行機の中でやり取りしていた相手ー『ハンニバル』はレクターの事だったんだ。

「ハイハイも武偵なの？見た感じ大人っぽいけど、もしかして、まだ学生？」



「そうだよ。僕はチェサピーク武偵学校の一年生。専門科目は救護科を専攻している」  
「彼女はチェサピークではちよつと知れた武偵だね。救護科では有名人さ。現場で負傷した武偵だけでなく、加害者も分け隔てなく助ける様子から『チェサピークのナイチンゲール』なんて呼ばれたりね」

「やめてくれ。そのあだ名には参っているだ。僕はナイチンゲールなんかじゃないよ」  
「ごめん、ごめん。立って話すのは疲れるでしょう？座って話そう」

零の勧めで全員ソファに座る。

ふわりとして丁度いい座り心地だ。

「さて、どうして君がここにいるんだい？チェサピークの事件で手が空いていないと思っただのに」

「その事件ならカタがついたよ。僕の所属するチームが犯人を追い詰めた。しかし、犯人は自殺してしまったよ。手にしていた拳銃で頭を吹き飛ばしてしまっただけ」

「チェサピークの事件って、何なの？りこりん武偵だから気になるなく。ハイハイの武勇伝なんかも聞きたい！」

「チェサピークの事件って言うのはね。レクターの住んでいるチェサピークで、犯罪者ばかりを狙った連続殺人が発生したんだ。被害者からは内臓が幾つか無くなっ  
て……」

「あー、ゼロ。それについては後にしよう。今は君とりこりんの事について話そう」  
レクターが零の話を止めに入る。うん、それがいい。最後あたりは気分が悪くなりそうだ。

「まったく君は実に…… まあ、いいか。私とりこりんがここに来たのは……」

零は事の経緯をレクターに語った。

レクターはソファにじつと座ったまま聞いている。

「なるほど。ゼロとりこりんは誘拐犯を追って、わざわざ日本からね。大変だったろう。特にりこりん。ゼロには空港でかなり手を焼いたね」

「どうして分かるの?」

「だって彼女、海外とか初めてです感が丸出しだもの。この国の空港でワイワイ騒いだりしただろう?」

まったくその通りだ。零には空港で思い切り手を焼かされたよ。

「いいじゃないか別に…… 君だって日本に来れば私のようになるさ」

「僕は日本に行ったことがあるから大丈夫さ」

「さーて、どうだか」

「あつと、すっかり話し込んでしまった。君たち、昼食を食べてないだろう? 僕が作ろ

う」

レクターが料理をするのか？

零がスカイプで『ハンニバル』。レクターは料理が趣味だと言っていたな。スカイプに料理の写真を載せていたし、見るからに美味しそうだった。

「本当？ やったー!!？ りこりん楽しみなな」

「ははは、そんなに僕の料理を楽しみにしてくれるとは……… 作る方も楽しくなるよ」  
そう言つてレクターは奥にあるキッチンに向かった。  
どんな料理を作るんだろう？

待つこと数十分――

レクターが居間のテーブルに料理を運んできた。

「うわー、美味しそ。何て料理なの？」

「子羊の舌包み焼きだよ。小うるさい山羊だったよ」

小うるさい山羊？ レクターなりのジョークかな。

「さあ、食べよう」

レクターの言葉であたしと零はフォークを手に取る。

うーん、良い香りだね。

「あーあれは何だー！」

突然、零が大声を上げレクターの後ろを指差す。それにつられてレクターが後ろ向いた瞬間、零は料理を皿だけ残して、窓から捨ててしまった。ちよつと!!?なんて事をするのさー！

「どうしたんだいゼロ。何もないじゃないか」。

「ごめん。チェサピークの『切り裂き魔』がいたような気がしてね。私の勘違いだったよ」

「ここには居ないさ。おや?もう食べてしまったのかい」

「ああ、舌もトロけそうな見事な料理だったよ。ねえ!りこりん!」

「う、うん!メツチャ美味しかったよ」

零の迫力に押され、あたしは食べてもいない料理の感想を言わされた。一体、どうしたんだよ?もしかして、すごく不味いとか。

「それはよかった」

レクターはフォークで羊の舌を刺し、口に運ぶ。

その動作は見とれてしまうほど優雅だった。

外伝・食後の後は観光？いいえ、しませんよ 相棒 理

## 子編

理子視点――

料理を食べ終えたヘイゼルことヘイヘイはスーツの胸ポケットからシミひとつない、真っ白なハンカチを取り出し口周りを拭く。

食事中もそうだが、彼女は動作の一つ一つがどれも優雅で絵になる。

「さて、料理も食べ終えた事だし、今後の予定は決めてあるのかい？まさか、この街で観光なんて言わないでくれよ」

ヘイゼルは自分から見て向かい側――あたしの隣のソファで足を組んで座る零に今後のプランを訪ねる。

観光ねえ、ここゴツサムに観光しに来るヤツなんていないよ。いるとしたら、余程のモノ好きか命知らずくらいだ。

「まずはゴツサム市警に挨拶ついでに事件の詳細を尋ねに行こうと思うんだ。レクターも同行してくれないかい？」

零は彼女に同行を願う。

まだ零はゴツサムで起きた誘拐事件について、大雑把にしか知らされていない。

情報収集の為に地元警察に顔を出すのは正しい選択だろう。

「僕は大いに構わないよ」

「レクターがいれば非常に助かるよ。りこりんもそれでいい?」

「全然構わないよ。3人一緒に行動する方が楽しそうだし」

コンコン!

あたしの同行承諾を待っていたとばかりに、部屋のドアを誰かがノックしてきた。

誰だろう?このアパートにはあたし達3人と、大家のバートンくらいしか居ないし。

ガチャとドアを開けて入ってきた。ああ、やっぱりバートンだ。

手には3つのティーカップを乗せたトレイを持っている。どうやら、食後の紅茶を淹れてくれたらしい。

「食後の紅茶よ。よかつたらどうぞ」

バートンはあたし達が座るソファ近くのテーブルにカップを置く。

食後の紅茶か。あたしはまだ何も食べてないけど。

食べる前に零が窓から捨ててしまったのだ。見るからに美味しそうだったのにさ。

本当にもつたいない事をしてくれたよ。

そんな愚痴を零に溢しながら、あたしはバートンに一言お礼を言ってから出された紅

茶を啜る。

ーずずう

あつ、これ『アメリカンクラシックテイー』だ。

「姿なき女主人ーバートンさんが現れた……あつ、紅茶ありがとうござい  
す……ずずう」

「ありがとう婆や。ずずう……うん、美味し」

へいゼルと零がカップに口を付けて紅茶を啜る。

婆やつて、バートンはへいへいの使用人つて訳じゃないよね？

あたしは紅茶を啜りながら、そんな事を考えた、

「誰が婆やですか。私はここの大家であつて、貴女の使用人じゃありません」

「怒らないでくれよ。婆や」

へいゼルは『婆や』という単語をワザとらしく強調して言う。

「あんまりふざけていると追い出しますよ」

バートンはそれだけ言つて部屋から退室した。

「ねえ、この部屋つてへいへいが借りてるの？ てつきり、レイレイが借りてると思つた  
だけど」

へいゼルに質問する傍ら、チラツと横目で零を見る。

「ああ、この部屋は僕のモノであり、ゼロのモノでもあると言えば分かるかな」  
「ウーン、分かんない」

ぶんぶんとクビを振って、分かりませんアピールをする。

「そうだね……どこから話そうか。僕がこの部屋を借りて間もない頃、部屋の広さを  
持て余していてね。連帯保証と申すか……家賃を折半出来る、同居人を探してい  
る時に、スカイプで知り合ったゼロが家賃を折半してくれると言ってくれたんだ。そう  
だったよね、ゼロ?」

「そうそう、仕事くらいでしか利用しないのにね」

2人とも「ははは」と楽しそうに笑いながら話す。

懐かしい思い出に浸っている様子だ。

「仕事で?ヘイヘイはチェサピークの武偵だよ。ゴツサムにはよく来るの?」

ゴツサムとチェサピークは地理的にも離れている。

仕事とはいえアパートを借りる必要はないと思うけどなく。あたしならホテルを借  
りる方を選ぶ。ヘイゼルは変わってるね。

そんなヘイゼルースカイプで知り合った相手の家賃を折半してあげる零も十分変  
わってるが。

「仕事もあるけど、私用で度々来る時もあるよ」



「あれ？それは初耳だ」

「この街に何か思入れがあるの？」

「アーカムアサイラムを知っているかな？」

『アーカムアサイラム』ーゴツサムシテイにある精神治療施設。

この街の犯罪者、俗にヴィランと呼ばれる存在は精神を病んでいる者が多く、捕まるところに刑の執行を受ける代わりに送り込まれるので、事実上の刑務所と同じ。

なお正気の犯罪者に対しては、ブラックゲート刑務所という通常の収容施設がある。

「僕の母方の叔母が精神科医として昔、そこに勤めていてね。その縁あって、僕も精神科医として呼ばれる事があるんだよ」

「へえ、そうなんだ。ハイハイの叔母さんは今も勤めているの？一緒に仕事したりして」

アーカムアサイラムは『イ・ウー』曰く、「あそこは早い話、キチ○イ病院」らしい。

おまけ、あの病院の創設者である医師が治療にあたった犯罪者に妻と娘を殺害されたことから、徐々に狂気に陥り、その数年後、治療中の事故に見せかけ、その犯罪者を殺害。その後、完全に異常をきたし、患者として収容され狂死したバックストーリー付きだ。

「いいや、随分前に職場恋愛が原因で辞めてしまった。職場恋愛は破滅のもとなつてね」  
「ずずうと紅茶を啜る。」

破滅つて、正しくは破局のもとでしょう。どっちも変わりないけど。

「ヘイゼルの叔母は同じ職場の同僚に恋をした。そして、破局に終わったか。少し可哀  
想と思えてくる。」

「さて、話はこれくらいにしてゴツサム市警に行こう」

「やれやれ、やっと終わったか。君は自分の話となると長くなるんだから」

すっかり蚊帳の外だった零が、呆れ顔で飲み終わったカップをテーブルに置く。

「除け者にされていじけているのかな。」

「それを君が言うかい?この前なんかスカイプ越しで、自分の追つてる事件の詳細を3  
時間も話しただろう。時差の関係上、こっちは夜中だというのに」

「正しくは3時間6分だよ。ヘイゼル」

追つてる事件だと。零のヤツ、『イ・ウー』の事をヘイゼルにも話したのか?

あたしは零だけじゃなく、目の前にいるヘイゼル・レクターも要注意リストに加える。

一応、こいつの事を『教授』に報告しておくか。

## 外伝 ○○の星よ。 金次&amp;

時刻は17時を回った頃――

「よいしょつと……こんなもんかな」

学校が終わるなり、私は速攻でマンションー制服も脱がず自室に籠ってカーテンを閉め、黙々と部屋の至るところに壺を置いて回った。

壺といっても大した物じゃない。前の依頼で、依頼人からお礼として頂いた無機質な黒い壺だ――数は15個ある。

その壺をリビングの至るところに配置する。

いや、別にこの後、怪しい魔法陣とか描いて、黒魔術を始めるわけじゃないよ。

これからやるのは、訓練だ。

「えーつと、あつた」

ソファにかけてあつた赤い手拭いを取り、シユルツと目隠しをする。

そして、太もものホルスターから愛銃ウェブリー・リボルバーを抜く――勿論、弾は既に込めてある。

銃を構えて、おまけに目隠しをして何を始めるかという、視覚を遮った状態での

射れるかの実験もとい訓練だ。

反響定位またの名をエコロケーション

音の反響を受け止め、それによって周囲の状況を知ることである。

具体的な例でいえばコウモリだろう。

コウモリは口から間欠的に超音波の領域の音を発して、それによってまわりの木の枝や、虫の位置を知る。

これはコウモリに限った話ではない。人間にも再現可能な能力だ。

杖をたたく音や舌を鳴らした音などの反響で、周囲の状況、例えば横にブロック塀があるといったことがわかるという。

これにより、自転車を運転したり、初めて訪れた場所でランニングを行った例もあるほどだ。

私は今からそれを戦闘に應用——視覚を遮られた状態で実施する。

長々と語ったが、早速始めるとしよう。

空気の流れ、部屋の外から内に与えられる振動、自分の呼吸音による反響を頼りに——指を引き金にかけて撃つ。

パン！ガシャン！

銃声の後に遅れて壺が割れる音が聞こえる——爽快でいい音だ。

そして、鼻孔を擽るようなの硝煙の香りが心地良い。  
景気良く続けて撃とう。

パアン！ガシャン！パアン！ガシャン！

「……………イ！」

うん？雑音が聞こえるぞ。私は確かに壺を撃った筈だが……………  
気に留めることもなく、続けて発砲する。

パアン！ガシャン！

「……………イ！レイ!!？」

右隣から私の名を呼ぶ声が聞こえきたーこの声はもしや……………

私は目隠しを外してみると、そこには金次君がいた。

気のせいか血の気の引いた顔で私を見つめる。

「やあ、金次君。そんな真つ青な顔してどうしたんだい？」

「俺を殺す気か!?？何で部屋で銃をぶつ放してんだよ！」

金次君は怒り心頭なご様子。

うーむ、皆目見当がつかないぞ。

まず初めに聞くべき事はー

「どうして君が私の部屋にいるの？まさか……………私を襲いに来たのか!?？」

サツと距離を取り、臨戦状態に入る。

「誰が襲うか。忘れたのか？お前が俺に学校のクエストを見繕って、部屋に來いって、言つたじゃねえか」

金次君は言葉の最後にハァーとため息を吐く。

あー、そうだった。思い出したよ。

実験の後で学校のクエストを確認しに戻るのが面倒だから、金次君にクエストを適当に見繕って、後で部屋に來てとお願いしたんだつた。

「そうだったね。いや〜ごめんね。実験に夢中で忘れてたよ」

「これは何の実験だよ？銃の乱射テストか？それとも曲芸撃ちか？」

金次君が部屋を見渡す。

リビングの床には割れた壺ーではなく、蛍光灯・テレビ画面・食器が粉々になって、辺りに飛散していた。

肝心の壺は一つも割れていない。

「壺を狙っていたんだよ」

「目隠しで……？それにしても一発も命中していないみたいだな」

「4発中0発だよ」

「あー、見事な腕前で」

「いや、それ程でも」

銃を持たない空いた手で頭を掻きながら照れてみる。

そんなに褒めないでよ。思わず発砲したくなるじゃないか。

「褒めてねえし。撃つんなら射撃場で撃て」

分かってはいたけど、ナイスツツコミ！

「玄関前に来てみれば突然、お前の部屋の中から銃声が聞こえたから、何事だと思つて駆け込んでみれば、こんな事をやってたとは……後片付けはちゃんとやれよな」

金次君は再度、私の部屋をグルと見渡す。

分かつてるよ……分かつてますよ。片付ければいいいでしょ。片付ければ。

私は渋々と塵取りと箒を手に部屋に飛び散った破片を集める。

そんな感じで、サッサと片付け終える。

「お掃除終わりよ…… あー！ちよつと金次君、それに触らないでくれたまえ」

掃除を終え、私がひと息つこうかなと思つた矢先、金次君が私の部屋のモノを弄ろうとした。

私はそれを慌てて止める。

「お前の部屋は来る度に、ごちゃごちゃと色んなモンが増えてくるな。コレは何だ？新しい万華鏡か？」

1人がけのソファに置かれた細長い筒を指差す。

「ごちゃごちゃとは失敬だな！これでも整理整頓してあるんだよ。」

ベランダに設置してある望遠鏡、部屋の隅に重ねてある新聞記事、床の開きばなしの分厚い本、壁にピン止めされた世界地図……「ちゃんと整理整頓してある。」

「それはリボルバー専用の消音器——サイレンサーだよ」

「オートマチックと違って、銃口以外の隙間が大きいリボルバーには基本的に効果がな  
いんじゃないか？」

サイレンサーは、銃の発射音を軽減するために銃身の先端に取り付ける筒状の装置で、映画などではこれをつけることで周りに気が付かれずに暗殺している描写が描かれているが、思ったよりも音がするのだ。もつとプスツツてレベルなのかと思ってたけど室内だと反響しちゃうんだよね。

「より聞こえにくくするために私は敢えて発射ガスを銃身内側に……」

「あー、分かった分かった。お前がリボルバー専用のサイレンサーを作りたいってのが、十分に伝わったよ。そんな便利なモンがあるなら最初から使えよな」

私が丁寧に説明してるのに、金次君は途中で区切ってきた。

「これから革新的な発明の説明本番って時に……それに使って、コレはまだ未完成品だよ。」



「そんなモン付けるより、オートマチックを使ったらどうだ？それの方が手取り早いだろう」

チラツと腰のホルスターに収めてある拳銃を見せてくる。

「ヤダ。私はリボルバーが好きなんだ。コレだけは譲らないー例え地球が崩壊しようともね」

私はキリツとした顔で宣言する。ふっ……… 決まった。

「たく、お前の頑固な所ーリボルバー好きなら兄さんといい勝負だよ」

金一さんといい勝負かー、いつか彼とは西部劇風の早撃ちで勝負したいな。

まあ、今の私では十中八九負けるが、勝つ秘策はある。まだ開発中だけどね。

「リボルバーについては後ほどしようか。ソファにかけなよ。コーヒーでも出すよ」

「普通のコーヒーをお願いするぜ」

うん？どうしたんだい金次君。そんなに張り付めた顔で懇願して。たかがコーヒーで大袈裟だなー。

そんな事を考えながらキッチンに向かう。

「あちやー、ここまで被害が及んでいたか……… 参ったな」

キッチンに移動すると、そこにも辺り一面にガラスの破片が飛散していた。いや、ガラスだけじゃない。コーヒーカップー陶器類も割れている。

食器棚を貫通して壁に命中した際に割れたようだ。

これじゃ、コーヒーが注げないな。何かで代用するか。

辺りを見渡してみるとキッチンのテーブルに実験用のビーカーを発見した。

前に新型の麻醉薬を作る際に使用したけど、しっかり洗ったし、コレにするか。

「金次くん、お待たせ〜」

コーヒーを注いだビーカーを2つを手にはりピングに戻る。

「サンキューって……これは理科の実験で使うビーカーじゃねえか。なんてモンにコーヒー入れてくんだよ。コーヒーカップは無かったのか？」

「あー、それがね……私の実験の尊い犠牲となりました」

「ようするに割らかしたんだな」

「その通りでございます」

「物は大事にしろ。壊れたら買い換えればいいって、わけじゃねえんだからな。あと、コレ今日の新聞。玄関の投函入れに入ったままだったぞ」

「ーらずずう」

嫌味を垂れながらもビーカー入りのコーヒーを啜る。

私もソファに腰掛け、金次君と向かい合うようにコーヒーを啜りながら、渡された新

聞を開く。

「ハア、入れたてのコーヒーは美味しい。気のせいか、いつもより苦味が強い気がするが。」

「それでクエストの方は見繕ってくれたかい？」

「お前が興味を持ちそうな案件をリストアップしてきたぞ」

金次君は手にした数枚のファイルをひらひらと見せびらかす。

「どんな事件を持ってきてくれたのかな？ 私の灰色の細胞を刺激してくれるワクワクするような事件は果たしてあるのか」

「ポワロか。そんな事より言うぞー東京都台東区の主婦から旦那が行方不明」

「海外主張と偽って、若いパート従業員とシンガポールに旅行。因みにお相手は妻の勤め先の同僚」

「ーつままない。」

金次君は「えっ!?？」という顔をしている。

そんなに驚く事かい？ こんな事件は分析するまでもない。

私は再度新聞に目を通す。

「おっ！今日は晴れ日よりか………えっ!?？もう9月に入るの」

「ああ、そうだよ。次いくぞ………えーっと、足立区の自営業者を営む女性から

何々…… パールのネックレスを紛失」

「保険金詐欺。夫は妻に隠れてギャンブルに熱中。保険会社から保険金を騙しとり、ギャンブルの穴埋めに使う」

「捜査もしてないのに決めつけるな。違つたらどうするんだ？」

「こんな事件で間違いを犯さないよ。犯す可能性は天文学的な確率よりも低い」

本当につまらない！君は私を退屈死させるのかい？

「ハアア、じゃあコレどうだ。江戸川区の男性。ミスコンで死んだ娘の捜査」

ピキーン！

私の頭の中で閃光のようなモノが光った。

「ミスコンというと東京都文京区の東京ドームホテル？」

「いや、文京区は同じだが、最近になって完成した東京シティホテルーそこで開催されたミスコンで娘が死んだから捜査してくれだつてよ」

「死んだ日時と状況は？」

「詳しくは記入されてない。ただ、娘がミスコンに出たから死んだ。だから捜査してくれとしか書かれていない」

ファイルを見せてくる。

うーむ、確かにコレには大雑把に状況が書かれており、捜査してくれとしか記入され

てないね。いや、死んだ日時が書かれている。

えーっと、今日遺体が発見された!?? 早急に捜査を開始してくれって、イキナリだな。娘が死んだから、気が動転しているのか?

「警察も捜査しているのかい?」

「コレによると警察にも捜査させているし、俺ら武偵にもお声が掛かつてる。おそらく、娘の死の真相を知りたいが為に、猫の手も借りたい状態なんだろうぜ」

「クエスト参加人数に制限は?」

「特にないな。制限なしの外部との協力ありとある」

校内問わず学校のＯＢー現役のプロや一般人の協力もよしってワケね。

「ミスコンは中止になるのかな?」

「いいや、どうやらこのまま続行ー予選から始め直す予定とある。人が死んだつてのにな」

金次君は苦虫を噛み潰したように顔を顰める。

「死んだ出場者の穴埋めはどうするんだい? 誰か当てでもあるのかな」

私はソファに背を預け、膝掛けを指でトントンと叩きながら考える。

「金次君。学校に戻ってクエスト掲示板を再度漁ってみてくれ。私の読みが正しければ、ミスコン開催のホテルから依頼が来てるだろうー死んだ出場者の穴埋めの為の

ね」

「武偵に依頼が舞い込むか？ 仮にあったとして…… お前が出るのか？」

「やだよ。私、そういうガラじゃないし」

ミスコン会場に潜入となると、人選は慎重にしないとね。

私の見立てでは金次君は女装すればミスコン優勝を狙える！

「特殊捜査科にでも声かけてみるか？」

金次君が提案してきた。

チィ、私の考えを呼んだか。先手を取られた。

「特殊捜査科の人達なら優勝を狙えるかもしれないけど、イマイチピンとこないんだよ

ね」

「特殊捜査科の女では力不足ってか」

「いや、別に特殊捜査科の子が力不足って意味じゃないよ。恐らく、今回のミスコンは大人の女性というのがテーマだろう。まあ、彼女達は十分、大人の女性を演じられるけど、問題が一つだけ——金次君は特殊捜査科と一緒に任務をこなせる自信ある？」

「——全くないな」

うん、素直でよろしい。

特殊捜査科は美少女しか入ることが許されない特別な学科だ。

そこに在籍している女の子は金次君には刺激が強すぎるだろう。

「誰かいなかかなー。大人の女性で、尚且つ金次君が気兼ねなく、一緒に任務をこなせる理想の……」  
「あっ」

この瞬間、金次君と私は全く同じ答えに行きついた。

金次君の身近にいるじゃないか。

普段は男性だが、女装すると絶世の美女に化ける。

女装の星という名の、宿命を背負ったーある男性の姿が脳裏に浮かんだ。

東京都 巣鴨にあるマンションにてー

「ーというわけです。ミスコンに出場して下さい、金一さん」

「ー断る」

私たちは東京都内の巣鴨に居を構える金一さんの元を訪れた。

理由は女装してミスコンに出場し、捜査に協力してほしいと願う為だ。

休日の来訪に金一さんは嫌な顔一つせず、私たちを歓迎してくれた。

機嫌のいいウチに来訪の目的を話したが、案の定、一発で拒否された。

リビングのテーブルを挟んで、お互い今に至る。

「そもそも何故、男の俺がミスコンに出る必要がある？学校の特殊捜査科や同級生に協

力を仰ぐなり、いくらでも手はあるだろう?」

まったく、その通りでございます。

「大方、キンジの女嫌いを考慮しての配慮だな」

チラつと私の隣に腰掛ける金次君を眺める。

その目は情けないと語っているようだった。

「いい加減、女に慣れるキンジ。我が弟ながら情けない」

「すまない兄さん」

「それにレイ。君も君だ。外部の、それも男の俺より…… 本当の女の方が安全且つ確実に任務をこなせる筈だ」

金一さんは女装——カナさんになりたくないようだ。

彼は仕事でカナさんになるが、本人は超が付くほど恥ずかしいらしく、金次君曰く「兄さんの前でカナの名前は出さないほうがいい」らしい。

「金一さん。今回の事件の犠牲者の親族——お父さんは娘さんを亡くして悲しんでます。そんな遺族の無念を晴らす為にも金一さんの強力が必要なのです」

「いや、だから俺じゃなくてだな。その遺族には気の毒だが…… しかし…… 俺がミスコン…… 男としてのプライドが……」

今、彼は良心と羞恥心に挟まれている。



正義の塊のような金一さんとしてはこの事件は見過ごせないだろう。

しかし、女装してミスコンパーあり得ないお願いで困惑している様子。

(ほらな零。兄さんにミスコンは無理だ)

金次君がヒソヒソ声で語り掛ける。

大丈夫さ。金次君、必ずお兄さんに協力させるさ。

私はココで用意していた切り札を切ることにした。

「ローマ武偵高への留学。ホームシックになった子。慰め添い寝。お姉様」

「ー!!?!?!?!」

ビシィッ!!?!

その瞬間、金一さんは雷にでも打たれたかのように硬直した。

「ど、どこでソレを……?!」

「さーて、どこで聞いたのやら?」

これが私の切り札ー遠山 金一のローマ武偵留学日誌。

私はここに来る前に彼の事を徹底的に調べた。

すると、面白いことが発覚した。

彼は学生時代、ローマ武偵高に転装生ーカナさんとして留学。

恐らく、ヒステリアモードを使って勉強を捗らせる為だろう。

留学して暫く、ある日カナさんはホームシックになった女の子を慰める為に、その子が寝るまで同じ部屋で添い寝してあげたのだ。

その日からカナさんは周りの女の子達から「カナお姉様」とちやほやされ始めた。

「キンジいいい！まさか、お前喋ったのかああ!!?」

「し、知らねえよ!!?」一体、何の事だよ」

「あつ！金次君は喋っていませんよ。私が独自に調べただけです」

金次君に殴り掛かろうとする金一さんを止める。

彼を殴ってもいいのですか？その瞬間、アナタの事をローマ武偵の女の子達にバラしますよ？カナさんは男ですってね。

金一さんは「うぐううう」と苦しそうに悩む。

好きなだけ悩みなさい。ここからは、ずっと私のターン!!?」

「金一さん。任務に協力してくれますね？勿論、報酬は支払いますよ」

優しい笑顔でニコツと微笑む。

アナタに残された返事は「YES」しかないんですよ。どうせ、ローマ武偵の女の子達から「お姉様」と呼ばれて良い気分だったんでしようが。

「わ、分かったから、言わないでくれ。頼む……!」

「了解です。それじゃ、私達は外で待っているのです、しっかりと準備して出てきて下

さいね♪さあ、行こうか金次君」

私の金次君は部屋を出る——金一さんの、準備が整うのを待つ為に。

「お前、兄さんに何したんだ？」

「さーてね。ただ言えるのは……えーっと、確かマンガだと何って言うんだっけ、

ああ、そうだ！」

私は手をポンと叩き、

「計算通り」

「○スノートか」

笑顔で決めたのに、金次君にビシイっとツツコまれた。

## 外伝：ミスコン殺人事件 相棒金次&カナ編

東京シテイホテル

東京都文京区にそびえる地上43階建ての超高層ホテル。

都内主要5線4駅より徒歩6分圏内と言う好立地で、ビジネス・レジャーでのアクセスとしても便利。9階〜41階に位置する客室からの眺望が非常に高評価。

イベント宣伝の効果を狙ってか、3階スーパードライニングの外から『東京シテイホテルの美人コンテスト』と明記された弾幕がデカデカと貼られている。

「おおく見てごらんよ金次君、天まで届きそうだ」

私は爽快な青空に向かってそびえ立つ、件のホテルを裏口から眺めながら感傷に浸っていた。

現在の私の服装は何時もの武偵高校のセーラー服ではなく、黒のスーツを着ている。

これはただのスーツではなく、様々なギミック満載の特注スーツなのだ。

スーツが男だけの戦闘服だと誰が決めたのかな？

「建設中のスカイツリーほどじゃないだろう。それに高さなら『東京ドームホテル』と大して変わらん」

右隣に立つ金次君が悪態をつきながら同じくホテル周辺を眺める。

ホテルの裏口にはミスコンの出場者がステージで着るのであるう、汚れ防止の保護シートに包まれた、様々な衣装が業務用のハンガーフックに掛かっている。

衣装だけじゃない。ステージの照明器具やコイル状の配線、トラックから運び込まれた衣装をホテルに運び込む大勢のスタッフの姿も確認できる。

そして、ホテルに似つかわしくない人達の姿が――警察だ。

人が死んだと通報を受けてか、ギラついた目で周辺を散策兼警戒している。

軽く見た限り20人くらいはいるね。隠してはいるが、全員不満と疑問に満ち溢れた顔をしているのが分かる。

ホテル側のミスコン続行のせいでも、こうも慌ただしく現場を荒らされたんじゃ、捜査に当たる警察からすれば堪ったものじゃないだろう。

「確かにね。キンジの言う通り、このホテルは向こうと同じ――双子ビルの様なモノだし」

そして、忘れてはいけない人がここに一人。

私の左隣には悪態をつく金次君を見て、くすくすと可笑しく笑う女装した金一さんともいカナさんが立っていた。

服装はふつくらした質感が自慢のモックネックサンドスリットニットワンピース。

色はライトオレンジで、安定したモックネックで膝下丈の安心感とスリットの色つばさがグッドだ。

厚みがあるため保温性も抜群でゆるいフィットで体型もカバーし、デイリーにはもちろんアンクルブーツとベルトも完璧にマッチしている。

「そうですよね。カナさんの言う通りでした」

愛想笑いを浮かべ適当に受け流しながら、カナさんをじーつと観察する。

女の私から見ても女性にしか見えない。

落ち着きと大人特有の色気が合わさった完璧な女性だ。これなら、誰も男とは思わないだろう。私と金次君を除いて。

「ねえねえ、金次君」

「何だよ？っーか、引っ付くな。スーツ越しに胸が当たるんだよ」

金次君の肩を掴んで私の方に寄せる。

その際、私の胸が彼の二の腕に当たるが、これは決して当たつてるのでない!!? 当てているのさ。カッコつけてネ。

「カナさんって、本当に男なの? 改めて観察してみたけど、私の目から見ても女性にしか見えないんだけど」

後ろからカナさんが見ているが、私は口元を背中中で隠して声音は最小限まで落として

ヒソヒソ声で喋る。

「そりやな…… 大概兄さんの女装姿を見れば誰でもそうなるさ。後、間違つても本人の前でその話題を持ち出すなよ。今はカナだからいいが」

視線をソーツと後ろにいるカナさんに移す。

ははあゝん。さては変身解除後の金一さんに戻つてからが怖いんだね。

「いやゝ本当に女性にしか見えないね。性別が男つて嘘じゃないの?」

「ば、馬鹿!? 何言つてんだツ!」

わざとカナさんに聞こえる声で喋つてみる。

おおく慌ててる。慌ててる。

チラツと後ろにいるカナさんを見るが、本人はコテンと首を傾げて何を言っているのか、分からない様子だ。

「しかし、あの胸つてどうなってるんだろう? 実に興味深い。私の分析では……」

カナさんにふつくらとした胸がある。男である以上、作り物である事は確かだが、うーむ、大きさはB以上はあるネ。

「くだらんことを分析せんでええ」

ビシッ!

分析結果を言い渡そうとした瞬間、金次君にチョップをお見舞いされた。

痛っ!!? よくもやったな。よーし、いいだろう。

私は彼にお返しとして、まだまだ試験的なアレをすることにした。

「金次君。君はいつから金一さんが兄もとい男だと錯覚していた?」

「突然、何を言い出すんだお前は。正真正銘、兄さんは男だ。弟の俺が保証する」

「本当に? 君は騙されているんだよ。今のあの姿こそが遠山 金一の真の姿なんだよ。普段は男装して、弟である君を騙していたのさ」

くいくいと親指でカナさんを指し示す。人を指で指すなどは言わないでね。

「そんなワケあるか。仮にそうだとして、男装する理由が分からん」

「金次君、本当は知ってるはずだ。思い解してごらん。金一さんが君と一緒に風呂に入った事があるかい? 一緒に海水浴は? お手洗いは? 疑問に思う不審な行動があったはずだ」

「生憎だったな。兄さんと風呂に入った事はあるし、海水浴に連れられてもらった」

金次君はハッキリと宣言した。

うーむ、言葉責めの催眠術を試してみたが、うまくいかなかったか。

これで彼が金一さんを姉だと錯覚すれば、どうなったんだろう。

やばい! 思わずヨダレが…… 拭かないと。

「さつきからずっと二人で何を話しているの?」



カナさんがピョコと私と金次君の肩の間から顔を出してきた。

うわっ!? ビツクリした。全く近づいてくる気配を感じ取れなかったよ。これがプロの実力か……

「何でもねえよ。ただコイツが馬鹿な事を言っただけだよ」

「馬鹿とは何だ！ 私はただ君の為になる重要な話をだね……」

「ハイハイ。二人とも喧嘩しない。早くホテルに入りましょう」

カナさんが仲裁に入る。コレが大人の対応ってやつか。

これなら絶対に男女関係なくモテるわ。もしかして武偵庁にカナさんに惚れてる人がいたりして…… そうなったら、金次君がやきもちを焼いたりするかも。

そんなことを考えながら、ホテルに向かって足を踏み出した。

裏口からホテルに入る際、入り口を見張る警察官から呼び止められたが、そこは武偵章を見せることでパスした。

その際、警官からすごく嫌そうな軽蔑の眼差しを向けられたけど。

そのまま1階のフロントの窓口で来訪目的を伝え、自分の武偵章を眺めながらホールを歩いていると、この前見た時代劇のあるシーンが頭によぎった。

「改めてコレいいネ。どこかの印籠みたいで。ひかえ！ひかえ！ひかえ！この武偵章が

目に入らぬか！こちらにおわすお方をどなたとこころえる。恐れ多くも先の……」  
「くだらない事やってないで早く行くぞ（わよ）」

有名時代のご隠居様を真似てみるが、隣を歩くキョウダイに途中で遮られた。

珍しくカナさんがノってこなかった。注意するその姿は母親そのものに感じられた。

ここから見せ場つて時にさ……場を和ませるジョークくらいはいいじゃないか。

文句を垂れながらも、エレベーターに乗り込みミスコン会場がある43階サウンドステージ&ダイニングエリアを目指す。

エレベーターから降りると、そこは正にミスコン会場と呼ばれるに相応しい場所だった。

広さは武偵高校の第1体育館くらいだろう。

天井には大量の照明器具に会場全体を挟むように左右には大量の音響装置。奥にあるメインステージは扇状で、背後には大型のフルカラーLEDスクリーン画面が『東京シテイホテル主催の美人コンテスト主催』という文字を映して3つ並んでいる。

メインステージ前には来客専用のパーティーテーブルがステージ全体を見通せるようセツティングされ、イベント主催者が如何に力を入れているかが感じ取れる。

しかし、そんな会場に似合わないモノが確認できる——メインステージの中央の降ろ

した照明だろう。その上にスパコールを着た若い女性が仰向けで倒れていた。

目立った外傷はなく、目を見開いて天井を眺めるようにダランと力無く両腕をステージに垂らしている。――明らかに死んでいる。

その女性の死体を囲うように、ステージ上に2つのグループが――武偵と警察だ。キツとした張り詰めた現場の空気がこちらに伝わってくる。

お互いに睨み合って仕事に励んでいるネ。

警察と武偵は仲がよろしくない。警察は武偵を現場を荒らして手柄を横取りするつて、思ってる節がある。

本来、警察と武偵は共同で仕事をする事はないが、依頼人の要望でこのような事態になったのだ。

「ミスコン殺人事件とはイイね〜」

「コラッ！レイ、不謹慎なことは言わないの」

カナさんから注意を受ける。

殺人は起きるべくして起きるモノさ。

まあ、こういうった現場で起きた事件は、また、起きてもおかしくないけど。

「うん？おい、アレって『家族はツライよ』の夫役で出てる田中アキラじゃないねえか。何でここにいるんだ？」

金次君が眺める先には、ステージ前でタキシードに首には派手な蝶ネクタイの若い男が警察官に事情聴取を受けている。

あつ、本当だ。金曜の夜ドラ『家族はツライよ』に出演している俳優の田中アキラじゃないか。

妻と元恋人の間で揺れる1人の男の心情を描いたドラマで、私は毎週欠かさず見ているよ。妻を取るか、見捨てて元恋人を取るか苦悩する場面が見所なんだよね。

でも、最近になって役を演じきれなくなった節がある。そこが少し残念でならない。「どうやら、ミスコンの司会者として呼ばれてみたいよ。彼のドラマ毎週欠かさず見てるわ」

「ほほう。実は私も彼のドラマ見てるんですよ。妻か元恋人どちらを取るか苦悩する彼の姿は見ものだと、カナさんも思いませんか？」

「あら残念。私は苦悩する彼を見て、自分から身を引こうとする元恋人の潔さが素晴らしいと思うわ」

カナさんは私とは好みが真逆だった。

元恋人の方が好みですか。カナさんとはドラマ全体では話が合うが、見所では合いません。うにないな。

「2人してあのドラマを見てんのかよ。つて、それどころじゃない。早く現場に行くぞ」

金次君を先頭にステージに上がる。

新しく来た私達の姿を見て、ステージ上の武偵と警察が一旦手を止める。

警察の方は私達が何者か気になってるご様子だ。対して武偵の皆さんは見慣れた一何名かカナさんに面識があるみたい。

その内の武偵の一人がこちらに向かつて歩いてくる。

「おう、きん…… カナさん、お疲れ様。うん？そつちの2人は……」

「私の弟とそのパートナーよ」

気さくに話しかけてきた武偵はどうやらカナさんと面識があるようだ。

同じ職場の同僚か、或いは他所の武偵事務所で会ってるのかな？カナさんだけに会ってるカナなんちゃって♪寒いか……

そんなカナさんが私と金次君に目配りする。挨拶しろって事だろう。

「初めまして武偵高校1年の玲瓏館・M・零です。未熟者ながら探偵科に所属しています」

「あー、その遠山 金次です。武偵高の1年で強襲科に在籍しています。あとカナの弟です」

「おうーよろしくな、弟とそのパートナーちゃん。俺は江戸川区の武偵事務所に所属してる多田島ってモンだ」

軽く頭を下げて挨拶する私に対して、金次君はぶつきらぼうに挨拶する。こらこら、

金次君？こういうった場面では第一印象が大切なんだよ。状況によつては一生相手の記憶に残るんだからさ。

「早速だけど状況は？」

私達が挨拶を終え、カナさんが武偵に現場の状況説明を求める。

「コンテストマネージャーの石田ナルミに話を聞いたところだ」

彼が「ほれあそこに」と指差す先にはステージから少し離れた所で武偵に事情聴取を受ける女性の姿が。

年は40代前半、紺色のドレス姿の堂々とした立ち姿が美しい、何処かキャリアウーマン風の印象を受ける。

遠目からでも武偵の聞き取りにも臆するなく、ハッキリと喋っているのが分かる。

「被害者は21歳の美空マミ」

そう言って歩きながら状況説明する彼について私達は行く。

ついでに持参した手袋をはめる。

「ミスコン美女たちがコンテストのリハーサルをしていた。途中で照明器具を降ろした所……彼女の遺体が上に乗っかっていた」

状況説明が終わると同時にステージ上の照明器具に乗っている被害者と対面した。

被害者を前に私達は手を合わせる。

そして、改めて遺体を観察する。

女性の見開いた目には生気は感じられず、ダランと下がった両手は風でも吹けば振り子の様に動きそうだ。肩にはタスキの様なモノを下けている。

遺体の側では数名の鑑識が現場を調べている。

「衝撃的だな」

「鑑識さん死因は判明したの？」

カナさんが鑑識の1人1人遺体に一番近い鑑識武偵に質問する。

「ああ、キン……今はカナさんか。後ろからタスキで首を絞められた事による窒息死。恐らく、昨日の夜の11時から1時の間」

スラスラと死因と死亡推定時刻を伝える。

カナさんは顔が広いな。色々な武偵と面識がありそうだ。

「どうして死体は照明器具の上にあつたんですか？」

私は質問してみる。シャシャリ出るなって言われそうだ。

「どうやら照明器具は昨日からステージの真上に置きっぱなしになっていたらしい。きつと犯人が上に乗せて引き上げたんだらう。時間稼ぎの為に」

カナさんの同行人とあつてか、現場の状況説明をしてくれた多田島武偵が丁寧に教えてくれた。

あー、ぱっと見た限り親切そうな人で助かった。

「つまり何だ？犯人は機材を扱える奴か？」

「いや、金次君そうとは限らないよ。機材の操作は誰にでも簡単にできる。このタイプの照明はタッチパネルだ。ピツと押してハイお終いつてネ」

照明器具ー誰にでも操作可能。

「一目見ただけで分かるのかよ？俺らでも操作パネルを見て初めて分かったのになあ、カナさん、この子って何者だよ。学生って嘘じゃねのか？」

「いいえ、真正正銘彼女は学生武偵よ。そして、私の自慢の弟のパートナー」

私の説明に付け加え、カナさんはちやっかりと金次君を褒める。

「最後の目撃は？」

「昨日の夜。美女たちはホテルオーナーの馬場氏主催の夕食会に参加していた。終わったのは10時30分。全員、タクシーでホテルに戻った。キーカードの記録だと美空マミは10時44分に入り、どうしてか今に至る」

夕食会后、一旦部屋に戻り、その後被害者は会場に来た？ー本人の意思で？目的は何だ？

ホテルオーナー主催の夕食会ーホテルオーナーの馬場氏に聞き込みする必要あり。

「あと、こんなのがあった。調べてみるといい」



そう言つて鑑識武偵がカナさんに渡してきたのは、黒のспанコールの一部だった。『спанコール』——光を反射させるために使用する服飾資材で、穴の空いた金属やプラスチックの薄片のことを指すが、表面に光を反射する加工のされた布のことをспанコールと呼ぶ場合もある。

衣服や装飾品に縫い付けて使用するが、洗濯にはあまり向かず、特にドライクリーニングを行った場合に色落ちや変形が生じる。

黒のспанコールのカケラー——加害者のモノ？

「一部欠けてる。被害者の髪の毛に付いていた」

「犯人の服のспанコールね。殺した時に付いたのかしら？昨夜、この会場に誰が入れたか調べてちょうだい」

現場責任者というワケでもないのにカナさんが指示する。

それを聞いて武偵達は反論することなく指示に従う。

凄いいねーある種のカリスマ……いや、単に慕われているだけか。

「あつ！ついでにコンテストマネージャーも呼んでくれませんか。このспанコールを着ていた人がいないか、マネージャーに聞いてください」

カナさんに続く形で私も武偵達に指示ならぬ要望する。

私の要望に多田島武偵が「任せとけ」と言ってくれた。素直に聞いてくれて嬉しいよ。

「ああ、そうだ。ここに来る前に依頼書で確認したんですが、被害者には身内の方——父親がいるそうですね。今はどうしているんですか？」

「ああ、父親ならあそこに来てるぜ」

多田島武偵がクイと顎でしゃくる先には娘の元に駆け寄ろうとしているのだろう、コンテストマネージャーの石田ナルミに引き止められている男性の姿が見て取れた。

様子からして彼が被害者美空マミの父親だろう。

どつしりとした体格だがオドオドした様子が見てとれて何処か頼り無さを感じる。

彼がそうですか、警察だけじゃなく武偵にも捜査依頼して現場をギクシヤク状態に陥らせた元凶は。

私達は被害者の父親に話を聞くため、一旦ステージから降りて来客専用のパーティーテーブル席に座りながら、彼に事情聴取をする事にした。

「この度はお悔やみ申し上げます」

カナさんが開口一番にお悔やみの言葉を告げる。それに合わせて私と金次は目を瞑って頭を下げる。

「……娘がミスコンを始めたのは10歳の時だった。私は最初反対していたんだが、妻が……熱心でね。妻が死んでからも娘は止めなかつた——きつと妻が懐かしかつ

たんだらう」

父親は顔を真っ赤にし涙を堪えながら、自分の娘がミスコンを始めた経緯を語り出した。

娘を失ったことが余程ショックなのだろう。

ああ、成る程ネ。これなら警察だけじゃなく、武偵にも捜査してほしくもなるワケだ。「娘さんに敵はいませんか?」

私はズイと座っている椅子から身を乗り出す形で尋ねる。

「まさか……! みんなから好かれていたさ」

好かれていた、ねえ?

貴方の見えないところではどうだったか。

被害者に敵はいたー父親の確認できないところでライバルあり?

「出場してた女達の中にライバルとかいたんじゃないか?」

今度は金次君が少々乱暴気味に質問する。実に彼らしい質問の仕方だ。しっかりと訓練して磨けば尋問科でもやっていけるね。

「殆どの子とは付き合いがあつたさ。娘が準決勝に進んだ時なんか、みんなハグして喜んでくれた。絶対に優勝できるって」

純粹に被害者を祝福してくれた仲間はいたようだ。

「このコンテストで優勝することが娘の夢だった。なのに……なのに、何でこんなコトに……！」

言い終えると父親は堪えることができなくなったのだろうか、一気に泣き出してしまった。

「最後に娘さんと話をしたのはいつですか？」

泣き出す父親を気遣うように優しくカナさんが尋ねる。

「昨日の朝だ。夜も頑張れって、伝えたくてホテルオーナーの馬場さんの夕食会が終わる時間を狙って掛けたんだが……娘は電話に出なかった」

「それは何時頃ですかネ」

「11時ちよつと前だ。てつきり眠ってしまったのかと思ってたが、自分の部屋を抜け出して、ここに來てたんだ。理由があつて……！」

最後にコンテスト会場を見渡しから答える。

「ママ君のお父さん……！」

突然、私達の後ろから誰かがやってきた。

振り返ってみると、スリーピースのダークスーツにびっしりと身を包んだ白髪の少老の男性がそこにいた。

「この度はお悔やみ申し上げるよ。犯人は必ず見つける。約束だ」

「ああ、馬場さん、ありがとうございます……！」

やってきて早々、父親と握手を交わすこの男がどうやら東京シティホテルのオーナー馬場氏らしい。

会いに行く手間が省けた。

「武偵さん方、ちよつと来てくれるかな？」

馬場氏が私達3人に来るよう促す。

私達は顔を合わせて頭にクエスチョンマークを浮かべる。

馬場氏に連れてこられた応接室は、ドアを開けると贅を凝らしたような空間が目の前に広がっていた。

部屋の中には高級品ばい天蓋付きベッドにソファ、床にはペルシャ絨毯……壁に掛かっているのは油絵、天井にぶら下がっているアレはシャンデリアか？

高級品で埋め尽くして落ち着かないな。私はこの部屋が好きなれそうにない。

おまけにマスコミだろうか？部屋の中でカメラを回す男達がいる。

「まったく、何たることだ！私のホテルの美人コンテストに悲しい歴史が刻まれた。お、メイサ」

「ああ、アナタ。大変ね」

入室して暫くして私達を出迎えたのは、金髪のブロンドヘアにブルーのパーティードレスを着た40代風の女性だった。

誰だろう？馬場氏とかなり親しげで、おまけにアナタって呼んでたし、奥さんかな？

「妻のメイサだ。アメリカの美人コンテストの優勝者なんだ」

「もちろん知ってますよ」

「初めまして」

「(こちら)そよろしく」

そのまま一歩進み、出会い頭に挨拶と、握手を交わす。

その際、私はメイサ夫人の左手薬指に注目した。夫婦の証である結婚指輪をしている指が変だ。

チラツとだが指輪の日焼け後がない。どうやら夫がいないところでは頻繁に外しているようだね。

「みんな美空ちゃんのを悲しんでいるわ。勿論、私達も出場者たちも……だって家族だもの」

「彼女とは親しかったんですか？」

カナさんが一番にメイサ氏に質問する。

彼女が家族と呼ぶほど出場者たちを大事にしている様子が気になったようだ。

あ、ちよつとカメラマンさん。カメラを回さないでください。気が散る。

「まあな。優しい子で、バイオリンが上手い」

「そうだったわね」

しかし、カナさんの質問に答えたのは夫の馬場氏だった。

何故、貴方が答えるの？オマケにかなり詳しいみたいだね。

「約束するよ。東京ホテル従業員一同、全力で捜査に協力する。必要なことがあれば何でも言ってくれ。ただし、此方からもお願いしたいことがある。ああ、その……何だ」

「何だよ。ハッキリと言ってくれ」

「つまり、その月曜日にコンテストの生放送があるんだ。それで美空君の代役を立てたんだけど、君たち武偵の方で代わりを見繕ってほしいのだ。それとマスコミを最小限にしてほしい」

成る程、このホテルが武偵にミスコン出場を依頼してきたのは報道による世間体を気にしてか。ホテルで死人それも殺人があつたとあつちやね。

「それなら心配には及びません。代役なら既に貴方達の目の前にいます。ご紹介します。遠山 カナさんです」

私はコンテスト司会者風にカナさんを紹介する。

拍手く拍手くなんちゃって。

「何と!??彼女がそうなのか。いやー、助かった。それにしても中々の美人だ。メイサもそう思うだろう?」

「ええ、本当に綺麗ね。彼女なら一発で採用よ。宜しくねカナちゃん…… あらやだ、カナさんの方がよかったかしら?」

「どうやら夫婦揃ってお気に召した様子だ。」

ふっ…… 本当は男だとも知らずに。知らぬが仏とは正しくこの事だ。

もしも男だとバレたら…… どうなるんだろう♪

「呼びやすい方で結構ですよ。私の呼び名は兎も角、被害者の為に行ける事をしないと。それにマスコミといえば撮影はやめてくれます?リアリティショーじゃなく、殺人の捜査なんですよ?」

カナさんがカメラを覗みつける。撮影はお断りのようだ。

下手したら一生残る。本人からすれば羞恥プレイの数々が。

「こういうモノも撮影しないと。コンテストの裏側も全部、出場者がお互いの事をどう思っているかとか、彼女達の本音が聞けるだろう?煌びやかな女の子の素顔が見えると視聴者は喜ぶ」

「その通りね」



それを聞いた金次君とカナさんが揃って馬場氏を睨みつける。

隣で眺める私でも思わずぶるつと震えるほど迫力満載だ。

「……だが今はやめたほうがいいな」

2人の迫力に気圧されたのか、馬場氏はカメラマン達を部屋から追い出した。

「出場者たちはこのホテルに？」

ピリツとした金次君とカナさんが変わって、私が馬場氏に質問すると彼は「そうだ」と一言で答える。

「被害者の部屋を調べます。あと、防犯カメラの映像をください。昨日の夕食会も撮影してましたか？」

「勿論さ」

「その映像もください。あと、出場者たちに話を聞きます」

「マネジャーの石田に準備させよう」

それを最後に私達は馬場氏の部屋を後にする。

部屋を出た私達3人は暫くして、ホテルのスタッフから出場者たちから話を聞く準備が整ったと知らせを受け、ホテル3階のスイーパーダイニングに向かう為、エレベーターに乗り込んだ。

「たく……あの支配人なんなんだ。人が死んだつてのにコンテストは続行。おまけに生放送だと？ふざけんなつての」

「キンジ、あの手の経営者はあんなモノよ。だから気にしないで捜査しましょう」

カナさんの言う通りだ。

あの馬場というオーナー、風評を気にし過ぎてる節がある。

私の目から見て、アレは一種の脅迫観念に囚われてるようにも思えた。

「被害者の美空氏は煌びやかミスコンを夢見て、出場したのに最後はホラーで終わった」  
「レイ、ミスコンは夢見る場所じゃなく、人間の長所と短所を引き出すもの凄いプレッシャーのかかる場所なのよ」

カナさん、やけにミスコンに詳しいですね。まるで出場したことがあるような言い草だ。

さては私と金次君の知らない所で出場したことがあるな。

「……それって経験者が言うようなセリフだな。まさか……カナ、出てたのか？」

「違うわよ。ローマ武偵に留学してた頃、ルームメイトの子が出場してたの。お化粧して凄かったのよ」

へえーそうなんだー。ローマでもミスコンをやってるのか。

一瞬アナタも出てたと思ったよ。

そんな会話をしているとエレベーターは3階に到着した。

## 原作前

## プロローグ

スイスローライヘンバツハにて

滝があつたロー底の見えない大きな滝だ。

岩棚にぶつかつて幾筋にも分かれるこの滝は、その美しい光景によつて観光スポットにもなっている。

そこに2人の男女が居たロー2人とも10代で若い。

男は根暗な雰囲気を放ち、一方で女は知的な雰囲気を放つ。

側から見れば観光に来た恋人同士にも思えるが、そうではなかった。

滝のそばの崖の下に向かつて、男は手を伸ばしていたロー手に掴んでいる女を助けるために……

「ロー私は間違つていない……っ！間違つてるのはお前だ！遠山金次!!」

女は手にした杖を振り上げた。

中学3年、最後の冬

受験シーズンに突入し、進路の決まった人もいれば未だ決まらない人もいた。

この私、玲瓏館・モリアーティ・零も受験シーズン真っ只中の中学3年生だ。

学校帰りで一緒に歩いていた友人達に手を振り、

「じゃあね教授」

「またな教授さん」

「バイバイ教授!」

「ハイハイじゃあね皆」

別れた。

教授——これは私のあだ名のようなものだ。

何故、このような呼び名か?それは私の名前が原因だろう……

あれは中学に入学し、クラスメイト達の前で自己紹介した瞬間、「教授」、「ライヘンバツハの滝よコナン君!」、「ライヘンバツハ滝にご注意を」など、出るわ出るわ。

モリアーティ——この名を耳にすれば、まず誰もがあの人物を思い描くだろう。

ジェイムズ・モリアーティ

名探偵シャーロック・ホームズの最大の宿敵

彼と同等の頭脳を持ち、イギリス犯罪界のナポレオンと呼ばれた人物

同じ名字を持つ私はジェイムズ・モリアーティとどんな関係か？

身内？違いますよ。

偶々、同じ名字だけです。

私の母はイギリス人で性がモリアーティだけど、母が言うには「偶々同じ名字なだけよ。だから関係はない……」とも言ってたし……

ある時、同級生から「教授さん勉強を教えてください！」と言われたので勉強をみてあげたら成績がぐんと上がったようで、それが評判になり次々と勉強の指導を申し込む人が現れ、ますます「教授」と呼ばれる様になったよ。

ご大層なあだ名でしょう？大袈裟ですよ本当に

まあ、もう慣れたし好きにさせている。

中学校生活が終わりに近いのか、思わず懐かしいことを思い出していた。

真つ暗な寒空の下、自宅を目指し歩く。

途中、肩掛けバッグから、

「進路……どうしようかな」

学校で貰った高校のパンフレットを取り出して、私は呟いた。

進路——今後の将来が決まる大事なこと。

好きなことで食っていけるならそれは良いだろう。

私の好きな事と言えば、数学・読書

思い切つて、数学者や学校の先生も良いかも！

でも、それだとますます教授が板に付きそうな……

「あれ？これ何だろう」

私は進路表——様々な高校のパンフレットの中が変わつた名前が、

「東京武偵高校？」

武偵——武装探偵の略

凶悪犯罪の増加に伴い武装した彼らは警察に準じた逮捕権を有し、武偵法の許す限り  
権利を行使できる犯罪捜査のスペシャリスト。

その養成学校のパンフレットだった。

「何でこれが……」

もしかして、間違えて一緒に貰つちやつたかな？

返しに行こうにも学校から離れすぎているし、引き返すのも……折角だし貰つて

おこう。

それにしても武偵か……

凶悪な犯罪に対抗して作られた機関

最近、ニュースでは物騒な事件が報道されているし、夜に襲われたなんて事件もあるから早く帰ろ。

自宅を目指し、歩くこと15分――

最初に出迎えてくれるのは

明治・大正時代を思わせる和洋折衷な作りの屋敷。

母方の曾祖父が明治ごろに来日し、建てたそうだ。

青森にも同じような別邸があるのだが、私は中学に入って以来一度も行っていない。

「ただいま」

「おかえり零。寒かっただろうか？」

玄関を開けると、黒のセーター、黒のジーパン、黒縁メガネと全身黒づくめのちよい

イケメン――玲瓏館 誠司、私の父が出迎えてくれた。

名前から分かるように父は純粋な日本人だ。

職業は探偵をしている――武偵じゃないよ！人探しとがメインの探偵だよ。

黒髪・黒目、身長170センチの30代風だが実年齢は45歳。

前に一度、どんな若作りしてるの？と聞いたところ「別に何もしてないよ。強いて言えば、適度な運動かな」と笑いながら言ってたな。



「夕食作っておいたから、一緒に食べよう。カバンは預かっておこうか」  
「ありがとうお父さん。じゃあ、よろしくね」

フアスナーが開いた状態のままの肩掛けバッグを渡した。

その際、中に入っている高校パンフレットが顔を覗かせていたので、

「おや、これは高校のパンフレットだね。どの学校にするか決まったのかい？」

父の目に止まった。

「うん、まあね」

「ーそうか。遂にこの時が来たんだね」

何やら真剣な面持ちでパンフレットを見つめている。

やっぱり娘の将来を心配しているのかな？

でも大丈夫！将来、学校の先生になると決めましたから！

「どうしたの父さん？」

「いや、何でもないよ。それより、手を洗って来なさい。夕食を食べながら進路について話そう」

そう言われて洗面所に向かったーカバンとパンフレットを預けたまま。

自宅は和洋折衷な為、和室もある。

私の家では食事はいつも、ここで食べることになっている。

和室用テーブルの上には2人分の夕食が置かれている。  
今日は天井だ。

家事や洗濯は父が全部している。

こうして食事を作るのも父の仕事だ。

えっ、母は何をしているかって？

母さんは海外で仕事——海外企業の相談役をしているので、普段は家にいない。

疎遠にならないよう電話もしているし、休暇には帰ってくる。

その際、父さんは腕によりをかけた料理を作るのだ。

この前、母さんが帰ってきた時は中華の満漢全席を作ったっけ……ちよつとやり

過ぎ。

おっと料理のことを思うとお腹が空いてきた。

もうお腹ペコペコだよく早く食べよう。

私が席に座り手に箸を持ち、天井に手をつけようとした時、

「零。もう決めたんだね」

突然、父さんが遮ってきた。

そこで止めないでよ。

進路で気を張ってたから、お腹が減り過ぎているから食べさせて！

ただでさえ美味しそうなんだから、早く食べたいよ！

「うん、もう決めたよ」

だから早く食べさせろマイダディ。

「なら、好きにしなさい。母さんも父さんも止めないよ。零の決めた道だからね。」自分の思つたようにやりなさい。」

パンフレットを見て察したのかな？

伊達に探偵をやつてはいないね！流石はお父さん。

私が学校の先生になりたいのを賛成してくれるとは……

「受験の申し込みは父さんがやっておくから心配することはないよ。さあ、食べよう」

その言葉を待つてたとばかりに、私は天井に食らいついた。

うん！空腹であればあるほど料理は美味になるのは本当だったね。

食べている間も父さんは何か言っていたが、私は食事に集中して聞いてはいなかった。

### 受験当日

桜が咲く、とある学校の校門前にて

「何故よー」

私は東京武偵高校の前で叫んだー！それもこの学校の受験票を持って  
いや、父さん何であなはこの高校に申し込みをしたんですか!!？

私、将来は教師ー！学校の先生になりたかったのに……

この学校では教師になれそうにないよ。

「電話しよう」

カバンから携帯を取り出し、父さんに掛ける。

何でここにしたんだ！って言ってるよ！

「出ない！何でこの日に限って……」

父さんは電話に出なかった。

やっぱり自分の口から直接言っておけばよかったよ……

これも全て美味しすぎる天井のせいだ。

「はあ、とりあえず中に入ろう」

このまま校門の前に立っただけでも邪魔なだけだし、中に入ってみよう。

申し込みもしてしまっただし、このまま帰るわけにはいかない。

学校内は広く東京ドームくらいは余裕でありそうだ。

所々から硝煙の匂いがする。

道行く人——この生徒だろうか？彼らの腰には拳銃がぶら下がっていた。

西部劇の中に迷い込んだ気分だよ、西部劇好きだけど現実となるとね。

見ていて暴発しそうだけど、武偵ともなれば扱いから手入れくらいしているよね。

「やばいよ。迷っちゃった……」

学校内をぶらぶらと歩いていると、完全に迷ってしまった。

受験会場は何処かな？

私は探偵科を受験のすることになっている。

強襲科と呼ばれるドンパチの激しい物騒な所——実技試験と違い、おそらくペーパーテストがメインだと思うから、建物内——校舎で試験を行う筈……

取り敢えず、誰かに聞いてみよう。

そう思った私は学校関係者を探し回った。

すると其れらしき人を発見。

ちよつとガラの悪く、スーツを着崩した——前を開け、中にタンクトップを着たポニーテールの女性だった。

あの番組とは違うけど、第一学校関係者発見！早速、訪ねてみよう。

「あのすみません」

「何や」

ギロリと、睨みつけられた。

怖っ！おっと、冷静になれ。

見た目で判断しては失礼だよね。

ここはスマイル・スマイル……

「突然、すみません。私、本日この学校の試験を受けにきた者でして、実は受験会場がわからなくて……」

「ー見たところ一般中やな、お前何科を受けるんや？」

「探偵科です」

「……ほう、そうか。ならこつちや、ついて来い」

そう言うと、顎をしゃくって来るよう促す。

あれ、意外と優しい？

やっぱり人は見た目ではないね。

「ありがとうございます。えーつと……」

「蘭豹や覚えとけ」

「はい、蘭豹先生」

女性ー蘭豹先生の後をついて行く。

受験生をわざわざ受験会場に連れていってくれるなんて、この先生はきつといい人だ

！やったね！

そして連れて来られた場所は、本校舎から離れた空き島と呼ばれる所だった。  
あの蘭豹先生？ペーパーテストくらいなら本土でやれるのでは？

「何にボーツとしとる！早くこい！」

ひえっ！怒られたよ！！

鬼教官ですかあなたは？

また怒られるのは嫌なので、わたしは慌てて蘭豹先生の後をついて行く。  
すると射撃場に到着した。

中では私だけではなく、他に受験生の姿そして、

「よし、好きなモンとれ」

大量の銃があつた。

ズラリと並ぶ、銃、銃の山。

一般人には馴染みのないものが当たり前のようにそこにあつた。

「あの蘭豹先生、これは一体？」

「ああん？何アホなこと聞いとるんやワレ！武偵が銃持たんでどうするや！」

な、なるほど……探偵科といえど、武偵は武偵。

武偵なら帯銃、探偵科も例外ではないのですね。

どれにしようか迷っていると、

「あ、これなら」

拳銃の中に見覚えのあるものが一つあった。

S & W M 3 6

9 m m口径の回転式拳銃

年季が入っているけど、ちゃんと手入れはされているようだ。

リボルバーって、カッコイイよね。

装弾数はオートマチックに劣るけど、シンプルな構造で信頼性が高い。

試しに触ってみよう。

ボデイは鏡のように磨きあげられ顔が映るほどだ。

グリップは吸い付くように手に馴染む。

引き金は勿論、弾が入っていないことを確認し引いてみたが、問題はない。

その後もテレビ・映画・本などで知った拳銃の知識を頼りに点検してみる。

「ほお……（随分と手慣れとる。素人やない）」

「これにします」

「オートやなくてもええんか？」

「ご心配なく、これで十分ですよ」



「そうか…… さあてよし全員拳銃は持ったな。一般中出身の貴様らには動かない的を狙ってもらおう。その後で適正を見て試験内容を決めるから、さっさ撃てや！ 武偵憲章第五条『行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし』——既に試験は始まっているんやからな！」

いきなりですか!!

周りを見ると、他の受験生はすでに発砲していた——何発もの弾が的に撃たれていく。

耳あてなしで聞いていると、ここまでうるさいとは…… 鼓膜が破れそう。

早く、耳あて付けよう！

「ほら、サツサツと撃てや」

蘭豹先生が私の後ろにやって来た。

あの先生、何でそんなに睨みつけるのですか？ 綺麗なお顔が台無しですよ。

取り敢えず、今は射撃に集中しよう。

「あれ？ 点数表示がない」

的を見て見るとドラマなどで見る的とは違い、点数表示が書かれていない。

ただ人型的がぼつんとあるだけだ。

人を撃つ想定だから、急所を狙えばいいかな？

ドラマでも急所は高得点だったし……

「好きに撃つてもいいのですか？」

「…… やってみ」

先生からの了解も得たことだし早速、撃ってみよう。

いやー、緊張してきましたよ。

実際に拳銃を持って撃つとなると、手が震えそう。

でも、ここは気合いでなんとかしないとね！

パアン、パアン、パアン！と3発続けて撃った。

銃弾は的——人型の頭・喉・心臓部分に命中した。

——ザワ、ザワ、ザワ——

周りの受験生が騒ぎ出した。

あれ、私なんかやばいことした？

「もう一度撃つてや」

蘭豹先生が命令してきた。

気のせいかな声に怒気がこもっているような…… なんか怖いよ！

「はい」

——パアン、パアン！

また続けて5発——今度は全弾撃ち尽くした。  
的には穴は空いていない。

あれ、外したかな？

「ワレこつちこいや」

「あのせ、先生？」

蘭豹先生に肩を掴まれ、どこかに連行されて行く。

まさか、失格とか!?

そのまま引きずられ、連れてこられた先は廃ビルのような場所だった。

周りには別の受験生の姿もあった。

射撃場にいた受験生とは違う雰囲気を持っている。

「あの先生これは？」

「ここで別の試験を受けろや。お前のホンマの実力確かめたる……」

射撃が終わったら、今度はペーパーテストかな？

私が頷くと、先生は「そこで待つとけ」と言っただけで去っていた。

待っているのも暇なので周りを見渡して見ると、

「せい！ハッ！ヤッ！」

「スライドよし、トリガーよし、リングハンマー………ブツブツ」

「……」

徒手空拳・イメージトレーニング・瞑想など様々な事をしていた。

あの皆さん殺気立ってませんか？いくらパーパーテストとはいえ、そこまで気を張らなくても……」

立っているのもなんなので座れる場所を探す。

すると丁度2人がけのベンチを発見し、そこに座っていると、

「となり座ってもいいか？」

優男風のイケメンがやってきた。

この場にいる殺気立っている……いかにもチンピラ風とは違う雰囲気を漂わせている。

「いいですよ。えっと、貴方も受験生ですよね」

「ああ、そうだよ。君はどここの武偵中？」

席を一つ譲ると、

「武偵中？ああ、違うよ。私は一般中から編入試験で来たんです」

「一般中から……それは大変だね。見たところハーフかな？」

「ええ、日本人とイギリス人のハーフですよ。あ、名前は玲瓏館・M・零と言います」

「俺は遠山金次よろしく」

お互いに握手する。

それにしても、一般中で大変とはどういう意味だろうか？  
これでも受験勉強はしてきたつもりだけど……

ペーパーテスト…… だよね？

「おらガキども！静かにせえや！これから試験を始める」

蘭豹先生が戻って来て、第一声に怒鳴り散らした。

その声に殺気立っていた受験生一同は静まる。

凄いい威厳があるな…… 伊達に武偵学校の先生はやってないね。

「これからお前らには殺し合いをしてもらおう」

はい？あの先生今なんて言いましたか。空耳ですよね。

殺し合いって、バトルロイヤルですか!!

いつからBR法が設立されたんですか！教えてください。

いや、落ち着け私…… 殺し合いⅡ試験

これは武偵なりの用語の様なものに違いない。

試験はある意味では戦いだから……

「これから装備を渡す！各々好きに使え」

そう言って渡されたのは防弾チョッキ・9mm弾×10発・閃光弾1発・サバイバル

ナイフ一本

あの先生!! ペーパーテストにこんな必要なんですか?

「おい、その一般中出身! 忘れ物や」

蘭豹先生は拳銃を渡して来た。

これは射撃場で私が使っていたS & W M 36だった。

わざわざ届けてくれた様だ。

優しいけど、拳銃を使うペーパーテストなんて聞いた事がないのですが……

「ありがとうございます先生」

取り敢えず、黙って貰うのは失礼なのでお礼を述べて頂いた。

無表情も悪いので微笑みを浮かべながら

「随分と落ち着いとるなお前。ほら、サツサと他の連中について行けや。まあ、せいぜい

頑張れや」

「はい、頑張ります。お気遣いありがとうございます」

最後にそう言つて、他の受験生の後に着いていった。

これから本番の試験か…… ちよつと緊張してきたよ。

受験生が移動して暫く――

無精髭を生やした40代風の男性教諭が蘭豹の方を向き、

「何故探偵科の生徒を強襲科の試験に？」

尋ねる。

男性教諭にはそれが疑問だった。

何故、探偵科希望のそれも一般中学出身の生徒を強襲科の実技試験に送り込んだのか。

「10発」

「はい？」

「あのガキ…… 全弾全て急所に撃ち込みよった。何の躊躇いもなく平然とな」

「――偶然では？」

武偵は殺傷を禁じられている。

射撃試験では急所を狙わず撃つようになっていいる。

しかし、玲瓏館・M・零は急所を狙った――大衆の面前で平然と……

最初あの女に声をかけられた瞬間、蘭豹は勘だろうか――得体の知れない悪意を感じ取った。

自分の怒気にもビビらず、涼しい顔――笑顔で受け流していた。

その笑顔を見たとき思わず蘭豹は体の奥から何かが届み上げてきた――恐怖だ。

底知れない悪――巨悪を前にしたそんな感覚だった。



「これ見てみ。アイツの撃つた的や」

「これは!!」

「分かるか? アイツは10発全て急所に撃ちこんだ。頭・喉・心臓に一切狂いなく正確に。おまけに最後の2発は同じ場所——最初に撃ち抜いた頭と心臓に、同じように撃ちこんだ」。しかも、拳銃の扱いも手馴れとった素人やない」

蘭豹の渡してきた的を見て、無精髭の教官は驚愕した。

それには8つの弾痕があつた。

しかし、頭・心臓の部分にはそれぞれ2回づつ撃ち込んだ跡がある。

まったく同じ場所に撃ち込む——針に糸を通すような繊細な技術がいるにも関わらず、彼女はそれを平然とやってみせたのだ。

「急所を正確に撃てるならその逆、急所を外して撃つこともできる。インパクトでも与えたかったんか——アイツはワザとそうせんかった」

「人格破綻者でしょうか? 何か過去のトラウマでこうなつたとか?」

「それを知るために今調べさせとる。そろそろの筈……」

「遅くなつてごめんなさい」

蘭豹が腕時計で時間を確認していると、1人の女性がやってきた。

レディーススーツを着たキャリアアウーマン風の知的な感じのセミロングの女性だ。

「おう金田、なんか分かったか?」

「彼女の受験申込み用紙のサインから筆跡学である程度は...」

筆跡学——手書き文字の分析、個々の心理的特性を推測することを目的とする手法。

この女性——金田 真名部教諭は探偵科の教諭の1人で筆跡学を教えている。

「筆跡の心理分析の結果、筆が上目遣いで非常に高い知性を持っています。文字の下の部分を誇張して書くのは高い創造性を持つているが几帳面。それと筆を傾け全体的に筆圧の強いのは激しく自己中心的..... 他人にまったく共感できず、モラル意識に至っては破綻しています」

「蘭豹先生、今すぐにも連れ出すべきでは? 下手すれば他の受験生が危険です」

「私も同感です。モラルが破綻している——知能高く冷酷なまでに論理的に行動するでしょう」

「危険かどうかは試験を見て決める」

「彼女には私が付いてもよろしいですか?」

「勝手にせえや」

無骨なコンクリートの建物

室内は廃墟ビルであるのか、ドラム缶やら壊れた机やらゴミが散乱している。

しかも日当たりが悪く部屋の隅は、局地的に陽が沈んだように暗い。

試験官もいなければ問題用紙もない。

これは一体どういう事ですか？

私、探偵科を受けに来たのですが……

これは探偵科の実技試験——犯行現場を想定した試験でも始めるつもりでしょうか？

てつきり人探し、紛失物でも探すかと思っただんですが……さつきからずっと銃声や悲鳴が聞こえてきます。

なんか怖いですよ！

思わず笑みが浮かんできた。

これは「f e a r   g r i n n i n g (恐怖による笑顔)」と呼ばれるものでしょうか？

自分は危なく無いと、激しく否定しようとして笑いが出てくるというのは本当だったんですね！

まさか本で書かれたことを自分で体験することになるとは……

「取り敢えずどうしようかな」

渡された拳銃を弄りながら装備を確認してみる。

防弾チョッキー重く着ていると動きにくいので脱いだ。

流石に実弾を撃つてはこないでしょう。

その証拠に受験生ー私に配られているのはゴム弾だ。

私以外は全員実弾なんてことはないはず..... あつ、でも撃たれたら痛いよね。

サバイバルナイフー刃がしつかりと研いであるし、少し触っただけで切れそう  
だ..... 気をつけないと。

閃光弾ーこれはピンを抜けば名前の通り閃光が炸裂するのだろう。

「はあ、どうしてこうなったのだろう」

握り締めた拳銃を眺めながら、自分の口から思わずそんな言葉が出てくる。

教師志望のはずが今こうして武偵の試験を受けている。

やはり、天井のせいだ！全ては私をたぶらかした美味すぎる天井ー犯人はお前だ！

拳銃を持ったままの腕を振るう。

その拍子にパアンと発砲し、

「ぐわっ！」

柱の陰から飛び出してきた人に命中した。

えっ、いつの間に!?!?

心臓に命中した為かうつ伏せのまま動く気配がない。

ど、どうしよう!!

「あの大丈夫ですか？」

「ゆ………… 油断したぜ。まさか俺が飛び出してくるのを計算して撃つとはな」

頭を上げ、こちらに顔を向けてきた。

計算してません!!?ただふざけて………… その拍子に偶々発砲してしまっただけです!

しかし、撃たれても平然と喋れるとは流石武偵高校の試験を受けるだけあって、並みの鍛え方はしてないようですね。

これなら大丈夫そうかな……………

「あの私…………」

「いや、何も言うな。急所を撃つたのは偶々だろう?撃つタイミングは完璧だったけど、一般中出身だから仕方ねーよ」

気にかけてくれるのは嬉しいのですが、ただの偶然です。

「気をつけろよ。まだまだ試験は始まったばかり…………」

ガツクリと頭を地に伏せ、そのまま動かなくなった。

返事がないただの屍のようだ………… って、違うでしょう!ふざけている場合じゃない。

心臓——防弾チョッキに命中したからよかったものの頭に当たってたらどうなってたか………… 下手したら後遺症が残ってたかもしれない!

この歳で罪の十字架背負いたくないよ!

動かなくなった受験生を調べてみたが、呼吸は安定しているし、これなら大丈夫そう。なら早くここから離れよう。

さっきの銃声を聞きつけて誰かがやってくるかもしれないからね。

拳銃を撃てば銃声になる。場所を知らせるようなものだから。

いや、既にいたりして.....

「そこにいるのは分かっています。ずっと見ていたのでしょう?」

部屋に無造作に置かれているドラム缶の方を向きながら喋る。

なーんて、いる訳.....

「気づいていたか..... 一般中出身だと思つてたけど中々鋭いな」

ドラム缶の後ろから人が出てきた。

いたー!!? 本当にいましたよ。

しかもこの人待合室のベンチで一緒に座つてた遠山金次君じゃないですか。

気のせいか雰囲気が違うような? 双子いやそっくりさん?

「驚いたよ。ただ立ち尽くしていると思つたら、彼が柱から飛び出してくるのを待つて

いたとはね。まさに延頸挙踵 (えんけいいきよししょう) 」

難しいことわざを使ってカッコよく決めてるところ悪いのですが、

「ただの偶然ですよ」

ただ天井の憂き晴らしでふざけて撃ってしまっただけなんですよ！

「そして恐ろしくもある。君は彼を躊躇いなく撃った。それも急所を狙ってね……武偵を目指すなら、それは許されることではないよ」

「いえ、別に私は武偵を目指している訳ではありませんよ」

本当は学校の先生になりたかつたんですよ！

この試験を受けたのは偶然なんです。

「……何か他に目的があるのかな？」

「それは秘密です」

もし、ここで「この試験を受けたのは只の偶然です！武偵になるつもりはありません」とカミングアウトしたら、真剣に試験を受けている他の受験生に失礼じゃないですか！「女性の秘密を詮索するつもりはないけど、さっきの急所狙いは許せないね。しかし、手荒な真似はしたくない。降参してくれないか？そうすれば教務科もお咎めなしにしてくれるだろう」

何か拳銃を構えてきたー！凄く怖いよ！

ドラマでしか見たことのないシーンを自分で体験することになるなんて……

撃たれたくない。

自分は人を撃つておいて何を言つてやがるとは言わないで。

撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ..... 私は撃たれる覚悟はないよ！  
に、逃げないと..... でも何処へ？

遠山金次君の後ろー他の階に行く階段入り口がある。

薄暗く、人が隠れているかもしれない。

あそこまで走つて逃げようにも遠山金次君は私から目を離す様子はない。

どうにかして彼の意識を別の場所に向けないと.....

「さて、どうしましょうか..... 私も手荒な真似はしたくない」

遠山金次君の後ろに目を向け、指をこめかみに当て、トントンと叩きながら考える。

時間を稼ぐのだ！考えろ玲瓏館・M・零

伊達に「教授」と呼ばれていないーあだ名だけど.....

「私にばかり気を向けてないで自分の事にも気を遣つたらどうですか？」

「どういう意味だい？」

「君の後ろー階段入り口に人が隠れている。ずっと私たちのことを監視しているね。

恐らく教諭だろう」

データラメだけだね。

流石の遠山金次君も学校の先生が後ろにいますと思つたら、私の方に集中できないはず



!

「そろそろ出てきてくれませんか？隠れんぼは飽きました」

手をメガホンのようにして叫ぶ。

まあ、いる訳ないんですが……ただ金次君の注意を引くだけでいい！

逃げる時間を私にください。

「いつから気づいていた」

階段入り口の陰から人が出てきた。

またですか！しかも見るからに受験生——学生じゃないし！

無精髭生やして眼帯してるし、どこの傭兵ですか貴方は？

「最初からですよ。貴方は経験豊かな歴戦の猛者だ。しかし、経験豊かだからその油断がある。自分より下——経験不足な学生を下に見る傾向がある。その為、普段の実力を半分も出さない癖がある。貴方はこれで十分だと思っていたようですが、私は遊びで隠れんぼしていると思いましたよ」

顔を見て話さないの失礼だから見て話す。

我ながらよく嘘八百を言えるものです。

とにかく時間稼ぎをしないと！

「まさか受験会場に入った瞬間から分析したのか!?？会場にいた教諭・受験生全員

を..... 末恐ろしいな」

いや、傭兵さん？ デタラメですからね？ 受験会場の人間を全て分析って、そんな芸当ができる訳ないじゃないですか！

全員殺気立ってたし、怖くてビビってましたよ。

なんか話が大袈裟になっっているような.....

「俺のこともあの時点で分析済みだったのかい？」

遠山君が尋ねてきたよ。

ど、どうしよう..... わかりませんと言うのもカッコ悪いし、ええい！ どうにでもなれ。

「君は武偵中だけでなく、自己鍛錬も欠かしてはいないね。おそらく実家が道場か代々何らかの武術を継承しているね。その証拠に握手した時、手に拳銃だけでなく何か別の跡——手の甲の皮が剥げた跡があったよ。あれは拳銃だけを使っていて、自然にできるものではない」

どこの漫画の主人公設定だよ。

自分で言っておいて、凄く恥ずかしい。

何が代々武術を継承する家だよ、そんな人間が現実にいる訳が、

「驚いたぜ。まさか、たったそれだけの情報から俺のことを分析するなんてね」

……いたよ。目の前にいましたよ。

えつ、厨二病とかじゃないよね？……わかりましたよ。

この遠山金次君は厨二病を拗らせているのだ！

可哀想に……まだ治ってないんだね。

でも大丈夫ですよ。私は他人に言いふらしたりしませんから、だからこそ君のノリに付き合つてあげますよ。

「クフフフ、分析ではなく解答と呼んでください。だって、私これでも数学者——教授なんですから」

うわー、何か凄く恥ずかしいようなこれは黒歴史確定だわ。

「さて、話はここまでにしましょうか。遠山君、一時休戦しませんか？」

「——休戦？」

「はい、一緒に先生を倒しましょう。さつきも言った通り、先生は歴戦の猛者——経験豊富なのに対して、私たちは学生でまだまだ経験不足なところがある。1人で相手にするのはかなり手こずるでしょう。先生もよろしいですよね？まさか、学生と戦うのが怖い——なんて言わないですよね」

私は薄ら笑いを浮かべながら、傭兵先生（今決めたあだ名）の方を見る。

「構わないぞ。しかし、教務課も随分と舐められたものだ。手加減ができんぞ」

怖いよー!何か凄く睨み付けてきた!

ごめんなさい傭兵先生、薄ら笑いを浮かべたのはノリだったんです。  
だから許して!

「遠山君、先生もああ言ってますし、君も一時休戦を受け入れて戦ってくれますね?」  
こんな時はノリ仲間の遠山君に頼ろう。

私を守って騎士様!

「ああ、構わないぞ。俺も教務課とマジで戦うのは初めてだからな。まさか、君と一緒に戦う羽目になるとは思わなかったよ」

マジで王子様だわこの人。

まさか本当に騎士だったりして.....

「私もですよ。前線は君に譲りますよ。だって、その方が得意でしょう?」  
前に出て戦うなんて怖いし!

私、格闘技ーボクシングを習ってたけど、あの傭兵先生には通じなさそう。  
ここは遠山君に任せよう。

大丈夫、骨は拾ってあげますから。

「それも解答していたのか..... なら、後援は任せる!」

そう言って遠山君は傭兵先生に向かって走っていた。

間合いを詰め、先生の顔に蹴りを放つ。

しかし、躲された。

その後、激しい徒手空拳の応戦が始まった。

打つ、止める、躲す、受け流し――

やはり、武偵高校の先生は手強い。

このままでは下手したら鉄拳制裁が私にくる！それだけは避けないと

でも私にできることなんて…… せめて援護射撃でも！

私は傭兵先生に向けて発砲したつもりが、銃の反動で彼らの頭上――天井に向けて、

パァンと一発撃ってしまった。

「ガアッ!?まさか…… コイツを囿に…… して」

天井から石――コンクリートの塊が先生の頭に直撃した。

いくら廃ビルでも脆すぎるでしょう!!

銃弾一発で崩れるとか危なすぎる。

先生、大丈夫ですか!!

「これも君の解答――計算通りかい?まさか俺を囿にするとはね。さっきの射撃――コンクリートの塊を俺にもぶつけるつもりだったろう。教務課と俺を戦わせ、最後は2人とも始末する。一石二鳥を狙ったか…… 美人にしては悪どいな」

イヤイヤ!そんな悪い事をするつもりはまったくありませんから!??

ただ私だけボケーっと立っているのも悪いから援護射撃するつもりが反動で天井に当たっただけです。

それに遠山君しれつと美人だなんて...褒めても何もでませんよ。

よく恥ずかしいセリフがポンポン出ますね彼は.....やはり厨二病か。

「悪いーそれは私からすれば褒め言葉ですよ。勝つために利用できるモノを利用するのは悪いことでしょうか?だったらごめんなさい。私、一般中出身なもので」

「そうだったね。利用できるモノを利用するのは悪いことではない。しかし、利用するものは選ばないとね」

何やら遠山君は構えを取り出した。

どの武術でも見たことのない構えだ。

まさかここまで.....厨二病が進行しているとは見ていて本当に可哀想になる。

「その構えを取ったということは、一時休戦は終わりと捉えていいのですね。本気でこの私と戦うつもりですか?か弱い一般中出身のこの私と」

「今までの行動からして、君は一般中出身にしては変だ。妙に戦い慣れしているー普通一般中出身の人間はこんな実技試験に放り込まれたら、隠れて縮こまるものなのに君は隠れもせず堂々と身を晒していたー防弾チョッキも着ずにね」

いや、ビビって動けなかっただけですよ！

防弾チョッキは重いし、動き難いから着なかつただけだよ。

「それと拳銃の扱いも手馴れている。狙いもタイミングも狂いなく正確に撃つてみせた。一般中の人間が銃の扱いを心得ているなんて考えられない」

拳銃に関してはネットや本、それと狩猟で知つた知識を元に扱つてみたんです。

「ただ狩猟の一環で銃の扱いを知つただけですよ。それに今のご時世拳銃が扱える一般の人間なんて珍しくありませんよ」

「人を撃てる一般人がいるかな？人を撃つことは誰にでもできる事じゃない。ましてや、一般中の人間がね」

ダメだ何を言つても納得してくれない。

私が呆れて遠山君を見つめっていると、ギリリリリーと喧しいベルの音が聞こえてきた。

「そこまでや！ガキども大人しくしてもらおうか？」

突然、蘭豹先生が階段から登つてきた。

後ろには見慣れない人たち——この先生たちかな？

数人ばかりの先生たちを引き連れて現れた。

気のせいかな全員ピリピリしているような……

「おい、玲瓏館。おまえ今、遠山に何をするつもりだった？」

蘭豹先生が初めて名前を呼んでくれたよ。

おもわず感激してしまった。

中学では「教授」と呼ばれていたからなんだか、名前で呼ぶのは新鮮だな。

「別に何もするつもりはありませんよ。今はね」

微笑みを浮かべて蘭豹先生、続けて遠山君を見る。

そう、今は何もするつもりはないけど、ここで会ったのも何かの縁——必ず遠山君の

厨二病を治してみせます！

彼がこれ以上黒歴史を刻みつける前にね。

「そうか。何かする前にお前のその腐った性根を叩き直したる——ここは甘くはないぞ。

高校入学までの一カ月弱。武偵付属中三年分の内容を叩きこんでやるから覚悟しなっ

！」

「楽しみにしています。それじゃ、遠山君またね」

そう言つて私はその場から立ち去つた。

後日、試験結果が発表され私は武偵ランクAの探偵科だった。

やつたー！ドンパチとは無縁の学科に入れた。



| | | |

## 玲瓏館 零

知力・戦闘力ともに高い能力あり

実力はSランクに認定ーしかし、精神面に問題ありの為、Aランクとする。  
尚、教務科一同この生徒の動向に注意されたし

特に強襲科・探偵科の教諭は細心の注意を払われたし  
監視も兼ねて、この生徒の専門科を探偵科とする。

## 始まる学校生活

入学式——学校の華やかなイベントに出席し、無事に私はこの東京武偵高校の一員となり、日が経った。

私の専門科は探偵科ランクはA

まだ一年生でわからない——高校からの編入だったので知らない事もあるが、『聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥』というように授業では躊躇なくわからない事は先生や同級生、先輩に聞くことにしている。

高校編入前の期間、蘭豹先生からのスパルタ教育は正直、死にそうだった……

あの先生、生徒に問答無用で銃を撃つてくるんだよ!!?それも象撃ち銃と呼ばれるM500! あんな物で人間撃つたら死にますよ。

瞬き信号とハンドサインがわからなくて質問したら「気合いでどうにかしろや!」とか言うのですよ。

無茶だ……まあ、同級生に尋ねたらわかったけど。

現在、私は武偵高校の女子寮にいる。

自宅から通うことも考えたが、せっかくなので寮生になった。

えっ、何故自宅から通えるのに寮生になったかって？

どうせ学ぶなら近くー身近で24時間、武偵の環境下で学びたかったからさ！

父さんは反対しなかった、いや反対する前に家から姿を消した。

自宅には置き手紙があり、そこには『お父さん海外で仕事することになりました♪学校生活頑張つてね♡』と書かれていた。

おまけに今後の生活費が振り込まれている通帳と判子を残して……

帰ってきたら武偵高校にした理由を聞く絶対に！

「えーっと、拳銃よし。制服乱れなしー」

鏡を見ながら制服に着替え身だしなみを整える。

この制服は防弾性で大概の拳銃から身を守ってくれる。

防弾と銘打っているものの、TNKワイヤーと呼ばれる特殊繊維を編み込んで作られているから銃弾はもちろん、刃物からも守ってくれる優れもの。

最近の科学って本当に凄い。

この学校では帯刀・帯銃が校則で決められている。

私がこの学校で最初に衝撃を受けたことだーどおりで入学試験で学校を訪れた際、道行く生徒が銃を平然とぶら下げていたわけだ。

帯銃する私の銃はウェブリー・リボルバーにしている。

イギリス帝国時代に作られた1887年代の回転式拳銃で、それも初期モデルのウエブリー Mk I。

古い拳銃と思われがちだが、不思議と手に馴染む。

既に製造されていない回転式拳銃——何かロマンがありますね！

この銃は私が武偵高校に入学すると知った母さんがわざわざ海外から送ってくれたものだから、大事に使わないとね。

「おっと、これも忘れないようにしないと……！」

私は玄関に立てかけておいたそれを手取る。

握りの部分に〈M〉と金色の刻印の入った黒いステッキだ。

これも母さんが拳銃と一緒に送ってきたもので、曾祖父の形見だそうだ。

しかもこれ、仕込み杖で刀剣になっている——一度抜いてみたが、真つ黒な刀剣だ。

ひいおじいさん……きつとこれを持ってイギリスを歩いていて、ジェイムズ・モリ

アーティと勘違いされたんだろうな……なんて事はないか！

おっと、早く学校に出かけないと！

玄関を開けて外に出ると、

「あ、玲瓏館さんおはようございます」

「白雪さん、おはようございます」

艶のある黒髪ロングの美少女がいた。

この人は星伽 白雪さん私と同じ高校からの編入生とあって親しくさせてもらっている。

超能力捜査研究科、通称SSRと呼ばれる専門科目に属している。

超能力・超心理学による犯罪捜査研究を行っている学科で、武偵高校でも秘密主義が徹底されている専門科で、関係者以外で詳細を知る者は少ない。

実家が青森で神社の巫女さんをやっているそうなの。

確かに巫女服が似合う大和撫子だね。

「金次君と一緒に登校するつもりだね」

「ふえ!?ど、ど、どうしてわかったの!?」

顔を真っ赤にして動揺した。

いや、この前も一緒に登校してたじゃん。

おまけに動揺したら一発でわかるよ。

ちよつと、からかつてあげよう。

「白雪さんは几帳面で真面目な性格をしている。実家が神社とあって生活態度も規則正しい。そんな人がこの時間帯——登校時間ギリギリに起きて登校するわけがない。何らかの理由があるとみて考えていい。しかも、この時間帯は金次君が登校する時間帯と

被っている。白雪さんは金次君と幼馴染。かなり親しい関係だったね」

一旦、話しを区切り白雪さんの方を見つめる。

「うん、そうだよ」

首をコック、コックと縦に動かしようなく。

「白雪さんは金次君に好意を持っているね」

「こ、こ、こ、こ、好意?!? いや、私とキンちゃんとは幼馴染であって、それで恋び……いや、まだまだ早い……!」

また顔を真っ赤にして、今度は蒸気が出てくるような感じだ。

本当にこの人わかりやすいな……

だってこの前、一緒に登校した時ずっと金次君のことを見つめてたからさ、すぐにかかったよーあつ、白雪さん金次君のことが好きなんだなと。

「落ち着こう白雪さん。ほら、深呼吸、深呼吸」

「う、うん。ヒツ、ヒツ、フーツ……ヒツ、ヒツ、フー……」

「あの……白雪さん? その深呼吸は一体?」

「この前、衛生学部の子に教えてもらったの。女性が苦しいとき、この呼吸をすると楽になるんだって。玲瓏館さんもやってみたら」

衛生学部の間よ白雪さんになんてことを教えるんだ……!

この呼吸法は子供を産む……いや、やめておこう。

「とりあえず人前ではやらないほうがいいよ」

「どうして?」

「知らぬが仏という言葉もあるから。きつと白雪さんが知るにはまだ早い」

首をコテンと横に傾ける白雪さんに一応、警告はしておいた。

今、知ったらショックで倒れて病院に行くことになりそう。

「さて、話が逸れたけど戻すね。白雪さんが登校時間ギリギリに出てきたのは金次君を迎えに行くため。そして一緒に登校する……どうかな違う?」

「大正解だよ玲瓏館さん!名探偵みたい……」

名探偵じゃなくても白雪さんの態度を見れば、100人中100人が私と同じように答えるだろう。

でも何だろう?白雪さんから名探偵と呼ばれて気のせいか……いい気分じゃない。

「あの……玲瓏館さん?どうしたの?なんだか顔が怖いよ」

「あつ、ゴメンゴメン。気にしないで」

そのまま歩くこと数分……バス停に到着した。

「あ、キンちゃん。おはよう!」

「おはよう金次君」

「ああ、おはよう。白雪、零」

私たちの挨拶に怠そうに答えたのは、ちよつと根暗そうな優男——遠山 金次。専門科目は強襲科でランクはSだ。

私が編入試験でまあ色々とお世話になりました。

編入試験後も会う機会があつただけど、試験の時と比べて性格が違うような気がするんだよね。

試験だから気を張つてたのかな？それとも厨二病は卒業できたのかな。

「まあ、そんな挨拶してる。人から嫌われるよ？」

「うるせえ、お前は俺の母ちゃんか？！」

金次君つて、なんだか面白いだよね。

これはギャグの才能あり！

「はい私は君のお母さんですよ。ママって呼んでもいいよ？」

「…… ツ…… !何朝からふざけてんだよ。誰が呼ぶか」

「玲瓏館さんがキンちゃんのお母さん…… 私のお義母さんに……」

「よう！キンジ」

「おはようキンジ君」

私が金次君をいじっていると、バス停の向こう——金次君の後ろから2人の男子が歩



いてきた。

ガサツな感じのでも優しさが滲み出ている男子は武藤 剛気。

専門科目は車輛科でランクはA。

乗り物と名のつくモノならなんでも乗りこなすことが出来る凄い人だ。

2人目のイケメンかつ礼儀正しく真面目な性格の常識人。ぼい男子は不知火 亮。

専門科目は金次君と同じ強襲科でランクはA。

私と同じ一般中出身でよく気が合う。

「おはよう白雪さん零さん」

「おはようございませす不知火君」

「おはよう不知火君。今日もイケメンだね」

「ははは、褒め言葉と受け取っておくよ零さん」

真つ白い歯を覗かせて笑ってみせたーこれならモテるわけだわ。

「おはようございませす白雪さん！」

「おはようございませす武藤君」

武藤君が白雪さんに挨拶した。

さて、この態度からわかる人はわかるかもしれないけど、武藤君は白雪さんに好意を持っている。

しかし、悲しきかな……白雪さんは金次君一筋だ。

まあ、頑張れ武藤君グッドラック。

「よう零もおはよう」

「おはよう武藤君。今日も専門授業でぶっ飛ばしすぎないようにね」

武藤君はスピード狂だ。

前に彼が運転する車に乗せてもらったのだが、降りた後で吐きそうになった。

「車は飛ばしてナンボだろう？それよりも零。一般科目の数学のここ教えてくれよくわからん！」

「うん？どれどれ……あー、ここね。難しいよね」

武藤君はカバンから数学の教科書を広げて私に見せてきた。

失礼かもしれないが、武藤君・金次君を始めとした武偵中出身者は一般科目の平均値が低い。

授業も遅れているような気がしてならない。

この数学も私のいた中学では終わっているモノだ。

「武藤君は車が好きだよね」

「当たり前だぜ！車輛科に車が嫌いな奴はいねえ！」

「だからさ、この問題を車のスピードと見立ててね……こうしたらわかるかな」

私はペンを取り出して、教科書にサラサラと武藤君にわかりやすいように書き足していく。

「おお、なんかわかるぞ！そうか車と思えば……… ありがとうよ零！」

「どういたしまして。専門授業も大事だけど、一般科目も疎かにしたらダメだよ」

「それは難しいぜ」

「ははは、頑張れ頑張れ」

困ったように頭を抱える武藤君を見て、思わず笑ってしまった。

「ほら、皆バスが来たよ」

不知火君が指差す向こうからバスがやって来た。

私たち5人はバスに乗り込み、学校に向かう。

今日もまた新しい一日が始まる。

武偵高校の専門授業は新鮮でワクワクする。

中学では味わえなかった感覚だ。

今日はどんな事が学べるかな………

## 食堂

バスに乗って揺られること10分ほどで学校に到着し、私たち5人は校門をくぐつた。

「零さんおはよう！」

「ハーイ、玲瓏館」

「おはようございます零さん」

「グッドモーニング、皆！」

校内に入つて早々、挨拶のマシガン連射だ。

私だけでなく、他の人にも挨拶はしないとダメだよ？

「入学して1週間で人気者だね零さん」

「はは、そんな大袈裟だよ不知火君」

「卑下すんなよ零。皆お前のこと頼りにしてるんだぜ？なんたつて一般科目の勉強をイヤな顔せず全部教えてくれるんだからよ。俺もそれで助かつてるぜ。キンジもこの前、マンツーマンで勉強教えてもらったろう？」

「そうだけだよ。勉強くらいで皆大袈裟だろ？零もそう言ってるし」

「なんだよキンジ？まさか一般中出身の零に勉強教えてもらって恥ずかしいのか？」

「ちげえよ!? バカじゃねえのか」

「気をつけるよキンジそれと零」

うん？武藤君が私と金次君の間に入って、声を落として喋り出した。

「偶々、お前らのマンツーマンの勉強風景を見ていた他の連中がキンジに嫉妬しているぜ」

嫉妬？なんで金次君に嫉妬する必要があるのだろうか？

ただ私は勉強を教えていただけなのに……そりゃあ、放課後に遅くまでそれこそ日が暮れるまで、勉強に付き合っただけだよ。

「はあ？なんで俺が嫉妬されなきゃならねえんだよ!?？」

「お前鈍いなく。まあ、それについては後々話そうぜ」

「皆、早くしないと遅刻しちゃうよ？」

白雪さんが早く行くように促す。

武藤君の言葉は気になるが今は遅刻しないようにしないと！

教室に到着した私が席に着くと、

「おっはよー！れいれい！」

「おはようりんりん」

小柄で童顔、金髪のフリフリ改造制服を着たロリっ子が私の前にやって来た。

この人は峰 理子。

専門科目は私と同じ探偵科。一見するとコギャルなイメージがあるが成績は良く、ラ  
ンクはA。

同じ探偵科で授業もよく一緒になる。

実は私が入学して間もない頃、わからない事があつたらよく質問していたのはこの理  
子さんなのだ。

あつ、「りんりん」というのは彼女がそう呼んでほしいそうだ。

彼女は探偵科、クラスメイトの間では人気者で熱心なファンクラブもあるくらいだ。

おまけに話題も豊富で話していて飽きない。

彼女は会った人にあだ名を付けるのが好きなんだよね。

私が彼女に付けられたあだ名は「れいれい」

パンダみたいだ、とは言わないように。

「校門で見たよ。凄い人気じゃん！これは私のアイドルの座を奪いに来たか？」

「ははは、そんな事しないよりりん。私はアイドルなんて呼ばれる人間じゃないよ」

「えー、知らないの？れいれいは男子と女子にかなり人気あるんだよ。意外と鈍感だね

「」

「うーん、私そのあたりはよく理解できないからね……ごめんね鈍感で」

額に手を当て思わず困ったように苦笑いした。

しかし、人気……ねえ。いつの間にそんなものが？

「そんな鈍感なれいれいに私、りこりんがわかりやすく教えてあげましょう！これ見て

よ」

そう言つてりこりんは何処からかA-4サイズの紙を取り出し、私の机に置いて見せてきた。

そこには、クラスメイトの女子の名前、その右隣に棒グラフが書かれていた。

私が「これは？」と尋ねると、

「これはりこりん特製の人気表だよ。ほら、見てよここ。れいれいは人気ナンバー2だ

よ」

自分の名前の欄を見てみると、なるほど、確かに人気があるようだ。

しかし、こうもハッキリと見せられると何だか恥ずかしい……

よく見てみると白雪さんの名前もあつたよ。ナンバー3だ。

あつ、チャッカリとりこりんの名前もある。こっちはナンバー1だ。

「ねえ、りこりん。男子の人気表もあるの？」

「ヒヒヒ、気になりますか？もちろん用意してませお客さん」

某ゾンビゲームの武器商人風の声で喋ってきた。

凄っ!? 超そっくりじゃん！

私を驚かした後、ちゃんと見せてくれた。これは女子から男子への人気表のようだ。あれ？なぜ私は男子の人気表が気になったんだろう？

疑問に思いながらも見てみると、不知火君はダントツのナンバー1だ。

そうだ、金次君は？

名前の欄を下りるように見ていくと、あつたよ。最下位だ。

金次君…… 人気無さ過ぎだよ。人付き合いは大事にしないと……

ちなみに武藤君は下から2番目だった。まあ、金次君よりはマシかな。

「ありがとうりこりん。凄くわかりやすかったよ」

「ヒヒヒ、サンキュー。じゃあ、お代を払ってもらいましょうか」

お代？なるほどね。それが目的で見せてきたな。

噂大好きりこりんからして望みの報酬は私の情報かな？

「お主も悪よな〜」

「ふふふ、お代官様には敵いませんよ。それじゃ、れいれいのこと教えて！」

まあ、質問には答えないとね。



「好きな事は？」

「数学と読書かな。あつ、今ハマっている本は『小惑星の力学』かな」

私はカバンから本を取り出し、りこりんに見せた。

ジェイムズ・モリアーティ著作の『小惑星の力学』。

彼は犯罪者だったけど、これを読んでいると彼は学者として本当に優秀な人だったんだなと思えてくるよ。

「うわー、難しそうな本を読んでるね。じゃあさ、特技は？」

「うーん、ボクシングかな。母さんから仕込まれたからある程度は自身はあるよ。母さんが言うには元拳闘士だった曾祖父から代々受け継がれているらしいよ」

右手は顎、左手は目の高さを持ってきて、ジャブを放つ。

あつ、代々武術を受け継がれている人、私だった。

入試の時、金次君に悪い事したな……

「カッコイイ！女ボクサーだ。そういえば、れいれいのママは何しているの？」

「母さんは海外企業の相談役をしているよ。偶に日本に帰ってくるかな」

「れいれいは見たところハーフだね。発言からしてママは日本人？」

「違うよ。母さんがイギリス人で父さんが日本人。日本に帰って来るといふのは、母さんはこっちに移住してきた人だから」

母さんの実家はイギリスにあるそうだけど、私は生まれて一度も行つた事がない。

母方の祖父母にも会つたこともないし、話をした事もない。

母さんが言うには父さんとの結婚が原因で喧嘩別れしたそうなの。

ちなみに結婚の経緯については、父さんが母さんに一目惚れした。

その際、隙あれば母さんに、アタック、を仕掛けて、落とされたそうなの。

「じゃあさ、苦手な物は？」

「鹿撃ち帽」

「えっ？鹿撃ち帽って、あの頭に被るヤツだよ？どうして苦手なの？」

「うーん、なんか見ていると嫌な気分になるから……かな？」

自分でもよくわからないのだが、鹿撃ち帽を見ていると何だか嫌な気分になるんだよね。

母さんも同じで「見ていると反吐が出る」と言うくらい嫌ってる。

もしかして、私と母さんの前世は鹿だったりして……

「成る程ね。そうだ、れいれい。ずっと喋っていて喉乾いたでしょう？よかつたらこれ飲んで」

そう言つてりこりんは私にイチゴ牛乳を渡してきた。

りこりんはこれが好きなんだよね。

「ありがとうね。じゃあ、ありがたく」

私はゴク、ゴクと遠慮なく飲んだ。

うん、甘い。

「じゃあ、最後にれいれいのスリーサイズを教えて」

「ブホオ………!?」

突然のりこりんのトンデモない質問に私は飲んでいたイチゴ牛乳を吹いてしまった。

ちよつと………りこりん絶対にワザとでしょう!??これを狙って飲ませたな!

「何でそんな事を知りたいの?やましい思いとかじゃないよね?もしかしてりこりんは

百合………」

「違いまーす。ただ知りたいだけでーす」

最後の辺りを伸ばして喋るのは何で?

しかし、スリーサイズときたか………

「まあ、良いけど。じゃあ、耳を貸して」

「もちろん♪」

りこりんの耳の側に口を持ってきて、ゴニョゴニョと周りには聞こえないように喋る。

はい、その男子諸君。聞き耳を立てない。

そうしていると、キーンコーンコーンとチャイムが鳴った。

朝のホームルームの時間だ。

「ほら、りこりん席に戻らないと先生に怒られるよ?」

「ラツジャー!」

両手で敬礼した後、そのまま両手を広げ「キーン」と叫びながら、席に戻っていった。見ていると本当に小学生みたいだ。

「はーい、全員席について。出席を取りますよ」

出席簿を持った先生が入ってきた。

何はともあれ新しい1日がスタートだ。

1〜4限までの一般科目が終わり、昼食の時間だ。

私は学校の食堂に移動する。

武偵高校の食堂は広く、メニューも豊富で海外の料理もあるくらいだ。

お金かけているね。

食堂にはすでに大勢の同級生、先輩の姿があった。

私は券売機でかけ蕎麦を選んだ。

「おばちゃん、かけ蕎麦ひとつお願いします!」

「はいよ。ちよつと待つてね」

かけ蕎麦の券を調理師のおばさんに渡す。

白の調理服に頭にミットを被った50代のおばさんだ。

一見するとただのおばさんだが、実は生徒の間では「武偵高最強のおばちゃん」と呼ばれているらしい。

「はい、かけ蕎麦ひとつ。お残しは許しませんよ」

「ありがとうございます」

お盆に乗ったかけ蕎麦を持って移動する。

さて、どこで食べようかな？

周りを見渡すが、どこも満席のようだ。

「あ、見つけた」

ちょうど隅っこの2人がけの席がひとつ空いている。

席には男子が1人座っているだけだ。

同席させてもらおう。

「前いいで……あつ、金次君」

「げえ、零」

座っていたのは金次君だった。

後ろ姿だったから、誰だかわからなかったよ。

「女子の顔を見て嫌そうな顔をしたらダメですよ。軽蔑されるよ」

「大きなお世話だ」

「ねえ、金次君。同席させてもらってもいいかな？他に席が空いてなくてさ」

「……… 勝手に座れ」

彼の了解を得て、私は前に座る。

その際、周りから「零さんが………！」「キンジぶつ殺す………」「なぜ、あんな根暗と」「神は死んだ………！」など聞こえてきた。

あの金次君の後ろの男子の皆さん？何故、箸を握り締めながら血の涙が出てくるような目つきでこつちを見るの？

……… まあ、いいか！

「金次君かけ蕎麦食べてる。奇遇だね私もかけ蕎麦なんだよね。好きなの？」

「まあ、嫌いじゃないかな。お前こそ好きなのか？蕎麦」

「まあ、嫌いじゃないかな」

ちよつと意地悪に鸚鵡返しした後、蕎麦を汁に漬けてズル、ズル、ズルと音を立てて食べた。

「なあ、零はハーフだよな。その……… 蕎麦を食べるときの音とか嫌じゃないのか？外

国人は嫌いと聞くぞ」

「うーん、私は嫌いじゃないよ。半分日本人の血と小さい頃から食べていたおかげかな」

「そうか」

「そうだよ」

そのままお互い無言のまま黙々と蕎麦を食べる。ー気のせいかな、ズル、ズルという音が被る。

一通り食べ終えた金次君が箸を置き、

「あのさ零。言うのが遅くなっただけ……この前勉強見てくれてありがとな。正直助かった」

金次君がお礼を言ってきた。

顔を少し赤くし、頬をポリポリと掻きながら恥ずかしそうに。

「いいんだよ。困っていたらお互い様。それに金次君はなんだか教え甲斐があるんだよね」

「なんだか教師みたいな言い方だなーそれにしても零は本当に教え方が上手いよな。スラスラと覚えられた」

「金次君に教えた勉強法は『記憶術』と呼ばれるものだよ。聞いたことない？」

「いいや」

「記憶術というのはね……」

私は金次君に説明した。

記憶術は、大きく2つの系統に分類できる。一つは、純粹に記憶のコツのようなものによつて記憶の効率を上げる方法、もう一つは、人間の能力を向上させることによつて記憶力を向上させる方法である。

金次君に教えたのは前者だ。

彼は決して頭は悪くはない。寧ろ良い部類に入る。

ただ勉強を覚えるコツがわからないだけだ。

「へー、そんなモノがあるんだな。知らなかったよ」

「ちなみに武藤君も同じで勉強法を使つてるよ。下手したら彼に追い越されるよ」金次君。今なら3割引きでもつと効率よく教えてあげるよ?」

「悪徳セールスマンかお前は!?!」

「冗談だよ。金次君は真に受け過ぎ」

「お前、悪どいな」

「私は悪どいよ」

「冗談だけどね。」

「ねえ金次君。話は変わるけど……金次君は何か悩みを抱えているでしょう?」



「………… どうしてそう思うんだよ」

目が右下を向いている。

「身体的なことで悩みがあるようだね」

私がそう言うのと眉毛をつり上げ「………… なっ!?」と、わかりやすいくらい驚いた。やっぱ悩みを抱えているね。

「それと金次君はあまり自分からは話さない人だよ。過去に人間関係——異性のことで傷ついたことがあるでしょう」

「そんなことはない」

頻繁にまばたきしている。嘘だね。

動揺を隠しているようだけど、テーブルの上の箸を手で弄っているのが証拠だよ。

「あと、黒のハンカチを持ってたね。それは拒否・断念・不安の象徴。しかし、今の現状を変えようと努力はしてはいるが、思うようにいかない。その証拠に赤い色を嫌っていたね」

この前、探偵科で習った『嫌いな色があらわす性格傾向』を金次君に試したら「赤が嫌い」と言っていた。

この色を嫌っている人は自分の努力が報われていない感、挫折感・無力感を抱えているからね。

「金次君は家族にお兄さんかお姉さんがいるでしょう？多分、キョウダイに対してコンプレックスを抱えているね。お兄さんかお姉さんの職業は武偵・警察または検事……いや、これはお父さんかな」

額にダラダラと汗を一杯かいてきたね。どうやらビンゴのようだ。

一人っ子の場合、親の愛を一身に受けて育つ。

そうなった場合は、親和欲求が強く、ストレス耐性が低い傾向がある。

しかし、金次君のストレス耐性は強いので、キョウダイがいると見ていい。

家族構成は上にお兄さんかお姉さんいや両方いるかな。

お父さんは検事の司法機関に所属している。

「身内に対してコンプレックスを抱え、過去に異性で心に傷を負った。そして身体的な悩みを抱えている。最後に述べたモノは他人——特に女性には言えない悩みだね。どうかな違う？」

「もうやめてくれ。降参だ……」

金次君はゲツソリとした顔をしていた。

ちよつとやり過ぎたかな……

「ねえ金次君。私たちはこれから3年間同じ学校の屋根の下で学ぶ者同士……だから悩みがあれば遠慮なく言っていんだよ」

「お前に何がわかるんだよ？」

「わからないよ。金次君が打ち明けてくれるまではさ」

私を強い視線で上目づかいに見てきた。

視線が強い場合は、相手に反感や怒りを感じている。

しかし、逆にそれは自信がなく相手に頼りたいと思っっている証拠でもある。

「金次君。さつき私は黒のハンカチを持つているのは、拒否・断念・不安の象徴と言ったよね。でもね、あれはそれを変えようと努力するタイプの象徴でもあるんだよ。きつと金次君は陰で努力を積んでいる。お兄さん・お姉さんに少しでも届くようーコンプレックスを克服する努力をね」

金次君は黙って私の話を聞いている。

「努力」という言葉を聞いた瞬間、彼の目に輝きが戻った。

「この前、雨が降ったとき傘を忘れていたね。ああ、気が抜けているというわけではないよ。あれは、いろいろなものに興味をもち、創造的で新しい発想を生み出すのが得意な人によく現れることだよ」

その証拠に金次君は強襲科で様々な技を編み出していると聞く。

同級生の中には彼の技を手本にしている人も少なくない。

「私にはわかるよ。金次君は常に一歩先に行こうと努力を積んでいる凄い人。他人がど

んなに根暗呼ばわりしようと私が否定してあげる」

「最後の根暗は余計だ。でも……ありがとうよ。そんな風に誰かに……気にかけてもらったのは初めてだ」

ちよつと拗ねているけど、そこは金次君らしいね。

「今はダメでも気が向いたらいつでも相談に乗るよ。私、私立相談役だから」

「ははは、なんだよそれ。私立探偵の間違いだろう」

「あー、そうだね。ははは」

「まただ。私立探偵と呼ばれて気分が良くない。」

「どうした零？」

「な、なんでもないよ金次君。あ、もうこんな時間だ。もうすぐ昼休みが終わっちゃうね。さつきも言ったけど何でも相談してね」

最後にそう言つて席を立つ。

次は専門科目だから頑張らないとね。

あれ？そう言えば私、なんで金次君のことあんなに気にかけてたんだろう？

それにこの胸のドキドキは一体？

キンジ視点

俺は席を立て去っていくその女子の後ろ姿を目で追った。

玲瓏館 零ー変わった女子だ。

あんなに俺の胸の内に踏み込んだ女は初めてだ。

最初、勝手に踏みこんできて不快だったが、「金次君は努力をしている」と言われて気分が変わった。

自分の努力を認めてくれたーそんな感じだった。

「それにしても相談……か」

相談に乗ってくれるのは正直、嬉しい。

家族ーこれについては相談してもいいかもしれないが、

「俺の体質についてはな」

遠山家の男に代々遺伝するあの困った体質ーヒステリア・サヴァン・シンドローム  
通称ヒステリアモード。

俺は性的興奮するとそれになる。

そして……女子に対してフシギな心理状態になってしまう。これには欠点がある。  
る。

1つー女子を、何がなんでも守りたくなってしまうこと。

2つーその際、女子に対してキザな言動を取ってしまうことだ。

「さすがにこれは相談できねーよ」

頭を抱えていると、

「おい、キンジ〜」

「命の貯蔵は十分か遠山」

「死ぬがいい」

俺の後ろに殺気立った男達がいた。

どいつもこいつも強襲科で見たことのある顔だ。

「な、なんだよ!? お前ら!」

「うるせえ! 黙って死ぬえ!」

「玲瓏館様と一緒に食事とか羨ましいぞ!」

「なんでこんな根暗がモテるんだよ!」

「おまけに下の名前で呼び合うとは! クソつたれ!」

突然、襲いかかってきた。

なぜこうなる!??

俺は慌てて食堂から逃げ出した。

## 探偵科の授業

食堂で金次君と別れた私は探偵科の授業を受けるために、武偵高内に複数ある体育館――第3体育館に向かった。

本日はここで事件を想定した模擬推理・調査を行う。

不謹慎と思われるかもしれないが、想定とはいえ殺人事件の現場に行くのを私はワクワクしていた。

思わず笑みが出てくるが、そこはモラル――道德心で抑える。

込み上げてくる気持ちを抑えながら、目的の体育館に到着し、中に入ると既に同級生――探偵科の生徒たちは到着していた。

あー、私がビリかな？

「あ、零。遅かったな」

「遅いよ玲瓏館さん」

「珍しいな。いつもなら一番に来るのに」

「ごめんなさい。食堂のごはんが美味しくてつい食べ過ぎちゃった」

同級生からの問いに、頭をコツツン軽く叩いて、舌を出して答えた。

「ははは、見かけに寄らず食いしん坊だね」

「スタイルいいんだから気をつけないと太るよ?」

「大食いクイーン…… いいね」

場が和んだ。やっぱ笑いは大事だよな。

そんなことを考えていると、私の後ろから誰かが近づいて来る。

この足音は、

「りこりん」

「うわ!? なんでわかったの? れいれい」

「リズムだよ」

振り向くとそこには赤いランドセルを背負ったりこりんがいた。

私を脅かそうとしたのだろうか、その手にはクラッカーを持って。

「りこりんは歩く時、リズムよくーケン、ケン、パ! のリズムで歩いて来るでしょう? あと、カバンが揺れて上下する際に聞こえてくる服とカバンの擦れる音も聞こえた。音の具合からして革の鞆ーランドセル。この学校でランドセルを背負っている人はりこりんくらいだからすぐにわかったよ」

「すごい。後ろも見ずに音だけで、しかも僅かな時間で答えを見つけるなんて」

「おまけにみんな私の後ろに視線を向けてたしね」



「ぶー、それはずる〜い。あと、みんな空気読んでよ」

頭に指を当てて、ツノに見立てて「ガオー」と怒るりこりんを見てみんな苦笑いしている。

ちよつと、ズルしちゃったかな。

「ハイハイ、みんなこれから授業を始めますよ」

ワイワイやっている先生がやって来た。

ショートカットとメガネが特徴の20代の女性だ。

名前は毛利 サラ先生だ。

私たち探偵科を担当している教諭の1人だ。

「それじゃ、みんなわたしの後に付いてきてください」

そのまま先生に誘導され、体育館内に設けられた現場――約180cm×約180cmほどの部屋に到着した。

部屋は黒焦げている。どうやら、火災現場のようだ。

様々な物が散乱――椅子、机、窓ガラスと酷い状態だ。

部屋には死体のつもりだろうか、成人男性ほどの人形が仰向けで倒れている――腹には折れた椅子の足が刺さっている。

「課題を配りますので、回してください」

そう言つて先生はプリントを配つた。

内容を確認してみると本日の課題は、殺人か事故かを当てるようだ。

プリントには被害者のプロフィールや死因なども書かれていた。

「司法解剖の結果、被害者の体内からは睡眠薬などの薬物は検出されなかつたとあるね」  
「死因は火災の際に出た煙を吸い込んだことによる一酸化炭素中毒か」

「えつ、腹部の刺し傷が死因じゃないの？」

みんな様々な論議を交えているね。

うん、いいね。ワクワクしてくる。

「れいれいはわかつたの？何だか嬉しそうだね？」

おっと、りこりんに見られていたか。危ない危ない。不謹慎な女と思われていなければいいけど……

「うーん、まだわからないかな」

「えー、絶対に嘘でしょう」

参つたな。りこりんが信じてくれないよ。

うーん、わからない時は質問してみよう！

「先生、事件当日は被害者は自宅に1人でいたとあります。課題には事故か殺人の二択しかありませんが、自殺という線はないのですか？」

「……いいえ、自殺の線はありません」

うむ、自殺ではないか……腹に自ら椅子の足を突き刺し、切腹したと思ったが……さすがに現代でそんな事をーいや、様々な可能性を考慮しよう。

「被害者は煙を吸い込んで死んだようですね」

「そうだけ零。司法解剖が証拠になつてる」

そうなんだよね。煙を吸い込めば誰でも一酸化炭素中毒で死ぬ。

まあ、ミュータントなら死なないだろうけど……現実にはないかな。

「じゃあ、何故被害者は腹部に椅子の足が突き刺さっているのだろうね？」

「そりゃあ、火事でパニックになつてその拍子に刺さつて……」

「事件は真夜中の2時頃に起きたとある。その時間帯なら大概の人間は寝ているね。おまけに被害者は1人だ。火災が起きても誰も起こしてはくれないだろうね」

真夜中だったら私なら熟睡しているよ。火事とか発生したらまず逃げられない。

なんか寝る事を考えると……やばい！なんかウトウトしてきた。

お昼食べ過ぎたか?!

寝る事を考えないようにしないと。

「寝てはいない。寝る暇はなかった」

「えっ? どういうこと零さん?」

思わず口に出しちゃったよ!? 恥ずかしい。

どうしよう…… 眠くならないーお呪いのつもりだったのに。

なんとか誤魔化さないと。

眠いせいか頭がうまく回らないよ!

「被害者は寝られなかっただろうね。腹部に刺さったコレのせいで」

わたしは被害者人形に近づき、腹部に刺さった椅子の足を指差す。

動き回れ私! 動けば眠くはならないはず!

「でもそれは火災が起きた際に刺さったものじゃあ?」

「火災が起きる前に刺さったものだとしたら」

「そうか! 被害者は寝ているところを何者かー犯人に襲われて、腹部を刺されたんだ」

「でも何でわざわざそんな事をしたのさ? 殺すつもりなら火を付ければいいじゃん。

そっちの方が手っ取り早いと思うけど」

「だからさ、犯人は事故死に見せたかったんだよ! 考えてみろよ。腹部にこんな刺

さってたら逃げられねえよ。そこに火をつければ」

「逃げられない被害者は煙を吸い込んで死ぬ!」

「でも何で椅子の足を使って刺したのだろうか?」

眠気が覚めてきたぞ! これが現場か!?

「なんだか私、ワクワクしてきた！」

「事故死に見せかける為だよ。火災でパニックになってその際に刺さったように見せかけるためにね。こんなものが刺さっていたら嫌でも意識が残るだろうー焼死死ぬまでね。その際に肺に煙を吸い込んで」

「司法解剖されても一酸化炭素中毒と判断されるでしょう？れいれい」

私のセリフを上手く持っていったなくりこりん。この怪盗め！

「私たち一同、この事件を殺人と判断します。どうですか先生？違いますか？」

最後に先生に確認を取る。どうだ？

「正解です。ここに居る人達は満点でしょう」

やったー！正解したよ。何だか複雑な方程式を解いた気分だ。

安心した瞬間、また眠気が襲ってきた。

やばい！

「それじゃ私はこれで」

「あつ、待つてよ。れいれい！」

その場を後にするが、りこりんが付いて来る。

お願い私を寝かせて！本当に眠いの！

毛利 サラ視点

玲瓏館・M・零。

教務科一同から要注意人物とされている生徒。

監視も兼ねてこの探偵科に属させた。

同僚の金田の筆跡分析によれば、モラル意識は破綻しており、冷酷なまでに論理的に行動するとある。

教務科を警戒してか、入学後はなりを収めている。

筆跡も入学前と違い、モラル意識があると思わせる筆跡だ。

生徒からの評判はよく、面倒見がいい、勉強を見せてくれる、困ったことがあったら何でも相談に乗ってくれるなど人気がある。

しかし、私にはわかる。あれは演技だ。

おそらく相談に乗るのは相手を徹底的に分析するための手段だろう。

その証拠に彼女は探偵科では心理学を必ず勉強している。

相手とマンツーマンになれる相談は彼女にとっては最高の環境だろう。

「司法解剖の結果、被害者の体内からは睡眠薬などの薬物は検出されなかったとあるね」  
「死因は火災の際に出た煙を吸い込んだことによる一酸化炭素中毒か」

「えっ、腹部の刺し傷が死因じゃないの？」

他の生徒は論議を交わしているのに対し、玲瓏館は黙つたまま現場を観察している。しかし、気のせいか？同級生の方をじつと見ているようにも見える。

まるでどんな推理をするのか、興味津々だ。

「れいれいはわかつたの？何だか嬉しそうだね？」

彼女の顔が歪んでいる——笑つてやがる!!？

模擬とはいえ事件現場で笑うなど狂つてやがる。

「うーん、まだわからないかな」

「えー、絶対に嘘でしょう」

峰 理子の問いに適当に答えた。

顔は落ち着いた表情に戻っているが、どこかワザとらしい……

「先生、事件当日は被害者は自宅に1人でいたとあります。課題には事故か殺人の二択しかありませんが、自殺という線はないのですか？」

「……いいえ、自殺の線はありません」

突然の質問に私は思わず、男口調で答えそうになったが堪える。

何故、自殺だと思う？

「被害者は煙を吸い込んで死んだようですね」

「そうだぜ零。司法解剖が証拠になってる」

男子生徒の方を見て確認をとる。

「じゃあ、何故被害者は腹部に椅子の足が突き刺さっているのだろうね？」

「そりゃあ、火事でパニックになってその拍子に刺さって……」

落ち着いた口調で話す。いつの間にか彼女は和の中心にいる。

その姿をはまるで生徒に授業を教えている教師のようだ。

「事件は真夜中の2時頃に起きたとある。その時間帯なら大概の人間は寝ているね。おまけに被害者は1人だ。火災が起きても誰も起こしてはくれないだろうね」

人形を見つめる――その目はどこか冷たい印象をうける。

まるで何でもないかのように。

「寝てはいない。寝る暇はなかった」

「えっ? どういうこと零さん?」

女子生徒の方を見る。その顔は「これくらいもわからないのか間抜け」と言っているようだ。

「被害者は寝られなかっただろうね。腹部に刺さったコレのせいだ」

彼女は人形に近づき、腹部に刺さった椅子の足を指差す。

ただ立って推理せず、現場を探るとは……行動力はあるようだな。



おそらく、自ら手を汚してでもそれが最大の解決策だと思えば躊躇いなく行動するだろう——それが殺人でも。

「でもそれは火災が起きた際に刺さったものじゃあ？」

「火災が起きる前に刺さったものだとしたら」

出来の悪い生徒にわかりやすく教えている。

「そうか！被害者は寝ているところを何者か——犯人に襲われて、腹部を刺されたんだ」  
「でも何でわざわざそんな事をしたのさ？殺すつもりなら火を付ければいいじゃん。そっちの方が手っ取り早いと思うけど」

「だからさ、犯人は事故死に見せたかったんだよ！考えてみろよ。腹部にこんな刺さってたら逃げられねえよ。そこに火をつければ」

「逃げられない被害者は煙を吸い込んで死ぬ！」

「でも何で椅子の足を使って刺したのだろうか？」

その言葉を待っていたとばかりに彼女の目つきが変わった。

あの目は…… 犯罪を楽しむ人間の目だ！

「事故死に見せかける為だよ。火災でパニックになってその際に刺さったように見せかけるためにね。こんなものが刺さっていたら嫌でも意識が残るだろう——焼け死ぬまね。その際に肺に煙を吸い込んで」

「司法解剖されても一酸化炭素中毒と判断されるでしょう？ れいれい」

最後のセリフを峰 理子に取られたことが可笑しいのか、面白いのか、彼女は最後に笑ってみせた。

「私たち一同、この事件を殺人と判断します。どうですか先生？ 違いますか？」

最後に私に微笑みかけて確認を取ってきた。

だが、私にはそれが「もっと私を楽しませろ」と挑発しているように見えた。「正解です。ここにいる人達は満点でしょう」

私の言葉を聞いた彼女は「つまらない」とばかりに背を向け、

「それじゃ私はこれで」

「あつ、待ってよ。れいれい！」

その場を後にした。

やはり彼女は危険だ。

あれは事件を解くことを楽しんでいるのではない、事件が起こる——事件そのものを楽しんでいる！

監視を強化したほうがいいな…… 諜報科にも掛け合ってみるか。

## 相談という名の講習

ね、眠ーい!!?

何なんですか、この眠気は!?!?

私、玲瓏館・M・零は急激な睡魔に襲われていた。

専門授業が終わった瞬間、一気に眠気がやってきたのだ。

「は、早く寮に帰らないと……!」

頭を抱えながら、フラフラと危ない足取りで寮を目指す。

今、私の願い事は翼ではなく、寝床がほしい!

「れいれいー!待ってよ〜!」

後ろから聞き慣れた声が一りこりんだ!?!?

「追いついた!ニヒヒヒ、逃がさないぞ〜」

私の前に回り込むと、通さんぞとばかりに両手を広げて道に立ちはだかる。

お願いりこりん!そこを通して!

「あー、りこりん?悪いんだけどそこを通してお願い!」

「どうしても通りたければ私の屍を越えていけ!」

ある意味、懐かしい名場面だけど今はそれどころじゃない!

「れいれい凄かったね。あつという間に事件を片付けちゃった。りこりん思わず尊敬しちゃった」

「ありがとう。でも、あれくらい誰でも少し考えれば解けるよ」

あつという間に…… あれは眠くて早く帰ってたかったからだよ。

「ねえ、れいれいはどんな相談にも乗ってくれるって、前に言ったよね?」

「うん、言ったね」

「じゃあさ、りこりんのお悩みも聞いてくれる?」

りこりんの悩み? 珍しいな…… いつも元氣一杯で明るいきりこりに悩みがあるなんて…… いや、りこりんも人の子だから悩みの一つくらいはあるか。

「勿論だよ。どんな相談にも乗るよ。だって私、私立相談役だからね」

「ぶぶ、そこは私立探偵の間違いでしょう?」

「まただ。何だろう? 私立探偵というワードを聞いた瞬間、この頭の奥から込み上げてくる不快な感情は一体?」

気のせいか眠気がなくなってきた…… 妙に頭が冴える。

「どうしたのれいれい? 気分でも悪いのかな?」

「ごめんごめん、何でもないよ。じゃあ、りこりんのお悩みを聞かせてくれるかな?」

「うん！実はりこりんのお友達がね……」

そう言っておりこりんは語り出した。

りこりんのお友達——ここではAさんでしょう。

Aさんはある家のお嬢様だった。

代々高名な一族で、初代は偉大な人だったそうだ。

ある日、両親が事故で亡くなり家は没落。使用人は散り散りになり、財産は盗まれてしまった。

I人だけ残されてしまったAさん。そんなAさんにある日、転機が訪れる。親戚を名乗る人物——Vが養子にならないか？と申し出てきたのだ。

他に行く当ても無かったAさんはその申し出を受けた。

しかし、それがAさんのさらなる不幸の始まりだった。

養子の話は嘘で、VはAさんを暗くて狭い檻に閉じ込めたのだ——監禁だ。

ろくに食べ物も与えず、衣服はボロ布を纏わせるだけ……最悪の一言に尽きるだろう。

しかし、Aさんは檻から逃げ出した——脱出したのだ。

これで助かった、もう悪夢は終わったと思われたが、そうでは無かった。

逃げ出したAさんの元にまたVが現れたのだ。

このままではまた監禁されると思ったAさんはVと戦ったが、敵わなかったー負けただのだ。

負けたAさんにVは「Aが初代を越えるまでに成長し、その成長を証明できればもう手出しはしない」と言ってきた。

その条件を呑んだAさんは自由になる為、今も必死に頑張っているそうな……

「なるほどね……りこりんはその友達を助けたいのかな」

「うん。でもどう助ければいいのかわからなくてさ」

「しかし、妙だね……」

「何か気になることでもあるの？ れいれい」

「いやね。何故、VはそこまでしてAさんにこだわるのかなと思ってさ」

そこが疑問なのだ。

りこりんから聞いただけが、何故、VはAさんにこだわる？ ある意味で異常だ。いや、監禁する時点で既に異常か……

「Vなりの考えでもあるんじゃないの」

「そう、そこだよ。その考えとは一体何か？ 監禁・誘拐する犯人には必ず動機がある」

私は様々な可能性を計算してみた。

動機として考えられるのは身代金ーしかし、Aさんの両親は亡くなり家は没落、お

金なんてないだろう。それはV自身も知っていたはず。

身代金を要求しようにもAさんには要求する身内がない。

異常な性癖の持ち主――まあ、これもありえる。ろくに食べ物も与えず、ボロ布を纏わせ監禁するくらいだから。

Aさんに何らかの弱みを知られていた――逃げ出したAさんをわざわざ追いかけてくるくらい……しかし、弱みを知られたら、捕まえた時点で口封じで殺すだろう。しかし、りこりんの発言からしてAさんはまだ生きている。殺せない理由がある？

Aさん自身が目的――Aさんが何らかの特異能力の持ち主。一般人にはない何かがある。特異体質・DNA・Aさんの一族にしかない何か。

「VはおそらくAさん自身が目的だったんじゃないかな？」

「……どうしてそう思うの？りこりん気になるな―」

りこりんがじつと、私を見つめる。

どんな事を言ってくるのか気になるのかな？やっぱり友達のことを気にかけているんだね。

「おそらくVは人間収集家じゃないかな。海外には殺した人間の体の一部を収集する猟奇殺人者もいると聞く。Vもそれと同じ仲間の類いだろうね。Aさんを自分のコレクションの一つにしたいから監禁したと考えられるね」

「でももっとさく、なんでりこりんのお友達をコレクションしようと思ったんだろう」

気のせいかりこりんの声には憎悪・怒気・不快な感情がこもっているようにも思える。

あー、お友達をモノみたいに言ったのが悪かったかな。

「りこりんから聞いた話によれば、Aさんの家は高名な一族。Vはそういつた人間を集めることに高い執着心がある。いや、コンプレックスの裏返しかもね」

「コンプレックス？」

「うん。大概の人間は自分より優れた人間を見れば劣等感を覚える。Vもそれだろう。優れた人間をそばー監禁し、自分はお前らより優れているぞ！と小さな虚栄心を満たしている臆病者。私の見立てではVは激しく自己中心的、過去の栄光に頼り向上心が無い……いや、あるが自分の力で成し遂げず他人任せ。それなりの権力が過去にあった人物だと思うよ」

「……本当に凄いなねいいいは……理子から聞いただけで答えを導くなんてさ……」

うん？りこりんの声が暗いような……？

「でも私が聞きたいのはVのことじゃなくて、お友達を助けるにはどうしたらいいのかだよ。これじゃ、推理だよれいいい」

「あ、そうだったね。ごめんね。考えるとき……」



いけない、相談がいつの間にか推理になってたよ。私の馬鹿！

考え過ぎると要らないことまで答えを導こうとするのは私の悪い癖だな……気を  
つけないと。

「それじゃ、早速。さつきも言ったけどVは根は臆病者。心の奥で激しい劣等感を抱えて  
いる。そこを突くんだよ」

「どうやるの？」

「相手のコースに油を撒いてやれ」

「えっ……？」

「いや、マシンに細工をするのもいい案だね」

「いやいや、れいれい？どういう意味なの？理子わかんないよ」

あー、例えが悪かったかな……なら、

「りこりんが友達を助けるーそれは一緒になってVと戦うという事。失礼かもしれ  
ないけど、真っ向から戦っても返り討ちにあうのが関の山だろうね」

「……うん」

りこりんが俯いているー今にも泣き出しそうな感じだ。

ちよつと厳しく言い過ぎかな……

「例えるならVはF1カー、りこりんとAさんは軽自動車。同じコースを走っても勝て

ない。じゃあ、勝つにはどうしたらいいか。狡猾になることだよ」

「狡猾……？」

「そう狡猾にね。お友達を助けるーそれは立派な善行、正義だ。正義の名の下であればどんな『卑怯』も許される。りこりんにはその才能があるよ。私が保証する」

これは私の母からの貰い言葉だが、不思議と私は気に入っている。

りこりんの助けになればいいのだけどな。

「なるほど…… ありがとうれいれい！すごい参考になったよ。またねー！」

「あ、りこりん」

りこりんはそのまま走って去っていった。

大丈夫かな…… 例えばの話で助けになればいいけど。

あつ、よくよく考えれば、教務科や同級生、先輩を頼るといふ案もあったじゃん!!?

何故私は狡猾になれと言ったのだろう……

うつ!!? また眠気が!!? ?

ダメだよここで寝ては風邪を引く…… 寝ては……

私はそのまま意識を失った。

## 部屋まで

「イタタタ…… アイツら、問答無用で殴ってきやがつて」

俺は強襲科の授業を終え、男子寮に帰ろうとしていた。

何故か今日は不幸だ。

食堂では同級生に襲われ、強襲科の授業ではヤケに俺と組手をしてくる奴が多かった。

組手するたびに「死ぬ死ぬ！キンジ！マジで死ぬ！」「地獄に堕ちろ！」「お前の命は今日ここで終わる」「この人でなしが！」と叫んでくる。おまけに女子まで……

あいつら今日は妙に殺気立ってたぞ。何故だ？

俺は疑問に思いながらも、第3体育館前を通りすぎた。

あとはこのまま校門を目指すだけだ。

「うん？誰だあれは……？」

体育館前——俺の進行方向に誰かが倒れている。武偵高校セーラー服を着た女子だ。

「おい、大丈夫？」

俺は駆け寄った。

「つて、零!!?」

倒れていたのは同級生の零だった。

目立った外傷はなく、呼吸は正常——しかし、目を覚ます様子はない。

「おい!!? 起きろ零! 零!」

俺は耳元で呼びかけるが、目を覚まさない。

どうしたんだよ一体? 何があつた!!?

「クソつたれ……!」

俺は零を抱えて、衛生学部に向かった。

衛生学部——

「疲労ね」

「疲労……?」

衛生学部に着いて零を抱えて飛び込んだ俺は零を診断した女子の先輩から椅子に座って、診断結果を聞いていた。

診断書を持った先輩は座っていた丸椅子から立ち上がって、

「おそらく、脳を過度に酷使したことによる疲労かしら。それで脳が休息を欲して、睡眠に入っている」

ベットの上で眠っている零を見下ろしながら言う。

脳の疲労——俺の兄さんは長時間ヒステリアモードになれるが、同時に脳に過大な負荷がかかる。その際、長時間の睡眠が必要になる。

今の零の状態は正にそれと同じだ。

まさか、零も兄さんと同じような力があるのか？

「まあ、それ以外に目立った異常はないし、ゆつくり寝かせておけば大丈夫でしょう。目が覚めたら送ってあげなさい」

「なんで俺が零を……？」

俺が疑問に思うと、先輩はやれやれと首を横に振り、最後にハアとため息を吐く。何故だ？

「君……よく鈍感って呼ばれるでしょう？」

確かに武藤からはよく言われるが、強襲科の特訓は積んでいるし、遅れはとっていない自覚はあるぞ。

「普通は男子ならこういうったシチュエーションを喜ぶんだけどなー。お姉さん残念だなー」

なんだよ突然。その間伸びした言い方は？

「あつ、お姉さんこれから教務科にいかないよ！じゃあ君、彼女のこと宜しくね」

「ちよっ!? 待っ……!」

「大丈夫。彼女が目を覚ましたら動かしてもいいから。あと鍵はかけなくていいからね」

そのまま先輩は「バイ」と言って部屋から出て行った。  
待ってくれよ……おい。

同級生の女子と2人きりとか勘弁してくれ……

「それにしても零って、こういう顔して寝るんだな……」

俺は未だベットで眠っている零を見る。

肩まで伸ばした黒髪、きめ細かい白い肌、細く整った眉毛、綺麗な小顔。

そんな女子が静かに寝息を立てている。

普段は知的でクールな印象を受けるが、寝顔を見ていると可愛げのある女の子だ。

まじまじと見ていると、血流が! ヤバイ! ここでヒスるなよ俺!

ヒスったら何するかわからん。

「うくん、そこにいるのは誰……かな?」

俺がヒスらないよう奮闘していると零が目を覚ました。

よ、よかったぜ。危うくヒスるところだった……

「あ、金次君だ」

「迷子センターの子供かお前は」

起きて早々、俺を指差して名前を言う。まるで子供みたいだ。

「ここは？ああ、衛生科目の教室だね。もしかして、金次君がここまで？」

「ああ、そうだよ。お前、第3体育館の側で倒れていたんだぞ」

「ごめんね。心配させて。何だか急に眠くなつてね。ご飯食べ過ぎたせいかな？」

「食べ過ぎで倒れるのはわかるが、眠くなるのは聞いたことがない」

俺が呆れていると「はは、そうだね」と頭の後ろに手を当て笑い出した。

起きて早々、元気だなコイツ。

「ここまで運ばせてごめんね。それじゃ……きやー！」

「おい……」

ベツトから降りようとして倒れた。

俺は慌てて体を支える。よかった、どこも打ってないな。

「大丈夫か？零」

「ははは、ごめんね金次君。まだうまく身体が動かないや」

困った、困ったなと苦笑いする零を見て、

「ほらよ」

「ちよっ！金次君……？」

俺は背中を貸してやる。

かなり軽いな。これなら余裕だぜ。

「おぶつてくれるなんて…… さすがに悪いよ金次君」

「いいから黙つてろ。少し揺れるが我慢しろよ」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

握り手に〈M〉の刻印が彫られている黒いステッキを持って、俺の背に体を預けた。気を失っていた時もこれだけは握っていたな……

女でステッキを持っているのはコイツくらいだろう。不思議と似合っている。そのまま零をおぶつたまま衛生科目の教室を後にする。

尚、零をおぶつて学校を出て行くキンジの姿を、たまたま見ていた、強襲科の生徒達が後日、「うん、キンジ殺そう」と決意し、連合を組むことになるのをこの時のキンジはまだ知らない。

零をおぶつてお互い黙って歩くこと数十分——女子寮に到着した。

うつり？外にいるのに女の匂いがあるぞ！？

「ほらよ到着したぞ零」



俺は匂いに負けないよう気を引き締め、零に声をかける。

しかし、歩くことに集中していて気づかなかつたがコイツもいい匂いだな……月  
光花のような香りだ。

「うん。ありがとうね金次君。ここからは自分であるい……」

「無理すんな。このまま部屋まで送ってやるよ」

「さすがに悪いよ金次君。だって女子寮だよ？下手したら女子のみんなから袋叩きに……」

「されねえよ。それにベットから降りようとして倒れたのは誰だよ？そんな女を歩かせられるか馬鹿」

「ば、馬鹿……？ははは、初めて言われたよ。金次君が記念すべき第1号だね」

「俺は仮面ライダーじゃねえよ。ほら、何階だよお前の部屋？」

「3階ですよ。ナイト様」

ナイト様って、侍ならわかるがナイトはないぞ。

女子寮に入ると、俺は零に言われた3階を目指して階段を上がる。

一段一段慌てずゆっくりと上がる。

踏み外して倒れたら大変だからな。

「凄いね金次君。人をおぶったまま階段を上がるなんてパワフルだね」

「そりゃ、伊達に強襲科で鍛えられてないからな」

強襲科の訓練は厳しいものが殆どだが、まあ慣れればどうって事はない。しかし、今日の訓練――組手はやけに厳しかったぞ。何故だ？

そんなくだらないことを考えていると、3階に到着した。

「部屋はどこだよ」

「あの一番奥の部屋だよ」

零の指差す方を見る――俺から見て右手側の奥の部屋だ。

「ほら、降ろすぞ」

「ゆっくり降ろしてね。また倒れるかも」

た・お・れ・る・な！

部屋の前に到着し、ゆっくりと零を降ろす。

「今日は本当にありがとうね金次君。おかげで助かったよ」

「まあ、人助けは家の家訓にあるからな」

「はは、まるで正義の味方だね」

「そんなご大層なものじゃねえよ俺は」

「そうだ！折角だし部屋に上がっていきなよ金次君」

はあ？何でだよ！

「何でだよ、って思ったでしょう？金次君は本当にわかりやすいな」

「またお得意の心理学か。そうやって相手の心を読・む・な」

本当にこの女は油断も隙もない。

相手の心の底を暴いてくる。入学試験から只者ではないと思つたが……

「ごめんごめん。つい相手の事を観察してしまうの。探偵科でついでにしまった癖……

かな？」

いらん癖をつけやがってコイツめ……

俺が呆れていると零はパァン！と手を叩き、

「まあ、私の事はさておき、上がっていきなよ。ここまで運んで貰っておきながら何もお

礼をせずに帰すのも後味が悪いし」

俺の背を押しながら「さあ上がって、上がって」と急かす。

わかつたから押すなよ。しかし、急に元気になったよなコイツ。

衛生学部のベッドから降りて倒れたのに……

「散らかっているけど、そこは我慢してね」

「あ、ああ……」

部屋に上がると香水の匂いはしない。

香水はつけないのか？

部屋の中は本で一杯だ。

床にも何冊もの本が積み重なっている。

本棚にもビッシリと本が並べてある。

部屋の中央に置いてあるテーブルにも本があるぞ。いや、本だけじゃないパソコンとチェス盤もある。

「本が好きなんだな」

俺が尋ねると零はリビングからキッチンに移動していた。いつの間にか？

「うん好きだよ。本はいいよー。色々ためになるし。金次君も読んでご覧よ。もしかしたら勉強で役立つものが発見できるかもよ」

キッチンで何かしながら後ろ向きで答えた。

まあ、気が向いたら読んでみるのもいいかもな。

しかし、零はどんな本を読むんだ？

俺は周りにある本を見渡して見る。

『心理学大全集』『世界の犯罪者一覧』『犯罪における初動捜査』『これであなたも今日から怪盗！変装のコツ』『世界のトリック』などなどある。

中には物騒なタイトルもあるぞ？『猟奇的な殺人とは』『なぜ彼女は彼を殺したのか』『世界の拷問集』『完全犯罪』

まあ、どんな本を読むかは本人の自由だよな……

俺は他に何かないか見て回る。

「これは新聞か？」

部屋の隅ー窓から離れた場所に大量の新聞が棚に収めてある。

これは新聞の切り抜きだな。

手に取って見てみると、最近の新聞記事もあれば……こっちは昭和の新聞の切り抜きだ。

窓から離れて置いてあるのは陽の光に当たって変色を防ぐためか？

「こっちは化粧台か。まあ、零も女だからな」

探偵科に属している為か、変装の道具がある。

鏡付きの化粧台の上にはカツラー金髪、茶髪など種類が豊富だ。

眼鏡もある。うん？これは付け髭か。何故こんな物が？男装でもするのか？

「金次君お待たせ」

零が戻ってきたーその手に飲み物に乗せたお盆を持って。

「はい、金次君。コーヒーだよ」

「いただくぜ」

本やチェス盤の置かれたテーブルにコーヒーを置いた。

俺は遠慮なく飲んだ。

うん、丁度いい熱さだぜ。温くもなく熱すぎない。

おまけに俺の好きなブラックだ。

「金次君の好きなブラックだよ」

「ちよつと待て。俺はお前にブラックが好きだと言った覚えがないぞ」

「だって金次君男性的なところが強く出ている人だからね。そういった人はコーヒー派でブラックが好きなのが多いからね」

最後にティーカップに口をつけて終える——お前は紅茶派か。

ぐっ！ムカつくが様になっているぜ。

「あと先導役に最適かな。将来リーダーになって人を率いていく才能があるね」

「……俺はそんなガラじゃねえよ」

リーダーって、俺にはそんなもの務まらない。

「君は将来必ずリーダーになれるよ。金次君にはカリスマ性がある」

「お前、武偵よりも占い師になつたらどうだ？」

占い師の零——黒い衣装に身を包み、水晶玉に手を当てる光景を想像した。

ぶっ、ダメだ。笑つたら……でも、凄く似合っているような……

「それじゃ金次君の要望通りに占い師になろうかな私」

「真に受けるなよ」

「嘘だよ」

また人を揶揄いやがって…… 本当にコイツは掴み所がない。

「ねえ金次君。今度の日曜日に一緒に新国立劇場にオペラを観に行かない？気分転換に  
さ」

突然、零が話を変えてきた。

日曜日か…… まあ、大丈夫だろう。

「俺はオペラなんてわからないぞ。それにあれ、英語で喋るからまったく内容が理解で  
きん」

「そこは大丈夫。最近の劇場には液晶モニターがあつてね。それに日本語が字幕として  
映し出されるんだよ。だから金次君でもわかるよ」

それなら俺でも内容がわかりそうだな。

最近の劇場はそんな物まで完備しているとは知らなかったぜ。

「演目は何だよ」

「ドン・ジョヴァンニだよ。知らない？」

「知らないな」

そもそもオペラなんて初めて観るから知らないぞ。何だよドン・ジョヴァンニって？

「どんな内容なんだ？」

「それは行ってからののお楽しみだよ。ここで内容を言ったらつまらないでしょう？」

まあ、確かに。

マジックでもネタとタネがわかっていたら、つまらないからな。

暫くして、零の部屋でお茶をご馳走になった俺は部屋を後にした。



## オペラ座①

日曜日——東京駅

時刻は午前9時30分まだ肌寒いが何とか我慢できる。

私と金次君はここで10時に待ち合わせをしている。

ただ待ち合うのもつまらないので、ちよつと意地悪しようと思う。

おそらく、金次君は約束の時間よりも15分前に来るだろう。

なので私はそれよりも30分早くここいるのだ。

彼は律儀な男子だからね。女子を待たせたと知ったらどうなるか。

「さて金次君は……」

「どんな顔して来るか? だろう」

突然背後から声をかけられた。

思わず振り返ると、

「いつからそこにいたのさ? 金次君」

「お前のことだから、俺より早く来て『女子を待たせるなんて酷いぞ』とか言うつもりだったんだろう? お見通しだ」

金次君がいた。

いつの間に背後に!? おまけに私の考えを読むとは! 成長したね!

「よくぞ見破ったね金田一君」

「それを言うなら明智君だろうが」

探偵科で今、流行っているギャグなんだけどなー。

金次君は笑ってくれない。

彼の服装は上は黒のシャツ、下は黒のジーンズを履いている。何だか服のセンスが父さんに似ているね。

ちなみに私の服装は白のシャツの上にフード付きの紫ジャンパー、下にはブルーのミニスカートを履いて、肩に鞆をかけている。

うん? 金次君が私から急に視線を逸らしたぞ?

「どうしたの金次君?」

私が尋ねると、彼は「な、何でもねえよ!」と少し顔を赤くした。

あつ、なるほどね!

「私を見て興奮でもしたのかな?」

「馬鹿なこと言うな! 誰がするか……!」

そう言つて金次君はそっぽを向いて、ズカズカと走っていた。

ははは、どこへ行くというのかね？

ちなみにそつちは新国立劇場とは反対——秋葉原方面だぞ。

駅改札口を通り、新宿線の電車に乗り込んだ。

まずは新宿駅まで行って、そこから乗り換えないと。

幸い席は空いており、ボックス席に私達は座った。

ただ駅まで到着するのも退屈なので、辺りを観察してみる。

これは探偵科で最初に教わったことで、「如何なる時も気になったものは観察してみろ」との事だ。

「なあ、零。さつきから何を見ているんだ」

「全てだよ。この電車、乗客を観察しているんだよ。あつ、もちろん金次君のこともね。私と会うまでの間、何があつたか当ててみようか？」

「勘弁してくれ……」

しよぼーんと、落ち込んだね。本当に金次君は喜怒哀楽がはつきりしているよ。

「まあまあ、そんなに落ち込みなさるな若者よ」

「お前はどこの老師だ」

うん！いいツコミだね。100点、パーフェクトだ。

そんな金次君にはご褒美をあげないと、

「はい、金次君。喋っていて喉が渴いているでしょう？唇が乾燥しているのが証拠だよ」  
私は鞆から缶コーヒーを出して、金次君に手渡す。

これは私がコンビニで購入しておいた物だ。

「なあ、零。これいくらだ？」

「100円だよ」

どうしてそんな事を聞くのかな？

疑問に思っていると、金次君はポケットから財布を取り出して、

「ほら、払うよ。コーヒー代」

「えっ、いいよ別に」

100円玉を私に渡してきた。

どうして？何故渡すの？わからない……

「女に奢ってもらうワケにはいかない。払うから貰ってくれ」

そういうことか……これは不意を突かれた。

本当に彼は律儀な人だな。でもそこがいい。

「男子が女子に奢ってもらうのはダメって、決まりはないよ」

「何だか格好がつかないんだよ。女に奢ってもらったと家に知られたら俺が殴られる」

おー、鉄拳制裁ありの家なんだね。  
だったら、ここは遠慮なく……

「じゃあ、これは頂くとするよ」

私は100円玉を貰った。

こういつた心遣いはいいね。将来は人望——特に女性から多く集めそうだね。

「そういえば、まだ金次君の家の事を詳しく聞いたことがなかったね。よかつたら聞かせてくれない?」

「お得意の心理学で当ててみるよ」

「おや? 何だか挑戦的だね」

よし、なら当ててあげよう。

「ただ当てるだけじゃ面白くないからゲームをしよう」

私が提案すると、金次君は「ゲーム?」と言って、

「そう。もし私が一つでも当て間違えたら、一つだけ金次君の質問に何でも答えてあげるよ」

「いいぜ。後で後悔するなよ?」

提案に乗ってきた。

チャレンジャーだね。何だか今の彼を見ているとワクワクしてくる。

「じゃあ早速、金次君はおそらく、父方の祖父母の家でお世話になっている。お家は代々、警察か検事・弁護士などの役職に付く家柄」

律儀で義理堅い——これは周りの環境、家庭が彼をそういつた人間とした将来だ。

お父さんとお爺ちゃんから厳しく育ててもらったかな。

「そして最後に上にお姉さんがいる」

金次君は甘えん坊な所があるからね。これは小さい頃、異性のキョウダイに可愛がってもらった証拠。

「残念だったな零。最後のはハズレだ」

何ですと?!? おかしいな……私の見立てでは、確かにキョウダイ——お姉さんがいる筈なんだけどな。

年はそこまで離れてはいない——離れていても3〜4歳ほど。

「じゃあ、お兄さん?」

「あー、そうだな」

うーん、何か引つかかるな。

金次君の態度から嘘は言っていないが、微妙な反応をしている。

もしかして……

「お兄さんって、コッチ系?」

私が頬に手を当てると、

「頼む！兄さんの前でやらないでくれ！色々な意味でヘコむ。特に兄さんが」

どういう意味だろうか？

まあ、いつか彼にお兄さんを紹介してもらおう。その時にハッキリするだろう。

その後、東京駅から新宿線を使い、新宿駅から京王新線に乗り換え、初台駅に到着した。

駅を出れば新国立劇場はすぐ目の前だ。

## オペラ座②

新国立劇場——東京渋谷区にある劇場で、ここで行われる舞台芸術はオペラ、バレエ、現代歌舞伎、演劇だ。

面積は68,879㎡、中には小劇場、中劇場、オペラ劇場の計3つの劇場が備えられおり、オペラ劇場だけで座席数1814もある。

劇場だけでなく、レストラン、託児室、情報センター、リハーサル室、研修所なども備えられている。

初台駅を降りた私たちを新国立劇場が迎えてくれた。

全体的にシンプルな外見だ。

「さあ、入ろうか」

私が促すと金次君は「ああ」と短く答えた。

私たちは入場し、陽の光が天井から差し込む一階ロビーを抜け、私と金次君がまず向かったのはオペラ劇場ではなく、3階——レストランだ。

オペラ開始は13時ジャスト。現在の時刻は11時30分、まだ早いのでここイタリ



アンレストランで昼食を摂る算段だ。

入店してみると、まず目につくのは壁に飾られた大量の皿だ。

一枚一枚にサインが書かれている。有名な俳優や女優、芸能人の名前だ。

店内は全体的に明るく、誰か演奏でもするのだろうか？年季の入ったピアノが置いてある。

窓から差し込む光に照らされ、床はピカピカーワックスがかけてある。ゴミやシミ一つもない。

私と金次君は一番隅っここの席ー窓から明るい日差しが差し込む席に座ることにした。彼は隅っこが好きだからね。

「何にしようか？」

備え付けられているメニュー表を手に取り、開いてみる。

さすがイタリアンレストランド。メインはイタリア料理だよね。

「金次君は何にする？」

「俺はイタリア料理なんて初めてだから、イマイチわからん。零と同じものでいいよ」

金次君は初めてかー。ならば………これだ！

「すみません。この『オードブルバリエ+パスタ+デザート』を二つお願いします」

私は側を歩いていたウェイターに注文した。

イタリアなら pasta だね。おまけにデザート付き。

ここのお店のデザートは日によって変わるから何がくるかな？

「なあ零。電車での約束を覚えているか？何でも質問に答えるやつ」

料理を待っている和金次君が話しかけてきた。

忘れていなかったんだね。

「勿論。何が知りたいのかな？はっ！もしかして、私のスリーサイズとか？」

「ちげえよ！誰も知りだからねよ。そんなモン」

私が手で体を覆うようにして身を引くと、金次君は全否定した。

そ、そんなモン……聞かれなくてホッとしたような、残念なような……

「俺が知りたいのは……なんで零は武偵になろうと思ったんだ？一般中の出身だから気になっていてさ」

なるほど……でも、それを言うなら不知火君も同じだよ。

そういうえば、入学前、彼は私と違って蘭豹先生のスパルタ教育を涼しい顔で受け流していたっけ。同じ一般中学出身者とは思えなかったな。

「そうかー。実はね金次君。私は最初、武偵になろうとは思っていなかったんだよ。本当は学校の先生になりたかったんだ」

「じゃあ、なんであんな物騒な学校に入学してきたんだよ？武偵と教師は共通点がない

だろう?」

「それはね……」

私は金次君に入学までの経緯を語った。

語っている間に料理がきた。

せつかくなので料理をつまみながら、ゆっくり語ろう。時間はたくさんある。

「なんだよそれ……つまり、父親の判断で勝手に届け出されて入学して来たのかよ……」

「ははは……そういう事だね。うん」

話を聞き終わると呆れたような顔で私を眺める。

まあ、そうなるよね。

「じゃあ、将来は転校するのか?」

「うーん、実はね……転校については迷っているんだ」

最初は転校しようと思っていたが、今は違う。

私は正直言つて今の学校——東京武偵高校が嫌いではない。

一般の中学・高校では習わない——射撃・犯罪学・捜査など刺激の多い場所だ。

勿論、将来は学校の先生になりたいという思いはなくなっていない。

でも、今の武偵としての生活は気に入っている。

そのおかげか…… 将来、武偵にもなりたいと思えてきた。

「珍しいなお前が悩むなんて…… 初めて見たよ」

「私だって人の子。悩む事だってあるよ。悩まない人間なんていないさ」

悩む——それは思考する事ではなく、生きる事だと私は思う。

悩んだ果てに答えを見つけることは素晴らしい。まさに生きてみると実感できる。

答えを見つける方法は、自分だけじゃなく他人と一緒にあって見つかるのもいいだろう。

おつと?!? いつの間にか食べ終わっていたね。いけない思考し過ぎて、食事を意識していなかった。

でも今、お店から出てもオペラまで時間はあるし……

「それはそうと…… 金次君は何で武偵になろうと思ったの? 聞いてみたいな」

「俺が武偵になろうと思ったのは兄さんの影響かな……」

そう言って、金次君は語り出した。

お兄さんは現役の武偵——武偵庁に勤める特命武偵という。

彼から語られるお兄さんの人柄はまさに理想の武偵——一度は子供が憧れる存在——正義の味方だ。

おにぎり一つで依頼を受けたこともあれば、大きな病院を建てたこともあるという。

語っているときの金次君の目は人一倍輝いている。

これを見るだけで自分の兄に尊敬・憧れているのが、ひとめでわかるぞ。

でも同時に危うくなる…… まだまだ半人前いやゼロ人前の分際で、こんなことを

言うのは偉そうだが…… 私たち武偵は命の危険と常に隣り合わせ。

危険が日常と言つても過言ではない。

お兄さんの実力はまだハッキリとしていないが、武偵庁に勤められるだけあつて、その実力は折り紙つきだろう。

しかし、実力あり＝死なないわけではない。

もしも、兄が死んだら彼はどうなるのかな…… 将来の目標を失い絶望でもするの

か？ はたまた、兄を奪つた存在・社会に復讐でもするのか……

金次君からお兄さんを奪つたら、ドウナルノカーその答えを解きたい、知りたいな……

「……い、おい零？ 聞いているか？ なんかぼーっとしているぞ」

金次君の声で我に帰る。

ちよつと待つてよ…… 今、私は何を考えていたんだ？

金次君からお兄さんを奪つてみたいだと？ 馬鹿なことを考えるな。

不謹慎にも程があるよ……

「何でもないよ！ちよつとお腹が一杯になつて、ぼーつとしていただけだからさ！ははは」

「変な奴だな……」

「金次君に言われたくないよ！もう」

やめやめ！この話題は暫く考えないようにしよう。

気分転換に早くデザートを食べようと皿に目を移すと、皿の上には何にもなかった。

もう食べてた……あつ、金次君。よかつたらそのシヨコラケーキを分けてくれな  
いかい？

ーレストランを後にした私たちはそのままオペラ劇場に向かった。

公演まであと20分。すでに入場は開始されている。

他の人に続いて私たちも劇場に入った。

劇場はとにかく広い。

客席の壁・天井は厚いオーク材で仕上げられ、歌手の肉声が理想的に響く設計となつており、まるで劇場そのものが楽器のような空間だ。

全1814席ー11〜4階の4階層に客席が配置されている。

1階868、2階354、3階292、4階300といった具合だ。

客席正面には主舞台があり、オーケストラフル編成120人が演奏できるだけの広さ。

オペラの字幕装置は舞台左右に設置され、縦書きで表示される。

「えーつと？ 私たちの席は…… あっ！ ここだ」

私と金次君は席に座る。彼は私の左側の席だ。

席は1階の前席——舞台のすぐ前方だ。

ここからなら主役がよく見えるね。

「もうすぐ始まるね」

「何だか見ていると小さな子供みたいだな。零はそんなにオペラが好きなのか？」

「うん。好きだよ」

母さんが日本に帰ってきた時はよく連れられていたしね。

父さんはオペラではなく、演劇が好きだったな。特に悲劇が大好きだった。

アナウンス用のスピーカーから、ビーと音が鳴り出した。どうやら始まるようだ。

舞台の幕が上がる。『ドン・ジョヴァンニ』の開幕だ。

## オペラ座③

「面白かったね。金次君」

「あー、そうだな。でもラストで主人公が地獄に堕ちるのはな……」

オペラを観終え、私達はオペラ劇場を出る。

時刻は16時ジャスト。うん、予定通りに終わったね。

「そうだ！これから一階のシアターショップで買い物しない？家族にお土産でもさ」

「シアターショップって言ったら音楽関係の物くらいしかないだろう？うちの家族で……いや、兄さんなら好きそうだな」

この国立劇場はシアターショップも完備されている。しかも、1階——私達がいるオペラ劇場と同じ階層にある。

音楽雑貨・小物・インテリア、ここでしか買えないオリジナルグッズも販売されている。

オペラを見終えた後に買い物をするにはもってこいだ。

「シアターショップと言っても音楽関係だけじゃなく、他にも色々なものがあるよ。もしかしたら、金次君の気にいる物が見つかるかもよ」



「なら見てみるか」

おや？興味津々だね。感心、感心。

金次君にしては珍しい。

「うん。何ごとも好奇心さ」

「好奇心は猫を殺すと言うぞ」

「ここではそんな事はないよ」

物騒だな。武偵歴が長くなるとそんな考えしかできなくなるのかな？

一階を歩くこと数分――

青がトレードマークのシアターショップに到着した。

自動ドアが開き、中に入ってみれば既に10人ほど先客がいた。

3組ほどカップルが混ざっているね。うん！見ていて微笑ましいね。

壁にあるショーケースの中には様々な商品――アクセサリー、カップ、置物が並んでいる。

「どれにしようかな……迷うね」

「あー、すまんが零。俺は向こうの商品を見てるよ」

金次君が離れていく。何故だろう？

ちなみに君が向かつてるのは恋人向けの商品コーナーだよ。

白雪さんにも何か買ってあげるのかな? …… まあ、いいか!

私は商品を物色する。このお店は実際に手に取って見るのは自由だ。

買い物開始から1時間経過――

私が選んだのはト音記号エナメルブローチ、シルバーのイヤリング、フェルトポーチの三点だ。

会計を済ませ、お店の出口に向かうと金次君が待っていた。

「長かったな。良い物が買えたか?」

「勿論さ!」

私は某ハンバーガーショップのマスコットキャラ風に答える。

そういえば、ここ最近ハンバーガー食べてないな……ちなみに私はチーズバーガーが好きだ。

「金次君は何を買ったの?」

「別に……大した物じゃない」

何を買ったのかな? 彼の手提げ袋を観察してみるか。

袋の下げ具合からして重たい物――慎重に持っているから陶器類だね。

それも一つだけでなく、最低二つは購入しているーマグカップだ。

白雪さんに買ってあげたのかな。いや、白雪さんはコーヒーは飲まない。ならば家族にだね。

私が思考していると、金次君が突然、

「そうだ零」

そう言つてゴソゴソと手提げ袋から、

「今日のお礼だ。よかつたら受け取つてくれ」

小さな紙袋を手渡してきた。

うん？何だろう。

「中を見てもいいかい？」

「勝手にしろ」

彼の了解を得て、中を見てみるとシルバーのリングが入っていた。

「女子に今日のお礼として渡すとしたら、これがいいつて店員が言うから買つてみたが、気に入らないか？」

ほほう。中々味のあるいい事をするじゃないか。

しかし、このシルバーリング……何を表すモノだったのかな？

うーむ、思い出せない。いや、考えると頭がズキズキしてくる。何故？

「そんな事はないよ。ありがとう金次君」

しかしお礼か。気分転換で誘ったんだけど、本当に彼は義理堅い性格をしている。任侠になれるのでは……いや、そっち系の女性から好かれるね。彼の性格なら。

「なら私からもお礼をしないとね」

「いらねえよ。電車でも言っただろ。女子から奢ってもらったら俺が殴られる」

「違うよ。奢りじゃないよ」

そう言つて私はこっちこっちと手招きし、彼を寄らせて頬に軽くチュツとした。

「なっ!? 何すんだよ!」

金次君は頬に手を当て、顔を真っ赤にしてテンパってる。

見ていて面白い! ウブだね。若いね。最高だね。

「リングのお礼だよ。これは貰っても殴られたりしないよ」

「ば、馬鹿じゃねえのか!? 人の頬に……」

「私じゃあイヤだったかな? 白雪さんならOK?」

「はあ? 何で白雪が出てくるんだよ?」

白雪さん……君の想い人は気づいていない様子。

彼と一緒にになりたいなら、ここから先は山あり谷ありだよ。

そして最後に一言、good luck。

「俺だったら良かったものの、他の奴にはするなよ」

「ハイハイ。了解しましたよナイト様」

うん？何だろう。背後——ホールの柱から視線を感じるな。

おまけに寒気が襲ってきた。おかしいな暖房は効いてるはず……

「零！今すぐここから出るぞ！」

「えっ？ちよつと金次君……？」

突然、金次君は私の手を取ると走り出した。

どうしたんだろう？何か危険を察知したのかな？

私が観察した限り、危険な物は無かつたはず……

そのまま新国立劇場を出て走ると——再び初台駅に戻ってきた。

「どうしたの金次君？突然走り出して、何かあったのかい？」

「ああ、俺にもお前にも危険なモノがな……」

金次君だけじゃなく私にとつても危険な物？

新国立劇場には危険な物——私が観察した限りは無かつた。

あの時、誰かの視線を感じた。金次君が言う危険な物の正体はあれか。

金次君が真つ先に気づくとは……やはり彼の方が武偵歴が長い。

私も武偵としては、まだまだ未熟な証拠か。

「その危険なも……」

「危ない！」

突然、金次君が覆い被さるように私の頭を下げさせた。

同時に、私達の頭の上を何かが通り過ぎる。

何だ？

「し、白雪……」

私達の背後に巫女装束に身を包んだ白雪さんがその手に日本刀を持って立っていた。

気のせいか怒っているようにも見える。

「玲瓏館さん？これは一体どういうことですか？」

「アートのだよ」

「ちよつ？！？零？！？」

なーんちやつて。ただの気分転換だよ、と続けて言おうとした瞬間、シャキンと白雪さんが私の前に日本刀を向けてきた。

「アート……私だってキンちゃんとしたことないのに……それなのに玲瓏館さん

は……いや零は……あんな事やこんな事を……」

あれ？ジョークのつもりだったんですけど？白雪さん戻ってきて。ただの冗談だ

よ。

突然、駅の前で日本刀を抜いた巫女さんの登場に通行人はガヤガヤと騒ぎ出した。

マズイな。ここで警察沙汰になったら後々、面倒。

「皆さんすみません！実は私達、映画の撮影をしているんです！お騒がせして大変申し訳ありません！」

とりあえず、ここは映画撮影と言っておこう。

これであまり騒ぎにはならない筈だ。

「白雪さん話を聞いて。ただの気分て……」

「問答無用！天誅！」

刀を上段に構え、突進してきた！

やるしかないか。ここからどうするか思考する。

気のせいか落ち着いて考えられるし、白雪さんの動きがゆっくりに見える。

服装は巫女装束——緋色袴典型的な服装だ。

履物は白袋に草履。

精神状態はかなり興奮している。これは怒りによるもの。冷静な判断はできない。

獲物は日本刀。ここには障害物はないから振り回せるだろう——おまけにかなりの

熟練者で素人じゃない。

まずは刀を無効化する。

柄に掌打を打ち込み、振り下ろすタイミングを遅らせる。続けて手首を掴み、刀ごと下に下ろした後、地面に固定。

最後に足払いを決め、後ろに転倒させる。完璧だね。

実行に移そうとした瞬間、

「やめろー白雪」

金次君が私と白雪さんの間に入ってきた。

刀は金次君の鼻先寸前で止まった。

どうして前に出たの？ だって白雪さんの持つてる刀は本物だよ。下手したら自分が切られていたかもしれないのに……

「どいてキンちゃん！ 私はこの泥棒猫を成敗するんだから！」

「話を聞け！ 俺と零はだな…… 野外授業をしていたんだ！」

野外授業？

「野外授業って、2人で演劇を見ていたじゃない…… そのどこが授業なの？」

白雪さん。正しくは演劇じゃなくてオペラだよ。まあ、違いは殆どないけどさ。

「オペラは英語で喋るだろう？ 英語の授業も兼ねて観ていたんだよ。零はイギリス人のハーフだから英語がわかるみたいでさ」



金次君の言う通り、私は英語が喋れる。母さんはよく私の前では英語で喋るからね。父さんは日本語一筋だけ……

「じゃあ、お店の前で零さんが……キ、キ、キンちゃんの頬にキスしたのは何で！」なるほど、あの視線の持ち主は白雪さんだったのか……

一通りの発言からして、どうやら東京駅から尾行していたようだね。

彼女は探偵科でもやっていけるな。

「それは……その」

金次君が困っている。

よし、ここは助け舟を出してあげよう。

「もしかして白雪さん柱の影から見ていたんじゃない？」

「う、うん」

「だったら勘違いだよ。あれは金次君の頬にゴミが付いていたら吹いて取ってあげただよ」

まあ、嘘だけだね。でも嘘も方便と申すでしょう？

「そうだよ。金次君？」

「あ、ああ！ そうなんだよ白雪。零がゴミを取ってくれただけなんだ。白雪の勘違いさ」

「そうだったんだ。私、てつきり玲瓏館さんがキンちゃんにキスしたんじゃないかって

思ったよ」

そう言つて白雪さんは刀を鞘に収めた。

金次君の言う事は落ち着いて聞くんだね……これは危ないような気がするぞ。

「さて！勘違いも解けたことだし、これから白雪さんも一緒にマックでも食べに行かない？この近くにあるしさ」

「マック？何なのそれ？」

おや？知らないのかな。これは箱入り娘と呼ばれるヤツだね。

「金次君もそれでいいよね？これから白雪さんにマックとは何かを教える野外授業に突出だ！」

「そ、そうだな！野外授業だ」

こうして私達はマックに向かった。

お店で白雪さんは目立ったよ。何せ巫女装束だからね。写真を撮る人までいたけど、そこは金次君がSP顔負けの護衛をして守つてあげた。

カウンターで注文する時、白雪さんはどうすればいいのかわからなかった。

見ていられないので白雪さんには私と同じオーダーセットを注文させた。

チーズバーガーはいいよ。これでチーズ派——仲間が増えたね。ちなみに金次君は照り焼きバーガー派だった。

各々注文した品物を持って席に座る。

「ほら、白雪さん。こうやって食べるんだよ」

「ハ、ハ、ハ？」

私は白雪さんにハンバーガーの食べ方を教えた。

ケツチャップが口の周りに付くが、それは白雪さんも同じだった。

見ていると何だか可愛い。

「お前ら仲がいいな。まるで姉妹だ」

金次君はポテトをポリポリ食べながらこつちを見る。

君はポテトから食べる派か!? 私からしたら、バーガーを最後に食べるのは邪道だぞ

!

「姉妹というと白雪さんがお姉さんになるかな」

「そんなことないよ。玲瓏館さんは私より物知りだし。お姉さんは玲瓏館さんの方だ

よ」

「零」

「えっ?」

「今度から零って呼んでよ。私の苗字長いでしょう？遠慮なく下の名前で呼んでよ白雪さん」

玲瓏館と呼ばれるのは嫌いじゃないけど、親しい人からは下の名前で呼んでほしい。

「じゃあ、零さん」

「はは、それでもいいよ」

コーラで喉を潤す。うん、コーラはいいね。いつか本場アメリカのコーラと飲み比べてみたいものだ。

そういえば、今ハマっているネットのオンライン対戦チェスの相手もアメリカだったな。男か女かはわからないが、かなり強い。

現在の成績は64戦中49勝15敗0引き分けて私が勝っているが、油断はできない。い。

相手は守備よりも攻撃派。

かなり攻撃的だが、部下ーキング以外の駒もけして無駄にはしない戦法を取ってくる。

サクリファイス派の私もそれで不意を突かれたな……今度はどんな戦法を見せてくれるのかな？

「ゴホ、ゴホ、何これ喉が痛いよ」

白雪さんがコーラを飲んでむせた。

あー、白雪さんにはコーラは早かったか……

「大丈夫かよ白雪。ほら、よかつたらこれ飲めよ。まだ口つけてないから」

金次君が白雪さんに自分のドリンクを渡してきた。

ストローを刺していないから、まだ手をつけていないのは本当みたいだ。

確か金次君が注文したドリンクは爽健美茶だったね。

珍しくコーヒーじゃない。

「ありがとうキンちゃん」

白雪さんはドリンクを受け取ると、遠慮なく飲み出した。

あ、別にカップを外して飲まなくてもいいんだよ。ストローの刺し口があるし、まあ、それでも間違いじゃないけど。

「そうだ零さん。今日は本当にごめんなさい。キンちゃんとの野外授業を邪魔しちゃつて……」

「ははは、いいんだよ白雪さん。紛らわしい事をした私にも責任があるしね」

「……何が紛らわしいだ」

はい、君は余計な事を言わない。ここで血の雨を見たいのかね？

私はテーブルの下から金次君の足を蹴った。

「金次君？」

「すまん……………」

「どうしたの？2人とも」

「なんでもないさ♪」

その後、三人で雑談や学校での愚痴をこぼした。

金次君は蘭豹先生について愚痴つてた。

今度蘭豹先生に「金次君がこんな事を言ってしまったよ！」と言つてあげようかな……………いや、やめてあげよう。金次君が確実に殺されるね。

下手したら私も口封じで殺される……………

「これから3年間、私達は同じ学校で学ぶ仲間」

「どうした零？突然」

「そうだよ零さん。それに仲間つて私達はもう仲間だよ。ねえ、キンちゃん」

その台詞は日本刀を振り回す前に言つて欲しかったよ……………

いや、そうするように差し向けたのは私か！

「一般中出身で足手まといになるかもしれないけど、これからも仲間としてよろしくね」

「もちろんだよ！零さん」

「まあ、足手まといにならないよう頑張れ」

これから3年間こんな感じで仲良くやっていけたらいいな……  
あ、白雪さん。人の手を握る時は手を拭かないと……ケチャップがついてるよ。

# 夏だ!海だ!海水浴?☒

6月

女子寮の自室にてー

「う〜ん……………もう朝か……………」

エアコンの効いた室内で私は床に転がって寝ていた。

カーテンの隙間から差し込んだ朝日で目が覚める。

どうやら眠り込んでしまったようだ。起きないと……………

まずはカーテンを開け、外を眺める。

外は燦々と明るい日差し。6月の夏の日差しが降り注いでいた。

武偵高校に入学して初めての夏を迎えた。

「あちゃー、これは流石に片付けないとね……………」

自分の部屋を見渡してみると、室内はごちゃごちゃしている。足元には様々なタイプの本の本が散乱しており、開いたままの本もあれば、中には新聞の切り抜きも散らばっている。

我ながらよくここまで散らかしたものだ……………べ、別に片付けられないわけじゃな



いよ！

これには深い訳があるのだ。

「だいが繋がってきたな」

私は目をこすりながら、壁際に移動する。

壁には極大サイズの東京都内の地図が貼られており、様々な箇所に新聞の切り抜き、人物写真、メモが貼られ、それらは赤い糸で繋がられている。

これは現在確認されている未解決事件を私なりに図に表した物だ。

視覚に働きかけることで聴覚——聞いただけじゃ見えてこない真実を発見する為にこうしている。

もっと見ていたいが、時刻はすでに6時30分——8時頃には学校だから早く行かなければ。

「朝食は食べないとね」

1日の元気の源だから、しっかり食べないと。

キッチンに移動し、冷蔵庫を開けて卵2個とソーセージ3本を取り出す。

続いて、エスプレッソマシンでコーヒーを入れる。

食材をフライパンで焼いている間にトースターで食パンを焼いてしまおう。

私は朝はパン派だ。ご飯も嫌いではないが、どっちかと言えばパンの方が好きだ。

フライパンで卵とソーセージを焼き終えると同時に、チーン!とトースターが鳴る。食パンが焼けた。

さつそく皿に移して、マーガリンと苺ジャム、コーヒーを持ってテーブルに移動する。「いただきます」

まずは食パンに噛ぶりつく。うん、マーガリンと苺ジャムをたつぷりと付けただけあつて、甘くて美味しい。

続いて、目玉焼きとソーセージにも苺ジャムを付ける。

これがかなり美味いんだよね。

偶然、食パンに付けた苺ジャムが目玉焼きとソーセージの上に落ちて、退けるのも面倒だからそのまま食べたらこれが美味かったんだよ。それがきっかけで今、様々な料理に付けて食べている。合うか合わないかの実験だ。

今度、金次君と白雪さんにも勧めてみよう。それがいい!仲間が増えることは良いことだ。

2人に進めるとしたらジャム付きの寿司がいいかな。

まだ私は試したことはないが……

さて最後に朝のコーヒー・エスプレッソを頂こう。

私は朝はコーヒー・エスプレッソを飲むことにしている。

これは武偵高校に入学してからだ。入学前は紅茶を飲んでいたが、今はこれに変わった。

多分、金次君の影響かな？彼はよくコーヒーを飲んでるからね。

エスプレッソは、日本ではあまり普及していないが、イタリアやフランスでは最もポピュラーなコーヒーであるといわれており、コーヒー或いはカッフエといった場合、同地ではほぼ間違いなくエスプレッソのことを指す。

蒸気により高圧をかけて短時間で抽出しているため、シャープで濃厚な風味を持つ。

そうした濃厚さの一方で、深煎りのコーヒー豆（焙煎の途中でカフェインが揮発している）を使用していることや、短時間で抽出しているため、カフェイン含有量は普通のドリッパ式のコーヒーよりも少なくなっているのだという。

「うん、朝のエスプレッソはソロかりストレットに限るね」

飲みだして分かったことだが、私はエスプレッソのルンゴ・ドッピオが苦手、いや、嫌いだ。

ソロはエスプレッソの基本で約7gの豆で抽出する。基本を大事にしている。

ルンゴ・ドッピオはソロの2倍の豆と水量で抽出するから、飲みごたえあるが味の強さが弱くなる。おまけに多めのお湯で抽出するので、やや薄い感じ。雑味が出るため嫌いだ。

リストレットはお湯は少なめで抽出。うま味がぎゅっと凝縮され、パンチの効いた濃い味に。これは金次君にオススメだ。

何度かルンゴ・ドピツオで飲んでみたが、どうしても好きになれない。何故だろう？金次君にはルンゴ・ドピツオは作らないように言っておこう。

朝食を食べ終えて、制服に着替える。

半袖の白い薄手の制服——もちろん、これも防弾性だ。

時刻は7時30分——あちゃー、この時間帯だと白雪さんとは一緒に登校はできないね。

「身だしなみ良し。帯銃よし」

もう習慣的になった決まり文句を言いながら、鏡で自分の装備を確認する。忘れ物はないね。

「これもちゃんと付けないとね」

私は左手の人差し指にそれをはめる——シルバーのリングだ。

これはオペラ座のお礼として金次君から貰ったものだ。折角、貰ったのだから、はめないと勿体無い。

最初、左手の薬指にはめて登校し、彼に見せると「もうはめてきたのかよ」と言っ

きたな。

その後、「金次君から貰ったのだからはめるのは当然でしょう？」と言うと、それを聞いた同級生達に「遠山金次を確保。これより尋問科に連行する」と拘束され連行されて行った。何故だろうね？未だそれがわからないな。私にも理解できないね。

そういえば、りこりんがやけに食いついてきたな。

その後、解放された金次君に何故連行されたのか聞いてみても「俺が知りてえよ！」の一点張りだったし。

また連行されるのも可哀想なので、今は左手の人差し指にはめている。

玄関のドアに立てかけてあるステッキを手に取り、部屋を出る。

今日も一日頑張りますか！

教室にてー

いつものメンバーと共に登校して来なかった私が教室に入ってくると、みんな物珍しい目で私を見てきた。

りこりんの姿は見えない。どうやら任務で海外に行っているようだね。

あつ、金次君を発見。机に顔を伏せている寝不足かな？

そんな彼を見ながら自分の席に着席すると、

「おはよう零!珍しく遅れてきたな」

武藤君が声をかけてきた。朝から見ていて清々しいね。

「おはよう武藤君。いやね、寝坊しちやつてき」

「ははは、寝坊つて何をしてたんだよ?」

「秘密だよ」

犯罪捜査についてはあまり外部には話さないようにしている。

たとえ同級生でもね。

「しかし、今日も暑いね。武藤君は暑くないのかい?いくら室内は冷房が効いていても、外は暑いよ」

私は思わず襟首を。パタパタさせる。

うん?どうしたかな武藤君。そんなに私の首元を見つめてさ?

「こ、これくらい真夏のエンジン点検に比べたら、へでもないぜ」

「おおう、流石だね」

室内派の私には言えないようなセリフを言ってくれるじゃないか。

やはり武藤君は野外派だね。それも夏が似合う男の子だ。

「そういうえば、夏は山か海のシーズンと聞くね。武藤君は夏は山派?それとも海派かい?」

武藤君の性格からして山派——山岳地帯でドライブを楽しむタイプ。

「俺は山派だぜ！山でのドライブがこれまた最高なんだよ」

やっぱりか。でもね、飛ばし過ぎて山から転落しないようにね。

傾斜面を転がり落ちて、そのまま炎上なんてしたら山火事に成りかねない。

「でもよ。今年は海にしようと思ってるんだ」

「おや？どういった心境の変化かな？車でのドライブが大好きな武藤君にしては珍しいね。」

「おやおや、どうしてかね？」

「特に深い理由はねえけどよ……なあ零。今度の休みにみんなで海水浴に行かないか？」

「それは金次君、不知火君、白雪さんとかかな？」

「おう！いや、実は不知火は行けないみたいだよ。なんか都合が悪いみたいでさ」

不知火君がね。そういうえば、教室を見渡してみたが今日は来ていないね。

「大丈夫だよ。OKOK」

「じゃあ、決まりだな！詳しい日程は後でこっちから連絡するぜ」


そう言って武藤君は席に戻っていった。

海か……いいね！

ならば水着を用意しないかね。生憎、今持っている水着は学校の授業で使うものしかない。

海水浴用を購入しておこう。



夏だ！海だ！海水浴？

森戸海水浴場——神奈川県三浦郡葉山町にある遠浅の波穏やかなビーチで、沖合いの名島や灯台を望む景観が素晴らしい。シーズン中の賑わいは葉山町でもトップレベル。また名島沖に沈む夕日の美しさでも知られる。

森戸海岸パークینگエリアにて

「あつという間に到着したぜ！」

「まあ、武藤の運転だからな。けどよ公道で飛ばし過ぎだろ？途中でパトカーのサイレンが聞こえたぞ」

そうなのである。

武高校門前で武藤君を待っていると、ブロロロと車のエンジン音らしきものが聞こえてきたので、音のした方を向くと武藤君がいた。HUMMER H14ドアワゴンに乗って……

「驚く私達を乗せ、武藤君はそのまま出発した。」

白雪さんに乗せているから安全運転と思つたら、とんでもない！

途中——東京国際空港から公道16号線に乗ってからがヤバかった……どうした

のか…… スイッチが入ったように暴走し出したのだ! 乗っている私達の制止も無視して飛ばすわ。

パトカーのサイレンが聞こえたがあれは気のせいだよね……

「まあまあ、金次君。武藤君がここまで運転してくれたのだから、細かいことは言わない」

「そうだよキンちゃん。気にしない気にしない」

「……… なんか変わったな白雪」

現在私は金次君、武藤君、白雪さん達と一緒にこの森戸海水浴場に来ていた。

空には燦々と太陽が輝いており、砂浜と海を照らす。まさに海水浴にはもってこいの日だ。

海水浴場エリアにそって9軒の海の家がある。

ここで更衣や浮き輪、パラソル、ボートのレンタルが可能で、シャワー室もある。

遊泳区域とは別に貸しボート専用の航路もあり、ここでボートを使用できる。

早くも武藤君が目を爛々と光らせている。どうやらボートに乗る気満々のようだがさすが乗り物なら何でも乗りこなす車輛科。

「浜辺でのバーベキューが楽しみだぜ。この日の為に松坂牛の肉を買ってきたんだからな」

H14のトランクを開け、バーベキューセットを取り出す。

グリル・コンロ

鉄板・プレート・網・鉄串

トング（肉用、魚用、野菜用、炭用にわけてある）

炭・着火剤・軍手

紙皿・紙コップ・箸

レジャーシート・テーブル・イス

など一通りの道具が揃っている。

そして、最後にクーラーボックスには切り分けたお肉と調味料まで入ってる。本格的だ。

おそらく、白雪さんが来るから気合を入れたね。

松坂牛…… かなりの出費だと思うけど、ここはありがたいと頂きましょう。感謝するよ武藤君！

「おお、すげえな武藤」

「焼肉なんて私、初めてだよ」

「大丈夫ですよ白雪さん！俺がちやんと白雪さんの分を焼きますから！」

「あつ、あれ見てよ。どうやらここではバーベキュー禁止みたいだよ」

「なんだってええ!?」

ただ残念な事に遊泳区域周辺では火気の使用バーベキューなどをすることが禁止されている。

武藤君はバーベキューがやりたがっていたが、禁止の看板を見て、できないと知って残念そうだ。

頭を抱え、地面に伏せている。うん、見ていて可哀想だ。

「まあまあ、別に浜辺である必要はないよ。昼食時間になったら移動するとかしてさ」

「けどわざわざ移動する必要があるか?海の家があるんだし、そこで済ませばいいだろう」

「でもキンちゃん。せっかく武藤君が用意してくれたんだよ?それじゃ悪いよ」

「し、白雪さん……!」

武藤君が泣いているよ。あれは感激の涙かな?白雪さんに心配してもらって感謝の極みだね。

「なら昼食は海の家で済ませて、夕食は別の場所に移動ーそこでバーベキューにしようよ。武藤君もそれでいいかな?」

「そうだな!よし、それでいこう」

私が提案すると、武藤君は立ち上がった。

うわー、立ち直るの早いわ。白雪さんエールが効いてるなこれは。

「なら腹が減るまで泳ぐとするか……」

「それじゃあ水着に着替えないとね」

「ならあの海の家で着替えよう白雪さん」

私はすぐ目の前にある海の家——『はまの屋』に白雪さんと一緒に向かった。

「私、海なんて初めてだよ零さん」

「白雪さんの実家——青森は寒いから泳いだりはしないのかな」

「違うよ。学校以外で神社の敷地から出たことがないの。だから海は初めて」

そうなんだ。かなり閉鎖的な環境で育ったんだね。

私だったら耐えられないかな。

来る前に聞いたが、白雪さんの実家は学校と神社以外の外出を禁止しているそうだ。

なので今回、海に行くのを断っていたが、金次君が行くと聞いて「私も行きます！」と

答えた。いいのかい!?!?

行くのはいいが、白雪さんは海水浴用の水着を持っていないと言ったので、この

前——海水浴2日前に新宿の水着専門店と一緒に水着を購入してきた。

どれがいいか迷ったよ。

「なるほどね。じゃあ、これを機に海を満喫しようか白雪さん!」

私の一言に白雪さんは「うん!」と答えた。海に関しては素人か……ならば私が色々教えてあげないとね。

中に入ると利用料金は海の家自体——更衣室の使用料金とシャワー室の利用料金は別々だった。

お金を払い、更衣室で水着に着替える。

キンジ視点——

零と白雪が更衣室に行っている間に残った俺と武藤はパーキングエリアで着替えた。

着替えたと言っても、ズボンの下にあらかじめ水着を履いておいたからな、これならわざわざ更衣室に行かなくてもいい。

「なんかワクワクしないかキンジ」

「何がだよ……?」

着替え終わり、白雪と零を待っている時、武藤がそんな事を言ってきた。

海で泳ぐのにワクワクって、明日の遠足が楽しみで眠れない小学生かよお前は。

「そんなことはないな」

「お前は馬鹿か?!? 男なら誰でもワクワクして当然だろうが!」

「はあ? なんですよ」

「だってよ白雪さんと零の水着姿だけ！学校では見れない違った姿……俺は今日と  
いう日にマジで感謝してるぜ」

握り拳を作り、空に向かって嬉しそうに号泣してやがる。

まさかそれが見たいが為に海に行くのを提案したのか？妙だと思っただけ、夏はドライ  
ブばかりしているコイツが海に誘ってきたのはこれの為かよ。

「ごめ〜ん、待たせちゃったかな？」

海の家の方角から零の声が聞こえてきた。

振り返ってみるとそこには頭にサングラスをかけ、真っ赤なビキニを着た零がいた。

なんて格好だよ!!？それ本当に水着なのか？

イギリス人の血が入っている為か〜肌は日本人より白いが不健康ではない証拠に  
程よい赤みを帯びている。

すらりとした身体の曲線は整い過ぎていて、まるで人形のようなだ。

「おお、すげえ水着だな零」

「新宿で見つけて買った」

新宿〜車の中で言っていたが、白雪と一緒に水着を買いに行ったらしいな。コイツ  
の性格からし白雪に変な水着を勧めなかっただろうな？白雪は疑わず真に受けるから  
心配だ。

「待ってよ零さーん」

零に続いて白雪がやって来た。

頭に麦わら帽子を被り、黒のビキニ姿だ。おい!?胸が納まりきれてないぞ!

白雪の胸は大きいービキニでは隠しきれない。あれは一種の肉食獣の牙や爪だ。

おまけに黒のビキニが真っ白い肌を強調している。

「白雪さん凄く似合ってますよ!最高です」

「そ、そうかな?零さんが勧めてくれた水着だから……」

おい、零。白雪に勧めるなら、もっと生地が多い水着にしろよ。これじゃまるで下着だぞ。

「おや?金次君。白雪さんの水着姿を見て嬉しくはないのかね?」

零が俺の腕に抱きついてきた。

こら!胸を当ててくるな!?白雪ほどではないが零の胸も大きい。

理子から零はボクシングをやっていると聞いていたが、腕と胸周りの筋肉は程よく絞り上げている。

強襲科の俺から見てもしつかりと鍛えてあるのがわかるぞ。

「あつ!零さん抜け駆けはいけませーん!」



白雪まで抱きついてくるな!!?なんでお前まで胸を当ててくる?

俺は白雪と零から挟まれる形で抱きつかれた。

後ろで武藤が「くそがあ!」と叫んで泣いているが何故だ?

とりあえず早く浜辺に行こう。

零視点――

「ほら、金次君。早く浜辺に移動しようよ」

「わかったから急かすな」

クフフ、上がってるね金次君。そんなに水着姿がよかつたかな?

大胆すぎる水着姿を見るとドキツとするという男子は多いと聞く。

おまけに白雪さんも水着姿だからね。

「白雪さん金次君に付いてあげなよ」

「えっ?ちよつと零さん!」

金次君を白雪さんに任せて私は後ろを歩いている武藤君の隣に移動した。

パラソルやマットを持っている。完全に荷物持ちだね。

「白雪さんじゃなくてガツカリした?」

「いや、そんな事はないぜ……」

いや絶対にガツカリしているでしょう君?

あまりにも可哀想だからせめて隣を歩いてあげよう。

6月とはいえ浜辺には先客がいるね。泳いでいる人もいれば、浜辺で日焼けしている人もいる。

武藤君は貸しボートをレンタルしにいった。

日焼けは嫌だなー。日焼け止めを塗らないとね。私は日焼けしやすいのだ。

「白雪さん、金次君に日焼け止めを塗ってもらいなよ」

私は日焼け止めの容器を白雪さんに渡す。

白雪さんの肌も白いーこれは早めに塗らないとまずいぞ。

「キンちゃんに?でも私は……その……えーつと」

「いいから、ほら!金次君。白雪さんの身体に塗ってあげなよ。日焼けしたら大変だからね」

「おい!??何で俺がしないといけないんだよ?零が塗ってやれよ」

君は実に鈍いなー。遅いぞ金次!じゃなくて、なぜ彼はここまで白雪さんの事を……

「まったく……君は実に馬鹿だな」

思わず私は首を横に振る。

「やめろ。妙に様になっているから、なんか見えていて腹が立つ」

仕方ない。鈍感君に代わってここは私が白雪さんの体に塗ってあげよう。

「ほら、白雪さん。まずはシートにうつ伏せになって」

私の指示に白雪さん「こ、こう？」と戸惑いながらも従ってくれた。

うん、素直でよろしい。

「零さん。何だか冷んやりしているよ……」

「はい、我慢しましょうね」

そのまま全身に塗っていく。

おお、背中がまるで一枚の真白なキャンバスのような。手に塗ったクリームが満遍な

く届くぞ。

そーれ。こーこも……

「くすぐりたい……よう!?？」

そのまま思わず胸まで塗り込んでしまった。白雪さんが声を上げる。

何だろう？白雪さんの反応を見るとイタズラしたくなる……

「それじゃあ、今度は脚を塗っていくよ」

「まだやるの？」

まだまだ行きますとも。

太ももから足の裏まで塗り込んでいく。意外と足が長いね。

ほーれ、ここはどうかかな?

「ひうーそこはダメだよ……!」

足の指の間をくすぐるように塗っていく。

そんな顔してもダメだよ白雪さん。もう何もかも手遅れなのさ!

ははは、私を止めることは誰にもできません!

「おい、零。もういいだろう」

金次君が私の肩を掴んで止めた。

私の邪魔をするとは…… 覚悟はできているのか貴様!なんちやって♪

「横になれよ零。俺が塗ってやるよ」

ほう、珍しくね。金次君がそんな事を言ってくるとは……

いいでしょう!お手並み拝見といこうか。

私はそのままシートに寝っ転がり、

「それじゃお願いしますよ」

金次君に日焼け止めクリームを背中に塗ってもらう。

おつ、意外と上手だね。力もあるし整体師さんになれるのでは? いやこれは整体師さんの才能があるぞ。

「気持ちいい、このまま寝てもいいかい？」

私が尋ねると金次君は「勝手にしろ」と言ってきた。ならば、遠慮なく……はあ、いいきも……ち……だ。

うん？なんか痛いぞ？足の裏が痛い！

異変に気付き脚の方を見てみると金次君が私の足の裏を思い切り押していた。

これは足つぼマッサージか？

「痛い！ちよー痛いよ！本当に痛いから……！」

「ここが痛いのですかなお客様」

あまりの痛さにジタバタするも脚を固定され逃げられない。

金次君は暴れる私を抑えつけて尚、足つぼマッサージを継続する。

ぐわー！足がおかしくなる！指先をプレスするな！グリグリしないで？

「白雪に何か言うことは？」

「ごめんなさい！調子に乗りました！」

私の謝罪を受けとめると、金次君は解放してくれた。

不覚だった……！まさか金次君がこんな特技いや、凶器を持っていたとは？

「君って、女の子にこういった事をすると興奮するタイプだったの？」

私は若干涙目で尋ねた。まだ足つぼの余波が残っている。

「……ッ……!誰が興奮するか!」

隠そうとしなくてもいいんだよ?顔が赤いね、私の方を極力見ないようにしているのが、何よりの証拠だよ。

この借りはキツチリと返させてもらいましょか。

「おーい!貸しボート持ってきたぜ」

どう仕返ししようか考えていると武藤君がボートを抱えて戻ってきた。

チツ!タイミングが悪い!すごく悪いぞ。

いや……これはいいぞ。

「ねえ、武藤君。誰とボートに乗るのか決めてあるのかい?」

私が尋ねると武藤君は「いや、まだだぜ」と返してきた。

このボートは二人乗りーこれは使える。

まあ、武藤君としては白雪さんと一緒に乗りたいだろうけど……

「なら誰と乗るか、決めないとねーここはジャンケンで決めようか」

ふふふ、金次君。とびきりの仕返しをしてあげよう……

「それじゃ、金次君と白雪さんも加わって……」

「待てよ。何で俺も乗る前提なんだよ?」

「おや?せっかく武藤君が借りてきたのに無下にするのかな?」

「いや、男2人で乗るのはな……」

「まあまあ、そんな事を言わずに友達なんですよ？なら一緒に乗るのは何の問題はない。それにジャンケンで決まるんだから乗るとは限らないよ」

「まあ、それなら……」

「白雪さんもそれでいいよね」

「うん、いいよ」

「なら、勝った人が乗る、でいいね」

3人で輪を作る方でジャンケンをする。武藤君は遠目から眺めながら「白雪さん来い！白雪さん来い！」と言っているが、残念だがそんな未来は来ないよ。

「それじゃ、ジャンケンーポン！」

私の掛け声で一斉に出す。結果は3人ともグーのあいこだった。

まあ、最初は当然か。

人は緊張した状態でジャンケンすると、手に力が入りグツと、握りたくなる。これは緊張感を和らげる為にする行動だ。

続いて「あいこでーしよ！」で私と白雪さんはパーを金次君はチョッキを出した。

「ゲエ!? 負けた……！」

「武藤君とのポートルツァーは金次君に決定しました」

「神は死ンダアアアアア」

武藤君がこの世の終わりのような叫び声を上げた。

両手で頭を抱えて膝をつき天を仰ぐとは……そこまでシヨックを受けなくてもーなんか目から血の涙が出てるよ?

まあ、私は、負けた人が乗る」とは一言も言っていないからね。

こういった勝負では最初が肝心なのさ。おまけに相手の了解を得ればもう最高だ。

「さあ、白雪さん。私たちはあっち行こうか? 金次君は武藤君とボートに乗るからさ」  
「ちよっ……! 零さん?!? そんなに引つ張らないですよ。こけちやうよ」

白雪さんの手を取り場所を移動する。

私たち部外者は邪魔をしてはいけないからね。

それじゃ! 金次君。武藤君との楽しいボートツアーを満喫したまえ!

「キンちゃん達、大丈夫かな?」

「大丈夫、大丈夫。ほら見てよ。あんなに楽しそうにボートに乗ってるよ」

金次君と武藤君はボートで沖まで出ていた。遠目からだけドーうん! 楽しそうで安心したよ。なんか2人で立ち上がって話し合いまでしてる。本当に仲がいいね。



まあ、私がそうなるように仕向けたんだけどね。

ジャンケンの時、私は白雪さんの指の筋肉の動きを観察し、同じ手を出したのだ。そうすればいずれは金次君が負けるからね。でも、まさか初め切りから負けるとは……：意外だったな。

「まあ、金次君たちのことは置いて、これに集中しようか？」

私と白雪さんは浜辺でポンポンと砂の城を作っていた。

白雪さんが作ってみたいと言ったのだ。でも作るなら本格的なものを作らないとね。

砂の耐久性とバランス、質量も計算してと……：この土台部分——黄金比が素晴らしい！我ながら傑作だ。

「ねえ、白雪さんは金次君と幼馴染だよね」

「そ、そうだよ。どうしたの突然？」

「好きなんでしょう？金次君の事がさ」

「ふえあー！」

白雪さんが城にダイブした。あー、傑作が壊れたよ。まあ、形あるものは壊れるからしょうがないか。

「す、す、好きだよ。でも何でそんな事を……：……」

前にも言ったことだけど、殆ど変わってないな。

「うーん、何となくなかな? でね、もしも金次君が他の人ー女の子と付き合ったらどうする? あ、私は除外してね」

「成敗します」

さつきまでの態度とは裏腹にキリツと人が変わった。

おお、怖い怖い。彼女を敵に回したくはないね。

これは行けるところまで行くタイププー止める人がいなければ暴走する人間の鑑だね。

「白雪さん。金次君も男の子。これからの学校生活で多くの人、中には女性とも出会うかもしれない」

「.....」

「でね、もしかしたら恋人ができるかも」

「そんなの私が許しません! 成敗、いや天誅!」

立ち上がる白雪さんを「座って座って」と促し、落ち着かせる。

「想像してご覧よ。もしその恋人が白雪さんより強かったらどうするのさ? 天誅もなにもないよね」

「だったら星伽直伝の呪術で.....」

なるほど呪い殺すパターンか。でも『人を呪えば穴二つ』と言うよ? 白雪さんにも何

か悪いものー不幸が降り注ぐかも……いや、彼女ならそれでも構わないだろう。

私なら呪いよりも闇討ち、毒殺や誰かをけしかける事をオススメするけどね。

「私が言いたいのはね。このまま幼馴染の立場で満足なのかい？という事だよ」

「それは……」

「白雪さん。いつまでも幼馴染のままではいけないよ。君が恋人にならないとさ」

「私がキンちゃんの恋人……でも自信がないよ」

顔を曇らせている。何か不安な事があるようだね。

実家の事が関係しているのか、それとも自分の事かな？

私は白雪さんの手を取り、

「大丈夫だよ。金次君と白雪さんはお似合いのカップルだと思うよ。私が保証してあげる。それに男女の恋仲なんて不安で当たり前なんだから」

「不安で当たり前前？それじゃ恋人とは言わないのじゃないの？本当の恋人なら不安な事なんてないものじゃない？」

「恋人だからこそだよ。不安を安心に変えてこそ2人の絆が試される。不安は寧ろ男女の絆を高める試練のようなものだよ」

「不安は試練……零さんって、変わった感性の持ち主だね」

少し安心したのか笑ってくれた。うん、白雪さんはやっぱり笑顔が一番だね。安心し

たよ。

「だって私は私立相談役だからさ」

「もう、それじゃ答えになってないよ」

「それはそうだね」

いつの間にか2人で笑っていた。待つてよ? 何で私はいきなり白雪さんの恋心について尋ねたんだろう?

疑問に思っている和金次君と武藤君が帰ってきた。

「あつ、2人とも楽しかったかい?」

「楽しくねえよ!!?」

何をそんなに怒っているのだよ? それと武藤君、なぜ私と白雪さんの方をブルブルと震えて見ているのだね?

「なあ、白雪さんと零はそういった関係じゃないよな」

そういつた関係? あー、なるほど想像力があるね君は。

「違うよ。お友達だよ。ねえ、白雪さん」

「うん、零さん」

2人で手を取り合って見つめ合う。

武藤君ーけして私たちはそういった関係ではないからね。

誤解しないように。

それにしてお腹が減ってきたなー。

「そろそろお昼にしない？」

もちろん、金次君と武藤君の奢りでね♪

## 料理とは配合いや爆発だ

料理とは配合だ。

組み合わせ次第で美味しくも、不味くもなる。

料理とは発見だ。

未知なる味を求め探求心をくすぐらせる。

私は寮の部屋ーキッチンで料理に明け暮れていた。

何故、料理をしているかという白雪さんの影響かな。

海水浴以来、白雪さんは金次君にお弁当を作っては昼食時間に一緒に食べている。

白雪さんの作るお弁当は凄いのだ。

何を張り切っているのか重箱ー5重の弁当なのだ。

拝見させてもらったが、どう見ても2人前ではない。「白雪さん……今日は運動会

だったかい？」と言いたくなる程に豪華すぎるのだ。

毎朝起きて、幼馴染いや恋人ー金次君の弁当を作る白雪さんには感心するね。

彼女は積極的になったと思う。弁当だけでなく時間の都合次第では一緒に下校もし

ている。

「まずはマグロの切り身を……」

そんな白雪さんを見習って、私も本格的に料理をしようと思った。

しかし、ただレシピ通りに作るだけでは面白くないので新しい料理——アレンジして作るようにしている

冷蔵庫から解凍したマグロの切り身に黒あんに塗り、パン粉をまぶして揚げる。

うん、外見だけは豚カツ風だけど味の方はどうか……自分で食べるのもいいが、まずは誰かに食べさせて意見を聞いてからにしよう。

誰に食べさせようか考えているとピンポン、とインターホンが鳴った。

誰だろう？ 玄関を開けると、

「ヤッホー！ れいれい。遊びに来たよ」

りこりんがいた。第一被験者発見！ 本当にいいタイミングだ。丁度、味見してくれる人が欲しかったんだよね。

時刻は午後18時……うーむ、りこりん？ 遊びに来るには遅いのではないのかね？ この子は本当に自由だな。

「いらつしやい、りこりん。上がって上がって」

「お邪魔しまーす。おや？！ この匂い、貴女は、料理してましたね？！ これは揚げ物

ですね」

このダミ声は古畑任三郎か…… 探偵科で流行っているんだね。

「よくぞ見破ったね。明智君」

「そのネタはもう古いよ、れいれい。今は私の時代なんですわええええんーふっふっふ……」

明智小五郎はもう古いのか…… これも時代ですかね。

「なるほど、教えてくれてありがとうね。そうだ！りこりん、お礼によかったら私の作った揚げ物を食べてみない？」

「いいの？？やったー、れいれいの手作り料理を食べられるなんて幸せだよ」

りこりんはその場でピョンピョンと飛び跳ねて嬉しそうだ。

私も嬉しいよ味見してくれる人がいてね。

「それじゃ用意するからリビングで待っていてくれたまえ」

「ラッジャー！」

私はそう言っただけでキッチンに移動する。

いやー、まさか作って初日に味見の機会が訪れるとは…… 本当についている。

「お待たせーりこりん……？」

マグロの黒あんカツをもって、リビングに戻ってくるとりこりんが壁に貼られた世界



地図——今、世界中で発生している未解決事件を私なりに考え、関係図に表したものを眺めていた。

「ねえ、れいれい。これは何かなく、りこりん気になっちゃった」

「それは私の作った事件の関係図だよ」

料理を一旦、テーブルに置いて答える。

「この図を見ると——今、世界中で発生している未解決事件には法則がある」

「法則？もつと詳しく教えてよ」

「じゃあ、この『武偵殺し』と『魔剣』から説明しようか。この2つの事件は決まって世界中で起こっている」

『武偵殺し』最近になって活発的に活動している——武偵ばかりを狙った爆弾犯。殺しという名が付いているが、実際は武偵の乗った乗り物に爆弾を仕掛け、遠隔操作した武装車両で追い回し、最後は海に落とすなどといった幼稚な犯人だ。

『魔剣』正体不明の誘拐犯。誘拐の対象は超能力者武偵——通称『超偵』と呼ばれる武偵を誘拐する。犯行の中には強引に誘拐する場合もあれば、超偵とコンタクトをとり勧誘する場合もある。

「この2つの事件——犯人には共通点がある」

「共通点？」

「犯行計画——作戦立案術がよく似ている。いや、『魔剣』の立案術を『武偵殺し』が真似ていると言った方がいいかな」

「同一人物じゃないの？『武偵殺し』は武偵に爆弾を仕掛けて追い回している間、別の場所ですら『魔剣』として犯行を行なったとも考えられるよ」

「私も最初はそう考えたけどやめたよ。だって、犯人像が違いすぎる。『武偵殺し』は無秩序型、『魔剣』は秩序型の犯人だもの」

私はりこりに分析結果を説明する。

犯人像には大きく分けて2種類ある。

秩序型——全てにおいて秩序立っている人格が特徴で、高い知能を持っている。尊敬される立場にあり、魅力的で異性に人気がある傾向にあり、犯行の準備段階から徹底していて、犯行を誰にも気づかれずに速やかにこなし、犯行後、警察からの尋問されることさえ想定している。

無秩序型——秩序型とは正反対に、社会不適応で孤立して、知能もそれほど高くない。外見に無頓着で総じて無秩序さが見られる。

このタイプの犯人は両親がおらず、自分自身も高校を中退するなど、身の振り方がさつ。犯行を楽しむ愉快犯の場合、犯行の余韻に浸りたがる傾向があり、犯行現場をビ

デオに収めたり、犯行現場に戻ることがある。

「私の推測だと『魔剣』は国籍はフランス人だね。ほら、ここ見てよ」

私はりこりに世界地図——ヨーロッパ州を指し示す。

「これを見てわかるように『魔剣』の犯行範囲はヨーロッパがメインだね。決まってヨーロッパの国々では強引な誘拐はしていない。全て勧誘している。特にフランス周辺ではその傾向が強く出ている」

「ヨーロッパ——フランスに思い入れでもあるのかな？ もしくはアジアに恨みがあるとか？」

「いや、恨みはないだろうね。仮にあったとしてもこの犯人は私情——恨みを持ち込まない。そんなものがあれば、ここまでの犯行はできない」

怨念を挟み込んだ犯行には必ずほころびが出てくる。しかし、『魔剣』にはそれがない。戦闘能力のある超能力者を攫うとなればなおさらだ。

「さつきも言ったけど『魔剣』はフランス人、そして高い知性を持ち、作戦立案術と情報収集能力、カリスマ性にも優れている。おまけに超能力者だ」

「どうして超能力者だと思うの？ 誘拐の対象が自分と同じ超能力者だから？」

「そうだよ。超能力者と呼ばれる人たちは優れた力を持つが故に孤独でもある。大概の人間は自分とは違った存在を恐れる——超能力者はその対象になりやすい」

孤独な超能力者の前に『魔剣』と呼ばれる超能力者が現れたらどうなるか？ 答えは簡単だ。孤独な超能力者は仲間ができたと喜ぶだろう。そして喜んで自分から勧誘されるだろう。勧誘してくる相手がカリスマ性に優れていればなおさらだ。『魔剣』はその孤独感を見事につけてくる。ここまでくると誘拐というよりスカウトだね。尊敬するよ。

「凄いいね。『魔剣』が聞いたら真つ青だね。じゃあさ、『武偵殺し』は？」

一通りの結果を説明し終わると、りこりんは『武偵殺し』について尋ねてきた。りこりんも探偵科だから気になるのかな。

『武偵殺し』はヨーロッパ州だけでなく最近になってアメリカにも現れている。犯行の手口は、最初はバイク、次がカージャック。乗り物に『減速すると爆発する爆弾』を仕掛けて自由を奪い、遠隔操作でコントロールしているね」

高みの見物と洒落込んでいるが、遠隔操作による操作には電波を使う。電波には一定のパターンがあり、何度も使えば簡単に居場所を特定されるが犯人は捕まっていない。「そして、爆弾の扱いがとても上手い。ターゲットの武偵に悟られず、乗ってから初めてわかるようにするなど狡猾だ」

ターゲットの武偵も訓練した車両を点検してから乗車する者もいることを想定して爆弾を仕掛けるなど誰にもできることではない。

「この犯行には計画性がないように見えるが、しつかりと作戦を立案して犯行に臨んでいる。『魔剣』と同じようにね。おそらく、『武偵殺し』と『魔剣』は協力関係——それもちかなり親しい関係にある。過去に共通するものがあるか、あるいは出身地が同じ——フランスだったりね」

「どうしたの〜れいれい。私の方を見てさ?」

「うん? いや、なんとなくかな」

「そういえば、りこりんの欠席と『武偵殺し』の犯行発生が重なっているような気がするんだよね。」

「ねえ、他にわかったことはない? 何かあれば教えてほしいな」

「この犯人は努力家にも思えるんだよね。無秩序型だけどヤケにならず自分を高める——向上心に溢れている。いや、力に貪欲と言った方がいいね」

「努力家か……『武偵殺し』が聞いたらどう思うかな?」

「さあ? けど私から言わせて貰えば、この犯人は向上心があつて素晴らしいと思うよ」  
「えー、れいれいは武偵でしょう? 武偵が犯罪者を褒めているの?」

「確かに武偵が犯罪者を讃えるのはマズイだろう。教務科に知られたら銃殺されかねない。」

「純粹に褒めているんだよ。犯行はバイクから車——エスカレーターしている。これは次

のステッパー新しいことに挑戦しているように感じられる。向上心豊かで停滞を良しとしない。実に素晴らしいと思わないかい？」

「あはは、『武偵殺し』が聞いたら喜びそうだね。でも、犯罪を暴くだけじゃなく犯人を褒めるなんて、れいれいには犯罪者の才能がありそう」

犯罪者の才能か…… まあ、武偵と犯罪者の境界線は曖昧だからね。武偵の中には犯罪ギリギリなこともやる人もいるし。

「じゃあ、『武偵殺し』と『魔剣』だけじゃなく、他の事件についてわかったことはある？」

「他の未解決事件は、そうだね……、共通点があるのに共通点がない」かな」

「なにそれ？ナゾナゾ？りこりんにはわかんない」

「同じような犯行があるけど違う。なんと言えばいいかな…… まるでお互いの犯行手口を提供しているように感じられるんだよね」

異なる犯人が自分の十八番を他者に伝授し、その人が実行に移している気がする。

この未解決事件の犯人たちはまるでお互いが生徒であり教師にも見える。

「犯人たちの逃走経路は海。空だとあからさまだし、陸だと追跡されるーどこまでもね。となれば残るは海ーかと言って船じゃやない。潜水艇だ。海でしかも潜水艇なら居場所を探られない。潜水艇は移動するし、拠点としても使えるからさ」

「凄い！凄いよ！名推理だよ、れいれい。もし犯人たちのリーダーが知ったられいれいに興味が湧くかもね」

リーダー？あー、そうか。犯人たちには頭目がいる可能性があったね。そこに気づくとは……りこりんもやるな！

「もしこの犯人たちにリーダーがいたら会ってみたいね」

「クフフフ、大丈夫だよ。れいれいなら近いうちに会えるよ……きつと楽しくなるからさ」

「うん？どういう意味だい？」

「それは内緒です」

内緒って、どこの泥棒ですか？

『世界の泥棒』という本に「女は秘密を守ってこそ美しくなる」と、どこかの女泥棒が言っていたな。この様子ならりこりんは将来、綺麗になるだろうな。まあ、今でも十分綺麗だけど。

「おっと！推理に夢中になってしまったね。料理が冷えてしまう」

「そうだった。ごめんねりこりん夢中になっちゃって」

2人でテーブルに着く。料理は温かい内に食べないとね。

「ほら、このソースもかけて」

私はりこりんのマグロ黒あんカツに、特製ソース、をかける。

「このソースも手作りなの？」

「そうだよ。色々なものを混ぜて作ったんだ。さあ、遠慮しないで」

「それじゃあ、遠慮なく。いただきまーす」

そう言つてりこりんは、かつぷりと可愛らしく囁ふり付き、

「むごがおおおおおおおおおおお!!?」

今まで聞いたことのない断末魔を上げ、のたうち回り倒れた。

りこりん!!? どうしたのさ!!? 体がピクピクしているよ。ああ! 口から泡まで吹いてる!!?

何がいけなかったんだ! ソースか? それともマグロが痛んでいたのか? いや、マグロは新鮮だった…… ソースはハバネロとジンジャーエール、その他を混ぜただけだし…… わからん!

いや、今は考えている場合じゃない。早く衛生科に運ばないと!



## 共同の依頼 報酬は……

「なあ、お前理子に何かしたのか？」

「何のことさ？」

「登校して開口一番に金次君からそんなことを言われた。」

「りこりんは登校して来なかった。いや来れなかったのが正しい言い方だろう。」

「昨日、りこりんが私の料理を食べて倒れたので衛生学部へ運び、学部の先輩に事情を説明したら「そのソースが死因ね……」と言われた。りこりんは死んでないよ！」

「まさか私の『特製ソース』が原因だったとは……ほんの少しアレンジしただけなのにね。私は別に何ともないのだけど。」

「今度お詫びにりこりんへ何か差し入れ持って行ってあげないと。」

「クラスの間で有名だぞ。あの理子が倒れてうなされているってな。しかも、その原因が零だつて噂だぞ。」

「何かの間違いじゃない？ 私は別にナニモシテナイトモ」

「おい、こつちを向いて喋れーすげえ怪しいぞ」

「金次君の追求に思わず、私は視線を逸らしてしまった。そんなにジッと見つめないで」

くれたまえ。

「まあ、その件はとりあえず置いて……私のところを訪れたのはりこりんの事だけじゃないんでしょう？」

「……何でそう思うんだよ？」

「あつ、今喋るのを躊躇つたでしょう。それが証拠だよ。金次君は女の子に頼るのを躊躇するからね」

「またお得意の心理学かよーああ、そうだよ」

私の指摘に金次君は「はあー」とため息を吐いた。

ため息を吐くと幸せが逃げると言うが、それは間違いだ。寧ろ、ため息は吐くといひ息を吸って吐くことは自律神経のバランスを整えてくれる。

特に血圧、血流には良い。身体に悩みを持つ金次君にはオススメだ。

「あなたは何か悩みを抱えていますね〜」

「お前、もう本当に占い師になれよ」

ダミ声で古畑任三郎風に喋った。これでOPがあれば最高なのだが。

それにしても占い師か。まあ、同級生ー女子に対して占い師の真似事はしているけどね。

「当ててあげようか。君はそうだなー。専門授業ー強襲科で何か困っている。授業に

ついていけない？いや、違うね」

金次君の強襲科としての成績は素晴らしい。射撃もそうだが特に身体能力は飛び抜けている。

そんな彼が強襲科の授業で遅れを取ることはない。

「授業は上手くやっている。なら、残る可能性は……… 単位かな」

最後の指摘に金次君は目を見開いた。『ビンゴだ。』

この学校では単位を修得——授業に出席するだけでは貰えない。

ならどうやって単位を修得するか？それは依頼をこなすしかない。

武偵は学生の内から依頼を受けることができる。

教務科が定めた依頼をこなすことでそれが生徒の単位になる。

依頼には様々なものがあり、特に高ランクな依頼⇨危険な依頼ほど多い単位がもらえる。しかし、それに伴い命の危険も高くはなるが………

「しかし、妙だね。強襲科の依頼——言い方は悪いけど危険な物が多いでしょう？それなら単位には困らないと思うんだけど………」

「危険な物ばかりとは限らねえよ。依頼人や公共施設の警護なんかもあるからよ」

「いやいや、それもある意味では危険な仕事だよ。今度、SPを見てご覧よ」

依頼人の警護なんかは特に危険が伴うだろう。武偵とはいえ撃たれば血が出るし、場

合によっては死んでしまうのだから。

まあ、プロの犯罪者なら警護——武偵なんか相手にせず、ターゲットだけを仕留めるくらいはできるだろうけどさ。

「なんか単位を見たら全然足りなくてな。このままだと進級できないかもしれない」  
自分の単位くらいは把握しないと..... 後から気づくと取り返しがつかないよ？

「それで私に相談してきたわけか。だったら、進級に足りる単位の依頼をこなせば.....」

「強襲科の依頼掲示板を見たら高単位の依頼は全部取られていた」

早い者勝ちか..... 善は急げと言うけど、今の金次君にはお似合いの言葉だね。

しかし、金次君。なぜ君はそんな嘘を言うのかな？ 依頼全部が取られたとしても低ランクの依頼をこなせば単位は稼げると思うのだけどな。

「でも強襲科と探偵科——共同で行う依頼だけは残っていた。だから.....」

「一緒に依頼をこなしてくれ。そう言いたいのでしょう？」

金次君は「ああ」と答えた。

共同の依頼か..... まあ、初めてではないし、何度かこなしたことはある。

それに、ここ最近是世界中で起きている未解決事件の関係性を探ることばかりやっていたので、気分転換にはなるかもしれないね。

「1000万」

「ーはあ？」

「依頼料は1000万円だ」

「お前はどこの無免許外科医だ!?？」

私のボケに見事なツッコミを入れてくれた。これなら漫才師になれるよ！

「ははは、ジョークだよ」

「本当に揶揄うなよ。一瞬、マジかと思ったぞ」

金次君に1000万円なんて払えるとは思っていないし、それに、彼にはそんな要求はしないよ。

「それで肝心の依頼の内容ー事件は？」

「コロシ（殺し）だ」

## 糸を繋ぐ為の情報

殺人とは、人を殺すことであり、人の命を奪うことである。

殺人は、重い犯罪として規定されていることが一般的である。法域によっては殺人を行った人は死刑に処される可能性がある。

「殺人」と言えば、一般的には自分以外の人を指すことを指していることが多い。だが、「殺人」に自分自身を殺すことも含めている場合もある。「自殺とは自分に対する殺人であり、罪であり、だから自殺してはいけない。」と言われることがある。自殺もやはり殺人として、殺人罪に問える、問うべきだと規定している国もある。

東京の住宅街一とある一軒家

一本道を挟むように左右に住宅が並ぶ。

一軒の住宅の庭に水道業者の車が止まっていた。水漏れがあったようだ。

「水漏れは見つかった？水漏れを見つけないだけでどれだけかかっているのよ」

家の家主の女性の声が床下に響く。

「まだですよ……まったく、床下に潜るこっちの身になれよ」

水道業者の男性は愚痴をこぼしながらも床下を這って進む。

床下は大人が這って進むのがやっとの広さだ。おまけに懐中電灯が無いと少し先も見えない。

懐中電灯の明かりを頼りに進み続け、家の土台——コンクリート付近のパイプから水漏れを発見した。

「コン」か…… うん？なんだこれ？」

コンクリートから何か飛び出ている。

細く、骨のように見えるモノが……

時刻は17時40分、この時季はこの時間でも太陽が昇っている。まだ夕暮れにはなりそうにない。

「うん、見事に死んでるね」

「——そりゃ、白骨死体だからな」

私と金次君はとある住宅街の一軒家に来ていた。

周りには同僚——武偵の皆さんも来ている。

場所は捜査情報の規制対象だから言えないが……

今、私たちの目の前には一体の白骨死体がある。

周りは青いシートに覆われ、外からは中が見えないようになっていた。これなら野次馬に写真やら動画を撮られることはないかな。

「この白骨死体はどこから発見されたのかな？」

「この住宅の土台コンクリートの中から発見された」

私の質問に同僚の武偵——鑑識科の鉄仮面同級生が答える。

「死体発見までの経緯は？まさか死体が自分から這い出てきたとか……」

「なわけねえだろう」

金次君、少しはジョークを言ってもいいでしょう？

私が呆れていると、

「この家の家主が水漏れがあるから水道業者に連絡、それで業者が床下に潜って土台近くの配管の漏れを調べていたら、たまたまコンクリートからはみ出ていた死体——白骨化した指を発見した」

鑑識科の同級生は淡々と答える。

うーむ、この鑑識科さんは仕事に生きるタイプだね。ギャグは受け付けてくれそうにない。

「説明ありがとう」

軽くお礼を言った後、私は再び死体に目を通す。



見事に白骨化しているね。

「南無阿弥陀仏……」

「お経が唱えられるのか？」

「お経はラップだと思えばどうってことないよ」

「そのうち絶対バチが当たるぞ」

これくらい大丈夫だよ。仏様も大目に見てくれるさ。

何処かの破戒僧は唱えるのが面倒だから録音したテープで唱えているけど……

「家主が殺して埋めたのか？」

「違うだろうね。死体が白骨化するのに必要な年月は、地中だと5〜8年しかかる。調べによると、この家が建ったのが10年前。家主が購入したのが2年前だからシロだね」

もしクロだったら、死体の埋まっている床下を調べさせようとはしない。

まあ、持ち主は家売るだろうね。

「この白骨死体は男か？」

「違うよ金次君。この人は女性だよ。ほら、ここ見てよ」

私は死体の骨盤部分を指差す。

「骨盤の形状が高さの低い横楕円型になってるでしょう？あと骨盤の下部の恥骨下骨

は、男性は逆V字型で狭いけど、女性は逆U字型で広い。女性は出産するので、骨盤腔の幅が広くなってる。だから、この骨は女性だよ」

「ーなあ、零。間違つてもこういうことを他の奴にはペラペラ喋るなよ。特に最後の辺りはな」

何を恥ずかしがっているの？これくらい保健の授業で習うでしょう？

金次君は将来、絶対に検死官にはなれないな。

骨盤部分だけじゃなく頭蓋骨からも性別が判断できるのだけどね。

男性の頭蓋骨は女性より大きく、がつしりしている。かたや女性の頭蓋骨は男性より小さく華奢で丸みを帯びている。眉の上の部分の眉弓（びきゆう）は、男性は大きく発達しているが、女性は小さく未発達だ。目の上と前頭骨が接する部分の眼窩上縁（がんかじょうえん）は、男性は太く大きい、女性は鋭く薄く小さい。耳の後ろの隆起した骨である乳様突起（にゆうようつき）や下顎骨の頤（おとがい）は、男性は大きく発達しているが、女性は小さく華奢だ。

「うわー金次君、肋骨を見てご覧よ。これは酷いね」

「ー酷い傷だな。刃物による傷か？」

2人して肋骨に注目する。刺されたような傷が10カ所もある。

私はルーペを取り出し、死体を観察する。

「傷口は――これは変わっているね。湾曲しており縁にギザギザの歯がついた刃物でつけられた傷のようだ」

「まるで鰐にでも襲われたような感じだな」

傷は刺創――刺してできた傷にも見えるし、切創――切られてできた傷にも見える。殺しに使われたのは普通の刃物じゃないね。

金次君が言ったように鰐にでも襲われたような傷だ。

前から刺されているから顔見知りによる犯行かな。

「おまけに後頭部に髪の毛一本分のヒビがあるよ」

「――鈍器による傷か？」

見落としやすいけど後頭部に小さなヒビがある。明らかに鈍器――固いモノでついた傷だ。

「うん？これは――金次君。ピンセット貸して」

「ほらよ」

頭蓋骨――に変わったものを発見した。

私は金次君からピンセットを借りて、それを摘んだ。

「何だよそれ？小さいな」

「何かの粒――これは砂と塩の結晶だね」

頭蓋骨に付着していたのは2mm程度の小さな白っぽい砂粒と塩の結晶だった。

「何で頭蓋骨に砂と塩の結晶が？砂はこの辺りのー家の土台か？」

「いや、家の土台に使われる砂利じゃない。これは海ー砂浜にある砂と似ているね」

「それじゃ、この被害者は海岸で殺された後、ここに埋められたのかー」

「そうかもしれないけど…… そうじゃないかもしれない」

海岸で殺した後、わざわざこの場所に埋めるなんて面倒だと思っけどな。

東京から離れた海という可能性もあるかもしれないけど、それこそ面倒だな……

「どこの砂浜の砂か調べてみようか」

「おいおい!? 砂浜って、どれだけあると思うんだよ」

「わからないよりはマシだよ」

取り敢えず採取した砂を保管する。専門家ー鑑識科の施設を借りて詳しく調べよう。

続いて死体が埋まっていた土台のコンクリートを調べる。

先に到着した武偵は家主の許可をもらって外側からコンクリートを砕き、中に埋まっていた死体を外に出した。

続けて家の土台を切り抜き調べ易くしてもらっている。これは助かるよ。

「コンクリートが乾くと死体の形がそのまま残るから助かるね」

「水漏れがなかったら永遠に見つかることなかっただろうな」

「確か10年前、この辺りは更地だったね」

「そんで家が建つてそのまま売りに出された、と」

それが犯人の狙いだろかね。

この辺りの土地事情に詳しい人間——不動産関係者、建築家…… 上げるとなるとかなりのパターンがある。

「あつ、金次君。ほら、この死体の顔が埋まっていた部分だけど顔の形が取れそうだよ」

「復顔できそうか？」

「それは鑑識科に任せようよ。私にはまだ復顔技術はないよ」

復顔とは、頭蓋骨をもとに生前の顔を法医学により推定し、型どりした物に粘土等で肉付けして義眼を嵌め、色付けしたりかつらを被せたりして復元する技術である。

身元不明の白骨死体の身元調査のために公開して情報提供を求めたり、考古学で遺跡などから発掘された頭蓋骨より、頭部の人種的特徴などを確認するために行われる。

「まだって…… いずれ身につけるつもりかよ。どんだけチートだよ」

「チートだなんて…… 大袈裟だよ」

ゲームじゃないんだからチートなんか使えないよ。金次君は本当に大袈裟だな。

「鑑識科に復顔してもらって行方不明者リストを調べてもらおう。該当者がいるかもし

れない」

「身元がわからないのは可哀想だからな」

東京武偵高校——鑑識科

「なあ、零。海にはどれだけ砂つぶがあると思ってるんだよ。調べるだけ無駄じゃないのか？」

死体から採取した砂つぶを顕微鏡を使って覗き込む私に金次君がそんな事を言った。ひどいなく無駄な事なんて無いと思うんだけどな。

無駄という言葉が嫌いな人が聞いたら金次君は確実に撃たれるかもね。

金次君の言葉を無視して顕微鏡を見てみると、

「これは…… 自然の砂じゃないね」

「どういう意味だ？」

「自然の砂じゃないと言っても、人工的な物だよ。見てご覧」

気になるものを発見したので金次君に見せた。

「なんだこれは？ゴツゴツした物が見えるぞ」

「自然の砂なら表面が滑らかだけど、人工的な砂は顕微鏡で見るとまるで岩だ」

「死体が埋められていたコンクリートが剥がれ落ちたのか？」

「いや違うね」

金次君の意見を否定し、彼に一枚の紙を渡す。

「鑑識科の分析によると長石と石英だったよ。この学校の鑑識科は本当に優秀だね」

「いつの間に頼んだんだよ。というか、お前がわざわざ顕微鏡まで使つて砂を調べなくてもよかつたんじゃないのか？」

何でも鑑識科に任せてばかりでは楽しくない……おっと、これは被害者に対して不謹慎かな。

「まあまあ、そう言わずにさ。自分で調べることによつて発見できるものがあるかもしれないでしょう？」

「ハア、お前つて奴は……まあ、その意見は賛同できるかな」

おお！珍しいね。私の意見に賛同してくれるなんて嬉しいよ。

おっと、それよりもー

「話を戻すけど、これはクラッシャー（粉碎機）などにかけてられ、細かく砕かれた物だよ」「つまり？ どういう事だよ」

「君は実に馬鹿だな」

「それ本当にやめろよ。あと何処ぞの猫型ロボットの声で喋るな」

金次君……いくら強襲科とはいえ、仮にも武偵なんだから推理くらいしようよ。

もし彼が探偵科に入ることになったら私が先生になってあげないとね。

「つまり被害者は海では殺されていない」

「じゃあ、一体何処で殺されたんだよ？ いや、塩の結晶はどうなるんだよ？」

「さあ？ まだまだ事件の糸を繋ぐ為の答えが足りない」

取り敢えず今あるモノを繋いでみるか。

被害者は海では殺されていない——陸地で殺された。

殺害に使われた凶器——湾曲して縁がギザギザ？ 鰐のような歯？

陸地の何処で？——人工の砂がある場所

人工の砂——砂時計？ 人工の砂浜？ 鑄造工場で排出される腐砂？

塩の結晶——やはり海岸での犯行？ 海魚の水槽

「もしかしたら被害者は水槽の近くで殺されたのかもしれないね」

「水槽？ ペットショップか水族館で殺されたとか」

いい線だね。水族館かペットショップ……金次君にしてはいい推理だね。

「おい！ 今、変なこと考えなかったか？」

「何の事かな？ 私にはサッパリだよ」

失礼だなく褒めているのに……それにしても水槽か。

死体の後頭部にはヒビが入っていたね。あれは鈍器によるものではなく、水槽に頭を



ぶつけたことによる傷かもね。

後頭部のヒビ―水槽に激突したことによる傷

「なあ、零。もう答えは出ているのか？」

「いや、ダメだね。まだ答えを導き出すには情報が足りない」

今ある情報では答えを導き出せない。これは復顔に期待してみるか。

## 糸を繫げ

人間は、男女を問わず、自分が生まれもった容姿によつて、必ず性格形成または社会的立場に影響を受ける。

人間は、その人の生まれつきの「容姿のタイプ」によつて性格や能力を判断される。また、外見から判断され、特定の役割を期待されることを幼少期から積み重ねることによつて、性格のうち、後天的に形成される部分がある程度影響され、人格そのものが変化する、ということも充分にあり得る。

程度の問題はあるが、容貌は、私たちの自己像、他人への認識、そして社会生活に何らかの影響を与えるのだ。

武偵高校 鑑識科 一

「一 お前が復顔をするのかよ」

「鑑識科の子達に頼んだらアツサリと承諾してくれたよ」

現場から切り抜かれたコンクリートを前に私と金次君はそんな会話していた。

鑑識科に復顔を試してみたいと頼んだら「構いませんよ。寧ろもつと頼ってください

！」と言ってくれた。鑑識科には相談に乗ってあげた子がたくさんいるからね。人の縁とは大事だ。

「ほら、手袋をはめて。金次君も手伝ってよ」

「俺もかよ。どうやればいいかわからないぞ。というか、お前はわかるのか？この前、復顔の技術はないと聞いたが……」

「大丈夫。頼むついでに鑑識科から聞いてきたから。あと、ドラマなんかで見たことがあるし、それらも頼りにすればやれるよ」

「ドラマかよ……それで大丈夫なのか？」

「できないことはないさ。さあ、手伝って。これも科学だよ」

「誰のセリフだ」

私はシリコンの入った容器を金次君に手渡す。

まずはシリコンで型を作成しないとね。

「これでどうやるんだ？」

「こうやるんだよ」

私は金次君の手を取り、一緒にシリコンをすくい上げると型を作る為、死体の埋まっていたコンクリートー顔が埋まっていた場所にシリコンを当て型取りをしていく。

共同で作業するのもいいね。

「なんか粘土細工を作ってるみたいだな」

「それと似たようなものだからね」

金次君はぎゅつとシリコンを当てて型取りをしていく。

力があるけど、あまり強すぎるとコンクリートが壊れてしまうよ。

数十分後——

暫くしてシリコンが固まり、形が崩れないようコンクリートから剥がしていく。

「——形が不細工だな………これじゃ役に立たないな」

「光の当たり方次第で影が形を作るんだよ——これならどうかな」

型取りしたシリコンに手を加え、顔の半分を作成する。

うーむ、まだまだだね………鑑識科にはまだ敵わないかな。

「今の私にはこれが限界かな」

「そんな事はないぞ。素人の俺から見ても立派なものだ」

「ははは、お世辞かい？」

「褒めてんだよ。そんなに卑下するな」

「ありがとう。金次君からそう言われるなんて新鮮だね」

次に予め作っておいた頭蓋骨のレプリカに型取りした顔半分——左半分のシリコンを貼り付ける。

「顔の右側も作らないと感じが掴みにくい。左右対称じゃないけど見た目の違和感はない」

「そうなのか？ てつきり同じかと思った」

人間の頭蓋骨は左右対称であることは滅多にない。ほとんどの場合で、何かしら歪みがある。骨の形を見ながら、顔の歪みに合わせて表情筋―粘土をつけていく。

顔に粘土を薄く塗る事で型との境をなくし、肉付けしていく。

「なんで皮膚を半分だけしか貼らないんだ？」

「顔の印象を見るためだよ」

そして皮膚を付けるのだが、顔全体に貼り付けると骨の形がわかりにくくなってしまふので、半分ずつ付けて顔の印象を見る。その後で全体の皮膚をつけて彩色し、毛穴やキメをいれていく。

「頬骨と鼻の形から日本人の系統だね。この人はきつと黒髪かな」

日本人の大部分は遺伝形質的には髪の色は漆黒であり、褐色や茶色を帯びている人は少数なので、黒のセミロングのカツラを被せる。

「茶色？ 黒色の眼球じゃないのか？」

「日本人の眼球色は黒と思われがちだけど、茶色なんだよ。遠目から見れば黒に見えるけどね」

義眼をはめ込む際、金次君がそんな事を言ってきた。

金次君、今度鏡で自分の眼を見てごらん。君の眼は見事な茶色だからさ。それにこつちの方が写真の写りがいいからね。

「よし完成だ」

復顔が終わり、完成したのは美人というよりも愛嬌のある女性だった。

少し微笑むと、その丸く肉付いた頬にまで表情が溢れそうだ。

「10〜20代前半くらいか？でも白骨化していたし、もつと歳をとっていたかもしれないぞ」

「若い女性だよ。頭蓋骨のつなぎ目がまだあったし、歯並びもしつかりしていた」

頭蓋骨のつなぎ目を見れば、成人の年齢は分かるが、50歳を過ぎると特定が難しくなる。一方、成長途上の子どもや未成年なら、成長の度合によつて、成人よりも細かく年齢を推定できる。たとえば、3歳の乳児なら、頭蓋泉門（ずがいせんもん）が埋まるので、1〜2年程度の誤差の精度で年齢を特定できる。

「それじゃ、この顔を基に行方不明者リストを当たってみようか」

後日――時刻は13時

私たちは東京足立区のとあるマンションの一室に来ていた。

遺体の身元が判明したからだ。名前は山中 苗さん。行方不明時18歳。昨日の晩にリストを調べていると、捜索願の中に彼女が該当した。

そして、今日の朝に彼女の身内——母親である山中 由梨さんに連絡し事件の経緯を説明した。電話越しに母親はかなりショックを受けていた。

今日、私たちがここに訪れたのは詳しい話を聞かためだ。

リビングで座っていると、由梨さんがアルバムを持ってきた。

うむ、親子だからか——彼女と同じように愛嬌のある女性だ。年齢は50歳ほど。ショックを受けたせいか頬の皺が目立つ。

「あの子に何が起きたか知りたいです」

テーブルにアルバムを広げ、私たちに娘について語り出す——その目に涙を浮かべながら……

「何としても犯人を見つけます」

そんな彼女を氣遣つてか、金次君が励ます。

金次君は犯人が許せないのか、その顔には正義感が溢れている。

警察官の鑑だね。いや武偵の鑑かな？

「スポーツは好きでしたか？」

「ええ、特に野外スポーツが大好きで」

アルバムには外でスポーツをしている写真がある。その中の一枚に、

「スキューバダイビングもしていたのですか？」

「将来は資格を取るのが夢でした」

海でダイビングを楽しむ光景を撮った写真があった。

「娘さんはいなくなる当日か、その前日に誰かと出かけましたか？ダイビングとかビーチとか……」

「いいえ、私の知る限りでは」

「いなくなるまで貴女とずっと一緒だったのですか？」

「山田 キリオと一緒にでした。キリオは今でも豊島区に住んでいます」

キリオね…… 私はアルバムの中に男と一緒に写っている苗さんの写真を発見した。

程よく日焼けした体格のいいスポーツマンタイプの男だ。年齢は20代。おそらくこの男がキリオだろう。

「そのキリオさんには娘さんがいなくなつた——当日、警察や武偵も話を聞いてきたのでしょう？」

「聞かれたそうですが、何もしてませんよ」

「何故わかるのですか？」



彼女の答えに金次君が疑問をもって尋ねる。

確かに何故そんなことがわかるのだ？

「彼は愛していました。羨ましいくらいに……」

「……喧嘩をしたことは？」

「愛し合っていたら喧嘩なんてしないでしょーあの子も夢中でした」

語り終えると口に手を当て、泣き出してしまった。

様子からして嘘をついてはいないね。

「お話ありがとうございます。全力で犯人を見つけてみせます」

「ーええ、お願いします」

話を聞き終えると私たちは部屋を出た。

「どうだ零。さっきの話は本当に思えるか？」

「うーむ、嘘をついてはいないから本当じゃないかな」

「またお得意の心理学かーこのセリフ何回目になることやら」

「さあ？それよりも今度は豊島区に住んでいるキリオ氏に話を聞いてみよう」

由梨さんから聞いたキリオ氏の住まいに向かうことにした。

何かわかればいいのだが……

東京 富島区一丁目住宅街

聞いた住所を頼りに来てみたが、立派な一軒家だ。表札には山田とある。間違いなくここだ。

キリオ氏は事件当時は21歳。現在は31歳で結婚しているそう。

さて、どうなる事やら…… 私はインターホンを鳴らす。

「はい…… どちら様ですか？」

ドアを開けて出てきたのは、フエーブの黒髪の30代風の女性だった。

少し痩せ気味だが、不健康と呼ばれる程ではない。左手の薬指には指輪をはめている。おそらく彼女がキリオ氏の結婚相手だろう。

「突然すみません。私たち東京武偵の者です。あつ、こつちは私の助手です」

「だれが助手だ。お前の助手になった覚えはないぞ」

私と金次君は武偵手帳を見せ、身分を明かす。

ドラマなんかでも刑事事があるからね。身元を明かせば相手も自分の事を相手に明かさなければいけないと思うし。

「武偵が何の用ですか？」

彼女が私たちに尋ねていると、

「沙良、誰が来たんだ？」

玄関に面した廊下の部屋から一人の男性が出てきたー山田 キリオだ。

「実は、10年前の山中 苗さんが姿を消した件を調べています。上がつてもいいですか?」

「…… ええ、どうぞ」

家主のキリオ氏は少し警戒してか、間を空けて私たちを家に上がらせた。武偵は評判があまり良くないからかなー。

「彼女は…… 苗は見つかつたのですか」

「殺されていました。何年も前のことです」

「おい!? いきなり」

キリオ氏の問いかけに私は答える。

それに反応して金次君が慌てるが無視する。こういったときは、前置きはない方がいい。

「…… そうですか。残念です」

キリオ氏は顔を伏せる。彼の妻ー沙良氏も顔を伏せる。彼女も苗さんの事を知っているのか。

「家の中を見せてもらつてもいいですか?」

「苗と暮らしたのは一ヶ月だけ。10年も前ですよ…… ご自由にどうぞ」

「ありがとうございます。さあ、行こうか金次君」

キリオ氏の許可をもらい、家の中を調査していく。

調べている間、キリオ氏とその妻、沙良氏も付いてきた。自分達の家が調べられていれば気になるよね。

私と金次君が一階を調べていると、

「おや、これは……金次君。これを見てよ」

「ーその水槽がどうかしたのか？」

広くピカピカしている黒塗りの床が張つてある、リビングの一室に水槽を発見した。

4面の150cmのガラスの水槽だ。

「これはミノカサゴですね。色合いが綺麗だ」

「ええ、そうです。私の妻が好きでね……苗も好きだった」

水槽の中にはミノカサゴが泳いでいた。

私はヒョウモンダコとホオジロザメが好きだが……

「ー見かけは綺麗だけど、背びれには強い毒がある」

私が水槽を鑑賞していると、ギシと何かが軋む音がした。

音のした方を向くと、キリオ氏が歩いていた。

「何か？」

「すみませんが、床を調べてもいいですか？」

キリオ氏が立っている床が軋んでいる。立派な家なのに……

足を退けてもらい、床を調べていると、

「板がそつているのですよ」

「初めからそうよ」

夫婦揃って床について話し出した。

うーん、成る程ね。

「海水魚の水槽をここに置いたことはありませんか？」

「多分……ずっと前に。なぜ？」

「誤ってこぼした事は？例えば壊れて」

「覚えてませんよ」

「自由に見てもいいのですよね？」

私の質問にキリオ氏は「ええ」と短く答えた。

私は床に伏せ、バタフライナイフを取り出すと軋んでいる板を剥がした。簡単に剥がれたね。

「何なんですか一体？そこに何かあるのですか？」

「終わったら戻しますよー見てください、金次君」

「これは砂か？」

リビングの板の下から砂つぶを見つけた。死体についていた砂つぶは水槽のものだった。

人工の砂——海水魚の水槽

「キリオさん、水槽はここにあった。ガラスが割れて海水と人工の砂がここに溢れたんでしょ？」

私の問いかけにキリオ氏は顔を伏せ、妻の沙良氏も顔を伏せ夫の後ろに隠れた。

「すまないが帰ってくれ」

「いいですよ。また来ますので——それじゃ行こうか金次君」

「つて、おい!? 零」

採取した砂を持って家を後にする。

「いいのかよ零。あの夫婦メツチャ怪しいぞ」

「金次君から見ても怪しいかい？ まあ、同意見かな」

あの人は怪しい。おそらく犯人は間違いない、あの人だ。

「下手したら証拠を消されるかもしれないんじゃないのか？」

「大丈夫。証拠は消されないよ」

あの証拠はまず消されない。これは保証できる。

あの人は消そうとするが、できないだろう。  
あとは逮捕するためのステージを作るだけだ……  
……これには金次君が最適かな。

## 事件の後は

キンジ視点一ー

俺と零は後日、再び山田 キリオの家に来ていた。

万が一に備え、他の武偵それも強襲科の連中も応援に来ていた。

護送車まで用意して、逮捕する気満々だな。

「おい、零。このジュラルミンケースは何なんだ？」

武偵高を出る際に零から渡されたが、気のせいか重い。しかし、片手で持てない重量ではない。

「鑑識の道具一式が入っているんだよ。鑑識科の子たちから借りてね」

鑑識科から借りたって、自分達で捜査せず他人に貸し出して捜査させていいのかよ…… 今回の事件は鑑識科にも単位になるのによ。

それにしても、こいつは鑑識科に顔が利く。いや、鑑識科だけでなく武藤の所属する車輛科や俺と不知火の所属している強襲科にも顔が利く。

特に探偵科と諜報科では絶大に信頼されている。

「さあ、金次君。事件にカタをつけようか」



そう言つて零は家のインターホンを鳴らした。

望むところだぜ。こんな事件はとつとカタをつけるのに限る。

死体を埋めるなんて犯人にはムカついていたからな。

昨日と同じように家主の山田 キリオとその妻である沙良が出迎えてきた。

家が上がつて早々、俺たちは一番に水槽のあるリビングに向かった。

気のせいか床が昨日来た時より綺麗になっているぞ。

「随分と綺麗になつてますね。掃除機をかけたか？」

「掃除機はかけました。何をしているのか教えてくれませんか？」

俺たちは床に伏せ、床板を剥がしたが砂は綺麗に無くなつていた。

入念に掃除したようだなー綺麗だ。

「事件の真実——この部屋の本当の姿を解く作業ですよ。金次君、部屋の明かりを消して」

零に言われて俺はリビングの明かり——部屋の入り口に備えつけられたスイッチを切つた。

スイッチを切ると案の定、部屋は真つ暗——いや、水槽のライトだけが光っている。

これから何をするつもりだ？

疑問に思っていると、霧がジュラルミンケースから何かを取り出した。霧吹きのようなだが……

「さて、出てくるかな」

霧がシュツシュツと霧吹きを床に吹き付ける。

「何をするんですか<sup>!</sup>? 床が濡れるでしょう」

「おいおい、キリオ氏が怒っているぞ。」

しかし、そんな事お構いなく床に吹き付け続ける。

「こいつは人の話を聞かないタイプか……」

「ルミノールだからすぐに乾きますよ」

ルミノール……確か化学捜査に欠かせない試薬で過酸化水素とともに用いると、血液の存在を強い発光で知らせる。その発光反応をルミノール反応と呼ぶんだったよな…… それを吹きかけていることは、ここに血液が付着していたかもしれないんだな。

「うーむ、表面は反応しないか……」

「血痕があるか調べているんですか?」

「主人は何もしていないのに何故こんな事をするの<sup>!</sup>?」

妻の沙良は旦那が疑われていると思ったのか、少々ヒステリック気味だ。

血痕がないなら、被害者はここでは殺されていないのか？

暗がりからチラツと零を見てみるが、落ち着いている。気のせいか笑っているようにも見えるぞ？

「金次君、ケースからブルーレーザーを取り出して、ここを照らしてくれないかい」

「ルミノールでも出ないのなら、レーザーでも見えないだろう？」

「ルミノールは表面だけだよ。レーザーは血液中のタンパク質を求めて、板の中まで届くよー床板は楓なのに磨かず、塗料だけが塗ってある。変だとは思わないかい？」

確かに変だ。楓は磨けば光沢が出るのに、その上に塗料ー黒を塗るなんておかしい。

「何かを隠すために塗ったのか！」

「そうだよ。さあ、その何かとご対面しよう。レーザーを照らして」

零に言われるがまま、俺はケースからブルーのレーザーポインターを取り出し、床に向かつて照射した。すると、

「これは……！」

「これがこの部屋の真実だよ」

床板にはべつとりとした血痕が姿を現した。

点々としたモノもあれば、被害者のものだろうか手形の血痕もあった。

被害者はここで殺されたのか！

「消していいよー明かりを点けて」

明かりを点ける。再び部屋が明るくなった。同時に血痕も見えなくなったが……

夫婦は目を丸くして、何も言えない表情だ。これで言い訳はできないぞ。

「キリオさん、ここで何があつたか言いませんか？」

「私は何も知らない！」

零の問いかけにキリオは否定する。何を言つても無駄だぜ。あんなに血痕を残しておいて、何も知らないなんて白々しいぞ。

まさか「自分の血です」なんて言わないだろうな？

「苗さんがいなくなった日に激しい喧嘩になった。その際、彼女は水槽に頭をぶつけ脳震盪を起こし倒れた」

キリオの代わりに零が事件の経緯を説明する。まるで推理小説の探偵だぜ。

なるほどな。遺体の頭部にヒビがあり、塩の結晶が検出されたのは、水槽が割れて水を被つた所為か。おまけに海水だけでなく、水槽の砂も一緒に……

「怒りに任せて殺そうとしたが、意識を取り戻した彼女が貴方を押しのけて這つて逃げようとした」

床板に被害者のモノと思われる手形があつたのは這つて逃げようとした所為か。

「そうはさせないと息の根を絶つー苗さんを殺すのに何を使ったのですか？」

逃げようとした被害者を衝動に任せて殺すなんてー見かけによらずひでえ事をしやがるぜ。それだけでは飽き足らず、その遺体をコンクリートに埋めるなんて、想像するだけで胸くそ悪い。

しかし、凶器は何なんだ。遺体には罅に襲われたー湾曲しており縁にギザギザの歯が付いた刃物で殺されていたが、凶器の正体がわからない。

「止してくれ！殺してはいない！」

キリオが声をあげて、全面否定する。

まだシラを切るつもりかこいつは……！

「凶器が普通のナイフではないのは確かだね。そして、死体を東京の住宅街に運んで、流し込んだばかりのコンクリートに埋めた」

「私は知らないんだ！本当に知らない」

「キリオはあの日は家にいませんでした。仕事があつたから！」

「それじゃ何の為に床に塗料ーラッカーを塗つたんだよ」

血痕が残っている床に塗料、それもラッカーを塗るなんて怪しすぎるぜ。

「過去から逃げられなかつたようですね」

「私は殺していない！愛していた！今でも愛している……！」

「……」

キリオの言葉に場が静まり返った。妻の沙良はショックを受けたのか、絶句している。

「…… 沙良、すまない。謝るよ」

「まだ愛しているの？」

「山田 キリオさんを殺人の容疑で逮捕します」

向かい合う夫婦に向かつて、零が冷酷に淡々と容疑を告げる。

同僚の武偵の一人が手錠をはめる。

「…… 父に連絡して弁護士を――殺していない。大丈夫だ」

妻を落ち着かせるためか、キリオは最後にそう言つて連れて行かれた。

「金次君、私も一緒に行つてくるよ」

後について零も去つていく。

「俺も行くぜ」

「金次君はこの場に残っていて。ここが犯行現場だからまだ詳しく調べないといけないから、見張つておいてくれないかい。あとで専門家を派遣するから」

現場保存か…… 疑いたくはないが、妻が夫の為に証拠を消すかもしれないしな。

そう言えば掃除機をかけたのは誰だ？

「ーわかかった。できるだけ早くしてくれ」

「勿論さ。それじゃ宜しくね」

そう言つて部屋から出ていった。犯行現場ーそれも殺人現場にはできるだけ居たくはない。

強襲科でも殺人ー現場を見たことはあるが、あそことは違った雰囲気があるんだよな……

気分転換に部屋の中を見て回っていると、

「これは山登りの写真か？」

リビングの壁に額縁に入れられた写真を見つけた。

夫婦揃つて山登りしている光景を捉えた写真だ。これは彩雪期の富士山か？

リュックを担ぎ、手には……これはピッケルか。

うん？ 待てよ。凶器は湾曲しており、縁にギザギザの歯が付いた刃物だったよな。

この写真に写っているピッケルがそれに当てはまるような……

「なあ、奥さん。あんたは旦那と山登りするのか？」

俺が背中越しに質問すると、

「ええ、そうよ。それで殺したのよ」

俺に拳銃を向けた沙良がそこにいた。

くそっ！油断した。まさか一般人が拳銃を持つているなんて。

銃規制が緩いものにもほどがあるぞ。いや今はそれどころじゃない。

さつき、この女は「殺した」とハッキリと言ったぞ。それじゃ犯人は

「フー、フー、キリオが留守だったから……ハー、ハーここに来て……苗に言ったのよ。キリオを返してほしいって」

興奮しているのか荒い息遣いでジリジリと俺に接近してくる。

どうする。できることなら荒っぽいことはしたくないが。

「なあ、取り敢えず銃を下ろしてから話そうぜ」

「それまでは私と婚約していたのに……辺りは血だらけ。そこらじゅう……今は見えないけど、わかってるわ。消えてないんでしよう」

俺の声が聞こえないのか、さらに距離を詰める。

ダメだ！話ができる状態じゃない。

「フグウ……ハー、死体の重さ、忘れられない」

「気が済むまで付き合うから、落ち着けよ。その銃を俺に渡してからさ」

「できないわ！ごめんささい……！だってキリオを逮捕したじゃない！」

距離を詰められ、いつの間にか背中に壁が当たる。逃げ場がない。

仕方ない、荒っぽい組み倒してから……



「そこまでにしてくれませんか？」

突然、部屋の入り口から声が聞こえた。

俺が目を向けると同時に彼女も拳銃を構えたまま声のした方を向くと、

「いいですか。できれば私も撃ちたくはない」

拳銃ローウェブリー・リボルバーを構えた零がいた。

零。戻って来てくれたのか！

「この10年間、さぞ苦しかったでしょう」

「フウ……ヌグ……ハ、ハ」

零は落ち着いた声で沙良氏に語りかける。

零の説得に彼女は涙を浮かべて、拳銃を持った手をガタガタと震わせる。

おい!?今にも撃ちそうだぞ。

しかし、零はそれでも距離を詰め、彼女の拳銃に手を当て下に降ろさせると没収した。

手から拳銃を離れた彼女は床に手をつき、泣き出してしまった。

「大丈夫かい？金次君」

「あ、ああ。なんとかな。助かったぜ」

「さあ、奥さん。行きましようか」

床に伏せた彼女の肩に手を当て、立ち上がらせて連れて行く。

時刻は16時30分――

沙良氏を護送車に乗せて見送った後、教務科に事の経緯を報告し終わると、俺と零は豊島区を歩いていた。

「なあ、零。お前は旦那じゃなくて妻の沙良が犯人だとわかっていたんじゃないのか？」

俺は開口一番に零に疑問をぶつけてみた。

「さあ？なんでそう思うんだい？疑問には必ず理由がある。言ってみてよ」

零はしらばっくれているのか――嘘をついている。

気づいていないだろうが、お前は嘘をつくとき目が僅かに大きく見開くからな。

ありのままを話すぜ。

「あの時、お前は旦那を犯人と断定した。しかし、お前にしては早計すぎると思った」

「ふむ、それで？それ以外にはないのかい？」

「そして、救助にくるタイミングがあまりにも良すぎた。まるでここぞとばかりに機会を伺っていたかのような」

俺が話し終わると、零は腹に手を当てて「ぶははは」笑い出した。

何なんだ？突然笑い出してよ。そんなに俺は可笑しい事を言ったか？

「強引な論理的推論だけど大正解。金次君70点」

「70点って、100点じゃないのかよ。それと助けるなら早くしてくれよ。マジでヤバかったんだからな」

「ごめん！本当にごめんね。どうしても彼女の犯行を裏付ける証拠、いや、状況を作り出したかったんだ」

状況を作るだど？という意味だ。

「沙良氏は旦那キリオ氏を愛していた。そんな旦那が他の女を愛していると云ったら？それも自分が殺した女だったら？」

まあ、逆上かショックを受けるだろうな。自分が殺した女となれば尚更だ。

「そしてキリオ氏が誤認逮捕され、連れて行かれたら混乱するだろうね。『自分のせいでキリオが！どうすればいい!!?』と錯乱し、ヤケを起こす」

だからキリオを逮捕したのかよ。旦那を愛している妻の心情を利用して……おまけに俺を囮につかうなんて。

「――お前、悪魔だな」

「悪魔だなんて大袈裟だよ」

ステッキを裏手でクルクルと回転させながら答える。悪魔がいたらこんな感じか？こいつなら悪魔でも騙せそうだな。

「それに誤認逮捕でもないんだよね」

「キリオの事か？殺人ーあの男は殺してないだろ？」

「確かに殺してはいないけど、殺人者を庇ってはいたね」

庇う？待てよおい、それって？

俺の心情を察したのか零はコクリとうなづく。

「犯人蔵匿及び証拠隠滅の罪、わかるでしょう？」

犯人蔵匿及び証拠隠滅の罪とは、刑法に規定された犯罪類型の1つで、犯人をかくまったり証拠を隠滅したりすることで、捜査や裁判など国家の刑事司法作用を阻害する犯罪のことをいう。

「キリオ氏は妻が殺人を犯した事を知っていたんじゃないのかな。護送するついでに彼から『妻は春にはリビングの床を異常なまでに掃除する』という発言をした」

「その発言が何になるんだよ？事件とはーいや……！ー！」

「そう。10年前の春に苗さんは行方不明ー殺された。それと同時に妻の沙良氏はリビングの床を異常なまでに掃除しました。あまりにも状況がぴったりだと思わないかい？」

確かにぴったり過ぎる。自分の妻がリビングの床を決まって春ー苗氏がいなくなつた時期に、異常なまで掃除をする妻を見れば不審に思うはずだ。

「内心では妻が殺したんじゃないかと薄々、感じていたと思うよ」

「証拠はあるのか？」

「さあね。証拠はないけど尋問すればわかると思うよ。ウチの学校の先生——尋問科は優秀だから…… ふわあ」

零は一通り話すと口元に手を寄せて、いきなり欠伸をした。目をゴシゴシとかいて、眠たそうだ。

そうか。『脳の疲労』が近づいているんだな。

「ごめん…… 金次君。何だか眠くなつて…… きた」

頭をコクコクと上下に揺らし、今にも倒れそうだ。

参つたな…… ここから学校の寮までは距離があるぞ。

休ませようにも…… いや、ある。

ここ豊島区は近い。俺の実家である巣鴨に。

「取り敢えず俺の実家に運ぶが、いいか？」

「うん…… いいよ。金次君の実…… 家か。初めてのほうも……」

「もう喋るな。寝てろ」

ウトウトする零をおぶつて歩き出すと、安心したのか零はそのまま眠ってしまった。手からステッキがカランと音を立てて、地面に落ちた。

前は眠つてもコレだけは握っていたのにな。

俺は拾って持ってみると、少し重量があることに気づいた。

丁度、刀くらいのも重さだ。仕込み杖か？

俺が杖をいじっていると、♪♪♪と音楽——携帯の着信音が聞こえてきた。

零のポケットからだ。この着信音はシューベルトのピアノ5重奏曲『鱒』だ。シューベルトが好きなのか？

勝手に出るわけにもいかないので、無視して歩き出す。着信音は止まない。

おい、一体誰だよ!!？もうずっと鳴り続けているぞ！シツコイにも程があるぞ。

「すまん零」

俺は零に一言、謝ってから彼女のポケットから携帯を取り出した。

着信画面には『父』とあった。零の親父さんか……娘に電話を掛けるのにしては異常だぞ。

俺は恐る恐る通話ボタンを押し、

「あー、もしもし」

『おや？おや？誰かな君は？確かに娘の番号に掛けたはずだか……』

電話に出たのは若い声の男だった。

「突然すみません。おれ……自分は零の同級生の遠山金次といいます」

『金次君ね。なるほど金次……金次ね』

電話越しでブツブツと喋る。

零には悪いが何だか不気味な親父さんだな。俺の父さんとは真逆——まるで父さんを裏社会の人間にしたような感じがする。

『どうも初めまして金次君。私は玲瓏館 誠司。零の父です』  
自己紹介に俺は「どうも」と短く答える。

さつきまでの不気味な雰囲気とは違ってカラツとしている。

何なんだこの人は？

『私の娘は今どうしているのかな？はっ！まさか私の娘を無理やり連れ込んで……』  
「違いますよ！実は……」

勘違いした親父さんに俺は経緯を説明する。

零は親父さん似だな。人を小馬鹿にする感じがよく似ている。

『ハハハ、ごめんごめん。金次君は何だか押揃い甲斐あるから少しふざけてしまった』  
マジで勘弁してくれ…… この親あつて子ありか。

『まあ、さておき金次君。零は眠っているんだったね。なら伝言を頼まれてくれないか  
いっ』

伝言か…… まあ、それくらいならいいか。

「いいですけど」

『ありがとう。それじゃ話すけどいいねー実は今度うちで海外から居候ーホームステイする子を預かることになったから、顔合わせの為に今度の土曜か日曜に実家に帰っておいでと伝えてくれたまえ。それじゃ、いづれまた』

一方的に言うとそのまま電話は切れてしまった。

いづれまたって、まるで会いに行くかのような口ぶりだな。

俺はそんな事を考えながら、巣鴨にある実家を目指した。



## 実家で休ませてもらったからお礼を

「うーん…… はあー、よく寝た」

目を覚ました私は身体を起こし、大きく伸びをして周りを見渡す。

布団が敷かれた和室ーどうやらここが金次君の実家のようなだね。

眠ってしまった私の為にわざわざ布団まで敷いて寝かせてくれるなんて、本当に優しいね。

感傷に浸っていると、ガラツとふすまを開けて、

「よう、起きたか零」

金次君が入ってきた。こちら、ノックくらいしたまえ。いや、ここは金次君の実家だし、それにふすまをノックするのは不自然かな。

「いやーごめんね。実家にお邪魔させてもらってさ」

「別に気にすんな。休ませるには俺の実家が近かったからな」

近くにね。豊島区からここまでとなると…… 巣鴨辺りかな。

見るからに和風でかなり古いが、この部屋の作りからして広い家だ。

豊島区で古い一戸建ての多い住宅街となると巢鴨くらいだね。

「そうだ零。寝ている間にお前の親父さんから電話があったぞ。何でも今度の土曜か日曜に実家に帰ってこいだよ」

父さんから？珍しいね。父さんは自分から電話を掛けることは滅多にない。

私の知る限り、自分から誰かに電話を掛けた事があるのは8回くらいだ。

「教えてくれてありがとうね金次君」

私がお礼を言うと、金次君は「ああ」と短く返答した。

しかし、電話があつたという事は彼は私の携帯を開いたという事だよ。まあ、そこは大目に見てあげよう。事件の時、彼を囮に使ってしまったし、これでおあいこにしよう。

「あと、ここう言ったら悪いが…… お前の親父さん電話を掛けるのにしつこいぞ。豊島

区を歩くーお前をおぶっている間、ずっと電話が鳴りっぱなしだった」

なんと!??それなら電話に出るしかないね。

金次君の様子からして嘘はついてない。

父さん…… 電話くらい程々にしようよ。

「ごめんね。今度、父さんに会ったら注意しておくからさ」

「会ったらって、親父さんに今は会えないのか？」

「うん。何かさ海外で仕事をしているんだって」

「海外で仕事——何をしているんだ？」

「探偵だよ」

父さんは探偵をしている。それも人探し専門にしている。

人探しに関してはそこら辺の武偵よりも秀でていていると思う。

前に仕事を手伝った事があるけど、本当に凄いなだね。

20年も前に行方不明になっていた人——殺害された死体を見つけ出したのだから。

父さん曰く「生きた人間と死んでいる人間を探すのでは、時間と手間が違ってくる。

依頼を受けた時点でそこを判断できれば探すのは簡単さ」らしい。

「珍しいな。今時、探偵なんて」

「なんか武偵は肌に合わないらしいよ。まさに、武偵が主流の時代に生き残った人さ」

「シーラカンスかよ」

シーラカンスね…… うーん、何か父さんには合わない表現だ。

私が考え込んでいると、

「キンジ、連れの同級生は起きたか？」

「兄さん」

部屋に誰かが入ってきた——男だ。

男にしては長い――腰まである長髪、そして胸元を少しはだけさせたシャツを着ている。

その顔――目が金次君と似ている。さっきの金次君の発言からして、この人は……突然、お邪魔してすみません。初めまして、東京武偵高校1年の玲瓏館・M・零といいます」

「ああ、初めまして。俺は遠山 金一。キンジの兄だ」

やっぱり金次君のお兄さんだったか。なかなかのイケメンだね。

私の目から見て、かなりの修羅場を潜り抜けてきたのが分かる。

前に金次君からお兄さんは武偵庁に勤める特命武偵だと教えてもらっただけ。

「取り敢えず、居間に移動しないか？起きて早々に悪いが、君と話をしてみたい」

「おや？私と話をしてみたいとな。奇遇ですね。私もアナタと話をしたかったんですよ。」

「ええ、構いませんよ」

私はそう言って、金一さんと金次君の後に付いて行く。

寝ていた部屋から卓袱台のある畳の居間に移動した。

卓袱台か……私の家にはないな。

「まあ、座ってくれ。キンジ、台所からお茶と菓子を持って来い。客人に何も出さないワ

ケにはいかん」

「あつ、お構いなく。突然、お邪魔してしまったのに……」

「気にしないでくれ。これも我が家のあり方のようなものだ。ほら、早くしろキンジ」  
「分かったよ。兄さん」

そう言つて、金次君を台所に下がらせる。

金次君と同じで律儀な人だな。この兄あつて弟ありだね。

「すみません。何から何まで親切にしてもらつて」

「キンジが君をおぶつて帰つてきたから驚いたが、事情を聞いたら何でも『脳の疲労』で  
休眠に入ったそうだな」

『脳の疲労』——これは衛生科と救護科の先輩から聞いた事だが、私の脳は人一倍疲労し  
やすく、限界を迎えると休息を欲して突然の睡魔が襲つてくる。

中学時代はこんな事はなかったんだけど…… 武偵高校に入つてからだな。

「そうなんですよ。武偵高校に入学してから休眠に入りやすくなつて」

「武偵高——キンジから聞いたが、君は一般中出身者だそうじゃないか。何でまだ武偵  
になろうと思つたんだ？ 正直に言つて武偵は危険な仕事だ」

「あー、それなんですが……」

私はオペレーター——国立劇場で金次君から聞かれたように答えた。

「つまり親御さんに送り込まれたと…… 災難だったな」

「ははは、まあそんなところですよ」

金一さんは呆れ気味に答える。やはり兄弟だね。呆れ顔までよく似ている。

「でも入学してから悪いことばかりじゃないですよ」

「ほう？ いい事でもあったのか」

「はい、中学では習わなかったことばかり——武偵の授業は新鮮で学習意欲が湧いてきます。あつ、私は探偵科を専攻します」

「探偵科か…… あそこはドンパチとはあまり無縁だから危険はそこまでないか。そういうえば、強襲科のキンジとは気が合うそうじゃないか。君が寝ている間、あいつが言っていたよ『零には本当に世話になっている』とな」

金次君がそんな事を言っていたなんて…… 私の前では喋った事はないのにね。あの照れ屋さん……

「金一さんは武偵庁に勤務しているのですかね。今日はお休みですか？」

「いや、偶々仕事が早く終わったから実家に顔を出しにきたんだ。俺は……」

「乃木坂にお住まいですね」

「……！俺は君に乃木坂に住んでいるとは言つた覚えはないが？」

金一さんは驚いて目を丸くしている。

はは、驚いた顔までそっくりだ。ここまでそっくりなのはこの兄弟くらいかな。

「さつき仕事が早く終わったから実家に来たといいましたよね？となれば巣鴨に近い場所にお住まいなのは確実です」

「巣鴨に近い場所なら他にもあるが？」

「金一さんが着ているシャツーそれは乃木坂にある東京ミッドタウンのユニクロの品です。この東京でファッション店は沢山ありますが、服の状態からしてかなり愛用していますね。そうなれば、ユニクロで買い物ー失礼」

私は金一さんの顔をジーっと眺める。うん、顔色も良く健康だ。食生活は規則正しいようだ。

「俺の顔に何かついてきているのか？」

「顔色も良く健康ー食生活はしっかりしている。コンビニで済ませず、ご自身で料理している。乃木坂周辺はコンビニが少ないからスーパー特に六本木ストアーで食材を買って調理してますね」

一人暮らしとなれば自炊するしかない。

金一さんの服装は綺麗だ。しっかりと洗濯をしている証拠ー綺麗好きな人は料理が得意な事が多い。

どうせ料理するなら綺麗な環境ーちゃんとした部屋で料理したいからね。

そして食材も選んでから料理する。コンビニで食材を買うとなると限られてくる。

「医学にも精通しており、外科医のライセンスを取得している」

見るからに清潔的で普段から衛生に注意している。これは医者によく見られる特徴だ。おまけに発音に英語のニュアンスが混じっている。

「身体に何らかの問題……この季節、長袖のシャツと冬物ジーンズを着ている様子か

ら自律神経が狂っており、体温調節がうまくできていない様子だ」

「驚いたな。まさか、それだけの情報で俺の事を分析するとは……とても一般中出身とは思えん」

「明白ですよ」

金一さんから絶賛されたが、私はまだ未熟者——知識が足りていない。まだまだ勉強することは沢山ある。

「そして変わった趣味、いえ性癖をお持ちですね」

最後に私は気になっていたことを言う。これは大事な事だ。今後、金一さんが人生を全うするために!!? 私からの警告なのだ。

「……………それはどういう意味だ?」

「女装癖があるでしょう?」

一瞬だが私から目を逸らした。ピンゴだね。



「……なぜそう思うんだ。理由があるのだろうか？」

「貴方は歩く時、何度かつま先に体重を乗せて歩きましたよね？一般的に男性は踵に体重を乗せて歩くのに……見るからに足に怪我を負っている様子はない。そうなる」と、よく頻繁につま先に体重を乗せて歩く——これは女性の歩き方です」

女性の私はつま先に体重を乗せて歩くから、金一さんの歩き方——つま先に体重を乗せて歩くから変だなと思ったんだよね。

「髪の手入れもしっかりしている。仕事終わりにシャワーを浴びてきましたね。香りからして、これは女性に人気があるティエラコスメイクスのシャンプー」

おしやれを思いきり楽しむ大人のための、美髪ベースメイクシャンプー・トリートメント。

カラーリングやパーマによる乾燥、紫外線のダメージから髪を守り、艶やかでしなやかな髪へ導く。

熱に反応して蓄積ダメージを補修するナノリペア成分や、アルガンオイル、紫外線ダメージから守るシアバターなど、美髪成分を贅沢に配合しているから大人の女性に人氣がある。

因みに私はFORM／フォルムを使っているけどね。

「お肌の手入れにも気を使っていますね。男性にしているのは肌の水分と油分のバランスが取

れている。女装時の服装は……」

私が続けて結果を喋ろうとしたら、金一さんはガタンと卓袱台に顔をつけて、

「降参だ…… それ以上は言わないでくれ」

燃え尽きた。真つ白に燃え尽きてしまった。ジョーいや、金一!!? 立つんだ金一!!?  
「そんなに落ち込まないでください。金一さんはパーツが整つてますし、女装しても大丈夫——綺麗だと思いますよ」

「ガバツ……!」

「それに趣味は人それぞれですし……」

「…… もうやめてくれ」

まずい!?? さらに落ち込んでしまった。言い方がまずかったか…… でも正直に言ったただけだ。金一さんは見るからに美形だし、女装——化粧や服装次第では女性にか見えないだろう。

「何か理由があるのでしよう? お仕事の関係——潜入調査ですか?」

「…… キンジが信頼している君になら話してもいいかもしれんな。実は……」

そう言つて金一さんは身の上——遠山家の男子について語り出した。

ヒステリアモード——性的興奮で自身の能力を何倍に引き上げる遺伝子。自分たちは遠山 金四郎の子孫である事。

「成る程…… 金次君が異性で傷ついたのはそれが原因だったのですね」

「キンジが君に話したのか？ 珍しいな。あいつがことを女子に喋るとは……」

「前に彼を分析してみたんですよ」

「あいつはわかりやすいからな。君にはお見通しか」

金次君はすぐにわかるからね。金次君の事を考えていると、

「お茶と菓子を持ってきたぞ」

台所からお茶と菓子を持って金次君が戻ってきた。

樽をすれば何たらだね。

「零、兄さんと何を話していたんだよ？」

「人生についてさ♪」

そう言つて出されたお茶をズズツと啜る。はあー、お茶がうまい。

「人生つて、兄さんこいつに助言でもしてやったのかよ」

「まあ、そんなところだ」

「そうそう。特に女装について金一さんから助言をいただきました」

ジョークで言つたつもりだったが、金一さんはまたしても卓袱台に顔をつけてしまった。

そんなに恥ずかしいのかな？

「…… まさか、兄さんを分析したのかよ!?」

「あー、うん。女装は趣味ではなく、仕事をするために必要なトリガーだという事をね」  
「…… ゴフツ……！」

「頼む。それ以上は言うな。兄さんのライフはもうゼロだ」

まさかここまでとは…… 意外だったな。金一さんを女装ネタでいじるのはやめてあげよう。しかし、反応を見ているとオモシロイ。

「それと君の事ーヒステリアモードについても聞かせてもらったよ」

「…… ツ……！聞いたのか。軽蔑しただろう？」

「どうして私が金次君を軽蔑する必要があるの？」

「気持ち悪くねえのかよ？女に興奮して強くなる体質なんて……」

金次君は中学時代にその体質を女子に利用されて、都合のいい正義の味方として使われていたそうなの。

だから異性や正義の味方という言葉に対して、あんなに凹んでいたのか…… トラウマってやつかな。

「全然。金次君はご先祖様が嫌いかい？自分にそういう体質を受け継がせた家の人がーお父さんやお兄さんを含めて」

「そんなわけねえだろう!!？」

金次君は声を張り上げて否定した。

「金次君。君がその力を代々受け継いだのには、何か意味がある筈だよ」

「意味って、何だよ？」

「力には大きな責任が伴う。力を受け継げるのは自分を戒めることができる人間」

「——誰の名言だ」

「自論だよ。金次君がその力を受け継いだのは、君が力の使い方を正しいもののできる人間だからだよ」

力といっても様々なモノがあるけどね。

「……力には正しいものがないようにも聞こえるぞ」

「力は無数にある。だが正しい力なんて存在しない」

「全部間違いだと言うのか……？」

「違うよ。それを正しいものにしていくんだよ。金次君が自分の力を正しいもののできそうないなら、私が隣に立って一緒に正しいもの——誇れるものにしてあげる」

金次君は何だか放って置けない。入学してから彼は危なっかしい所があるからね。私が隣に立ってあげないと。そして、力の使い方を教えてあげるよ。タダシイモノヲ  
ネ。

「そんな事を言われたのは初めてだ」

「よかったじゃないかキンジ。お前のことを受け入れてくる女子がいて」

いつの間にか金一さんが復活していた。誰が復活の呪文を唱えたのかな？

「キンジ、この子を相棒にしてみたらどうだ」

復活して早々、金一さんがそんな事を言ってきた。

相棒か…… それはいいアイデアだ！それなら隣にいて講義できるしね。

「相棒って、零はいいのかよ？こんな俺でも……」

「私は金次君と相棒になりたいな。これからずっと」

まあ、高校卒業が長くて大学までは相棒でいたいな。

「そ、そうだな…… 相棒…… 武偵としての相棒だよな」

どうしたんだい？そんなに顔を赤くしてさ？私は何か変なことでも言ったかい？

その後、3人で卓袱台を囲んで雑談を交わした。

金一さんとはリボルバーの話で盛り上がった。彼はコルト・シングルアクション・

アーミーを使用している。

試しに持たせてもらった。うーむ、素晴らしい。

「ピースメーカーは偉大な銃……世界で最も高貴な銃だと思いませんか？」

「わかるか？俺もそう思うんだよ」

金一さんが私の言葉に食いついてきた。

そんなに目を爛々と輝かせるとは、本当にこの銃を誇りに思っているんだなく。けど、この銃は平和の作り手と銘打っているが実際は暗い事情があるんだよね。西部を征服した銃——アメリカの先住民達を…… おっと、この話はやめておこう。

「リボルバーに1発ずつ弾を込めていると何だか命を吹き込んでいるような感じがしません?」

「ああ、シリンダーを出して1発ずつ弾を込める、あの感覚がたまらない」

「そんなに回転式拳銃はいいのかよ兄さん? あれは最大で6発しか入らないだろう」

なんて事を言うんだよ金次君! 君にはリボルバーの魅力がわからないのか。彼はオートマチックだったな……

「キンジ…… それは宣戦布告として捉えていいのだな」

金一さんは私からピースメーカーをヒョイと取り返すと金次君に向けて、ジャキツと構えた。

「ごめん、兄さん! だから銃を向けなくてくれ! ここで撃つたらマズイから。近所迷惑になる」

「そうですねよ金一さん。その銃は高貴な銃——人を撃つための銃じゃないのですから——  
——ここで流血沙汰は面倒なので私は止めに入る。」

「まだ金次君にわからないか、リボルバーのクラシカルな美学が」

「何だよクラシカルな美学って？」

クラシカルな所がリボルバーの最大の魅力なんだけどな……金次君に今度、リボルバーについて講習してあげようかな。

「そういえば零もリボルバーを使っているんだったな」

金一さんが訪ねてきた。

私だけ手の内を明かさないのは失礼なので、ホルスターからそれを抜き、金一さんに渡した。

「ウエブリー・リボルバーか……それも初期モデルのウエブリーM r rとは中々の年代物を使うんだな」

「イギリスを代表する中折れ式リボルバーだから好きなんですよ」

中折れ式リボルバーあるいはヒンジフレーム式リボルバーとは、文字通り銃のバレル部分が折れる仕組みになっており、そして弾の排莖、装填ができる。

詳しく言うと、銃身の付け根の真下あたりに、ジョイント部分がある。リアサイト付近にある、止め金を外せば、シリンダーごと前へ折ることができ、自動的に排莖が行われる。西部劇でおなじみのピースメーカーより、少しばかり進化したリボルバーだ。

「フレームの強度から威力の強い弾が使えない。装填は早い、機構の複雑さがあるとなり、今はスイング・アウト方式のリボルバーにとって代わられているが、それもまた



この銃の個性だと思うな」

「おお、まさかそこに個性を見出す人がいるとは話がわかりますね」

やはり金一さんとは話が合う！これを気に私も金一さんと同じ銃——ピースメーカー——を使ってみようかな。装備科にお願いすれば用意して貰えるかも♪

「すっかり話し込んでしまったな」

「いいえ、楽しかったですよ。リボルバーについてこんなにも語ることができて」

時刻は18時ぴったりだ。本当に話し込んでしまった。お腹が減ってきたな。

「取り敢えず、なんか食べるか。零も食っていけよ」

金次君が提案してきた。嬉しい話だが家で休ませてもらったし、お礼はしないとね。

「だったら私が作るよ」

「料理できるのかよ？でも客人に飯を作らせるのは……」

「いいよ。気にしないでテーブルに座って待っていたまえ。金一さんもいいですよね？」

「構わないが……うちの台所にある食材では和食くらいしか作れないぞ」

ご心配なく、限られた食材で料理を作る事で新しい発見があるかもしれない。寧ろ、楽しい状況ですよ！

2人の了解を得て、私は台所に移動した。

「えーっと、何かあるかな？」

冷蔵庫を開けて、食材を確認する。

卵、玉ねぎ、鶏肉、トマトケチャップーこれならオムライスができるね。

私は早速、調理を開始する。

数十分後ー

チキンライスが完成した。あとは溶き卵を乗せるだけだ。しかし、それだけでは何か足りない。せっかく、実家で休ませてもらったのだから、美味しいーアレンジを加えたモノを出したい。

他に何かないか探しているといい物を発見したーねりからしだ。

これはいいぞ！私は早速、チキンライスにねりからしのチューブを丸ごと一本加えて混ぜた。ねりからしはいいんだよねー食べるとスカツとする。

「他には何かないかな？」

探してみると、あるある。様々な食材が置いてあるではないか！探せばあるものだ。

辛子明太子、唐辛子、わさび、シヨウガを発見した。全部刻んで混ぜて味見してみた。

うーむ、まだ何か足りない。

フツと台所を見てみると、にんにくを発見した。これだ！

「お待ちせしました」

私はできたオムライスを持って、居間に戻ってきた。

「オムライスか…… よくうちの食材だけで作ったものだ」

「意外だったぜ。まさかお前が料理できるとはな」

失礼だな金次君！私だって料理くらいできるさ。

「ほら、金次君。あーん」

私はスプーンでオムライスをすくって金次君に食べさせようとした。

「おい!? ガキじゃないんだから変な事すんなー」

「ははは。キンジは恥ずかしやがり屋だな。いいじゃないか相棒から食べさせても

らえ」

金一さんは面白そうに笑って眺めると、オムライスを口に運んで、

「自分で食うから必要ない」

金次君はそう言つてタイミングぴつたりとオムライスを口に入れて、

「ぐわあああああああ!!? あひは! あひは! ふひは!」

兄弟揃つて断末魔を叫んで、足をバタバタさせ卓袱台をひっくり返した!

2人ともどうしたのさ!? 私が疑問に思っていると2人は「み、水ううう!!?」と

「叫ぶながら這って台所に駆け込んで行った。

「これって、私のせいかな？」

何であんなに叫んだんだらう？ 味見した時、私は何ともなかったけどな。

## 愛を取り戻し……いいや奪つちやえ♪

東京武偵高校——車輛科にて

時刻は午前12時40分、お昼休みだ。

「武藤君、例の物は手に入ったかい？」

「勿論だぜ。確認してくれ」

私は武藤君と一緒に車輛科のガレージに来ていた。

何故ここに来たかというと、武藤君を始めとした車輛科の人たちにあるブツをお願いし、受け取りにきたからだ。

「ほらよ、（さ）対面だぜ」

武藤君はそう言って、ガレージのシャッターをガラリと開けた。

薄暗いガレージの中にあつたのは、黒塗りの車——ポルシェだった。

「ポルシェ356——水平対向エンジンを搭載。旧車マニアの間では、コイツは、たまらない名車中の名車だぜ」

これこそ私が武藤君——車輛科にお願いして、手に入れてきてもらったブツだ。

ポルシエ356A

ボディから独立してガード付きバンパー、曲面形状のシングルピース・フロントウインドウに丸型テールライト

1956年代のスポーツカーであり、ポルシエと言う名前を世界中に広めた名車だ。決して、某子供探偵に登場したから気に入ったのではない！

偶々、車のパンフレットを見てたら気に入ったので、車輛科にお願いして探してもらったのだ。

「せっかくだから、エンジン吹かしてみろよ」

武藤君がキーを私に投げて渡してきた。

そうだね。せっかくだし、エンジンをかけてみよう。

運転席に乗り込み、キーを挿し込んで回すとブオオオオオオンというエンジン音がガレージに響く。

うーむ、この独特の不等長なアイドリング音は実に素晴らしい。

高校1年生で車の運転ができるとは、武偵免許は本当に便利だね♪

「探しくれてありがとう、武藤君」

「いいって事よ。零に世話になりはなしたから、借りが返せてよかったぜ」

世話..... あっ！勉強のことだね。

大袈裟だなく私はほんの少しだけ、少しだけアドバイスしただけさ。

「しかし、零も渋いな。ポルシェ356aを欲しがるなんてさ」

「この丸みを帯びたポルシェ独特のフォルムが気に入っちゃつてさ。それよりも本当に良かったのかい？相場の半分の価格でさ？」

この車は勿論、私のお金で買った物だ。武藤君——車輛科には探し出してもらっただけ。

最初は相場の金額を武藤君たちに渡そうとしたのだが、「そんなに要らないぜ。半額で手に入れてくる」と言ってきたのだ。

頼もしいと思った私は、お手並みの拝見も兼ねて任せた。

武藤君の態度を見るからに本当に半額で手に入れてきたようだね。

「構わねえよ。特定の車を探し出して、限られた金額で手に入れるのも俺たち車輛科の仕事だからな」

限られたつて、そつちが提示してきたじゃないか。

無理せず相場の価格でよかったと思うけど……まあ、いいか！

「……なあ、零。ちよつと相談したいことがあるんだが、いいか？」

おや？急にどうしたのかな？また、勉強……いや、最近の武藤君の一般科目の成績

は向上している。

この態度を見る限り、勉強関係ではなさそうだね。

「構わないよ。どうしたのかな？ 悩み事があるなら言っただらいいよ」

「ああ、実はよ..... 白雪さんについてなんだ。最近、キンジと恋人になったと聞いて

よ」

あー、なるほど。武藤君はまだ白雪さんのことが諦めきれていないんだ。

白雪さんは最近は積極的になって金次君の側に付いている。「自分こそキンちゃんの恋人だ！」と言わんばかりのイキオイだ。

白雪さんは武藤君の気持ちに気づいていないな。

「白雪さんのことが諦められないんだね」

「ー白雪さんを巡って、キンジとランバージャックをやったが勝てなかった」

ランバージャックか..... 懐かしいね。あれは入学直後に、金次君と武藤君が徒手でやった。

白雪さんと仲良くしている金次君が気に入らなくて、武藤君から仕掛けたんだっけ。

お互いヘロヘロになるまで戦って、最後は金次君が勝ってたな。

「また白雪さんを巡って、ランバージャックを申し込むのかい？ やめておいた方がいいよ」

「なんでだよ?」



「白雪さんは金次君一筋だからさ」

残酷かもしれないが敢えて、私はハッキリと武藤君に伝える。

それを聞いた武藤君は握り拳を作り、

「それくらい、とつくにわかつてんだよ！白雪さんの気が俺にないことくらい！でも、でもよ……今でも好きなんだ」

声を張り上げたと思つたら、悔しそうに悲しそうにトーンを落としていった。

これは重症だね。未練を自分の好きな物——車で紛らわしていたが、白雪さんと金次君が仲良くしている光景を見て、思いがぶり返したんだ。

「——じゃあさ、奪っちゃえばいいんだよ」

「奪うつて、キンジから白雪さんをか？どうやってだよ？いや……親友に対してそんな事は……」

「ありや？言い方がマズかったか……奪うという表現は外聞きが悪いね。」

「武藤君——君の白雪さんに対する愛は本物だと私は思うよ。だからさ、その愛を白雪さんにぶつけるんだよ」

愛には様々な形があるからね。純粋な愛もあれば歪んだ愛もある。しかし、どれも愛に変わりはない。

「古来から女性というのは強い男性に惹かれるものさ。武藤君が金次君より強いことを

証明すれば、きっと白雪さんは武藤君に振り向いてくれるはずさ」

「その方法がわかんねえよ..... また、ランバージャックでもやればいいのか？」

「うん、そうだよ。もう一度、金次君と戦うんだよ！そして、今度こそ勝利を掴むんだ」

まあ、私の計算では十中八九金次君が勝つだろうがネ。

武藤君は体格的に金次君に勝っているが、それでも負けた。何故か？金次君は幼い頃より祖父、父親や兄から戦い方を習って育った。スベックロー育った環境が違いすぎる。まあ、応援はさせてもらおうよ。

これで金次君と戦って負ければ、武藤君も未練を断ち切れるだろう。

彼には新しい恋をしてもらいたい。

「武藤君はもっと自由になっていいと思うよ。それこそバイクみたいだ」

「なんでバイクなんだ？例えになってないぞ」

「バイクは車道を走れるし、歩道も走ろうと思えばできるでしょう？」

歩道を行けば歩行者に迷惑だが..... 下手な例えかな。それを言うなら自転車の方がいいだろう！なんちゃって。

「..... 確かに..... そうだ。そうだよ..... !」

なんか武藤君が納得してしまった。

おーい、今のは冗談だからね。

「ありがとうよ零。なんかスカツとした。そうだよな……もつと自由になればいいんだよ。なんで今まで気づかなかつたんだよ、俺はよ！」

「あー、うん。そうだよ自由にね。でも、程々にしてね」

「となればどうやるか……ランバージャックでいくか？でも、リング役はどうすればいい？不知火はいねえし、理子は入院中だしよ」

私の声が聞こえていないのは、武藤君は一人でプランを練っていた。

それにしても、りこりんか……土曜日差し入れ持つて絶対に行こう。

「同じ車輛科の人たちにリング役をお願いしてみればどうかな？」

「あー、でもよ……あいつらにも予定があるし、俺の戦いに巻き込むのはな」

「だったら私が説得してみようか？」

「本当か!?？ありがとうよ零。早速、頼むぜ」

キンジ視点ー

「はい、キンちゃん。あーん」

俺は今、白雪と一緒に校庭の芝生にシートを敷いて、飯ー白雪が作ってくれた弁当を食べている。

こころも変わらず5重の弁当箱とは、朝起きて作るのは大変だろう？

「そういう事はいいって、白雪。自分で食べるからよ」

「そんな.....！酷いよキンちゃん」

おいつ？？そんなに落ち込むよ白雪。たかが弁当くらいだよ。

「..... わかった。ほら、食わせてくれ」

「うん！はい、あーん」

白雪の掛け声に合わせて、俺は口を開ける。

うん、うまいな。白雪の飯は本当にうまい..... 零よりも遥かにな！

あいつの料理はある種の兵器だ。

ヤバイ！思い出すのだけで昨日の料理の味が.....！

出てくるな！白雪の料理ー味が汚染される！

俺と兄さんはあの時、オムライス（外見だけは見事な）を食って死にそうになった。

1つしかない台所の蛇口を求めて、奪い会いになったんだぞ！しかも、兄さんは俺に

桜花を打ち込んでくるし..... 最悪だ。

結局、俺はそのまま洗面所の水道を使った。

「なあ、白雪。今度、時間がある時でいいから零に料理の基本を教えてやってくれ」

「別にいいけど..... どうして？零さんは料理が得意そうに見えるけど」

得意だと!!?とんでもない。

確かにあいつの料理は外見だけは美味そうだが、中身は食べられた物じゃない。

零の舌——味覚はどうなってるんだ?

「あいつの料理を一度食ってみればわかる……」

「…… そんなにすごいのは、零さんの料理?」

ああ、ある意味でスゴイ。白雪も食べてみれば…… いや!ダメだ。白雪が死ぬ。

そんな事を思っていると、背後からブオオオオオオオという喧しいエンジン音が近づいてきた。

誰だよ!!?こんなにエンジンを吹かしてるのは!!?それにこのエンジン音はカワサキのGPX250じゃねえか。俺が後ろを向くと、

「ヒヤツハー!キンジ発見!!?」

「よう!キンジ!お昼ご飯でちゆか!」

「白雪ちゃんと一緒にお昼とはいいい身分じゃねかよ!!?」

「羨ましいなく俺らも混ぜろよ」

ドツドツドツドツドツというエンジン音をBGMに何十台ものバイク集団がいた。

何だよコイツら!!?いや、待つて。落ち着いて観察してみれば、どいつもこいつも見

たことのある顔——車輛科の連中じゃねえか!!?

「キ、キンちゃん..... 何なのこの人たち? 怖いよ.....」

おれの背後で白雪が震えている。それもそのハズだ。全員、半袖の革ジャンに何故かトゲ付きの肩当てをつけている。

自己主張の為なのだろうか、派手なメイクをしている奴もいるれば..... あ、頭をモヒカンにしている奴もいるぞ!!?

手には釘バットやナイフ、マシンピストルやAK-47まで持ってやがる。

「お前らどうしたんだよ!!? 揃いも揃って変なカッコしやがって.....!」

「うるせえー!!? これはな..... 自由の証なんだよ!」

じ、自由だと? 何を言ってるんだよ。誰が見てもダサイ格好だぞ。恥ずかしくないのかコイツら?!

「俺たちはな何ものにも縛られない自由武偵になったんだよ!」

「おうさ! 武偵法なんかクソ食らえだ!」

「他人の決めたルールではなく、自分の決めたルールに従うと決めたんだ!」

待て待て! 武偵が武偵法を守らなくなったら無法者じゃねえか! いやコイツらは最早、無法者か.....

俺が呆れていると、集団を掻き分けて一台のハーレーダビッドソンが現れた。

「ヒヤツハー!!? 会いたかったぜ。キンジ〜久方ぶりだな」

「武藤……………!!?」 「武藤君……………!!?」

ハーレーに乗っていたのは武藤だった。

髪を金髪に染めて耳にはピアス、首には鬮體のネックレスをしている。服装は半袖の革ジャンにトゲ付きの肩当てをしている。お前もかよ!!? 髪を染めていたから一瞬、誰だかわからなかった。

「コレは仮装パーティーのつもりか? 車輛科はいつから無法集団になったんだ?」

「黙れえ!!? 俺らはな、束縛から解放されたんだよ」

武藤は何処からかナイフを取り出し、ペロツと舐めて答えた。舌を切るから危ねえぞ。

見るからにただのチンピラだ。

待って…………… さつき武藤は解放されたと言った。こいつら誑かしたヤツがいるのか?

「おい! 武藤。一体、誰に誑かされた? こんなふざけた事をするよう命令でもされたのか?」

「命令〜? 違うね。俺たちはあの方に自由に生きるようアドバイスを貰っただけさ! なあ、お前ら?」

武藤の問いに「おうよ!!？」と他の連中が答える。

あの方？ やっぱり誰かが武藤たちを誑かしやがったのか.....!!？」

ふざけやがって..... 武藤は時々ぶつ飛んだ所があつたが、ここまでやる奴じやな

い。許せねえ。

「お前らの目的は何だよ？ 団体で来るってことは何か用があるのか？」

「ああ、そうだよ！ 遠山 キンジ！ 俺はお前にランバージャックを申し込むぜ！」

ランバージャックって、入学直後にやったアレか..... 何で今更？

「それもあの方とやらのアドバイスか？ 自由と言っておきながらまるで犬だな」

俺の言葉を聞いて、他の連中が「ああん？」とキレだした。

これくらいでキレるなよ。車輛科は大雑把なヤツが多かつたが、俺が知るかぎり、ここまで短気じやなかつたぞ。

「ヒヤハハハハハ、犬、犬、犬ときたか。ハハハハハ」

武藤は狂つたように笑い出した。

だ、大丈夫かよ。本当に武藤だよな？

「俺たちを犬呼ばわりした罰を与えてやるぜ。おい！」

武藤の命令と共に、ヒュンと俺の首に鎖が巻きついてきた。

苦しい..... 突然、何しやがる！



「ランバージャックの前にグランド100周の刑だ！」

ブオオオオオオン!!?ブオオオオオオン!!?とエンジンが火を噴く。

それとも「ヒヤツハー！」と声から、パラリラパラリラというクラクションが鳴り響く。

「行くぞお前ら！」

武藤の掛け声に合わせて発進する。

待つて!??このまま、引きずって行くつもりか！

「キンちやああああああん!!?」

白雪の声が遠ざかっていく。

それと共に俺はバイクで引きずられていった。

犯人は.....  
お前だ!! ?

キンジ視点ー

土曜日だというのに、俺は武偵病院のベッドの上で寝ている。

武藤ー車輻科の連中はランバージャックの前に俺を鎖で繋ぐと、そのままバイクでグランドを走り回りやがった。

あらかた走り終わると、間を入れずにランバージャックを開始した。

「あー、くそっ！思い出すだけで痛くなる.....」

あれはランバージャックという名のリンチだったぞ！

俺と武藤を囲んでいた連中は武藤に味方するし、武藤に至っては凶器ー散弾銃まで持ち出しやがった。

それに対して俺は素手で勝負するしかなかった。ダチに銃を向けるなんてしたくなかったからな。

「しかし..... 武藤はどうしちゃまったんだよ！」

武藤の様子は明らかにおかしかった。

あいつは偶にイッテルところがあつたが、あそこまではひどくはなかつた。真つ直ぐで曲がったことが大嫌いな感じのいい奴だったのに！

武藤について考えていると、ガラリと部屋のドアを開いて、

「やあ、金次君。お見舞いに来たよ〜」

零が入ってきたーその手にフルーツの盛り合わせが入った籠を持つて。

炎天下の中、歩いてきたのだろうか？夏用の制服は汗で濡れて透けている。おいっ？  
？下着が透けてるぞ！

しかも、く、黒だと!!?

待つて!!?近づいてくるなよ！

「おや?どうしたのかな金次君く興奮しているのかい?ならば思う存分興奮したまえ。知っているかい?興奮することで血流が早くなると、傷の治りが早くなるんだよ」

零は俺の側に寄るとやたらと胸の辺りを強調してくる。

そんな知識知らねえし!知りたくもねえよ!

こいつは本当に俺を揶揄ってくる……絶対にこいつでヒステリアモードになつてたまるか!もしもなつてみる。その時はさらに揶揄われるに違いない。

「何の用だよ?こんな俺を見て笑いにきたのか?」

「そんなわけないよ。相棒が怪我を負つたと聞いてお見舞いに来たんだよ。さつきも

言ったでしょう?」

零は丸椅子を持ってくると、俺の側に座って籠からりんごを取り出し?きだした。うん? 何だよその変わったナイフは?

零の使っているナイフー柄は丸くスイツチのようなモノが付いている。

「変わったナイフだな。かなり大きいし、重くないのか?」

「これかい? これはワスプナイフと言つてね。前に装備科の子から相談に乗つてあげたお礼として貰つたんだよ」

ワスプナイフー直訳するとスズメバチのナイフ。文字通り蜂の一刺しのごとく、ナイフの柄の部分に仕込んである高圧ガス(炭酸カートリッジボンベ)が、スイツチを押すことで刃の部分から一気に噴射されるといふもの。これにより刺した臓器や対象物は瞬間冷凍され、そのまま木っ端微塵に粉碎されてしまうという恐ろしい代物だ。

おいおい!!? なんて物でりんごの皮を剥いてんだよ。

それは本来、海でダイバーがサメに襲われた場合に備えて持っている物だぞ。

「間違つても人間に使うなよ。刺した瞬間、木っ端微塵だからな」

「大丈夫♪人間に使うなんて、そんな恐ろしい事を私がする訳ないじゃないか」

悪いが零..... お前ならやりそうな予感がする。

いや考え過ぎか。こいつも武偵だし武偵法はしっかり守るだろう。

「それよりも金次君。聞いたよ、武藤君を始めとした車輻科の人達と乱闘したんだってね。うちのクラスはその話題で持ちきりだよ」

あー、そうなるよな。グラランドのと真ん中であれだけの騒ぎを起こせば人目につくか……

俺と武藤と何十台ものバイク集団、おまけに全員おかしな服装に頭をしていれらばな。

「おまけに白雪さんも乱闘に加わったんだって？意外だなー、あの大人しそうは白雪さんがね」

白雪か……ランバージャックという名のリンチで一方的にやられている俺を見て白雪がキレた。

突然、頭に結んでいた白いリボンを取ると炎を出しやがった。

そして、その炎で車輻科の連中が乗っていたバイクを焼き払った。

白雪の話ではあれは超能力の一種で、普段はリミッターとしてリボンを結んで抑えているそうなの。

「白雪は、あいつは何も悪くない。悪いのは不覚を取った俺の方だ」

「自虐的だね。いや白雪さんを庇うー優しい所は金次君のいいところだね」

「褒められても嬉しくねえよ」

「そうかい。それにしても白雪さんは入院していないみたいだね。受付で確認してみた

けど居ないって言われたよ」

白雪はあの後、教務科に連れて行かれた。

後で確認したら、何でも青森の実家——星伽神社に呼び戻されたようだ。

「あいつは実家に帰ったよ。なんか星伽の禁を破ったとか何とか……」

「なるほどね。白雪さんの実家は神社だし、色々と訳ありぽいね。まあ、そこは踏み込んであげない方がいいかもしれないね。はい、りんご」

そう言つて零は剥き終えたりんごを俺に差し出してきた。

確かに……白雪の実家は閉鎖的な所があるし、色々と訳ありな事もあるか。

「どうしたの金次君？ほら、遠慮なく」

「——なあ、零。これは自家栽培とかそんなんじゃないだろうな？」

俺は思わず、こいつの料理について考えてしまった。

こいつの料理は食べられた物じゃない！前に試しに自分で作った料理を食わせてみたが、平然としてやがった。こいつの味覚は本当にどうなってるんだ？

「自家栽培だなんて……フルーツはしてないよ」

フルーツ以外はするのかよ！こいつの育てものはどうなるんだ？まずい！考えただけで胃が……？

「なら、いいい」

俺は意を決して、りんごをシャックと一口齧った。う、うまい!!?りんごがこんなにうまく感じなんて!!?普通の食材は素晴らしいぞ。

「ー零。お前は武藤たちの事をどう思う」

「武藤君たちがどうかしたの?あー、気になるよね。あれだけボロボロになれば」

俺はりんごを食べながら、零に武藤たちについて尋ねた。

行儀が悪いとか細かい事は気にしている場合じゃない。これは重大な話だ。

「怪我の事じゃない。実はな…… 武藤たちは誰かに唆されたようなんだ」

「武藤君たちが?うーむ、武藤君たちの様子は私から見てもおかしいとは思ったね」

「…… なんだか見ていたような口振りだな」

「うん。見てたよ。私も加勢しようと思ったんだけど教務科の先生たちに止められてね。ごめん、相棒のピンチに駆けつけられなくて。相棒失格だね」

零はシヨボーンと、落ち込みだした。

そんなに落ち込むよ…… これじゃ俺の方が悪いみたいじゃねえかよ。

「ー言い方が悪かった。すまん、教務科に止められたんじや仕方ないよな」

「いや、気にしないで金次君。さて、気を取り直して話の続きといこうか?どこまで話したっけ?」

「ああ、武藤たちは誰かに唆された気がしてしかたないんだ。武藤は俺と戦う前に『俺た

「ちはあの方に自由に生きるようアドバイスを貰った」と言った。俺はあの方という奴が今回の乱闘騒ぎの黒幕だと思っただけ..... それと」

俺は零に事の顛末を語った。

「..... ふーん、なるほどね。あの方とやらの正体は直ぐにわかるとも思うよ。武藤君から直接聞けば.....」

「それなんだが、武藤はまだ意識を取り戻してないんだ。医者の話では肉体のダメージが酷いみたいだな」

武藤を始めとした車輛科の連中はランバージャックの後、全員病院送りになった。

幸いにも一命を取り留めた。もしも死人が出たら大変だからな。

「うーむ、武藤君から話が聞けないのは痛いね。なら意識が戻るまでの間、私たちが黒幕を見つけようじゃないか」

「手伝ってくれるのか.....！」

「当たり前じゃないか。私もその黒幕とやらの腹が立っているんだよ。金次君のダチは私のダチでもあるからね」

ダチって、零もそんな言葉を使うんだな。意外だったぜ。



「それじゃあ、今ある情報で推理してみようか。あつ、一個貰うよ」  
そう言つて零は林檎を丸ごと一つガリツと齧つた。

おい!? 剥かないのかよ。

そのままモグモグと口を動かしながら、

「うーむ、まず武藤君が何故、そんな暴挙に出たか? 金次君、何か思い当たる節はないかい?」

俺に尋ねてきた。俺も人のことは言えないが口に物を入れて喋るな。

「武藤は最後に『俺が欲しかったのは白雪さんだあああ』つて言ったんだ。多分、白雪が関係していると思う」

「いや、正確には白雪さんと金次君じゃないかな? 知っているかい? クラスの間では白雪さんと金次君は恋人同士だつて噂だよ」

恋人つて、俺と白雪はそんな関係じゃないぞ。一体誰だよ? そんな噂を流したのは? 「じゃあ、武藤がああなつたのは俺と白雪のせいだつて言うのか?」

「いや、そうじゃないよ。武藤は恐らく、なんと言えばいいかな……金次君。最近、白雪さんと一緒にいる時間が多くなかつたかい?」

そう言えば確かに、最近白雪と一緒にいる時間が多かつた。昼食や放課後なんかは特に一緒にいたな。

昼食なんか白雪が作った弁当を食べたりして.....

「恐らく、武藤君は白雪さんが好きだったんだよ。思い当たる節があるんじゃないのかい？ 例えば..... 入学直後のランバージャックとかさ」

「武藤のあれは白雪を巡ってのだったか..... そう言えばやる前にやたらと白雪について喋ってたな」

「そしてランバージャックで金次君に敗北し、白雪さんの事は諦めた」

「俺に負けた？ すまんが、ランバージャックについては、よく覚えていないんだ」

俺は武藤とランバージャックをしたのは、覚えているが結果は知らない。お互いポロポロになるまでやったのは覚えているが.....

「私の知る限り、勝ったのは金次君だよ。おっと、話を戻すね」

零は話に一区切り付けると、また林檎を齧りだした。

「武藤君はそれを境に白雪さんへの思いを諦めた。しかし、金次君と白雪さんが仲良くしている光景を見て、昔の想いが蘇ってしまった」

武藤..... そう言えばアイツは「俺はお前と白雪さんが仲良くしている光景を何度も何度も見せられて、悔しかつたんだよ!!？」って泣きながら言ってたな。

「武藤君はあの方とやらに、その想いを利用されたんじゃないのかな？」

零はそう言うのと林檎を食べ終えた。

お前は林檎の芯まで食べるのかよ。せめてタネは捨てるよな。腹を壊すぞ。いや、こいつなら心配ないか。

「それじゃ何か？武藤はまんまと踊らされたのかよ!!？くそつ、人の想いを利用しやがって……!!？」

クソツタレ!!？胸くそ悪いぜ。黒幕もそうだが、武藤の心情に気づいてやれない自分にも腹が立つてきた。

「…… 本当に酷いよね。人の想いを利用するなんて最低だ」

「俺は何が何でも黒幕を見つけ出す！そして、この落とし前をつけさせる」

「私もいるよ?」

零は突然、俺の手の甲に自分の手を乗せてきた。

ふんわりとして、肌は白く見るからにスベスベだ。

「金次君、私は君の相棒…… 確か武偵は『仲間を信じ、助けよ』だったかな?ごめんね。その辺りはまだ覚えきれてなくてね」

「いや、まあ、だいたい合っているぞ」

「全部一人で抱え込む必要はないよ。どれ、私も抱えてあげようじゃないか。お荷物1つ1000万で!!？」

「って、タダじゃないのかよ!!？しかも1000万とか高すぎだ!」

「ははは、ジョークだよ」

まったく、こいつは..... 冗談も程々にしろよな。

「まあ、ありがとうよ。なんか気が楽になった」

「どういたしまして」

こいつは俺を揶揄ってくるが、不思議と頼りになる。こいつと一緒にいれば、近い内に武藤を誑かした黒幕にも辿りつけるだろう。

俺が決心していると、部屋のドアが再びガラリと開き、

「キー君、ちよりーす」

理子が入ってきたーその手に沢山のお菓子を持って。

そういえばこいつの病室は俺の隣だったな。

「おや、れいれいじゃん！ どうしてここにいるの？」

「不甲斐ない相棒のお見舞いさ♪」

おいっ！ 不甲斐ないって、どういう意味だよ？

「相棒？！？ すごいじゃんキー君！ どうやって攻略したのさ？ れいれいは難易度MAXなのよ」

理子はベットの周りを走り回りがら騒ぐ。

うるせえぞ！！？ 病院では静かにしろよな。

ちよつとは零を見習えよ。

「まあまあ、りこりん。これでも食べて落ち着きたまえ」

零は理子に自分が持つてきたフルーツの盛り合わせを差し出した。

それは俺の見舞いの品じゃないのかよ。

「ありがとういいい。じゃあ、私もこれあげる」

理子は持ち込んでいた菓子の一っ—まんじゅうのようなものを零に差し出してきた。

「……」

「どうしたのれいいい？ももまん嫌いだった？」

「あー、ごめんね、りこりん。私、これ苦手なんだ」

零はまんじゅう—ももまんを見て、苦笑いした。どうしたんだ零。そんなにももまんが苦手だったのか？

俺には何だか大嫌いな物を見ているように見えるぞ。

「そうだったんだ〜ごめんね。りこりん知らなかったよ」

「ははは、気にしないで。さあ、フルーツをお食べ」

「ねえ、これってどこで買った物なの？」

「それかい？私の自家栽培さ♪」

「嫌だああああああああああああああああああ!!?」

突然、理子は叫び出すと病室から走って逃げたっていった。

おい、どうしたんだ理子!!? 待て、確か理子の入院した原因は.....

「なあ、零。お前、理子に手料理を食わせたか?」

「..... さあ、ナントコトカワカラナイナ」

嘘吐け!!?

理子の入院の原因はお前か..... 理子のあの様子は尋常じゃなかったぞ。

あれはトラウマものだな。うつ!!? なんだ料理の事を思い出すと急に腹が.....

? 痛い!!? 凄く痛むぞ!!? おまけに目眩が!

「金次君? どうしたんだい? 金次君! 応答して金次くーん!!?」

零のそんな声を聞いて、俺は意識を手放した。

## 黒に染まれ

「うーん、この車はいいね」

私はポルシェ356aに乗って、実家を目指して走っていた。

今日は実家にホームステイする子がやってくるので、その歓迎の為に途中でスーパーに寄り、カレーの材料を買った。

カレーはいいよねー万国共通だし、大概の人は食べてるし。

「しかし、武藤君たちには悪い事をしてしまったね」

武藤君ー車輛科の人たちのことを思い出す。

自由になりたいという武藤君の手伝いと他の車輛科の生徒にも協力を要請してみたが、まさか他の人たちまで自由になりたがっていたとは意外だった。

私が「せっかくだし、もつとファンキーになりなよ」と一言を付け足すと、各々好き放題してあのザマだ。

「まあ、結果的にいいものが見れたし結果オーライだよね！」

ただ自由にするだけでは勿体ないので、車輛科を使って金次君の実力テストを行うことにした。

金次君&白雪さんのコンビは学校内では周知の仲で、常に一緒にいることはわかってきた。そんな2人の前にお構いなく武藤君たちが向かうこともね。

危ないと思うかもしれないが、私の計算上、安全だと判断したので行うことにした。金次君は単体でも強いが、彼が真に力を発揮する瞬間は誰かを守る――異性を守ろうとする時だ。これは金一さんから聞いた遠山家の男子の特徴。

白雪さんの前に武藤たち（ヒヤツハー状態）が現れたらどうなるか？  
金次君なら身を呈して守るだろう。

「金次君だけじゃなく、白雪さんもテストに参加してくれて助かったよ」

ランバージャックで最初、金次君は押され気味だったが、白雪さんが現れると変わった――あれがヒステリアモードと呼ばれるものだろう。

その後は形勢逆転し、武藤君を追い込んでいった。しかし、ピンチに見舞われた武藤君はあろうことか車輻科に助太刀を頼んだ。

パワーアップした金次君でも、数十人にも及ぶ車輻科を相手にするのは苦戦を強いられた。

あれは殆どリンチだった。そんな金次君を見ていられないと白雪さんが助けに入った。

いつも頭にしていたりボンを外し、炎を出すと「キンちゃんに近づく汚物は消毒!!?」



消毒!!?しよーどーく!!?」と叫びながら車輛料の面々を焼いていった。勿論、バイクだけだよ。

「おっ!見えた」

一昨日のことを思い出していると、懐かしき実家が見えてきた。

相変わらずの和洋折衷な造りの屋敷だ。

私は車を敷地内に止めると、そのまま降りた。時刻は11時30分だ。

「さて、ホームステイする子とご対面しましょうか」

今日の朝ー午前5時頃に父さんから突然電話が掛かり、「ホームステイする子には家の鍵は渡してあるから」という連絡をもらった。

父さん……電話する時間を少しは考えてよ。

私、就寝前にネットオンラインチェスをやっていたから眠かったんだよ。

相手はイギリスでハンドルネーム『むにゆえ』と呼ばれる人ー最近になって見つけた強敵だ。初戦で私が勝ったが、相手は中々の負けず嫌いで何度も再戦を申し込んだ。た。

結果、私は33戦中16勝17敗0引き分けで終わった。正直、悔しい。

機会があれば再び戦いたいね。

そんな事を思いながら家の玄関の鍵を開け、中に入ろうしたが鍵は開いていた。

「おや？もうすでに中にいるのかな？」

「ただいまー」

少し間伸びした声で帰宅を知らせると、奥から

「お帰りなさいませ」

金髪で中性的な顔立ちの、女の子が現れた。身長はスラリと高く170はある。私よりもあるぞ。

頭はシニヨンと呼ばれる結び方で纏めている。この髪形にはかなり長い髪が必要になるので解けばおそらく、肩まで余裕で届くだろう。

服装は白のワイシャツに黒のズボンだ。

「えーっと、君がうちにホームステイするって子かな？初めまして、私の名前は玲瓏館・モリアーティ・零です」

「本日からこちらでお世話になります。セバスチャン・モランと申します」

「セバスチャン・モラン？もしかして貴女……セバスチャン・モラン大佐と関係があつたりする？」

セバスチャン・モラン大佐

1840年生まれ。イートンとオックスフォードで教育を受けた後、アフガンに従軍し、カーブルに駐屯。

退役後、ロンドンに戻る。モリアーティ教授に見出されて彼の部下となる。射撃の名手、猛獣狩りの名人、カードゲームの達人である。

シャーロック・ホームズに「ロンドンで2番目に危険な男」と称された。

「はい。セバスチャン・モランは私の曾祖父で間違いありません」

彼女はキツパリと答えた。

なんと!? モリアーティ教授の右腕といわれたモラン大佐の子孫と会えるとは……

しかも、同姓同名とは彼女の両親はどんな思いがあつて、同じ名前を付けたのだろうか。

「あなたの事も聞いておりますー私の曾祖父と縁深きお方、ジェイムズ・モリアーティ教授のお身内だという事を」

はい? 今、なんて言ったの? 私がモリアーティ教授の身内!? …?

「あー、ごめん。私の聞き間違いかな? 誰がモリアーティ教授の身内だつて?」

「貴女の事ですが? 何か問題でも?」

問題大あります!!? モリアーティ教授つてシャーロック・ホームズ最大の宿敵、悪のカリスマじゃん。いや、落ち着け。

「ジョークだつたりする? アメリカンジョークなんちゃつて」

「いいえ、冗談ではありません。それと私はアメリカ人ではありませんよ」

彼女の様子から嘘はついていない。えー、嘘でしょう。誰でもいいから冗談だと言つ

てよ。

「てつきり貴女の父君いえ、母君からお聞きしているものかと思いましたが、聞いていないのですか？」

「聞いたことがないね。初めて知ったよ」

母さん…… 関係ないと言つてたけど、あれは嘘だったのかい。

これは母さんと連絡を取つて、詳しく聞いてみないとね。

「…… まあ、とりあえずこの話は置いておこう。立ち話もなんだし、場所を変えて話さない？ 貴女の事を色々聞いてみたいし」

「はい、構いません」

彼女ーモランは淡々と答えた。

この子は生真面目な性格をしているな。

あ、居間に行く前にキッチンに食材を置いていかないと。

私とモランは玄関から居間に移動した。

テーブルには2人分のお茶と菓子置いてあつた。いつの間に？？

「このお菓子とお茶はモランが用意したのかい？」

「はい。僭越ながらご用意させていただきました。迷惑でしたか?」

「そんな事はないよ。ありがとう。それじゃ、座って話そう」

そう言つて私は座る。それに続けてモランも座つた。

私は和室では正座でいることにしている。イギリス人の母の影響で足の骨が純粹な日本人に比べて、正座に適してはいないが、そこは訓練で克服した。日本人の父さんがその辺りに拘りがあり、小さい頃から正座に慣らされたものだ。

私の真似だろうか、モランも正座だ。さーて、どのくらい持つかな。

「モランは日本に来た目的は留学かな?」

「はい。来週の月曜から神奈川武偵中学校に、来年度からは東京武偵高校に進学する予定です」

来年度から入学というと、私より年下なのか。見た感じそんな風には見えない。

モランの身長は170はあるし、顔のモリもあつて中学生14歳には見えないよ。

「へー、遙々日本の武偵高校に……それなら私の後輩になるね。専門科は狙撃科だね」

「……なぜ私が狙撃科を選択すると?宜しければ、お聞かせください」

「君が着ているその服装は、はつきり言えば地味だ。ああ、悪口じゃないよ。狙撃手は必

然的に身を隠すことになり、高度なカモフラージュの技術を求められる。敵に見つかっていないのは狙撃もできないから普段から目立たない工夫が求められる」

カモフラージュ、これは敵に「何処からともなく撃たれる」という心理的な圧力を与えることも期待している。

「狙撃手には高い射撃技術のほか、長時間の任務に耐えるスタミナや偽装・移動・サバイバルなど多岐にわたる技能が要求される。モランは長時間あの場所―玄関で私が帰ってくるのを待っていたのでしょうか？それも殆ど座らずに。その証拠にズボンのお尻の下部と膝の裏にシワがない」

私が寮を出たのが午前10時30分頃、ここに到着したのが11時30分びつたり。ここまで1時間かかっている。1時間も立ちっぱなしは辛い。

1時間も立ったまま私が到着するのを待っていたとは……正直、本当に凄いや。

「僅かに頬を左側に寄せている。脇も締めているね。それは脇を締め、銃のストックに肩を当ててスコープを覗き込む姿勢だ。おまけに肩が少し上がっているよ」

腹這いで狙撃をするみたいだね。

窓などから撃つ為にテーブル等に銃を載せて撃つ場合、椅子に座った姿勢から撃つ場合もありそうだ。

「…… 感服致しました。僅かな情報から私が狙撃手だということを見抜くと

は……主と呼んでも宜しいでしょうか?」

気のせいかモランはキラキラした目で私を見つめる。

主つて、大袈裟だなくまあ、教授と呼ばれるよりはマシかな。

「あー、別にいいよ。それよりモランは日本語が上手だね。どこで習ったの?」

「おや? てつきり見抜いていると思つたのですが」

「いやー、同級生から人の事をやたら分析するなど言われていてね。モランも自分の事を見抜かれ過ぎるのはいい気持ちじゃないでしょう? できれば、モランの口から聞かせてくれない?」

金次君からずごく止められているからね。

「私は別に気にしませんよ。でも主がそう言うならば仕方がありませんね。では質問に答えます。私はドイツで語学を習いました。日本語を初め15ヶ国の言葉は話せます」

15ヶ国か……私は英語だけしか喋れないし、モランを見習つてもっと他国の言葉を勉強しよう。

「へー、じゃあモランはドイツ人なの?」

「いいえ、私はイギリス人です。しかし、生まれがイギリスで育ちがドイツなので曖昧なのですよね。正直に言えば英語よりもドイツ語の方が喋りやすいですし」

イギリス国籍ーしかし、イギリス生まれでドイツ育ちか。

ドイツといえばベルリンの壁があるね。あれは勘違いで壊れたというから有名なんだよね。

あと「ジー〇ハイル!!?」と街中で叫んで、どっちの手か忘れたけど挙げると、警察と武偵が5分もしないうちにとんできてボコられる事でも有名だ。間違っても絶対にやらないようにね。

「ドイツにも武偵学校があると聞いたけど、モランは入学当初から武偵だったのかい？それとも途中編入かな」

「途中編入ですよ。ドイツの山奥で狩猟をして生活―狙撃の腕を買われて武偵になりました。その後はアフガンなど中東を回ったりもしましたね」

「もしかして、その時に私の父さんと会ったりしたの？私がモリアーティのひ孫だということも聞いた？」

「はい。主の父君―誠司さんからお聞きしました。私は巡り合わせだと思いましたがよ。そして、興味が湧きました。私の曾祖父が腹心として仕えた方の子孫がどのような人なのかと」

さらにキラキラした目で私を見つめる。

うつ!!? そんな目で私を見ないで！なんか眩しいよ。

父さん……モランに何を吹き込んだの？美化し過ぎていないだろうね？



「モランのひいお爺さんは…… 犯罪組織——私の曾祖父が作った組織にいたよね。その…… 周りから冷遇されたりしなかったかい？」

「それは私が犯罪者の子孫だからですか？それを言うなら主だつてそうじゃないですか」

うっ！確かにそうだけど…… 言い方がマズかったね。犯罪者の子孫だから何だよ！的な感じかな。

「まあ、そうですね。中にはそういった人もいましたが、そんな人には、お礼、をさせていただきました」

あつ、これはアカン。追求したらやばい内容だ。

「そうか…… なら私の事が憎くないのかい？君が冷遇される原因を作った人の子孫だよ」

「そんな事はありません。私は主の曾祖父であるモリアーティ教授を尊敬しております」

尊敬つて、相手はイギリス犯罪界のナポレオンだよ。武偵が犯罪者を尊敬するのは…… あー、でも武偵の中には犯罪者から技術を盗んで活用する人や司法取引した元犯罪者とコンビを組む人もいるし、そこはいいか！

それにモランのこの尊敬の仕方は普通じゃない。そんなにモリアーティ教授——私

の曾祖父は尊敬に値する人だったのかな？

よくよく考えれば、私はジエイムズ・モリアーティという人間を犯罪者——悪者として認識していた。

もしかしたら、彼には彼なりの良いところがあるのでは？これを機会に曾祖父の事を調べてみよう。

「そう言ってくれてありがとうね。何だか気が楽になったよ」

「勿体ないお言葉です」

「ねえ、突然で悪いけどモランはタバコを吸っているでしょう」

「…… 何故、タバコを吸っていると分かったのですか？」

あつ、そこは否定しないんだね。

「トルコの煙草葉のカスが僅かだが、袖に付いている。巻く時に付いたのだろう。わざわざ紙に一から包んで巻いて吸うなんて拘りがあると見えるが、未成年の喫煙は感心しないね」

袖だけでなく彼女の体から僅かだが臭ってきた。強く臭ってこなかったのは外で吸った後で、消臭剤を身体に撒いたのだろう。

何故、トルコ葉だと分かったかという点、尋問科の教諭である綴 梅子先生が前に吸っていた物と同じ匂いがしたためだ。

まあ、あの先生はすぐに違う煙草に変えたけどね。なんでも好みじゃないそう。そして変えた煙草だけど、金次君曰く「絶対に違法だ！」そう。

「辛い味と香りのトルコ葉に、ふくよかな香りと味の黄色い葉のバージニアを、ミックスしたものを吸っているね」

「……はい、その通りです。ちなみに曾祖父はトルコ葉だけしか吸わなかったそうです。私はバージニアをミックスしたものが好きですが」

なるほどモラン大佐はトルコ葉だけしか吸わなかったのかうって、そこで煙草の好みを言っただけなのよ！

「いや、煙草は未成年から吸ってはいけないのだよ」

「そこを何とか！何卒……慈悲を！」

テーブルに頭をドガンツと思ひ切りつけて懇願した。

それに伴い、テーブルがスイカ割りのようにぱっかりと割れてしまった。

ああ！うちのテーブルが!!？あとお茶が！

「も、申し訳ございません!!？」

「ああ、いいよ。それより……煙草を吸うのには理由があるのかい？」

「それは……家庭の事情です」

そうか、家庭の事情なら仕方ないね。なわけねえだろうが!!？なんちゃって♪何時

もなら金次君がツツコミをかけてくれるんだけどな。

「まあ、喫煙は程々にね。あと学校では吸わないようにね。先生に見つかったら大変だよ」

「ありがとうございます!!?なんと慈悲深きお方」

そう言つて泣き出してしまった。そんなに泣かないでよ。なんだか私が泣かせたようじゃないか。

りこりんに見られたら「わーるいんだ!わーるいんだ!先生に言つてやろう」と言われそうだ。

「とりあえず片付けをしよう」

今はメチャクチャになつたテーブルと畳の上に溢れたお茶を片付けないとね。

モランに手伝つてもらつて片付けていると、時刻は午後13時になっていた。お昼の時間だ。

「そろそろお昼にしようか。モランはカレーは食べられるかい?」

「はい、問題ありません。それでは私が作りますので、主は座つてお待ちください」

「いいよ。モランは座つて待つていたまえ。私にもてなしをさせてくれよ」

「そういう訳にはいきません。主を働かせて私だけ休むなのだ、あつてはならないことです!」

モランは声を張り上げた。凄く響くな………かなり肺活量があるとみえた。しかし、様子からして引く気はないな………どうしよう。

「なら一緒に作ろうか。それならいいでしょう?」

「わかりました。早速、一緒に作りましょう」

そう言っ私とモランはキッチンに向かった。

ニコニコしているけど、そんなに嬉しいのかな?

キッチンに来た私たちは早速、調理を開始する。

今日はりんご入りカレーだ。

まずは私が野菜ソーダジャガイモ、人参、玉ねぎを適当な大きさに切る。

そしてモランが鍋で野菜を炒める。

おおく上手いね。

私が絶賛していると、モランがりんごを手に取り、

「スゴイ!りんごを握って果汁を絞り出すなんて」

「これくらい容易いことです」

そのまま握りつぶして果汁を絞り出し始めた。

握力いくらの? 私にはとてもできそうにない。

続けてルーを入れるのだが、ここで私が交代する。

「モラン、テーブルに食器を並べてくれる」

「畏まりました」

そう言つてモランは食器を持って居間に移動する。

さて、配合の時間だ。

苺ジャム、味噌、甘みを出すためにホイップクリームと蜂蜜も加える。

あと苦味も欲しいからセロリとゴウヤ、青汁とコーヒーを加えよう。

おっと、カレーといえは辛味がないと話にならないからね。

最後に楽天の通販で買ったキャロライナ・リーパーを加える。

よし、完成だ！

「食器を並べ終えました」

丁度、タイミングピッタリにモランが戻ってきた。

私は完成したカレーを持って居間にいく。

居間で向かい合うようにして座る。

「いい香りですね。主がアレンジしたのですか？」

「そうだよーさあ、冷めない内に食べよう」

そう言つて、お互い手を合わせて

「いただきます」

食べる。うーん、少し辛味が足りないな。もつと加えてもよかつたかも。

「……おいしい。こんなカレーを食べたのは初めてです」

モランはスプーンを止めて、絶賛してくれた。

「おつ、そんなにおいしいかつたかい？お口に合つてよかつたよ」

「主……よろしければレシピを教えいただけますか？私もコレと同じようなカレーを作つてみたくなりました」

なんと!?？そんな事を言つてくれたのは、君が初めてだよモラン君!

嬉しいな。試行錯誤を繰り返すこと数ヶ月……人から認めてもらえるなんて……涙が出できた。

「どうしました主？私は何か傷つくようなことを言いましたか？」

「いいや、これは歓喜の涙だよ。さあ、食べよう」

ああ、これが料理する者にしか、わからない幸福つてヤツかな

よし、この感動を基にさらなる料理の発展に力を注ごう。

山はいいね。

滋賀県——時刻は10時

「うーん、自然はいいねーモランもそうは思わないかい？」

「はい、主」

私は車——ポルシェ356aから降りると、大きく伸びをした。

私とモランは滋賀県の比叡醍醐山地に来ていた。東京からここまで長かったな

何故、ここにいろかというと、

「それじゃ、モラン。早速、君の実力を見せてもらおうか」

「主の期待に応えられるよう頑張ります」

モランの実力を確かめるためだ。

本当なら人間——武偵庁が定めた犯罪者を使ってテストしたかったが、丁度いいクエ  
ストがなかった為、山での狩猟で把握することにした。

ある程度、分析して実力は把握できていたが、実際にこの目で確かめたくなくてモラ



ンをお願いしてテストに参加してもらった。

モランは二つ返事で承諾してくれた。本当に素直な子だ。

「モランは山育ちだったね。やっぱり狩猟なんかは朝飯前かい」

「狩猟は日没後から日の出までの時間帯は禁止されていますので、朝飯前ではありませんね」

ははは、そうきたか……ボケを返してくれない。

でも、モランの言っていることは正しい。闇夜の山は危険だ。都会と違って、明かりなど存在しない。一度迷えば、遭難するのは確実だ。

流石は山育ち。

狩猟は本来なら免許が必要なのだが、そこは武偵免許で通った。武偵免許って、便利過ぎでしょう。

「そういうえば、まだモランがどんな銃を使うのか聞いてなかったね。見せてくれるかい？」

「はい、私を使うのはコレです」

肩にかけてた虎のキーホルダーが付いたライフルケースから銃トースナイドル銃を取り出した。

スナイドル銃トースナイドルのエンフィールド造兵廠（RS&F）が前装式ライフル銃

であるエンフィールド銃を改造した後装式小銃である。

ストックを始めとした木製パーツはグラスファイバー製に変えられている。おそらく、気象によって膨張・収縮するので木製からグラスファイバー製に変えたのだろう。

「ほく、なかなかの品物を持っているね。見たところしつかりと手入れされている。100年以上の銃とは思えない」

「銃はしつかり手入れすれば何年でも使用できますよ。その証拠に主の銃も100年以上前の物にも関わらず、使用できるでしょう?」

「確かに」

モランの指摘に私は思わず笑みがこぼれた。

しかし、スナイドル銃か…… 大概の人間が見たら「それはこだわりじゃない。時代遅れだ」と言うかもしれないが、とんでもない。

当時、高い命中率と1,000ヤードまで延長された射程を実現したスナイドル銃は、歩兵運用の基礎条件を大きく変えてしまった。

スナイドル銃を装備した部隊とマスケット銃を装備した部隊が交戦した場合、マスケット銃側は有効射程の100ヤード（マスケット銃の命中率は50%）まで接近するためだけに、最大で900ヤードに渡る死のロードを友軍の屍を乗り越えつつひたすら進まねばならなかった。

スナイドル銃は30〜40回の射撃が可能であるため仮に1,000人のマスケット銃兵を相手にした場合でもスナイドル銃装備の部隊は理論上25人の小部隊で無傷のまま相手を全滅させてしまう事ができた。

「それはひいお爺さんの銃かい？ 確かモラン大佐は空気銃を使っていたと思うけど……。」

「確かに曾祖父は空気銃を使用していました。それ以前は様々な銃を使用していたと聞いています」

「モランも空気銃を使ったりするのかい？」

「御望みとあらば今すぐにも変えますが……。」

「ああ、別に今すぐに変えなくてもいいよ」

スナイドル銃…… ロマンがあつていいと思うよ！

個人的にはマルティニ・ヘンリー銃と空気銃も捨てがたいと思うけどな。

きつとモランに似合いそう♪ 来年の高校入学祝いに送ってあげよう。

装備科にはある程度顔がきくから見つかるだろう。

「今、主は空気銃がいいかもしれないと思いましたね」

「何故それを?!? 君はエスパーだったのか!」

「私は超能力者ではありません。主の顔を見ればわかります」

いや、それはある意味では超能力かもしれないよ。顔を見ればわかるか…… 今度から気をつけないとね。

「現在、曾祖父が使っていた空気銃はドイツの知人に預けていますので、主が用意するまでもありません」

「ドイツの知人…… それはガンスミスかい？もしかして装備科だったりする」

「ガンスミス…… 間違いではありませんね。しかし、あの人は重火器が好きで、狙撃銃はあまり作らない変わった人でしたね」

重火器が好きなガンスミスか。重火器は男のロマン！なんちやってね♪まあ、重火器はぶっ放す感じがたまらない。その辺りでは気が合いそうだ。今度、モランに紹介してもらおうとしよう。

「おっと、話し過ぎましたね。さあ、主」

モランが山へ入っていく。私もその後を追って山へ入っていた。

今の季節は7月とあつて暑い。少し歩いただけでダラダラと汗が出てくる。

モランは山育ちとあつて、山に慣れてるようだ。

その証拠に足場の悪い獣道をザクザクと歩いていく。おまけに汗を1つもかいていない。

背には銃だけでなく、リュックまで担いでいるのに不自由していない様子だ。「止まってください。主ーあれを」

モランが突然止まり、指差す先には一頭のツキノワグマがいた。本来は夜行性だが、果実が実る時期になると昼間でも活動する。

名前の由来通り胸部に三日月形の白い模様がある。しかも、大きい……立ち上れば170〜180はあるだろう。この目で生のツキノワグマを見たのは初めてだ。

熊ならモランの相手には丁度いいかも。

「主はこのまま草陰から見ていてください」

私が感動しているのに対し、モランは落ち着いていた。熊など見慣れているのだろうか……

このまま草陰から狙い撃ちするかと思ったが、モランはリュックを置いて草陰から出た。狙撃手がターゲットに姿を見せるなんて……

モランの姿を捉えたツキノワグマは「ヴオオオオ」と唸り声を上げて、モランに接近した。このまま襲われると思われた。

「落ち着けチビ」

モランは迫り来るツキノワグマにビビりもせず、落ち着いた口調で話しかけた。

「ヴオツヴオツ……ヴオツ」

「クマに出会ったら背を向けて逃げるのは自殺行為。死んだふりも意味がありません」  
背を向けると熊は獲物とみなし追いかけてくる。死んだふりが意味をなさないのは熊は腐った死体も平気で食べる。熊からしたらご馳走が落ちていると同じだ。死んだふりをしたら、そのままパクリで終わり。

「カフツカフツ」

「ジツと動かず落ち着く。怒ったままで襲い掛かられたら撃つても勢いが止まらないので危険です。目を逸らさず興奮が鎮まるまで待つ」

熊と出会ったら目を見るのは危険だ。目を見つめると熊は相手の出方を窺う。まあ、腕に自信があれば見つけてもいいかもしれないが……

ツキノワグマはヌウツと立ち上がった。私の見た通り、180はある。

モランは170、1人と1頭は頭一つ分くらいの差しかない。

「立ち上がるのは攻撃のためではなく、私と主のほかに敵がいなか安全確認です」  
「ハウ、ハウ……ハウ、ハウ」

「呼吸がだんだんと落ち着いてきたら、あとはゆっくり……」

「おや？ 予備の弾は出さないのかい？ 単発銃を使う人間はみんな、撃ち損じたとき素早く予備の弾を装填できるように、指にいくつか挟んでいたけど」

モランは予備の弾を1発も指に挟んでいなかった。

狙撃科には単発銃を使う人間もいる。そういった人は必ず予備の弾を指に挟むものなのに……

「予備があれば、その分だけやり直せるなどと、勘違いしてはいけません」  
ゆつくりと銃をスーツと、構えた。

「1発で決めなければ殺されます。1発だから腹が据わるんです」

その言葉とともに、ダアアン！と発砲した。

銃声とともにツキノワグマはズズーンと、音を立てて地面に倒れた。

私は草陰から出て、見てみると銃弾はクマの心臓を撃ち抜いていた——即死だ。

「お見事。心臓をドンピシャとはやるね」

「熊は急所を狙わないと倒せません。それ以外を撃つても興奮させるだけですから」

「それなら頭を狙ってもよかつたんじゃないかい？」

「熊は頭の大きさの割に脳が小さいので、脳に弾が入らないかぎり死ぬことはありません。お望みとあらば、次は頭を狙ってみせますが」

「別に構わないよ。でも、何故自分から姿を現したんだい？狙撃手がターゲットに姿を見せるのはまずいんじゃない？」

「それは……主に私と獲物の真つ向勝負を見てもらいたかつたから」

モランは顔をポツと赤くして答えた。

その反応に私は思わず、「ブフォツ!!？」と吹いてしまった。

「ふははははは、ひーはははははは、ハハハハハ」

「あ、主……!!? そんなに笑わないでください……!」

「ははは、ひー、ごめんごめん。つまり私にカツコイ所を見せたかったらかー。いいね。ますます気に入ったよ」

「あ、ありがとうございます……」

まさかその為だけにあんな行動に出るとはやるね。

道理で変だと思ったよ。狙撃手は待つのが基本なのにさ。

「ところでコレはどうしようか? せっかく仕留めたのにこのまま放置するのは勿体無いし」

「でしたら昼食にしましょう」

そう言つてモランはサバイバルナイフを取り出し、慣れた手つきでツキノワグマを解体していく。

「おおく慣れてるね。やつぱり、山で生活するならこれくらいはできないとダメかい?」

「自然と身につきました。熊以外も解体できますよ」

顎から肛門まで真つすぐナイフを入れ解体の始まりだ。



まず、手、足も先に向かって切り裂く、後はひたすら毛皮を破かないようにナイフで剥いでいく。

「この毛皮は貰ってもいいかな。寮で敷皮にしてみたい」

「別に構いませんが、しっかりとナメさないと酷い悪臭を放ちますよ」

ナメス…… 防腐処理のことかな。ふーむ、装備科か衛生科に頼めば加工してくれるかも。

ふつと私は切り落とされたツキノワグマの手足に目がいった。

「大きな手足だね。私の頭くらいはあるかな」

「丁度、主の頭部くらいはありますね」

なんか見ていると背筋が凍ってきた。おお、怖い怖い。こんなので殴られたら一発で天国行きだね。

そんな手足を持った獣と真つ向で向かい合えるモランは凄いな。

そんなモランは内臓を取り出し始めた。色鮮やかだね。

「さあ、コレもどうぞ」

「それは何だい？プルプルしているけど」

「クマの胆嚢です。乾燥させれば生薬になりますよ」

ほお、これがクマの胆嚢か。採れたとあって、真つ赤な色をしている。

「ありがとうね。モラン」

衛生学部のお土産になりそうだ。ありがたく頂こう。

「内臓を取り出したけど、全部食べられるのかい」

「熊は捨てるどころがありません。肉はもちろん食べられますし、毛皮は防寒着になり、骨は装飾品、脂は火傷の薬になります」

骨——装飾品。カッコイイかも！

「ねえ、モラン……」

「はい、骨はちゃんと取り出し、装飾品にしますのでご安心ください」

ははは、もう君はエスパーで決定だな。なんで私の考えがわかるの？もしかして、また顔に出てた？

「さて、今日の昼食はこのモランが獲れたての熊で腕を振るった料理をお作りいたします」

モランはリュックから鉄串を取り出し、熊の内臓——心臓を突き刺し、そのままライターで起こした焚き火で焼き出した。

パチパチと火を立てながら、心臓を焼いていく。時折、心臓から垂れた脂と血が火に降りかかる。

「心臓上手に焼けました」

こ、このネタは某狩人ゲームのセリフではないか！モランも知っていたんだね。

「さあ、主。熱い内に召し上がって下さい」

「それじゃ、遠慮なく。いただきます」

私は心臓にかぶりつく。うまい!!？噛めば噛むほど肉と血の味がする。新鮮な証だ。

「熊の血は滋養効果がありますから、怪我をしていたら食べるといいですよ」

それはいいね。滋養効果か……金次君と武藤君に飲ませたい。特に金次君に飲ま

せてあげたいな。どうなるんだろ♪

「それとコレも美味しいですよ」

そう言つてモランが取り出したのは熊の小腸だ。

いくつかに分けてあるが、元はかなり長かったはず。

さらに続けてモランはリュックからミネラルウォーターを取り出し、

「小腸を裏返し水で洗い、熊の腹腔に溜まつてプルプルになった血の塊を詰めて縛り焼くと……血の腸詰め completion です」

これはソーセージじゃないですか！熊のソーセージなんて初めてだ。

早速、ムグムグと食べてみた。うん……これも血の味がしてうまい！

これはさらなる料理の発展——高みに登れそうだ。

私が食事に夢中になっていると、

「アオーーーン!!?」

背後から犬のような遠吠えが聞こえてきた。

後ろを振り向いてみるとそこには大きな犬がいた。

「ガウツ」

「うるさい」

私に向かって飛びかかってきた犬に向かって、モランがダアアン!!?と発砲した。

銃弾はそのまま犬に直撃するかと思われたが、犬はくるつと身を捻って躲した。銃弾は犬の背を少し掠めたただけだ。

しかし、犬はごとんとその場に倒れた。

「やるじゃないか。わざと弾を掠めて脊髄を麻痺させるとは」

「主を襲った不届き者の正体を確かめるためにしました」

敵の正体を明かすためとは味な真似をするじゃないか。

私は犬に近づき観察する。

「これはニホンオオカミじゃないか」

ニホンオオカミとは、かつて日本に生息していた、イヌ科イヌ属の、その名の通り日本固有のオオカミである。

絶滅動物であり、日本固有の絶滅動物としては有名な種類の一つ。過去は山狗（ヤマ

イヌ」と呼ばれており、ニホンオオカミという呼称は明治頃に定着したものである。

「明治の末に絶滅したと言われていたのに、生き残りかな」

「おそらくそうかと…… 大方、人の目から隠れて生きている犬でしょう」

どうしたんだい、モラン？ なんだかオオカミが嫌いに見えるよ？

私が疑問に思っていると、モランはニホンオオカミの頭にチャツキと銃を構えた。

「主の食事を邪魔するとは…… 死ねクソ犬」

ちよつと、モラン。オオカミに対して犬はないでしょう。せめてドッグと呼んであげたら？

しかし、このまま死なせるのは勿体無い気がするけどな。

モランが引き金に指を入れたその瞬間、バズと銃声が響いた。

その音を聞いて、モランが「主!!？」と叫んで私に覆い被さる。

なんだろう？

「そのオオカミから離れて下さい」

草陰から人が出てきた。

緑色の髪にヘッドホン、武偵高の女子制服を纏い、その手にはAK-47を再設計した銃ーードラグノフを構えた女子がいた。

「あ、レキさん。どうしたのこんな所で？」

現れたのはレキさんだった。『ロボット・レキ』と呼ばれるほど、無口で無表情だが、狙撃成功率99%以上の狙撃科所属のSランク武偵だ。

有名人でミステリアスな人だが、私は嫌いじゃない。そんな人が私たちに向かつて銃を構えている。

「レキさん。とりあえずソレを下ろしてよ」

私の問いかけにレキさんは反応しない。ただジッと私を眺めて銃を向けてくるだけだ。

そんな私を見て、モランが盾として前に出る。

「なんですかアナタは？主に銃を向けるとはいいい度胸ですな」

「そういうアナタこそ、そのオオカミを殺そうとするとはいいい度胸ですな」

「私はただ主に害を及ぼす害獣を駆除しようとしただけです？何か問題でも？」

「オオカミは害獣などではありません。人間が勝手にそう決め付けただけです」

あー、ヤバイね。モランは何かキレそうだ。目元がピクピクしているのが証拠でわかりやすい。

「寧ろ害を与えたのはあなた達の方です。この辺りはそのオオカミのナワバリ……そこへ勝手に侵入したあなた達のほうに非があると思いますか？」

「獣のナワバリなどイチイチ気にしていられませんね。まあ、こんな小さな山をナワバ

りにしているようでは、ソレの器量が容易に測れますが」

モランが倒れているニホンオオカミを指差しながら答える。

「こらこら、モラン。ソレ呼ばわりは失礼だよ。せめて、ワンちゃんと呼びなさい。」

「人間の目から隠れて暮らすには、この山は最適だからです」

「成る程、つまり人間の目から怯えながら暮らすには最適だと」

「オオカミは賢く強く良い生き物です。決して、怯えてなどいません」

「気のせいかレキさんから怒気のようなモノが伝わってくる。まるで自分の好きなものを侮辱されたような怒りだ。」

「あー、はいはい。そこまで、モラン？ダメだよ目上の人にそんな口きいちゃ」

私は2人の間に入って仲裁に入る。

「しかし、主……」

「しかし、じゃないよ。この人はレキさんと言って、私の所属する東京武偵の一年生——つまり君の先輩。そんな人に向かって失礼な態度はダメ。ほら、謝って」

「……失礼しました。センパイ」

「私にはなく、その子に謝ってください」

レキさんは倒れているニホンオオカミに目を配る。

「はあ？何故、ケモノごときに私が謝らないと？」

あつ、これもう手遅れだ。

レキさんを観察する。

ドラグノフの発砲、それも躊躇いなくモランの頭部に向けたもの。

しかし、モランは私を突き飛ばすとそれを躲す。同時にレキさんに接近し、手加減なしにフルスイングの右ストレートパンチを顎にヒットさせる。

レキさんは倒れるが、それは油断させるためのフェイク。

すかさず立ち上がり懐に仕込んだナイフで切りつける。やるね。狙撃科は接近戦が苦手な人が多いが、レキさんはそうじゃないみたいだ。しかし、それはモランも同じだよ。バックステップで躲し、距離を取る。

レキさんはナイフをドラグノフに装着、銃剣術に変えたか。

突進とともに突き刺すが、モランは掴んで止める。同時に再装填しておいたスナイドル銃をレキさんの頭に至近距離で発砲。防弾制服を警戒してかーモランも容赦ないな。

しかし、同時にレキさんもモランの心臓部…… だけではなく、その後ろにいる私とも撃ち抜く。防弾繊維を貫く貫通弾だね。

結果、三者とも死亡。

相打ち覚悟か…… 死ぬのが怖くないのかな？

私は腰のホルスターから拳銃を引き抜き、空に向かってパァン！と発砲した。



「はい、レキさん。怒りを鎮めて。レキさん、静まりたまえくなんちやって♪」  
私のギャグにレキさんは笑ってくれなかった。某国民的映画のシーンを真似てみたのに……

「貴様あ……主のギャグを受けないとは……いい度胸ですなあ」  
いや、モラン。そこは怒るところじゃないよ!?

それとジ○リ映画は知っていたんですね。

「さて、話を纏めてみるとレキさんはオオカミに謝ってほしい。そうだね」

私が問うとレキさんはコックリとうなづいた。

「しかし、モランはオオカミに頭を下げてくはない。そうだね」

続けてモランに問うと「はい」と答えた。うん、正直で宜しい。

「なら、ここは武偵らしく、戦いで決めようじゃないか」

「主、戦いといいますが、狙撃ですね」

「その通り!それも狩猟での狙撃じゃない。いや、ある意味では狩猟だね。マンハント  
と言う名のね」

「…… お互いが獲物」

「うん、正解だよレキさん。狩るもの狩られるもの—それは君たち2人を意味する。  
お互いが狩人であり、獲物でもある」

私は手を広げ、山を見渡す。

「君たち2人には狙撃勝負をしてもらおう。この山全てが戦いの舞台だ。ああ、勿論使う銃弾はペイント弾かゴム弾ね。一発でも、一発でも被弾すれば即終了。被弾した人は狙撃した人の要求を飲む。これでどうかな？」

「主の決定とあらば従います」

「私もそれで構いません」

承諾してくれたね。さあ、面白くなってきたよ。

Sランク武偵の狙撃手レキさんと、ヨーロッパ随一の狙撃手セバスチャン・モラン大佐のひ孫との戦い。

勝つのはどっちだ？できればモランに勝ってもらいたいな。

## 獵犬と狼

「それでは主、行つてきます」

「……」

「うん、頑張つてね」

モランとレキさんは山に入っていく。森林に4、5歩ほど入った所だろうか。二人は互いに背を向けると、それぞれ反対方向——深い森の中に消えていった。

私？ 勿論、見学さ！これは狙撃手の戦いだからね。邪魔をしてはいけない。

ああ、結果が待ち遠しいな。

「君もそうは思わないかい？ ワンちゃん」

側で気を失っているニホンオオカミに話しかけるが、応答はない。

せめて、ガウかワンでもいいから吠えてよ。

オオカミを観察してみる。戦いの前にレキさんが介抱し、容体は安定している。その証拠に脊髄の麻痺は抜けて、スースーと寝息を立てているし。

「シミュレーションしてみるか」

私は地面に腰を下ろし、目を閉じて瞑想を開始する。

この戦いをイメージしてみる。

まずは地理の把握——比叡醍醐山地・標高848.3 m・私たちがいたのは滋賀県の西部よりだ。

モランとレキさんは、まずお互いに身を隠す。

モランは途中で拾った葉っぱと枝で迷彩服——ギリースーツとトラップを作成——地中に弓矢を仕掛ける。

仕掛け終わると見晴らしいのいい高台——木に登る。凄いな……銃を片手に指の力だけで登っていく。さすがは野せ……ゴホン、狩猟をしていただけはある。

レキさんは……早い。こつちも山育ちだろうか？ササツと苦もなく山道を駆け巡る。おまけに腰を曲げての行動が早い。

制服姿のまま草むらに飛び込み、うつ伏せでドラグノフを構えた。

最近の狙撃科生は汚れるのがイヤで、地面にうつ伏せになるのを躊躇うのに、レキさんには躊躇いが無い。

汚れなど気にせず、ジツとしている。まるで獲物を待つオオカミだ。

お互いに暫く静観を決め込むが、ここでモランが仕掛ける。索敵だ。

獲物を取りたいのなら、敵が自分の前に来てくれることを待つよりも、こちらから獲物を探しに行くか。

太い枝を選んで、木を飛び移っていく。地中に仕掛けたトラップなど気にせず堂々と移動する。

レキさんも索敵開始。

白の防弾制服は目立つので、ワザと土で汚して見つかり難くしている。走る、ひたすら走り抜ける。草原でも走っていたのだろうか？この速度は異常だ。

だが、そこでストップだ！罠を発見——モランの即席の弓矢だ。

地中に仕掛けられていることを確認すると、矢を撃ち出すトラップに繋がった細いロープをナイフで切り無効化。

木の上でモランがレキさんを発見——背後から狙い撃ちできる。

罠を警戒して慎重に索敵を開始するレキさんを背後から発砲！

弾丸は突き進んで行くが、突然ここでレキさんが反転からの発砲、銃弾はモランの弾とぶつかり合い、軌道をズラした。

おお、凄いな。モランが使用している577 Snider弾はボクサーパトロンと呼ばれており、丸みを帯びているからレキさんの7.62mm弾の軌道をズラすが、レキさんはそれを把握している。

「馬鹿な!?あの体勢から発砲だと!?」とモランは驚く。一発に拘るが為に外されたことがショックみたいだ。その所為で次の動作が遅い。

その隙を逃さないとばかりに、今度はレキさんが発砲——狙いはモランが乗っている枝だ。銃弾は枝をへし折り、モランは地面に落下。

体勢を整え、地面に着地したモランにレキさんは間髪を入れず、連射する。ドラグノフ狙撃銃は箱型弾倉——装填数10発だ。

弾丸はビシッ、ビシッとモランのギリースーツを剥がしていく。これは挑発だね。やろうと思えば落下する時点で仕留められるだろうに……

ギリースーツを剥がされながら、モランは逃亡——しつかりと再装填することはいいことだ。

しかし、逃げた先には自身が仕掛けたトラップ——モランはトラップの弓矢で右足を負傷する。

激痛に襲われながらもモランはフツと考える。「何故だ？ 殺ろうと思えばあの時点でできたはず？」と思う。

ここで初めて自分が挑発されていた事に気付く。

あちやー、これはキれるぞ。

レキさんはモランを追う。これって、狙撃手の戦いだよね？

そして草陰に隠れているモランを発見。投降を促すが、モランには届かない——頭に血が上っているからだ。

唸り声を上げ、自分に向かってくるモランに発砲——狙いは両足だ。

しかし、両足を撃たれながらもモランは止まらない。まるで野獣のようだ。

一旦、退避を開始したレキさんをモランは追跡する。

おい、おい。私は一発でも被弾したら試合終了と言ったよね？

シミュレーションを終えると、丁度山から発砲音が聞こえてきた。

最初に2発、少しして5発だ。

これはモランの負けだな。

「頭を冷やせモラン」

自分でも驚く程の低い声が出た。

すると山が静かになった。どうしたんだ？野鳥の気配もしないし、モランとレキさんの気配もしないぞ？

私が謎に思っていると、ガサツと背後の草むらからモランとレキさんが出てきた。モランは右足に矢が突き刺さったままだ。

ああ、そんな怪我をして。

「モラン、大丈夫かい？」

私は心配になり、モランに駆け寄ると、

「主！何卒、もう一度チャンスを与えてください」

モランは私に懇願してきた。ははは、モラン？君は何を言っているのかな？

「今度こそ、必ず仕留めてみせます！私は……まだ負けていない！」

「モラン？私は言つたよね。一発でも被弾した時点で終了だと？まさか……頭に血が上つて忘れた、とは言わないよね？」

私が尋ねると、モランはビクツと身を震わせて、ワナワナと狼狽し始めた。その様子は飼い主に捨てられそうになっている犬のようだ。

「主……私は……私……!!？」

モランは目に涙を浮かべ悔しそうだ。

えっ？モランって、こんな顔ができるの!!？ヤバイ！何だか可愛いよ。これは前にりこりんが言っていた、ギャップ萌えってやつかな？

「モラン……君は負けてしまった。これは事実だ。でもね。君の様子を見れば頑張ったことはわかる。そんな怪我をしてまで私の為に戦ってくれたんでしょ？」

モランの側に寄つて、宥めるとグスンッと泣きべそをかきながらモランはコクリツとうなづく。

「ほらほら、可愛い顔が台無しだよ」

私はハンカチでモランの顔を拭いてあげる。



170cmあるからつま先立ちしないと顔に届かないよ。

「わああああああああん！主いいいいい！ごめんさいいいいい！！？」

モランは私に抱きつき、本格的にワンワンと泣き出してしまった。

「おおー、よしよし。そんなに悔しかったかモランちゃん……うんうん。わかるよ。キアラが被っているレキさんにムカついていたんだよね」

「レキさん。モランはこんな感じだから謝罪は私がするけどいいかな？」

私はオオカミの側にいるレキさんに尋ねる。

「あなたは何なんですか？」

「どういう意味だい？」

レキさんが逆に私に尋ねてきた。何って、私は……モリアーティさ!!? なんちやってね。

あつ、こらこらモラン。そんなに私の胸に顔を埋めないでくれたまえ。何だかくすぐつたいよ。

「風は言っています。あなたの存在そのものが間違っていると」

うーむ？質問の意味がわからないよ。そもそも風って何？レキさんの友達かな？でも、誰かと連絡を取っている様子はないし、いやあのヘッドオンかな？あれで連絡を取っているとか。

「それじゃ、その風さんに伝えてよ。私は間違つたことはしないとね」

武偵法に則つて犯罪者を裁く意味だけどき。

「警告します。あなたは自身の間違いを理解しないまま死ぬ」

「ははは、それは予言かな？それじゃ、私はその予言を覆してみせよう」

正直、何のことだかわからないな。

私はモランを連れて、山から去っていく。

さて……今のモランではレキさんを倒すことはできないな。早急にモランを強化

しないと……まずは装備の変更からだ。装備科に駆け寄つて、

いくつか見繕つてもらおう。

おっと、その前に傷の治療からだよね。

「もう一つだけ警告します。滝にご注意を」

去り際にレキさんがそんな事を言ってきた。

滝い？ナンノコト？

## プレゼント

装備科棟は地上1階から地下3階で成り立っている。

私は今、行きつけのカフェで買ったケースを手に、装備科へ足を運んでいた。

セキュリティ管理の厳重な1階から階段で地下に降りると、無数の銃器がラックに収められ、廊下に並んでいる。

おお、スゴイね。剣呑で不用心な感じが、ビンビンするよ。

大型の銃はケースに入れた方がいい気がする。セキュリティを無効化されたら、「どうぞ取ってください」と言っているようなものだ。

そんな事を考え廊下を歩いていると、『ひらがあや』と書かれた表札のついた作業室に到着した。私がノックすると、

「はい、開いていますのーだー」

中から子供みたいな声が聞こえるー平賀さんだ。

扉を開けると、室内は○ンキホーテみたいに物だらけだ。

装備科だけに大小様々な工具、銃器のパーツがケースに収められて積み重ねられている。

「平賀さん。こんにちは」

「おおっ!? 零ちゃん! さあ、入ってなのだ」

この人の名前は平賀 文。

江戸時代の発明家 平賀 源内の子孫で、機械工作の天才児だ。

幼い頃から実家の町工房で銃の作成に携わってたそうなの。

初めて会った時、私のウェブリー・リボルバーをキラキラした目で改造しようとしたんだよね。

絶対に強力な銃弾を撃てるように改造しようとしたよね? あのまま任せていたら、銃が壊れていたかもしれない。

「平賀さん。注文した物はできているかい?」

「あはっ! もちろんバッチグーなのだ」

平賀さんは小ちやな手で、私の手を引きながら案内する。

足元に散らばった工具やパーツを避けながら室内を進むと、作業台に通された。

作業台の上には大量の狙撃銃があった。

DSR—1、WA2000、L96A1、FPK、AW50、リーエンフィールド狙撃銃、そしてドラグノフ…… etc などケースに収められたままの銃もある。

これらは私が平賀さんに頼んで、オーダーメイドローモラン仕様で全て作ってもらっ

た。

「ありがとうね平賀さん。これだけの銃を作るのは大変だったでしょう？」

「これだけの狙撃銃を注文したのは、零ちゃんが初めてなのだ！頼まれた時は驚いたけど、やはり甲斐があつたのだ」

やり甲斐ねえ……平賀さんは自分の仕事を誇りに思っているんだね。装備科の中には自分の作った銃が犯罪に使われて、精神を病んだ人もいるけど、平賀さんはどうかな……自分の作った物が犯罪に使われたら。

「不思議なのだ。零ちゃんは探偵科なのに、何でこんなに狙撃銃を欲しがるのだ？」

「これらは私じゃなく、後輩へのプレゼントだよ」

「後輩にプレゼントとな!!? 零ちゃんは優しい人なのだ」

優しい人かく平賀さん、それは間違いかもしれないよ。

あつ、

「その後輩は狙撃科なのか? そんなに狙撃銃を欲しがる様子を見る限り、決まった得物がなくて困っている気がするのだ」

おや? 何でそんな事がわかるんだい? 装備科だけに使おうとする人間の特徴がわかるとか。

「まあね。ああ! そうだ。アレもできているかい？」

「もちろんなのだ。今、取ってくるから待つてほしいなのだ」

平賀さんはそう言って、奥の倉庫に走っていた。

こんなにゴチャゴチャした足元を転ばずに歩けるなく。

暫く待つていっていると、平賀さんは両手にケースを抱えて戻ってきた。拳銃用のケースだ。

私の側に寄り、パカッと開く。中には回転式拳銃が入っていた。

「特注品のコルト・シングルアクション・アーミーなのだ」

コルト・シングルアクション・アーミー通称、ピースメーカー。

これも平賀さんに頼んで特注で作ったもらった品だ。

何故、ピースメーカーを頼んだかというと、金一さんの影響だろう。

金一さんの持つていたモノはシルバーだが、私のこれはブラックだ。

私は手に取り、構えてみる。うーむ、手に張り付くようにしつくりくるぞ。違和感もない。

「カッコイイなのだ！零ちゃんにはブラックが似合っているなのだ」

「ありがとう。例の改造もしてくれたんだらうね？」

「もちろんなのだ！シリンドラー部分の回転速度は通常の2倍速。重量も軽くしてあるのだ」

それはいいね。

私は腰のホルスターにピースメーカーを納め、西部劇のガンマンのようにシユバツと、早撃ちしてみる。もちろん弾は入っていないよ。

「おおくまるで西部劇のカウボーイなのだ！でも気をつけてなのだ。早撃ちはシリンダーとグリップを痛めやすいから程々なのだ」

「忠告ありがとうね。それじゃ、狙撃銃は私の寮に届けてね」

私そのまま作業室を後にしようとしたら、ある事を思い出したので引き返す。

「ねえ、平賀さん。追加でコレも作ってみないかい？」

懐からある人物の写真をヌツと取り出し、平賀さんに見せた。

「ブツ。これって蘭豹先生なのだ」

そうなのである。それも、前に隠し撮りした蘭豹先生の怒りの表情だ。

写真には、不機嫌そうに眉間にシワを寄せ、鋭い眉毛は跳ね上がって獣のように歯を剥き出しにした蘭豹先生が正面に写っている。

前に強襲科にお邪魔した時に、偶々偶然見かけたので撮ったのだ。

我ながらよく撮れたものだ。

「こんな表情の銅像を作りたいと思わないかい？」

「ぶはは、確かに面白いのだ」

「でしよう！平賀さんもそう思うよね！」

2人の笑い声が作業室に響く。

平賀さんはノリがいい。面白いと思ったモノは何でも作ってくれる。平賀さんに頼んでよかった。

銅像は皆、真顔で表情がまったくないからね。

「せっかく作るんだし、服も変えてみようか」

「なら、偉そうな服がいいのだ！何かこうカッコイイ服が似合いそうなのだ」

平賀さんが服のカタログを取り出したので、私も一緒になって見る。

「おっ！これなんかどうなのだ？」

平賀さんが何かを見つけたようだ。どれどれ？

それは旧日本軍の陸軍将校の軍服だった。

「ふははははは、ヤバイよ。絶対に似合うって!!？」

「なははははは、あややもそう思うのだ!!？あと軍帽も被せてみようなのだ!!？」

そのまま悪ノリして、1時間ほど意見を出し合った。

「3週間ほどかかるのだ。それまで待つてほしいのだ」

「うん、お願いね」

「待つてなのだ。コレを忘れてないのだ？」



平賀さんは手で円を作っていた。忘れていないとも！決して、どきくきに紛れて踏み倒そうなんて、野蛮な考えは持ち合わせていないよ。

私は懐からカードを取り出し、平賀さんに渡すと決済してくれた。

「毎度ありなのだー。零ちゃんは払いがいいから助かるのだ」

平賀さんはお金にガメツイところがある。

ぼったくりと評してもいいくらいだ。

「探偵科はそんなに儲かるとは思えないのだ。どうやって稼いでいるのだ？よかつたら教えてほしいのだ！」

それは偏見だよ。探偵科だって儲かる仕事の一つや二つあるさ。

まあ、私の場合は探偵科だけでなく、他の仕事も受けているけどねー主に仕事の相談、人間関係や人生相談など表にはできないモノが多いね。

「まあ、機会があればね。そうだ！ねえ、平賀さん。君は何か悩みを抱えているんじゃないのかい？」

「あややに悩みなんてないのだー。毎日、ウキウキしているのだ」

平賀さんはニパツと笑ってみせた。

そうかい？私には仕事に没頭して何かを忘れようとしている印象があるが……も  
う少し聞いてみるか。

「平賀さんは自分の銃が悪い事ー犯罪に使われたらイヤかい？」

「もちろんなのだ。あややの作った銃が悪いことに使われるのは、イヤなのだ」

最後の辺りー声のトーンが少しだけ落ちたね。瞳孔も開いている。

装備科にとつて、自分の作った物が犯罪に使われるのは耐えられない屈辱だろう。平賀さんもそんな経験がありそうだ。

「それじゃ、もしも平賀さんの銃を悪いヤツが使っていたらどうする？」

「ウーン……強襲科に連絡なのだ！」

平賀さんは頭を捻らせながら、自信満々に答えた。

ははは、強襲科に連絡か。

「誰にも連絡できなかつたらどうするんだい？そんな時は……」

「あややはたたかうなのだ!!？悪いヤツはやつつけるなのだ！」

いい返事だ！思わず100点満点をあげたいくらいだよ。

そうだね。平賀さんの銃を悪用する悪いヤツはやつつけないと。君自身の手でね。

「いい意見をありがとうね。あつ！そうだ。これよかつたら食べてよ」

私は買ってきたケーキを平賀さんに渡すーショートケーキとチョコケーキだ。

「ありがとうなのだ！零ちゃんはお土産を持って来てくれるから大好きなのだ!!？」

「そう言ってくれてありがとう。それじゃね」

私は作業室を出て、地下室を後にする。

1階のセキユリティー室に上がってみると、数名の装備科の男子たちがいた。みんな深刻そうな表情だ。

おや? どうしたんだらう。私は近づいてみる。

「皆、どうしたの? 男子で集まってさ」

「あつ! 零さん。こんにちは」

1人が私に気付きあいさつすると、つられる様に「こんにちは」と全員あいさつしてきた。

「何か悩み事かい? よかったら相談に乗るよ?」

「本当!? 零さんが相談に乗ってくれるとか……おい」

「丁度よかった。実は俺たち装備科が作成した銃器が盗難にあつたんだ」

それをスタートに男子たちは語り出した。

最近東京を騒がせている銃密売組織が密売だけでなく、銃器の盗難、装備科生の誘拐にまで手を出し始めたそう。

しかも銃の盗難対象は学生武偵の所持している銃——特に東京武偵校に在学している人をターゲットに選んでいる。

うちの学校の装備科はいい仕事をするからね。物や人にしてもいいモノばかりだ。

学生武偵かプロの武偵を狙うとしたら、学生の方がやり易いとみたか。学生の中にはプロ顔負けのルー金次君とかいるのにね。

「装備科では登下校時に注意しろって、教務科から勧告がきたんだ」

「それは先生たちがあなた達を心配してくれているってことだろう。それが気に入らないのかい？」

「そうじゃないよ。ただ、黙ってこのまま何もせずー他の学科に任せつきりでいいのか?と思っっているんだ」

ツナギを着た男子生徒が答える。

成る程。装備科は前線からは程遠いが、彼らもまた武偵。血が騒ぐと言えいいのかな?何かしたいんだね。

「だったら行動に移せばいい」

「で、でもよ。零さん。俺たちは装備科で……」

「だから?装備科は前線ー前に出て行動してはいけないという決まりはないよ? 『武偵は自ら考え行動せよ』というのでしょう?」

「あー、ようやく退院できたぜ」

俺は退院後、久しぶりに外に出られた事に感動していた。

何故か？それは零の見舞い品を口にして生還できたことさ！ちゃんと地に足をつけて外にいることが、こんなに感動するなんて……今までなかったことだ。

俺が外を歩いていると、

「よ、よう。キンジ」

「武藤……」

武藤とパツタリと出会った。

何でここに……ああ、そうか。コイツも退院できたんだな。よかつたぜ。

「なあ、キンジ。怪我はもう大丈夫なのか？ランバージャックつて言っておきながら、俺は……」

なんだ？まだランバージャックの事を引きずつてやがるのかよ？

「あー、よせよせ。もう、その事は忘れた」

「でもよ！俺は車輻科の連中を使って、お前を寄つてたかつて傷つけたんだぞ！憎くねえのかよ!?？お前から殴られても何も言えないんだぞ？俺は……俺は」

苦渋の表情を浮かべて武藤は俯いてしまった。

そんなに思い詰めてたのかよ……まさか病院のベッドの上でもずっと。

「はあー。なあ、武藤。俺はお前の事を恨んでもいねえし、憎まない。だからさ、そんなに思い詰めるな。そんな感じだと事故るぞ?」

「けどよ……俺は……」

まったく……こいつは責任感が強いぜ。まあ、そんな所がコイツの長所かもな。

俺は武藤の肩にポンと手を置いて、

「納得いかねえなら、気が済むまで話そうぜー飯でも食いながらよ」

「ぶはは、飯でもって、お前が奢ってくれるのかよ」

「バーカ。割り勘だよ」

「そこは奢るって言えよ」

気がつけばお互い笑ってた。

武藤は何時ものようにサツパリした顔に戻っていた。

ファミレスにてー

俺と武藤は夕食を食いに、行きつけのレストランに来た。

自動ドアが音を立てて開き、中に入ると店員がやって来て「2名さまでしょうか?」と尋ねてくるので、「そうだ」と答える。

今日が平日、しかも夕食の時間帯とあつて客は多いが、席は空いていた。適当に空い

ている席に俺たちは腰を下ろした。

「なあ、キンジ。ありがとうよ」

俺はメニューを開いて、何を注文しようか迷っていると、武藤が礼を言ってきた。

「突然、どうした？」

「いや……俺はてつきりお前から絶交されるんじゃないかと思っただが、お前は俺を許してくれた」

「堅苦しいな……もっとフランクになれよ。俺はもうランバージャックの事は忘れた。水に流した」

「ははは、お前のそんなサツパリした所はいいぜ。本当にありがとうよ」

武藤はテーブルに頭が付くのではと、思うくらいに頭を下げた。

だから、もう水に流したと言っただろう。

話題を変えないと、いつまでもこの話……いや、このままいこう。武藤には聞かないといけない事があつたんだ。

「武藤……覚えてるだけでいいんだ。お前が言っていた『あの方』って誰の事なんだ？」

「すまん……その事はわからねえんだ。覚えてない」

覚えてない……入院中に武藤は尋問科にも同じ事を言っていたそうさ。

尋問科の間では武藤は洗脳あるいは催眠術にかかっていたのでは？という見解らしい。

武藤だけでなく、車輛科全員も同じ答えた。

「些細な事でもいいんだ。俺はな武藤…… お前をいい様に使いやがった黒幕が許せねえ。真に怒る対象はそいつだ」

「キンジ…… あー、クソ?!? なんか覚えてねえのか俺は…… !!?」

武藤は頭に両手を当てて、唸りだした。頼む思い出してくれ！お前の仇を俺は取りたい。黒幕を見つけたらして、ケジメをつけさせる。

「そういえば…… チカチカと光を浴びた。いや、強い光を見た記憶があるぜ」

「光？それはどんな光だよ」

「病院の診察室にあるような光だ。待ってくれ…… だんだん思い出してきた。光の中にシルエットー人影がある」

人影?!? そいつが黒幕か。

「どんな奴だ?!? もつと繊細に教えてくれ」

「ダメだ…… 影になって顔が見えねえ。けど、そいつから『君は躊躇いなく行動する』って、言われたような気がする」

『君は躊躇いなく行動する』か、黒幕の口癖かもしれないな。犯人を見つけるヒントにな



るかも。前に零から「犯人を見つけるコツは相手の癖を見つけことだよ」って、言われたけな。

「ありがとうよ武藤。他に何か思い出したら、俺に報告してくれ」

「ああ、すまねえ。そうするぜ」

それを最後に武藤はテーブルに置いてあつたお冷に手を伸ばす。

任せろ。必ずお前の仇を取ってやる。

しかし、黒幕は何者なんだ？ 自分は手を汚さず、他人を操り犯行を行うなんて……まるで、巣を張り獲物がかかるとをジツと待つ蜘蛛のようだぜ。もしかしたら、武藤だけじゃなく他にも被害者がいるかもな。

せいぜい巣の中心で待つてろ。巣を辿って駆除してやるぜ。

俺が決意を固めていると、

「やあ、金次君に武藤君。2人してデートかい？」

背後からフザけた事を言われた。デートって、なワケがあるか？！

武藤は飲んでいた水をブツと、吹いてるし。

発言者の顔を見てやろうと、俺が振り返ると、

「零かよ……なんでここにいるんだ？」

「夕食さ」

零がいた。

お前な……人を擲擧うのは程々にしろって、あれほど言ったよな？飯食っている途中だったら、下手したら喉に詰まらせてたぞ。

「零じゃねえか！久しぶりだな」

「本当に久しぶりだね武藤君。退院おめでとう」

そう言つて零は俺の隣に座りやがった。

おいつ、そんなに近づくな。

「遠目で見てたけど、何か話してたのかい？よかつたら付き合うよ？」

「お前には関係ねえよ。これは俺の案件だ」

「どうしたんだキンジ。零が来た途端、顔が赤くなつたぜ」

馬鹿ツ？何を言つてやがんだ武藤？！

慌てて俺は自分の血流を確認する。よかつた……これなら大丈夫そうだな。

「おやくもしかして、私に会えなくて寂しかったのかい？言つてくれれば、会いにいつたのに」

「会いに来れない原因を作つたのはお前だろう」

見舞い品事件が思い出される。あれが原因で病院内で見舞いの品は、必ず検査にかけることが決定したからな。

「お前が持つてきた見舞いの品で生死の境を彷徨ったんだぞ。どんな自家栽培をしたらああなるんだ」

「ひどいな。ただ水の代わりにビタミン剤などを与えただけさ」

「なあ、キンジ。零って、家事下手か？」

頼む武藤でもいいから、こいつに家庭の授業をしてくれ。

武藤は一人暮らしでしつかりしているから、いい教師になるぜ。

そんな事を考えていると、突然、俺たち3人の携帯がなった。

画面を開いてみると、教務科からだった。内容は……

「金次君、武藤君。これって……」

「ああ、なんてこった!? 平賀さんが…… !!?」

零と武藤は驚きを隠せていない様子だ。

教務科から届いたメールには『装備科所属の平賀 文が誘拐された。本人から救援要請あり。手の空いている武偵は至急、武偵高校に集合』とあった。

## 平賀さん誘拐事件

キンジ視点――

「平賀さんが誘拐って、どうして誘拐されたんだよ」

携帯に届いたメールを再度確認し、俺は訳がわからなかった。武藤と和解のつもりで夕食に食いに来たのに、注文する前にコレかよ。

「これって、最近多発している武偵――装備科をターゲットにした誘拐犯の仕業か？」

「正確には武器密売組織だよ武藤君。まあ、密売が主で誘拐は二の次だろうけどさ」

誘拐・密売も犯罪に変わりはないよ。

しかし、零の武器密売という言葉にピンとくるものがあった。

最近、東京を中心に活動している謎の武器密売組織。武偵から強奪した銃を密売することで名が上がっている連中だ。

先に武藤が言ったように、武偵の中でも装備科が狙われている。

装備科の作る銃は質が高いから。おまけに前線向きじゃないから、それが狙われやすい原因になっているのかもしれない。

「教務科いや、正確には平賀さんからの、依頼、だし、早く助けに行こうよ」

「だな！みんなのマスコット平賀さんのピンチだぜ。ここで助けに行かないとあつちや、男の名が泣くぜ」

誘拐は1分1秒を争う事件だ。今は座っている場合じゃないな。

会計を済ませ（何も注文していないが）、全員で店を出る。まずは武偵高に戻って、教務科から正確な情報を提供してもらわないとな。

自動ドアを抜けて、

「遠山 金次と玲瓏館 零だな？」

店の外に出ると、突然見知らぬ3人組の男たちから声をかけられた。

服装は着崩しており、おまけに目つきが普通じゃない。

なんだコイツら？見るからにガラの悪い奴らだ。

男の1人は手に写真のようなものを持って、俺と零を見比べている。

「なんだよ。俺らに用でもあるのか？」

「あの私たちに急いでいるんですが……」

「そこを通してくれよ。緊急事態なんだな」

俺と零・武藤の3人はいつでも銃が抜けるよう警戒しながら、男たちの様子を伺う。

「間違いない。このカップルだ。やれ！」

1人の男の掛け声と共に、2人の男が俺と武藤に襲いかかった。

しかし、動きが素人だな。遅すぎる。ひらりつと、簡単に背後に回れた。

覆い被さるように襲ってきた奴の背後を取ると、そのまま腰に蹴りを放った。

見かけによらず随分と軽いな。ゴロゴロと転がっていったぜ。

「あらよつと！」

一方、武藤の方はというと懐に飛び込み、顎にアツパーカットを放った。武藤の巨体から放たれたパンチをくらって、体が宙に浮いたぞ。

おまけにI発K・Oだし。コイツら弱すぎだな。

「ウツ!?？」

後ろから零の呻き声が聞こえた。

慌てて振り返ると、ドサツと音を立て零は倒れた。

零の後ろにはバチバチと、スタンガンを持った2人の男が立っていた。しまった！伏

兵が潜んでやがったか！

「おい！遠山金次。この女がどうなってもいいのか！」

倒れた零の髪を持ち上げるようにし、喉元にナイフを突きつける。

くそツ！人質を取られたか。

「おい！てめえ、レイから離れろ！」

「止めろ武藤！」

男に向けて、銃を構えた武藤を俺は止める。

「へへ、それでいいんだよ。大人しく来い！」

引つ張られる形で俺と零は、近くに止めてある（おそらく連中の）車にドンツと押し込められた。

「キンジー・レイ！」

武藤が追いかけてようとしたが、連中の仲間から腹に蹴りをくらわれ地面に蹲る。

「おっと、騒ぐなよ」

武藤の様子を見て思わず、車の窓から身を投げ出そうとした俺の首筋にナイフが突きつけられる。どうにかしたいが、今は気を失った零もいる。ここは大人しく従うしかないか……

車の中で目隠しと後ろ手に縄をされ、おまけに銃まで取り上げられた。暫く走ると何処かに停車した。ここが目的地——連中のアジトか？

「おらーとつとと降りろー！」

怒鳴りつけられ、俺は車から降ろされた。

降りる際、鼻腔から潮の香りが入ってきた。ここは海に近い場所なのか？

目隠しされてわからないが、おそらく零も一緒だろう。車の中で意識を取り戻した様子になかったから、連中に抱えられる形で降ろされたか。

「ほら、歩け！」

背中に冷たいモノが突きつけられる。多分、銃だな。

後ろでガラガラと扉が閉まる音が聞こえる。

そのまま歩かされると、パサリと目隠しを外された。

「ここは……？ 何処かの倉庫か？」

まず目に付くのは、辺り一面まで埋まっている木箱の山だ。まだ梱包されていないだろう。箱の蓋が開いたままの物がある。箱の中には銃器がギツシリと詰まっている。

これは武偵から奪ったか、自分たちで密造した銃だな。

倉庫の中には俺と零を誘拐してきた連中の仲間だろうか。10人ばかり姿を確認できる。

「とつとと座れ！」

パイプ椅子に座らされた。隣を見ると零と平賀さんもいる。2人とも俺と同じように後ろ手に縄をされている。まだ意識を失っているのか、零の方はグツタリとしているが。



「平賀さん無事か？」

「大丈夫なのだ。ちよつと怖いけど、とーやま君と零ちゃんが無事に助けに来てくれて元気が出てきたのだ」

助けに来て、俺らも誘拐されたけどな。

でも、何で連中は俺と零を誘拐したんだ？ 零は探偵科、俺は強襲科——装備科とは無縁なのに。

「なあ、平賀さん。何で誘拐されたんだ？」

「前に零ちゃんから差し入れて貰ったケーキが急に食べたくなくなったのだ。それ学校の帰りにお店に寄ったら、連れていかれたのだ」

つまり、零に買って貰ったケーキが食べたくなくなって、買いに出かけたら誘拐されたと。

「うーん…… あつ、金次君。平賀さんおはよう…… いや、こんばんは」

零が意識を取り戻した。

目覚めて、早々こんばんは、じゃねえよ。自分の置かれた状況を理解してんのか？  
「(ト)は…… 何処だい？ 金次君わかる？」

零は辺りをキョロキョロと見渡す。

「知らね。でも、何処かの倉庫じゃねえかな」

「喋ってんじゃねえ！」

連中の一人からガツと殴られた。

「金次君!?」

「とーやま君!? ああ、血が出ているのだ」

心配してくれて悪いが、こんな蘭豹の鉄拳に比べたら、大した事ねえよ。

「ガキ共! 今からボスが来る。大人しくしろよ」

ボス? コイツらの親玉か。

誘拐されて災難だったが、連中のボスの顔を見れるとは丁度良い機会だぜ。面を拝んでやる。

暫く待っていると倉庫の奥――木箱の陰から一人の男が歩いてきた。

洒落た青のスーツに、長髪の若い男だ。

こいつがボスか。そいつは手下にパイプ椅子を持って来させると、俺らの前にイキヨイよくガツと座りこんだ。

「ようこそ我がアジトへ」

「あなたは……」

「静かにしろ!」

誰かと尋ねる零に手下の一人が大声で怒鳴る。てめえの方が静かにしろうるせえよ。

「荒っぽいのは許してくれよ。どうしてもお前らに聞かなきゃならねえ事があつて来て

もらったんだ……何だか分かるよな？」

「……何でしょう？ どうもここは学校ではなさそうですね。となければ私や金次君・平賀さんには皆目見当も付きませんが」

「下らなねえ事抜かしてんじやねぞ。お前らがパクった商品をどこにやったかつて聞いてんだよ！」

零の言葉に親玉はキレたのか。零を顔をバシツと平手打ちした。叩かれた零の顔は赤く腫れた。コイツ……！女の顔を叩きやがったな！

反撃しようとして縄を解こうとしたら、零がこつちに顔を向けてパチパチと瞬きをした。これは瞬き信号か。

意味は、大丈夫・生まれ・機会・伺え・耐えろだった。

機会を待つてか……わかったよ。

「部下の報告によると、お前らがパクって隠し持つてるそうじやねえか」

さつきからコイツは何を言つてやがる？俺らが何をパクったっていうんだ？商品がどうの言つていたー密造・強奪した銃器のことか？

全く心当たりがねえぞ。

「武偵サマには過ぎた玩具だろう？返してくれよ。まんまと全部奪われたなんて上に知られたら俺の首がヤベェんだよ……さあ吐け！」

「オイラー等式……それが答えですよ」

身に覚えがない俺や平賀さんの代わりに、零の口から出た答えは見当違いなモノだった。

確か……… 解析学における等式だな。

$$e^{i\pi} + 1 = 0$$

e : ネイピア数、すなわち自然対数の底

i : 虚数単位、すなわち二乗すると  $-1$  となる複素数

$\pi$  : 円周率、すなわち円の周の直径に対する比率

前に零から教えてもらったが、意味がわからなくてそのままにしていた。取り敢えず、答えがゼロになるとだけは覚えていたが……

質問の答えが気に入らなかったのか、親玉はゴツと殴った。

「クソがッ!!? ナメてんじゃねーぞ!!?」

零は再び、自分を殴ろうとした親玉の鼻先スレスレまで足を上げ、ス……と静かに足を組む。

その動作は思わず見惚れてしまう程、優雅で気品に溢れている。気のせいかな。零の座っているパイプ椅子が玉座……そこに座る零は女王のように見えるぞ。

「東京を中心に活動する武器密売組織、刀狩り」。意外だったね。神奈川しかも横浜の

倉庫街がアジト——堂々とした場所にあるなんて。どうりで見つからない訳だ。アタタの組織の後ろには相当の権力か、社会的影響力のある人物がいる様だ。こんな立派な倉庫街をポンツと貸し出すなんて——そんな相手には武偵もなかなか手を出しにくい」

刀狩り……それが連中の名前か。つーか、零。お前はいつから分かってたんだ？

相手の情報——横浜の倉庫街、組織名など俺はわからなかつたぞ。また、お得意の分析か？

「……ハツどうやら本当に死にたいらしいな」

「……だから、君達、を利用させてもらった。キミに私と金次君の写真を送りつけてね」

写真……レストランを出てすぐに声を掛けてきた男が待つていた写真のことか？  
うん？ちよつと待てよ。

「正確に私と金次君を攫つてもらおう為に送つたんだ。横浜をウロウロしていたキミの部下を装つてね。レストランでちゃんと声を掛けてくれて助かつたよ」

「……待つて。お前は一体何を言つてんだ!?!」

「……まだ分からないのかい？なら、教えてあげるよ。これは全て私が企てた事なんだ。私立相談役のこの玲瓏館・モリアーティ・零がね」

「零ちゃん。なんだかカッコいいのだ!!?」

おい、平賀さん。そこは黙って聞いておこうぜ。多分、これは零のキメ台詞だと思うからよ。

企てたって……まさか密売組織の存在を知った時から、逮捕するために罠を張ったのか!!? こいつの知略には恐れ入るぜ。

それにしてもMはモリアーティの頭文字だったんだな、初めて聞いたぜーそれにしても、モリアーティか……何処かで聞いたような?

「ありがとうね平賀さん。さてと……君達は最初から私の手の平の上で踊る駒に過ぎない」

零はス……と足を上げ、

「もう一つ教えてあげるよ。さっきの数式の答えは……ゼロだよ!!?」  
ダンツと床を叩いた。

それと同時にドドンツという爆発音が鳴り、倉庫が揺れる。

「何だ!!?」

「おい! 外に誰かー」

外の様子を確認しようと、倉庫の扉を開けた手下の1人がサツと入って来た何者かに、ダダダンツと撃たれ後ろに倒れる。

それを合図に一齐に何者かが、なだれ込んで来たーTNK製の防弾ベルト。強化プ

ラスチック製の面あて付きヘルメット。武偵高の校章が入ったインカムをつけている。あれは武偵高の連中だ。

SATやSWATにも似たこのC装備は武偵がいわゆる『出入り』の際に着込む、攻撃的な装備だ。大概は強襲科が着込むのに、俺が見た限り強襲科だけでなく、前線とは程遠い装備科までいるぞ！

ダダダダダッと激しい銃声が倉庫内に鳴り響く。

よく見るとPP-19-01 Vityaz、トンプソン・サブマシンガン、スパス12、ウージー、AR-18を躊躇いなく撃ちまくっている。銃検に通せば1発でアウトな武器ばかりだ。

おい!? 弾はゴム弾とかプラスチックの模擬弾だよな? 撃たれたヤツから血が出てないから大丈夫だろうが……

「な…… 武偵だと!? どうしてここが……」

親玉は状況が理解できない様子だ。

それを見た零が俺に顔を向ける。今なんだな!

後ろで縛られた縄を解き、周りにいる手下の急所――顎、首、鼻に後遺症が残らない程度に攻撃を叩き込む。

簡単に攻撃が入るってことは連中の練度は高くないな――まったく、こっちの攻撃に

反応もできていない。

俺の隣——零が縛られている場所から、ガンツと音が聞こえた。向いて見ると、「アナタの兵の練度は思ったより低いね。人質の縄すら満足に縛れないとは」

パイプ椅子を手に立っている零がいた。その足下には殴られたのだろう。手下が頭から血を流して床に伏せていた。やり過ぎだぞ！

「あと『どうして』と言っていましたね。簡単だよ。誘拐されたあの時から仲間たちがずつと付けていたんだよ。発信器のついた私をね。ロクに身体検査もせず、銃だけ取り上げるなんてお粗末だね」

「……！」

親玉が右手を懐に突っ込んだ。銃を取り出すつもりか！

「さあ罰を下しましょうか！」

そんな事御構い無しに零はパイプ椅子を振り上げた。

零を押し退け、俺は親玉の右手から銃を叩き落とし、顎にストレートをかましてやった。

それだけで親玉はノビた。よ、弱い…… 親玉なんだからもう少し骨があってもいいだろ。

「もう、金次君。手出しは無用だったのに」



「お前、問答無用でコイツの頭を砕くつもりだったろう?」

平賀さんの縄を解きながら、零は俺に文句を言ってきた。

俺の見間違いだっただろうか——零はパイプ椅子で殴ろうとした瞬間、笑っていた。あのままやらせていたら取り返しのことかない事になっていたかもしれない。

「そんな訳ないさ。金次君の気のせいだよ」

「じゃあ、何でその手下は頭から血を流しているんだ?」

「思わず力が入り過ぎたんだよ」

入り過ぎたって、軽いノリで言うな。

零は悪いと思ったのか。手下に応急処置を施す。妙に手馴れている。こいつも武偵だからこれくらいできて当然か。

「キンジ! レイ! 助けに来たぜ」

完全に制圧したのだらう——倉庫で立っているのは武偵高の連中だけだ。密売組織の連中は1人残らず、地に伏している。し、死んでないよな?

連中の波を掻き分け、武藤がやってきた。お前も来てたのか。できればスパス12を置いてきてほしいぜ。

「おお、武藤君なのだ!」

「平賀さんも捕まってたのか。キンジとレイ・平賀さんも助けられて一件落着だな!」

「だね。さて……偶然、犯人達は武器密売組織で偶然、私と金次君・平賀さんは誘拐されてしまった。はてさて、教務科に何て報告しようか」

零の言葉に俺は呆れた。

偶然で済ませられる訳がねえだろう。誘拐されたって、教務科から知られたら怒鳴られる事間違いなしだなー特に強襲科の俺はな！

「なあ、零。親玉が『商品をパクられた』と言っていたが、まさか本当にパクってないよな？ やつてたら証拠隠滅罪になるぞ」

「まさか。私はやってないよ。そう思わせただけさ。丁度、彼らの組織の武器が何者かに強奪されたという情報を掴んでね。それを利用してもらった。あとで情報科に駆け寄ってごらんよ」

そんな情報まで掴んでたのかよ。それを利用し、ワザと誘拐されてアジトを突き止めるとな。クールに行動するのではなく、大胆に行動するんだなコイツも。

「あとよ。発信器なんて何処に仕込んでたんだよ？ もし身体検査されたらバレるし……」

「(っ)だよ」

零が指し示した場所は……胸の谷間だった！

ハダけた制服から谷間と僅かながら黒の下着まで見える。

なんて場所に隠してやがるんだ!!?

「どうしたんだい？あつ！そうかく私の計画に加担したご褒美が欲しいんだね。ほら、眺めてもいいよ」

胸をアピールするように、ズイズイと距離を詰めてくる。

計画に加担って、犯罪ぽく言うな！おまけに近づいて来るな！

武藤助けろ！俺は武藤たちに助けを求めるが、全員鼻の下を伸ばして「うひょー!!？」と零を眺めてる。こ、この……エロガキどもめ！

「おお、何だか面白そうなのだ！あややもするのだ」

零につられて平賀さんまでも悪ノリし、ズイズイと距離を詰めてくる。平賀さんは……大丈夫だな。

取り敢えず、今は逃げることから始めないと！

「おい、金次君。待つてよー」

「待つのだ。とーやま君」

後ろから零と平賀さんが追いかけてくる。来ないでくれー!!？

せめて前のボタンを閉めてからにしろよ！

俺は逃げながら、零のMーモリアーティという名前が不思議と頭から離れなかった。あいつのミドルネームを初めて聞いたな。

事件の翌日に聞いた話だが、横浜市内で一台の大型トレーラーが発見された。探偵科と鑑識科が調べた所、武器密売組織、刀狩り、の車両と断定。荷台は空っぽだったが、運転席には頭を撃ち抜かれた遺体を発見し、他殺体だった。殺害に使用されたのは、7.62mm弾ロードドラグノフの見方が強い。

# 読書の秋？いいえ、事件の秋さ！

女子寮――

夏も終わりを迎え、季節はすっかり秋に突入した。

休日の秋に何をするか？読書・食事・遠出と人によって違うだろうが、私は女子寮の自宅でパソコンをカタカタと当たっていた。

休日は決して暇というワケではない。

パソコンの画面には蜘蛛のシルエツトがクルクルと回っている。

これは私が開発したプログラム『スパイダー』だ。

どんなプログラムかというと、情報収集プログラムだ。

事件の真実を人には言えない人が心の寄りどころにしている裏サイトを運営――要は密告サイトだね。

日本一国だけでなく、私はそれを世界中のどの国でも運営しそれぞれの情報を分析し関連づける。

『スパイダー』とはそれを処理する画期的なプログラムだ。どんな細かい情報でも網にひっかけることができる。

このプログラムを作ろうと思ったキツカケは、情報科でパソコンについて勉強していた時に思いついたのだ。

今の社会、ネットの力は凄いものだ。パソコン一台で世界中と通信できる。どこかの英国探偵とは違う。

ネットで公表された情報と自ら動いて調べた情報では、ネットの方が早く手に入る場合がある。ネットの力を最大限に利用しないとね。

勿論、手に入れた情報はプリントアウトして関係図―蜘蛛の巣にして分析するけどね。

「おや?事件かな」

画面に映る蜘蛛のシルエツトが輝いた。何か引っかけたようだ。

見てみると5件の密告が届いた。

早速、クリックだ。

「何かな。えーつと、フィンランド国防博物館に展示されていたパンツァーファウス  
トが30クラウン、それと駆逐戦車が盗難されたか……」

パンツァーファウスト―第二次世界大戦中のドイツが開発した携帯式対戦車擲弾  
発射器。ファウストパトローネ(拳の弾薬)とも呼ばれた。いわゆるロケット弾とは異  
なり、弾体自力での飛翔能力は持たないが、その分後方へ噴出される爆炎が少なく、ト―

チカや塹壕からでも比較的安全に発射できた。

駆逐戦車——戦車および対戦車車両の一種であり、敵戦車の撃破を目的とした装甲戦闘車両である。発祥地のドイツ語からヤークトパンツァーと呼ばれ、英語圏でも呼称として定着した。

「うーむ、どちらもドイツと縁深いモノだね」

頭の中で情報を整理してみる。

パンツァーフアウストが30クラウン——盗まれた数量からして犯人は戦争でもしたいのか？重火器とはいえは第二次世界大戦時代の物だ。現代では、性能の高い携帯式戦車擲弾発射器が沢山あるのに……

駆逐戦車——これも第二次世界大戦時代の物だ。性能の高い戦車は沢山あるにも関わらず、これを盗むのは何故？

以上の2つの盗難品——どれもドイツ原産。わざわざ盗むとは余程の物好きだ。

犯人像——ドイツマニア——特にドイツのミリタリーが大好き。もしくはナチスの残党の可能性あり。

犯人は余程のドイツマニアだね。ナチスの残党だったら、ハーケンクロイツを身に付けているくらいに——私生活では外しているかもね。

この事件は面白い。手口よりも犯人に興味がある。是非とも会ってみたいな。

「こっちは……米軍が開発中の量子ステルスマント?の試作品が盗難」

ステルスマント…… あっ!前にアメリカに仕事に行った時、空港で確認したアレか。誰かが被っていたけど、私からすればまだまだだったね。まあ、それでも十分、民間人には見えていなかったけど。

それが開発中に軍施設から盗難されたと……

米軍が開発中の試作品——外部に持ち出せるのは限られた人間。内部犯の可能性?外部の犯行は難しい。

試作品を手にする人間——アメリカ国内の人間——軍人・武偵。外部——国外の人間に貸し出すのは低い。わざわざ軍施設から盗まなくてもよい——やはり外部の人間の犯行。

何故盗んだ?——ステルス能力が高い。潜入・暗殺にはうってつけの品物だ。国外の人間——犯行が自身の能力向上あるいは自国の軍施設に提供するため?国から依頼されたか……いや、国絡みではなく、個人的に盗んだ——被れば透明になれる感じがで。

犯行像——潜入・暗殺に特化した人間——武偵なら探偵・諜報科。まるで忍者のような人間。

私の分析と武偵としての知識からして、犯人は医療知識もあり、権力もある。英国辺



りが怪しい。貴族か…… 公爵いや、伯爵か子爵あたりだ。

「何か…… この犯人について知ろうとすると嫌な気分になるね。この事件はパスしよう。次は…… 北欧の病院にて、北欧系の少女の血液パックA B型を200ガロンも購入した不審な中国人の客？」

うーむ、血液の購入は今の時代、別に珍しくない。一見して事件性はないが…… 北欧の少女それもA B型の血液200ガロンもね。

血液を購入——医療関係者？情報では購入した客は中国人。中国の医者？

血液量——200ガロンもあれば10人単位で輸血がてきる。湯船にはいれるくらいだ——まさか血のお風呂に入りたい？

血液型——A B型は中国人でも珍しくはない。わざわざ北欧まで行って購入してくる必要性なし。

東欧の少女の血——北欧マニア？北欧の少女趣味？血液フェッチ？

うーむ、血液型A B型の少女の血…… これだけではね。しかし、中国人というのは気になる。血液を好む習慣や文化は中国にあつたかな？血液を好むといえは『吸血鬼』が一番ピンとくるが……

購入者——中国の吸血鬼ファン？北欧マニア？吸血鬼信仰者？中国国内の吸血鬼のなりきり屋？

どれも違う気がする。

「この不審な中国人がカギだね。これは保留と……他には絶滅危惧種のドクササコが30kgも乱獲されるか。密猟者だね」

ドクササコー担子菌門のハラタケ綱 ハラタケ目に属し、キシメジ科の *Paralepistopsis* 属に分類される 毒キノコの一つ。

他の多くの毒キノコとは異なる、薬理学的にも特異な中毒を起こす。主要な症状として、目の異物感や軽い吐き気、あるいは皮膚の知覚亢進などを経て、四肢の末端（指先）・鼻端・陰茎など、身体の末梢部分が発赤するとともに火傷を起こしたように腫れ上がり、その部分に赤焼した鉄片を押し当てられるような激痛が生じ、いわゆる肢端紅痛症をひきおこす。

「場所は……長野県、三重県、兵庫県、愛媛県か」

長野県では絶滅危惧Ⅰ B類（EN）、三重県では情報不足（DD）、兵庫県では要調査種、愛媛県では県調査種にそれぞれ分類されているが、具体的な保護対策としては、兵庫県において発生環境の保全が指摘されているに過ぎない。しかし、私は絶滅危惧種には変わりないと思う。

「この密猟者は何故、ドクササコを密猟したのかな?松茸ならわかるけど……ドクササコはね」

救護科・衛生科・鑑識科の子から教えてもらったが、ドクササコの有毒成分は、中枢神経毒のアクロメリン酸、中枢神経毒のスチゾロビン酸やスチゾロビニン酸、クリチジン、異常アミノ酸、オピン類などである。特にアクロメリン酸とクリチジンは毒性が強いとされるが、発症のメカニズムは未だ不明な点が多い。

以上のように、毒性画分が複雑である。このキノコを私的に取り扱うとしたら、相当の科学・薬学知識が求められる。

密猟者——薬学知識が豊富な人間。あるいはその人物が密猟者に依頼した。

密猟地——場所は日本。地理に詳しい人間——日本人？目撃者がいないので不明。

薬剤学——毒性の高いドクササコを欲しがらる理由——毒薬？

毒薬——毒をもって毒を制す——新薬の開発？——薬剤学者

「ドクササコの他にはキノコ関係はないかな」

私は『スパイダー』で検索をかける。内容はキノコそれも毒性のヤツだ。

検索して数分もしない内に結果が出た。自分の作ったプログラムながら素晴らしい性能だ。

「ベニテングタケとワライタケが大量に採取されたか」

ベニテングタケ——北半球の温暖地域から寒冷地域でみられる。比較的暖かい気候のヒンドウクシユ山脈や、地中海、中央アメリカにも生息する。

童話に出くるような外見をしており、主な毒成分はイボテン酸、ムツシモール、ムスカリンなどで、摂食すると下痢や嘔吐、幻覚などの症状をおこす。

ワライタケー中毒症状として中枢神経に作用し幻覚症状を引き起こす神経毒シロシピンを持つキノコ。毒性分は他にもコリン、アセチルコリン、シロシピン、5-ヒドロキシトリプタミンなど。

これらのキノコも強い毒性を持っている。大量に採取された時期がドクササコの乱獲と一致している。偶然とは思えないね。

「この2つは目撃者がいるのか。えーつと、場所は中央アメリカ。目撃者によると東洋人が採取している光景を見たところだね。おっ！話し声も聞いたのかー中国語ね」

ワライタケは兎も角、ベニテングタケを東洋人、それも中国人がわざわざ中央アメリカまで取りに行くのは怪しいね。

中国人といえばさっきの北欧の血液パック購入者も中国人だった。このキノコ事件にも中国人が関わっている。

北欧や中央アメリカに行けるくらいだからお金や権力があるー中国人バイヤーあるいは中国の秘密結社。

もしかしてドクササコ乱獲にも中国が関わっているかもね。

薬剤学者が依頼ー中国人バイヤーが承諾ーキノコ乱獲

ははは、実に興味深いよ！毒キノコを欲しがる薬剤学者と中国人バイヤーの2つの存在がね！

中国人バイヤーとは個人的な関係を築きたいね。今後の、「私の武偵活動」に役立ちそうだ。

薬剤学者はうちのスミスと仲良くなりそうだ。あの子、麻酔は嫌いなクセに毒薬や細菌が大好きだからね。

「さて、最後は……純砂金10kgにノルマンディー産の軍馬を現金一括で購入した中国人ね」

またしても中国人か。おそらくキノコと血液パックの件と関わりが絶対にあるね。

いま純金は高いのに現金一括で購入とは羽振りがいいー購入者は金持ちあるいは背後にいる者が権力者？組織？

組織ー中国に本拠地を置く密売組織？暴力組織？あるいは両方の可能性。

密売組織ー反社会組織ー砂金を購入ー誰かに購入を依頼された？

金価格は相場より高くして販売ー利益にならない。

「反社会組織に購入を依頼するなんて依頼人は金が好きみたいだねー今は相場が高いのにも関わらずね。相手を反社会組織と知っていながら依頼するなんて、確実にポツタくらわれるのに……まあ、どうでもいいか」

金が好きか……金といえればカリブ海やエジプトの遺跡に眠る黄金を思い浮かべるね。ロマンがある。特にエジプトの財宝はいいね。

金の加工技術が高く、芸術的な金の装飾品が数々ある。

古代のエジプトは他国から金の加工を依頼され、加工した金を輸出していたほどだ。

もしかして、中国の組織に購入を依頼した人間はエジプト人だったりして……前に砂金の盗難事件もあつたし、いや砂金だけで決めつけるのはダメだ。今回は購入しているし、事件性はなしでいこう。

「ノルマンディ産の軍馬。それも白毛の牝馬で、しかも馬鎧と馬具も購入」

こつちらも正規の手順で購入されたモノだ。

ノルマンディはイギリス海峡に臨むフランス北西部の地方。

フランスには強い馬が多い。馬の品種改良はフランスが始めて、軍馬もフランスが作ったというくらいだ。

白毛の牝馬は高いー日本円で1500万〜2000万円はする。

馬具と馬鎧は世界的な高級ファッションブランドであるエルメス製。

エルメスはかばんや財布などを中心としたファッションブランドとして世界中でも人気がありますが、実は馬とも非常に深いつながりがあるのです。

エルメスはフランスのパリで1837年に創業したが、創業者であるティエリ・エル

メスは馬具をつくる職人だった。

質のいい乗馬用のブーツなど、エルメスの馬具はフランスの富裕層を中心とした顧客に好評で、ヨーロッパを代表する一流馬具メーカーとして発展していった。

購入を依頼した人物——購入依頼者が反社会組織にも関わらず依頼——品物にこだわりあり。

フランスに拘る——フランス人の可能性あり。

ノルマンディ産の牝馬——フランスの女性。パートナーに選ぶ馬は同性がよい。

「購入を依頼した人物はフランス人だね。実にわかりやすい」

背景にいる中国の組織とは早く関係を持ちたくなってきた。

金次第では何でも受注してくれる筈だ。

私が決意していると、♪♪♪携帯が鳴った——私のお気に入りシューベルトのピア

ノ5重奏曲『鱒』だ。

画面を開いてみると相手はモランだった。

「ハイハイ。どうしたのかなモラン？」

『そろそろお時間です。主』

「時間？ああ！そうだったね」

私は時計を見る。時刻は——時ジャスト。今日はモランと出かけるのだった。モラ

ンが電話を掛けてくれて助かった。

「ごめんねうちよつと事件を繋ぐのに夢中になっちゃったよ」

『いいえ、構いません。それでは寮までお迎えに上がっても宜しいですか?』

「あつ!その前にいつものアレをする時間なら十分あるでしょう」

私の言葉にモランは『ええ』と答える。いつものアレとは、学園島に生息する野生の鳩に餌をやることだ。

ベンチに座って餌をやるひと時が楽しい。鳩にエサをやるのは……まあ、多目に見てほしい。

電話を切り、出かける準備をする。今日は少し冷えるので、黒の外套を持って玄関に向かう。

「おっと、忘れてはいないよね」

私はポケットに入れてあるある物を確認するー赤い手帳だ。

これは只の手帳ではない。これには私が今まで稼いできたお金や物資ー財産を記してある。様々な依頼や相談に乗って、解決や改正を成功させて稼いだ資金だ。

最初は手帳など無くても、自分の財産を管理できたが、資産が大きくなり過ぎて書き示す必要性ができてしまった。

これをベンチに座わって新しく書き足していくのが、ささやかな楽しみの一つだ。



中身は誰かに見られても大丈夫な様に暗号化してある。そして、この暗号はあるモノがないと解けないようになってるのだ。

出かける前に『スパイダー』で調べた事件を図面——関係図にして部屋に貼る。これでよし！

「おっと」

「きゃ……！」

玄関を開け、外に出ると女子生徒にぶつかりそうになった。大丈夫かな？

「大丈夫？ 怪我はない？」

「大丈夫です。あ、もしかして玲瓏館・M・零さんですか？」

「うん、そうだよ。君は？ 見たところ中学生かな？ ここは高等部の寮だけど何か用かい？」

「始めまして！ 私、中等部3年の前島さと言います。実は私、零先輩のファンなんです！ 握手してください！」

前島さなど名乗ったその少女は私に向かって、手を差し出してきた。

中学生が高等部の寮に来るのは珍しいね。

それに私のファンだなんて。そんなに有名だったかな？ それにしても、握手かゝまあ、いいか！

私は少女に握手してあげた。

「ありがとうございます!この手、もう洗いません」

「いや、洗ってね」

「あれ?先輩どこかにお出かけですか?」

「うん、ちよつとね」

「だったら寮の外まで同行します。あ、外套をお預かりします」

「あ、結構だよ」

私は反射的に身を躲す。何だろうね、この子の変な感じがするぞ。

私のファンというのは嘘っぽい。ちよつと分析……いや、今はモランとの約束が

あるし、急がないとね。

「ごめんね。私は今、急いでいるから」

私は早足で寮を出て行く。少し気になるが、今はいいか。

別視点――

零を見送った、少女、は顔に手を当て、

「あーあー、れいれい行っちゃった。手帳、取り損ねちゃったよ」

ベリベリと変装マスクを剥がし、前島さなの顔から自分の顔に戻った理子はボヤいた。

「ジャンヌ。もう出てきていいよ」

寮の廊下の物陰に向かって、喋ると銀髪で長身の美少女ージャンヌが姿を現した。

「あれが『教授』の言っていた玲瓏館・M・零か」

「そうだよ。ジャンヌから見て、どうだった？」

「…… 只ならぬ悪意を感じるな。私がイ・ウーで見てきた無法者よりもー圧倒的な悪意の化身だなアレは」

「そんな悪意の化身である零について調べろ、なんて『教授』も変わっているね」

「まったくだ。『教授』は珍しく面白そうにしていたな。前に理子が報告した玲瓏館の自作した事件の関係図ー蜘蛛の巣だったか？それを話したら大笑いしたな。あの場にあった全員が目を丸くしていたぞ」

「くふ。そうだよね。あれにはあたしも驚いたよ」

理子はイ・ウーでの報告会について思い出していた。

イ・ウーのリーダーである『教授』に零について報告すると、突然大笑いし始めたのだ。続けて「その子は面白いね。蜘蛛の巣を張り巡らせるのでなく、解き明かすとは…… ハハハハハ。あの子の性質上、逆なのにね。いや、あの子ならどちらもやって

みせるか」と腹に手を当てて笑い出した。

「それじゃ、早速『教授』も興味津々の零のお部屋に突撃しよう!」

「大丈夫なのか? ヤツはかなりの用心深く見えたが……」

「心配無用! わたくしにはコレがあります。ジャジャン!」

そう言つて理子を取り出しのは鍵だった。

「それは部屋の鍵か?」

「その通りです☆前に零からいつでも遊びに来ていいよつて、合鍵を貰つたんだ」

「部屋に監視装置があるやもしれんぞ。ワザと侵入させて……」

「もうジャンヌは心配性だぞ。その辺りは『教授』から『あの子は自分の部屋にカメラや盗聴器の類——自身のプライベートな空間には仕掛けない。そんな所は曾祖父である彼と似ている』つて、言つてたからさ」

「『教授』のお墨付きなら大丈夫か。しかし、玲瓏館の曾祖父とは一体何者だ? 理子は知っているか?」

「『教授』の昔の宿敵だつてさ」

「『教授』の宿敵だと!? それはまさか」

「今は仕事に専念しようよ。ジャンヌ」

理子はそう言つてガチャツと鍵を開けた。

中に入った2人はまずリビングに向かった。

零の部屋―内装をわざと使い古された感じにアレンジしており、壁には柄付きの壁紙が貼られて落ち着いた雰囲気。

柄付きの壁紙の壁には長ソファが置かれ、向かい側には一人がけのソファ2つがお互い向かい合うように置かれている。

奥のダイニングテーブルの上にはパソコン・チェス盤。

窓から離れた場所にある本棚には犯罪関連・心理学・哲学・数学・天体力学関連の本でギッシリ。

本棚の隣には陽で変色しないようスクラップにした新聞の切り抜き・週刊誌（主に事件関係が殆ど）が暗い場所に束になった状態で置かれている。

壁・天井にはピンで止められた事件の調書・写真・地図・新聞の切り抜きを糸で繋いだ関係図―通称蜘蛛の巣が作成されている。

テレビの周りには理子が持ち込んだゲーム機・ソフトがある。ゲームソフトの中にはR15・18のゲームが……

「零の部屋は前に来たことがあれけど、此処までは凄くなかったよ」

「理子。これを見てみろ」

ジャンヌが理子に差し出したのは新聞の切り抜きだった。

「何?えーっと、これってあたしの事件じゃん」

「それだけじゃない。こっちの切り抜きは私の事件について。これはパトラ、こっちはココまであるぞ。此処にあるのはイ・ウーに関する事件ばかりだ」

「でも新聞の切り抜きだけで驚くのは早いと思うよ。あたしの知る限り、零はまだまだイ・ウーについて調べる。もっと部屋を調べてみようよ」

理子はそう言うのとキッチンに向かった。

キッチンには実験道具が満載。フラスコ・試験管・様々な薬品が並べられた棚・ハンガーにかかった白衣など、一通りの道具が揃っていた。とても調理場とは思えない光景だ。

冷蔵庫の中は食材だけでなく、奇妙な液体が入った瓶がある。当たらない方がよさそうだ。

白雪から教えてもらったレシピもあるが、途中で本人が「アレンジ」を加えるのでいかに台無しになっている。

棚の中にはお菓子がある。ただし、ももまんだけはない。

「理子!こっちに来てくれ」

ジャンヌが呼んでいる。別室からだ。

「どうしたのジャン.....」

部屋に入り、そこにあるモノを見て理子は絶句した。そこにあつたのは蜘蛛の巣だった。

部屋の正面―中央の壁には世界地図が貼られ、それに事件―イ・ウーが関わった事件の詳細・新聞・写真・調書などが所狭しと貼られている。床か天井には様々な国の詳細の地図が貼られ、それにもイ・ウーの事件がピンで止められている。

極め付けは、それらが赤い糸で全部繋げられ関係性を表している。

正しく蜘蛛の巣だ。

「これが噂の蜘蛛の巣か。実物を見るのは始めてだ。特にこれ程の規模の物はな」

「零って、トンデモないヤツだな。流星は『教授』の宿敵のひ孫だね。思わず尊敬しちゃうよ」

「これを見てみる。私の起こした事件だ。馬鹿な!!? フランスに集約している。私がフランス人だと見抜いているのか……!」

ジャンヌは床に貼ってある蜘蛛の巣を見て驚いた。

それは『魔剣』と呼ばれる自分が起こした事件の関係図だった。ごく丁寧にタイトル『魔剣』と書いてある。

ヨーロッパ諸国を幾重にも糸が交差し、最終的にはフランスで終わっている。誰が見ても『魔剣』はフランスに関係ありと見るだろう。

「こっちはあたしの事件だ…… まだ制作中みたいだね」

理子は天井に貼つてあるタイトル『武偵殺し』の蜘蛛の巣を見た。

アメリカ・ヨーロッパ諸国と糸が繋がられている。途中には捜査中を区切られているが、零が書き足したのか。次に『武偵殺し』が事件を起こすであろう場所がピックアップされている。

その場所は次に理子が犯行を計画している場所と合致していた。

「他にあるぞ。これはパトラ、こっちのカツエだ。ココの蘭幫にまで捜査の手が、いや蜘蛛の巣が巡っていたのか。うん?どうした理子」

「これ見てよ。あたしの犯行の予想図ーアンベリール号とある。計画実行は12月頃つて、何で零はそんな事まで予想できるんだよ!? ドンピシャ過ぎて怖いくらいだよ」

「アンベリール号? ああ、金一を完全にこちら側へと誘うための事件か。あくまで予想に過ぎないだけで……」

「予想で済まされるかよ! これ見てみるよ。アンベリール号の項目、その下にターゲット候補とある。その中で金一の写真が目立つようにあるよ」

「ヤツは魔術師や預言者の類か?」

「もしかしたら、『教授』と同等の推理力があるかも」



「ここにあるモノ全て記録して、イ・ウーに持ち帰ろう。そこで緊急会議だ。今後の計画を見直す事になるやもしれん」

ジャンヌはカメラを取り出し、パシヤパシヤと部屋にある蜘蛛の巣を撮影する。

「それじゃ、あたしは零の部屋にある本を全部撮影するよ」

「本だと？まさか、残らず撮影する気か？」

「うん。『教授』から零の所有する本全てを調べろってさ。何かその中に零の活動資金に繋がるヒントがあるって」

## 家宅捜査？

### 別視点

理子はリビングに戻り、零が所有する本を記録し始めた。――本棚にあるモノだけじゃなく、床やテーブルに置かれている本も全てだ。

「うわー、零って、こんな本も読むんだ。明らかに武偵向きのモノじゃないね」

床に置いてある本――『世界の拷問一覧』『殺人鬼』『ゴッサム・シティのピラン』『ネルグ街の悪夢』『凶器と狂気』『殺人を無罪にする方法』などタイトルからしてヤバいモノばかりだ。

「こっちの本は何度も読んでみたいだね。表紙と背表紙のシワが大きいし……あつ！フセンがしてある」

理子はテーブルに置かれている本に目が止まった。

『司法取引』『刑事告訴』『刑事免責』『取引後の犯人』『逮捕されない犯人』『時効反対』『撤廃』『家庭栽培』――テーブルに置かれているこれらにはフセンがしてあり、明らかに何度も読んでる事がわかる。

試しに何冊かパラパラと巡ってみると、

『刑事免責』と『取引後の犯人』って、本のページにシワがある……これはグシャツと握って出来たものだ。零は本を大事にするのに何でだろう?」

2冊の本——『刑事免責』と『取引後の犯人』のページには、零だろうか?——誰かが握った為かグチャグチャになっていた。

零が本を大事する事を理子は知っていた。誰かに貸して、傷物にされたの手元に残した?

もしくは、零本人がグチャグチャにしたのだろうか。

「理子。そっちは撈っているか?こっちはある程度、記録したぞ」

リビングにジャンヌがやってきた。どうやら、別室にあった蜘蛛の巣を記録し終えたようだ。

「お疲れ。こっちはまだだよ。零って、色々な本読むから記録するだけで一苦労だよ」

「手伝おう。うん?何だこの本はいくつかのページがグチャグチャだ」

「そうなんだよね。零って、本を大事にするのに変だと思ってるさ」

理子は2冊の本を眺めていると、ある事を思い出した。

「そういえば……零が前に担当した事件で刑事免責で罪に問えない犯人が許せないって、言ってた」

「それはどんな事件だったんだ?」

それは7月に入る少し前、子供を狙った連続誘拐事件を解決してほしいと零に直接依頼が舞い込んできた。入學してから、幾つもの事件を解決して有名になっていた武偵だから珍しくはなかった。

事件は10年前から行われ、それまで7人の子供が誘拐された。7人の内、2番目と3番目の被害者は遺体となって発見された。

犯行の口は子供を誘拐し、現場にメッセージの入った風船を置いていくという武偵や警察に対する挑戦状だった。

「零は見事に誘拐犯を暴き出したんだけど、誘拐犯には共犯者がいたんだよ。最初に誘拐された子供だったんだ。誘拐された当初、10歳で今は20歳になってたから、十分罪に問えたけど、零は誘拐犯の首謀者を逮捕するために取引を持ちかけたんだ」

「取引…… ああ、成る程な。刑事免責か」

取引というワードにジャンヌは納得した。

刑事免責——刑事訴訟において、自己が刑事訴追を受けるおそれがあるとして証人が証言を拒否した場合に、証言義務を負わせることと引換えにその罪についての訴追の免除の特権（免責特権）を裁判所が与えること。アメリカ合衆国の連邦法や多くの州法に規定があり、共犯者に免責を保障し、首謀者の訴追を確保することをおもなねらいとする。

「刑事免責を持ちかけ、首謀者である誘拐犯を逮捕したんだろう？共犯者は罪に問えなかったが、そいつも被害者の1人だ。取引は妥当だと思うぞ」

「違うよジャンヌ。逆だったんだよ。誘拐された子供の方が首謀者だったんだよ」

「首謀者だと!?しかし、共犯者の方は当時、子供だったハズだ」

「誘拐されて10年の内に立場が逆転したんだよ。自分を誘拐した犯人をそいつは支配下に置いて、自分が首謀者になった。後は話さなくても分かるでしょう？」

「首謀者ではなく共犯者になり、刑事免責を利用して罪を逃れたわけだな。中々、頭が回るようだ。それで事件はどうなった？」

ジャンヌは理子に問うた。事件の結末がどうしても気になったからだ。

「刑事免責のおかげで罪にとえない事に零は激怒してたよ。あれはよく覚えいるよ。犯人にも、そして取引を持ちかけた自分に対してもね。それから零は撤退して罪を立証するために、頭を働かせてたよ」

理子は当時の事を思い出していた。

零は徹夜して法律関係の本を読み漁り、司法機関、武偵検事に片っ端しに電話をして、首謀者から共犯者になった犯人を罪にとえる方法を探し続けた。

「それでね。零は刑事免責の穴——共犯者という名目に目をつけたんだ」

共犯者——犯罪を共同で実行した者。または犯罪に関与した者。

「共犯者がどうしたのいふのだ？」

「零は犯人が共同で行なっていない誘拐——単独犯として行なった誘拐事件を立証して、逮捕したんだよ。でも単独で行なった誘拐は3件目の誘拐だけで、他は共犯者として行なった事になっていたから、事実上、一件の犯行しか立証できなかったけど……」

「成る程な。だから、この『刑事免責』の本はここまでグチャグチャなのか。余程、悔しかったのだろう」

「まあ、結局、その犯人は護送中、被害者遺族に誘拐されて殺されちゃったけどね」

事件があつけない結末で終わったからか——理子はつまらなそうに、はあーと溜息をつく。

「零の回想は終わりにして、調査を再開しようか」

「そうだな」

2人は再び調査を再開し始めた——理子は再びリビングを、ジャンヌはキッチンの方に向かった。

「ここは化学実験室か？とても調理場とは思えないな」

中に入ってみると、そこは化学実験室だった。

実験装置は驚くほど本格的で、ずらりと並んだ大きなビーカーには気味の悪い緑色の液体が入っていて、そこから煙が立ち上っている——換気扇は回っているので問題な

い。

リビングに戻って取ってくるのが面倒なのだろうか？本棚がある。

ジャンヌは本棚を眺めてみると、古くてボロボロの学術書がコレクションされている。毒物に関する本だけで一段すべてが埋まっている棚もある。一番下の段には、『種の起原』、『女王蜂を隔離した場合の巣』、『人体の解剖学』、『発火現象』、『アレイスター・クロウリー』などがある。一隅には『緋色の研究』も置いてある。

キッチンのテーブルには、蜂蜜と苺ジャムとマーガリンがある。

「うっ？これはカエルの死体か？何故、そのままにしている？」

直径20cmほどの銅製の容器に5匹のカエルがプカプカと浮いている。どうやら死んでいるようだ。

容器の隣には、死んだカエルの経過を調べる為だろうか——解剖されたカエルの死体がある。おまけに解剖セットもそのままだ。

「こっちはサンプル棚か。どこのモノだ？」

キッチンの壁際に置かれた古い棚には、無数の土層サンプルと血液サンプルと歯の入った瓶類の重みでたわんでしまっている。

「うん？これはバイオリンか？何故、こんな物がここにある？」

瓶の横にあるバイオリン・ケースに目が止まった。明らかに、キッチンいや、化学実

験室には不似合いだ。

「ジャンヌ、こつち来てよ」

理子の呼ぶ声が聞こえてきたので、ジャンヌはリビングに戻った。

「どうした理子？」

「見つけちゃった☆」

理子は手に万札を抱えていた。パツと見た限り、500万円はあるだろう。丁寧にロール状にして輪ゴムで止めてある。

「そんな物、どこから見つけてきた」

「リビングに置いてるクツキー缶の中に取りました。零って、ベタなどところがあるから、もしやと思って開けてみたら、ありましたよ」

「欲に駆られて盗むなよ理子。奴が確認したら、1発でアウトだ」

「も、勿論じゃん。あくまで調査の一環で開けてみただけだよ」

理子は渋々と札束をクツキー缶に戻す。

「それで他にめぼしい物はあったか？」

「うーん、めぼしいと言うか、変な物ならあったよ」

理子はジャンヌをベランダの方に案内した。

ベランダには様々な植物・トマト・キュウリ・ピーマンが植えられていたが、どれも



枯れている。

「どれも枯れているな。妙だな……。奴は几帳面な性格をしていると思っただが」

「そんな零が植物を枯らしちゃうなんて変だよ。これも記録しよう」

理子はカメラでペランダの光景を撮影する。

ある程度、撮影し終えた2人はリビングに戻り、

「よくペランダの植物に気づいたな理子。私なら見落としていた」

「くふ。零からアドバイス貰ってたんだよ。『いかなる事も観察して、分析してみた

ら』ってね。おかげで観察眼に自信が持てきたんだよね」

ジャンヌは知らないだろうが、零は理子を始めたとした探偵科の生徒達を集めて講習を

している。

そこでは自信が感じた捜査の現状、不満、改善点などを指摘し合える場を設けている

のだ。

零は探偵科の生徒にアドバイスも与え、武偵ランクや捜査能力を向上させた生徒を何

人も輩出している。理子もそんな生徒の1人だ。

「リビングの他に気づいた事はないのか？」

「あつ！そうそう、これなんかウケるよ」

理子が差し出してきたのはパイプだった。ピリヤードと呼ばれるボウルが大きく曲

がったパイプブロークラシカルな形で、一般的なタイプだ。ボウル部分にはMと刻印されている。

「奴は喫煙者か? いや、この香りからして精油だな」

「郵便物として届いた物みたいだね。ほら、ゴミ箱に包み紙が捨ててあるよ。差出人は…… イギリスのベイカー街ってあるね。氏名は読めないーグチャグチャだ。誰かからのプレゼントかな?」

ゴミ箱の中には郵便物の包み紙が沢山捨ててあった。

側のテーブルの上をよく見れば、他にも沢山の郵便物があるーどれでも未開封の物だ。

品物は、油彩画・化石・昆虫標本・剥製など小包ごとバラバラだったが、共通する事が一つだけあった。

差出人は皆、イギリスのベイカー街。氏名はワザとだろうか。名前の欄はグチャグチャとなぞり書きー読めないようにしてある。

「ベイカー街…… 『教授』に縁深き場所だな。それにしてもパイプか」

「ぶふ、ダメだ。零がパイプ吹かしながら謎解きする光景が目には浮かんじやう」

理子は口に当て、必死に笑いをこらえる。無理もない。あの『教授』の宿敵のひ孫がパイプを吹かしながら謎解きをするのだ。

「絶対に『教授』が知ったら、爆笑もんだよ！あー、ダメだ。お腹痛くなってきた」  
「確かにな。これに奴が鹿撃帽でも被れば……プ、ダメだ。私も可笑しくなってきた」

「ぶはは、やめてよジャンヌ。笑わせないでよ！」

2人して笑い始めた。

「あー、パイプを吹かしながら『知恵の泉が私に囁いているのだよ』とか『混沌のカケラを再構築してやろう』って、言いそう。頼んだらやつてくれるかな」

「何かのアニメの台詞か？」

「そうだよ☆絶対に零に言わせよう」

あり得ないかもしれないが、鹿撃帽を被り、手にパイプを持っている零の姿は何ともカオスな光景だろう。

そんな零の姿が見たくて、来年の文化祭で着せてやろうと計画する理子であった。

## 集うワルたち

「こうしてモランと二人でドライブするのは久しぶりだね」

「はい、主」

私は愛車のポルシェ356aの助手席にモランを乗せて、東京の実家に向かって走っていた。

ホームシックになつたわけではない。

「主。今回、ご実家に帰郷する目的をまだ聞いていないのですが……」

「ねえ、モラン。君はこの国の武偵法をどう思っている？」

私はモランに質問を試してみた。もちろん、視線は前を向いた状態だね。脇見運転はダメだ。

「はい?…… そうですね。私からすれば、この国の武偵法は甘いと思います」

「そう思うよね。特に9条『武偵は如何なる時でも殺傷を禁ずる』の項目はね。あれがあるから犯罪者は殺されないと高を括る」

この国の武偵法は甘い。甘すぎる。ある一定の犯罪者は殺意むき出しで襲ってくるのに対し、武偵は非殺傷を心掛けなければならない。

強襲科を始めとした武偵の死亡率が高い原因の1つにもなっている。

今の武偵法が未来ある武偵の命を奪っていると言っても過言じゃない。

犯罪者が犯行手口を変えてくるのなら、武偵も武偵法も変わるべきだ――多くの武偵の生存率を少しでも上げる為に……

「突然どうされたのですか主？」

モランの声で我に帰る。いけない深く考え過ぎた。今は武偵法じゃなく、

「うーん、実はね今日、私の実家に彼らを呼んでいるんだよね」

私は話しの話題を変えた。

彼らというのは私が、武偵活動、の折、独自のルートでスカウトしてきた者たちだ。

その都度、モランにも同行してもらった。

「彼らと呼んだのですか!?まさか、その中にはあいつらも……」

モランが凄く嫌そうな顔をした。あいつらというのは十中八苦あの二人の事だろう。

まあ、そこは我慢しなさい。

「主……彼らと呼んだということは、私だけでは不満なのですか!?」

隣でモランが声を上げたので、チラリと見てみると目をウルウルさせ今にも泣きそうなモランがそこにいた。

ちよつと待って！そんな子犬のような目で私を見つめないで！

「不満って訳じゃないよ。ただ……これからの、武偵活動に人手が必要だね。例の組織と戦う為に」

「例の組織……主が追っている秘密犯罪組織ですわね」

秘密犯罪組織——組織名は不明な為、ここではアンノウンとしておこう。アンノウンは世界中のあらゆる場所で犯罪を行なっている。世界中で起こっている未解決事件には、必ずこのアンノウンが関わっていると見て間違いない。

アンノウンには、『武偵殺し』『魔剣』など名だたる犯罪者が所属しているだろう。

改めて、考えてみるとトンデモナイ組織だね。司法組織もお手上げ、

まるでロンドンの未解決事件に関わっていた私の曾お爺さんの組織のようだ。あれとは違い舞台はロンドンではなく、全世界ときた。

おそらく、組織の規模は曾お爺さんを余裕で超えている。

そんな組織を相手取るのに個人の力では限界がある。なので、私は集団——組織で対抗する。

「私はねモラン。その組織がどうも気に入らなくてね。前にアメリカ、イタリア、ドイツ——海外の事件解決に誰かの邪魔が入ってね。私は例の組織が関わったとは思えないんだ」

「主の邪魔立てをする者は私が全て排除します」

モランがキリツと答える。おおく頼もしいね。

彼女は私の一声で何でもしてくれるー例えそれが表向きの武偵活動の… おっと、これはいいか。

「おー見えてきたよ」

車を走らせる事、1時間ほどで我が家に到着した。

狙撃銃のケースを肩にかけたモランと一緒に車を降り、玄関に手をかける。さーて、誰が来ているのかな？

私は期待に胸を高鳴らせ、ガチャツと玄関を開けると、

「モリちゃんー久しぶり!!？」

陽気な声が響くとともに、小柄な人影が私の腹部にイキオイよく飛び込んで来た。

髪は薄い銀髪のツインテールで、身長は140ほど。顔は程よく日焼けしてた可愛らしい女の子だ。服装は黒を基調としたフリフリのゴスロリで小柄な体型によく似合っている。

「やあ、アップル。久しぶりだね」

私の腹部で猫の様に甘えてくる彼女の名前はアップル・ワース。

アメリカ出身の泥棒。冗談ではなくガチの職業泥棒だ。

殺しを嫌い、強盗まがいな盗みはしない事をポリシーにしている。まるで怪盗アル

セーヌ・ルパンのようだ。

ただし、ルパンと違い彼女はお金で盗みをする。お金次第では何でも盗んできてくれる。

テンションの高さから、りこりんとカブるんだけど彼女は、とびきりの才能持ちの泥棒だ。武偵のりこりんとは違う。

「モランちゃんも久しぶり！」

「え、ええ。お久しぶりですねアップル」

モランは苦笑いで挨拶する。

モランはテンションの高いアップルを嫌っている訳じゃないけど、彼女のテンションについていけないだけだ。

「ねえ！ねえ！モリちゃんは彼氏とかできた？いたら紹介してほしいな」

アップルが会って早々、私にそんな質問してきた。

彼氏？うーん彼氏って、訳じゃないけど相棒——金次君ならいるよ。

「そんなモノいるわけないだろうが!!？」

モランが声を張り上げた。うわ!!？何ビックリした。

「主にちよつかいを出すモノは私が全て射殺する!!？覚悟しておくように!!？」

「じよ、冗談だよー。もう！モランちゃんは大袈裟だぞー」



なはははと、アップルは明るく笑って誤魔化すが、ちやつかりとゴスロリの袖に仕込んであるスリープガンを抜けるようにしている。

コラ！喧嘩はダメだぞ。

「アメリカから私の呼びかけに応じてくれて、ありがとうねアップル」

「モリちゃんの頼みとあればいつでも来るよ！たんまりと貰いましたしね」

手で円を作り、ゲへへを不気味に笑う。おおー、流石お金にガメツイね。彼女に頼みー正確にはお金で雇っている関係だけど、何故か彼女は嫌いになれないんだよね。

「それでアップル。主の呼びかけに応じたのは貴女だけですか？他は……例えばヘルダーは来ていないのですか？」

「へーちゃんは何か『ルガーは永遠の現役じゃあ!!? 私の母国の銃を時代遅れ呼ばわりしたベレッタをちよつと潰してくる!!?』って、言ってイタリアに向かったよ」

「あの人は……何をやっているんですか……」

モランが呆れた様子で話を聞いている。

ヘルダーは生粋のドイツ人で、ドイツ原産の武器を誇りにしているからね。残念だな  
く来ていたらフィンランド国防博物館盗難事件について聞きたい事があつただけ  
ど……

「今日来ているのは貴女だけですか？」

「いいや、モラン。今日はアップルを含めて、4人來ているよ」

「あれー？どうして分かるのモリちゃん？」

「玄関の前ー砂があるね。どれも類似していない砂ばかりだ」

私たちがいる玄関には砂が所々、溜まっている

玄関には家にかかるうで脱いだ靴が在るはずだが、それが無い。おそらく、イタズラも兼ねてアップルが隠したのだろう。

「こつちの砂は粗粒砂、これは中粒砂。そして細粒砂。どれも種類がバラバラだ。靴底に挟まった砂が脱ぐ際に落ちたのだろう。この辺りー東京では見かけない地層の物もある。遠方から人が來ているのは明白だよ。粗粒砂はアップル。中粒砂は多いね。これは2人組だろう」

「ほえー、モリちゃんの推理つて、いつ聞いても惚れ惚れしちゃうよ。大正解。そう、私の他に後3人來ているよ」

「みんなの所に案内してくれるかい？」

「お任せあれ！」

アップルにグイグイと手を引かれ、私は実家の居間に案内される。

居間には私の推理通り、3人の客人がそこにいた。

男は燃えるような赤い巻き毛を目元まで伸ばしており、顔立ちは判然としない。臙脂

色のベストを身に着け、両手を背中に回して立っている。

「おお、ジャック君じゃないか。よく来てくれたね」

「……ご無沙汰しています教授」

赤毛の男がぼそりと答えた。

彼の名前はジャック。苗字はない。

イギリス出身で年齢は私と同一年くらい。まあ、彼自身も正確な年齢・生年月日は知らないんだけど……

それでは不憫だと思って、海外渡航する為に私が表向きの戸籍——パスポートを作ったりしたね。

「ジャックはいつコッチに到着したのかな？」

「…… 1週間前です」

また、ジャックがぼそりと答えた。

1週間前!? ？いつ来るかは各々に任せただけ、もつと遅く——2日か3日前でもよかったのに。

「ジャックさん。主の前では、もつと元気よく喋ってみてはどうですか？それでは根暗だと思われまますよ」

モランが保育園の先生みたいにジャックに促す。

「……善処する」

ジャックはコクリと首を縦に振り、答える。

元気よくかくジャックが突然、元気一杯テンション高めのカヤラになったら苦笑いし  
そう……

私がそんな事を考えていると、

「ギャハハ、ジャック注意されてやんノ!!?」

「ソレもセバスに!!?おい、セバス。お前はジャックのママかよ!」

ジャックの後ろローテーブルに座っている、美女、2人がゲラゲラと笑い出した。

全体的に黒エナメルの服にエンジニアブーツ。金髪は無造作に伸ばしたまま。首筋には弾痕の跡が3発ほど見える。

もう一方は黒のカーゴパンツにフィールドジャケット、頭にサングラス。片割れと同じ金髪は傷んでいる。こちらの首筋には大きな切り傷が3本交差するように見える。

「やあ、ボニーそしてクライド。相変わらず元気だね」

この2人の名前は先に述べたのが、ボニー・パーカー・バロウ。後に述べたのがクライド・パーカー・バロウ。

二卵性の双子で、嘘か本当か1930年代前半にアメリカ中西部で銀行強盗や殺人を繰り返したカップルのひ孫だそう。

2人が座るテーブルには持参だろうー空の酒ビンが無造作に転がっている。口から飲み残しの酒が下に垂れている。ああ、畳にシミが出来ちゃうよ。どうも酒臭いと思つたら、この2人の仕業か。やれやれ。

「貴様ら……主の前で無礼過ぎではありませんか？」

「何だよセバス？やんのかヨ」

「いつでもOK牧場だぜ！」

モランが怒り心頭で睨みつける。

対して2人の”美女”が腰のホルスターに手を伸ばす。

ダメだよモラン。君じゃあ、この2人に早撃ちでは敵わないよ。

この3人仲が悪いんだよね

「ハイハイ。2人ともやめやめ。モリちゃんの前だよ」

3人の間にアツプルが入る。

「どけよチビ！この犬やろうを躡けられねだろうガ！」

「アツプル。貴女は下がってください。このバカ共には言葉など通じません」

「アあん？ちゃんと言葉、通じてんだろうが。それともお前あれか？N o s p e a k

E n g l i s h っ て や つ か ？ ！ 」

「英語など話せますよ。英語だけでなく、15ヶ国は話せます」

「うわー、自慢話しキター。自分は外国語ペラペラですヨ発言キター」

「…… 黙れ」

3人の口喧嘩に呆れたのか、ジャックがボソリと喋った。

それだけで、この場の室温がヒンヤリと下がった。いや、この場にいる全員の背筋にゾツと何かが通り過ぎた感じた。

「おい、ジャック。殺気むき出しすんなヨ。ただのじゃれ合いだつーノ」

「コワコワ」

双子は笑って見せたが、明らかにカラ元気なのは見え見えだ。

この2人黙っていれば美人なだけだね。

あつ何故、美女ではなく、美人かと言うと2人の内、1人は片割れと性別が逆なんだよね。

つまり、1人は男なんだよね。この件については双子は触れて欲しくないような。

何かこの2人を見てみると金一さんと金次君を思い浮かべるんだよね。あの2人、女装したら絶対に美女ー姉妹になれるよ。正義の味方だけに変身ってね。

女装した兄弟でナカヨシココヨシしたら…… ヤバイ！ プレイにしてはハード過ぎる

よ。でも、面白そうだ。今度、2人をモデルにした同人誌でも書いてみよう。タイトルは「仲良しキョウダイ」。ふふふ、ご飯が進みますなー。おっと、それどころじゃなかつ

た。

「場を治めてくれてありがとうジャック。さて、遠路遙々ご苦労だったね2人も、ようこそ日本へ」

「まちくたびれたぜモリー！いよいよ始めんだろう？」

「その為に俺たちを呼んだんだ口？え？？」

「まあまあ落ち着いて……何事にも段階があるんだよ……ところでソツチ方面の腕は錆び付いてないよね？」

「愚問だな」

私の問いかけに、2人の返事は見事にハモった。おお、一卵性って訳じゃないけど、流石は双子、息が合う。

「なあ、モリー。アレやつてくれヨ」

ボニーが私に何かを求めてきた。アレとは？うーむ、ああ成る程ね。

「YOUは何しに日本へ？」

「強盗さ！！？」

某テレビ番組のノリで質問してみると、案の定、思った通りの答えが返ってきた。

「ハアー、まったくアナタ達は主の手伝いをする気があるのですか？」

「もちろんだ！大物狙いと聞いちゃ強盗の血が騒ぐぜ」

「なあ、モー。いつ決行するんだヨ。例の組織の頭の首を取りに行くんだロ？お前は頭  
の首で、俺とボニーは組織の金が欲しいんだけど」

「勿論、財産ーお金は好きにしていよいよ。私の目的は例の組織を壊滅させる事だから」  
例の組織は本当に目障りだ。存在を確認した時から、どうも気に入らない。消さないと枕を高くして寝られない。

「さて、これ以上待っても他は来ないようだし、今ここに居るメンバーに今後について話  
そうか」

私はテーブルの横に移動する。

それだけで騒がしかったボニーとクライドは口をつぐった。

ジャックとモランは直立姿勢で、アップルは私のそばーテーブルに手をつけて話を  
聞く。

「私は今の武偵法ー法律を変えたい。ここに居るメンバーならそれが可能だと確信し  
ている」

「変えるって、正確にはどうやんだヨ？」

「ソウだぜ、モー。法律なんて直ぐには変え……うえ法律って自分で言っちゃった」

「……法律は直ぐには変えられない……でも今直ぐ始められる事はある」

私は皆に背を向け、両手を大きく広げて、



「ここ東京を地獄の底に叩き落とし、犯罪都市にする」

その言葉と共に全員の顔が仰天した。

「ねえ、モリちゃん。もつと分かるように言つてよ。どういう意味なの？ 武偵法——法律を良くする、つていう本来の目的と違わない？」

「犯罪は、目的、じゃないよ。方法なんだよアップル」

首をコテンとさせ、疑問で一杯のアップルに私は説明する。

「さつき言つた通り、法律は直ぐには変えられない。でも人の心なら一瞬でだつて変えることが出来る」

「……心」

ジャックがボソリと答える。うん、やっぱり元氣良く喋つていいよ君。

「人には様々な感情があり、人はそれで動く生き物なんだ。君達もそれは痛いほど知つているだろう？」

私は一旦、言葉を切り、

「……そして最も人の心を打ち動かすもの——それは、死、だよ」

キツパリと言ひ切る。

「同意見だぜモ——。死は何よりも役立つぜ」

「これから東京市民は私の仕立てた多くの、犯罪と死、を見ていく事になる……」

まり犯罪によって街は舞台と化し、市民はそれを目撃する観客となる」

「主の犯罪によって、東京の街そのものが劇場化ですか」

「そして観客に見せるテーマは、この国の法律——武偵法の歪みが最も顕になるような死、——私達が演出し飾り立て意味を持たせた、死、こそが、真に人々の……この国の目を覚まさせる事になる」

「俺らがソのトリガーを引くって、訳だな。オもしろいじゃん」

ボニーとクライドは悪そうな笑みを浮かべて楽しそうだ。いいね、まさにワルの顔だ。

「話はわかったけどモリちゃん」

アップルはスツと立ち上がり、

「けどこれまで以上の大掛かりな仕事になるよ？今のワタシたちじゃね……」

「心配いらないよアップル。その為の準備は既に整っているから」

心配しているアップルを落ち着かせる。

そう、準備は整っている。私が稼いだきた手に入れたモノ——金・武器・人材・ルート・情報など必要なモノは全て揃っている。

私はポケットにしまっている赤の手帳に手をやった。

「幕を開ける時が来た。今回の大きな舞台で、劇、が成功すれば何だって出来るはず

や」

「主の思うがままに」

「モリちゃんについて行くよ！お金次第でね」

「……教授の好きなように」

「早く始めようぜ！」

「やろうぜ！」

皆が一斉に答えはバラバラだけど、答えてくれた。

頼もしいね〜

「では紹介しよう。栄えある最初の出演は——『武偵殺し』だよ」

## とある事件 シャーロック最初の敗北

11月下旬の武偵高校にて――

「相談に乗ってくれてありがとう!!? 零さん」

「どういたしまして」

私は空教室で日課となっている生徒の相談に乗ってあげた。

机に座り、相手と面と向かって喋るのが私のスタイルだ。

相談相手は様々――ランク向上のアドバイス・現在の学科でやっていけるか・友達などあるが、ただし、恋愛相談は苦手だ。それ以外ならOKだけだね。

最後の相談相手にバイバイと手を振るうと、

「主」

相手と入れ替わるようにモランが入って来た。

今、彼女は中等部からの研修生として高等部に入りにしている。モランは外国人で背も高いから、かなり目立つ。高等部ではある種の有名人だ。私の同級生達、特に男子からは人気がある。モランは知らないだろうが、中等部の間でも人気があるんだよね（特に女子に）

そんなモランが私の隣に座り、

「どうぞ。頼まれていたオペラのチケットです」

懐からオペラ座のチケットを取り出し、私に差し出してきた。

おお、チケットが取れたんだね。私はチケットを確認する。

場所は神奈川の横浜市。神奈川芸術劇場。演目は『ドン・ジョバンニ』。座席はS席。

前に金次君と一緒に見た演目だが、私はこれが気に入っている。開演日に予定が空けば、必ず見に行く事になっている。まあ、今回は、ただ見に行くだけじゃないけどね。

「楽しみですね主」

モランは再び懐に手を入れ、チケットを取り出した。演目は同じ『ドン・ジョバンニ』だった。しかも、座席は私の隣だった。

二枚も購入するなんて、S席は1万円近くもするんだよ。

「残念だけどモラン。君の分は必要ないよ」

「……本当に残念です。オペラを楽しみにしていたのに……」

モランは残念そうにチケットを懐にしまった。ごめんねモラン。君にはやってもらう事があるからね。

私の意図を理解したのか、モランは席を立ち教室から出ていった。

神奈川 横浜市某所——とある倉庫内にて

外は暗く、辺りに人はいない。そんな倉庫に2人の少女がいた。

「おい、ツアオツアオ。何でイ・ウーからの依頼を蹴った？」

峰 理子はイ・ウーの天才技師ツアオツアオを問い詰めていた。

理由はツアオツアオが突然、イ・ウーからの依頼を断って、別の客に爆弾を作ったからだ。

ツオツオは守銭奴で、莫大な金と引き換えに何でも作る。イ・ウーはツアオツアオに對して、それなりの金を払っている。それこそ、最優先客となるくらいに

「それは……言えないアル」

『匿名の依頼人だねツアオツアオ君』

ツアオツアオが黙秘しようとした瞬間、理子の持っている携帯から第三者『教授』ごととシャーロック・ホームズの声がスピーカーから聞こえてきた。

『僕の推理では相手はイギリス人と日本人のハーフだね。金もあり、それなりの権力もある。君の所属する蘭幫の庇護もしている』

理子はツアオツアオことココに携帯の画面——スピーカーが聞こえるように向ける。

シャーロックの声を聞いて、ココは脱力して地面に座り込んでしまった。おそらく、安心感が開放感によるモノだろう。

「シャーロック様の言う通りネ。ソイツはツアオツアオや蘭幫を支持しているヨ。金と権力を持ち、そして…… 恐ろしく頭が回るヤツネ」

「なあ、ツアオツアオ。何があつたんだ？あたし達イ・ウーを蹴つて、ソイツに肩入れしたのは何か理由があんだろう？」

「ツアオツアオは悪魔と契約してしまつたネ。仕事はまもなく今夜、完了してしまふヨ」  
『爆弾を仕掛けたんだねツアオツアオ君』

「おい、どこに仕掛けたんだ？そいつは何をするつもりなんだよ？」

「恐ろしい計画を実行に移すように依頼されたネ」

ココはワナワナと震え出した。そんなココの姿を見て理子は驚いた。

ココがこんなに怯える相手とは一体？

「話せよツアオツアオ。『教授』がきつと助けてくれるから」

「ちよつと遅かつたネ。姉妹を人質に取られたヨ」

姉妹——ココに姉妹がいる事に理子は驚いた。まさか、万武の武人ココに姉妹がいたとは。

『爆弾の場所を教えてくださいたくないかいツアオツアオ君。必ず君の姉妹を助ける』

「姉妹は無事ヨ。約束したくれたネ。ソイツとネ…… 証拠は決して残さない。それが姉妹を救う唯一の手段ネ」

ココは懐に手を伸ばし、

「爆発まで10分ネ」

『理子君!!? 止めるんだ!!?』

拳銃で自分の頭を撃ち抜こうとした。

『教授』の叫びに、理子は思わずココの腹部に掌打を打ち込み、ココを気絶させた。

万武の武人ココに簡単に攻撃を当てられた事は意外だった。それほど、ココは追い詰められていたのか。

「ねえ、『教授』。これからどうするの?」

『安心してくれたまえ。爆弾の場所もツアオツアオ姉妹の監禁場所も推理できている。

理子君は爆弾を始末してくれ。僕はツアオツアオ姉妹を助けに行こう』

「了解。それで爆弾の場所は?」

『神奈川芸術劇場だよ』

神奈川芸術劇場――

理子は平凡な女性スタッフに変装して劇場に潜入した。

今日の演目は『ドン・ジョバンニ』。開演初日とあって、客は満員だった。

演目はラストに突入し、主人公ジョバンニが石像に生き方を改めよと促される場面



だ。

「あつ、ごめんなさい」

理子は道具置き場を通る際、人とぶつかりそうになった。相手は金髪で中性的な顔をしており、背は高く170はあるだろう。肩に布で巻かれた細長いモノを持ち、頭をシニヨンと呼ばれる結い方になっている。おまけに口にタバコを吸っている。香りからして、トルコタバコだ。

「お気になさらず」

相手はそれだけ言つて去つていた。

少しに気になる理子だったが、今は『教授』からの依頼を優先すべきだ。

『教授』の推理では、爆弾は楽屋側の裏方——大道具・小道具・音響・照明など、客からは直接見えない場所に仕掛けられている。

『理子君。そこだ』

「ハイハイ」

『教授』の声で理子は止まった。

そこは、セリと呼ばれる舞台の床の一部分を長方形に切り抜き、その床を昇降させる装置だった。今まさに石像役の役者が舞台上に上げられる所だ。

『その装置の真下に爆弾が仕掛けられているはずだ。調べてくれたまえ』

理子は指示に従い、装置の下に潜り込んだ。

装置の下を覆っている布をナイフで切り開き、中を覗くが、

『教授』何もないよ」

『……?』

装置の下には何もなかった。理子からの報告を聞いて『教授』ことシャーロックは驚きを隠せなかった。

卓越した推理を予知まで近づけた——『条理予知』を覆させられた事に。

「ねえ、『教授』。どうすんの何もないよ……?」

理子は慌てたようにシャーロックに指示を仰ぐが、携帯からは何も聞こえてこない。

理子がどうするか迷っていると、フツと装置についている小窓に目がいった。近づいて開けてみると、チェストの駒——黒のキングがぽつんと置かれていた。

手に取ってまじまじと見るが、特に変哲も無い駒だ。

理子はその場から離れようとしたが、小窓からよく知る顔が見えた。

「何で零がここにいるんだよ」

小窓から見える席——S席に零がいた。私服姿でオペラを楽しそうに見ている。気のせいかこつちを見て、ニイと笑ったような気がする。

『間違えた………ここじゃない』

シャーロックがボソリと呟く。

「『教授』？」

『……じやなかった。間違えた。理子君、急ぐんだ。本当に爆弾が仕掛けられている場所は、ローズホテル横浜だ』

ローズホテル横浜——

神奈川芸術劇場からさほど離れていない、横浜中華街に位置するローズホテル横浜は、山下公園、元町にも徒歩5分と絶好の観光拠点になっている。四川料理で有名な「重慶飯店」の新館やアロマテラピーサロンもホテル内にある。

そのホテルに向かって理子は走っていた。人混みをうまく潜り向け、ホテル前に来た瞬間、ドガアアアアアンとホテル4階が吹き飛んだ。辺りに割れた窓ガラスが舞い、ホテル周辺にいた人間は何が起こったかわからず、パニック状態だ。

野次馬を駆け抜け、理子は4階に向かった。

「うっ……！」

爆破のあつた部屋は惨劇だった。

家具は粉々、壁には血が飛び散り、床には即死だろう10人の死体が転がっている。

イ・ウー本部ボストーク号にてー

「ここから打ったようだね」

『教授』ことシャーロックは、ステッキを銃のように構える。

シャーロックは自室に、理子とジャンヌを招いて、ホテル爆破事件について説明していた。

部屋にあるパソコンにはホテル周辺の地図――特にホテル向かい側の空きビルが大々的に表示されている。

現場の写真――理子が後で撮影したモノである。

「ねえ、『教授』。ツアオツアオ達は怎么样了の？」

「安心しなさい理子君。ちゃんと救出したよ。なんとたつて蘭幫の諸葛君の部下だからね」

「それで『教授』。この惨劇はツアオツアオ達を誘拐した者による犯行だというのか？」

「間違いないよジャンヌ君。これを見たまえ。三脚と腰掛け兼用のステッキを使っている」

シャーロックは理子が撮影したホテル向かい側の空きビル――屋上のとある場所を指し示す。そこには何か細かいモノを置いた跡がある。

「いや、待て『教授』。もつといい場所を見つけた。僅かだが、三脚を引き摺った跡がある……」

ジャンヌが写真に写る僅かな跡に気づいた。

そこにはジャンヌの指摘通り、三脚を引き摺った跡がある。跡を追っていくと、ホテルからかなり離れた場所で終わっている。

「よく気づいたねジャンヌ君。正解だ」

「500mはあるね」

「いや、理子。600はある。風速は3mほどだろう」

「あと、手すりにタバコを押し付けた跡もある。おそらく、ここでタバコを消したんだろう」

3人は写真をまじまじと見る。

屋上の写真には手すりの上に風速計を置いた丸い跡と、タバコを消した焦げ跡があった。

「三脚のタイプからして、使われた銃はマルティニ・ヘンリー銃だね。消音器付きに改造してある」

「随分と古い銃だな。今時使っている者など私は見たことがない」

「でも『教授』。どうしてホテル爆破現場の周辺を調べろって、言ったの？この狙撃銃の

跡と何か関係が……」

「僕の推理では、ホテルの爆破は囹だろう。本命を狙うためー爆破によってターゲットを、誰を狙っていたか分からなくする狙いがあつたんだろう」

「巧妙だな。爆破現場では誰も銃弾の跡など探さない」

ジャンヌは謎の狙撃手の姿を思い浮かべた。

屋上でタバコを吸い、銃を組み立て装填、風が吹く中ターゲットのみを射殺するーおまけに爆破に合わせて。

「狙撃現場には何か他に残っていなかったのか理子？」

「あつ、そういえばこんなモノが落ちてたよ」

理子はポケットから袋を取り出した。袋には刻んだ葉っぱのような物が入っている。

「これは煙草葉だね。香りからしてトルコ葉だけじゃなく、バージニアもミックスされている」

トルコ葉……そして、狙撃。この2つにシャーロックはある人物を思い出した。過去に自分を射殺しようとした、とある大佐の事を……

「犯行現場には武偵が駆けつけたんじゃないかい？」

「うん。ホテルの近くにいたあたしの学校の連中が駆けつけてきたよ」

爆破のあつたホテル周辺に武偵が偶々、いるなど都合が良すぎる。

「犯行はおそらく、『武偵殺し』つまりは理子君。君の仕業と断定される」  
シャーロックはパイプを吹かしながら続ける。

「はあ?!? なんぞだよ?!? あたしはやつてないのに……!」

「現場から採取された証拠品——理子君が使っていた爆弾の部品と同じ物が発見されるだろう。ココ君が君に伝授した爆弾がね」

「ツアオツアオ姉妹を誘拐した者——黒幕は理子に恨みがあるのか?」

「いや、理子君に恨みはないだろう。これは、方法、だろう」

「方法? どういう意味だよ『教授』」

「この爆破事件は序章に過ぎない。いや、もしかしたら僕への挑戦かもね」

後日——

ローズホテル横浜爆破事件はニュースで大々的に取り上げられた。

犠牲となったのは海外の某貿易商の重役10名だった。

犯行は『武偵殺し』によるものだと断定。マスコミは『武偵殺し』が初めて武偵以外を狙った事を連日に渡り報道した。

しかし、この『武偵殺し』を英雄視する者が現れた。

殺害された10名は貿易商を隠れ蓑にした人身売買組織の一員だった事が発覚した。

## それぞれの12月

イ・ウー本部 ポストーク号にて

男装の麗人エル・ワトソンは艦内の廊下を歩いていった。

目指す場所はイ・ウーのリーダー『教授』ことシャーロック・ホームズの自室だ。

目的はシャーロックがワトソンの所属する組織——リバティーメイソンに頼んだ、  
とある人物、の資料を届ける為だ。

その資料はもっているだけ危ういレベルの品物だ。

カッカツと歩くと目的の部屋が見えた。

部屋の前に立つと、コンコンとノックをして、

「失礼しますホームズ卿」

「入りたまえワトソン君」

断りを入れてから入室しようとした時、タイミングを合わせたように部屋の主シャー  
ロックが返事を返してきた。

「ホームズ卿。頼まれていた……」

入室して早々、ワトソンは手にした資料を渡そうとしたが、そこで手が止まった。



そこは、いつも訪れているホームズ卿の部屋ではなかった。室内はカオスだった。床や壁一面に貼られた国・世界地図に、その国で起きた事件の詳細・新聞の切り抜きが辺り一面に貼られ、それらには赤い糸が繋がられていた。

「よく来たねワトソン君。さあ、こつちに」

室内の中央の安楽椅子に腰掛けているシャーロックがワトソンを招く。

ワトソンは床に貼られた地図を踏まないよう慎重に歩く。

「ホームズ卿。これはもしかして、蜘蛛の巣ですか？」

「その通りだよ。まだ僕が若い頃、様々な事件に関係性を持たす為、僕が考案したモノだよ」

蜘蛛の巣——事件を糸で結び、関係性を調べていく捜査方法だ。

ワトソンはこの光景に覚えがあった。

「英国にいた頃は、自分の部屋だけでは収まり切らなくてね。それでルームメイトであった、君のひいお爺さんの部屋を……」

「その話なら聞いたことがありますよ。僕の曾祖父、初代ワトソンが『僕の部屋を使われた』と文句を言っていたそうですが……」

「あの時のワトソン君はとても嫌そうな顔をしてたね。今でもハッキリと覚えているよ。結婚して部屋を引き払ったというのに」

「それと結婚話についてですが、ホームズ卿に『新婚旅行を台無しにされた』とも聞いてます」

「それは誤解さ。助けたの間違いだよ」

シャーロックは誤魔化すようパイプを啜えて言った。

助けたという話に何かを付け加えるなら、新婚旅行に向かう列車から親友であるワトソンの妻メアリー・モーストンを川に突き落としたエピソードもあるが……

「突然どうしたんですか？ 蜘蛛の巣など作らなくても、ホームズ卿には『条理予知』があるじゃないですか」

「ああ、それなんだがね。今回、僕が調べている事件——事件の首謀者には『条理予知』が通用しない」

「なっ……？」

シャーロックからのカミングアウトにワトソンは驚きのあまり、目が一瞬点になった。

自身の敬愛するシャーロック・ホームズの推理——予知のレベルまで高められた『条理予知』が通用しない相手の存在に。

「それは誰なんですか？ まさか僕に、リバティーメイソンに調べるよう依頼した相手なんですか？」

ワトソンは自身の手に行っている茶封筒に目をやった。

「まあ、その前に僕の作った蜘蛛の巣を辿ってごらん」

ワトソンはシャーロックに言われがまま、彼の作った蜘蛛の巣——自分のすぐ手前にあるものから辿っていた。

「インドの陸軍将校を巻き込んだスキャンダル…… 中国の蘭幫上海方面幹部中毒死…… ロシアのロマノフ王朝展示会での盗難事件…… アメリカ不動産王の事故死…… ヨーロッパ鉄道王の病死…… その共通点は——ワトソン君、例の資料を」

シャーロックに言われ、ワトソンは資料の入った茶封筒を渡した。

受け取ったシャーロックは、ペーパーナイフで封筒を開け、そこから一枚の写真を取り出すと、蜘蛛の巣の共通点・終着点——イギリスに写真を打ち立てた。

それは人物写真だった。写真には、手入れの行き届いた金髪を肩まで伸ばし、すらりと脚は長く顔は小顔だが、知的な印象を与える赤い瞳が特徴の麗人の姿が椅子に座って映っていた。

「——バージニア・モリアーティ3世」

「その通り」

シャーロックはコックリとうなずく。

「ホームズ家そして僕、ワトソン家の宿敵——ジェームズ・モリアーティ教授の直系の子

孫ですわね」

「天才数学者にしてプログラマー。幼少期に何度も革新的なコンピュータプログラムや論文を発表するほどの天才。まさに彼の孫娘だね」

「ケンブリッジ大学を首席で卒業。その後は曾祖父と同じダラム大学で講師として勤務。クリーヴランド公・ハワード王子の元家庭教師にして、元女子ボクシングイギリス王者でもありますわね」

ワトソンは写真に目をやった。

「彼女にはリバティーメイソン。そして、MI6による監視が付いていた——そうだねワトソン君」

「はい。モリアーティ一族はリバティーメイソンやMI6だけでなく、英国のあらゆる機関が24時間体制で監視していました。幼少の子供にいたるまで——彼女も例外なく。」

モリアーティの身内というだけで、英国政府から監視し続けられるなどワトソンからすれば、堪ったものではない

「この蜘蛛の巣——事件にはバージニアが関係しているのですか？しかし、彼女には監視が……」

「これだよ」

シャーロックは関係図の1つをトントンと叩く。

それはイギリスタイムズ紙の切り抜きだった。そこには『ロンドン塔で世紀の大泥棒!?』という見出しで盗難事件について書かれていた。

「ロンドン塔に期間限定で展示されていたイギリス王朝の王冠が盗難された事件ですか……しかし、ロンドン塔の警備はイギリス国内随一を誇ります。いくら、彼女でも……」

ロンドン塔での盗難事件——その事件にワトソンは覚えがあつた。一時、イギリス中を震撼させた盗難事件。

イギリス随一の警備システムを誇るロンドン塔が破られ、展示されていたイギリス王朝の王冠が奪われたのだ。

犯人は不明、盗まれた王冠の行方も掴めず。事件は迷宮入りかと思われたが、盗難されてから1週間後に王冠は戻ってきた——ご丁寧にホームズ邸に送られて、『ホームズをゲット』というメッセージカード付きで。誰が見てもホームズへの挑戦状と捉えるだろう。

「彼女は天才数学者にしてプログラマー。ロンドン塔の警備システムを破るくらい朝飯前だっただろう。それこそ監視の目を盗んでね」

ロンドン塔を攻略——それはイギリス国内のあらゆる警備を無効化できるにも等し

い行為だ。

イギリスの銀行・ネット機関・コンピュータ管理など自由自在に操れるだろう。

「そんな彼女ーバージニアには、今から15年ほど前に突然、ダラム大学での講師を辞任しているー丁度、ロンドン塔の事件から1年後のね。その後は君たちの方でも行方が分からないのだろうか？」

「はい。イギリス最高峰の諜報機関MI6でも行方が掴めませんでしたーリバティーメイソンの情報網を使つてもです」

リバティーメイソンは、ヨーロッパだけでなく、世界中に構成員が潜んでいる。そんな構成員の目を欺くなど普通ではない。

「それでホームズ卿。このバージニア・モリアーティが貴方の『条理予知』が通じない相手なのですか？」

「いいや、バージニアにはあくまで、僕の『条理予知』が通じない相手の原点ー生みの親に過ぎないよ」

生みの親？ワトソンは思考する。

「まさか……バージニアに子供がーモリアーティ4世が存在すると言いたいのですか？？」

ワトソンは驚愕した。

ここに来る前に、バージニア・モリアーティ3世については、ある程度、調べてあった。彼女は天才モリアーティの名に相応しく、大学でその高い知能とカリスマ性を大いに振るつた。そんな彼女の一粒種がいるなど……それに加え、お目に叶う伴侶がいるなど考えもしなかった。

「僕が蜘蛛の巣を作つたのは、4世君について知るためだつたんだ」

「それなら、バージニアではなく、始めからモリアーティ4世についての関係図を作成すればよかつたじゃないですか。こんなに部屋を埋め尽くして……」

「いや、イキオイにノツて作つていたら、いつの間にか、ここまでの規模になつてしまつたよ」

シャーロックは「困つた困つた」と付け加える。

後で片付けさせようと、決心するワトソンであつた。

「それで、肝心のモリアーティ4世の関係図はどれなんですか？こんなにあつては、さすがの僕でも分かりませんよ」

「付いてきたまえワトソン君」

シャーロックは安楽椅子から立ち上がり、部屋を出て歩き出した。ワトソンの歩くペースを考えた歩みだ。

彼の後をワトソンは追う。

暫く艦内を歩くと、2人は誰も使っていない部屋の前に到着した。

「さすがに僕の部屋だけじゃ、収まり切らなくてね。だから、空いている部屋を使わせてもらった」

シャーロックはドアノブを回して、ドアを開け入室する。

後続くようにワトソンが部屋に入ると、そこにも蜘蛛の巣があつた——シャーロックの部屋の規模程ではないが、十分過ぎる規模の蜘蛛の巣だ。

この蜘蛛の巣にワトソンは見覚えがあつた。

「これはイ・ウーが関わった事件の全てじゃないですか。モリアーティ4世とは関係ないのでは?」

「まあ、そう思うだろう。でも、これを見ても同じ事が言えるかな?」

シャーロックはワトソンに一枚の写真を渡す。

ワトソンが写真を見ると、それは蜘蛛の巣を撮影したもの——今いる部屋と同じものだ。

「それはモリアーティ4世が作成した蜘蛛の巣だよ。イ・ウーの事件を全て洗い出し、見事に結びつけた」

モリアーティ4世はイ・ウーを調べていた。

「4世君が作成したモノには、これからイ・ウーが起こす事件までも予測いや、推理して



ピンポイントで当てている。まるで、僕の『条理予知』さながらだ」

「これには、パトラ、理子、ジャンヌ、ブラドなどがありますが、あくまで予測では？まだ、本人達が計画しているわけでは……」

ホームズ卿の推理力「『条理予知』と同等などありえない。そう思うワトソンだったが、

「本人達に確認した所、見事に一致したよ」

シャーロックの言葉にワトソンは声が出なかつた。

そんなワトソンの反応を面白そうにシャーロックは観察していた。

ここまでの2人のやり取りを第三者が見たら、「わざわざ蜘蛛の巣を作らなくても、写真を見れば早いじゃん」と言いたくなるだろうが、そこはシャーロックのイタズラ心だと思つてほしい。

「モリアーティ4世は何がしたいのでしょうか？まさか、イ・ウーと戦うつもりじゃ……」

「本人はやる気満々だろうね。その証拠に、この半年で何度も僕の推理を覆してきたー何だか久しぶりにワクワクしてきたね」

シャーロックは楽しそうだーまるで、長年待ち続けた宿敵に出会ったかのように、本当に楽しそうだ。

「でも、僕も負けてばかりではいけない。そこで4世君の推理を覆してあげようと思うんだよ」

「こちらから、仕掛けるんですか?」

「そんなに大袈裟な事じゃないよ。ただ、ちよつと計画を立て直すだけさ」

### 零視点

12月上旬ー

私は寮の自室の机で、パイプを吹かしながら、同人誌を描いていた。

このパイプはネットのオンライン対戦ゲームー賭けチェスで勝ち取ったものだ。相手は前から対戦していたイギリスの『むにゆえ』だ。

初めてハンドルネームを明かしてくれた時は嬉しかったな。ハンドルネームとはいえ、名前で呼べるのだから。因みに私のハンドルネームは『数学教師』だ。

『むにゆえ』は強い。今までの対戦成績を足しても、76戦中43勝33敗0引き分けて私が今の所は勝っているが、油断のならない相手だ。

ある日、『むにゆえ』が私に賭けチェスを提案してきたので、面白そうだったからやってみたー形式は5分の早指しチェスだ。

結果、私が勝った。そして、景品として『むにゆえ』は私にこのパイプを送ってきた

のだ。

「精油の香りがいいね」

私はこのパイプが気に入っているー洒落でミドルネームのMも刻印するくらいに。

コレをくれた『むにゆえ』には、本当に感謝だ。いつかりアルで会いたいな。

「おっと、手が止まっていた……！」

マジマジとパイプを見つめるあまり、作業が疎かになっていた。

続きを書かないとね。私が今、作画している同人誌のタイトルは「仲良しキョウダイ」ー2人のキョウダイが主人公だーキョウダイのモデルは金一さんと金次君だ。

無断で描いてはいない。ちゃんと金一さんーカナさんに許可を貰いましたよ。あの人、「面白そうね！完成したら見せてちょうだい！」って、楽しそうにしてたなく。

金一さんは私の見立て通り、女装したら美人だったね。変身してもらった甲斐があった。記念すべき完成第一作品をプレゼントしてあげよう。

いやー、まさか姿だけでなく、人格まで変わるなんて思わなかったよ。まあ、”本人”であることは間違いないし、問題はないだろう。

しかし、金一さん結婚して子供が出来たら立場はどうなるのだろうか？ヤバい！なんか面白くなってきた。

「金一さんに子供が出来たら、君のパパはねママでもあるんだよって、言ってみたいな」

私は頭の中で構想する。うん！カオスな光景が広がっている。女装関係に触れたら、金次君だけじゃなく私まで撃たれるね。その前にお子さんが混乱しそう……

「あつ！また、手が止まっていた……」

いけない！変な妄想はやめよう。今は作画に集中！

私はスラスラと登場人物を書いていく。金次君がモデルの弟さんだ。女装時の姿はメートルをモデルにした。

あつ！よく考えたら、まだ金次君に許可もらってない…… まっ、いいか！

私が再び作画に取り掛かろうとしたら、タイミングを見計らったように携帯が鳴った。開いて見てみると、相手は母さんだった。

「母さん！久しぶり」

『本当に久しぶりねレイ。学校では上手くやってる？』

この脳に直接、響くような声は間違いなく母さんだ。

こうして母さんと話をするのは、本当に久しぶりだ。武偵高校に入学してからは、殆ど電話していなかった。

海外の企業相談役は忙しい事は小さい頃から知ってはいたが、こうして声を聞くだけでも嬉しい。

『聞いたわよレイ。貴女、武偵として大活躍中じゃない。もしかして、天職、だったりしてね』

「もう大袈裟だよ。私なんてまだまだ未熟者だつて……！」

天職だなんて、母さんは本当に大袈裟だな。

「ねえ、母さん……」

『うん？何かしらレイ。何か聞きたそうな感じね』

これから聞く事は重大な事だ。本当に大切な……

「前に母さんが言つてたー。ジェイムズ・モリアーティとうちは関係ないつて、アレはウソだよ。私、聞いたんだモランに…… あつ、モランっていうのは父さんが連れてきた……」

『あちやー、暴露しちゃつたんだ。あの子、父親と似て軽い所があるから』

「うん？なんだかモランを知っているような口振りだね」

私はモランについて、母さんには話してない。

それに加えてー

「初めからうちはモリアーティ教授の身内だつて、知つていたようにも聞こえるよ」

『うん☆大正解。モリアーティ教授は私のお爺様で、貴女にとつてはひいお爺様よ』

母さんの軽くハツチャケたカミングアウトー我が家の家系を聞いて、私は机からズ

り落ちそうになった。

「どうして嘘を付いたの？もしかして、私の為に……」

『違うわよ。ただ、真実を知った貴女の驚いた反応がどんなモノか知りたかったからよ☆』

ガタン！…… 違った。母さんの言葉でどうとう私は机からズリ落ちた。

シリアスな内容だと思つた私が馬鹿だった。

腰が抜けたが、力を振り絞つて机に戻る。

「はあく、つまり、私の反応の見て楽しむ為だったと……」

『正解☆そんなに気を落とす必要はないわよ。お爺様は世間では悪者扱いだけど…… 実際はそうでもないのよね。本当の悪者ー悪魔はシャーロックの方なのに』

悪者ではない？という意味だろう。ジェームズ・モリアーティ教授ー私のひいお爺さんは犯罪組織の頭目だった筈…… それにシャーロックが悪魔って？

「どういう事なの母さん？」

『まあ、それについては置いておきましょう。私の計算では、近い将来知る筈だから。今はお爺様の事より貴女の話の話を聞きたいわ』

気になるけど…… でも母さんの言う通り、今は置いておこう。

私は母さんに武偵高校での出来事を語った。ー武偵高の編入試験・入学してからの寮生活・金次君を始めとしたクラスメイト達・モランがホームステイして来た日・友達の相談役になったなど……

『へえ、レイは私立相談役をやってるんだ、優しいじゃないの』

「うーん、実はね。相談の中でも私、恋愛関係の相談は苦手だね。それで今、困っているんだ」

最近、私の所に恋愛関係で相談に来る同級生が多い。私はどうも恋愛について疎い。

「そういえば、母さんと父さんの出会いについて、まだよく聞いた事がなかったよね」

『あら、どうしたの突然？』

「あー、うん。2人が出会った経緯を聞いて、同級生達に何かアドバイスできる事があつたらなくと、思つてさ」

振り返つてみれば、私はまだ父さんと母さんがどう出会つたか、よく聞いた事がない。父さんが母さんに一目惚れして、隙あれば、アタック<sup>①</sup>を仕掛けて、母さんをおとしたと聞いたが……

『うーん、お父さんとの出会い、ね……まあ、いいわ。娘の頼みだし、教えてあげる。実はね、私、お父さんに……とつつつつつても、イラツとさせられたのよね』

どうしたの母さん？何だか、声が濃んでいるよ？気のせいかな電話の向こうで、母さん

の目が座っているような……

『でも、とつても甘くい恋やワクワクドキドキの大冒険もしたのよね』

今度は打つて変わつて明るくなった。電話越しで「ウフフフ」と笑っている。

『お父さんとの出会いだね。私がイギリスの大学で講師をしていた時に出会つたのよ』

大学の講師だつて?!? 初めて聞いたよ。あつ! でも、考えれば私が中学生の時、勉強を教えてもらったつけーあの時の教え方はまさに教師さながらだった。誰かに対して勉強を教える事に慣れていたような……

『でね。お父さんはその時、私の勤めていた大学の学生——日本からの留学生だったのよ。初めは講義の時に、チラッと見かけただけ。一生徒という印象だったわ』

イギリスに留学してたんだ父さん。でも、何でわざわざ日本からイギリスへ? 何か目的でもあつたのかな?

「どうして父さんはイギリスに留学したの?」

『うくん、お父さんはイギリスに留学する前、日本で検事をやつてたそうなのよ。でも、仕事場の同僚——普段は物静かだけど、怒ると鬼みたいにオツカナイ同僚とウマが合わなくて、頭にキタから日本から出て行つたそうなのよ』

父さんが検事?!? 嘘でしょう……あのノホホンとした父さんが、探偵の前に検事やつてたなんて、まさかタダの検事じゃなく武装検事だったりして……それはない



か！

『それで、どこに行くか適当に決めてイギリスにしたそうよ。それでお父さんたら入国して早々、何したと思う？』

突然、母さんから話を振られた。

「観光じゃない？」

『不正解。まったく、我が娘ながらバカだね』

うわ〜久しぶりに聞いたなそのセリフ。私が問題——特に数学を間違えた時に言われたな。

『まあ、その答えは本人の口から聞くか、自分で調べる事ね。でも、私も悪魔じゃないからヒントくらいはあげる——イギリスの為に働く人達に喧嘩を売った以上』

以上って、それだけですか。

しかし、父さん…… イギリスの誰あるいは何処に喧嘩を売ったの？下手したら国際問題になるよ。まさか、イギリス王室に喧嘩を売ってないよね？

『お父さんの経歴はここまで。話を戻すわよ。私がお昼の講義を終えて、大学の自室に校庭を通って戻ろうとした時、お父さんが私の前に現れたのよ』

おっ！まさか父さん、母さんが来るのを待ち伏せしてたのか。それで食事に誘ったりして……

『会って早々、私に「300%惚れた。結婚してくれ」って、言ったのよ。一瞬、目が点になったわ。ウフフフ』

私の予想の斜め上を行っていた。父さん!!? 会って早々に結婚してくれとかないでしよう!!?

「それで母さんは何て返事したの?」

『丁寧に「500%無理」って、お断りしたわ』

当然そうなりますよね〜

『でもね〜、お父さんたら諦めず、時間が空くたびに私に告白してくるのよ。当時、私は教師でお父さんは学生。付き合うにしても、.. 周りからの目、もあつたから微妙だったのよ』

学生と教師の恋愛は普通の学校だったら、色々とあるからね。最も武偵高校では、そんなことはないだろうけど。

『その度、私はお父さんに、丁寧に断り、や、嫌ってますアピール、.. 関わらないでと警告を発したんだけど、お父さんには効かなくてね。ことごとく受け流して、アタック、して来たわ』

この辺りで母さんが、イラッとしているのが分かる。

お父さん鈍感だったのかな。女性の気持ちに分からなかったとか。

『私の講義は必ず出席してきたわ。あと、論述は見当違いな答えー！ This is the pen. wonderful. なんて書くのよ！ 決まって私が採点する時に限ってね！』

完全に嫌がらせに見えるけど、父さんなりに母さんの気を引きつけたんじゃない？ 「そんな事が続くから、最終的に嫌々ながらも付き合ってたんだ」

『いいえ。お父さんたら、ある日、私のお金をちよろまかしたのよーある、大事なイベント、に使うための大金をね。思わず私「セイジメエエエエエ!!？」って、空に向かつてはしたなく叫んじゃった』

最後に母さんは『テへ☆』と付け加えた。母さん……もう45になって「テへ」はないと思うよ。

しかし、お金ねく私が言えた立場じゃないけど、お金はちよろまかしてはいけないよ父さん。でも、このお金の件。何か関係しているんだろうか？

『生まれて初めて敗北感を味わったわ。新鮮な感じでもあったし、悔しくもあった。だから、私はお父さんに同じ……いいえ、それ以上の敗北感を味わわせないと気が済まなくて、お父さんと半ば、ツキアツタ、の』

『付き合ってたって、自分に初めて敗北を味わわせた相手とねく母さんも酔狂な人だ。』

おそらく、自分の好きなタイミングで倒して、敗北させる為にだろう。

『ツキアウ過程で、様々な事があったわね。ボートでのクルージング・荒野での散歩・列車旅行・中国を観光したりしたわ』

何だか楽しそうだね母さん。思い出に浸っているんだらうか。

「付き合う過程は分かっちゃよ。ついでに結婚のきっかけも教えてよ！」

私は続きが気になって、母さんにせがむ。

『もう！欲張りな娘だこと。でも、特別に教えちゃう。結婚のきっかけは、お父さんが私の命を救ってくれたからよ』

命を救ってくれたって、母さん死にかけた事があるの!? しかも、父さんが助けたとは……

『接着剤のような名前の不審者に私、突然襲われちゃってね。もうダメだと思った時、お父さんが助けてくれたのよ』

「どうやって助けたの?」

『そいつをフライパンで殴りつけて気絶させたのよ。あの時は命の危機にも関わらず爆笑しちゃった』

父さん、何でフライパンなんか持ってたの?料理でもするつもりだったの?

それに不審者の正体は一体?気になるけど、今は母さんの話がメインだ。

『その後、何で助けたんだって、尋ねたら「君が死んでしまったら、僕は誰に、アタックすればいいんだ!!？」って言ったのよ』

母さんは堪えていたのだろうー吹き出したように笑い出した。

ワーオ、父さんやるね〜カッコいい。

『その言葉を聞いて、..この人にしよう、..って決めたのよ。それで大学を辞めて、お父さんの故郷ー日本に移り住んだの』

大学を辞めるー大学の講師になるのは簡単ではない。そんな講師をやめて父さんに付いて行くなんて、それ程、父さんに惚れたんだ。

『でもね。移り住む前ーお父様が..... ああ、貴女のお爺様がすつつつつつつごく、お父さんとの結婚に反対したのよね。結婚だけじゃなく私が大学を辞めて、お父さんと日本に移り住む事もね』

お爺様ー私のお爺ちゃんか..... 会ったことがないから、想像が難しいが、母さんのこの話を聞く限り、父さんが気に入らなかったようだね。

『けど、大叔父様は賛成してくれたわ。お父さんとの出会いを話したら、爆笑して大受けしてくれたのよ「結婚して日本に移住したい? O K O K」ってね』

「大叔父様って?」

『ひいお爺様のお兄さんよ』

ひいお爺さんにお兄さんがいたのか……ちよつと待つてよ。ひいお爺さんって、今から100年前の人だったよね!?? そんな人のお兄さんって、軽く100歳超えてるじゃん。

いや、延命手術やステルスで寿命が伸ばせる話を聞いたことがある——多分、大叔父さんもそれかな。

「大叔父さん的には、そんな軽いノリで承諾してよかつたの? それと何やつてる人なの? 意見できる程だから、それなりの地位がありそうだけど……」

『元イギリスの軍人よ』

退役軍人ね。でも、元軍人だからって、結婚話に口を挟めることができるだろうか? ただの軍人ではなさそうだ。

『大叔父様が説得しても、頑なに首を縦には振らないから、半ば駆け落ちする形で出て行っちゃったけどね』

駆け落ちか……2人がそれを選んでくれたおかげで、私が生まれてきたんだけど。

あつ! いつの間にか恋愛のアドバイスを貰うのではなく、母さんの昔話になった。

私は当初の目的に戻ろうとしたが、

『はい、話はここまで。久しぶりにレイとお話できて、母さん嬉しかったわ。これから”大変、だろうけど頑張つてね』

そう言つてガチャリつと、電話が切れた。

ああ、ちよつと突然電話切らないでよ。まあ、母さんと話ができたし、いいか！

私は電話を置き、同人誌に取り掛かろうとし、フツと時計を見て見ると時刻は17時になつていた。いけない！この時間帯はニュースをチェックしないと。

私はテレビのスイッチを入れる。ちようど、夕方のニュースが放送されていた。

「これは…… どういう事なんだ」

私は放送されたニュースの1つに釘付けになつた。

それは『武偵殺し』が次に犯行を行うであろうと、予測したクルージング・イベント会社所有の日本船舶アンベリアル号が、浦賀沖で沈没したニュースだつた。

そんな馬鹿な…… 私の見立てでは、犯行開始は12月の下旬のはず。

ターゲットは特命武偵 遠山金一だつたはず。

マズイな計画が狂つたぞ。せつかく、金一さんをオトリにしようと思つたのに……

## 本当の相棒

キンジ視点

ー 兄さんが死んだ。

俺は、いつものように強襲科で訓練をしていると、急に教務科から呼び出しをくらった。

何事かと思い、教務科ー職員室に向かうと、そこで浦賀沖海難事故を聞かされた。

日本船舶のクルージング船・アンベリール号が沈没し、乗客1名が行方不明となり…… 死体も上がらないまま捜索が打ち切られた。

死亡したのは、船に乗り合わせていた武偵…… 遠山 金一。俺の兄さんだったー警察の話によれば、乗員・乗客を船から避難させ、そのせいで自分が逃げ遅れたのだそうだ。

だが、乗客たちからの起訴を恐れたクルージング・イベント会社、そしてそれに焚きつけられた一部の乗客たちは、事故の後、兄さんを激しく非難した。ネットで、週刊誌で、そして遺族の俺に向かって吐かれた、あの罵詈雑言の数々。

ー 兄さんはなぜ、人を助け、自分が死んだ？



「――なぜ、助けた人間から罵倒される？」

「――なぜ、スケープゴートにさせられた？」

「――ヒステリアモードのせいなのか？」

「――武偵なんかをやっていたからか？」

学校にいる間、俺の頭の中は様々な疑問で一杯だった。訓練について行けず、初歩的なミスを連発した。教務科の怒鳴り声も、どこか上の空で聞いていた。

フラフラした足取りで歩いていると、いつの間にか校門の前に来ていた。このまま、自分の部屋に帰ろう。一人になりたい。そのまま、校門を出て、寮に戻ろうとしたら、

「金次君」

校門の陰から零が姿を現した。まっすぐと俺の顔をとらえ、哀れむような目で見てきた。

「…………… 何の用だ。何もないなら退いてくれ」

今は誰とも喋りたくないだ。頼むから、俺を一人にしてくれ。

「ちよつと、私の部屋まで付き合いなよ。なあに、直ぐに済むからさ」

零は校門の向こう――女子寮がある方角を親指で、クイクイと指す。

今は付き合っているヒマはない。

「悪い…………… また、今度な」

俺は零の横をそそくさと通り過ぎるが、後ろからガシツと手を掴まれた。

「離してくれ…… いや、離せよ」

「いいや、離さないよ。そんなヒドイ顔をしている相棒を、このまま帰してたまるか」

ヒドイ顔？ 鏡がないから分からないが、零が言うくらいだーきつとヒドイ顔なんだろう。

しかし、なんで俺のことを心配する？ ああ、成る程な。お前もクルージングの事故を知ったのか。コイツなら、俺のことを観察すれば分かるか。

俺は零の手を振りほどき、そのまま逃げようとしたが、爪を立てられた。

「いてっ」

「いいから、黙ってついて来てよ」

俺の手を引っ張り、急ぎ足で寮に向かって歩いていく。

女子寮に到着すると、そのまま零の部屋ーリビングに通された。

部屋の中は相変わらず、本や訳の分からん実験器具でいっぱいだったが、そんな事どうでもよかった。

「まあ、ソファーに座ってよ。コーヒー出すから」

俺を一人がけ用ソファーに座らせて、キッチンの方に向かった。

キッチンからは、零がスイッチを入れたのだろう。ゴポゴポとエスプレッソマシンが豆を焙煎している音が聞こえる。

暫くして、零が戻って来た。その手に週刊誌を持って。

そのまま俺の向かい側。同じ人。がけ用ソファに座った。

「聞いたよ。金一さんの一件。大変だったよね」

「慰めの言葉を言う為に、俺を部屋に入れたのかよ」

零はパラパラと、持ってきた週刊誌を確認するように眺める。兄さんを非難した記事だ。

そんな不快なモノを俺に見せないでくれ。

「しかし、マスコミも言いたい放題、やりたい放題だね。金一さんは命懸けで、乗客を救ったというのに」

やめてくれ。

俺の気持ちをつゆ知らずか、零は記事を見せてくる。

「金一さんも災難だね。正義の味方が、これでは悪党みたいだ」

「ヤメロヨ」

俺は自分でも驚くほど、低い声が出た。

それ以上、兄さんを侮辱するな。

「まったく、金一さんは大変だね。自分がちよつと行方不明になつたくらいで、凹むような金次君をーダメな弟を持つてさ」

「やめろつて言つてんだらうが!!?」

俺は思わず、零の制服の襟を掴みそうになつたが、寸前の所で思い留まつた。

「ねえ、金次君。金一さんは死んだと思うかい? 船が沈没したくらいで、ましてや、逃げ遅れるようなヘマをするような武偵だと思ふかい?」

ーやめろ。やめてくれ。お前まで兄さんを侮辱するののか? 俺の相棒であるお前が。

「はあー、後輩の鏡であるプロの武偵が、あの体たらくでは、未来ある武偵の今後が心配だね。まったく、あのクソ武偵は……」

「それ以上兄さんを侮辱すんじゃないやねえ!!? 俺の敬愛するあの人をー正義の味方を悪く言うな!!?」

「だったら……生きてるつて、信じなよ!!? 君の大好きな兄さんを!!? 君が両親を失つて、失意のどん底にいた所を救つてくれ正義の味方をさ!!?」

零のその言葉を聞いて、俺はナニかを撃ち抜かれたような錯覚を覚えた。

「今なんて言つた? 生きてるつて…… 待てよ。俺はいつから兄さんが死んだと思つていた?」

「金次君。今、この瞬間、最も金一さんを侮辱しているのは君だよ」

「なんでそうなるんだよ!!? 俺がいつ兄さんを侮辱した!!?」

俺が兄さんを侮辱するなんてあり得ない。侮辱しているのは、世間の方だ。

「君が自分のお兄さんをー遠山 金一を死んだと勝手に決めつけて、それで終わろうとしている。それは金一さんにとって最大の侮辱だよ」

零の言葉に俺は何も言い返せなかった。黙って聞く事しかできなかった。

「マスコミが、世間が何だ!!? ナニが『遠山 金一は死んだ』だ!!? そうやって弟である君が、勝手に解釈してしまつたら、金一さんはー君のお兄さんは本当に死んでしまうじゃないか!!?」

零は、自分と俺との間にあるテーブルをバァン!!?と手で叩きつける。

その動作に俺は活を入れられた。同時に目が覚めたように思えた。

「そうだ……俺は兄さんを……あの人を死んだと勝手に解釈していた。しかし、搜索はされたが、兄さんは発見されなかったんだぞ」

「死体は上がったのかい?」

「いいや……上がったくない」

俺の一言を聞いて、零は「ふむ」と言い、何処からかパイプを取り出し啞えたーツヤのある黒いパイプで『M』と金字の刻印がしてある。

おいっ! お前、未成年だろうが! 何で平然と吸ってやがる。いや、この匂いは精油か。

そのまま、パイプを吹かしながら、ソファアの肘掛け部分をトントンと指で叩く。これは、零が思考している時に見られる癖だ。

「カオスのカケラを再構築してあげよう」

「突然どうした？ 頭でも打ったか？ それとも変なモノでも食ったか？」

零がワケの分からん事を言い出した。カオスのカケラを再構築って、何だよ。本当に何があった？

俺は考えられる限りの事例を上げる。

頭を撃たれるーコイツなら撃たれるへマはしないな。

変なモノを食べるーコイツは昔から変なモノを平然と食う。

うっ、こいつの手料理を思い出すと胃が……

!??

ダメだ。分からん。

「何か前に、りこりんが私のパイプを見つけて、謎解きするときはコレを啜えて、さっきのセリフを言ってほしいってさ。リクエスト通りにしてあげたら、大爆笑してたね」

理子…… お前、零に何を吹き込んだ？ 大方、アニメの台詞だな。

それと謎解きだと？ どういう事だよ。

「なあ、零。謎解きって、あの事故に何か思う事があるのかよ？」

「そもそも事故という前提が間違っているのだよ」

零は一旦、言葉を区切り「フウ」とパイプを吹かす。その姿は、どこか優雅さを感じさせる。

吹かし終わると、再びパイプを咥えながら、週刊誌を眺める。

「沈没の原因は機関ローエンジントラブルとあるが、大嘘だね」

「大嘘って、警察が調べたんだぞ？嘘ついて何になるんだよ」

「今の時代、エンジントラブルで船が沈没するなんて、そうそう起きるモノじゃない。沈没の原因の大多数を占めているのは、他船との接触なんだよ」

零はソファロー近くロー隣にあるテーブルから一冊のファイルを俺に寄越した。何だコレは？

俺は零に断りをいれてから、ファイルを開く。

それは近年、起きた船舶事故を纏めたモノだった。

零の言う通り、船舶事故ロー特に沈没は他船との接触が原因だ。

「これが何の証明になるんだ？いや、まさか………！」

「君も私と組んだおかげで、少しは頭を使えるようになったようだね。関心関心」

零は「ふふふ」と笑ってみせる。

うるせえ、大きなお世話だ。

「あれはただの事故ではなく、故意に起こされた事件だったのか」

「その通り」

俺が閃いた可能性を伝えると、零はコックリとうなづく。

「私の推理いや、分析では、船体の外板——船底それも浮力タンクに近い部分に、風穴を開けて沈めたんだろう」

今、推理じゃなく分析に言い換えたな。そこは素直に推理つて、言っておけよ。こいつは何故か推理という言葉を使ったがらない。

「浮力タンクは、その名前の通り船体を海に浮かせる役目を果たす。そこを……ペア——」

零は手をグツと握り、パツと開く。コレは爆弾を表現しているのか？

「一体誰が船を沈めたんだよ？沈めて何になる？まさか、クルージング会社が保険金目的で、沈めたんじゃないだろうな」

「まあ、悪くない例えだね。私はその会社——保険金目的で沈めるなら、7通りほど思い付くが……」

「やめろ！やるんじゃない！お前なら本当にやりそうで怖いんだが……！」

「失礼だなー、ほんの例えだよ。金次君は真に受けすぎだよ」

零はぶくつと頬を膨らまる。普段、クールな印象のコイツがこんな動作をすると、新鮮な感じがするな。つて、今は見惚れている場合じゃない。



「その一つ、シージャックがポピュラーだね」

「シージャックつて、船を乗っ取ってどうするんだ？ハナつから、船を沈めるつもりなら、余計な手間だろう」

「シージャック、だからこそだよ。だだの事故なら会社に責任があるけど、船が乗っ取られ、オマケに沈められたなら、その船主も立派な被害者だ。正規の手順で、保険会社から保険金が支払われる。さらに、沈没の責任をシージャック犯に向けられるし」

「なら、クルージング会社が沈没させたのか……！」

保険金の為に、そんなくだらない理由で俺の兄さんを……！！

俺はクルージング会社を憎悪しそうになった。

「早とちりしないでよ金次君。件のクルージング会社は白だよ」

「何でだよ」

「まったく、のび……金次君、君は実にバカだな」

「やめろ。あと、完全にド○えもんの声で喋るな」

そのセリフ、久しぶりに聞いたぜ。オマケの前に比べて声も似せてよ。あと、のび○君はバカじゃないぞ。勉強は兎も角、あの射撃の腕は、武偵として尊敬する。

「白だと思ふには、何か証拠があるのか？」

俺の問いかけに、零は「これだよ」と週刊誌『』それも、クルージング会社の声明文が書かれた記事のページを開いて、俺に渡してきた。

こんなモノ、見たくもないが零に進められ、仕方なく読んでみる。

案の定、そこにはクルージング会社の保守的な、声明文がダラダラと書かれていた。これが何の証拠になるんだよ？

「その声明文が証拠だよ。そこには『我が社は悪くない。事故の責任は遠山武偵にある』と書かれている」

「だから何だよ。早く言えよ」

「まったく君は……少しは頭を使えるようになったと、私は思ったのに……やれやれ」

零は欧州人がやるような『困ったよポーズ』をする。

ぐっ！ムカつくが、非常に様になっている。

「クルージング会社は『事故』と言っているー自分たちが責任を負うことになる事故とね」

事故……そうか！

「自分たちが賠償責任を負う可能性があるにも関わらず、事故と認めている」

「さつきも言ったように、沈没の責任を取りたくないなら、シージャック犯ー第三者に

よる犯行にしてしまえばいいのに、会社は金一さんに責任を押し付けている。これだと、世間から無責任だと罵声される上……」

「事故だと保険金は下りても、会社としての信頼を失う。しかし、第三者による犯行なら会社も被害者なワケだ。これなら世間からの信頼も、そこまで落ちないし、保険金も下りる——事故と認めている事が証拠なワケか！」

逆転の発想とは、まさに零に似合う言葉かもな。事故そのものを証拠にしてしまうなんてな。

「クルージング会社が白だって事は分かったが、誰が沈没させたんだよ？会社に恨みのあるヤツか？」

「ふーむ、恨みね…… 違う気がするね。クルージング会社はコレといった事故……」

ああ、勿論、この事件の前の話だよ——事故はなかったし、会社内・接客でトラブルなし、船体調査・造船過程での事故もなし。誰かに恨みを買われる事はしてないね。あと、脅迫文・怪文章の類もなし…… それから」

零は長々と語る。

「お、おい。いつから調べたんだよ？事件があつたのは、1週間前だぞ」

いくら何でも知りすぎだ！一体、いつから調べていたんだ？

俺の疑問——反応を見て、零は啞えていたパイプを離し、

「金一さんが行方不明と知った時——私の銃を褒めてくれた素晴らしい人がさ」

零はホルスターから、愛銃であるウエブリー・リボルバーを抜く。

もう一方のホルスターにも拳銃があるぞ。そっちは抜かないのか？俺は、もう一方のホルスターに納められている銃を見る。

グリッブからして、その銃は……兄さんと同じコルト・シングルアクション・アーミーじゃねえか。色は兄さんのシルバーと違いブラックだ。

「私ね、ウエブリー・リボルバーが好きだよ。でも、一部の人から時代遅れだって、言われて他の銃に替えようかな思っていた時期があるんだ」

「……それで？」

「丁度その頃、金次君の実家で金一さんにあっただじやない」

ああ、前に『脳の疲労』で眠りについた零を実家に運んだ時の事か。

その時、兄さんにあつて話をしたんだっけな。特にリボルバー関係で、兄さんと盛り上がったのを覚えているぜ。

「でね、金一さんが私の銃を見て『個性的で素晴らしい銃だ』って、褒めてくれたんだ。あの時、初めて自分の愛銃が褒められて、嬉しかったな。それから、私はこの銃が、さらに大好きになったんだ」

零はウエブリー・リボルバーを愛おしく撫でる。

「そんな大恩ある人が、人命を救ったのに関わらず、罵倒されるのは許せないんだ。悔しいのは、君だけじゃないんだよ金次君」

今度は俺の方を真っ直ぐと見つめるルー強い意志を秘めた目だ。思わず、マジマジと覗き込んでしまった。

「ハッキリと言うよ。コレは事故じゃない。第三者が犯した事件だよ。それも恨みなんかじゃないルー別の目的の為にね」

「別の目的?」

「金次君も聞いたことがあるんじゃないかい? 『武偵殺し』という犯人を」

『武偵殺し』……確か、武偵の車なんかには爆弾を仕掛けて自由を奪った拳銃、マシンガンのついたラジコンヘリで追い回しルー海に突き落とす。そんな手口のヤツだったか。

「兄さんが、『武偵殺し』に狙われたって言ったのか!?? でも、『武偵殺し』がシージャックするなんて、聞いたことがないぞ」

「君は知らないだろうけど、日を増すごとに『武偵殺し』の犯行はエスカレートしているルー付いて来たまえ」

零はソファアールから立ち上がり、リビングから出て行った。俺はその後を追う。

案内されたのは、別室の前だった。

零はドアノブに手をかけ、「どうぞ」とドアを開けて、俺を入れる。

部屋の中は、リビング以上にごちゃごちゃだった。

壁や天井、床にいたるまで地図で埋め尽くされていた。さらに、目を引いたのが、地図には……その国で起こった事件だろうか？——事件の詳細・犯行現場を撮らえた写真・人物画・新聞記事が貼られ、それらは、青い糸で繋がっていた。

「驚いた？ コレはね私が作った事件の関係図——通称『蜘蛛の巣』だよ」

「関係図って、事件を結びつけて共通点を見つけ出すってヤツか？」

「その通り。因みに、この部屋を訪れたのは金次君が初めてだよ」

零はニコツと笑ってみせる。

おい、何で笑うんだよ？ 俺を招き入れたのが、そんなに可笑しいのかよ？

「これをご覧よ」

零はトントンと『蜘蛛の巣』のひとつつを叩く。

俺は近づいてみる。コレは『武偵殺し』に関する事件か！ 目で追っていく。

事故つてことになっているだけで、実際は『武偵殺し』の仕業で、隠蔽工作されているヤツもある。よく調べたな。

「この図を見ていくと『武偵殺し』の犯行は、零の言った通り、エスカレートしているな…… 自転車——バイク——車そして…… 船か」

最後にアンベリール号の沈没に行き着いた。

「本当に兄さんは『武偵殺し』に狙われていたのか？ 模倣犯の仕業って事も」

「いいや、それは無いね。用意周到な手口・犯行計画など挙げられるモノからして、模倣犯ではない」

「コイツに兄さんは……」

俺は『武偵殺し』に対し、煮えたぎるような怒りを覚えた。

「待ちたまえ。まだ、お兄さんがやられたとは限らないよ」

「やられたとは限らないだ？ それに死体が上がっていないからか？」

「金次君。君にとってお兄さんはどんな人だい？」

「イキナリ何だよ？」

俺が疑問に思うと、「いいから、答えて」と急かす。

「俺にとつて兄さんは……正義のヒーローさ。誰よりも真つ直ぐで、カツコイイ理想のヒーローだ」

「そんな敬愛する正義のヒーローが、『武偵殺し』みたいなチャチな小悪党に負けると思ふかい？ ましてや、命を取られるなんてヘマをさ」

零の言葉で、俺は兄さんの姿を思い描く。

兄さんは強い——俺なんかよりも。誰よりも義に生きる人で、遠山家の長男。俺の兄だ。俺の憧れたヒーローだ。

「そうだよな…… 兄さんが、遠山 金一が死ぬワケがない」

兄さんは生きています。きつと、何処かで必ず。今は、何か理由があつて姿を現すことができないだけなんだ。

「行方不明＝死んだというワケじゃない。君のお兄さんは生きています」

「それは推理によるものか？ お前のお墨付きなら、信じられるぜ」

「いいや、勘だよ」

つて、勘かよ!!? 推理だと期待したのに…… 俺は思わずガツクリとする。

「そんなにガツカリしないですよ！ 私が勘に頼る事なんて、殆ど無いんだよー！ 今回、頼つたのは、金一さんの件が初めてさ」

「いつもの分析じゃなく、何で勘なんだよ？」

「…… 内緒」

零は口到人差し指を当てる。そこは言えよ。

すげえ気になるぞ。

「しかし、『武偵殺し』が兄さんを襲つた事に間違いない。乗っていた船を沈められたんだー！ 少なくとも兄さんは遅れをとつた」

「何か不安そうだね。言つてご覧よ」

「…… そんな相手に勝ち目はあるのか？」



俺が問いに、零は「ふっ」と不敵に笑い、  
「ゼロじゃないさ」

ハッキリと言いつつ切った。

ゼロじゃない。勝ち目がある。まだ、望みはあるってことか。

「君は一人で『武偵殺し』と戦うみたいだけど、それじゃ勝ち目はない」

そう言つて、零は右手を差し出してきた。

「何も全て抱え込む事はないよ。私もいるよ？私も一緒に戦わせてよ。なんたつて相棒だからね」

「ははは、まさか有料じゃないだろな？」

「相棒だから無料にしてあげるよ」

「ここで有料なんて言われたら、ズッコケていたな。こいつのギャグはシャレにならん。」

俺は零の手を取った。

「よろしく頼むぜ相棒」

「任せてくれ相棒」

お互い笑顔で握手した。

この時、俺は零と初めて本当の相棒になれた気がした。

こいつとなら、どんな事件でも乗り越えられる。待っていてくれ兄さん。あんたの仇は俺と零が捕まえる。

—————

スイス　ライヘンバッハにて

大きな滝があつたーライヘンバッハの滝だ。

シャーロック・ホームズとジエームズ・モリアーティの最終決戦の舞台として、知られている名所だ。

そんな断崖絶壁の上に2人の男女がいた。

滝からの水飛沫でお互い、びしょ濡れに関わらず、

『零!!?お前は間違っている!』

『なんで分かつてくれないの!!?間違っているのは……君の方だ!!?』

銃を構え、そして、パァン!と2つの銃声が轟音にも関わらず、滝に響いた。

## 武偵殺し

## 新学期の始まり

東京 目黒区にある某教会――

「…………… あたのお話は分かりました」

私は懺悔室の一室――網目状の小窓を挟んだ向こう側で、ある人物の”相談”に乗っていた。

相談相手は40代の男性。無精髭を生やし、着ているシャツとズボンはヨレヨレ。白髪交じりの頭にヒドく痩せている。予め年齢を確認していなかったら、50歳と思っていたかもしれない。

「たとえこれで、命を落とす事になっても構わないと?」

「勿論だ。どの道この体は不治の病に侵され、もう長くない…………… 私の望みは、ただ一つ…………… ツ」

男はキツ!と顔を上げ、

「奴にこの地獄の様な苦しみを味わわせる事が出来るなら、私の命など…………… !!?」  
ハッキリと言いつ切った。

命など惜しくないー覚悟があるようだ。

「計画は追って伝えますので、連絡をお待ちください」

私がそう伝えると、男は教会から去っていた。

某教会から離れた場所ー西大井広場公園

朝の公園には、ジョギング・ラジオ体操する人がいる。

私はベンチに座って、いつものアレーー野生の鳩に餌をやっていた。

本当は学園島の鳩にやりたいが、然程変わらないだろう。

最近、鳩の餌やりは糞などで問題視されているが、ここでは問題視ー餌をやる私に注意してくる人間はいない。

座りながら手帳を開いていると、

「おはようございませす。主」

「グットモーニン!!? モリちゃん」

私の前にモランとアップルがやってきた。

モランは肩に狙撃銃のケースを担いで、不動の姿勢だ。それに対して、アップルはビシツと手を上げ、挨拶してくる。

ハハ、アップルは朝からテンションMAXだねー。

「主。間も無く、学校の始業式が始まります」

「おっと、そうだったね」

今年ーこの春から私は2年生になる。一般中出身の私が武偵高で一年を生き残ったのは、奇跡いやモラン達のおかげかな。

専門科目は去年と変わらず、探偵科だ。

「モランは今年で高校一年生。私と同じ校舎で学ぶから、顔を見せにこれるね」

真新しい純白のブラウス。臙脂色の襟とスカートを着たモランに言う。

モランは今年で高校一年になった。専門科目は中学と同じく狙撃科を選択している。因みにランクはBだ。少し低いと思われるが、モランの狙撃の腕は余裕でAランクを超える。しかし、Bランクに留めさせたのは、私が指示したからだーその方が都合がいい。

モランも今年で高校生か、あつという間だね。つて、私は母ちゃんか!!?

「はい……ボソ（主に堂々と会いに行ける!）」

うん?モランが何か言ったような気がした。おまけに顔が少し赤い。熱でもあるのかい?

「ねえねえ!モリちゃん。因みに私は?」

アップルがクルリとターンして見せた。

モランと同じ純白のブラウスと臙脂色のスカート。神奈川武偵中の制服だ。

アップルには、今年から武偵として編入してもらったー専門科目は特殊捜査研究科（CVR）を選択している。この時期に編入はおかしいと思われるが、武偵中ならスナリと編入できた。

勿論、アップルー編入には別料金を払ったけどね。そこはしっかりとしている。

「うん。可愛いよアップル」

制服はアップルの改造だろうー袖やスカートにはフリルが付いている。えーっと、何だっけ？前にりこりんが言ってたな……甘ロリだっけ？

「ありがとうモリちゃん！いやー改造した甲斐があつたよー」

改造ね……一般の学校では制服改造は禁止されているけど、そこは武偵の育成機関だから……ね？

「それはそうと主。例の相談者……アップルの情報網で見つけて来たそうですか……信頼できそうですか？」

モランがいつものキリツとした顔に戻っていた。

イケメンだね。その顔なら女子ー特に年下と同年代ならイチコロだよ。

相談者……ああ、彼の事か。

「私の情報網と観察眼に狂いなし!!?じつちゃんの名に懸けて!!?」

アツプルは顔の横にVサインしながら、元気良く答えた。  
じつちゃん…… 某高校生探偵のセリフか。

最近、アツプルは日本のアニメにハマってしまったーそれはもうドップリと。  
休日にはよく秋葉原に行っている。

「アツプル。私は主に質問しているのです。少し静かにして下さい」

「そんな!!? ヒドイよ!!?」

モランに注意され、アツプルはガーン!!?とショックを受けた。

「彼はとある実業家に対し、強い恨みを持っている。しかし、相手が雇っている武偵の警備は嚴重…… 近づく事すら出来ず絶望している。死期も近く、天涯孤独の身。この世にもう復讐以外の未練なんて無いんだよ。そういう人間は信頼できる」

私は相談の為、教会に訪れた男について語る。

死が近い人間ー特に復讐に駆られた者は何でもする。躊躇や後悔だつてない。

「…… そうですか。後は例の犯罪組織の件ですか、今後の不安要素になるようなら言ってください。いつでも消します」

「私も協力するよ!!? 勿論、有料でね☆」

「アツプル!そこは無料、無理ならせめて割引と言いなさい!」

ははは、本当に愉快で頼もしい仲間だ。この子達となら何でも出来そうだ。

「ありがとうモラン、アップル。でも少し待ってね」

私は鳩たちに最後の餌をやり終え、軽く手をパンパンと叩く。

「今回の依頼とは別ー 『武偵殺し』の件を利用して、彼を試してみようと思うんだ」

「彼…… 遠山 キンジですか？」

モランが金次君を呼び捨てした。コラ！先輩を呼び捨てにしちゃダメだぞ。

気のせいかな？モランの声に憎しみと憤怒が籠っているーこのモランの様子は尋常じゃない。

金次君…… まさか、モランに手を出したんじゃないだろうね？？流石は巷で『ジゴロの金次』と呼ばれるだけはある。

「ああ、彼が適役じゃないかなー、と思っっているんだ」

「適役？何の」

アップルが答えを求める。

「私達が仕立てる犯罪を、より多くの民衆に周知する為に必要なもの」

私はベンチから立ち上がる。

「民衆がその境遇に賛同出来る、犯人、そして法律ー武偵法と人間の腐敗を世間に暴く、正義の味方。その正義の味方こそが、私達の犯罪の、主人公、なんだよ」

「主人公…… !!？」



アップルはキラキラした目で感動する。しかし、モランはチツと舌打ちしそうな顔だ。あれ？私、何か変な事を言った？

「さて、話はここまで。早く学校に行かないとね」

私はポケットから懐中時計を取り出し、時間を確認する。時刻は6時ジャストだ。車なら余裕で間に合うが、その前に……

「お伴します。主」

「あつ、ゴメンねモラン。学校に行く前に金次君の所に行かないと」

その一言でモランの顔が死んだ。

「何故……ですか？」

「いや……だってね、金次君、お寝坊さんだから、誰かが起こしに行かないと、遅刻するからさ。始業式に遅刻とか、後輩に示しが付かないでしょう？」

金次君は本当にお寝坊さんだ。私の推理いや、分析では目覚ましをかけ忘れ、おまけにトランクス一丁で寝ているだろう。

そんな金次君を心配して幼馴染の白雪さんは、昨日から伊勢神宮に合宿しているだろうー金次君を起こしに行く為だけに。

白雪さんなら絶対にやるー私の全財産賭けてもいい!!？

「そう言う訳で、金次君の様子見がてら男子寮に行ってくるよ」

私は公園の外に止めてある愛車——ポルシェ356aの所に向かう。

向かいながら、私は金次君と白雪さんの朝のやり取りを考える。

白雪さんの事だから、起こしに行くだけじゃなく朝食も持って行く。メニューは、玉子焼き、エビの甘辛煮、銀鮭、西条柿あたりかな。

まだ確定じゃないが、豪華食材だ——運動会にでも行くのかな？まあ、これくらい去年からやってたし、今更、金次は驚かないだろう。

「モリちゃん！行ってらっしゃい！」

「お気をつけて主……」

アツプルとモランに見送られながら、私は公園を後にした。

モランが泣いているような気がするが、気のせいだろう。

別視点——

「いや〜朝から良いモノが見れたね、モランちゃん！アレは、もうデキてる〜ね☆」

「……」

アツプルが某魔法師アニメの猫の様な声で喋るが、モランは何も答えない。ただジツと立っているだけだ——その姿は豪傑武蔵坊弁慶のようだ。

「……してやる」

「えっ? 何だつて? モランちゃん。おーい」

アップルはモランの前に移動し、背伸びすると彼女の目前で手を振る。

「駆逐してやる……!!? この世から……一匹残らず!!?」

モランの顔は憤怒していた。目には悔し涙を浮かべ、はるか向こうー男子寮がある方角を眺めていた。

「それ進撃の○人じゃん?!? モランちゃん知ってたんだ」

アップルはモランが某アニメのセリフを知っていた事に感心した。

モランとアニメについて語れると思ったが、

「因みに何を駆逐するの? あと、所属は何処にする? 調査兵団? それとも……」

「遠山キンジを駆逐してやる……!!? 主に近づく悪いムシめ!!?」

「いやいや?!? 駆逐したらダメだつて!!? それにキンジは、1人しかいない! もし駆逐しちやったら、モリちゃんの計画が狂っちゃうよ!!?」

ズカズカと走って行くモランを、アップルは慌てて止める。

「ここで止めないと本当に駆逐するイキオイだ。」

「退けええええええ!!? 私は……主を助けに行くのだああああああ!!?」

「ここを通りたければ、私の屍を超えてからにしる!!?」

アップルは冗談半分でモランに対し、通せんぼするが、

「ならば超えてやる!!?」

モランは肩に担いだ狙撃銃に手を掛けた!

「ちよっ!!?待っ……!」

アツプルは慌てて、臨戦態勢に入った。

2人の女子が公園のど真ん中で、乱闘を繰り広げたが、何故か騒ぎにならなかつた。道行く人は過ぎ去るし、ラジオ体操する集団は知らん顔で体操を続けた。

丁度その頃、零が愛車のエンジンの吹かし、公園から去った。

それを合図に公園内にいた全ての人間が、2人の女子の喧嘩を止めに入った。

## キンジの部屋にて

キンジ視点――

『…… 火事だあ!!?』

「うお……!!?」

俺は誰かの叫び声で、目が覚める。

今、火事だと言ったか!!? 火は何処だ!!?

俺は飛び起きて部屋を見回すが、何処も火の手はない。

『火事だあ!!? 火事だあ!!?』

枕元には無機質な目覚ましのスピーカーから、さっきの叫び声が響く。こ、これは前に、理子が無理矢理プレゼントしてきた目覚ましじゃねえか!

すぐに目が覚めるからって、押し付けられ仕方がなく使ってみたが、こんな目覚ましコールはいらねえよ。

近所迷惑なのでスイッチを押すが、

『泥棒だあ!!? 地震だー!!? 逃げる!! 借金取りだあ!!? 開ける!!?』

鳴り止み気配なし。

こ、こんな目覚ましコールしかないのか？

本体の電源を切り、時間を確認する。時刻は7時ぴったし。まあ、自分でセットしたんだし、この時間に目覚めて当然か。

……………  
ピピピ……………

キッチンからアラーム音が聞こえる。

豆と水を入れ、7時にタイマーセットしたエスプレッソマシンが、豆を焙煎し終えたんだらう。

もそもそ、とワイシャツをはおり制服のズボンをはくと、俺はキッチンに向かう。

「おつ、できてるな」

マシンのスイッチを押し、コポコポと焙煎されたコーヒーをカップに移す。このエスプレッソマシンは零の勧め（半端強制的に）で買ったが、気に入っている。

コーヒーの種類は4種。ソロ、リストレット、ルンゴ、ドツピオ。

「うん、美味い」

軽く一杯だけ飲む。

俺はリストレットを飲む事にしている。うま味がぎゅつと凝縮され、パンチの効いた濃い味だから、すぐに目が覚める。

そういうえば、前に零がルンゴとドツピオは飲まない方がいいって、言ってたな。こつ

そり飲んでみたが、別に美味いんだけどな。

コーヒーを持って、テーブルに着くとテレビを点ける。

丁度、朝のニュースをやっていた。見慣れたニュースキャスターがピックアップしたニュースを報道する。

「ますます物騒になったな……」

【豪華客船内で白昼堂々の殺人?!? 犯人は現役政治家】「ルパン復活か?!? 大英博物館に予告状届く」【米国 銀行強盗発生率UP 過去最高値】など目立つが、最近は殺人などの凶悪犯罪が増えた気がする。

それに伴い、『武偵法の改善を!!?』などの『武偵による殺傷を許可』する法案を求める声が高まるが、俺はこの法案には反対だ。

……ピーン、ポーン……

ドアチャイムが聞こえてきた。

誰だ? いや、あのチャイムの慎ましきからして白雪だな。

俺は1人で住むには広い、マンションの部屋を渡り…… ドアの覗き穴から、外を見た。するとそこに――

「ほらな」

やっぱり白雪が立っていた。いや、白雪だけじゃない零も立っていた。

2人とも純白のブラウス。臙脂色の襟とスカート。シミ一つない武偵高のセーラー服を着てー白雪は漆塗りのコンパクトを片手に、何やらせつせと前髪を直している。

零は覗き穴に満面の笑みで、イエイトピースしている。

武偵高の生徒会長と副会長が、朝から何やってんだ？

俺はガチャとドアを開けた。

零視点ー

「キンちゃん！」

寮の廊下で、案の定金次君を起こしにやって来た白雪さんが、ドアが開くなり入室した。

朝から大胆だねー突撃！朝の金次君。いや、白雪さんかな？

「その呼び方、やめろって言ったら」

「あつ……ご、ごめんね。でも私……キンちゃんのこと考えたらつい、ごめんねキンちゃん」

「まあまあ、呼び方くらい別に良いじゃない。堅いぞ金次君」

金次君を見るなり、あわあわと慌て出したので、私が助け船を出す。

「ていうか、ここは仮にも男子寮だぞ。よくないぞ、軽々しく来るのはー特に生徒会長



と副会長がな」

金次君の言う通り、私と白雪さんは生徒会に入っている。

私が生徒会長で、白雪さんが副会長だ。いやー、何故か投票で白雪さんと競う事になつたんだよね。あれは、よく覚えている。

「いやー、白雪さんが昨日まで伊勢神宮に合宿していてね。キンちゃんのお世話かできなーいって、言うから面白そうだと思つて来ちゃつたよ」

「ちよ、ちよ、ちよつと零さん！それは私が……言おうと思つたのに!!？」

白雪さんが顔を真っ赤にして、狼狽し出した。

白雪さんは本当にイジリ甲斐があるね。もつとイジりたいが、これ以上やると金次君による、地獄のツボ押しマッサージが来るから止める。

「分かつた分かつた！いつまでも廊下に居られると面倒だから、取り敢えず上がれ」

金次君の許可を得て、部屋に上がる。

「お邪魔しますーす」

「おじゃまします」

白雪さんは深あーいお辞儀をしてから玄関に上がった。そんなに畏まらなくてもいいのになー2人とも幼馴染なんだからさ。

「で、何しにきたんだよ」

「これ……」

「それくらい推理したまえよ金次君」

私はポケットからパイプを取り出し、口に咥える。精油を切らしているから、ただ咥えるだけだ。

「……白雪が持っている和布の中身は箱か？」

金次君は少し考えてから答えた。

箱——うん！正解だが、何の箱かまで言えたら80点、中身を当てられたら、100点だったね。

「白雪さん」

「うん。これ……キンちゃんに作ってきたの。よかつたら食べて」

白雪さんは正座すると、持っていた和布の包みを解いた。

そして出てきたのは漆塗りの重箱を金次君の前に差し出すと、フタを開ける。

そこには玉子焼き、エビの甘辛煮、銀鮭といった豪華食材と、白く輝くごはんが並んでいた。

「おおー、私の分せ……待って。西条柿がないぞ。」

「ねえ、白雪さん。本当なら西条柿も入れるつもりだったんじゃないかい？」

「うん、そうだよ。よく分かったね零さん。最初は入れるつもりだったけど、丁度切らし

ちやつてて……」

「そんな事、どうでもいいだろう。まあ、取り敢えず……ありがとうな白雪」

金次君は照れ隠し丸出しで、白雪さんにお礼を言う。白雪さんは「うん！」と嬉しそうに笑った。

どうでも良くないよ!!? 私の分析があああ!!? 私の賭けた全財産がああああああ!!?

あつ、一人で勝手に決めた事だし、どうでもいいか。しかし、外れることがあるとは……

私もテーブルに着き、白雪さんの料理をパクパクと頂く。うん！美味しいねー特に玉子焼きが。今度、私も挑戦してみよう。

「つて、お前も食うのかよ」

「別にいいじゃない。白雪さんには許可を得ているよ」

チラツと、白雪さんを見てみると正座したまま、蜜柑を剥き始めた。

「…… えつと、いつもありがとうな」

「キンちゃんもありがとう…… ありがとうございます」

「ははは、なんで白雪さんがありがとうなんだい？あと、三つ指ついていると、土下座しているみたいだよ」

「だって、キンちゃんがお礼を言ってくれたから……」

白雪さんは嬉しそうに顔を上げ、目を潤ませている。そんなに嬉しかったんだね。

そんな白雪さんを見て、金次君は慌てて目を逸らした。

原因は白雪さんのセーラー服の胸元、ちよつと緩んで開いて見える黒い、レースの下着だろう。

黒だと！さては、私の真似したな。胸元を開けるのも真似るとは、白雪さんに悪知恵が付いたね。関心関心。

金次君は白雪さんから逃げるように、その場から立ち上がる。

ここでヒスつたら面白い事になってたのに。

「金次君。今日からみんなで2年生だね。はい、防弾制服」

「ありがとうよ零。つて、俺の銃がねえぞ」

「いっただよ」

私はテーブルの下から金次君の拳銃を取り出す。

テレビの脇に無造作にあった拳銃を盗んでおいた。白雪さんに見惚れている間にね

♪

これはアップルから学んだ技術だ。

「武偵たるもの『拳銃と刀剣の携帯を義務づける』だよ」

「悪かったな。ほら、返せ」

金次君は私の手から拳銃を取ろうするが、私はヒヨイと躲す。

「君は、昨日の夜、疲れ果ててましたね。服を脱ぎ散らかし、拳銃も適当にテレビの側に、そして、お風呂ついでに歯を磨き、水を飲んだ後、そのままトランクス一丁でベツトに入りましたね。うふふふふ」

私は古畑任三郎風に答える。

「何で分かるんだよ」

私はリビングに脱ぎ捨ててある服とキッチンに目をやる。

「床に脱ぎ捨ててある服は見たところ、昨日のモノ。テーブルから始まりリビングの外一風呂場で終わっている。脱いで風呂場に向かったのは明白。キッチンの炊事場にはコップが一つ。洗っていないところを見ると、大して汚れない一水を入れていた。私達を出迎えるために、寝間着からシャツに着替えた様子がないところを見て、トランクス一丁で寝たのは明白だよ」

「キンちゃんか……下着一枚で……」

私が分析結果を語り終えると、聞いていた白雪さんは、顔を真っ赤にしていた。大方、金次君のトランクス一丁姿を想像したのだろう。

「あー、そうですよ！推理通りですよ！クソつたれ！」

「凄いね零さん。流石、キンちゃんの師匠だね」

「待ってよ白雪。俺はこいつの弟子になった覚えはないーまあ、探偵科に転科したけどよ」

金次君は今年から、正確には去年の12月の下旬から探偵科に転科した。私が勧めたのだ。

探偵科に転科した金次君は本当に教え甲斐がある。

『武偵殺し』を追うために、探偵科の捜査技術を身につける為だものねー」

「でも、零さん。その『武偵殺し』は逮捕されたつて……」

白雪さんの言葉に金次君は、グツと悔しそうに握り拳を作る。

白雪さんだけじゃなく、金次君にも届いていたかー『武偵殺し』は逮捕され、模倣犯が現れたという偽情報が…… 本当は模倣犯に成りすましているのが、本命なのですね。

「それは違うよ白雪さん。『武偵殺し』は逮捕されていない」

「えっ、でも教務科から周知メールが来たよ？『武偵殺し』は逮捕されて、模倣犯が現れた警戒せよつて」

「そうだけ零。『武偵殺し』はもう逮捕された…… 代わりに『武偵殺し』を語る模倣犯は現れたがな」

「まったく、教務科からの情報をそのまま信じるなんて、金次君と白雪さんはピユアだね」

私はパイプを咥え、

「カオスのカケラを再構築してあげよう」

「ねえ、キンちゃん。零さんどうしちゃったの?」

「あー、白雪。気にするな」

そんな事を言わないでくれよ金次君。君も探偵科なら分かるでしょう?

このネタは探偵科ー金次君以外には大ウケする。りこりんはお腹を抱えて爆笑してくれる。

みんながウケる中、りこりんはドサクサに紛れて、私に鹿撃帽を被せようとしたっけ。その時、私は思わずりこりんの後方から、腰に腕を回してクラッチしたまま、後方に反り投げてーリジャーマン・スープレックスをくらわせてしまった。

あの場にいた探偵科のみんなは呆然としてたっけ。

りこりんは脳天を抱えて「ぬーごおおおおお!」と唸り、のたうち回ってたな。本当に悪い事をしてしまった。

「ナンタラを再構築中、悪いんだが時間だ。そろそろ出ないとヤバイ」

金次君に言われ時刻を確認すると、いつの間にか7時55分になっていた。しまっ

た…… 分析結果を報告し過ぎたかな。

これでは、金次君と白雪さんは58分のバスに間に合わないね。

「それは悪い事をしてしまったね。再構築についてはまた今度話そうか」

私はスツと立ち上がり、

「時間を取らせてしまったお詫びに、学校まで送っていくよ」

「学校までつて、零さん車で来たの？」

「白雪は知らないのか？こいつは一丁前にも、ポルシェに乗ってやがるんだ」

「ドイツのアマガエルも偉くなつたねー。金次君に嫉妬されて」

「うるせえ。俺は自転車で行かせもろう」

強情だね。自転車では行かない方が身の為だよ。お兄さんの仇も打てぬまま、木っ端微塵にはなりたくないだろう？

ここに来る前、金次君の自転車を調べたが、サドルにプラスチック爆弾が仕掛けられていた。十中八九、『武偵殺し』だろう。このまま、金次君を囮にして『武偵殺し』のシツポを掴むのもいいが、金次君は囮に使いたくはないんだよネ。何故だろうか？

まあ、このまま『武偵殺し』の良いようにさせるのもイヤだし、爆弾は此方の方で、有効的に使わせてもらおうがネ、

「そんな事を言っちゃダメだよキンちゃん。折角、零さんが送ってくれんだし、お言葉に



「甘えさせてもらおうよ」

「まあ、白雪が言うなら別にいいけどよ……」

白雪さんの説得に金次君は折れた。ふふ、金次君は白雪さんに弱いね。さては、白雪さんを遅刻させたら悪いと思っただな。

「それじゃ、三人で学校に向かいますか！」

そのまま、三人で部屋を出ると、寮の外に止めてある私の愛車に乗り込む。

——生涯、私はこの時間帯に車で学校に向かったことを悔やむだろう。

何故ならこの後、空からあのピンク頭が降ってくるのだから。

神崎・ホームズ・アリアが。

## 空からアイツがやって来たーピンクの悪魔が

零視点ー

私の推…… あー、もう推理でいいや。に、付き合わせてしまった金次君と白雪さんを愛車に乗せ、武偵高に向かっていた。

窓の向こうには、海に浮かぶような東京のビル群。

武偵高校は、レインボーブリッジの南に浮かび南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形をした人工浮島の上にある。

そんな浮島を車を走らせながら、私達は眺めていた。

「いやー、こうして車で通勤ならぬ通学するのもいいね。特に大好きな学友達と一緒にね」

私は助手席に座る金次君、後部座席に座る白雪さんに声をかける。

金次君はブスとした顔で、少々不機嫌気味ー見ていて可愛い。

白雪さんは、初めて私の車に乗ったのか、少々緊張気味だ。

2人ともシートベルトはしている。安全第一だからね。

「本当にありがとうね零さん。車まで出してもらって」

「お前が謝る必要はねえよ白雪。自分の推理に付き合わせたコイツに責任がある」

そんな事を言うなよ金次君。君も探偵科に転科したのだから、人前で推理を披露する時が……ダメだ。金次君が「犯人は貴方だ」という光景を想像しただけ笑えてくる。ぷぷぷ

笑いを堪えるあまり、ハンドルを持つ手がプルプルと震える。

手に力が入らない所為か、車が車線をはみ出た。

「危ねえ！おい、零!!?車線はみ出てるぞ！戻せ！」

「えっ?どうしたのキンちゃん?」

金次君が助手席で叫ぶ。

その声には私は、ハンドルを切って車を車線に戻す。

うお！危ない危ない。セーフ。

「危なかったー」

「危なかったじゃねえよ！思い切り車線を超えてたじゃねえか。お前、本当に車の免許持ってるのか?」

「失礼な！私は武偵である以上、武偵免許で車の運転はできます。因みに車の運転は武

藤君仕込みだよ♪」

最後に「てへ☆」と付け加える。

懐かしいなく車の運転の際、武藤君が教えてくれたつけ。武藤君だけじゃなく、車輛科のみんなが教えてくれた。

「間違ってもアイツー武藤の様な運転はするなよ？俺だけじゃなく白雪も乗ってんだからな」

「零さん武藤君から運転を習ったの？そうなんだ……安全運転でね？」

気のせいかな、後部座席にいる白雪さんが冷や汗をかいている気がするね。さては、去年の海水浴の事件を思い出したんだね。アレは、アレでいい思い出と思うけどね。

思い出に耽っていると、車は探偵科の専門棟を横切った。

探偵科一ー私は高一の1学期、金次君は3学期から入った所で、古式ゆかしい推理学や探偵術を学ぶ。

その先にあるのが通信科、さらに向こうが鑑識科、この辺りはよく私がお世話になっている専門科棟だ。

そうしてもう少し先には、去年まで金次君が在籍していた強襲科がある。私は体育館に向かつて、車を走らせた。

よし、この調子なら始業式には間に合いそうだね。1学期の始業式に生徒会長の私と、副会長の白雪さんが遅刻したら何だからねー

「その 車には 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

奇妙なーツギハギにしたような声がした。

「何なの今の？キンちゃん何か言った？」

「いや、俺は何も言ってるねえぞ」

金次君と白雪さんは辺りをキョロキョロする。すると、

「車を降りやがったり 減速 させやがると 爆発 しやがります」

再び、妙な声が聞こえた。

あつ、これはあれだね。ネットで人気のボーカロイドじゃん。りこりんやアップルが好きだったね。

りこりんとカラオケでボーカロイドの歌と一緒に歌ったけ。

私が「初音〇クの消失」をフリ付きで歌ったら、携帯で動画撮りまくるし。

そんな過去を振り返っていると、聞こえたセリフの一部を思い出す。

爆弾……ねえ？

私はこめかみに右手を添えて思考していると、私の愛車にはいつの間にか妙な物体が併走していた。

車輛を2つ平行に並べて走る、カカシのような乗り物『セグウェイ』だ。

「助けを求めては いけません。ケータイを 使用した場合も 爆発 しやがります」

セグウェイは無人で、スピーカーとレーザー基の自動銃座が載っていたUZIだ。秒速10発の9ミリ弾を放つ、イスラエルIMI社の傑作短機関銃だ。おおくいい品物を持っているじゃないか。

「なっ……何なのコレ。怖いよキンちゃん……」

「落ち着け白雪。くそッ！誰のイタズラだっ！」

白雪さんは金次君に助け求める。後部座席で震える白雪さんを宥め、金次君は叫ぶが状況は変わらない。

「どうやらカージャックのようだね〜」

「何呑気に言ってるやがる。コッチには白雪がいるんだぞ」

「キンちゃん……！キンちゃんが……私のこと……心配してくれた」

金次君は後部座席の方にチラツと目をやる。

どうやら白雪さんが心配なんだね。おや、白雪さん。顔を赤くしてどうしたんだい？心配されて嬉しいのかい？

「どうする零。このセグウェイが言うには減速するなって……」

「うん。よって私は運転に集中するしかないね。まあ、取り敢えずは……ねえ、君！」

私は運転席の窓一併走するセグウェイに向かって叫んだ。

私達の様子を観察する為だろうレーザーカメラが仕掛けてある銃座部分をジッと見つめ

ながら話す。

話しかけられるとは思わなかったのかーセグウェイが一瞬、動揺したように見えた。

「君は減速させたり、車を降りたり、ケータイを使用したら爆発させると言ったね？爆弾を探したりするのはO U Tかい？」

「なっ!? 何でカージャック犯に聞いたんだよ!?？」

「そ、そうだよ零さん！あ、危ないよ……！」

「別に『話しかけたら爆弾させます』とは言っていないし大丈夫だよ。ねえ！どうなんだい？爆弾を探すのはS A F E？それともO U T？」

私は相手の回答を待つ。

向こうは悩んでいるのか、返事が遅い。ただ、無言で併走し続けている。

「そんなのO U Tに決まって……」

金次君が呆れている。

「ここから、諦めるのは早いよ。よく言うじゃないか「諦めたらそこで試合終了だよ」って、監督がさ。

「S A F E で やがります」

「って、セーフかよ!?？」

セグウェイからの意外な回答に金次君が驚く。

ナイス！とても素晴らしいツコミだよ。日が増すごとにツコミに磨きが掛かっているね。

「さて、相手の承諾も得られたし、2人とも爆弾を探してくれないかい？見ての通り、私は運転に集中しないといけないからさ」

「分かったよ……白雪。一緒に爆弾を探すぞ」

「うん！分かったよキンちゃん」

金次君と白雪さんは車内を調べ始めた。

2人は車内ー座席下、ボックス、天井などを探すが、爆弾らしき物は発見されなかった。

車内に無いとすると車外か？

車外ー車体の下？ー乗る前に点検したのでNO.

エンジンに直接仕掛けた？ーこれも点検したのでNO.

ガソリンタンクに仕掛けた？ー発火物を仕掛けるにはリスクがあるー電気発火で爆発するモノープラスチック爆発。

車を爆発させるなら、プラスチック爆発が相場と決まっている。朝に金次君の自転車の仕掛けられたモノと同じくらいがね。



あの大きさからして、自転車どころか自動車でも跡形なく吹き飛ばせる。金次君がターゲットだったとしても、過剰すぎるね。もつと効率のいい仕留め方を伝授したいよー 『武偵殺し』にね。

「この手口。白雪が言つてた『武偵殺し』の模倣犯じゃねえか」

金次君が朝のやり取りを思い出したようだ。

「どうして模倣犯が私達を狙うの？」

「いいや、これは模倣犯じゃないよ白雪さん。でしょ？ 『武偵殺し』さん」

私は再び窓の外ー併走するセグウェイに向かって話す。

セグウェイは又しても、動揺したように見えた。ははは、分かりやすいなく何だか可愛く見えてきた。

「はあ？ 何言つて…… いや、零。お前、朝も言つてたなーそのまま信じるな、つて事は捕まった『武偵殺し』は……」

金次君か思考し始めた。おっ！ どうやら、朝の私とのやり取りを覚えてくれたんだね。

「捕まったヤツは替え玉か…… 模倣犯が本物の『武偵殺し』か？？」

「正解だよ。その『武偵殺し』が正に私達を狙っております！ 拍手」

私は場を和ませるつもりでギャグを言ってみたが、シーンとしていた。白雪さんまで

「へ？」とした顔で私を見ているよ。

外のセグウェイー『武偵殺し』まで呆然している気がしてきた。

「この状況でボケてる場合か!!？」

金次君が私の頭にチョップしてきた。

痛っ！運転している人間にチョップはないでしょう！

「何をするんだ君は!!？私はタダ、怯えてる白雪さんを和ませようとしただけだよ!!？」

「だからって、もつといい方法があるだろうが!!？その位ご自慢の頭脳で考えろよ！」

「私の頭脳でも直ぐに出来ない事くらいあるさ！」

「ちよつと、2人とも喧嘩している場合じゃないよ！」

「ごめんね白雪さん。直ぐに終わらせるから待つてね」

私は後部座席の白雪さんに謝る。

「痴話喧嘩 を してやがる じゃない であります」

セグウェイのスピーカーから変な単語が聞こえてきた。

痴話喧嘩…… だと？

その一言に私と金次君はカチツーンときた。

「うるさい(せえ)!!？テメエは黙つてろ!!？」

私と金次君はホルスターから拳銃を引き抜き、『武偵殺し』が操っているであろうセグ

ウエイに向かって、パァン！パァン！と発砲した。

発砲の際、金次君の腕が私の胸に当たる。

苦しいよ！そんなに腕を押し付けなくてくれ！

至近距離から撃たれた為、セグウエイはバラバラに破壊された。

「ちよつと金次君！私の胸に腕を押し付けなくてよ！」

「仕方ねえだろう!!？運転席側にいたんだからよ！」

「だからってね。もつといい方法が……」

「2人とも…… やめなさーいッ！」

後部座席の白雪さんが叫ぶ。

同時に私と金次君の頭にビシツとチョップが降ってきた。

痛っ！金次君より痛いよ！

「もう！2人とも喧嘩している場合じゃないよ！こんな状況下だからこそ協力しないと  
いけないのに！」

「いや……… 白雪。俺は………」

「いやね……… 白雪さん。私ときん………」

白雪さんがギロリと睨むー恐ろしい眼光だ。

目だけで人を燃やせそうだよ。

「すみませんでした」

「はい。よくできましたね。いい子いい子」

白雪さんは子供をあやす様に私と金次君の頭を撫で撫でする。

君は保育園の先生なのかい？この状況を収めて見せた。副会長、悔りがたし！

「まあ、零。さっきの射撃は探偵科一筋にしちや見事だった」

突然、金次君が褒めてくれた。

「おやおや、さっきのお詫びのつもりかな」。

「いや〜それほども〜」

「何処ぞの五歳児の声で喋るな」

「そう言わずに。金次君も見事だったよ。セグウェイに爆弾が仕掛けられていないとわ

かると、すぐに破壊に移るなんてさ」

私なら証拠隠滅・反撃防止の為、神風仕様にするけどね。

私が褒めると金次君は「えっ？」と固まった。うん？どうしたんだい？そのヤバそう

な顔は？

「いや、爆弾が仕掛けられていないなんて、俺は知らなかったぞ」

金次君のカミングアウトに私と白雪さんはサーツと顔が青くなつた。

「そんな事も知らずに発砲したのかい君は？？」

「いや、お前が先に撃つたから思わず俺も撃つたんだよ！」

「いや、君が早かった!!？」

「いや、お前の方だ!!？」

「なんて事だあ！そんな軽はずみで君は……私の胸に腕を押し付けてーもうお嫁に行けないよ!!？」

ハンドルに顔を押し付けて、うわーッ!!？と思わず泣いてしまった。

「わー!!？分かった！俺が悪かった！だから前を見ろ！前を……！」

金次君が必死に謝ってくる。

「だったら今度、『武偵殺し』について私の部屋で話をしようよ。そしたら、許してあげる」

涙目で顔を少し斜めにして、金次君を眺める。

「分かったよ。今度、部屋に行つてやる」

「キンちゃん……零さんが……2人きりで……」

やっただぜ。言質は取つたよ。もう少し、要求したかったが、白雪さんがヤバそうなので止める。

「しかし……これからどうするんだよ？いつまでも、走りっぱなしとは行かないぞ？」

「そうだよね。ねえ、零さん。ガソリンは後どのくらいあるの?」

金次君と白雪さんが心配するのも無理はない。

ガソリンメーターは半分を切った所だ。

「心配には及ばないよ。このまま武偵高に向かおう」

「何だよ? 学校に爆弾処理でも呼んで解体してもらうのか? まあ、セグウェイもいなくなつたし、助けを呼べるが、走る車ー何処に仕掛けられているのか、わからない爆弾を解体するのは無理だぞ」

「あつ! もしかして、爆弾の場所がわかつたとか」

「いいや、爆弾は仕掛けられていないよ」

第2グラウンドへと車を走らせた。

金網越しに見えた朝の第2グラウンドには、いつも通り誰もいない。

ここなら誰には被害は出ないね。

「何で爆弾が仕掛けられていないって、断言できるだよ?」

「この車の車両重量は770kg。『武偵殺し』が十八番として使用するC4ープラスチック爆発の密度の相場は1.6g/?。この車を木っ端微塵にしようなら、約1232立方センチ以上は仕掛けないといけないね」

私の知る限り、『武偵殺し』はカジンスキーB型のプラスチック爆発を使う。

中国の蘭幫が開発した「爆泡」——無色無臭の気体爆弾も捨てがたいが、アレはクセがあるから素人が使うとなると難しい。

私も使った事があるが、アレを使い熟すのに2日も掛かったよ。

今の『武偵殺し』が使い熟すには、ちよつとつとつと難しいかな♪

なので、気体爆弾の線はない。

「仕掛けた爆発の分だけ車も重くなる——そう言いたいの零さん？」

「勿論、金次君と白雪さん・私の体重を差し引いてね。何だつたら、白雪さんの体重を当て……」

「やめて零さん！キ、キンちゃんがいるのに……」

白雪さんがアワアワとテンパリ始めた。

当ててもいいが、やめてあげよう。下手したら丸焼きにされる。

「車に乗る前に点検してみたけど、特に重量に変化はなし。爆弾は仕掛けられていないよ」

「でもよ、そんな感覚だけじゃあよ……」

「知らないのかい金次君？プラスチック爆発は僅かだがアーモンド臭がするんだよ。車内からはしないだろう？」

「それは車内だけで外は……」

「断言しよう。この車に爆弾は仕掛けられていない。私を信じてくれ金次君、白雪さん」  
私は金次君の目を真っ直ぐと見つめる。

「はあー、分かった。勝手にしやがれ。白雪もそれでいいか？」

「うん！私は零さんを信じるよ。だって、友達だもの」

「2人ともありがとうね」

「もし間違つて爆発したら、化けて出てきてやるからな」

「おおく怖い怖い。でもね金次君。もし爆発したら私も死んじゃうよ？そしたら、化けるもナニもないよ。」

私はフツとサイドミラーを見る。そこには後方から、何かを追ってくるのが見えたーセグウェイだ。

増援といった所かー

「どうやらヤッコさんは遊び足りないみたいだね」

「このままじゃ、蜂の巣にされるぞ。一旦、第2グラウンドに迎え」

金次君も気づいたようでー私にグラウンドに向かうよう指示する。

「うん？何だアレ」

「どうしたの零さん？」

その時だった。



グランドの近くにある7階建てのマンションー女子寮の屋上の縁に、女の子が立っていた。

あれは武偵高のセーラー服じゃないか。うちの生徒？

遠目にも分かる、長いピンクのツインテール。

彼女は飛び降りた。

「飛び降りやがった……！」

「えっ!?? 何なのあの子!?? 飛び降りちやった……！」

(自殺? いや、その気配はなかったね)

ウナギみたいにツインテールをニヨロニヨロさせ、虚空に身を踊らせた彼女はーふあさーつ。と。予め準備していたらしいパラグライダー、空に広げた。

へえ、器用だね。車を運転しながらその光景を見ると、彼女はこつちに降下してきた。

「バツ、バカ! 来るな! 今、この車はー」

金次君は車の窓から身を乗り出し叫ぶが、間に合わない。彼女の速度が意外なまでに速い。小柄だから空気抵抗が少ないようだね。

ぐりん。ブランコみたいに身体を揺らして方向転換したかと思うと、左右のふとももに着けたホルスターから、銀と黒の大型拳銃を2丁抜いた。

「ほらそのバカー！さっさと頭を引つ込めなさいよ！」

「危ない！金次君……！」

金次君が頭を引つ込めるより早く、バリバリバリツ！問答無用で車の後方一ーセグウェイを銃撃した。

へエ〜不安定なパラグライダーから、おまけに2丁拳銃。それも水平撃ちとはね。

バックミラーで確認すると、セグウェイはバラバラに破壊されていた。

あんな子、うちの学校にいたかな？転校生か留学生かな。

2丁拳銃をホルスターに収めた彼女は、今度は私の車上に飛んできた。

気のせいだろうか？彼女に上をいかれると何だかムカつく。

彼女を眺めていると、

「何だ……コレ？」

一瞬、ドドドドと滝の音が聞こえた。

こんな場所に滝などないし、幻聴かな？

「助かったぜ。ありがとうよーえっ〜と……」

「何なのこの子……今、キンちゃんを撃とうしたよね。零さんも見たよね！ねえ！見たよね！！？」

どうやら白雪さんは、彼女が金次君ごと撃とうと思ったらしい。

「見た違いだと思ふよ白雪さん。彼女に金次君を狙うー敵意が見られない」  
件の彼女を少しだけ、弁護していると、

「ーバカっ!」

金次君の頭上に陣取った彼女は……げしっ!金次君の脳天を踏みつけた。何をやってやがるんだこいつは?

「武偵憲章1条にあるでしょ! 『仲間を信じ、仲間を助けよ』ーいくわよ!」

「ーはあ?」

「ど、どうしたの零さん?何だか怖いよ」

突然、金次君を踏みつけて武偵法が、何たらを言い出したピンク頭に私はムカツときた。こんな事は初めてだ。

こんな奴は放っておこう。私はグランドに向かってアクセルを全開にした。

「バカ!待ちなさいよ!」

グングンと離れていく車をピンク頭は追ってきた。

あー!もうシツコイなく。

もつと加速させようとした時、ピンク頭は前方に回り込んだ。

「な、何をする気なんだあの子?」

ピンク頭はふともものホルスターから拳銃を抜いた。そしてー

バリバリバリバリ!!?と車のフロントガラスを割った。

衝突の際、飛散防止フィルムを貼っていないフロントガラスは粉々になった。割れたガラスがキラキラと車内に舞う。

「私の車なんて事をしやがるんだよ!!?」

「うるさい!車くらいで喚くんじやないわよ!」

「この車は車輛科のみんなが探してくれた大切な車なんだよ!」

「だから何よ!そんなに大切なら、また同じ車を買いなさい!」

「うるさい!弁償しろピンクウナギ頭!!?」

「何よ!真つ黒タランチュラ頭!!?」

走行する車と、それに合わせて滑空するパラグライダー。

それぞれを操作する両者の間でギャーギャーと口論が勃発した。

タ、タランチュラ頭だどく?この髪は父さんと同じ綺麗な黒だから気に入っているの  
に…… よりにもよってタランチュラ。あつ、タランチュラはペットとして好きだよ。

でもね!!?

「そのツインテールは何なの?ウナギを模しているかな?」

「あなたの髪は蜘蛛の脚みたいに見えるわ!」

「あー!!?もう静かにしろ!」

「2人とも黙ってよ！」

金次君と白雪さんが仲裁に入る。

私とピンク頭はいつの間にか、ゼーゼーと息が上がっていた。こんな体験は初めてだよ。

「君！こんな強引な手段に出たのは何かワケがあるんだろう？」

金次君がピンク頭に尋ねる。

何だろう？金次君がこのピンク頭と話していると、いい気分じゃない。この胸の辺りに湧き出る黒いモヤモヤは何？

「その車には爆弾が仕掛けられているのよ！ほら、いくわよ！」

ピンク頭はグラウンドの対角線上めがけて再び急降下し、こっちへ向けてUターンする。

そして、ぶらん。ブレークコードのハンドルにつま先を入れ、逆さ吊りの姿勢になった。そのまま更に接近してくる。

これはしがみ付けと言っているのかな？3人も一緒に助けるつもり？

このピンク頭に従うのはイヤだな。

私は車のブレークをダン！と踏み込んだ。

急ブレークに車体がキキィー!!？と唸る。同時に身体にGが襲ってくる。

私と金次君・白雪さんは前に押し出されるが、シートベルトをしているので大丈夫だ。しかし、接近して来たピンク頭は車体にゴツチン！と身体をぶつけた。

「おい!? 零。お前……………なんて事を……………」

「遂にやつちやつたね…………… 零」

2人が青ざめた顔で私を見てくる。

早とちりしないでよ。大丈夫さ。その証拠に……………

「いったあーい!!? いきなり何すんのよ!!? って、爆発……………!」

ピンク頭は起きて早々、「ハッ!」とした顔で車を眺めるが、いつまで経っても車が爆発する様子はない。

ボンネットの上で呆然とすると、ピンク頭に私は車から降りて、

「ほーら! ほーら! ほーら!」

「う、うるさいッ! どうしてよ減速爆弾が仕掛けてあると思ったのに……………!」

「思った? まくさくかく勘。なんて言わないよね」

「ええ、そうよ!!? 勘よ!!? なんか文句でもある?」

「大有りよ!!? 勘に頼って有りもしない爆弾に踊らされて…………… 私の車をこんな風にして……………!」

私はフロントガラスが粉々になった愛車を指差す。被害はフロントガラスだけじゃ

なく、ブレーキの際、車体にピンク頭がぶつかってできた凹みもあるが……

「悪かったわね！ 弁償すればいいんでしよう！ それで文句ないでしょう……！」

「まあ弁償してくれるならいいけど……勘で行動するんじゃないよ」

ボソツと最後の一言が聞こえたのか、ピンク頭は額にD字の青筋が浮かんだ。

「勘で行動して悪いのかしら？ そう言うあんたは勘で行動する派じゃなさそうね」

「勘よりも論理的に思考してから行動するのが良いと思うけど？」

「あんたガチガチに考えるから行動が遅いでしょう！」

私に向かって、ビシツと指差してきた。

その一言で私の額にM字条の青筋が浮かんだ気がした。鏡があれば1発で分かるのだが……

「ご心配無用。私には行動をサポートしてくれる相棒がいますので」

「その相棒がいないと、素早く行動できないようにも聞こえるわね」

「ハハハ、勘に頼ってばかりのピンク頭」

「ノロマのタランチュラ頭」

又してもタランチュラ頭と言ったな。

不思議だね。次々ところのピンク頭をけなす言葉が浮かんでくるよ。

「あんたは自分の思考に頼る余り、勘に頼る事を忘れてしまったようね」

「ご名答。君の言う通り、ここ最近は勘に頼った事はないよ。でも、大丈夫さ。勘など必要ない」

「思考に頼ってばかりだと、身を滅ぼすわよ」

「勘に頼ってばかりだと、早死にするよ」

「はあ？」

「ああん？」

お互いの視線が交差する。バチバチと火花が散っている気がするよ。

「勘頼りで仲間いや、家族から除け者扱いされているでしょう？」

「…… ツ！勘を馬鹿にするな!!？」

「おや？何かこの部分だけは偉く怒るね。これは使えそうだ。」

「勘頼り！勘頼り！勘頼りのぶ・て・い！」

「何よ!!？何よ!!？勘に頼ったら悪い？私の勘を馬鹿にするな……!!」

「でも、そのご自慢の勘は外れたよね？」

私は車を指差す。

「くくくッ！今すぐ謝罪しなさい！私に、いいえ。私の一族の勘を馬鹿にした事

を……!!」

「へえー、謝罪がお望みなのかい。じゃあ、こうしよう。次、何か事件があつたら勘で捜



査するといい。もし、当たって解決できたら謝罪してあげるよ」

「その時は土下座しなさいよ……！」

ピンク頭の一言に私は「ふん！」と鼻を鳴らし、

「土下座なんてパフオーマンスだよ!!? いくらでもやってあげるよ」

「半沢 直樹（かよ）?!?!」

いつの間にか車から降りていた金次君と白雪さんが仰天していた。

白雪さん、『半沢 直樹』を知っていたんだね。最終回は燃えたね。

このピンク頭を土下座させてみたいなー土下座させるのは私だ！

「おい、零。さつきから聞いてたが、大人気ないぞーこんな小さな子に対してよ」

「そうだよ零さん。まだ中学生なのに……えーっと、お嬢ちゃんお名前は？」

白雪さんが屈んで、ピンク頭に名前を尋ねる。

そういえば、まだ名前を聞いていなかったっけ。尋ねなくても、始業式ー武偵高の

生徒は名札をしているよ。

ピンク頭の名札を確認する。名前はー『神崎・H・アリア』。

「アタシは神崎・H・アリア。名札に書いてあるでしょうー!あと、中学生じゃない!!?」

「……悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだな。しかし凄いよ、ア

リアちゃんはー」

金次君が褒めているのに、今度は、がばつ。

ピンク頭改め、アリアが顔を伏せた。そして、ばぎゅんぎゅん！

「うおっ！」

「きやつ！」

金次と白雪さん、私の足元に2発の銃弾を打ち込んだ。

「あたしは 高 2 だ ！？！」

えー！！？嘘でしょう！？この子、りこりんよりも小さくない？りこりんは少なくとも中学生。アリアは小学生にしか見えないし。

「ププ、小学生に間違えられてやんの」

「うるさい！うるさい！風穴開けるわよ！？！」

アリアは2丁拳銃を私に向けて構えた。私もホルスターから拳銃を抜こうとしたが、その時一ースガガガガッ！

銃声が聞こえた。これはUZIだ。銃声の方角ーグランドの入り口からはセグウェイが、銃弾を撒き散らしながら入ってきた。

「クソッ！まだいたのかよ……！」

「どうしよキンちゃん」

「とりあえず、あの廃車を盾にするわよ！？！」

3人は走り出した。ちよつと待ってよ。廃車つて……私の車ああああ！  
車までたどり着くと、情け容赦ない銃弾が撃ち込まれた。  
アリアもそうだが、私の愛車を……『武偵殺し』許せん。

神崎・H・アリアアアアアアアア!! ?

零視点――

「神崎・H・アリアめエエエエエエエエエエツ!! ?」

「零さん落ち着いてツ!! ?」

私は金次君とアリアがいなくなった第2グラウンドのど真ん中で、天に向かって絶叫した。その私に白雪さんが駆け寄る。

側にはバラバラになったセグウェイ、そして、そのセグウェイの銃撃により、廃車となった私の愛車ーポルシェ356aがあった。車体はUZIの9ミリ弾によって穴だらけ。フロントガラスを始めとした窓ガラスは粉々。びらんと開いたボンネットからは煙を上げるエンジンが顔を覗かせている。車内には割れた窓ガラスと9ミリ弾が散乱しているー誰がどう見ても、廃車と言うだろう。

「うわああああ!! ? 私は神を憎むツ!! ? この世に神もクソもあるものかああああ!! ?」

「零さん本当に落ち着いてツ!! ? 女の子がそんな言葉を使っちゃダメだよ!! ?」

グラウンドの土に手を付け、さっきまでの光景を振り返る。

これも全て、神崎・H・アリアのせいだ!!?あのピンク頭、セグウェイがグラウンドに侵入してきた途端、よりにもよって私の愛車を盾にしやがった!!?グラウンドの倉庫には防弾性の運動器具があるにも関わらずにね!

私の愛車を盾にし、セグウェイと銃撃戦を繰り広げる上で、金次君はアリアでヒステリアモードになるしーまあ、彼のおかげでセグウェイは全滅できたけどさ……おまけにホックが壊れて、困っているアリアに自分のベルトを貸す始末。

ヒステリアモードになった金次君に揶揄われ、顔を真っ赤にしたアリアは、逃げる金次君を追って行ったが、

「私……私……アマガエルがああああ!」

「零さん……車は仕方ないよ。また車輛科——武藤君たちにお問い合わせすれば、きっと同じ車を探してきてくれるよ。だから、ね?」

白雪さんが慰めてくれる。

その優しさに思わず、私は彼女を抱き締めてしまった。  
胸の中でオイオイと泣いてしまう。

「あの車はカージャクの証拠品として、探偵科と鑑識科に調べてもらおう?零さんもそれでいいよね?」

「……うん」

私の承諾を得て、白雪さんは携帯を取り出した。探偵科と鑑識科に連絡する為だろ  
う。

神崎・H・アリア………そして、『武偵殺し』この借りは必ず返す!

金次視点――

アリアから逃げた俺は、武偵高に到着した。

零が車を出してくれたおかげで、始業式には間に合いそうだ。

校門を潜ろうとした時、

「誰か――そいつらを捕まえてくれ――!!?」

校門外――通りから誰かが叫んだ。視線を移してみると、俺のすぐ側を二人乗り原付バイクが通り過ぎた。

チラッと見たが、乗っていたのは、如何にもガラの悪いヤツらだった。その後を武偵高の生徒が追う――見た感じ、強襲科に所属する後輩だな。さては、護送中に捕まえた犯人に逃げられたな。しかも、原付バイク――逃走車まで使われるとは………大方、近くあつたモノを盗んだか。

見過ごす訳にもいかないので、俺は新学期の始まりがてら、加勢してやろうと思った。その時――

「ヒとーっ。人の世の生き血を吸い」

「ふたーっ。ふらちな悪業三昧」

俺の後ろからドロロ〜とした、聞き慣れた声が聞こえてきた。

こ、この声は……？

嫌な予感がしながらも、そーっとな振り返ってみると、案の定ソイツらがいた。

1人は無造作に伸ばした金髪にエンジンアブーツ。首筋には撃たれたのだらうー  
弾痕が3発見える。

もう1人は傷んだ金髪を伸ばし、頭にサングラス。足にはジャングルブーツを履いている。こちらの首筋には交差するように3本の切り傷が見える。

2人とも武偵高のセーラー服を着ているが、どちらも独特なダメージ加工を施しており、正直目のやり場に困る。

「ボニー…そしてクライド……？」

強襲科の問題児姉妹ーボニーとクライドである。

去年の秋頃にアメリカから留学して来た、強襲科2年の双子の姉妹である。

「ミいっ。醜いこの世の悪を倒してあげよう！」

姉妹の片割れークライドがガチャリと構えたのはRPGだった！

RPGーソ連、ロシアの対戦車擲弾。RPGー2以降は対戦車擲弾発射器とされて

いる。

第二次大戦中にドイツ軍で使用されたパンツァーフアウスト250がRPG-2の原型として模倣され、その後RPG-7に改良進化され、現在も数々の発展改良型が存在している。

おい!!? ちよつと待て! まさか、お前らそれで原チャリを撃つのか!!?

俺は慌てて、止めに入るが、

「オれたちや、処罰はしないぜ…… 処刑してやる!!?」

非情にもクライドはトリガーを引きードパ!

RPG-7弾頭は放たれ、キーンと逃走する原付バイクに、

ドガーーーーンツ!!?

停車していた周りの車を巻き込んで命中した。

命中した場所ーー辺りには黒煙が上がっている。周りにいる武偵はただ呆然として  
いる。

「ヨっしやー!!? 大命中だぜー!!?」

「さすが俺の片割レ。よくやっタ!!?」

姉妹は満面の笑みで「ヘイ!ヘイ!」とハイタッチしている。

そんな2人の態度に俺は思わず、



「よくやったじゃねよッ!!?なんて事してんだ、おバカ姉妹!!?」

「おっ!キンケツじゃねえカ」

「Hello. キンケツ」

怒鳴り散らしてしまった。

しかし、お馬鹿姉妹はケラケラした態度で挨拶してきた。

くそッ!!?ナメやがって。相変わらずキンケツと呼んでくる。

この姉妹が俺の事をキンケツと呼ぶのには訳がある。

あれは前に零が「金次君の名前つて、『次』からにすいを取ると、金欠になるね」と笑いながら言いやがった。その会話を偶々この姉妹が聞いていたのだ。それ以来、この2人は俺の事をキンケツと呼んでくる。

この姉妹にナメられるのは零のせいだ!

「原チャリをRPGで撃つヤツがあるか!!?思い切り、9条破りじゃねえか!」

「ピーピー騒ぐなヨ、キンケツ。安心しろヨ、ちゃんと死なねえよう火薬の量を減らしたからサ」

「才まけ、衛生科の連中を呼んでおいたからよ」

クライドが指差す方向には、救命セットを抱えた衛生科の連中が大慌てで駆けつけて来た。

全員、まさかこの様な事態になるとは思っていなかったようで、顔面が蒼白だ。

現場に到着して早々、救命に当たる。

「これで何度目だよ。やり過ぎにも程があるぞーこの前は車で逃走する犯人をバナナマシンガンで車ごと撃つわ。さらにその前は、銀行強盗を車で跳ねて捕まえるわ。どれだけ問題行動を起こせば気が済むんだ？退学になっても知らんぞ」

俺の知る限り、この姉妹がやらかした事は沢山ある。

1台の逃走車を捕まえる為に、一般車両10台を巻き添えにする。

犯人が立て籠もるビルのフロアに、『マトリックス』のワンシーンさながら、ヘリからミニガンを発砲する。

その逆、『ターミネーター2』のようにビルの1フロアから、他の武偵車両を巻き込んで、犯人の車両をミニガンで破壊。

上げるだけでもキリがない。

「何だよーシンぱいしてんのかーコイツー」

「やけるぜーこのこの」

両サイドから俺の頬をツンツンと突いてくる。

ええい！やめい！鬱陶しい。

間近で見るが、コイツら本当に高校生ー！同じ年か？外国人は日本人より年上に見える

やすいから、年上に見えるだけかもしれないが……

「コリアアア!!? また、お前らかああああ!!?」

俺らの後ろ——校舎の方から聞き慣れた怒鳴り声が響く。

この声は蘭豹だ。

ズンズンと走ってきた蘭豹はお馬鹿姉妹にゴツン、ガツン!と拳骨を食らわせた。

「いつてえナ!? 何しやがるんだ!」

「いきなり可愛い生徒に鉄拳とか頭イッテンのか!?」

「何が可愛い生徒や! あとな、頭イツとんのはお前らの方じゃあ! 逃走犯捕まえんのに、ロケット砲ぶつ放すアホがおるか!!?」

「はい!ここにいます」

手を上げてアピールする2人に蘭豹は再び、鉄拳をお見舞いする。

ナイスタイミングだぜ蘭豹。このお馬鹿姉妹を止められるのは、あんたしかいないぜ。蘭豹の登場に周りの生徒は安堵する。

どうやら、他の連中もお馬鹿姉妹をどう扱うか困っていたようだな。

「来いお前ら! 覚悟せえよ、教務科で反省文1000枚書かせたる!!?」

「やめてくレエエエエ! 俺は反省文が嫌いなんだアアア!」

「ころさないでエエエエ! 俺は反省文アレルギーなんだあああ!」

「あー!!? 喧しい! 黙って来い!」

「Heip キンケツ!!?」

お馬鹿姉妹は蘭豹にずりずりと引き摺られながら、連れて行かれる。

自業自得だ馬鹿め。あとよ反省文アレルギーって、何だよ。そんなアレルギーがあつてたまるか。

いかん。お馬鹿に付き合つたせいで時間を取られた。

このままだと始業式に遅れるぜ。

俺は始業式のある体育館に急いだ。

零視点ー

武偵高校にてー

始業式には白雪さんと共に何とか間に合つたー生徒会長と副会長が遅刻したらマズイからね。

体育館で会長として、新たな学校生活・挨拶を終えた私は体育館を後にすると、

「零先輩! おはようございませす!」

「ええ、おはよう」

「零会長。どこに行くんですか」

「新しい教室だよ」

「途中までご一緒してもいいですか？」

「うん、いいよ」

「先輩。私、クッキー焼いたんです！よかつたら食べて下さい！」

「ありがとう。頂くわ」

「今日も綺麗な黒髪ですね！」

「君の茶髪もね」

体育館を出て早々、後輩——強襲学科・諜報学科・探偵学科の生徒達に取り囲まれた。

まあ、この光景は生徒会長に就任してからは、もう慣れた事だ。

「ハイハイ！みんなくお話は昼休みに聞いてあげるから、教室に向なさい。遅れると、怖い先生の雷が降ってくるぞ♪」

「はい！零先輩！」

後輩達と一通り話し、ある程度話し終えると皆を教室に向かうよう誘導する。

「ははは、皆、素直で可愛いね」

私は後輩を見送ると、再び教室に向かう。その際、朝のやり取りを思い出す。

学校に到着して、カーゴジャクについて教務科に報告——私の愛車は証拠品として押収された。

武藤君にお願いして、同じ車を探してもらおう。アレは非常に気に入っているのだから……

新しいクラスー2年A組の教室に向かう為、一般教科クラスがある校舎を歩いていくと、

「零先輩！」

後ろから声を掛けられた。振り返ってみると、

「あつ、ライカちゃん」

スラリとした身長165cm。金髪をポニーテールに結び、勝気そうな翡翠色の瞳をした、男勝りな女子ー強襲科の一年生。火野 ライカが私の後ろにいた。

彼女とは今年の2月頃から顔見知りだ。正確にはモランが紹介してきたんだけどね。いや〜紹介してきた時は嬉しかったなーモランに友達が出来てたからさ。

「おはようございます！始業式のスピーチお見事でした！」

「ははは、ありがとうね。ねえ、ライカちゃん。そんなに畏まらなくても良いんだよ。もっと軽い感じで接してきてよ」

「そ、そうすつか？なら、そうします」

まだ、少し硬いけどいいか。

確か彼女はアメリカ人と日本人のハーフだったね。彼女とは仲良くできそうなんだよね。同じハーフだからかな？

「そういえば、モランとは仲良くやってる？あの子たら、プライベートの事は余り話さないから困ってるんだよね」

「先輩、まるでモランのママみたいすね。モランとは同じ強襲科とあって仲良くやりますよ。射撃とかじゃ、見習う事もあつたり勉強になりますよ」

ライカちゃんもモランを褒め称える。

へえ、モランは強襲科で慕われているんだね。安心したよ。

「知ってますか先輩。アイツ、強襲科の女子に大人気なんすよ。中性的な顔もそうだけど、キリツとして性格が女子にウケるみたいで」

「それは始めて知ったよ。なるほど、モランは強襲科ではアイドルなんだね」

「あー、まあ、そうも言えますね……」

ライカちゃんが苦笑いしながら、目をそらす。

うん？どうしたんだい？私、変な事を言ったかい？それにしても、モランがアイドルかー。

私はモランがアイドルー可愛らしいファッションに身を包んで、ステージで歌を歌う光景を思い浮かべる。

今度、モランにお願いすればやってくれるかな。

「あつー！そうだ、零先輩。先輩は戦姉妹は誰にするか決めてるんですか？」

ライカちゃんが尋ねてきた。

戦姉妹とはー！特定の先輩と後輩が2人で活動する、徒弟制度。

通常は下級生から教務科を通して『あなたの徒弟になりたい』と上級生へ申請を上げ、上級生が下級生をテストし、それに合格すると晴れてコンビを組ませてもらえるものだ。

それが男子同士の場合は戦兄弟、女子同士の場合は戦姉妹と書く。

これは上級生・下級生共にメリットのある制度で、戦姉妹になると先輩は後輩に無償で仕事を手伝わせる事ができ、後輩は先輩から技術を学ぶことができる。だが、警察に準ずる活動も行う武偵の仕事は……荒事が多い。出来の悪い後輩を戦妹にしてしまったために、命を落とすリスクだつてある。なので、先輩側は後輩の選抜を慎重に行うのが通例だ。

私が戦妹を誰にするか気になる視線を向けてくる、ライカちゃんに私は、

「おや？ライカちゃんは聞いてないのかい？私の戦妹はモランだよ」

「えっ!? あたし、聞いてないですよ。モランは一言もそんな事、あたしに言つてこなかった」



ライカちゃんは目を見開いて仰天している。

「まったく……あの子つたら、そんな重要な事をクラスメイトーそれも友達に言っていないなんて。ごめんねライカちゃん。モランを許してあげて。さつきも言ったけど、あの子はプライベートの事をあまり言わないから」

「そんな！先輩が謝る必要ないすよ。それくらいでモランを嫌いになりませんって」

ちよつとシヨボンとした声で謝る私に、ライカちゃんはアワアワし始めた。見ていて可愛いね。

「ありがとうね。ライカちゃん」

「いいですって、それくらい……あつ！そうそう！先輩、戦妹申請はモランから申し込んで来たんですか？」

「そうだよ」

私は戦妹申請ー当時の事を思い出す。

アレは確か、私が寮の自室で同人誌「なかよしキョウダイ」を書いていると、モランが突然、部屋に入ってきて「主!!？私を……私を戦妹にしてくださいッ!!？」と申請書を持ってリビングー私の前に土下座して懇願してきたのだ。

突然の事に私はポトリとペンを落としてしまったっけ。

懇願するモランは凄まじい気迫だったなーあの状態で「やだ」と言ったら自決する

くらいに……

モランの気迫に負け、私は「いいよ」と言って、申請書にサインしてあげた。すると、モランは満足したのか「我が生涯に一片の悔いなしッ!!？」と叫び、号泣しながら拳を天井に向けて上げたーその後、武蔵坊弁慶のように立ったまま気絶した。

そういうえば、モランが戦妹申請してきた時期と、探偵科に転科した金次君と私が本格的にコンビを組んだ時期が重なるな…… 偶然だよな？

「どんなテストをしたんですか?!? 零先輩の事だから、きつと難解なテストだったんですよね! くそツツモランが羨ましいぜ。零先輩の戦妹になれるなんて……!」

「あー、まあね（実際はテストも何もしてないけど）」

今度は私が苦笑いして答えた。

モランの能力は発展途上だし、戦妹にして損はないー鍛え甲斐がある。それに手元に忠実な部下がいるのは、いい事だしね♪

「あつ、先輩。モランについてなんすけど」

ライカちゃんが何か思い出したようだ。

「モラン、何かあつたんですか?」

「何かあつたと言うと?」

「いや、実は…… アイツ、今日ボロボロの状態で登校してきたんすよ。どうしたん

だって、本人に聞いたら『私の邪魔をするヤツと戦ってきた』って、言うですよ。何か知らないですか？」

ライカちゃんの報告に私は思う事があつたら、

そういうえば始業式で見かけたモランは制服と髪が乱れていた気がする。真面目な性格のモランにしては変だーまるで、ひと暴れしてきたかの様だった……

「ごめんね。私は知らない。でも、報告してくれてありがとうね、ライカちゃん。後で私の方でモランに尋ねてみるよ」

私はニコツと笑顔でライカちゃんにお礼を言う。

大切な戦妹兼部下のモランについて教えてくれたのだ。これくらいはお礼をしないとね。

「ふえ!? いやいや! いいですよ! ただ、あたしは友達が心配で……!」

「ははは、もう! ライカちゃんは可愛いね」

「か、か、可愛い……!?」

ライカちゃんはボン! と、白雪さんの様に顔を真っ赤にして、テンパリ始めた。

「ははは、あつ! そろそろHRが始まるね」

私は時刻が気になり、ポケットから懐中時計を取り出し時間を確認するーこの懐中時計はアメリカのオークションで買った。

時刻はもうすぐHRが始まる頃だ。少し話し過ぎたかな。

「お話しできて楽しかったよ。今日も一日、学校頑張つてね」

「あつ、はいッ!」

私は「バイバイ」と言つて、ライカちゃんと別れる。

HRが始まるし、急がないと!

別視点――

零と別れたライカは、暫くその場でポーツとしていた。

「あつ!ライカ、ここに居たんだ」

「探しましたよライカさん」

ライカの後ろから、同じクラスメイト――間宮 あかりと佐々木 志乃が現れた。ど

うやら、ライカを探していたようだ。

「ねえ!ライカ!ライカつたら!」

あかりはライカを呼ぶが、当の本人は心ここに在らずだ。

「うおっ!? あつ、あかり。それに志乃も」

「どうしたのライカ?ポーツとしちゃって」

「そうですよ。ライカさんらしくない」

「あつ、いや、ちよつと零先輩と話をしてよ」

「零先輩？誰なのソレ？」

あかりはコテンと首を傾げる。零が誰か本当に知らない様だ。

「つて、あかり!!? お前、零先輩を知らねえのかよ」

「う、うん」

「零先輩と言うのは、この東京武偵高校の生徒会長を務める――探偵科2年の玲瓏館・M・零さんの事です。あかりさん」

零が何者かわからないあかりに志乃が解説する。

「というか、今日の始業式の挨拶してたじゃん。その人だよ」

「あ、それなんだけど……居眠りしちゃって聞いてなかったんだよね」

あかりは「ははは」と笑いながら、答える。始業式――体育館で立ったまま居眠りを決め込むのは、ある意味で根性がある。

「あかり……お前、ある意味スゲエな。零先輩のスピーチで居眠りするなんて……」

「ねえ、零先輩つて、どんな人なの？武偵高校の生徒会長をやってるつて、事は分かったけど」

「えつーと、確か3月の役員選挙に立候補。その時、同じく立候補した星伽 白雪先輩と

会長の座を巡って争ってました。ねえ、ライカさん」

「ああ、よく覚えてるぜ。選挙期間は、それでお祭り騒ぎだったしな。零先輩と白雪先輩、どっちが会長になるか、どっかのクラスが賭博を開いていたって、噂も出てたくらいだし」

「へえ、あたし、全然知らなかった……」

「何度にも及ぶ投票の結果、会長の座を勝ち取ったのは零先輩でした。そして、会長に就任すると、それまで会長の座を巡って、自分と争った白雪先輩を副会長に任命したんですよ。それも、会長就任宣言の場——全校生徒の前で。あれはインパクトがありましたね」

「そんで会長になってからは、相当な型破りな方策に出たんだよな」

「型破りって?」

「とにかくイベント好きな人で——就任した途端、学園祭やら部活の予算やらどんどん増やして」

「ある程度、制限のあった制服改造も銃検も武偵活動——捜査方法も全部自由化しちゃったんだよな」

「ふーん」

この時、零の方策に対してあかりの頭にある疑問が浮かんだ。

「でもそんなに自由にしちゃったなら、学校が無法地帯になっちゃうんじゃない？一時期、うちの学校の車輛科の先輩が無法者になったって、噂もあるし……」

「あつ！それなら私、聞いたことがあります。何でもヒヤツハーと叫びながら暴れ回ったとか……」

もしも、この場に武藤を始めとした車輛科生がいたら、顔を真っ赤して暴れた挙句、ナイアガラの滝にバイクに乗って飛び込むだろう……

「それがどういう訳だが、不良も不登校もすっかり減って、むしろ平和になってんだよな」

「何だか不思議な話だね。零先輩のおかげかな？」

「多分そうなんじゃねえかな。あの人、会長に就任する前、色んな生徒の相談に乗ってたし。おまけにただ、相談に乗るだけじゃなく、自分から進んで問題解決に尽力してくれるたらしぜ。今でも時間の許す限り悩み相談に乗ってくれるし」

「悩み相談？カウンセラーみたいな事をやってるの？」

「何でも先輩曰く、『私立相談役』をやってるそうですよ」

友達から零の事を聞いて、あかりは件の会長に直接会ってみたくなくなった。

## 新しいクラスメイト

零視点――

ライカちゃんと別れた私は新しいクラス――2年A組に向かった。

教室のドアを開け、入室する。

「みんな！おっはよー!!?」

教室に入ると、私は新しいクラスの仲間――新しい顔のクラスメイト、前から同じクラスメイトに挨拶する。

皆「おはよう!」「零、おはよう!」と各々、返してくれる。

一通り、挨拶し終えた私は自分の席に向かう。私の席は金次君の前だ。

「金次くん。朝、会ったけどおはようございます」

私は金次君の耳元で、手をメガホン状にして挨拶するが、彼は無反応だ。憂鬱な顔を  
して頭を抱えているだけだ。

「おーい、金次くん?もしもーし」

ダメだ。これは重症だね。原因は何かな?

さては、久しぶりにヒステリアモードになって恥ずかしいのかな?



あんなチビピンクに興奮するなんて、許容範囲が広いね。罪な男ですな。あつ！ま  
だベルトしていない。返されてないのかな？

「よっ！零。おはよう」

「あつ！おはよう武藤君」

金次君の隣——右隣の武藤君が挨拶してきた。

相変わらず、優しさが滲み出るいい男だね。挨拶もしつかりしてくるしさ。

「キンジの奴、どうしたんだ？ずつと、こんな感じだよ」

金次君をまじまじと見つめる。

「ツッコまない方が彼の為だよ」

私の答えに武藤君は頭の上に「？」マークを浮かべる。

きつと今、金次君は過去の出来事を「うわー!!？」という気持ちで振り返っているだ

ろうからさ。

「ヤッホー！レイレイ！」

「おはよう。りこりん」

金次君の左隣の席に理子——りこりんが座ってきた。どうやら、ここが彼女の席のよ  
うだ。

やって来て早々、挨拶してくれるのは嬉しい。

「聞いたよレイレイ。キーくんとユキちゃんを車に乗せて、登校する時にカージャックにあつたんだって？」

りこりんが開口一番にそんな話題を持ち出して来た。

彼女も探偵科に所属しているから、報告くらい届いているか。

おまけにりこりんは探偵科一の情報収集能力がある。言うなれば現代の情報怪盗だ。

でも、カージャックか……正直、今は思い出したくない内容だよ。

「うん、そうだよ……」

「珍しいね。レイレイがカージャックされるなんてさ。何時ものなら、犯人の裏をかい  
て逮捕に追い込んだじゃうのに」

「マジかよ!? もしかして、キンジの奴が憂鬱なのは、それが原因か?」

「武藤君は知らないか。りこりんは知ってるかも知れないけど……」

私は朝の出来事を語った。車で金次君の寮に向かった事。白雪さんと共に学校に向  
かった事。カージャックでのやり取り。そして、アリアとの出会いを……

「そうか……。ポルシェ大破しちまったんだな」

「ごめんね武藤君。折角、武藤君が見つけて来てくれた車なのに」

「いやいや、お前が謝る必要はねえよ。悪いのはカージャック犯だろ」

「うーん、そうだよね」

「そうだって！レイレイが気を落とす事ないって！」

気を落とす私を、武藤君とりこりんが励ましてくれた。

りこりんが私の肩をパンパンと叩く。

「ねえ、レイレイ。因みにカージャックを捕まえる予定はある？」

りこりんが突然、そんな事を聞いてきた。

どうして聞きたがるの？りこりんも探偵科だから気になるのかな？

「そりゃ、当たり前だろうよ理子。なんたって、零は自分の愛車をスクラップにされたんだしよ！なあ、零？」

「分かるかい武藤君！？そうとも……私の愛車を……フロントガラスを直せば、

まだ使える筈だったアマガエルを……蜂の巣にしたカージャック犯を私は必ず捕ま

える……！」

私は握り拳を作りながら、宣言する。

あー、ダメだ。朝の事を思い出すとイライラしてきた。カージャック犯もそうだが、愛車がスクラップになる原因を作ったアリアにもイライラしてきたぞ。

「だ、だよねー。そうだよねー。あつ、そうだ！ねえ、ゴウくん。これを気にレイレイに同じ車ー新車を見繕ってあげたら？足がないとレイレイ大変だろうし」

「おっ！そうだな。よっしゃ！任せとけ！車輛科のツテを使って見つけて来てやるよ」

「えっ? いいのかい武藤君? 武藤君も忙しいんじや……」

「気にすんなって! 零には何時も世話になってるしよ。新車の一台や二台見つけて来てやるよ。後、サービスで改造もしてやるぜ」

「ありがとうね武藤君。それじゃあ、お願いするよ。でも、改造は勘弁して」  
自然と3人で笑っていた。

りこりんが話を持ちかけてくれたおかげで、武藤君に新車の予約する事ができたよ。正直、お願いするのは気が引けてたんだよね。

助かったよ。りこりん。

暫く、3人で会話をしていると、

「は〜い。みんな、席に着いてくださーい」

探偵科担当のゆとり先生が入って来た。どうやら、彼女が私達のクラス担任らしい。

あの人は、武偵高の常識人とされているが、私は騙されない。だって、あの人は心の内では戦いを求めているのでもん。

「ねえレイレイ。時間が空いたらでいいからさ、そのカージャック犯について意見交換しない? りこりんも探偵科だから、犯人が気になってさ」

りこりんがまた、カージャック犯についての話題を持ち出してきた。

「随分と気になるようだね〜りこりん」

「うん！レイレイが犯人について、どれだけ情報を掴んでいるか気になっちゃってさ」  
りこりんがお願いオーラ全開で私にねだる。

情報怪盗だけに捜査の進行状況が気になるのかな？

「いいよ。今度、時間が空いたらでいいかな？」

「モチのロンだよ！じゃあ、何時ものカフェでね！」

りこりんと約束する。

何時ものカフェー人工島にある私とりこりんの行きつけのカフェだ。落ち着いた感じがあって私は気に入っている。

メニユーも豊富……イヤな食べ物を思い出したーももまんた。

誰も聞いてないけど、諸君！私はももまんが嫌いだ。大嫌いだ。もの凄く嫌いだ。

何なのアレ？桃の形をしたあん饅だけど、食べたら下痢になったよ。お店の食品衛生はしっかりしているから、食中毒じゃないようだけどさ。どうやら私の身体はももまんを受け付けられないようだ。

食べたせいで、お手洗いで1時間も格闘する事になったよ……あれはアレで嫌な思い出だ。それ以来、私はももまんを見ると吐き気がする。

「うふふ。じゃあまずは3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらっちゃいますよー」

ゆとり先生がHRの前置きをしてきた。

先生には失礼かもしれないが、私は金次君をつんつんと突き遊ぶ――相変わらず無反応だ。

転校生ね…… 3学期辺りは金次君と一緒にコンビを結成した時期だ。一緒に捜査していたから、転校生には気を止めてなかったな。

そういうえば、あのピンク頭――アリアは見た事がない顔だったね。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

何だか甲高い――りこりん風に言うアニメ声が聞こえてきた。

転校生の声かな――アリアもこんな感じの声だった…… な？

私はイヤな予感がして前を見てみると、ヤツはいた。

――神崎・H・アリアだ。

クラスの生徒たちは一瞬絶句して、それから一斉に金次君を見て…… わあーっ！と歓声を上げた。

アリアの登場に気づいたのだろう――金次君はイスからズリ落ちた。私もイスからズリ落ちたい気分だよ……

「な、なんでだよ……！零、教えてくれ。これは夢だよな？悪い夢だと言ってくれ。

頼む……！」

「ああ、悪い夢だよ。悪夢さ。私達は悪夢に囚われたのさ……あのピンクの悪魔のね」

金次君が現実逃避し始めた。残念だがこれは現実だよ。

何故ヤツが？ 転校生とはアリアの事だったか。クソッ！ 会長として調べておくべきだった。

しかし、いきなり金次君の『隣に座りたい』だと？ バカめ。寝言は寝てから言え。誰がどう見ても、金次君の隣には座れ……

「よ……良かったなキンジ！ なんか知らんがお前にも春が……いや、もう来ているか？ まあ、いいか！ 先生！ オレ、転校生さんと席代わりますよ！」

まるで選挙に当選した代議士の秘書みたいに金次君の手を握ってブンブン振りながら、右隣に座っていた武藤君が満面の笑みで席を立つ。

武藤君……君は死にたいのかい？ よりにも寄ってアリアと席を変わるとは……

またヒヤッハー化させて……イヤ、ダメだ。彼には私の新車を見つけてもらわないと。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤くん、席を代わってあげて」

ゆとり先生は嬉しそうにアリアと金次君を見てから、武藤君の提案を即OKしてしまった。

わーわー。ぱちぱち。

「零にライバル登場!?!?」「レイからキンジを奪いに来たのか……?」「チャレンジャーだ!」

教室はどうとうお祭り騒ぎを始めてしまった。

ちよつと待つてよ。ライバル? 金次君を奪う? ナンノコト? チャレンジャー? 私に? こんなピンク頭が?

私はゆとり先生に抗議しようとした時、

「キンジ、これ。さっきのベル……」

金次君を呼び捨てにしつつ、第2グラウンドで金次君が貸したベルトを放り投げようとした、アリアと目が合った。

「何でアンタがここに居んのよ!!?」

「私の教室だからだよ。文句があるのかい?」

「大アリよ! よりにもよって、アンタと同じクラスなんて……最悪よ」

「ああ、奇遇だね。私もだよ」

バチバチとお互いの目から火花が散る。

教室は又しても、お祭り騒ぎになった。

「えっ? ナニコレ」「あんなレイさん初めて見るよ」「あの転校生は一体何者?」「ス



「ゲエー、武偵高の女王とガン飛ばしてる」

今はそれどころじゃない。よりにもよって、同じクラスとは……教室じゃなくて、あの子……スミスが経営している殺人ホテルに放り込んでやりたいよ。1日も持たないだろう……運が良ければ2日は持つかもね。

「理子分かった！分かつちやつた！……これ、フラグばつきばきに立つてるよ！」

金次君の左隣に座っていたりこりんが、ガタン！と席を立った。

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツイントールさんが持ってた。これ、謎でしょ!!?でも理子には推理できた！できちやつた！」

りこりんが何か分かつた様だ。

ほーう、ならば聞かせてもらいましょうか？峰 理子君。

「キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れて、自分の部屋に戻った。そして、そんなキーくんをレイレイは朝迎えに行った際、知ってしまった！キーくんが転校生さんに誘惑されたと！つまり3人は……熱く激しい、三角関係の真っ只中なんだよ！」

ツースサイドアップに結つたゆるい天然パーマの髪をびよんぴよんさせながら、りこりんは推理をぶち上げる。

りこりん……私は知ってるよ。金次君がコイツの部屋に行つてない事も。そんな

事実はない事もさ。でも、何だろう？りこりんの推理結果を聞くと、本当にそんな気がしてきた。凄くイラツとする。

りこりんの推理にクラスは大盛り上がりしてしまつた。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間にも？零さんがいるにも関わらず……！」  
「影の薄いヤツだと思つたが、三股かけてたとは……。」  
「零さんを裏切るなんて最低……！」  
「フケツ！」

顔見知り率が高いけど、新学期なのに、息が合いすぎだよ皆。

「お、お前らなあ……俺と零は」

「そ、そうだよ……私と金次君は」

あれ？何か顔が熱くなつてきた。

すぎゆぎゆん！

鳴り響いた2連発の銃声が、クラスを一気に凍り付かせた。

——真つ赤になつたアリアが、二丁拳銃を抜いて撃つたからである。

「れ、恋愛だなんて……くつだららない！」

広げたその両腕の先には、左右の壁に1発ずつ穴が開いていた。

コラツ！誰が直すと思つてんだテメエ。ここがスミスのホテルだったら、あの子キレるな。

「全員覚えておきなさい！そういうバカなことを言うヤツには……風穴あけるわよ！」

又しても奇遇だネ。バカな行動をする君に、私は風穴あけたいよ。

## ももまんの滝よ金次君!! ?

キンジ視点――

――夕方。

クラスのバカどもからようやく解放された俺は、どつかりと自室のソファ―に座りながら、ある資料に目を通していた。

それは俺の人生を180度変えた事件――『武偵殺し』についてだ。

『武偵殺し』――俺の兄である遠山 金一の仇。

ある日、逮捕されたニュースを知った瞬間、俺の中に湧き上がったのは安堵感、そして消失感だった。

もうこれ以上、兄さんのような武偵が被害者にならない。

自分の手で犯人をあげられなかった悔しさ。

複雑な感情が俺を襲った。そんな思いから逃げるように俺は『武偵殺し』の捜査から足を洗った。その後は、零と共に重大な事件や他愛のない事件なんかを追った――今、思えば複雑な感情から逃げたいが為にヤケクソになつてたかもな。

しかし、今朝の零が発した言葉で『武偵殺し』を捕まえてやろうという感情が蘇った。

捕まったのは模倣犯——落ち着いて考えれば簡単な事だった。

兄さんを行方不明に追い込んだ犯人がそう易々と捕まる筈がない。『何事も疑って掛かれ』探偵科で習う初歩的な事だ。ニユースをそつくりそのまま信じた自分を殴りたいぜ。

——パラパラと一通り目を通し、考えるがピンと来るものがない。まだ、情報が足りないか……

(ああ、静かだ……)

今朝のカージャックが、ウソみたいだ。

あの件に関しては、セグウェイの残骸と廃車になった零の車を鑑識科が回収し、探偵科も調査を始めている。

一緒に捜査するのもいいが、俺はこの件は自分でカタをつけたい。

だからこうして……

ピンポン

ドアチャイムの音で、ハッと我に帰る。

……いけね。どうやら思考に老けてたようだ。

ソファアーから立ち上がり、マンションの部屋を渡り……ドアの覗き穴から、外を見た。

するとそこにー零がいた。何でドアチャイムを鳴らしたんだ？朝もそうだったが、俺の部屋の合鍵は渡したはずだ。

ーガチャ。

「零」

「ヤツホー金次君。遊びに来たよ」

ドアを開けると、零はヨッ！と手を上げて挨拶し、靴を脱いで遠慮なく入って来た。

いくらコンビを組んでるからって、ここは男子寮なんだぞ。女子がそれも生徒会長様が軽々しく来るなよ。また、変な噂を立てられるぜ。

零は上がって早々、一目散に部屋ーリビングに向かった。

いかん！リビングには『武偵殺し』の資料が出したままだ。

俺は慌てて、リビングに向かうが時既に遅し。零は資料を手に取り、パラパラと捲っていた。

「あれー金次君。『武偵殺し』について調べていたんだね」

「お前には関係ないだろう」

「お兄さんの仇が、本当は捕まっておらず、模倣犯として犯行を行っているって知って、ワクワクしているのかい」

「そんなんじゃないよ。俺はただ……」

俺が一人で『武偵殺し』を捕まると決めたのは、他の誰かに『武偵殺し』を捕まえられたくないのと、相棒であるコイツを危険に晒したくないからだ。

『武偵殺し』は兄さんを追い込んだ程の凶悪犯だ。正直、無傷で何も失わずに捕まえられる保証がない。

零は頼りになる相棒だ。それは去年から知っている。一般中出身とは思えない行動力・類稀な頭脳・戦闘能力。どれを取っても頼りになる武偵だ。俺が『武偵殺し』を捕まえたいと言え、喜んで協力してくれるだろう。

しかし、俺が追ってる犯人は危険なヤツだ。相棒であるコイツを……

「危険な目に合わせたくないって、顔をしているね金次君」

零が俺にズイと顔を近づけてきた。って、近づい！

あまりに近すぎる為、思わず零の顔をまじまじと見つめてしまう。

白いが健康だと分かる程よい赤みのある肌、キリと整えられた眉毛、ぷるんとした唇。息遣いまで聞こえてくる。

自分の中でジワと血が熱くなる。

や、やばい!!?ここでヒスったら!!?マズイ。

俺は慌て零から距離を置く。同時に血流が落ち着いてきたのが分かる。

「大丈夫かい?」

「あ、ああ。って、今ヒスらせようとしただろう！」

「ごめんごめん。君が私を除け者扱いしようとしたから、ちよつと揶揄してみたくなつてね」

「……俺が『武偵殺し』を一人で追うって、知ってたのかよ」

「まあね」

そう言つて零はボフンと近くのソファアに座り込んだ。

「ねえ、金次君。去年の12月、私達は約束したよね？一緒に『武偵殺し』を捕まえようつて」

「覚えてたのか……」

去年の事を思い出す。

12月上旬、俺はあの日、兄さんが乗り合わせた船の事故に巻き込まれて、行方不明になったと知らされた。

マスコミは事故を防げなかった無能な武偵と、兄さんを誹謗中傷した。そして、マスコミにかられた世間は身内である、俺までも追い込んだ。

有りもしない批難を浴びせられ、俺は武偵を止めようとした。

しかし、そんな俺を零は救ってくれた。武偵というモノに絶望していた俺をどん底から引き上げてくれた。



一緒に『武偵殺し』を捕まえようとも言ってくれた。

「俺の知る限り、『武偵殺し』は狡猾なヤツだ。替え玉を用意できる程、非常に頭も回る」  
「おっ！私の分析と同じだね。あつ、続けて」

「『武偵殺し』を調べていくうちに、こいつはヤバイと思つたんだ。だから……」  
「私を危険な目に合わせたくない？まったく、君は……このバカ！」

ーロードフツ！

零はソファアールから立ち上がると、俺のボディに拳を叩き込んだ。

痛つてえ!!？思わず床に膝を着きかかるが、グツと堪える。

ボクシングをやっているだけに中々のパンチだぜ。

「ヤバイ犯人だからこそ、協力しないといけないじゃないか！金次君にとって私って何に？」

「そ、そりや相棒……だ」

「……他には？」

零は何かを求めるような目で見つめる。

少し頬を染め、こつちを眺めてくる顔はなんだか可愛い。

「意地悪な所はあるが、頭脳明晰で頼りになる相棒だと思つてる」

「最初の方は余計だよ。ま、まあ……そうだよねく相棒だよね……」

零は顔を晒す。

「どうした？何故、そこでズーンと沈んだ様な顔をするんだよ？こっちはお前の事を褒めてるんだぞ。」

訳がわからないでいると、零は「ゴホンッ！」とワザとらしく咳をして、

「金次君。私だって武偵。危険は承知な上だよ。だからこそ君と一緒に捜査がしたい」

「いや……だからよ。俺は……」

引き下がらない俺に零はそつと手を当てる。

ボクシングで鍛えた手とは思えない、ふわふわした柔らかい手だ。

「まったく……男の子って、どうして意地を張るのかな。本当は不安なんじゃない？」

「どうしてそう思う？」

「一目見ればわかるよ。伊達にコンピを組んでないし」

零は呆れたように、やれやれと首を振るう。

確かに零の言う通り、多少の不安はあるー俺の兄さんを行方不明に追い込んだ犯人だ。俺に勝ち目はあるのかと。

「前も言ったと思うけど、何も全て抱え込む必要はないよ。私もいるよ？」

「……今まで体験したことのない危険に直面するかもしれないぞー命を落とすか

もしれない。それでもいいのか？俺と違って、お前には両親だっているし」

すでに両親を亡くしている俺とは違い、こいつには両親がいる。娘が死ねば悲しむだろう。死ぬ方と残される方。辛い思いをするのは残される方だ。それは俺がよく知っている。

「大丈夫さ。私は命を落とさないよ」

「どうしてそう言い切れる？」

「だって金次君が守ってくれるって確信してるんだもん」

零は「ふふふ」と笑いながら答える。

確信って、こんな不甲斐ない俺を信用しているのかよ。

「まったく……現場で四五六時中守れるとは限らないぞ。でもーいいんだな？」

俺は零に最終確認をする。

「勿論さ。一緒に『武偵殺し』を捕まえよう」

「勝算がゼロでもか？」

「私と金次君が組めばゼロじゃないさ」

「お前、それ絶対にキメ台詞にしてしているだろう？」

「い、いいじゃないか！キメ台詞の一つや二つ……！！」

零はふんふんと怒るが、最後は笑った。俺も釣られる形で笑った。

笑い声が部屋の中に響く。

まったく…… 零の言う通り、俺は意地を張ってたかもな。

「さて！ 気を取り直して早速、『武偵殺し』の捜査を始めようか」

ピンポーン。

「捜査つて、まさか模倣犯が現れた時から始めてたつて、言わないよな？」

ピンポーンピンポーン。

「ふふふ、まだまだ探偵科としては甘いね。模倣犯〓偽物とは限らないぞ。模倣犯〓成りすまし犯とも思わないと」

ピンポーンピンポーンピポピポ！

「入学当初から探偵科伊達に疑い深い深いつてか？」

ピポピポピポピポピポーン！

「ヒドイな。探偵科として当然の……」

ピポピポピポピポピポーン！ピポピポピポピンポーン！

「あー！ うっせえな！」

誰かがさつきから俺の部屋のチャイムを連射している。

あまりの喧しさに耳を塞いだ零と声がかぶる。

「ちよつと金次君。誰か見てきてよ」

零に言われるがまま、玄関まで移動し渋々、ドアを開けるとー

「遅い！あたしがチャイムを押したら5秒以内に出ること！」

びしっ！

両手を腰にあて、赤紫色のツリ目をぎぎんとつり上げたー

「か、神崎!?!」

制服の 神崎・H・アリアがいた。

なんで コイツが ここに !?!

「アリアでいいわよ」

言うが早いかアリアは靴を玄関に脱ぎ散らかし、とててと俺の部屋に侵入してきてしまった。

「お、おい！」

俺はそれを止めようとしたが、するつ。ヤツの子供並みの身長のせいで、屈んでかわされる。

「待て、勝手に入るなっ！」

「トランクを中に運んどきなさい！ねえ、トイレどこ？」

アリアは俺の話なんか耳を貸さず、ふんふんと室内の様子を見回す。そしてトイレを発見すると、小走りに入ってしまった。

「金次くーん? 誰が来たんだい?」

リビングから零の間延びびした声が聞こえる。

……いかん。

今、リビングには零がいる。そして、トイレにはアリアが入っている。この2人はなぜか知らんが、非常に仲が悪い。今朝のカージャック然り、HR然りだ。鉢合わせしたら、どうなるか分からんぞ。

「てか、トランクって……」

玄関先にはアリアが持ってきたと思われる車輪つきのトランクがちよこーんと鎮座していた。小洒落たストライプ柄のトランクだ。

「あんたこゝ、1人部屋なの?」

トイレから出てきたアリアは、俺には目もくれず部屋の様子を窺っている。そしてリビングに侵入し……

「何でアンタが此処にいんのよ!」

零と鉢合わせした。

零を視界に入れたアリアは、ぐるると犬歯を剥き出しにし唸る。お前はイヌか!? いや、小ささから必死に威嚇する子猫に見える。

「私は金次君の相棒だからさ。なんか文句ある?」

威嚇された零は喧嘩口調で話す。

こちららばわと広がった黒髪で顔に影ができ、おまけに目が座ってるーゴミを見るような目だ。その姿はまるで前足を上げて威嚇する毒蜘蛛のようだ。

「今すぐ出てけ！」

「君が出ていけ。3秒以内に」

バチバチとお互いの目から火花が散る。

俺はゴシゴシと目を擦るが、未だに火花が見える。幻影じゃないのか!? 疲れているから幻を見ているだけだよな？

「金次君に何のようだい？ 此処に来た限り、金次君に用があつて来たんだろう？」

「そ、そうだったわ！ アンタに構ってる場合じゃなかったわ」

アリアはリビングの一番奥、窓の辺りまで来ると。

くるつーと。

その身体を夕陽に染め、アリアは俺に振り返った。

「ーキンジ。あんた、あたしのドレイになりなさい！」

「……」

「ーはあ？」

無言が支配する空間に第一声を投じたのは零だった。

投じた声は今まで聞いたことのないような声をしていた。怒りと憎しみを込めた感  
じだ。

「君は意外と前頭葉が発達していないようだね」

「何よ？ 話があるなら5分だけくれてやるわ」

「ありがとう。では早速……いきなり部屋に上がり込んで来て、金次君にドレイにな

れとは一方的な馬鹿な要求をするもんだな〜と思つてさ。ねえ、金次君？」

「あ、ああ……ドレイってなんなんだよ。どういう意味だ」

「強襲科であたしのパーティに入りなさい。そこで一緒に武偵活動するの」

一緒について、俺は探偵科に転科した上に零とコンビを組んでいる。アリアとコンビを

組むことはできない。『武偵殺し』を追いたいしな。

「それって、私から金次君を奪うって捉えていいのかな？ 私の相棒をさ」

零。言葉に気をつけろ。奪うって、変な捉え方をされるぞ。

「アンタの事聞いたわよ。玲瓏館・M・零。探偵科所属Aランク。一般中からの編入生で  
ありながら、超新星の如く現れ数々の難事件を解決した。事件の中にはプロの武偵です  
ら手を焼く未解決事件すらね。そののキンジとも」

アリアは俺に視線を移した。

そののは余計だ。確かに俺と零は未解決と呼ばれる事件も解決したが、あれは殆ど零



が解決に導いたようなモノだ。

「ロンドン武偵高でも噂は聞いてたわ。最初、会った時はわかんなかったけど、まさかあんたが『天才（ジーニアス）』とは思わなかった」

「ロンドンまで名前が通っていて嬉しいよアリア」

「ほら！ さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！ 無礼なヤツね！」

ぽふ！

盛大にスカートをひらめかせながら、アリアはさつき俺が座っていたソファアにその小さなオシリを落とした。

「コーヒー！ エクソプレッソ・ルンゴ・ドツピオ！ 砂糖はカンナ！ 1分以内！」

無礼者はそつちだ。

てか、エクソプレッソでルンゴ・ドツピオって、零が勧めてこないヤツじゃねえかよ。

「金次君はそのままアリアの相手をして。コーヒーは私が出すから」

「何よ？ アンタ、コーヒー出せるの？ だったら早く出しなさい。さつきも言ったけど」

「ご心配なく。エクソプレッソのルンゴ・ドツピオで御座いますよね。オキヤクサマ」

零はそれだけ言うと、キッチンにあるエクソプレッソマシンへと向かう。そして1分もしないうちに戻って来た。

「はい、金次君の好きなリストレットだよ」

ソファアに座って待つ、俺に零はコーヒーを差し出してくれた。

カップをテーブルに置く際、物音も立てず静かに差し出す、その姿はウェイターの様だ。

丁度良かったぜ。俺もコーヒーが欲しかったところだ。

「はい、アリアもどうぞで」

ガチャ！

アリアの方へカップを差し出す際、物凄い音を立てながらテーブルに置いた。僅かにカップからコーヒーが溢れた。

俺とは扱いが全然違う。

「もつと静かに置きなさいよ！というか、キンジと扱いが違うし！アンタわざとやってるでしょう!?」

「さーて、ナントコトカナ？わかりませんね。ほら、入れてやったらんだら早く飲めよ。冷めちゃうよ」

「まあ、いいわ。飲んでやるわよ……ずず」

文句を言いながらもコーヒーをすすり、

ブウー……!!?

盛大に吹いた。漫画でしか見たことない光景だ。

うわっ!!?汚ねえ!俺の方に吹くな!

「これルンゴ・ドツピオじゃない!リストレットだし!おまけに砂糖が入ってない!」

「あつ!ごつめーん。間違えて金次君と同じ、リストレットを入れちゃった♪」

「間違えて入れるワケないでしょう!絶対わざと入れたわね!思いつきり苦味を凝縮して入れているのが証拠よ。言い逃れなんて許さないから!」

「おう、勘だよりの武偵さんにしては考えたね。前頭葉が発達していないと言つて悪かったね。前略撤回するよ」

「馬鹿にして……!前頭葉が発達していないのはアンタの方よ。もし、本当に入れ間違えてたなら、頭の中を見てみたいわ。こんな初歩的なミスをする頭をね」

「私は君の舌の作りを調べてみたいな。砂糖なしコーヒーで吹くようなお口の中をね」

俺を挟んで、2人の美少女が嫌味を言い始めた。

頼むから、俺の部屋で発砲騒ぎに発展しないでくれよ。

「あたしはアンタの感性を知りたいわね。こんな緩いコーヒーを平気で客に淹れるなんてね」

アリアはカップを手に取り、ヒラヒラと見せびらかす。

そうか?俺は丁度いい熱さだと思うが……

零の方を見ると、額にビキツ!とM字状の青筋が浮かんだ。

「そうだね。転校生ちゃんはこのな緩いコーヒーは飲まないよね。ゴメンゴメン。滝れなおしてくるよ」

アリアのカップを手に取ると、再びキッチンに戻っていった。

その横顔は笑っていたが、目は一切笑っていない。俺には分かるーアリアは怒っている顔だ。

待つこと1分ーキッチンから零は出て来た。

「はい、お待ちどうさま」

ガチャ!

ミトン手袋をした手でカップをテーブルに置く。

カップのコーヒーはボコボコと泡立ち、凄まじい熱気で湯気が立っている。あまりの熱にカップはガチャガチャと振動して、今にも割れそうだ。

なんじゃこりや!!? 熱いにも程があるぞ。ガスバナーで炙ったのか?

「さあ、冷めないうちにどうぞ」

満面の笑みを浮かべ、アリアに飲むよう勧める。飲むものなら、飲んでみると顔で言っている。

「そ、そうね。これくらい熱くないとね」

と、両手で左右から持ったカップを顔に近づける。

おい、本気で飲むのかよ。カップを持つてる手が真っ赤だぞ。  
「ずず……ま、まだ……ずず。ちよ、ちよつと緩いわね」

本当は熱いのだろう。顔を真っ赤にしながらもコーヒーをすする。  
痩せ我慢全開で出されたコーヒーを飲み干した。

そんなアリアの様子を零は驚きながら見ていた。まさか、本当に飲めるとは思わなかったようだ。

「おなかすいた」

アリアはいきなり話題を変えつつ、ソファアの手すりに身体をしなだれかけさせた。

「なんか食べ物ないの?」

「あん饅ならあるぞ」

下のコンビニで買ったあん饅をキッチンに置いたままにしていた。

相棒の零が好きなんだよな。よく張り込み捜査の時、よく嚙ってた。

そのせいかな?俺も思わず考えなしに買ったが俺は肉まんが好きだ。

「あん饅?ももまんはないの?」

ももまん——昔前にちよつとブームになった、桃の形をしただけの要するにあん饅。

ももまんもあん饅も大して変わらんだろう。

「ももまんく? 何、君ってあんなモン食べるの?」

零はももまんが嫌いだ。前に頼まれてあん饅を買に行ったら、無かったので代わりにももまんを買ってきたら、右ストレートパンチが飛んできた、アレには俺でもK.O. しかけたぜ。

「ももまんが好きで悪い? あつ、分かったわ! アンタ、ももまんが嫌いなんですよ。食べて下痢になったクチね」

「……… 何でそう思うんだい?」

「勘よ!!?」

「何が『勘よ!!?』だ! もつと具体的に述べたらどうですか?」

「アンタ、一瞬だけ狼狽した上に言葉が詰まったでしょう。それが証拠よ。動揺しまくりで分かりやすくて助かるわ」

「はあく? 相手の態度を見ただけで分かるスキルが君にあるんですか?」

零よ。お前なら相手の顔を見ただけで、一発で分かるだろうー! 相手を構築する情報全てを。

「アタシには分かる。あんたは過去に、ももまんを食べて下痢になった。ももまんを嫌ってるのが証拠よ!」

「嫌ってるのは認めよう。しかし、食べて下痢にはならないよ」

零は最後まで食い下がらない。

すまんな零。アリアの話を聞く限り、そんな気がしてきたぞ。

コイツのももまんの嫌い感はんぱない。明らかにももまんでは何かあつたのは明白だ。

「じゃあ、証明してやるわ!!? キンジ、その松本屋のももまんを買ってきなさい。コイツに食わせてやるわ」

アリアは俺の方にとんと歩いてくると、う、おい、近いよ、と思うぐらい顔を近づけて命令してくる。

「やめろー!!? コイツの命令に従うな! 行かないで金次!!?」

零が大声を上げ、俺を引き止める。イヤイヤとばかりに目を涙を浮かべる。

あつ、零。お前、認めたな。

「ハッ!」

自分の失敗に気づいたのかー零はアリアの方を見る。今の零は、まるで探偵に「犯人は貴女だ!」と、名指しされた犯人のようだ。

アリアは勝ち誇った様子で、

「それは肯定と捉えていいわね。ほら、見なさい! やっぱりももまん食べて下痢になるじゃない」

ニイと勝利の笑みを浮かべ、零をビシツと指差す。その姿はまさに名探偵さながらだ。

「あー！そうですよ！下痢になりますよ！何か文句ある!!?」

零が暴露した。ヤケクソだな。

「私の勘が当たった。覚えてるわよね？今朝の事を！」

今朝ーあれか、零がアリアの勘を馬鹿にして、次で勘で何か当てたるか、事件を解決したら土下座して謝るってヤツか。

「私の勘を、一族の勘を馬鹿にされた、怒りを、苦しみを、悔しさを、アンタにも思い知ってもらおうわ。やりなさい。やれー!!? レイー!!?」

半沢直樹かよ!!? アリアは最終回のセリフを少し弄って大声で叫ぶ。

お前も見た事あるのか？あの最終回の名場面を。

零の方に視線を移すと、

「ああああああ！ああ…… あ、ああああああ…… !!?」

某常務さながら膝に手をつけ、必死に土下座を拒絶する。しかし、プルプルと膝が床に触れる所で、

「つて、やるわけないでしょうが!!? このピンク頭!!?」

アリアに飛びかかった！



「この嘘つき！土下座しないよ!!?」

グググと取っ組み合いが始まった。

「うるさーい!!? 土下座するのはお前の方よ！私の愛車をボロボロにしやがって……!!?」

「あんなアマガエル廃車も同然よ！それに廃車にしたのはアタシじゃない！」

お互い組み伏しながら、ゴロゴロとリビングを転げ回り暴れる。

転げ回る際に、俺の部屋の家具――テーブルやソファ―が倒れる。蹴り倒されたテーブルから、カップが床に落ちて割れた。

「フロントガラスをバカスカ撃ち抜いてよく言えるわね！この悪魔！」

「悪魔はアンタの方よ！嘘つき腹黒女！」

「君って、絶対に推理が苦手でしょう！勘に頼らないと何もできないへボコ武偵！」

「そういうアンタはガチガチに考えてからじゃないと、行動に移せないでしょうが！ビビり武偵！」

「お、おい！落ち着けよ2人とも」

「むぎー!!?」

「うがー!!?」

2人はゴロゴロと転がり、リビングの一番奥――ベランダに出た。

ベランダまでくると、2人は立ち上がり態勢を整え、取っ組み合いが再び始まった。

アリアは零の顔を捻り、零はアリアのツイントールを引っ張り始めた。幼稚園児の喧嘩かよ。それとベランダで喧嘩するな!!?危ねえぞ。

「このウナギみたいなツイントールかば焼きにしてやる!」

「その蜘蛛みたいな面ひつぺ剥がしやるわ!」

ベランダの手すりに背中を預け、アリアのツイントールを引っ張り。アリアは零のほっぺを両手で抓る。

ベランダの外ー真下には海が広がっている。

「ロンドンでアンタの作戦立案を見たけどね、どれもこれも古臭いのよ!よくこんな作戦で生き残れるって、感心しちゃったわ!」

「はあ!!?私の作戦の何処が古いのよ!感心しちゃったって、絶対に嘘でしょうが!嘘が下手過ぎ!」

「あー!!?もう最悪よ!最初、アンタの作戦ー『囲い』は素晴らしいと思ったわ。アタシも参考にしたのに!でも、まさか考えた武偵がこんなヤツだったとはね!」

「あんただったのねー!!?私の作戦パクったの!このパクリピンク頭!!?」

零はアリアの言葉に思い当たるものがあるか、一際態度を改め怒りを露わにした。

ツイントールを引っ張る手に力が入る。

「パクって何かいないわ！それ言うながらアンタの方こそ！」

アリアも零の言葉に思い当たるものがあるか、犬歯をむき出しにして怒る。

零の頬を抓るアリアの手にも力が入る。

「うるしやーいッ！パクったでしょうテメエー!!?よくも自分の手柄にしがったな  
ー！なーにが、最優秀学生武偵だ！」

「あたしが解決したんだからもうパクリじゃないわ！」

ベランダで死闘?を繰り広げる2人は足を纏れさせ、バランスを崩して、

ーズル！

「きやあああああああああああああああッ!!?」

甲高い悲鳴を上げながら、真つ逆さまに落ちていき、

ドッポーン！

海に落ちた!!?何やってんだあの2人は!!??

俺は慌てて、水面を見るがボコボコを水泡が上がるだけで浮いてくる気配がない。  
居ても立っても居れず、俺は2人を助ける為に海に飛び込んだ。

# ホームズ…… いいえ教授の帰還です。

## キンジ視点

女子寮前の温室にいた理子からアリア対策の為、アイツの情報を得た俺は自分のマンションに戻らず、零のいる女子寮に向かった。

以前話していた『武偵殺し』について解った事があるから情報交換をしようとの事だ。男子の俺が女子寮に足を踏み入れるのは、気が引けるが兄さんの仇である『武偵殺し』を捕まえる為だ。ココはこらえよう。

女子寮に入り、途中ですれ違う女子達の痛い視線を無視しながら、俺は真っ直ぐと零の部屋を目指す。

3階の奥にある部屋のドアに到着し、ドアチャイムを鳴らす。

ピンポーン

「零。来たぞ」

「どうぞ 入って来たまえ 開いて ますよ」

ドアチャイムを鳴らし、声をかけると変な返事が聞こえてきた。

確かに零の声だが、少々おかしいーまるでツギハギにしたような声だ。

疑問に思いながらもドアノブを捻る。

ーガチャ

言われた通り、部屋の鍵は開いていた。

不用心だな。いくら武偵高の寮とはいえ侵入されたらどうするだよ。

俺はドアを開けて、部屋の中に入るとギョツとした。

零の部屋の中は植物園だった。

理子との待ち合わせ場所に指定した温室と同じような状態だった。

玄関で俺を最初に出迎えてくれたのは、モンステラと呼ばれるビル内の飾りとして見られる、びりびりに破れたデカイ葉っぱの観葉植物だった。

なんじゃこりや!??前に来た時はこんなの無かったぞ。

よく見ればモンステラだけじゃない。

温室でよく見られる黄色い花が特徴のアランダ、「森のバター」と呼ばれる黒色の実のアボカド、花の後ろから垂れる距の部分が長い白い花のアンブレカム・セスキペダレ、5弁の星のような花の夜来香。

色とりどりの花だけじゃなく、最初のモンステラのような植物ー背が高く葉っぱが細長く幅は狭い棕櫚竹、白い糸のもじやもじやが特徴の滝の白糸、葉っぱの広がりがないクナパキラ、細長い葉っぱのパピルス、ハート形の葉っぱのホア・カーリー。

ここはジャングルかよ。アイツはいつから探検家に転職したんだ？しかも、かなり暑いな。女子寮前の温室とはエライ違いー温度差だ。

あまりに暑いので、上着を脱ぐ。

ガサガサと植物をかけ分けながら、零がいるであろうリビングを指す。

「庭師が必要だな」

ーコッコツ

ーメエ

歩いていると植物の中から何かの鳴き声が聞こえてきた。

聞こえた方に俺は目を向けると、ニワトリとヤギがいた。

ニワトリは俺の前を横切って植物の中に消えて行き、羊は何かしらんが紙をムシヤムシヤと食べながら、ジーと俺を見つめている。

いつからココは動物園になったんだ……

「キンジ君のアホー、キンジ君のアホー」

呆れる俺の真上から間の抜けた声が聞こえてきた。

誰がアホだ!!?

視線を上に向けると、そこには木に止まったオウムが目についた。

俺に発見されても気にも止めずアホと連呼する。

犯人はコイツか…… しかもアホだと？ 零のヤツ、オウムにいらん言葉を覚えさせるなよ。

オウムを無視して再びリビングを指した俺は、ようやくお目当の人物である零を見つけた。

ソファアールをベランダ側に向けて座り、俺の方に背を向けている。

「おい、零。来たぞ」

「よく見つけたね。感心したよ」

ベランダの窓に顔を向けて俺の方に目を向けてこない。

背中越しに見ただけだが、零から生気を感じない。

疑問に思った俺は、近づいてみると疑問の正体を知った。

零だと思ったソレは零じゃなかったー零そっくりの人形だった。武偵高校のセー

ラー服を着せた人形をソファアールに座らせただけだ。

どういう事だ？ 確かに零の声が聞こえた筈だが……

人形を調べてみると、人形の胸の部分に小型スピーカーが仕込まれていた。どうやら

コレで話していたようだ。

俺が話しかけたタイミングといい、何処かで俺を見ているのか。

ーバシユツ！

空気を切れる音と共に背中に痛みを感じた。

痛ッ！何だ!??

俺は背中に手を回してみると、細長いモノが手に触れた。抜いてみると、それは吹き矢だった。

スポーツ用品や玩具としての吹き矢ではなく、狩猟などで使われる本格的な細長い吹き矢だ。

どうして突然こんなモノが刺さってくるんだよ？毒とか塗られてないだろうな？

矢が飛んできた方向を見るが、そこにはココに来る途中で出会った羊が、相変わらずムシャムシャと紙を食べているだけだった。

「あーあ、金次君一回死亡」

今度は森林の中から零の呆れたような声が聞こえてきた。

何処にいるんだよ？隠れんぼのつもりか。

「お前の勝ちだ。負けたよ」

俺は諦めてリビングの空いたソファアに腰を下ろす。

俺は隠れんぼをしにきたんじゃないんだぞ。付き合ってもらえん。

ーバシユッ！

ソファアに座る俺に空気の切れる音ー吹き矢の飛んで来る音が聞こえた。



痛ッ！今度は胸に刺さったぞ。

「ふふふ、驚いたかい？」

ガサガサと草を掻き分けて来た零の姿を見て、俺は飛び上がりそうになった。零はバスタオルを一枚身体に巻いただけだった。

真っ白なバスタオルからは、零の綺麗な素足が丸見え状態だ。

暑い室内のせいか、バスタオルを巻いた胸部には汗が滲み出ている。

「何でバスタオル姿なんだよ!? 服を着ろよ！」

「いや、観賞用植物を飾る為に室内を温室にしていたら、汗を掻いちゃってね。軽くシャワーを浴びてきたんだよ」

「だったら早く服を着ろ」

「ヤダ。また汗掻いちゃう」

零はキツパリと言いつ切る。

バスタオル巻いた姿で威張るな。正直目のやり場に困る。

目をそらす俺を見た零は、ニヤツと悪そうな笑みを浮かべると、

「暫くしたら服を着てあげるよ。チラッ」

バスタオルの下部——太ももの奥武藤曰く、絶対領域が見えるか見えないかの絶妙な部分をピラツと捲ってみせた。

「馬鹿ッ！見せてくるな！」

俺は慌てて腕を前にして視界を遮る。

人前ではしたくない事をするなよ。お前は痴女か！

「ごめんごめん！ほら、コッチを見て」

謝る零に俺はソーツと顔から腕を退かす。

「と見せかけて、ばぁーん!!？」

「うおッ！」

掛け声と共に零はバアッ！と身体に巻いたバスタオルをとった。

俺は咄嗟にソファーから飛び上がり、零に背を向けた。

やめろ!!？バスタオルを取るな！後ろを振り向くなよ俺。何があっても後ろを向くな。ある意味でコレはホラーな状況だ。後ろに貞子がいると思え遠山 金次よ。目を合わせたら死ぬ。

必死に背を向ける俺の後ろで「ププッ！ぶぶぶ」と零が笑いを堪えている。

「ごめん！ふざけすぎたね。コッチを見てよ金次君」

「誰が見るか。この痴女め」

「あー、まったく。ほら！」

「うわッ！」

背を向ける俺の前に零がやって来た。

バスタオルは巻いていかなかったが、代わりに水着を着ていた。

去年の海水浴で着ていた真つ赤な水着だ。日焼けを知らない肌が水着を目立たせる。

本当にこいつは白いな。野外でも活動するから、少しは日焼けしてもいいんだが。

「驚かすなよ。寿命が1年縮んだぜ」

「私の水着姿を見たんだから、そこは1年伸びたと言いなよ」

「その格好でいられると迷惑だ。さつきも言ったが早く服を着ろ」

風邪を引いても知らんぞ。

「金次君。さつきも言ったけど温室にするのに室内温度を上げてるから、暑くて服なんて着られないよ」

零はオウム返し風言葉返してきた。

よほど暑いのか？首筋には汗が垂れている。

そんなに暑いなら何故部屋を植物園——温室にしたんだ？

「この植物は何だ？園芸家でも目指しているのか？」

「よくぞ聞いてくれたね。これを見てよ」

そう言つて零は、植物の一角をガサガサと漁りだし、ナニかを取り出した。

零が取り出したソレは、小型スピーカーとボウガンの付いた——銃座のようなモノ

だった。

「何だよコレ？」

「2日前の『武偵殺し』が使っていたオモチャヤーセグウェイを覚えているかい？」

零の言葉に2日前の朝の出来事を思い出す。

『セグウェイ』ー無人で、人が立つて乗るべき部分にはスピーカーと1基の自動銃座がついたタチの悪いアレか。

「コレはそのボウガンバージョンだよ。大破したセグウェイを回収して調べて同じようなモノを作ってみたんだ」

「よく作れたな」

「コレは中々面白いよ。遠隔操作ー特定の電波で自由自在に操作できる。スピーカーで脅迫できるし、カメラを搭載すれば高みの見物と洒落込みながら、武偵を襲える」

零の手にはいつの間にかスイッチのようなモノが握られており、カチツと押した瞬間、

ーバシユ！

銃座に取り付けられている吹き矢から矢が飛び出した。

飛んだ矢はそのまま壁にズン！と突き刺さった。

「金次君の身体に刺さっている矢は、刺さっても画鋲程度のダメージしかないけど、今、

放ったコレは威力を上げてある。矢は銃と違って、銃声もしないからこんな森林で使えば効果覷面だと思わないかい？」

銃座に付いたボウガンをコンコンと叩きながら尋ねてくる。

矢は銃と違い単発で外せば、装填に時間が掛かるが、それは対象と面と向かって相手取る場合だ。

こんな視界の悪い――何処に潜んでいるか分からない空間で使えば、仮に外しても危険は少ない。

銃と違い銃声もしないから、居場所を特定され難い。おまけに、同じような装置を複数設置しておけば、相手に戦力を把握されない上に誤認させる事もできる。攪乱や暗殺にはもってこいだな。

「それで？こんな装置を使って俺に危機感を持つてほしかったのか？」

「まあ、それもあるね。仮に『武偵殺し』が暗闇やこんな森林で同じような事をしてきたらどうだい？今、金次君に刺さってる矢は画鋏程度――吹き矢だけど、このボウガンや前日のセグウェイに装備されていたUZIだったら、今頃お陀仏だよ。言ったよね？一回死亡って」

零の言葉に俺は思わず、背筋がゾツとした。

確かに零の言う通りだ。前日は白昼堂々の犯行だったから良かったものの、『武偵殺

し』が零のようなスタイルで襲ってきたら、俺は今頃お陀仏だっただろう。

「君はまだまだ危機感が足りてないね〜」

「…… すまん」

俺は一言謝る。

これじゃ、どっちが守られているか分からんな。昨日の巻き込みたくない発言を取り消したいぜ。

「君が危機感の足りてない間、私は研究で忙しくてね〜。羊の副腎からホルモンを抽出したり、この独創的な装置を考案したり、しかもその間に我が武偵人生で、最も重要な事件についての捜査も進めていたのだよ」

気落ちする俺の側に零はやってくると、それまでの経緯を語りだした。

研究って、あの不気味なキッチンでまた変なモノでも作っていたのかよ。羊やニワトリが部屋にいたのはその為か。

チューチューチュー

植物に隠れた一角〜キッチンの方から何かの鳴き声が聞こえてくる。

「おっと！目を覚ましたか」

零はその鳴き声で思い出したのか、キッチンの方に歩いていく。

俺も気になったので後に付いていく。

「よし、みんな生きが良くて宜しい」

キッチンのテーブルにあったのは、瓶詰めの生きたネズミだった。よく実験なんかで見られる毛色の白いネズミだ。

一、二匹どころじゃない。ぎつと見た限り十匹はいるぞ。

「このネズミ達は何だ？お前のペットか？だとしたら増やすなよ。知っているだろうが、ネズミは繁殖力がバカにならない」

「違うよ。コレはエサだよ。あと、新薬の実験も兼ねて眠らせていたけど」

エサ？飼っている本命のペット用か？

「どんなヤツに食わせるんだよ？蛇か？」

「蛇じゃないよ。彼女にだよ」

零がヒューイ♪と軽く口笛を吹くと、ガサガサとキッチンの入り口の草を掻き分け、ソレは姿を現した。

正体は蜘蛛だった。それもただの蜘蛛じゃない。胴体は緑と紫と赤が入り乱れ、長い足は毛むくじやらずで、まるまると太っている。

大きさは丁度、俺の手の平くらいだ。

零はガサガサと張ってくる蜘蛛を手のひらに乗せ、

「彼女の名前はマダムと言ってね。前にホテルを経営している知人から貰ったんだ」

俺の方にグイと差し出しながら紹介する。俺の姿を捉えた蜘蛛——マダムは複数の単眼で怪しく俺を睨む。

正直言つて、見せないでほしい。よく蜘蛛なんて触れるな。とても俺には触れられん。

知人から貰つたと言つたが、蜘蛛をプレゼントするなんて変わった知人だな。見るからにコイツは毒蜘蛛だろ。危ねえぞ。

「頼むから籠に入れてくれよ。絶対にソイツ毒持つてるだろう」

「コラツ。金次君、レデイに対して——ソイツと呼んだら悪いよ」

俺の言葉に機嫌を損ねたのか——マダムは前足を上げ、シャーと低く唸り俺を威嚇する。

まさか、さっきの言葉が気に入らない——人間の言葉を理解しているのか？

「彼女は非常に賢い——人間の言葉を理解できるくらいにね。それと金次君の言う通り、強い毒を持っている。次に彼女の機嫌を損ねたら、ガブリとやられちゃうよ」

零は手に乗っているマダムを撫でて宥める。

「コ…… マダムはお前のペットか？ だとしたら変わつてるな蜘蛛をペットにするなんて」

「蜘蛛をペットにしている人は沢山いるよ。あつ！ それと、訂正するけどマダム——彼



女は私のペットじゃない」

「お前が飼っているんだからペットだろう？」

「違うよ金次君。彼女はあくまで私の同居人だよ。私に懐いている訳じゃないから、油断すれば私もお陀仏だよ」

そう言つて零は瓶詰めに使われているネズミを一匹取り出すと、マダムに差し出した。尻尾を持たれ逆さ吊りになつたネズミはもがくが、抵抗虚しくマダムに首筋を噛み付かれた。

キュツ！と短い悲鳴を上げ、ネズミは暫く暴れるが直ぐに動かなくなつた。

「マダムは獲物を襲う際、一度で仕留めず毒で弱らせ様子を見た後、倒せる——食べられると判断してから捕食するんだ」

「本当に賢いんだな」

「まったくその通りだよ。それと彼女はグルメでね——食物はしっかりと選ぶ」

零はそう言つて、ネズミを捕らえたマダムをテーブルに置いた。

「レデイの食事をジロジロ見るものじゃないよ。私達は別の部屋に移動しようか。あんまり見ているのは彼女に失礼だよ」

マダムをキッチンに残して、リビングに戻る。

「放つておいて大丈夫なのか？いきなり襲つてきたりしないだろうか？」

「大丈夫。マダムには私から襲わないようー相手に教えてあるから。勿論、その中には金次君も含まれているよ」

「相手を識別できるのか」

「うん。襲わない相手、その付添人なんかは襲うなつてね」

「……なあ、まさかとは思うが、放し飼いにしないでらうな？」

「おつ！よく分かったね。その通りだよ」

やつてんのかよ!? キッチンに現れた時に怪しいと思ったが……

あんなオツカナイ蜘蛛が部屋に放し飼いの状態だと思おうとゾツとするぜ。番犬ならぬ番蜘蛛だなアレは。

「蜘蛛に部屋の番をさせるよりも、防犯カメラの方がよほいいと思うぞ」

「私は自分の部屋ープライベートルな空間には監視装置の類は置きたくないんだよ。なんて言えばいいかな……カメラがあると推理に集中できないんだよねー。監視されてる感があつて」

零はリビングのソファーに座ると足を組んだ。

水着姿でそんなポーズを決められると、なんだか変な感じがするな。

「まあ、それはさて置き……前に約束した『武偵殺し』についての捜査状況を話そうか」

零は思い出したかのようにソファから立ち上がると、別室に向かった。

別室——そこは前に零が事件の関係性を調べるために作成した——事件の関係図、通称蜘蛛の巣がある部屋だった。

相変わらず、ここは一段とゴチャゴチャとしているな。天井や壁一面には地図が貼られ、おまけに地図にはそこで起きた事件の情報——新聞記事・現場写真・聴取一覧が赤い糸で結ばれている。

「ドリンクでも飲みながら話そうじゃないか……温いけど。『武偵殺し』を捕まえる前祝いだ。私と金次君が挑む大事件となるだろう」

「相変わらず見事な関係図なこと」

「金次君の目の前にある——蜘蛛の巣を辿ってごらん」

俺は言われた通りに目の前の関係図を辿っていく。

「では質問。イギリス——ロンドンの武偵を巻き込んだバイクジャック。アメリカ——ニューヨークの武偵車両のカージャック事件。そして日本——浦賀沖でのシージャック……その共通点は」

辿っていくと、兄さんを巻き込んだシージャックに行きついた。

浦賀沖事件……俺に『武偵殺し』を追うきっかけを作った例の事件か。

更に辿って行くと『イ・ウー』というワードにたどり着いた。

「お前が作った関係図によると、『イ・ウー』と『武偵殺し』は関係しているとあるが」

「『イ・ウー』——これは個人を表すのではなく、組織名だと私は考えているんだよ」

「組織？ 仮にそんなのが存在するとして、俺たちの追っている『武偵殺し』はそこに所属しているか？ その事を立証する証拠はあるのか？」

質問すると零は「これだよ」と言い、別の壁——蜘蛛の巣に貼られた新聞記事をトントンと指し示す。

それは『武偵殺し逮捕』と書かれた記事だった。

「これはアレだろう。『武偵殺し』が替玉として他人を身代わりにした記事じゃねえか」

「それだけだと思ukai？ この蜘蛛の巣を辿ってごらん」

零の言われるがまま、俺は再び関係図を辿った。

コレが何になるってんだ？

渋々、辿って行くと『武偵殺し』の事件だけじゃなく、ヨーロッパ全土で勃発した誘拐事件、超能力者——通称『超偵』の謎の失踪事件にぶつかった。

「スケープゴートにされた人物には『武偵殺し』だけじゃなく、今辿って貰った事件にも関与した容疑がかかっている——個人でね。これらの件で懲役864年が課せられているよ」

零の言葉に、俺は目を丸くした。

864年つて、殆ど終身刑じゃねえか。

「1人の人間が単独で世界中でこれだけの犯行を、同時に行えると思うかい？ 私の計算では、これだけの犯行を世界中で行うのに、最低でも200人近い共犯者が必要にはなるがね」

「確かにな……よく見れば、別の事件と他の犯行時刻が同時刻のモノもあるじゃねえか。どう考えても単独では無理だ」

「これだけの事件——罪を、個人、に被せるのには、単独犯、では無理だ。組織的な犯罪集団が関わっていると見て間違いないよ」

「これらの事件には『イ・ウー』つてのが関わってるのか。この犯人たちも『イ・ウー』の一味か」

「そういう事だよ」

一つの記事から組織犯罪を立証してみせた。

こいつの頭の良さには感服するぜ。しかし、組織名『イ・ウー』をどうやって知ったんだ？

「記事を見て分かるけど、これには逮捕された犯人——スケープゴートについて殆ど書かれていない。詳細が故意に隠されている。ただ単に逮捕としか書かれていない」

「故意にだど？ 記者が……或いは政府が関わっているのか？」

「私も気になってね。実は今日の昼休みに容疑者が留置されている新宿警察署に行ってきた」

警察署って、替玉の勾留場所まで特定していたのかよ。道理で昼休みに見かけなかったワケだ。

「面会したのか？」

「できなかったよ。警察曰く、『身内か付添人以外はお断り』だそうだよ」

——手がかりなしか。

「しかし、成果が無かったワケじゃないよ。容疑者には身内がいる。その自分はスケープゴートにされた容疑者仮にKとしよう。初審に有罪が言い渡されたK氏を無罪にする為に『イ・ウー』による犯行を立証しようとしている。自ら真犯人達を追ってね」

「ソイツは警察か武偵なのか？だとしたら、凄いな。個人にこれだけの罪を着せることができる存在——組織を相手取るなんてな」

「まったくだね。惚れ惚れするよ」

零は本当に關心しているのか満足気だ。

コイツが見たこともない相手を、ここまで褒めるのは珍しいな。

「その人物には味方がいるみたいだよ——弁護士がね。どうやら、犯行を立証するため二審・最高裁まで引き延ばしてくれてるみたい。でも、いつまでも引き延ばしは効か

ない。その人物は焦っているだろう。タイムリミットは刻一刻と過ぎていく」

「……なあ、零。もし俺とお前で『武偵殺し』を捕まえたら、この替玉にされた人を助ける事はできるのか?」

「おや?正義の味方の血が騒ぐのかな?」

零が俺に尋ねる。

正義の味方って、そんなんじゃないやねえよ。ただ……気に入らないだけさ。『武偵殺し』もソレに関わってる『イ・ウー』とか言う組織もな。

「まあ、助ける事はできると思うよ。私の計算上、『武偵殺し』の罪122年分はチャラにできる」

「122年って、無罪にできないのかよ」

「そりやそうさ。『武偵殺し』の罪は無罪にできても、後の冤罪742年が残っている。ゼロにするには他の事件の真実——真犯人を裁判所に引っ張ってこないとね」

助けるには、他の事件を解決しないと無理ってワケか。

「もし金次君が本気でK氏を助けたいと思うなら、私も全面的に協力してあげるよ」

零は部屋の隅に置かれた、ガラスの容器と2つのグラスを手に取ると、容器に入った水のようなモノをグラスに注ぎながら言った。

「いいのか?『武偵殺し』の件は兎も角、他の事件は関係ない事だぞ」

「私はね金次君。この『イ・ウー』がどうも気に入らなくてネ。正直、存在自体がムカつくんだよ」

零が俺の目にも分かるくらいに怒りを露わにした。

今日は本当に珍しい事ばかりだな。ここまでコイツが怒りを他人に見せる事なんて無いのに。

零も武偵だし、他人に冤罪を着せてのうのうとしている組織が許せないって、ワケだな。

「いいかい。コレは影を追う戦いだよ。猫と鼠、教授と探偵、マントと短剣」

「蜘蛛とハエじゃないのか？」

俺は零の言葉を訂正する。

こいつを動物に例えるなら蜘蛛が似合っているだろう。張り巡らせた巣にハエー！ 犯罪者がかかるのを巣の中心で待ち。かかった瞬間、一気に食らう。

「悪くない例えだね」

零は自分のグラス—水のようなモノを注いだグラスに口をつける。

俺の分も注いでくれていたようなので、遠慮なく手に取る。

丁度よかったぜ。こうも暑いと喉が乾く。

飲もうとグラスに口をつける際、刺激臭がした。何だ？



フツと側にある容器に目が止まった。

ラベルが貼ってある……名前は『ホルムアルデヒド』とあった。

「おいっ!!?これは死体の防腐液じゃねえか!」

「そうだよ。君も飲みなよ。暑い時には最高だ」

俺を無視して零はグイと飲み干す。

『ホルムアルデヒド』ー人体へは、濃度によって粘膜への刺激性を中心とした急性毒性があり、蒸気は呼吸器系、目、のどなどの炎症を引き起こす。皮膚や目などが水溶液に接触した場合は、激しい刺激を受け、炎症を生ずる。発癌性があると警告されている。

「それ以上飲むな。死ぬぞ」

「異常かな?」

「ああ、文句なしでアブノーマルだ」

「放心状態?」

「病気だ。鎮静剤が必要だ」

それを最後に暫く沈黙が続く。

まさかとは思うが、コレを使って料理なんてしてないだろうな?これは調味料じゃないからな!

「まあ、さて置き……『イ・ウー』の壊滅をこの目で見る。そして、邪悪な陰謀が広が

るのを必ず阻止する」

零が話題を変えてきた。コイツめ…… はぐらかしたな。

『イ・ウー』は何をするつもりなんだ？ 目的は一体何なんだ？」

「馬鹿な事を…… いいかい。悪者が罪を犯すのに理由などないんだよ金次君。誰も、警察も、政府も、『イ・ウー』も……」

「俺たちが止める、だろう？」

俺はグラスを差し出す。

「これを飲めば一緒に捕まえられるのか？」

「絶対とは言い切れないけどね♪」

「はぁー、その間にお前が身体を壊さない事を祈るよ」

ーカーアン！

そう言つて乾杯する。

俺は飲む振りをするが、零はまた飲んだ。コイツの身体はどうなっているんだ？ そもそも味覚の方が心配だ。

「ところで気になっていたんだけど、腕時計はどうしたんだい？ いつも手につけていたのに」

「ああ、ここにくる途中で理子に壊されてな」

「女子寮前の温室——バラ園でだね」

「俺はバラ園で会ったとは言つてないぞ」

「この金次君から僅かに漂つてる香り…… やわらかな杏色の花を咲かせる香りの良いアンティークタイプのバラ『アンドレ・ル・ノートル』。」

フランスの造園家と同じ名を持つ薔薇があるのは学園島でココ——武偵高のバラ園だけ。香り具合からして、そこまで時間は経つていない。よつて必然的にバラ園にいた事になる」

零は俺に近づき、クンクンと匂いを嗅ぐ。

香り具合つて、よく刺激臭が漂う中で分かるな。

「探偵科で情報怪盗の異名を持つりこりに何を調べさせたのかな？」

「聞かない方がいいぞ」

俺の答えに零は首をコテンと曲げる。

俺は2日前——自分の部屋でも出来事を思い出す。

目の前にいる零はりこりに調べさせた相手——『神崎・H・アリア』と取っ組み合いになつた挙句、ペランダから海に落下した。

俺が慌てて海に飛び込んで助けにいくと、2人は懲りず水中でも取っ組み合いを続けていた。

意地なのか？お互い相手よりも先に水面に上がるのが嫌で息が切れるまで喧嘩していたな。

「まあ、別にいいよ。それで壊れた時計はどうしたんだい？」

「理子がお詫びに直してくれるってさ」

「ふーん。成る程ね…… ならさ、それまでの間、私の時計を使いなよ。丁度余っているからさ」

「あのクラシカルな懐中時計か？アメリカのオークションで買った」

「違うよ。金次君が使っているタイプと同じ腕時計だよ。後で貸してあげるよ」

貸してくるなら有難いぜ。

携帯でもいいが、咄嗟に時間を確認するのに腕時計は必須だからな。

ードサツ

部屋の入り口で何が倒れる音が聞こえた。

目を向けると、羊が倒れていた。さつきまでムシャムシャと紙を食べていた羊だ。

「あの羊に何をした？」

「トウゴマを加工した紙を食べさせた。果実は非常に毒性が強いからね」

『トウゴマ』トウトウダイグサ科トウゴマ属の多年草。別名、ヒマ。種子から得られる油はひまし油として広く使われており、種にはリシン という毒タンパク質がある。

俺はやぎに近づき様子を見るが、呼吸が弱くなってきている。

「おいっ！このままじゃ死んじゃまうぞ……！」

「これは絶好の機会だ！」

何かピンときたのか？ 零は突然部屋を漁りだし始めた。

そしてお目当の品物——小型の注射器を見つけると、

「この特效薬を……！」

ぐさッ——！

羊の心臓部に注射針を突き立てた。

「副腎から抽出したホルモンと牛の肝臓で作った復活薬を試してもいい？」

「遅い。やる前に言え」

俺が呆れていると、さっきまで弱っていたのが、ウソのように羊が飛び起きた。

「おい。急に元気になったぞ」

「うん。そうだね」

「よかつたらくれよ。もしかしたら、必要になるかもしれない」

「いいよ。進級祝いにあげる」

零は「はい」といって注射器を渡した。

俺は有難く受け取った。

## 送り迎え

## 零視点

一通り話し終えると、窓から見通す『学園島』を夕日が金色に染めていた。

「ねえ、金次君。この後はどうするんだい？」

「どうするって、今後の予定の事か？まあ、そうだな……このままマンションに戻るかな」

金次君は頭をポリポリかきながら答える。

真つ直ぐ帰るとは良い心がけだね。ここにお姉……じゃなかった、お兄さんが居ればきつと褒めてくれるよ。

お兄さんは今頃どうしてるのかな。金一さんもいいが、カナさんもいいよね。カナさんだけにどうしてるかな。なんちやって……笑えないか。まあ、彼女？彼の？の変身解除後、顔を真つ赤にして恥ずかしがる様子が一番笑えるが♪

「なら私も同行してもいいかな？」

「はあ？なんでお前まで来るんだよ？」

疑問に満ちた顔で私に答えを求める。

うん、そうなるよね。きっと彼は女子が無闇に男子寮に来るんじゃないって、今思ってるね。

しかし、同行しないと大変な事になる。何故なら金次君は監視されているからだ——『武偵殺し』にね。

2日前の朝でのカージャック。『武偵殺し』は金次君が通学で乗る自転車に爆弾を仕掛け、チャリジャックを仕掛けるつもりだったが、私が爆弾を撤去した為に急遽カージャックに変更した。まあ、カージャックはハッターだったがネ。

私の推理では犯人のターゲットは金次君。犯人のプランナー爆弾付きの自転車とセグウェイで金次君を追い詰め、最後は何処かで始末するつもりだった。しかし、私が妨害した為に台無しになった（金次君は助かったが、私の愛車が犠牲になった——アリアの所為で）。『武偵殺し』がこのまま終わりにするとは思えないし、一人で帰らせるのは心配なんだよね。

「おい！零。どうした？ボーツとして。熱でもあるのか？」

金次君の声でハッ！と我に帰る。いけない推理に夢中になっていた。

私の様子を心配してか？金次君が私の額に手を当てて、熱を測る。ちよつと顔が近くないかい？ヒスらないよね？まあ、それはそれで面白くなりそうだがネ。

「大丈夫、熱は無いよ。夏風邪ならぬ春風邪にはなっていないさ」

「風邪と熱は違うと思うぞ」

「まあ、細かい事は気にしない気にしない♪」

「探偵科のエースの言葉とは思えないな……」

金次君が呆れる。

「熱がないならいいけどよ……それで？何でお前まで同行するんだよ？」

「お家に帰るまでが捜査です」

「なんだよソレは？遠足じゃねえぞ」

金次君がワケがわからないという顔をする。

金次君……前に言ったと思うけど、君は実に馬鹿だなく。この部屋の様子にしろ、トラップにしろ色々ヒントを与えてるつもりなんだけどなく。危機管理……自分は狙われているとね。

「君は今、狙われているんだよ」

「狙われているだと？誰にだよ」

『『武偵殺し』にさ』

私のカミングアウトに金次君は目を見開く。

「何で俺が狙われるんだよ?!?この前の朝の朝のカージャックの事を言っているのか?でも、あれは俺もそうだが、零や白雪も狙われたと捉えられるぞ」



金次君がこの前のカージャックを振り返る。

おっ！珍しく推理が冴え渡るね。関心するよ。

「そう見えるのは仕方ないか……これは探偵科にも黙っていた事だけど、実はカージャック当日、金次君の自転車に爆弾が仕掛けられていたんだよープラスチック爆弾。自転車どころか車も吹き飛ばせるサイズのがね」

「はあ!? 初めて知ったぞ。それと何でそんな重要なことを報告しないんだよ？ 事件と関係ありまくりじゃねえか」

「報告しなかったのはワケがあるのだよ」

「どんなワケがあるんだ？」

「まあ、それについては出てから話そうか。というワケで同行してもいいかい？」

「…… 勝手にしろ。でも、ちゃんと聞かせてもらうからな」

金次君は同行を許可してくれた。

やはり、気になるよね。報告しなかったのは、『武偵殺し』は捜査状況ー武偵に内通しているからなんだよネ。あの時、報告していれば相手に情報を教えることに繋がるからさ。まあ、そこは外を歩きながら話そうか。

我々は監視されているー寮の裏口から出ようか。

「よーこやー」

玄関に向かう。

私が入撃！金次郎（家じゃないけど）に行こうとすると、

「ちよつと待つてええええええええええ！！？」

金次君が私の肩をガシツと掴んできた。

ちよつと手を離してよ。何気なく痛いんだけど？

「どうしたんだい？何か問題でもあるの？」

「出る前に服を着ろ」

自分の姿を確認する。

金次君を揶揄うネターー観賞用植物を飾る際、汗を掻いたので金次君を待っている

間、彼を揶揄う為に水着に着替えた。

この部屋にいる間、ずっと水着のままだったね。着替えるのを忘れていた。

私は着替えー変装の衣装がある別室に向かう。

部屋に入る際、ドアの隙間から金次君にチラツと顔を向けて、

「覗かないでね」

「誰が覗くか。待つてやるから早くしろよ」

一言だけ揶揄ってみた。

ははは、少しはエッチくてもいいのね。部屋の外でさり気なく待つててくれるなん

て金次君らしい。

着替えを済ませ、部屋から出る。

「お待たせ金次君」

「それ、変装のつもりか？」

金次君が驚いている。

襟は外し、スカートを折って丈を短くし、袖を捲り上げ二の腕が出ている状態。頭にはハーファアップの金髪のカツラを、トドメとばかりに爪には爪半月を隠す程度の渋いピンクのジェルネイル！薬指にだけ施されたラインストーンが健気さをアピール！

これはアップルに教えてもらった変装術だ。泥棒だけに変装が得意なんだよね。あの子。時々、私そっくりに変装してイタズラしたりもするな。

「その格好は校則違反じゃないのか？」

金次君が愚問をぶつけてきた。

今更だね。一度、学校を見て回りなよ。世紀末みたいになつてゐる所もあるからさ。

それにうちの学校って、校則はないようなモノじゃないか。変装の一つや二つ、捜査には必要だよ。まあ、今より校則をメチャクチャにした私だけだね。

「大丈夫だって、この格好はちゃんと校則の範囲内だよ。校則は破る為にあるモノさ」

「……………生徒会長が言うようなセリフじゃないな」

呆れながらも金次君は部屋から出る。私は玄関に立てかけているステッキを手に取ってから部屋を出る。これがないと始まらない。

さて、気を取り直して出発だ！

「そのカツラは一晩中被ってるつもりか？」

「君のマンションに到着したら外すよ」

「俺は『武偵殺し』に狙われてるんだろう？なのに、一緒に来るお前が、そんな格好でいいのか？」

「目立ち過ぎると逆に目立たないのさ♪」

男子寮に到着すると、窓から見える夕日が沈もうとしていた。

武偵高とこの寮、生徒向けの商店だけが乗っているこの人工浮島、元々は東京湾岸の再開発に失敗して叩き売りされていた土地だ。その証拠に、レインボーブリッジを挟んですぐ北にある同じ形の人工浮島は未だに空き地で、『空き地島』とあだ名されている。私はこの空き地島を重宝しているがネ。鳩の餌やりから、密会など様々だ。

そのがらんとした浮島の南端には風力発電機がノンキに回っている。うーむ、のどかなだね。いいねこの光景。

『太平洋上で発達した台風1号は、強い勢力を保ったまま沖縄上空を北上しています』

ニュースを流す液晶テレビが、この部屋の心地よい静けさを際立たせる。

あー、金次君の部屋はいいね。今、ここにいるヤツを除いたらネ。

「遅い」

ギロ、とソファアールから頭を傾けてアリアはこつちを見てきた。

馬鹿な……何故、アリアがここに居るの？今頃、ロシアの驚異的な身体能力で有名なコサツク出身の連中に歓迎されているハズ……しくじったか。闇に紛れて人を襲うー暗殺が得意とあつたのに、使えないなー。別の駒を探すか。

「アンタも一緒に来たの？ベランダでの一件が懲りてないみたいね」

アリアが私に顔を向けてきた。アリアは前髪を上げてパツチンと銀色の髪留めでまとめ、おでこを出していた。

「ベランダではお世話になったね。カナツチさん」

「あたしはカナツチじゃない！浮き輪があれば……！」

ハッ！とした顔で言葉をつむる。

それは自分がカナツチと認めたようなモノだよ。ベランダー海から落ちた私とアリアは水中でも取っ組み合いになった。カナツチのクセに私と殴りかかってきた。途中、飛び込んできた金次君に止められたけど……殴り合いなら、次は負けないー

陸ではね！

「どうやって入ったんだ」

金次君が愚問のような質問をする。大方、意思表示の為かな。

「あたしは武偵よ」

ほら愚問だった。金次君もそう思うよね。

ここのカードキーを偽装したか。鍵開けは武偵技術の基礎中の基礎だからね。私も持っているし。

「あんたはレディーを玄関先で待ちぼうけさせる気だったの？許せないわ」

「逆ギレして海に落ちるようなヤツはレディーとは呼ばないぞ、でぼちゃん」

金次君……それは私にも言ってるのかな？

た、確かに海に落ちたさ！あの一件は大人気なかったと反省しているよ。だからさ、その言葉は撤回してくれない？本当にお願いだから。

それにしても、でぼちゃんね……

「でぼちゃん？」

「額のでかい女のことだ（さ）」

金次君とハマった。おおく奇遇だね。

でぼちゃんの意味がわからないとは、アリア、君は実に馬鹿だな。

「――あたしのおでこの魅力が分からないなんて！あんた達いよいよ本格的に人類失格

ね」

アリアは大げさに言うのと、ペー、と舌を出した。

「私達が人類失格なら、君は人間失格だよ」

「何処が失格なのよ！」

「おいつ！さり気なく俺を含めるな」

「この額はあたしのチャームポイントなのよ。イタリアでは女の子向けのヘアカタログ誌に載ったことだってあるんだから」

アリアは私達に背を向けると、楽しそうに鏡をのぞきこんだ。

ふーん、イタリアのヘアカタログ誌にね。なら、今度は額に『肉』と書いて載ってごらんよ。スキがあれば絶対に書いてやろうー油性マジックでネ♪

「さすが貴族様。身だしなみにも気を遣われていらっしやるわけだ」

金次君は洗面所に入って、ちよつとイヤミな口調で言つてやった。  
するとアリアは、

「……あたしのことを調べたのね？」

なぜか嬉しそうに私の横を通り過ぎて、金次君の元にやってくる。

そう言えば私の部屋に来る前に、りこりんと会つてたんだよね。金次君が彼女と会う理由は情報収集だろう。この発言からして、りこりに調べてもらったのは、アリアに

ついてか……振り返ってみれば、私はアリアの事を知らない。調べなかった、いや調べようとしなかったね。今度、本格的に調べてみようかな。

私は横目でアリアを観察する。

日本語は流暢だけど、日本人じゃないー顔つきからしてクオーターかな。

イタリアのヘアカタログ誌に載った事があるー海外活動経験あり。

「ああ。本当に、今まで1人も犯罪者を逃したことがないんだってな」

「へえー1人も逃した方がないなんて凄いね。小学生みたいなのに」

「小学生みたいは余計よ。それは兎も角、あんた武偵らしくなってきたじゃない。でもー」

そこまで言うときアリアは壁に背中をつけ、ぶらん、と片脚を蹴るような仕草をした。

「その情報は間違いよ。2人逃したわ。1人はイギリスで、もう1人は日本でね」

「へえ。凄いヤツもいたもんだな。誰を取り逃がした？」

「気になるね。聞かせてよ」

1人は予想が付くけどね。

おそらく、今この部屋の洗面所にいる……

「1人はあんたよ」

ぶつーと、名指しされた金次君は水を盛大に噴き出してしまった。



やっぱりね。あのセグウェイの一件だろう……私のポルシエ。

「大丈夫かい金次君？」

私は金次君の背中をさすってあげた。

すると、アリアは私を睨んできた。どうしたんだい？さては、悔しいのかな。

「俺は犯罪者じゃないぞ！なんでカウントされてんだよっ！」

「強狼したじゃないあたしに！あんなケダモノみたいなマネしといて、しらばつくれるつもり!?このウジ虫！」

「あー、確かに。アレは強矮だよー金次君。私から見ても立派な強褻だー。金次君、有罪」

「零まで!?アレは不可抗力だつて！弁論してくれ！」

金次君は助けを求め。

弁論してくれつて、私は君の弁護士じゃないよ。大袈裟だよ。

まあ、アレは不可抗力ーとして許してあげようか。チラツとアリアを見る。がると犬の様に唸っている

やれやれ、まだご機嫌斜めだね。ここは話題を変えるのが吉だね。

「まあ、この一件は兎も角、ねえアリア」

「何よ？あんたそこのケダモノを庇う気？」

「ただ、その前に君の言つてた犯罪者――2人取り逃がしたつて、言つてたよね？ 1人は金次君」

「だから、俺は犯罪者じゃないぞ」

「シヤラツプ！」

私は金次君の腹に右ストレートを打ち込んだ。ゴフツ！と前屈みになる。

私が弁論？してあげているんだから、君は被告席で黙つていたまえ。

「………… あんた容赦ないわね。そいつ、パートナーじゃないの？」

「ちよつとお灸を据えただけさ。さて、話を戻すけど、アリアが取り逃がした犯罪者つて、もう1人いるんだよね？ それつて、誰なの？ 私から見てアリアはかなりの手練れだと思ふんだけど」

「あんたに褒められるのは変な感じがするわ。まあ、いいわ。あたしが取り逃がした犯罪者つて言うのは、そのキンジとイギリスであたしが追つてた『ヤツ』よ」

アリアが語り出した。いいよ、この調子で強狼の一件をあやふやにしてやろう。金次君の為にネ。

『『ヤツ』？ もつと具体的な名前はないのかい？ 例えば異名とか』

「無いわ。武偵庁もマークできてない謎の犯罪者よ。でも、あたしはソイツの事を『犯罪相談役（クライムコンサルタント）』と呼んでいるわ」

『犯罪相談役』——その言葉を聞いた瞬間、私の頭に電流が走った。

ヤバツ！これって、私の事じゃない？おかしいな…… 武偵庁や警察にもマークされないような気をつけていた筈なのに。一介の武偵に追われるヘマはしてない。

「武偵庁もマークできてないって、そんな事があるのか？」

金次君が横槍を入れる。

だから、君は黙っていなよ。また、腹パンを食らいたいのかい？

「存在が立証できてないのよ。巷では存在してないなんて呼ぶ輩もいるわ。でも、あたしの直感では必ず存在してるわ」

アリアは自信満々に答える。

直感…… ねえ？

「そこまで言い切るには、直感だけじゃなく別の理由——根拠があるんでしよう？」

「あら、よく分かったわね。そうよ、ヤツは必ず存在する。だって、あたしがヤツの手先——尻尾を掴んだからよ」

「尻尾って、ソイツの手下でも捕まえたのか？」

「捕まえたというより、追い込んだというのが正しいわね。手下の二人組の強盗が逃走する際に言ったのよ。「犯罪相談役万歳!!」って、言いながらね」

「それって、イギリスの何処で？」

「イギリスの銀行——ロイヤルバンク・オブ・スコットランドよ」

イギリス4大銀行の名を上げた。

イギリス……銀行……二人組の強盗……ボニーとクライドか。

そう言えば、前にあの2人に「イギリスの仕事はどうだった？」と聞いたら、「ダ、大丈夫さ……」「Excellentだぜ……！」と挙動不審で言ってたな……情報流出の原因はあの2人だったか。補習が必要だネ。ただ補習するだけじゃ可哀想だし、手料理でも差し入れするか。

「でもさ、アリア。それって、『犯罪相談役』を取り逃がしたって言うより、強盗2人組を逃したって言うのが正しいよね」

私は話の主導権を奪う。

ここで『犯罪相談役』の存在を大ぴらにするワケにはいかない。いくら直感といっても油断できない。何処で確信に変わるか分からないからね。

「そうだぜ。今までの話を聞く限り、その強盗組が捜査を攪乱する為に敢えて、狂言を吐いたかもしれないぞ」

「あたしが存在するって言ったらするの！あたしの勘が言ってるわ！」

「はいはい、存在するんですね。教えてくれて、ありがとうね」

「あんた絶対に信じてないでしょう！態度がムカつくわ！」

アリアがキーツ！と金切声を上げて威嚇する。

さてと、ここで話の主導権を返してあげますか。

「話が変わるけど、この前の金次君をドレイにするって話。アレはどういう意味なのか？もしかして、アリアから逃げられた事が関係してるの？」

「え、ええ、そうよ！キンジ！あんたなら、あたしのドレイにできるかもしれないの！強襲科に戻って、あたしから逃げたあの実力をもう一度見せなさいっ！」

「あれは……あの時は……偶然、うまく逃げられただけだ。俺は探偵科Cランクの、大したことのない男なんだよ。はい残念でした。出て行ってくれ」

「ウソよ！あんたの入学試験の成績、Sランクだった！そして、レイ。あんたの成績もSランク。でも、入学して早々、探偵科Aランクになったわよね」

ほーう。勘だよりってワケじゃないみたいだね。

ある程度の情報戦はできるみたいだ。しかし、その程度の情報戦じゃまだまだだネ。恐喝君の方がもっと上だ。

でも、入学試験から、懐かしいな。あの後で分かった事だが、金次君は白雪さんでヒスつたらしいね。ごめんね、厨二病と勘違いして。

「と、とにかく……今は無理だ！出てけ！」

「今は？ってことは何か条件でもあるの？言ってみなさいよ。協力してあげるから」

協力してあげるーそのワードに反応してか、金次君の顔がかあああつと。赤くなつた。

「おや？ヒスるのかい？金次君には爆弾発言だったかな。」

「教えなさい！その方法！ドレイにあげる賄い代わりに、手伝ってあげるわ！」

また金次君の顔が一段と赤くなった。

『手伝わせてる』色々な光景を想像しているね。それ以上考えたら、渾身の右ストレートパンチを食らわせるよ？

「なんでもしてあげるから！教えて…… 教えなさいよ、キンジ……！」

「ずずいっ！とアリアが金次君に詰め寄つてた。」

「あつ！コレあかんヤツだわ。」

「私はグツと拳を握り、」

「セイツ!!?！」

「ぐはッ！」

「バァン！」

金次君の右頬にストレートパンチを叩き込んだ。金次君の身体が一瞬、宙を舞う。

「我が生涯で一番マトモに入ったパンチだ。」

「あんたいきなり何してんのよ!!?！」

「はい、金次君。今ので2回死亡」

床に伏せる金次君を見下ろす形で眺める。

気のせいかな。腫れた頬とは別に彼の顔が赤い。何なの？まさか、君ってそつち系？

「金次君。今の君は危機感が足りてない」

「き、危機感って、何がだよ？」

腫れた頬を撫りながら立ち上がる。

「私の不意打ちに反応できないほど、今の君は弱い。これじゃ、武偵人生真つ暗どころか幕を下ろす事になるよ」

「パートナーのあんたが何で不意打ちすんのよ？」

「犯罪者の中には武偵——それこそ相棒に変装して暗殺を企だてる者もいるからね。もし、私に成り代わった犯罪者に殺されても同じセリフを言うのかい？」

私はアリアと金次君の方を向いて、ニコツと微笑む。

その瞬間、2人が一歩後ろに引いた。

「さて、金次君。ここまで言えば分かるだろう？危機感が足りてない君に必要なモノが何なのか？それは強襲科でしか手に入らない」

「緊張感——強襲科で培った技術か」

「その通り。私の部屋でのやり取りからして、それは身に染みただろう」

「部屋って、あんたコイツの部屋に行ったの!!? 身に染みたって、何したのよ!!?」  
アリアが私を指差す。

ちよつと彼に強襲科での感覚を思い出してもらいたかっただけさ。

「まあ、そうだねー。あんな事やこんな事もしました」

ここでちよつとポツと顔を赤くする。

まあ、実際は大したことはしてないよ。

「へ、へ、へ、変態!!? あんた異性の相棒に手を出すなんて……! 本当のケダモノね!!?」

「違えよ!!? そんな事実はない! 零も紛らわしい発言をするな!!? あー! 分かったよ。戻ってやるよー強襲科に。ただし、お前と組んでやるのは一回だけだ。戻ってから一件だけ、お前と一緒に解決してやるよ。零もそれでいいな?」

金次君がヤケクソ気味だ。

「いいよー。でも、分かつてるよね金次君?」

「分かつてる。転科じゃなく、自由履修として、強襲科の授業を取る」

武偵高では、自分が在籍していない専門科目の授業も自発的に受けることができる。これは自由履修と呼ばれ単位には反映されないのだが、多様な技術が求められる武偵という仕事に就くため、生徒たちは割と流動的にいろんな科の授業を受けているのだ。



武債のエリアは金次君を欲しがっているー猛烈に。

ヒステリアモードの彼に会い、取り逃がしたことで、目をつけたのだ。

悪いけどエリア。君に金次君を、私のパートナーをあげるつもりはないよ。あくまで今回は協力という名のレンタルであって、購入じゃないからネ。もし、今回の件で手引かなかったら排除するから。

「……いいわ。じゃあ、この部屋から出てってあげる」

金次君の譲歩案に、やっとーエリアが出ていく宣言をした。

よかったね金次君。さて、ここの辺りで……

「あたしには時間がないし。その一件で、あなたの实力を見極めることにする」

時間がない？何か切羽詰まっているのかな？プライベート扱いね。

「……どんな小さな事件でも、一件だけだぞ」

「OKよ。かわりにどんな大きな事件でも一件よ」

言質は取ったからね。

私はポケットに忍ばせていたテープレコーダーを確認する。

「よしーじゃあ、お互い契約も成立したことだし、お開きにしようか」

私はエリアの腕を掴んで玄関に移動させる。

しかし、脚で踏ん張りを利かせているのか、エリアは動こうとしない。

「離しなさいよ。後、腕を掴むのに力を入れ過ぎよ」

「話は終わったんだし、早く帰れよ」

「頼むお前ら。もう、ベランダでの二の舞は勘弁してくれ。後、零。お前も帰れ」

## 負の遺産（プレゼント）

## 零視点

「うぐぐがあああぐきやあああああつ!!?」

「ごがあああぎゅびいいいっ!!?」

私の部屋でボニーとクライドが断末魔を上げ、床をのたうち回る。

イギリスの件で2人を呼び出し、補習を施す際に手料理ー肉じゃがを差し入れてあげた。

最初、私があーんして、2人の口に肉じゃがを運んであげたのに食べてくれなかった。なので、グイグイと強制的に食べさせた。

その結果、ボニーは喉を抑えて天を仰ぎ、クライドはビクツビククと体を痙攣させて今に至る。

「モラン、取り敢えずもつと食べさせてあげて」

私は同じく部屋に呼んでいたモランに命令する。

この2人にはもつと沢山食べて反省してもらわないとネ。

「畏まりました（主に食べさせてもらえるなんて、羨ましい）」

モランはテーブルに置いてある肉じゃが入ったお椀を取り、2人に近づく。接近してくるモランを見て、ボニーとクライドは床を這って逃げようとするが、呆気なくモランに馬乗りになれる。

「ほら、もつと食べなさい。主が作ってくれた特製肉じゃがですよ」

「もうやめッ……」

「許してくッ……」

モランは2人の懇願を無視して肉じゃがを口に突っ込む。

「ンー！ンー！ンー！」

もがき脚をバタバタさせるが、モランからは逃げられない。

あの2人よりもモランの方が何倍も腕力があるからネ。一度、取っ組み合いになったら、勝ち目はゼロに等しい。

3人のやり取りを眺めていると、

ピンポーン！ピンポーン！

ドアチャイムが鳴った。

バタバタと足音を立て、元気よくリビングに向かってくるのが分かる。

この元気の良い足音はアップルだね。

「モリちゃん、来たよって……これはなんなの？」

リビングにやってきたアップルはボニーとクライドを見て呆然とした様子で眺めている。

「やあ、アップル。今、2人には、補習、を施しているんだ。そのついでに私特製の肉じゃがをご馳走してあげたんだよ」

「ふくん、そうなんだ〜（これって、ご馳走という名の人体実験だよ!!?）」

アップルが何か余計な事を考えている気がするが、今は良しとしよう。

再びボニーとクライドの方に視線を移すと、2人は動かなくなっていた。白目をむいて返事がない。

「それはそうとアップル。ここにくる前にジャック君には連絡してくれたかい?」

「う、うん！バッチリだよ。多分、そろそろ来るはずだよ」

アップルにはジャック君に伝言を頼んでおいた。

今日は日本にいるメンバー全員（内2名は補習）に召集をかけたのだ。内容はアリアについて周知してもらうためだ。

アリアの情報はそろそろ届くとして、ジャック君は来てくれるかな。

ピンポン

再びドアチャイムが鳴った。

噂をすれば何とやらだね。

「…… お待たせしてすみません教授」

足音なくジャック君がリビングにやってきたー赤いエプロン姿で手にはピザを持って。

「バイト中に呼び出してごめんね」

「…… お構いなく」

ジャック君は人工浮島からさほど離れていないピザ屋でバイトをしている。

彼には表向きは留学生、それも一般高に通ってもらっている。そのついでにバイトをしているのだ。

こうして見てみると、妙に様になっているね。誰がどう見てもピザ屋の青年だ。間違いない！エプロン姿はジャック君なりのギヤグかな？ジャック君だけにギヤグ……うーむ、微妙だな。

「その手に持っているピザは何かな？」

「…… 差し入れです。因みに海老マヨです」

「どうぞ」とばかりにピザを差し出す。

海老マヨか…… 私はガーリックとチーズが好きだが、ここはありがたく頂きますよう。

私を受け取ろうとすると、横からアップルが搔つ攫っていた。盗って早々、小ぢやな

お口でピザを齧る。

気づかなかった。流石泥棒、盗みが上手いね。

「うーん、美味しい！ジャック君のピザって、めっちゃ美味しいね」

「……ありがとう。しかし」

ジャック君はアップルからピザを取り返すと、ふわっと宙に上げ、

ーシユパ！

手でピザを6切れに分けた。そして、6切れのピザを手にした紙皿に乗せた。しつかりと、アップルが齧ったモノは本人に差し出している。

おおく見事な腕前で。包丁やピザカッターはいらないね。

「……独り占めはいけない」

「ありがとうジャック君。カッコよく決めた所で悪いんだけど、本題に入ろうか。ああ、勿論ピザを食べながらで結構だよ」

「ねえ、モリちゃん。ボニーとクライドの分も食べていい？」

「それは本人達に聞いてごらん」

アップルがピザをねだる。

私はボニーとクライドに尋ねようとするが、2人は白目をむいたままで反応がない。返事がない、ただの屍のようだ。

「主、そろそろ本題に入りましょう」

「おっと、そうだね。さて、今日みんなに集まってもらったのは、転入生『神崎・H・アリア』について周知してもらおう為だよ」

「あつ！知ってるよ。イギリスからやって来た、強襲科のSランク武偵でメツチャ強い先輩でしょう」

「……私も知っています」

「おや？それは初耳だね。どこで知ったんだいジャック君？」

「……うちの店のオリジナルメニュー『ももまんピザ』をよく頼む客です」

「うん、よく分かったよジャック君。ありがとう」

ももまんのピザなんて、想像するだけで吐き気がするよ。うぼえ、気持ち悪くなってきた。

思わずモランにもたれかかる。

「主、お気を確かに」

「ありがとうモラン。少しだけ楽になったよ」

突然、もたれかかってきた私を嫌な顔一つせず、モランは優しく介抱してくれた。

彼女の胸に頭を預けていると、頭上からスハースハート、モランの荒い息遣いが聞こえてくる。モラン、どうしたんだい？



「さて、気を取り直して……そのアリアについて私達はまだ知らない事が多すぎる」「どういう意味なの?」

「不安要素が一つ現れたかもしれない」

不安要素……アリアは将来脅威になると、私の勘が言っている。これは自分でも信じられない事だが本当だ。私が勘に頼るなど殆どないのにね。

「それは我々の脅威になるかもしれない、そう言いたいのですか主」

「モリちゃんの脅威になり得る存在って、この武偵高にいるの?アリアってタダ強いだけじゃん。それだけでモリちゃんの脅威になるとは、思えないんだけどな」

「……アップルに一票」

「まだどれ程の不安要素になるかは分からないけど、念には念を入れてねーそこでアリアについて彼に調べてもらった」

私がそう言うと、この場にいる全員が「ゲエ」つとした顔をした。

ーピーピ、ピーピ

今度はテーブルに置いてある私のパソコンから電子音が鳴った。呼び出しの合図だ。パソコンを開き、『スパイダー』にアクセスすると、

『や、やあ。モリアーティ、元気にしているかな?している?』

画面には、のっぺりとした顔に死んだ魚の眼をした男が映った。

彼こそが、皆が嫌そうな顔した元凶——ルイス・オーガスタス・ミルヴァートン。落ち着きのない——挙動不審で画面の向こうにいるであろう私を見つめている。汗が凄いいよ。大丈夫かい？

「やあ、ルイス。元気…… そうだね」

『元気、うん。ハッピーなのかな？ いや、ここはGOOD？ いや、それとも……』  
「落ち着いて。私を見ないで話してごらん」

私がそう促すと、彼は画面から目を背けてた。すると、

『ああ、ありがとう』

さつきまで挙動不審な態度が嘘のように、死魚のような目は生氣に溢れ、のっぺりとした顔はキリツとした仕事ができる男の顔になった。

彼は人の目や顔を見て話すのが苦手だ。それこそ、病的なまでに重症だ。

『さて、多忙な私に仕事を押し付けた——見返りはちゃんと払ってくれるのかね？』  
「勿論だよ。ただし、情報によるけどね」

彼はイギリスのロンドンで広告代理店・報道関連に精通している。その道——情報の運用に関してはトップクラスと言ってもいい。

犯罪情報・武偵・事件・スクープなんでも御座れ。

これで相手の顔を見ながら仕事ができれば文句ないのにな。

「依頼した……」

『そこまで言わなくてもいい。自分の調べた情報くらい知っている』

私が話そうとすると、ルイスは話を遮って勝手にペラペラと語り出す。

後ろにいるモランが今にもパソコンを破壊しそうは雰囲気だ。それ以上は語らないでルイス。さもないと私のパソコンが犠牲になる。

『今から教えるから、足りない頭でよく記憶することだ。時間がないので、大雑把に話すぞ』

「いいよ。こつちの方でまとめるから」

『神崎・H・アリア。16歳。14歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパ各地で活躍……』

声を低くさせながら、ルイスはアリアについて語り出す。

『今まで狙った相手を全員捕まえている。99回連続、たった1度の強襲で。猛進的なヤツだな』

連続ねぐボニーとクライドを始めとした、他の人達は逃しているだろうけどネ。

「あー、よく分かるよソレ。それで？」

『徒手格闘ーボクシングから関節技まで何でもありのバリツの達人。拳銃とナイフは、天才の領域。どっちも二刀流。因みに両利きだ』

バリツ…… バーリ・トウードをイギリスでは縮めてそう呼ぶ。

私はベランダから海に落下した時のことを思い出す。

あれは凄かった。水中でもがきながらも私のパンチに反撃してきた。関節技を決められないようにするのが精一杯だった。

『その戦闘スタイルからついた2つ名が双剣双銃のエリア』

2つ名——豊富な実績を誇る有能な武偵には、自然と2つ名がつく。

双剣双銃。武偵用語では、2丁拳銃ないし二刀流のことは、ダブルと呼ぶ。これは英語のダブルから来ているのだが、そこから類推するにカトロの武器を持つという意味の2つ名なのだろう。

「家族構成は？」

『父親がイギリス人とのハーフ。母親が日本人。エリアはクオーターだ。異母妹が1人いる』

私は異母妹という言葉にピンとくるモノがあった。

家族の話をする、エリアはかなり感情的になったね。あれはコンプレックスばい。その異母妹は自分より出来がいいのか、生まれがいいのか、それらにコンプレックスを抱いているネ。

『イギリスの方の家がミドルネームの『H』家だ。高名な一族で、祖母はD a m eの称号

を持つている』

Dameーイギリスの王家が授与する称号。Dameは叙勲された女性、男性はSirの称号が与えられる。

「リアル貴族なんだね」

『お前が言える口か？お前さんのイギリスの実家は爵位ー伯爵だろうが』

伯爵と言われても、私はいまいちピンと来ない。イギリスの実家に行ったこともないし、そっちの身内に会ったことも、話をした事もないし。

『話を戻すが、『H』家は伝統ある探偵業の大家として信用されている』

「探偵？」

『人が話をしている時に割り込むなグズめ。お前は馬鹿みたいに黙って聞いていればいいのだ』

ルイスが不機嫌気味になった。

彼は自分の話を遮られると、凄つくキレるからね。別に私は気にしないが、私の後ろにいるモランがキレてる。お願いルイス。それ以上は言わないで。

『探偵業を営む『H』家の正体はホームズ。あのシャーロック・ホームズー世の一族だ』

シャーロック・ホームズ。

100年ほど前に活躍した、イギリスの名探偵。拳銃の名手で格闘技の達人。

そして、私はモリアーティ4世。いや、名乗るのは大袈裟かな。

初代ホームズと初代モリアーティはスイスのライヘンバッツハの滝で対決し、引き分けになったーと、あるが初代ホームズはちやつかりと生還している。

その名を聞いた瞬間、後ろにいるモランが目を見開くのが感じとれた。そして、私もピンと頭にキタ。

ふうん、ホームズ……ね？彼は武偵の大先輩としては「慕っている」。彼の推理・捜査方法なんかは大いに参考にさせてもらった。あくまで参考にしただけであって、決してパクってなどいない！アリアは見当違いな事を言っているのだ！

「ありがとうねルイス。大いに参考になったよ」

『早く入金しろよ馬鹿め』

最後にそう言つてルイスは画面を切った。

「さて、皆。聞いての通り、アリアの正体はハッキリとしたね？」

「はい、主。まさか、あのかわ……じゃなかった、小さいピンク頭がホームズの一族だったとは、不覚でした」

「まあ、気にすることはないよモラン。私だって気付かなかったんだならさ。後、学校ではちゃんと先輩と呼ばないとダメだよ。もしも、呼び捨てにしているのが、バレたら私まで被害が及ぶからね」

「申し訳ありません。気をつけます」

「いや、今日はびっくりする事ばかりだね。ねえ、ジャック君？」

「……別に」

ジャック君は何でもないかの様にボソツと答える。

「うん？今日は？別の日にも仰天する事があつたのかい？アップル」

「うん!!？実はさー、そのアリアなんだけど、キンジと同棲しているんだよ」

アップルの言葉でピツキン！と私の中で何かが割れる音がした。あれ？幻聴かな？

「いやー、アリアって、超やり手だよね。キンジの部屋のお風呂借りたり」

ーパツキン！

「キンジの2段ベッドまで借りて一緒に寝たりもしたんだよ」

ーパツキン！ピツキン！

「あとあと！キンジが飲んでたコーラを間違つて飲んじゃった。間接キスつてヤツだよ  
ね」

「……アップル。それ以上は黙れ。教授のライフはゼロだ」

「むぐつ」

ジャック君がアップルの口を塞ぐ。アップルは「むー」と呻く。まだ、言い足りない  
ようだ。

金次君と……ね？部屋に、ベッドに、間接キス……私は気にしていないとも！  
それだけは保障しよう！

私は気分転換にテーブルに置かれている『ホルムアルデヒド』をボトルごと飲むようにしたが、モランに止められた。

「主iiiiiiiiii!!?お気を確かにツ!!?」

「離すんだモラン！飲まないとやってられない！」

私の手にあるボトルをモランが奪い取ろうとする。私だつて鍛えてある。負けてたまるか！お願いだから飲ませてよ！何だか分からないけど、飲まないとやってられない気がするんだ！

「こんな物を飲んで死んでしまいます!!?」

「私は死なない！何度でも蘇るさ!!?」

「いいえ、例え蘇るとしても、飲ませるわけにはいきませんツ!!?スミスから止められてるでしょう！」

「お願い！飲ませてよモラン！一生のお願いだからツ!!?」

「ここで一生のお願いを使わないで下さい！ジャックさん、貴方も手伝って下さい！お願いします」

「……承知した」



ジャック君がモランの懇願を受け入れ、私の背後に回るとシュツと、首に手刀を打ち込んだ。そして、私は意識が遠のいた。

キンジ視点――

戻ってきてしまった。

強襲科――通称『明日無き学科』に。この学科の卒業時生存率は、98.1%。つまり100人に2人弱は、生きてこの学科を卒業できない。任務の遂行中、もしくは訓練中に死亡して、いや、訓練中の死亡率は零が生徒会長に就任してからゼロになったな。

訓練の見直し、安全性確保、指導内容から何まで変えたそうだ。

発砲や剣戟の音が響く専用施設の中で、今日の俺は――とりあえず装備品の確認と自履修の申請など、訓練以外のことで時間を使い切ってしまった。

そのまま専用施設を出ようとすると、フツと隅には見なれた、いや、嫌でも覚えてる顔が見えた。

強襲科の問題児――お馬鹿姉妹ことボニー&クライドの2人だ。

2人だけじゃなく、強襲科それも一年生の姿がある。何やってんだ？

何と無く気になったので、近づいてみると隅にあるホワイトボードにはお馬鹿姉妹が

描いたのかーへりとそのへりをミサイルで撃墜している様子が描かれている。意外と絵がうまいな。

ボードの横には講師ボニー&クライドとも書かれている。

後輩をパイプ椅子に座らせて、自分達はホワイトボードの前に陣取って何かを教えているようだ。

後輩の訓練指導か？

「犯人のチャーターしたへりかどうか確かめる必要はネエ！」

「まずはぶつ放しちまいな。チガってたら違ってたらだ」

お馬鹿姉妹は自信満々でへりを指差しながら答える。

違った……これは指導じゃない。間違った知識を教えているだけだった。

姉妹の演説に感服したのか、後輩達からは「おおく!!?」「流石違うな!」「ベテランだ!」と称賛の声が上がる。

中には手帳を開き、メモを取るヤツまでいる。そんな事をメモする要はないぞ。あの馬鹿姉妹は見当違いな事を教えやがって……

「それが…… Hard Boiled」

ドヤ顔で決める。

何がハードボイルドだ!!?後輩に間違った事を教えてんじやねえぞ!間違つて民間

のヘリを、いや、その前に撃墜しちまったら、確実に9条破りだぞ。後輩達がお前らみたいに、ギリギリ殺さずに撃墜できるワケじゃないからな。

「おつ！キンケツじゃねえカ！」

「オーイ！キンケツ。元強襲科がここに何の用だよ？」

お馬鹿姉妹に気づかれた。講習を一時中断し、手を振りながら俺の方にやってくる。

だから、キンケツって呼ぶな！それも後輩の前で呼びやがって……完全に覚えられたな。

「どうしたんだコイツ、俺らに会いに来てくれたのか？」

「ウレしいぜ、会いに来てくれるなんてよ」

「そんなワケあるか。後、近づくな暑苦しい」

ボニーは俺の横腹を、クライドは頬を小突いてくる。その際に姉妹の胸が身体に当たるが、俺はヒスらない。

この姉妹はデカイ割にこの感触は作り物——パッドだな。

兄さんの女装で目が慣れていたのか、俺は本物と偽物の区別がつく。

甘いな。この姉妹は知らないだろうが、こんなのヒスると思ったたら大間違いだぜ。パッドを入れて誤魔化すなんて可愛げのある所があるな。

「で？実際はどうなんだヨ？ただ、暇つぶしで来たワケじゃねえんだロ？」

「ヒまつぶしって言えばキンケツはいつも暇だよな」

「なワケあるか。今日来たのは装備品の確認と自由履修の申請だ」

ついでに錆びついた勘を取り戻すつもりで、訓練にも励もうかと思つたが、さつき挙げたことに時間をほとんど使い切ってしまった。

零から強襲科で感覚を磨き直してこいと言われたんだがな。

「ツーことは今から帰るのか？モつたいねえな」

「ちよつと付き合えヨ。久しぶりに相手になつてやるヨ」

「あー、それは遠慮しておく」

クライドが組手に誘つてくるが、俺はキツパリと断る。

双子姉妹ーポニーもそうだが、特にクライドの接近戦は洒落にならない。犯人相手に噛みつき・目潰しなど当たり前。拳銃を隠し持ち、相手の膝を撃ち抜く事も平気でやるし、ナイフで足の腱を切ることだってある。

本人に何故こんな戦法を使うのかと聞いた事があるが、本人曰く、オヤジからお前はコレでやれと教わつたそう。

対して、ポニーの戦法は喧嘩殺法だ。拳と蹴りを使うーただ我武者羅に殴り掛かるのではなく、相手の動きを見て対処するー戦い慣れた動きをする。

この姉妹の戦法は全く違う。まるで鏡合わせのようだ。

「ちえー連れねえナ」

「ツき合い悪いぞ」

「また今度な」

俺は軽く受け流して、その場から離れようとする、ボニーから肩を掴まれた。何だよ？まだ用があるのか？

「ワすれるところだった！ちよつと待つてろ。すぐに戻る」

そう言つてボニーは強襲科の備品保管庫に向かつていた。

保管庫からガチャン、パリン！と物が倒れる音と割れる音が聞こえてくる。

クライドは口に手を当てて、笑いを堪えている。何がそんなに可笑しいだ？

暫く待つてっていると、ボニーが布で巻かれた物を抱えて戻つて来た。

「何だソレは？形からして……何かの銅像か？」

「ソうなんだよなー。でも、ダダの銅像じゃねえ。なあ、クライド」

「おうサ。まあ、見てみるヨ。スゲエ笑えるからヨ……ププ、もうダメダ」

ボニーは布に手を掛けると、バサツと取り下げた。

布の下から現れたソレを見て、俺は思わず腰が抜けそうになった。

目を釣り上げ、口から獣の様に歯を剥き出しに怒りを露わにした、蘭豹の銅像が姿を現したからだ。

タダの蘭豹じゃない、旧日本軍の陸軍将校の軍服と軍帽を身につけているが、何故か似合っている。いや、似合い過ぎている。

俺はこの銅像に心当たりがあった。

ここ、これは？前にも零が俺に押し付けてきた怒りの蘭豹像じゃねえか!!？

「これをどこで手に入れた？」

「これか？実はよ、この前にクライドと一緒に浜辺を歩いてたら、偶々見つけたんだ。なあ、クライド」

「おう！砂浜に顔を覗かせて、ひろつてください感がハンパなくてよ。オもしろそうだから、拾ってきたんだよ」

ギヤハハハと2人して馬鹿笑いするが、俺は笑えなかった。

あれは去年の事だった……零がプレゼントと称し俺の所にこの銅像を押し付けてきたのだ。

部屋の前に飾ろうだの、口からお湯が出るようにして風呂場に置こうだの言ってきたが、俺は全て断った。作ったのはいいが、絶対に持て余していたなアイツ。捨てようにもゴミ置場にやるワケにはいかなかった。蘭豹に見つかる可能性がある。見つければ、半殺しでは済まないからな。

そのまま、仕方なく部屋に置いたのだが、その後が地獄の始まりだった。

リビングに置けば落ち着いて飯も食えんかったー蘭豹に監視されている感があつたからだ。気になるので、銅像を後ろ向きすれば、突然振り向きそうでますます気になった。

耐えられず、俺は武藤に協力してもらい船を出してもらった。ついでに嫌がる零も乗せて沖まで行き、銅像を海に沈めたのだ。やっтерることが死体遺棄と変わらん。そのあとは記憶の彼方にやったのに、まさか舞い戻ってくるとは……最悪ならぬ災厄だ。もしも、蘭豹に見つかつたから、洒落にならんぞ!!?

「お前ら、これをどうするだ？蘭豹に見つかつたら殺されるぞ」

「そうだナク強襲科のシンボル像にするってのはどうダ？」

「イヤ、待て待て。食堂のインテリアにしようぜー。ソしたら、みんな笑つて飯が食えるからよ」

「ほう、何を飾るつて？」

口は災いの元。

姉妹の背後に、般若が可愛く見える程の阿修羅の顔した蘭豹が降臨した。

手には象撃ち銃ーM500を持って、顔は銅像の500倍はある怒りの表情を貼り付けている。

怖っ!!?

「オイ。コッチ向けや」

ドスのきいた声で姉妹に後ろを向けと命令する。

ボニーとクライドはギギツと錆びついた機械の様に首を反転させ、蘭豹を見る。その顔はサーツと血の気が引いていた。

「ヤツホー先生。ご機嫌よー」

「今日もメツチャ綺麗ですネー」

心にもない事を喋るが、絶対に怯えているだけだ。

「こりや、何や？お前らが作ったんか？よく出来てるな。そうか、これがお前らが考えちよる普段のウチか」

M500で銅像を突く。

ボニーとクライドが蘭豹に見えないように後ろ手で、俺に向かってハンドサインをする。

これは……『助けて』だと？俺を巻き込むな。お前らが撒いた種だ。自分達で回収しろ。

俺はソーツとその場から離れようとしたが、ガシツと蘭豹に襟首を掴まれた。苦しい

!!？息ができねえ。

「オイ!!？トオヤマー！何逃げようとしとんのじゃあ！こりや、お前も関わつとるやろう



が!!?」

はい、その通りです!海に捨てました。

ボニーとクライドが心配な様子で眺める。これは絶対に自分達に被害が来るんじゃないか心配しているだけだな。

「俺じゃありません。そんなモノ初めて見ました」

「俺じゃない?つまり、コレ作ったホシを我は知つとるつて事だよな?」

ヤバツ!墓穴を掘つちまつた。どうする、ここで真実を言うべきか?でも、そしたら零に被害が……いや、そもそもこうなつたのは零のせいだ。

俺は諦めて真実を言おうとすると、

ピンポンパンポン!

『蘭豹先生!至急教務課までご足労お願いします』

校内アナウスが鳴った。

「チツ!オイ!ガキども……後で覚えてろよ」

蘭豹は重さ50キロはある銅像を抱えて出て行つた。

危なかつた、殺されるどころだつたぞ。しかし、あのアナウスは誰だつたんだ?聞いた事がない声だつた。

## 前準備

お台場にてー

モランは東京都港区台場にあるフジテレビの屋上に来ていた。彼女の服装は上下とも茶色のスーツだ。

空は黒雲に覆われ、今にも大雨が降ってきそうだ。

「ここからならいいですね」

屋上から見える光景をしっかりと目に焼き付ける。

台場の建物と湾岸道路、りんかい線がよく見える。

モランは地理を確認し終わると、肩に担いでいる虎のキーホルダー付き狙撃ケースからL96A1を取り出した。イギリス軍で制式採用されているボルトアクション方式の狙撃銃である。

銃床先端部に折りたたみ式の二脚を装備し、銃床の下部にも補助脚が追加されている。

「チッ！邪魔です」

モランは鬱陶しそうに狙撃銃に装着されているスコープ、L1A1テレスコピック

ク・サイトを取り外した。

彼女はスコープ無しでも、通常時700m先の標的を狙撃できる。センス（感覚）に身を任せれば、1000m先の標的も狙撃可能だ。今日のような悪天候であっても問題はない。

ならば何故、わざわざスコープを装着していたか。それは零から「狙撃手って、スコープ越しで狙った方が様になるよネ。あと、風速計も使うといいネ」と言われているからだ。しかし、今日に限っては風速計・スコープ無しでの狙撃が許可されている。

「ほら、早く交通止めになりなさい。撃ちますよ」

狙撃銃を構えた先ーレインボーブリッジに向かって、モランは呟く。レインボーブリッジでは車が往來を繰り返していた。

モランはトリガーに指を添えるが、撃ちたいという衝動を抑える。

彼女はムカついていた。それはもう凄くムカついていた。

動機は遠山 金次だろう。

自分が敬愛する主である零が金次とアリアのやり取りで動揺した。普段のキャラが丸潰れ、えっ、主っていつからこうなったの!?!と思わずにはいられないくらいに。

その原因、諸悪の根源（自分が言うな）である遠山 金次にモランは激怒していた。

憂さ晴らしに眼前を通る車両を狙撃しそうになるが、そんな事をすれば零の計画がご

破算になるくらいは、今の彼女にも分かるのでグツと我慢する。発砲が許可される、その時、まで。

「二服しますか」

モランはポケットからトルコ葉とバージニアを乾燥させたモノを取り出し、紙に巻いて火を着けると、スウーと吸って、はぁーと吐いた。

すると、さつきまでの憤怒が嘘のように冷めていった。

武偵高にてー

「会長この書類にもサインお願いしまーす」

「はーい、そこに置いておいて（ちよつと仕事が多すぎるよモリちゃん!!?）」

零ではなく、零に変装（有料で）したアップルは生徒会室で仕事に追われていた。

零から自分に化けて生徒会に出席してほしいと、依頼されて請け負ったのはいいが、朝一番に登校、その後は生徒会室で役員とともにミーティング、書類整理、予算分配、銃検手続き、挙げるだけで頭が痛くなりそうな仕事量だ。

「（お金を貰ったからにはモリちゃんを演じるけど、コレは聞いてないよー!!? 私死んじゃう）」

「会長? どうかしましたか?」

「あ、うん。何でもないよ」

役員の生徒に声をかけられ、アツプルは零の声で返す。

アツプルは生来の泥棒だーそれを超一流の泥棒だ。他人に成り済ますなど、朝飯前だがコレだけは朝飯前とはいかない。

絶対に仕事が出来ないで私に押し付けたな……

零に変装した事を嘆いていると、

「ガッ！」

「みんな遅れてごめんなさい」

副会長の白雪が遅れてやってきた。おそらく、所属するSSR科のクエストで遅れたのだろう。この光景は生徒会ではお馴染みらしく、他の役員は気にしていない様子だ。

「おはよう白雪さん」

「おはようございます零さん。遅れてごめんね」

「いいって、いつもの事だし。ついて早々で悪いけど……」

「あつ！うん。ちよつと待ってね。すぐに淹れるから」

アツプルは白雪に仕事を手伝ってもらおうと声をかけたが、白雪は別の事と捉えたらしく、生徒会に備えられているポットの方に向かった。お茶でも淹れてくれるのだろうか。

「はい、零さん専用」

そう言つて白雪がアツプルに差し出したのは、真つ赤なお茶だった。見事なまでに真つ赤なお茶だった。

「えーつと、コレは何かかな？」

アツプルは白雪に訪ねる。彼女の本能が言っている。コレはヤバイ。飲んだらヤバイ。

「え？何つて、零さんがいつもの飲んでる零さんスペシャルだよ？」

「そ、そうだったね。ははは、因みに何を入れていたっけ？」

「えーつと、七味、唐辛子、ババネロ、練り辛子、わさびだよ」

「あつ、そうだった。私、うっかり忘れてたよ。淹れてくれてありがとうね」  
「どういたしまして」

白雪はニツコリと笑う。彼女には悪意はない。白雪は零本人からこのお茶を淹れてほしいとお願いされているからだー純粋な善意だ。アツプルは知らないだろうが、零は生徒会でこのお茶を平気で飲む。他の人が飲めばどうなるか？それは……

「（誰か助けてエエエエ!!?）」

これだけはお金ではどうしようもない。

強襲科棟前にてー

「何だい騒がしいナ」

「ナんだろな」

ボニーとクライドは強襲科棟の外で、往来する強襲科生の姿を眺めていた。2人は愛車である黒塗りのオープンタイプのフォード・マスタングにーボニーはしゃがんで背を預け、クライドは立つて背を預ける。空は黒雲で覆われている。

「酒あるカ？」

「バツカじゃねえの。アるワケないだろ。強襲科棟に隠してあったビンテージモン全部蘭豹に没収されただろ」

怒りの蘭豹像の一件で2人は蘭豹から抜き打ち検査（強制的な）を受けた。結果、寝ぐらにしている大深度地下都市のボロマンションから、強襲科棟の自室（強奪した）まで調べられ、保管してあった酒類を没収されたのだった。

未成年飲酒で退学か、と思われたが蘭豹は情けとして2人の退学を取りやめた（没収した酒を全て貢ぐのが条件だった）。

「嘘ダ。最後の2本隠してあるだろウ。誰のせいであつたと思つてル」

「バツカじゃねえの。ダれがやるか」

ボニーはクライドに銅像の一件をぶり返して酒を強請るが、クライドは拒否した。ク

ライドも最後に残った自分の酒を片割れとはいえ、ボニーにやるつもりは無い。

「ああー、酒が飲みてエ」

「よつこらせ」とボニーは気だるげに立ち上がる。

「なあ、モリーの言つてた『武偵殺し』は現れると思うカ？」

「あらわれるんじゃない。モー曰く、キンケツが1人になったら現れるつてさ。コリや、確実に死地に赴く事になるぜ。明日なき学科万歳てな」

「どこに行つたつて、俺たちに明日なんてねえヨ」

ボニーは空を、クライドは片割れを眺める。2人の目はどこか寂しげだ。

「バロウズ強盗団には今日しかねエ。酒くらい好きに飲みてえもんだ」

「ホらよ」

クライドはスカートのポケットから、スキットルを取り出すとボニーに差し出した。

「あつ！クライド…… てめえ、やつぱ隠してやがったナ！」

「うるせえな。ありがたく飲めよこの野郎」

首都高速湾岸線にてー

ジャックは首都高速湾岸線の東京湾トンネルの品川区出入口に来ていた。

「……………怖い」



出入り口の真上に陣取っているジャックの脚はガクガク震えている。彼は高所恐怖症だ。今いる場所からは八潮北公園、火力発電所がよく見える——いい眺めだが、彼からすれば最悪だ。

高い場所が苦手な彼が何故ここにいるか？それは零からここである人物をパスするから受け取ってほしいと頼まれたからだ。

彼女曰く、「走行するバスから投げるから受け取れるとしたら、君しかない！」そう  
な。

「……怖い怖い怖い怖い」

早くして、とジャックは心の内で叫ぶ。脚はさらにガクガク震え、今にも高速道路下に落下しそうだ。

## バスジャックその1

キンジ視点――

ピピピピピピピピピ――

喧しい電子音が響く。

これは目覚まし時計か。前の理子から貰ったヤツとは別――零から貰ったヤツだな。俺は目覚まし時計を止めようとスイッチを押す。

バチチチツツツ!!?

「ぎえええええええええッ!!?」

突然凄まじい衝撃が俺の身体に走る。同時に目が覚めた。何だコレは!!?

俺は目覚まし時計をよく観察する。こ、これはスイッチの所にスタンガンを仕込んでやがる。よく見ないと分からない小型のスタンガンだ。こんな小型でどんだけの電圧だよ!!?

『やつほー、金次君。おはようございます。何で目覚ましにスタンガンを仕込みやがったと、思っているだろうから説明するね。これは『パブロフの犬』の原理で脳に電気ショックの恐怖が刻み込まれ、無意識レベルから寝坊の悪習を撤廃するのだよ。因みに

今回使用した電圧は5万ボルトだよ。てへ♪』

目覚まし時計から零の声が響く。

何がてへ♪だ!!? 人を実験台にするなよ。あと、5万ボルトとか殺す気か!!?

俺は思わず目覚まし時計を投げ捨てようとする、

『言い忘れたけど、この時計は金次君がセットした時間よりも遅くなるようにしてあるから早く部屋を出ないと遅刻しちゃうよ。バス停まで頑張つてね。このメッセージは自動的に消去されます。なんちゃって』

そんなメッセージが流れてきた。マジか!!?

俺は慌てて時計を探す。壁掛け時計を見るが0時ぴつたりで止まっていた。くそッ電池切れかよ。最後の頼みは理子が修理してくれた時計だけだ。しかし、何処を探しても見つからない。おかしい……昨日は確かにテーブルの上にあったのに。ならば零から借りた時計は? 探してみるが、零の時計も見つからない。くそッ! こんな時に『やれやれ。君は今時計を探して躍起になっているね。おまけで教えてあげるけど、枕の下に置いてある携帯を見なよ』

俺の行動を読んでいたのか、目覚まし時計から再びふざけたメッセージが流れる。

こうなる様にしたのはお前だらうが。俺は渋々、枕の下に置いてある携帯を手に取り。枕の下に通信機の類を仕込んでおくのは、零から教えられた習慣だ。寝ていても連

絡が取れるように、だそうだ。

時刻はヤベツ！7時58分のバスに遅れる。

制服の袖に腕を通し、朝食も摂らぬまま慌てて部屋を出た。

朝食と言えば白雪は今日どうしたんだ？いつもなら朝一番にやって来て朝食を作ってくれるのに。

第三男子寮から大粒の雨に打たれる事、なんとかバス停まで到着した。ちょうどバス停にバスがやって来て停車した。

よかつた。何とか間に合つたぜ。こいつに乗り遅れると、遅刻確定だからな。

俺はずぶ濡れのままバスに駆けつけて乗り込む。

「おーい！待ってくれー!!？」

俺が乗り込み終わると、丁度武藤がやって来て滑り込む形でバスに乗車した。

「やった！乗れた！やったやった！おうキンジおはようー！」

間に合つたのが嬉しいのか、入り口のタラップで武藤がバンザイをした。

「ああ、おはよう。朝から危ねえぞ武藤。いくら乗り遅れそうになったからって、この雨の中滑り込むようにして乗車するなんて。滑って頭打つたらどうするんだ？」

「ワリーワリー！今度から気をつけるからよっ」

メンゴメンゴとばかりに平謝りする。

武藤を最後にバスはドアを閉めて、「発車しまーす」という運転手の声と共に武偵高に向かつて発進した。

発進と同時に俺は空いている座席を探してバスを散策する。武藤は入り口側の座席に座った。俺も早く空いている座席を探す。

えーつと、空いてる席は……キョロキョロと見渡すと、空いてる席は最後尾の4列シートだけだった。

近づくくと丁度シートには1人の女子生徒が座っていた。

金髪碧眼の美少女だった。その深い碧の瞳は、蒼穹の空を思わせるスカイブルー。頭の両脇にリボンで纏めた波打つ黄金の髪は、解けば背中の中半ばを超えるだろう。

武偵高のセーラー服を着ているあたり、ウチの学校の生徒か？あんな女子は見た事がないぞ。しかし、見れば見るほど綺麗だ。俺は思わずボーツとその女子生徒を眺める。

立てば零くらいはある身長。制服の上からでも分かるボディライン。スカートから出ている黒のニーソックス。そこから出る綺麗な白い太もも。自分の中で血流が速くなるのが分かる。いかん、初対面の相手にヒスタラマズイ!!?

俺は女子生徒からできるだけ離れた所で座り、彼女を見ないようにする。

気を紛らわせようと、車内にいる生徒の数を数える。男子女子、1年2年か。みんな

隣にいるヤツや親しいヤツと他愛ない話をしている。

ついでにみんなが身につけているアクセサリー、バッグ、日用品なんかも観察する。探偵科では何事も観察せよがモットーだからな。丁度いい時間潰しになる。観察力では零に負けるが、アリアよりはある自信がある。アリアは観察するよりも突っ走って事件を解決するタイプだな。零とアリア。あの2人は見事なまでに性格・性質が逆だ。喧嘩もするし、食い物や飲み物の好みも違う。スタイルも違う。零はスタイル抜群なのに、風呂場で見たアリアはツルペタ……って、余計な事を考えるな。

『そのバスには 爆弾が 仕掛けて やがります』

ーはあ？

車内からポーカーロイドの音が響いたーそれも最近聞いた事のあるセリフを呟いて。

「うわっ!!? 何だよいきなり!!?」

「えっ? えっ? タチの悪いイタズラ?」

車内にいた生徒達が各々、携帯を取り出し確認する。どうやら、さっきのメッセージは携帯を介して届いたようだーそれも一台だけじゃなく、ここにいる武偵全員の携帯をハックして。

これは、あの時と同じ…… 『武偵殺し』か!!?

俺は大声でバスにいるヤツらに警告をしようとする、

「みんな落ち着いて聞いて！携帯から聞こえてきたメッセージで分かると思うけど、どうやらこのバスに爆弾が仕掛けられてる可能性があるみたい。手の込んだ犯行声明からしてイタズラじゃなさそう。その貴方！教務課に状況を連絡して。他は爆弾の捜索。さあ！駆け足だ」

俺と一緒に4列シートに座っていた金髪碧眼の美少女が突然立ち上がり、車内にいる武偵達に状況説明と指示を出す。

広い車内にも関わらず、綺麗で耳によく通る声だ。

指示を受けた女子武偵、態度からして後輩だろう。彼女は教務課に連絡を入れる。残った生徒達は棚や手荷物、座席下――爆弾の捜索を開始する。

「はい、ちよつとごめんねー。はい、ごめんよー」

金髪碧眼の少女は車内を捜索する武偵を通り抜けながら、バスの運転手の元に向かう。俺もその後を追う。

「運転手さん。突然巻き込んですみません。聞こえた通りバスには爆弾が仕掛けられます。減速したら爆弾するタイプなので、このまま速度を維持してください。これは『武偵殺し』の犯行です」

「は、はいっ!!?分かりました……!」

運転手は突然の事で驚いているのだろう。声が震えている。

待って、こいつは今なんて言った。

「おい！お前、何で爆弾の種類が分かるんだよ!??それと何故『武偵殺し』を知っている!??」

俺は女子生徒に疑問をぶつけた。

『武偵殺し』が本当は捕まっていない事、爆弾の種類まで知っているなんて怪しすぎるぞ。まさか、こいつが『武偵殺し』なのか……! !

「あゝ、それはね……」

俺が言いよると、女子生徒はチラツツと窓の外を眺める。俺も釣られて外を見ると、真っ赤なルナー・スポール・スパイダーが、バス入り口を並走していた。

「全員伏せてエエエエ!!?」

彼女が叫び声を上げ、俺の頭を掴んで床に伏せさせる。不可抗力で彼女の胸が俺の顔を包む。柔らかいって、いきなり何しやがるツ!

文句の一つでも言つてやろうとすると、

「バーバリバリバリツ!!?」

無数の弾丸が、バスの窓を後ろから前まで一気に粉々にした。伏せる際、僅かに見えただがあのスパイダーは無人だった。その無人の座席に黒っぽいモノが――あれは銃座。



銃声からしてU Z Iか。

車内を見渡すと、車体を貫通した銃弾に被弾したのか何名かの武偵が呻いていた。

「何とか無事みたいだね金次君」

彼女は俺の頭から手を離す。

こいつの手、やけに冷たいな。冷え性か？今はそれどころじゃない。

「俺を知っているのか？お前は一体……」

「あーもう！まだ分からないかな。私だよ！わ・た・し!!？」

彼女の声がよく聞き慣れた声に変わった。こ、この声は……！

「お前、零か？その格好は何だ？」

「疑問に思うだろうが、変装の時間がなかった」

この声は間違いない零だ。

変装の時間がなかったって、何処からどう見ても別人だぞ。全く分からなかった。

自己紹介を終えると、零は身を低くして窓から外の様子を確認する。

外にはスパイダーがジツとU Z Iの銃口をバスに向けて、並走を続けている。これでは下手に動けん。

「これからどうする？」

「どうするんだよ」

零は太もものホルスターから愛銃ーウエブリー・リボルバーを抜くと、割れた窓から腕だけを出すとUZIに向かって素早く発砲した。

ーパアン！パアン！パアン！

三発の銃弾を車体とタイヤに受けたスパイダーはクラッシュし、近くのガードレールに激突した。

「無茶するなよ！下手したら蜂の巣にされてたかもしれんぞ」

「大丈夫。あれは熱源センサーで車内の様子を監視している。私には反応しない」

そう言うとき零はプチプチとセーラー服のボタンを外しだした。何でここで脱ぐ？

俺は視線を晒そうとしたが、時遅し。セーラー服の下からは黒の下着と胸、くびれが姿を現した。それだけじゃないベストの様な物も着込んでいる。これはアイスノンのベストか。

「これで熱源センサーを誤魔化したのか」

「その通り。私の体温をバスの車内と同じにした。おかげで……ハクション！うゝ寒い。金次君、温めて」

「つて、抱きつくな！」

零はベストを脱ぐと俺に抱き付いてきた。程よい大きさと弾力の胸が俺の顔に当たる。やめろ！ヒスらせるな。いや、今は緊急時だからヒスるべきなのか？でも、零では

ヒスらない。いや、何故か分からないが、零で、ヒスってはいけない”。そんな気がしてならないのだ。

「うーむ、これじゃヒスらないか。まあ、いいけど。今の内に動ける人は負傷者の手当を！」

零は十分温まったのか、俺を解放し制服のボタンを閉めた。零の指示に武偵は動く。負傷者の手当が先決だからな。

——危なかった。

「なんで何時もこうなる……!!？」

カージャック、アリア、『武偵殺し』、蘭豹、そしてバスジャック。本当に不幸な事ばかりだ。次はハイジャックか？

「あー、気持ちちは分かるよ」

「嘘付け」

「招かれざる客…… 時間が無いよ」

零はフツと何かを感じ取ったのか、窓から顔を出しバスの後方を眺める。しかし、道路が続くだけで何も無い。俺も見てみるが、やはり敵の数は無い。しかし、油断はならない。なんとって相手は『武偵殺し』。次に何を仕掛けてくるか分からない。

「敵の数が分かるのか？」

「7台だよー！」

「あれは『武偵殺し』の新しいオモチャか」

「『武偵殺し』からの進級祝いだよ」

その声と同時に後方から7台の……あれはスパイダー。無人で同じくUZIを装備してやがる。さっきのヤツは先行兵で、あれが本命ってワケか。

俺がホルスターから拳銃を抜こうとすると、零が肩を掴んできた。

「今日は一発で目が覚めたでしょう」

「あのスタンガン目覚ましの事を言ってるのか？ああ、目覚めたよ。最悪の目覚めだ！」

「ーバアン!!？」

俺は憂さ晴らしに後方のスパイダーに発砲するが、届かない。この距離じゃあ当然か。

「オラツ！次は何奴だ！腕の立つヤツ来やがれ！」

「ーバアン!!？パアン!!？」

俺は当たらないと分かっているながらも、ヤケクソ気味にスパイダーに向けて発砲する。すると、ぐらつ。バスが妙な揺れ方をしたので運転席を見るとー

「！」

「こりやマズいね」

運転手が、ハンドルにもたれかかるようにして倒れていた。肩に被弾している。

運転のために、体を下げられなかったのだろう。バスは左車線に大きくはみ出している。

どうすればいいんだ。前を見ると東京湾トンネル出入り口が見えた。

「運転手さん。気をしっかり持って。運転できますか？」

「無茶だ！この怪我じゃ運転できねえよ」

零の問いかけに武藤が運転手に代わって返事をする。

「となると…… それでは仕方がない。武藤君、運転を代わって」

「お、おう。って、君って誰だよ」

武藤は疑問に思いながらも指示通りに運転を代わる。素直に従った所を見ると、こいつ今の零の姿に惚れてるな。正体が零と知ったらどうなる事やら。というか、声で気付けよ。

「さあ、運転手さんこつちですよ。武藤君、私がアイズしたらバスのドアを開けて」

零は被弾した運転手に肩を貸し、バスの入り口にあるタラップに誘導する。負傷者だぞ、無理に動かすなよ。入り口にやるなんて何を考えて…… まさか。

俺は最悪の展開を想像した。

「3、2、1……今だ！」

零のアイズと共に武藤がバスのドアを開放する。

「うわあああああああッ!!？」

同時に運転手をバスの外に突き落とす。運転手の凄まじい叫び声が辺りに響き渡る。

突然の零の行動に俺や武藤、車内にいた武偵達はただ呆然と眺めている。

バスは東京湾トンネルに入った。

「武藤君、ドアを閉めて早く」

零の指示に武藤は黙ってドアを閉める。この状況で何を言えいいのか、武藤でも分からないのだ。

「やむを得なかった」

俺は零を退かし、窓からバス後方を見るが運転手の姿は無い。

「もう安心だ」

零が見当違いな事をほざく。

安心……だと？運転手を突き飛ばしておいて、何言ってるやがる！

「完璧なタイミングだった」

「運転手を殺したのかッ！勤続20年のベテランドライバーをッ！」

俺は零に飛び掛かり馬乗りになった。乗り掛かられた零は抵抗する。

「殺したのかアア！罪の無い運転手をツ！！？」

「殺してないよツ！！？」

取っ組み合いになる。

「殺してないイイ？殺してないだとオオ！！？バスから突き落として、殺してないだ

とオオオ！」

「だから、完璧なタイミングだと言ったでしょう！！？」

取っ組み合いの末、零のセーラー服のボタンをむしり取った。

服の下から黒の下着が丸見えだ。

「どういう意味だツ！！？」

「落ち着いてよツ！！？」

零が太ももで俺の頭をクラツチする。零の柔らかい太ももが俺の頭を包み込む。

「説明しろオオオ！」

「説明したら、2人とも死ぬよ！！？」

「ブオオオオン！」

アクセルを全開にしたような音が入ってきた。

俺と零はフツとバスの入り口の窓から外を見ると、UZIを搭載した無人のスパイ

ダーが今まさに、取っ組み合いをしている俺たちに、その銃口を向けているところだった。この体勢では躲せない！やられるツ！

銃弾が放たれる、その時、

ーガアン！ドオオオオオオオオン！

突然UZIが暴発を起こした。暴発を起こしたスパイダーは後方の同型機を2台巻き添えにし、派手に大破し炎上した。

整備不良？それとも事故か？

「アレは事故じゃない」

零は俺を退かすと、スカートの捲り上げローリモコンの様な物と赤いバンダナを取り出した。スカートの下はスパッツを履いている。

「作戦成功！」

決まったとばかりに立ち上がり、零は武藤の元に近寄る。

「武藤君。コレを頭に巻きたまえ。装備科特製の防弾バンダナだよ」

「防弾バンダナ？それよりも君の名前は？」

武藤の頭にさつき取り出したバンダナを巻きつけると、武藤の制止を無視して俺の方を向き直す。

「詳しい説明を聞きたい？では進もう！」



レッツゴーとばかりに窓からバスの外へ屋根に登る。

「ほら、付いてきて！」

俺も零の後を追って屋根に移動する。

外に出ると狙い撃ちされるぞ。ただでさえトンネルの中だというのに。危険を冒してまで行く必要があるのか？

「まあ、心配しないで。彼は無事だ」

零はグイと顔を近づける。近い！そんなに顔を近づけてくるな。

眼前には零の変装した顔が映る。零って、こんな姿にも化けられるのか。見れば見れば程、完全に別人だ。声は零なのに変な感じだ。

「私の手配した者が救出しているから」

「どうやってだよ。アレは完全にバスから突き落とした様に見えたぞ」

俺が見た限り、完全に道路に突き落とした様に見えた。仮に誰かが外でスタンバイしていたとしても、UZIを搭載したスパイダーに感知されずに、負傷した運転手を救出するなど無理だ。

「仮に誰か手配したとしても、もつとやり方というモノがあるだろうが！何でこうなるんだ？」

不意に後方を眺めると生き残りのスパイダーが猛スピードで此方に接近してくるの

が分かる。距離は50メートルもないだろう。

「今日はどうしたんだい金次君。イラついているね」

「ああ、イラついているよ。目覚ましといい、『武偵殺し』にもな」

「…… それはそうと、何故今日は白雪さんと一緒じゃないんだい？」

零が突然見当違いな事を質問してきた。白雪？何故ここで白雪の名前が出てくる？

「今日は白雪が来なかったんだよ」

「白雪さんが、ね？おかしいな…… 私の計算では彼女は金次君を迎えに行くはずなの

に…… 合う様に仕込んだ…… 目覚ましもそれに合わせて仕込んだのに…… 金

次君がバスに乗るはずはなかった」

零がバスの上でブツブツと独り言を呟く。俺には内容がイマイチ分からん。

「ならさ、登校する際に何故他の人と登校しなかったんだい？例えば…… オススメは

しないけど、アリアとさ」

「アリアなら出て行つたよ。ゲーセンの後でな」

俺は携帯のストラップ『レオポン』を見せながら事の顛末を説明する。

すると零は何故か死んだ魚の様な目になった。なんだよその目は？ストラップが羨

ましいのかよ。

「あー、よくわかつたよ。じゃあ、アリア以外と登校する手も有つたと思うけど」

「いねえよ誰も。お前は どうして たんだよ」

「私と登校するのは やめた方が いい。警戒される からね。まあ、結局 こうして 変装し、君と登校 してる けど」

目立つ 変装 ほど 目立た ない って、 やつか。 何故 お前 が 警戒 される んだ よ？ あと、 コレ は もう 登校 じゃ ない。 バス ジャック だ。

「金次君、私 は 言 っ た よ ね。 決 して 1 人 に な ら ない ぞ と」

「ど う い う 意 味 だ よ」

スパイダー が 距 離 を 詰 め る。 残 り 25 メ ー ト ル を 切 っ た。

『武偵殺し』の 狙 い は 君 だ ツ !! ?」

零 は 俺 を 指 差 し て 怒 鳴 る。

『武偵殺し』の 狙 い が 俺 っ て、 ま さ か 登 校 時 を 狙 っ て くる な ン て 思 い も よ ら ない ぞ。

「だ が、 君 は ツ イ て る よ」

スパイダー は す ぐ 間 近 ー ー 十 分 射 程 範 囲 内 に 入 っ た。

「私 が 付 いて る。 落 ち ない ぞ よー！」

カチッ！

零 は 手 に し た り モ コ ン の ス イ ッ チ を 入 れ た。 す る と、

ドオオオオオオオオン!! ?

間近に迫っていたスパイダーが爆発した。衝撃でバスが僅かにグラつく。俺は落ちない様に体勢を整える。零は爆発したスパイダーを納得がいけない様子で眺める。まるで仕留め切れなかったとばかりに。

「アレは一体何だ？爆弾でも仕込んでいたのか？」

「その通り！自家製の特製爆弾だよ♪」

「爆弾を仕掛ける暇があったなら何故、もっと早く教務課に連絡しなかったの？！」

俺は最大の疑問を零にぶつけた。

爆弾を仕掛ける。『武偵殺し』のオモチャの場所を知っていた。この騒ぎの前から準備をしていた事になるぞ。

「しようとしたさ。でも、出来なかった。あのオモチャが隠されていた場所にはブービートラップが満載。盗聴器、監視カメラ、熱源センサーを掻い潜って爆弾を仕掛けるので精一杯だったんだ」

「なら、隠し場所を見つけた時点で連絡しろ！」

「場所を特定したのが、今日の朝一番だったんだよ！仕込みを終え、変装もしてバスに乗るのは大変だったんだからね」

そう言うのと、零は屋根に仰向けで寝そべった。

「隣に寝たまえよ。金次君」

「……どうして？」

俺は意味不明な事にただ茫然とするだけだ。

この状況下で呑気に寝ている場合か。

「まあ、いいからさ」

零に無理やり手を引かれ、彼女の隣に仰向けで寝る。

俺の側で零の香りがする。何だか不思議と落ちてきたぞ。

零はスカートのポケットから金字で『M』の刻印が入った精油パイプを取り出すと、落ち着いた様子で吸い出した。

「寝てどうする？」

「待つんだよ。私を信じなさい。その間、一服させてもらおうよ」

言われた通り、暫く屋根の上で待っていると、

バリバリバリバリッ！

再び無数の銃弾がバスに一齐に撃ち込まれてきたーその数4台だ。

今度は屋根にいる俺たちを狙ってやがる。寝そべっている俺たちの真上を9mmが通過する。見ていただけゾッするぜ。

「じーっと待つんだ」

「何をだ??？」

変わらず銃弾は撃ち込まれ続けている。

「その内、反撃の窓が開くからさ」

零は俺に一丁のリボルバーを手渡してきた。俺は手に取り確認する。これはシングル・アクション・アーミー。別名ピースメーカーだ。兄さんと同じ回転式拳銃。色はブラックだが、他は兄さんの使っていたヤツと同じだ。

これで反撃しろって事か。

バリバリバリバリッカチ!!?

容赦無く撃ち込まれていた銃弾の雨が突然止んだ。UZIを見てみると、弾詰まりを起こしていた。

今なんだな零!

「後は頼んだよ」

俺は立ち上がりバスの下ー眼下にいるスパイダーのUZIの銃口に狙いを定めた。ヒステリアモードじゃないが、いけるか。

俺は意を決してピースメーカーを発砲した。

使った弾丸は4発ーその全てが、UZIの銃口に飛び込んでいき、

ズガガガガガガッ!!?

スパイダーたちは全て、その銃座のUZIを吹っ飛ばされた。

俺の、ヒステリアモードでもない、たった4発の銃弾で。普段の俺でここまでやれるとは思えなかった。

「やるじゃないか金次君」

「まさか普段の力でやれるとは思えなかったぜ」

「お兄さんが力を貸してくれたんじゃない？」

零は俺の手にあるピースメーカーを指差す。それに釣られて、俺は手にある銃を見つめる。兄さん……

「零…… まさかこうなる事を見越してピースメーカーを……」

「まさか。さて、邪魔者も消えたし早く爆弾を…… とはいかないか」

立ち上がった零の眺める向こうーバス後方から再びスパイダーがやってきたー今度は10台だ。まだいたのかよ!? 何台車を持つてるんだよ。『武偵殺し』のヤツ、金持ちか？

「どうするんだ？あの数を相手にするのは無理があるぞ！こつちには負傷者だっているのに……！」

バスには何人もの負傷した武偵がいる。

トンネル内であの数で襲われたら、ひとたまりも無い。

「大丈夫！こんな事もあろうかと助っ人を呼んでおいたから！」

「助っ人って、誰だよ！」

「金次君もよく知ってる2人組だよ。ほーら、噂をすれば来てくれた」

バスの前方シート・トネルの台場方面から何かがこつちに接近してくる。

あれはフォード・マスタングじゃねえか。『武偵殺し』ー！新手か？いや、座席に誰か座ってる。あれは……

「ヒヤッハー!!? 助けに来たぜー!」

強襲科の問題児姉妹ボニー&クライドだ。

ボニーは運転席、クライドは助手席に座ってる。助っ人って、アイツらかよ!!?



## バスジャック その2

### キンジ時点

「ヒヤッハー!!? 助けに来たぜー!」

対向車線から何かがやって来た。目を凝らして見つめると、それはフォード・マスタングだった。それもオープンタイプに改造してある。馬のエンブレムが一際目立つ。

運転席には、何がそんなに楽しいのか。狂暴な笑みを浮かべたボニーが、無造作に伸ばした金髪を靡かせハンドルを握っている。反対に助手席には、大きく布に包まれた細いモノー形からして銃器だろう。大事そうに抱えたクライドが座っている。此方もボニーに負けないくらい狂暴な笑みを顔に貼り付けている。

車に乗っている2人の姿を見回す。

相変わらず派手に改造したダメージ加工のセーラー服だ。武偵が『出入り』の際に着込む、攻撃的な装備。C装備とは違う。

2人の姿を目にした瞬間、俺は口をあんぐりとだらしなく開けた。最悪だ、いや災厄だ。

「何でアイツらを助っ人と呼んだ? もっとマトモな奴はいなかったのか?」

「あー、そこは私からの進学祝いと思ってよ」

俺は零の顔をじーっと捉えながら質問する。

絶対に動かせるヤツらがあの2人しかいなかったな。あと、あんな進学祝いはいらねえよ。貰う方が迷惑するだけだ。

迷惑の根源ーゴニーとクライドに視線を移す。

ーゴオオオオオオン!!?

獣の咆哮にも似たエンジンをトンネル内に響かせ、フォード・マスタングはバスの後方にバックで張り付いた。

ハンドルを握るゴニーはバスとギリギリぶつかるか、ぶつからない距離感を保っている。大した運転技術だ。この腕なら車両科でも十分に通じるな。

バスの後方に来ると、ゴニーとクライドはこちらに顔を向けて、

「よっーキンケツ。人が助けに来てやったのに、自分はこんな時に発散かヨ」

「シかも、走行中のバスの上でお楽しみとはやるね」

呑気に話しかけてきた。

お楽しみみて、何の事だ？俺と零を見てニヤニヤしやがって。

零を見てみると、制服のボタンが外れ、綺麗な曲線美のくびれと見事な輪郭の胸が丸見えだ。

「ち、違う！これは事故だ」

バス内でのやり取りが鮮明にフラッシュユバックする。

しまった……あの時、怒りに我を忘れて零と取っ組み合いになった。その過程で

俺は零の制服のボタンを剥ぎ取り、今の姿にしまった。それに抵抗して零は俺の頭にクラッチを決めてきた。柔らかい太ももの感触がまだ残っている。必死に抵抗する零の表情も鮮明に蘇る——若干涙目だった。

ドクン！ドクン！

自分の血流が早くなる。落ち着け！ヒスるな。あんな状況下でのやり取りでヒスったら、金輪際、どんな事をされるか分からん。

「何が違うのかな？金次君。私を押さえつけて……その上、無理矢理……これは白雪さんにチクろう」

零が淀んだ目で俺を睨む。普段の零の瞳——ルビーの様な真つ赤な目と違い、変装しているからだろう。碧眼の目で睨まれると違った迫力がある。

やめてくれ！そんな目で俺を見ないでくれ。あと、白雪にチクるな。俺が死ぬ。

「本当にすまなかった。あの時、俺はどうかしていた」

「ま、まあ、私の方も紛らわしい事をしていたから……私も悪かったよ」

俺が謝ると零は意外にもスンナリと許してくれた。今日はどうしたんだ？何時もな

ら擲擧つてくるのに……バスジャックで緊急事態だからか？なんで口を尖らせて喋る？

俺たちのやり取りをバスの下からボニーとクライドは、またニヤニヤしながら眺める。腹が立つからやめろ！

「このまま眺めるのもいいけど……それどころじゃなさそうダ。なあ、クライド？」

「ダな、ボニー。オーい、お二人さん。イチヤイチャしてないで前を見る。前を」

だからイチヤイチャしてねえよ。

クライドが指し示す方角にはスパイダーが見えるーその数は合計12台だ。ボニーとクライドが駆けつける前は、全部で10台だったのに2台も増えてるぞ。

スパイダーは隊列を組み、こっちに向かつてくる。

「あちやー、どうやらヤッコさん。まだ、伏兵を隠していたか。大方、トンネルの入り口付近に待機させていたか」

零は冷静に顎に手を添えてスパイダーを観察する。

バスの走行風に吹かれて、ボタンの取れた制服がバタバタとはためく。前を何かで隠せよ。そんな姿にしたのは俺だけだよ……

「ボニー先輩!? どうしてここに!?」

「クライド先輩もいるよー」

バスの窓から後輩——強襲科生達が顔を覗かせた。

後輩達に余程慕われているのか、その顔はボニーとクライドの登場に歓喜している様子だ。

元強襲科として言わせてもらうが、無防備に顔を覗かせるなんて、相手に撃つてくたさいと言ってる様なものぞ。

「この出来損ないの野郎どもめ!!?」

ボニーとクライドは突然怒鳴り声を上げた。

走行中だというのにボニーとクライドの怒鳴り声はよく響いた。

「何ビックビク縮こまってやがる!」

「才前らは誰かに水を与えられるのを待つだけの雑草か!!?」

ボニーは運転中にも関わらず、腰に斜め掛けされた革ガンベルトから拳銃——コルト・グリスリーを引き抜いた。

『コルト・グリスリー』アメリカのコルト社が1986年—1990年まで生産していた「MK—Vシリーズ」の回転式拳銃『コルト・キングコブラ』にパイソンの銃身を取り付けた1997年ごろの製品で限定品だった。おまけにシリンドーはノンフルーテッドだ。

——ドオン!ドオン!ドオン!ドオン!

ボニーは後ろ向きで、あろう事か後輩に向かって発砲した。突然のボニーの凶行に後輩たちは「ヒィ!?」と短い悲鳴をあげて、バスの中に縮こまってしまった。後輩たちを殺す気か!?

「お前らに教えたよナ! 誰も助けちやくれねえ! 最後に頼れるのは自分だけだトヨ!」  
「自分の力を信じろ! 自分を信じられなくなったら、そこでくたばるだけだ!」

未だバスの中で縮こまっている後輩達に向かって大声で叫ぶ。

言つてる事はメチャクチャだが、まあ、合つてるつちや合つてる。しかし、最初の発砲は無いだらう。

「そ、そうだな! やるしかない!」

「よっしやああ! やつてるぜ!」

ボニーとクライドのメチャクチャな言葉に心動かされたのか、縮こまっていた後輩たちが反撃に出た。強襲科で見た顔もいれば、車両科もいるし、ドンパチと殆ど縁のない情報科や衛生科の奴もいる。

パアン! パアン!

ドオン! ドオン! ドオン!

スパイダーに向かつて、上手く狙いを定めて撃つ奴もいれば、見当違いな所に発砲する奴もいる。

撃たれるかもしれないのに、大胆にも身体を窓から出して発砲する奴もチラホラいるぞ。後輩だけにやらせる訳にはいかん。

俺も眼前のスパイダーに向かって発砲する。続けて零もしやがんで発砲する。お前はちやつかりと安全姿勢かよ。

「ヒヤハハ、これこそ銃撃戦の醍醐味だよナ！」

「名誉の死で俺たちの最期を飾るとしよぜ！」

ボニーとクライドはタダでさえ狂暴そうな笑みをさらに強める。この状況がいたく気に入ったようだ。お前らは戦闘狂か!?？銃撃戦の何処が楽しいんだよ。下手したらお前らも死ぬぞ。

バリバリバリバリバリ!

撃たれてばかりではいられないと、スパイダーが反撃に出た。

12台の銃座のUZIから銃弾の雨が容赦なくお見舞いされた。

後輩たちはバス内に、俺と零はしやがんでやり過ごす。

ガアン!ガアン!とバスに被弾しているのが分かる。今までの比じゃない。

まずいぞ!俺らは兎も角、バスの後方にいる2人には銃弾を遮るモノがない。乗車しているフォードマスターングだけじゃ防ぎきれないぞ。

「イテエなこの野郎!!？」

銃弾の雨の中、ボニーは立ち上がった。防弾制服だけでアレを耐えたらしい。防弾制服で銃弾は防げてても、衝撃までは防げないんだぞ！どんな身体をしているんだ？あと、ハンドルから手を離すな！クラッシュするぞ。

俺は2人が乗車しているマスタングをバスの屋根から顔だけ覗かせてみると……あ、足でハンドルを操作してやがる。お前は曲芸師か?!? アクセルはどうしてる？

運転席から立ち上がったボニーはアクセルを踏んでなく、代わりにクライドが助手席下に、あれアクセルか？らしきモノを踏んでいる。車の教習所の教官が、教習生と実際に一緒に乗車し、緊急時にブレーキをかける為、助手席に設けられているブレーキ。そのアクセル版か。

バリバリバリバリ!!?

銃弾は容赦なく2人を襲う。

ボニーは撃たれながらも姿勢を崩さず、足でハンドル操作を、クライドはパリンと、頭にかけていたサングラスをUZIに碎かれながらも、布に包んだ銃器を側に抱えたままだ。

クライドはなんで何もしないんだ！きつきのマジでヤバかったぞ。下手したら頭を撃たれていた。

スパイダーはさらに接近してくる。



「よし、そのまま来いや」

ボニーは腰のガンベルトからもう一丁コルト・グリズリーを抜くと、前方を走る4台のスパイダーたちに発砲した。

ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！

放たれた4発の銃弾は一切の狂いなく、吸い込まれるように銃座のUZIの銃口に飛び込み、

ズガガガガガガガガガッ！！？

4台のスパイダーたちは吹き飛ばされた。

スゲエ…… 走行する車からあの体勢で発砲したのに、あの命中率は驚きだ。メチャクチャな性格の割に何て腕だよ。

2人が何もしなかったのは、スパイダーが有効射程に来るのを待っていたからか。無駄玉（後輩への攻撃は兎も角として）を減らすのが目的か。

「やれい。やっちまえ、クライド！」

「アあ、くそッ！最近、弾の相場上がってんだぞ、クソツタレ！」

ボニーの合図にクライドがバサッと、銃器を包んでいた布を取り払った。取り払った布が宙に舞い、その下から姿を現したのは、ラインメタルMG3。

第二次世界大戦中のMG42を、戦後の運用状況にあわせて再設計した汎用機関銃で

ある。この銃の基設計は、第二次世界大戦当時のドイツ国防軍の汎用機関銃であったMG42であるが、使用弾が7・92x57mmモーゼル弾から7・62mm NATO弾に変更され、同時に弾薬リンクもNATO標準のM13分離式リンクが使用可能になったことが最大の相違点で知られる。

銃検査に通せば完全にアウトだ。あの姉妹のやり過ぎぶりを間近で見てきたから今更、もう銃くらいで驚かない自分はもうなんだろうか……

クライドはラインメタルMG3に弾帯を装填すると、銃に取り付けてある二脚銃座をドオンとマスタングのボンネットに突き立てた。

思いつき突き立てられたボンネットには凹みができる。マスタングに何て事をするんだよ。武藤が見たら悲鳴を上げるぞ。

そんな事など御構いなしとばかりにクライドは引き金を引いた。

ガガガガガガガッ！

ラインメタルの銃口から無数の銃弾が火を噴く。同時にパラパラと車道に空葉莖がばら撒かれる。

ズガガガガガン！

狭いトンネル内では逃げ場がなく、スパイダーの隊列はクライドの容赦ない銃撃の餌食となった。

使用している銃弾が7・62mm NATO弾とはいえ、この威力は異常だ。

スパイダーが原型を留めてもいない。明らかに違法改造してある。対人使用だと一瞬でミンチだな。

銃撃戦を繰り返すバスはトンネルを抜けて、お台場に出た。トンネル内にいたから分からなかったが、外は豪雨だ。バスの外にいる俺と零に容赦なく雨が降りかかる。

## バスジャック その3

キンジ視点――

「うわー、外はすつかり大雨だね。水の滴る良い男になつたじゃないか金次君」

お台場に入って直ぐに零が空を見上げ、呑気に話しかけてくる。いつの間にか精油パイプを口に咥えている。

外は豪雨に見舞われ、強風も吹き荒れている。走行するバスの屋根にいてもろに影響を受ける。数分もしないうちに制服はびしょ濡れだ。おまけにこの風だし、油断すればバスから落下しかねん。

「油断するなよ零。ボニーとクライドのおかげでスパイダーは片付いたが、肝心の爆弾が見つかってないんだぞ」

俺は未だバスの後方をバックで付いてくるマスタング乗車しているボニーとクライドを見る。2人は俺が見ている事に気付いたのか、こちらに手を振ってくる。ニヤニヤとムカつく顔はそのままだが。

兎も角、ボニーとクライドの活躍で、スパイダーたちはトンネルで一掃できた。あの姉妹たちはやる時はやるな。感心したぜ。普段からこれくらい……被害は最小限で

やってくれたら文句無しなんだがな。

「おっと、そうだったね。ゴメンゴメン」

零はパイプを口から離すと、小さな舌を出して「てへ♪」と付け加えるが、今の状況下でやられても可愛くないぞ。現在、俺らが乗ってるバスには爆弾が仕掛けられているし、いつ爆発してもおかしくない。そうなったら、俺たちだけでなくバスに乗ってる武藤や後輩たちまで犠牲になる。

「さて、邪魔モノもいなくなつたし、早く爆弾を見つけてこのくだらないレースを終わらせようか」

よっこらしよとばかりに立ち上がり爆弾捜査に乗り出す。

ーバババババ

上空から何かのローター音が聞こえるーバババ。

武高所有の緊急出勤時に使用されるヘリだ。バスジャックの知らせを受け駆け付けたいらしい。

ヘリのカーゴハッチが開かれる。搭乗者の姿が見える。見慣れたツインテールの美少女アリアだ。TNK製の防弾ベルト。強化プラスチック製の面あて付きヘルメット。フィンガーレスグローブ。武偵がいわゆる『出入り』の際に着込む、攻撃的な装備ーC装備を着込んでいる。

それと……一緒に搭乗しているショートカットの美少女、あれはレキか。

レキは入試で俺と同じSランクに格付けされー今もSの、狙撃科の天才少女だ。身体は細く、身長はアリアより頭半分大きい程度。腕は確かなのだが、その無表情で口ポツトっぽい性格のため目立たない女子である。

アリアめ。転入生のくせに、いい駒が分かっているな。

「ほうー、レキさんか。いい助っ人をチョイスしたネ〜」

零もアリアとレキの姿を捉えたのか、へりを眺めて笑う。

「ほらーバカキンジ。しっかり受け止めなさいよー」

受け止めろって、何をだよ？

躊躇いもなくアリアがへりから強襲用パラシュートを使いつつ、バスにダイブした。マジかよ!!？

俺は慌てて、アリアを受け止める。アリアの小さな身体が俺の腕に収まった。本当に小さいな。

受け止めた際、足を滑らかせそうになるが、何とか踏ん張りを利かせて耐える。後ろから零も支えてくれた。助かったぜ。

「このバカ！何で電話に出ないのよ。何度も掛けたのに！」

パラシユートを捨てたアリアが俺の胸をポカポカと叩く。

やめろ！地味に痛てえから。それに電話つて、何の事だよ？寮を出る前に着信履歴を見たが、誰からも電話なんて貰ってないぞ。勿論、寮を出た後もだ。

「何の事だ？俺はお前から電話なんて一本も貰った覚えがないぞ」

「嘘よ！あたしは何度も電話したわ！何度も、何度も！それなのにあんたときたら、電話に出ないどころか簡単にバスジャックに巻き込まれて……あたしがどれだけ心配したと思ってるのよ……！」

「悪かった、悪かったよ。俺の不注意だ。すまんかった」

俺は何とかアリアを宥める。

何がどうなってる？アリアの様子からして嘘は言っていない。ここまで言うからにしては本当なんだろう。アリアは嘘が下手だし、こんな嘘を言っても何もならない。

誰かが俺の電話に細工でもしたのか？アリアからの着信を受け付けられないようにして……

「あー、金次君。お取り込み中、悪いんだけど今は、ね？」

零の声にハッと、我に帰る。いかん、電話の件も気になるが、今はこの件ーバスジャックを対処しないとな。

「あんた誰よ？見かけない顔ね？」

アリアが変装した零をジツと捉える。

今の零は変装をしている。普段の姿とは違う美少女だ。アリアが気づかないのも無理はない。俺ですら最初は分からなかったからな。

「あれ、分からないのかな。私、ちよつとシヨックだな」

「だから誰なのよ！名前から言いなさい！あと、何であんた下着姿なのよ！前くらい隠しなさい。ハシタナイ」

アリアが制服の前を開けた零に詰め寄る。

零よ……お前、ワザと声を変えて喋ってるよな。あと、アリアよ。お前も気づけよ。相手を小馬鹿にしたこの態度。零しかいねえよ。

どうする？ここでアリアにこいつの正体を言うべきか……2人は仲が悪いし、タダでさえ状況が状況だけに混乱しかねん——俺が取っ組み合いの末、零を下着姿にしたのがバレたら風穴を開けられかねん！

「あー、アリア。こいつはアレだ……えーつと、そう！違うクラスの奴で、前に俺と任務をこなしてた……」

「こなしてた、誰よ？」

アリアがギラリと睨みつける。怖っ！何で俺を睨む。

俺はない頭を捻って考える。ああ、くそッ！どうすればいい。まったく思いつかん。



何もない……何もない？

そのワードにピンとくるものがあつた。

「名前はそう……キョウだ！」

虚<sup>ニ</sup>中身がない。つまりゼロ。零の名前に当てはまる。似たような意味だし、我ながら適当だな。

俺は零に視線を移して、同意を求める。

頼む！合わせてくれ。頭のいいお前なら分かるだろう？

「うんーそうです。初めまして、金次君と前に任務をこなしてたキョウです」

目に横ピースサインを決めて、俺が決めた偽名を堂々と名乗る。

分かってくれたか。俺が安心するのも束の間、零が意地悪そうな笑みを浮かべた。

その笑みはなんだ？合わせてやるから、後で何か奢れつてか？

「そう、よろしくねキョウ。あたしは神崎・H・アリアよ」

アリアは納得したのか、変装した零に自己紹介し始めた。納得するんかい！絶対に後で零にイジられるな……

「あー、自己紹介してる所で悪いんだが、どうやってバスジャックの事を知ったんだ？いや、『武偵殺し』の事をよ」

「ヤツの電波をつかんで、通報より先に準備を始めたんだもの。本当なら、キンジにも来

てほしかったけどね」

「電波？」

「おや？知らないのかい金次君。『武偵殺し』は自分の仕掛けた爆弾やさつきのおもちやを操る際、特定の電波を使うのだよ。まあ、犯行ごとに毎回電波は変わるけどネ」

「あら、『武偵殺し』について、えらく詳しいわね？」

「まあ、そこは金次君に聞かせてもらったからさ。ねえ、金次君？」

零が俺に話を振りだしたので、俺は思わず「お、おう」と答えてしまう。特定の電波……それを頼りにアリアは駆けつけたのか。ちよつと、待てよ。あの日……最初にアリアと出会った時はカージャックだったよな。あの時もこうして、『武偵殺し』が流していた電波をキャッチして駆けつけたのか。だとしたら、おかしいぞ。あの時は車内……零の車に爆弾、通信装置の類は発見されなかった。

アリアは爆弾があると、確信して駆けつけた。それは『武偵殺し』の電波をキャッチしたから。ここまではいい。なら、その電波は何処から出ていたんだ？

冷静に考えてみれば、おかしい事ばかりだ。アリアは嘘を言っていない。これは信頼できる。

ならば、零は？車内に通信装置の類を残したのか？

俺はチラッと零を眺める。

「うん?どうしたのかな金次君?」

零はニコツと俺に笑いかける。その顔を見て俺は思わず、背筋がゾツとした。一気に血の気が引いていくのが分かる。

「い、いや。何でもない」

俺は急に怖くなったので、適当にはぐらかす。

零はあの時、爆弾が車内がない事を知っていながら、俺と白雪に調べさせた。何の為に?爆弾はなかったが、恐らく通信装置の類は残しておいて……『武偵殺し』をおびき出す為か?俺は兎も角、こいつにとつて親友である白雪まで危険に晒すなんて……いや、相棒を疑うなんてどうかしている。仮におびき出すのが目的でも、きつと零なりに安全に対処する方法があつたのに違いない。

「そう……まあ、いいけど。取り敢えず、今は爆弾を何とかしないとね」

零の眺める向こうにはレインボーブリッジが見える。

「爆弾は車内になかった。残るは外しかない」

「だとしたら、車体の下ね。あと、キンジ。これ持つてなさい」

アリアは俺にポイと無線を投げて渡すと、バスの後方ニーボニーとクライドの運転するマスタングに飛び降りた。

「うオ!?びつくりシター!って、神崎かヨ」

「いきなり飛び降りてくるなんて。クラッシュしたらどうすんのよ」

突然のアリアの登場にボニーとクライドの姉妹は驚いた様子だ。

思わず俺はヒヤヒヤした。何かの拍子で着地地点ー車がズレたらどうするんだよ。見てみるよ、零も珍しくヒヤヒヤした様子で見てるぞ。

「ボニーとクライドね。あんた達、ちよつと協力しなさい。この速度をキープして」

ボニーとクライドに気さくに話しかけてやがる。どうやら、同じ強襲科とあつて、顔見知りらしい。

アリアはマスタングのトランクに体操選手さながら足を引つ掛けて、バスの下を覗き込む。

『爆弾らしいものがあるわ!』

渡された無線からアニメ声が聞こえる。どうやら、爆弾を発見したらしい。

『カジンスキーβ版のプラスチック爆弾、「武偵殺し」の十八番よ。見えるだけでもー炸薬の要積は、3500立法センチはあるわ!』

気が遠くなる。

なんだよそれは。過剰すぎる炸薬量だ。ドカンといけば、バスどころか電車でも吹っ飛ぶじゃないか。

「ふーむ、3500立法センチ、ネ。アリア、解体はできそうかい?」

零が無線越しにアリアに尋ねる。

『やってみるわ……って、何なのよコレ!!? 今まで見た事も無い配線の数に複雑な構造だわ』

無線越しでもアリアが驚愕しているのが手に取るように分かる。

アリアの反応からして、余程解体が困難な爆弾なのだろう。どうすればいい? 俺にも何かできないのか。

「って、ことは解体は『無理』なんだネ」

零がアリアの嫌う3つの言葉——『無理』『疲れた』『面倒くさい』の内の一つを言ってみせた。

『む、無理じゃないわ! 解体くらいやってみせるわよ……!』

「少しは現実を見たらどうだい。君は言ったよね? 今まで見た事も無い構造だと。なら、爆弾の解体は無理だ」

『うるさいッ! あたしは諦めない! やってやるんだか……』

「いい加減にしなさいッ!!?」

零が無線越しにアリアを怒鳴る。

無線を持つ俺の手がブルツと震える。

「そうやって意地を張って無理なモノを無理と認めず、もし爆発させて君は責任が取れ

るの!?!?このバスには私たちだけじゃなく、他の武偵達も乗っているんだよ!この現場は君のおもちやじゃない!!?」

零の言葉が豪雨の中にも関わらず、辺りにこだます。一瞬、辺りがシーンと静かになった気がした。

さつきまでのチャランポランした零とは思えない迫力だ。

『………… ツ………… !だったら、どうすればいいのよ』

「アリア、爆弾を車体から切り離す事はできるか?」

俺はアリアに尋ねる。何か言つてやらないとマズな。

『しつかりと固定されていて、切り離す事はできないわ。無理に切り離した瞬間、爆破するようになっているみたいだし』

「仮に切り離しても、さつき述べた炸薬量では周りに被害も出かねないネ。ふむ……………」

零は顎に指を当て、トントンと叩きながら思考している。

これは零のお決まりといつてもいいポーズだ。この状況下でよく落ち着いていられるぜ。

「ならば、炸薬量を減らせばいいんじゃない?」

「減らすつて、どうやるんだよ?」

「プラスチック爆弾は粘土状だろうし、うまく信管を避けてある程度、千切つて炸薬量を減らしてしまえば、爆発の被害は少なくなると思うよ」

よく間違えられるが、名称のプラスチックとは合成樹脂のことではなく原義の「可塑性」を意味し、粘土のように容易に変形できることが特徴である。

確かに炸薬量を減らせば、被害はある程度減らせるだろうが……

『それでも、爆発することには変わりはないわ。減らしても1500立法センチくらいよ』  
——1500立法センチ。

それでも十分バスを吹き飛ばすには十分な量だ。

「確かにねー。だからさ、爆発時にはバスから切り離されていればいいのだよ」

「だから、それをどうやるんだよ？アリアは切り離しはできないって……」

「彼女がいるじゃないか」

零が眺める先には、ヘリに搭載したレキの姿が。まさか、レキに狙撃させて切り離すってか?!? 確かにレキの狙撃銃ードラグノフの7.62mm弾なら切り離す事は用意だろうか……

「無茶言うな?!? いくらレキでも走行するバスの——それも車体の下に仕掛けられている爆弾だけを狙撃するなんて……!」

「可能性はゼロじゃないさ。できる?レキさん」

『びぎます』

無線越しにレキが返してくる。その声は一切の迷いもない無機質な声だ。本気かよ……これしかないのか。

「アリアもそれでいいよね？」

『OKよ。けど、どこで切り離すのよ？今、走ってるお台場じや建物も多いし、被害が大きいわよ』

「あそこで切り離そう」

零の眺める向こうレーンボーブリッジが見える。

あそこなら周りは海だし、爆破させるのに都合だ。

「これだけ騒ぎになってるし、警察も交通閉鎖くらいしているさ。武偵だけに手柄取らせるワケにはいかないだろうしネ♪」

警察も何もしないワケにいかないか。

確かに、交通閉鎖くらいはしてくれてるだろうぜ。それなら、一般車両にも被害は出ない。

「レキ、聞こえただろうが、レーンボーブリッジに向かってくれ」

俺が無線で指示すると、レキを乗せたヘリはローター音を響かせレーンボーブリッジの方角に向かった。



「アリアは可能な限り、プラスチック爆弾の炸薬量を減らしてくれ」  
『言われなくてもやるわよ!』

無線からキーンとする甲高いアニメ声で叫んできた。俺の右耳を通って左耳まで貫通してくるような気がした。

「ボニー!アリアが落ちないよう運転頼むぞ」

「任せとけ!安全運転してやるよ!」

すまんが、お前が安全運転する光景が想像できん。緊急事態だし、こいつでもやってくれるよな。

「武藤!このままレインボーブリッジに行ってくれ!そこで爆弾の解体を行う」

俺は屋根伝いに歩き、バスの運転席に移動する。そこには零から貰ったバンダナを頭に巻いた武藤が運転を続けていた。

「わかった!絶対に成功させてくれよな。そろそろ、ガソリンがヤバイ」

「どのくらい持つ?」

「持つてそうだな……. レインボーブリッジを少し過ぎた先ー芝浦ふ頭が精々だ」

武藤の言う通り、ガソリンのメーターは切れる寸前だ。

レインボーブリッジを抜けた先、芝浦ふ頭はビルや倉庫、商店も多い。橋の上で爆弾を切り離せず、渡りきってしまったら被害はデカい。チャンスは一度切りか……:

「分かった。爆弾はこっちの方で処理する。このまま運転に集中してくれ。あと、レインボーブリッジに入ったら、全員、安全姿勢を取るよう伝えてくれ」  
「わかった！」

最後にそう伝えようと、再びバスの後方に戻る。

「やるね〜金次君。やっぱり、私の見立て通り、君には指揮官の才能があるよ」

零がピツと俺を指差しながら称賛してくる。

指揮官つて、去年のコーヒーで分かったつていうアレか？

「そんなモン、俺にはねえよ。当たり前前の事を言っただけだ」

「ふふふ、今はそうしておこうか」

口に手を当て、可笑しそうに笑う。

その変装顔で笑われるのは、少し変な気持ちだな。新鮮というか、変な感じというか。

早くいつもの零の顔に戻ってほしいぜ。

「はあー、これでもし、石灰と塩があれば最高なだけどなー」

「石灰と塩だと？そんなモンが役に立つのかよ」

「石灰〜コンクリートで爆弾を覆って固めてしまえば、爆発の規模を減らせるし、塩を混ぜれば、塩分でコンクリートの凝固を早めることができるのになー」

零が「はあー」がため息をつく。零の何気ない発言に俺は疑問を持った。

それだけの知識がありながら、何故、さつき述べたモノを用意してこなかったんだ？『武偵殺し』が犯行に爆弾を使用してくる事は予め、こいつなら予想が付くだろうし、バスでの『武偵殺し』への妨害ぶりは見事だった。どれも『武偵殺し』の意表を突くモノばかり。

でもよ、何故…… お前は“爆弾への対策”をしなかったんだ？

俺は零に疑問をぶつけてみようとしたが、お台場のフジテレビを抜けた先で、  
ブウン

突如、虫の羽音めいた音が耳に聞こえてきた。

何だ？俺は周囲に首を巡らせるが、なにも見つからない。この豪雨の中だから、空耳でも聞いたか。

「金次君、アレツ！」

零が何かを発見したようだ。上に向かって何を指差している。

俺は上を見上げると、そこにはドローンが飛んでいた。

蜂の羽音を意味する、遠隔操縦あるいは自律式のマルチコプター又は無人航空機。武偵の間でも使用されている。主な用途は探偵科で航空偵察、強襲科では神風アタックに使用する奴もいたな。

それが一機だけじゃない。二、三、四……六機もいる。

その全てに空撮用のビデオカメラ、UZIが搭載されている。

どう見ても民間向け——一般人が飛ばすような機体じゃない、『武偵殺し』かつ??  
バリバリバリバリバリッ!

上空から六機分のUZIの9mm弾が容赦なく浴びせられる。  
バスの車内から武偵たちが悲鳴を上げる。

「ぐわッ!」

「金次君!!?」

『キンジツ!!?』

咄嗟の事で躲す事ができず、俺は肩に被弾した。

痛えッ!!? やっぱり防弾制服越しでも痛いな。

思わずその場にうずくまりそうになるが、歯を食いしばって耐える。

バリバリバリバリバリバリッ!

銃撃が止む様子はない。スパイダーでの銃撃とは比べ物にならない。

機械越したが、『武偵殺し』の憤激がよく伝わってくる。

間違いない奴は怒っている。計画通りにいかないのが気に入らないのか、零に妨害されたのが腹ただしいのかは、分からないがな。

バリバリバリバリバリッカチッ!

銃撃が止み、ドローンたちはそれぞれ三機に別れた。ボーニー&クライドはアリアが乗るマスターングと……俺と零を狙う形に。

バリバリバリバリバリバリバリバリッ！

激しい銃撃が再開された。俺と零は必死に躲す。

躲すと同時に俺たちの足元。バスの屋根に大量の銃弾がけたましい音を立てて、被弾する。

「イテエな、この野郎！」

「Fuck you!!」

ボーニーが怒鳴り、クライドが中指を立てる。

ボーニーとクライドにも決して少なくない銃弾が被弾する。防弾制服で覆われた、肩や肘に被弾しているのがここからでも分かる。

まずいな……あの2人はマスターングー車とバスの間で爆弾処理を続けているアリアを庇って、車を移動させることができないんだ。

あれじゃ、絶好の的になるだけだ。

『ちよつと、どうなってるの!??ここからじゃ、なにが起こっているのか分からないわ!』

アリアが状況説明を求める。

バスの下にいるから状況が分からないのか。ある意味でソコは安全地帯かもな。この状況を見せてやりたいぜ。

「現在、『武偵殺し』の新しいオモチャと交戦しているところだ。奴め良いもの持つてるぜーードローンときた！」

パァン！

無線でアリアに話しかけながら、俺は一番手前のドローンに発砲するがヒョイと躲されてしまう。さらに3発続けて発砲するが、これらも簡単に躲されてしまった。くそッ！ここまで腕が鈍ったか。自分を殴りつけたいぜ。

『ちよつと、大丈夫なのキンジ!? スゴイ銃撃みたいだけど……!』

「大丈夫だーアリアは爆弾に集中してくれ。お馬鹿姉妹が盾になってくれるからよ」  
「お馬鹿は余計だ!!?」

ドオン！ドオン！ドオン！ドオン！

ガガガガガガガガガガガッ！

俺の言葉にキレて、ボニーとクライドが反撃に出た。

ボニーはコルト・グリスリーの2丁、クライドはラインメタルMG3を上空のドローンに向けて発砲した。

2人の銃撃をドローンは軽く躲す。

「ああん？」

カチッ！カチッ！とボニーがここで弾切れを起こした。

「ヤベッ！」

カチンツと、クライドがラインメタルの弾帯を撃ち尽くした。

姉妹揃って弾切れだ。

お前ら残弾数くらい把握しとけよ！早くリロードしろ。

俺がりロードの時間を稼ごうと援護しようとする、一機のドローンがヒューとマスタングの真横に寄って、次の瞬間――

ドオオオオオオン！！？

爆発した――自爆だ。あのドローン、神風仕様か！！？

至近距離で爆発をくらったマスタングは前輪が吹き飛び、あつという間に上下が逆さまになった。

同時にボニーとクライドは車道に投げ出された――ゴロゴロと車道を転がる。バスは確実に負傷したであろう、あの2人を残して走り続ける。

「ボニーッ！クライドッ！」

俺は2人の名を叫ぶが、豪雨にかき消されて届かない。

クソッ！なんてこった…………… 目の前で仲間がやられた。助けられなかった。

バリバリバリバリバリバリッ!

感傷に浸る間も無く、ドローンの銃撃が再開される。

ボニーとクライドの事に気を取られ、回避動作が遅れた。マズイツ! やられるツ!!?

「バカキンジ! しつかりしなさい!」

「しつかりして、金次君!」

「ガババッ!」

ガスンツ! ガスンツ! ガスンツ! ガスンツ!

零が俺を押し倒し、アリアが発砲してきたドローン三機をガバメントで撃ち抜く。

撃たれたドローンは呆気なく道路に墜落した。

「た、助かったぜ。ありがとうなアリア、キョウ」

「どういたしました」

零が俺の頭を抱えて、自分の胸に押し付ける。柔らかい感触が顔全体に伝わる。こ、

これは……! マズイツ!

「こんな時に何やってんのよ!」

アリアが零の尻をゲシツ! と蹴る。自然と零から剥がされる。今のは別の意味で助

かった。

「痛いな! お尻を蹴らないでよ!」



「あんたが悪いんでしようが！」

俺を挟んで2人がギャーギャーと口喧嘩を始めた。

「ああ！2人とも落ち着けよ！仲間割れすんな！」

見てられないので仲裁に入る。この非常事態に喧嘩している場合か。

「仲間割れは愚かな行為だぞ。相手の思うツボだ」

俺は生き残っているドローン三機を見つめる。

いつまで経つても、残り三機のドローンからの銃撃がこない。ただ、ジッと俺たちの真上を飛行しているだけだ。

弾切れのようだ。ざまあみろ。怒りに任せてバカスカ撃つからだ。

しかし、まだ油断はできない。ボニーとクライドを仕留めた神風仕様ー爆弾が搭載されているだろう。

「アリア、どうやってあの爆発から逃れたんだ？てつきり、ボニーとクライドと一緒に巻き込まれたかと……」

「間一髪のところまでクライドがあたしをバスの下から引つ張り出してーバスの後部に張り付かせたのよ。何事かと思っちゃったけど、あたし見たわ。あの2人、ドローンが爆発する瞬間、あたしに覆い被さって守ってくれた」

アリアが事細かに説明してくれた。ボニーそしてクライド……アリアを守ってく

れたんだな。

「それともう一つ。あの2人……車道に投げ出されたのに、あたしに向かつて親指立ててたわ。後は任せたって感じだね」

あの爆発、しかも車道に投げ出されたのによくやれたな。大方、グッドラックって、意味だろうな。あの2人らしいぜ、まったく……兎に角、生きてる事が分かってホツとした。

「ねえねえ、アリア。君はさつきドローンを撃ったけど、どうやってアレらが爆弾付きじゃないって、分かったんだい？」

今度は零がアリアに尋ねてきた。確かに……俺の見た限り、何の躊躇いなく撃つてたな。

「勘よ。あの三機は爆弾付きじゃないって、あたしの勘が言ったのよ」

お得意の勘でしたか……まあ、その勘のおかげで、俺はこうして生きてけどな。

「また勘ですか……勘で行動するんじゃないよ」

「何よ？あたしの勘に文句でもあるの？」

零の一言をコングに喧嘩が始まりそうだ。またかよ……頭が痛くなってきた。

「なんかあんたを見ているとレイを思い出すわ。その人を小馬鹿にした態度があの人に似ているし！」

「はあく？いつ小馬鹿にしたんですか？感性が鈍ってるんじゃないんですか？」

「何よ？あんた、アイツの肩を持つ気？だったら苦労の連続ね。ご愁傷様」

「もう止めろ。今すぐ止めろ。バスから放り投げるぞ」

バスジャックの真つ只中、口喧嘩を始める2人に嫌気がさした俺は拳銃を突きつけ、2人を黙らせる。

その間もドローンは何のアクションも起こしてこない。

「一旦ストップ。今はこの状況をどうにかするぞ」

眺める先にはレインボーブリッジが見えた。時間がないぞ。

あそこで全てが決まる。

「アリア、爆弾の方はどうなった？」

「大方、炸薬量は減らせたわ。それでも威力はかなりあるわよ」

「OKだ。れ……キョウ。お前から見て、あのドローンたちは神風仕様だと思うか？」

「うん、見事な神風仕様だね。ドローンと一体化されている。爆弾は外機にないし、爆弾だけを切り離す芸当はできないネ」

零がドローンをジーッと観察する。こいつの探偵科での観察眼は信用できる。間近で見えてきたー伊達にコンビを組んでいないぜ。

「見ただけで分かるの?」

「初歩的な推理だよアリア君」

「あんたにそう言われると何だか腹が立つッ!」

探偵科なら誰でも習う、あの名探偵シャーロック・ホームズの決まり文句を言う。

こんな時に思う事じゃないが、零が言うとは違和感があるな。アリアも違和感を感じ取った様子で……いや、カンカンに怒っているぞ。

「この瞬間、何のアクションも起こしてこないのは変だね」

「やはり、キョウもそう思うか」

「うん。私の推理では、奴は反撃の手を封じるのが目的じゃないのかな。私たちが発砲でもすれば、その瞬間、バスに近づいてドカンッ!といった具合にネ」

零は手をパツと開かせて、俺とアリアに説明する。最後にドローンのビデオカメラをジツと見つめる。

「まあ、こういったオモチャの登場に備えて、私はちゃんんと対策を取っているがネ」

突然、零は俺の右腕に抱きついてきた。こんな時に抱きついてくるなよ!

「あんた何やってんのよッ!」

アリアも負け時と零とは反対ー俺の左腕に抱きついてくる。何故、お前まで抱きついてくる? 状況が分かっているのか?



じゃ……！」

「事前報告なんかできないよ。そんな事をすれば奴に神風アタックを決められていた」  
零はアリアの口に指を当て、言葉を遮る。私が喋るから黙ってる的な感じだ。

「奴は私たちが反撃するのを見ていた。裏を返せば、私達だけに集中していた事になる。バスにいる武偵達はさっきの銃撃戦で縮こまっちゃってるし、発破剤のボニーとクライドの2人はもういないしネ。よって、他の武偵からの反撃は除外できる」

後輩達が反撃できたのは、単にボニーとクライドの2人に踊らされてた感が強かったしな。零の言ってる事は納得できる。

「後は簡単。私達だけに集中して、神風ドローンでビビらせながら、バスがガソリン切れで減速し、爆発するのを待てばいい」

「そこまでは分かった。ならよ、あのドローンはどうやって破壊したんだ？銃は封じられていたし、お前が何かやった様には見えなかったぞ」

「続きはバスの中で話そうか。うゝ、寒い……！」

零は身体をガタガタと震わせる。あの豪雨の中、下着をさらけ出していたものな。腕越しに零の身体が冷え切っているのが分かる。

俺たちは割れた窓で身体を切らない様、気をつけてバスの車内に戻った。入ってきた俺たちの姿を見て、後輩達が詰め寄る。

「遠山先輩！大丈夫でしたか？！」

「お怪我は…… ああ、肩に被弾している！私、救護科なので手当てを……！」

「だ、大丈夫だ！兎に角、今はそつとしてくれ」

「キンジ！外でスゲエ銃声が聞こえまくっていたが、本当に大丈夫なのか？」

武藤がバックミラー越しに俺を気にかける。

「大丈夫さ。あと、もう銃撃の心配はない。このまま、レインボーブリッジに向かってくれ」

「あ、あのボニーとクライド先輩は？姿が見えないんですが？」

「2人とも車道に投げ出されたが生きてるよ。今頃、学校の奴らが救助しているハズだ」

ボニーとクライドを気遣う後輩を安心させる。アイツらも何やかんや慕われているんだな。

後輩を後にし、最初に座っていたバスの最後部シートに座ろうと思ったが、あの席の真下には爆弾がある事を思い出し、別の空いてる席に腰を下ろした。

「それじゃ、説明してもらおうわよ」

席に着いたアリアが零に説明を求める。

アリアの隣に腰掛けた零はポケットにしまっていた精油パイプを取り出して、再び吹き始めた。

「あんた、それ精油パイプ？意外ね。パイプを吸うなんて……金髪と相まって妹を思  
い出すわ」

妹？アリアには妹がいるのか。初めて知ったぜ。

「そうかい……まあ、それは置いておいて。話すのでしょうか、さっきのドローンの爆  
破、アレは私の助っ人だよ。名前は伏せさせてもらうけど、狙撃科に所属している可愛  
い子だよ」

「助っ人って、他にもいたのかよ……」

狙撃科の助っ人もいたのかよ。アリアに負けず、こいつなりにいい駒を持っているん  
だな。上空を漂うドローンを三機。同時に狙撃する。んだもな。

「私はもう助っ人はいない、とは一言も言った覚えはないよ？」

零はそう言っつてふふふと可笑しいそうに笑う。

変装していても、この態度は変わらないな。他にも助っ人を呼ぶなんて、用意周到だ  
な。ルパンかお前は。

「だったら、一言でもいいからあたしとキンジに知らせなさいよ」

「無理だよ。君は気づいていなかったから言うけど、あのドローンには盗聴器も付いて  
いた。私達の会話は筒抜け状態。そんな状態で助っ人がいる事を伝えたら、奴は間違い  
なく警戒し、神風アタックを決めていたよ」



「なら、バスに避難してからでも……」

「奴は私達に集中していた。目を離してたまるか、とばかりにね。そんな犯人が見ている中でバスに避難してご覧よ。何かあるんじゃないか、何かしてくると犯人は考えるんじゃない？」

確かに……俺が『武偵殺し』なら何かしてくると警戒するだろう。散々、邪魔された後だしな。もしバスに避難する光景を見せられたら、今度はバスの中から何か仕掛けると警戒し、ドローンを突撃させていただろう。

「レキに狙撃してもらおう手もあったんじゃないのか？」

「そうよ！レキはあたしが引き抜いた狙撃科のエースよ」

レキは狙撃科Sの腕を誇る。レインボーブリッジからでも狙撃は用意だっただろう。「確かにね。それも悪くない、けど、私達が走っていた場所からレキさんがいるレインボーブリッジの間には建物が多い。建物群は網目もないくらい密集していた。いくらレキさんでも建物を透過して、ターゲットを狙撃するのは無理さ」

「あつ」

思わずアリアと声がかぶる。落ち着いて地理を確認すれば簡単な事だった。最近、ただでさえ建物が多いのに、お台場には新しいビルが続々と建設されている。今まさに走っているここがそうだ。零の言う通り、ビルが立ち並び網目もない——狙撃手が狙撃

できる隙間がない。

そういうえば、ニュースなんかで公園まで潰してビルを建てるから、子供たちの遊び場がなくなるって、問題視もされてたな。

「まあ、フジテレビ辺りなら狙撃ができたかもネ〜」

窓の外を見て「クッククック」を笑う零の姿は昔テレビで見た、悪の組織の親玉を思わせる。妙に様になっているし…… 日が経つことにおかしくなっていないか？

「じゃあさ、レインボーブリッジまで待てばよかったじゃない。そこからならレキだつて……」

「レインボーブリッジまで来れば、『武偵殺し』はドローンを使ってレキさんの狙撃を確実に妨害していた。同時にレキさんに危険が及ぶ」

「どんな危険が及ぶんだよ？レキはSランクの武偵だぞ。ドローンくらい……」

「宙を舞う乗り物……ヘリからの狙撃は困難だよ。かなりの集中力が求められる。そんなところにドローンが邪魔してきたらかなり応えれると思うよ」

「ドローンを先に始末してしまえばいいじゃない。それからバスの爆弾を切り離せば……」

「ヘリよりも旋回能力……小回りが利くドローンを相手取ってかい？神風仕様のドローンを？不安定なヘリに乗って？金次君とアリアも身をもって知っただろう？バスに

乗ってドローンを相手取るのが如何に大変を。まあ、ドローンくらいレキシさんの敵じゃないが、レキシさんの乗っているヘリーヘリのパイロットはどうかな？」

俺もアリアも失念していた……レキに気を取られてばかりで、レキを乗せるヘリのパイロットの事を考えていなかった。レキは兎も角、パイロットがあのだローンの猛攻を対処できるとは思えない。あのままレインボーブリッジに向かっていたら、ヘリは迎撃されていただろう。

だから、零はレインボーブリッジを渡る前にドローンを助つ人に狙撃させたのか。

「ドローンの事は予め予想していたのか？」

「いいや、私もあのオモチャの登場は予想していなかったよ。狙撃手はあくまで保険としてね」

「保険って、何よ？」

「今回、私は『武偵殺し』は陸路から攻めてくると踏んで、奴のオモチャー無人行車を潰しにかかった」

「ちよつと、待ってくれ。それで気になったんだが、お前はいつから行動を開始していたんだ。あの『武偵殺し』への妨害ぶりは一日やそこらじゃ無理だ」

バスでの『武偵殺し』への妨害工作。アレは見事だった。相手の先の先に行く手腕と完璧なタイミング。とても、一日で仕上がるモノじゃない。

「どうゆう事？ キンジ、説明しなさい」

俺はアリアに成り行きを説明した。

——

「はあ？ そんな事ある筈ないわ！ どう見たって、意表を突くじゃ説明がつかない！」

「でも事実だよ。はあ、疲れた。『武偵殺し』も面倒くさい事をしてくれたよ。バスに爆弾を仕掛けるなんて回りにくい…… あんなチャチなオモチャを使わず、爆弾を仕掛けたレインボーブリッジまでバスを誘導すればよかったのにネ」

アリアが驚愕している。

当然といえば当然の反応だよな。殆ど、未来予知に近い。細工したスパイダーがいつ来るかなんて、『武偵殺し』の気分次第だし、状況に合わせて使い分ける——あの時、バスでの取っ組み合いの最中、弾づまりのスパイダーじゃなく、爆弾付きのスパイダーが来る可能性もあつたしな。

あとレインボーブリッジに爆弾を仕掛けるなんて言うなよ。お前が言うとは冗談に聞こえん。まだバスには爆弾がそのままだし、心臓に悪い。

「説明しなさいキョウ！ って、キョウ？」

「…… z z z z z z」

アリアは零に顔を近づけるが、当の本人は寝息を立てている。

頭をアリアの肩に乗せて、スヤスヤと寝てる。

『脳の疲労』か。ここにきて……肝心なところが聞けなかったな。

「起きなさいキョウ！寝るなんて許さないから！」

ビシッ！ビシッ！ビシッ！ビシッ！

アリアが零の胸ぐらを掴んで、零の頬に往復ビンタをお見舞いする。

残像が見える程の手の動きだ。それ程のビンタをくらっても零は起きる様子はない。

やめとけアリア。零は一度、眠りにつくと疲労が治るまで絶対に起きない。

「起きろ！起きろ！起きろ！起きろ！起きろ！起きろ！」

ビシッ！ビシッ！ビシッ！ビシッ！ビシッ！ビシッ！ビシッ！ビシッ！

なおもビンタは継続されるーさらにスピードアップだ。

まるで、極寒の地で眠りにつこうとする零を意地でも起こそうとするみたいだ。これ

だけやれば、普通は起きるモノだが生憎と零は普通じゃない。

このままじゃ、零の変装マスクが剥がれて正体が露見する。そうなったら、状況がや

やくしくなる。俺にまで被害が及ぶ！

「起きろ！起きろ！起きろ！起きろ！……」

「よせアリア。こいつは眠りについたら絶対に起きん」

俺はアリアの手を掴んで止める。

零の頬は変装マスク越しでも分かるくらい真っ赤になっていた。最近の変装マスクはスゴイな。血の気まで再現するとは。

「離しなさいキンジ。あたしは絶対に聞き出してやるんだから！」

「聞き出したい気持ちは俺も同じだ。けど今は目の前に集中しろ」

バスのフロントガラスにはレインボープリッジが見える。今から渡るのだ。ここからが正念場だぞ。

「すまんがアリア。キョウを安全姿勢にしてやってくれ」

「なんであたしがこいつを……」

「頼む。こいつは寝たら目を覚まさん。このままじゃ、頭を打ちかねん」

「……分かったわよ」

アリアは渋々ながらも零を安全姿勢——頭を座席よりも低くし、頭を守る姿勢にしてくれた。

その様子は手のかかる妹を……いや、この場合は姉だな。姉を気遣う妹のように見えた。

「全員、安全姿勢に入れ！これから爆弾の発破解体に移るぞ!!？」

車内全体に響き渡るよう大声で指示する。

各人安全姿勢に入った。準備はできた。

窓の外を見れば、レインボーブリッジの真横に、武偵高のヘリが併走している。そのハッチは大きく開けられ、膝立ちの姿勢でこつちに狙撃銃を向けているレキの姿が見えた。

建物の多い台場では無かった狙撃のチャンスが、今、この大きな橋の上で来たのだ。

『ー私は一発の銃弾』

無線から、レキの声が聞こえてきた。

見れば、バスを狙っている。

『ーただ、目的に向かって飛ぶだけ』

これは……強襲科で、何度か聞いたことがある。レキがターゲットを弾く際の、クセだ。

まじないのようなそのセリフを言い終えた瞬間ー

レキはその銃口を、パツ、パツパツ、パツパツと“5度”光らせた。

銃口が光るたびにギンツ！ギンツ！と着弾の衝撃がバスに伝わり、一拍ずつ遅れて銃声も“5度”聞こえてくる。

ガンツ、カンガラン、と何かの部品がバスの下から落ちて背後の道路に転がっていく音がする。

それはー部品ごとバスから分離された、爆弾。

『ー私は一発の銃弾ー』

またレキの声に続いて、銃声。

ギンッ！

部品から火花が上がり、爆弾は部品ごとサッカーボールのように飛び上がった。そして橋の中央分離帯へ、さらにその下の海へと落ちていく。

ーードウウウッ!!!

遠隔操作で起爆させたのかー海中から、水柱が上がる。

アリアが炸薬量を減らしてくれたおかげか、橋の高さにも及ばない水柱だ。

爆発音は一つだけだったが、俺の耳には同時に3つ爆発音が重なったようにも聞こえた。

俺のそんな疑問など御構い無しにバスは次第に減速し……… 停まった。



## 病室にて

零視点――

「金次君、なんだか顔がジンジンするんだけど気のせいかな？」

――目覚めの第一声。現在、横になっているベッドの側、丸椅子に座る金次君に問いかける。

大きくて真っ白なベット、部屋の外から漂ってくる消毒液の匂い。今いる場所は武偵病院だ。窓から見える外には、未だ雨がシトシトと降り続けている。

私の服装は病院の患者服だ。壁には私の着ていたセーラー服が架かっている。

眠りにつく前の出来事を振り返る。バスの中で私は『脳の疲労』で眠りについた。

その後の事は分からないが、バスジャックは、無事に解決したのだろう。まあ、計算外も多々あったが、終わり良ければすべて良し……。だけど、この顔の痛みは一体？ 実に興味深い謎だ……。

「し、霜焼けだろうよ。そう、霜焼けだ」

常温の室内にも関わらず、金次君はダラダラと汗をかく。

目も合わせようとしなさい、明らかに何かを隠しているね。

「君は嘘が下手だね。この時期に霜焼けなんてしないよ。それに私は生まれてから、一度も霜焼けになつた事ないし」

ウソだけどね。霜焼けになつたことはあるよ。体験したから分かる。これは霜焼けじゃない！

「よかつたな。記念すべき最初の霜焼け体験だ」

金次君はとにかく誤魔化そうと必死だ。

おのれ……あくまでシラを切る気か。

「なあ、零。そのマスク剥がせよ。その顔で喋られると……その何というか、別の誰かに話しかけているようで、ちつとも落ち着かん」

金次君が急に話を変えてきた。

マスク？ 私は自分の顔に触れてみた。この感触……まだ変装を解いていなかった。

「ごめん、ごめん。剥がすよ」

私は被っていた変装マスクをベリベリと剥がした。ついでに金髪のカツラも脱いで、纏めていた地毛をふわつと解く。

おっと！カーラーコンタクトも取らないと。碧眼のコンタクトも忘れずに取る。

「はあー、スッキリした。教えてくれてありがとうね。何かが顔に張り付いてる感じが

あつたんだよね」

「へへ、最近の変装マスクは凄いな。パツと見た限りじゃあ、まるで分からん」

「へっへーん、凄いでしよう。見た目だけじゃなく、肌触りや毛穴まで再現できるんだよ。あと、血糊まで出るようになってるし」

潜入捜査には変装は必需品だ。別人になるくらい朝飯前だよ。

チラツと金次君を見ると、私の顔をまじまじと見てくる。

「おやへ、そんなに私の顔を見て、どうしたのかな。見惚れちゃった？」

「そんなワケねえよ……！ただ……いつもの零の顔に戻って安心しただけだ」

ほへう、私の顔がそんなに見たかったのかい。嬉しいことを言ってくれるじゃないか。

「……変装マスクで思い出したんだが、一つ質問してもいいか？」

「うん？突然畏まってどうしたんだい？いいよ、答えられる限り何でも答えてあげるよ」  
「なんでお前はバスジャックで変装していたんだ？」

変装マスクを見つめて、金次君はハツと思ひ出したようにバスジャックでのやり取りを私に問いかけてきた。

「ああ、ソレね。実はさ……私も『武偵殺し』に警戒されていてね。奴の目を掻い潜る為に姿を変えたんだよ」

まあ、嘘ではない。奴の目を欺く為の変装だったわけだし、バスに乗り込んでくるかもしれない『武偵殺し』に見つからないようにするのが目的だったが、生憎と奴は乗ってはこなかった。

私に変装したアップルに悪いことしてしまったなー生徒会の仕事は大変だったろう。お詫びに差し入れを持っていこう。

「それと……数日、何度か奴にチョツカイを出された」

これも嘘だけだね。寧ろチョツカイを出したのは私の方だ。奴に対する妨害工作。いやー、アレは大変だったねー。『武偵殺し』の監視の目をアップルに向けさせ、その間に妨害に走ったり、武偵に紛れてバスに乗り込んでいたかもしれない奴を始末する為に、レインボーブリッジに爆弾仕掛けたりと、本当に大変だった。主犯が犯行現場にいるパターンもあるからね。

理想としてはバスに『武偵殺し』を閉じ込め、そのままレインボーブリッジで仕留めるのがやりたかったー勿論、私や他の武偵たちは避難できるように計画してあったよ。

最終段階ー橋の爆破か、失敗時の爆弾の破棄はモランの仕事だったが、彼女ならどちらもやってくれたと信じている。

察しのいい人なら気づいたかもしれないが、爆破方法は狙撃じゃなくてもよかつただろうつて？

遠隔操作だと『武偵殺し』に察知されてたかもしれないね。だから、アナログな方  
法——モランの狙撃で爆破することにした。

アリアが連れてきたレキさんの登場には正直驚いた——金次君はレキさんを橋に向  
かわすし。まあ、橋に仕掛け爆弾はへりに搭乗したレキさん、フジテレビにいたモラン  
とでは、モランの方が爆破・破棄しやすい——証拠を残すワケにいかないが、仮に見つ  
かっても『武偵殺し』が仕掛けたと、周りが勝手に解釈してくれる。レキさんが処分し  
たら、それでも良しとするか。

「チョツカイって、大丈夫だったのかよ」

「大丈夫じゃなかったら、私はここにいないよ」

「なんで俺に言わなかったんだ」

「金次君も狙われていたし、私と行動を共にするのは危険と判断したからさ。勿論、携帯  
で連絡をとるアイデアもあるにはあったけど、君の携帯電話は奴に細工——傍受されて  
いた。探偵科、情報科で調べてもらおうといい」

金次君と行動するのは危険と思ったのは本当だ。それだけは保障しよう。しかし、携  
帯の件は嘘だけだね。『武偵殺し』は彼の携帯に手をつけていない——私が手をつけた。  
主な細工はアリアからの着信を自動的に拒否或いは傍受するモノだ。怪しまれない様  
に私も含まれているがね。

「アリアから聞いた電波の話を聞いて『武偵殺し』が機械に強いのは明白でしょう？あのオモチャもそうだし」

「なんで1人で行動した？俺に一言でも……何か伝えられる手段があっただろう」

「それは……金次君を危険な目に合わせたくなかったからさ。私だけで十分対応できると判断して……」

「それでも……1人で行動するな」

ーッ

金次君が真つ直ぐな目で私を見つめてきた。その目は憤怒とも心配とも取れる真剣な目だ。

そんな目で見つめないでよ。何だが……変な気分になるよ。危険な目にあつたのは事実だ。虎穴に入らずんば虎子を得ずって言うでしょう？

「俺たちはコンビだろう。2人で行動するべきだ。確かに2人して行動すれば、危険も2倍になるだろうが、同時に危険を2倍に減らせてたかもしれない」

そんなセリフを一切の迷いもなく平気で言ってきた。

君だつて危険な目にあつたじゃないか……実際、バスジャックに巻き込まれたワケだし、本当なら私の仕掛けた目覚ましで白雪さんと一緒に遅刻し、その後で初めてバスジャックを知る筈だったのに。

「ごめん……身勝手だったかな……？」

私は咄嗟にそう尋ねた。少し上目遣いで、彼の事を伺う仕草で。

「次からはやるな。やるとしても2人一緒にだ。いいな？」

「う、うん……わかった」

その言葉を受けて、私はコクリとうなづいた。

2人一緒について、事件捜査だよな。うん、絶対にそうだ。捜査だけにそうだ……ア  
レ？私は何を考えているのだ？落ち着かないと……

「兎に角、零のおかげでバスジャックでの犠牲はなかったが、これといった進展はなし……また振り出しだな」

進展かー、今の金次君としては一つでもいいから、『武偵殺し』に近づく情報が欲しいんだね。お兄さんの事があるからかな。

「危険を冒した分、進展はあったよ」

「何？本当か……？」

ガタンツ！

金次君はベットに腰掛けて距離を縮めてくる。おお、食いついてきたね。

「バスジャック時に現れたールノー・スポール・スパイダーを覚えているかい？」

私はパイプを出して一服しようするが、生憎と着ているのは病院の患者服だ。当然、

ポケットにはパイプは入っていない。

パイプを探すと、側のテーブルの上にあった。ケータイと武偵手帳、それと偽装した武偵手帳（キョウ金次君命名）もあった。

パイプに手を伸ばそうとしたが、手に触れる直前でやめた。精油とはいえ病院で吸うのはやめよう。

「ああ、『武偵殺し』のタチの悪いあのオモチャだろう。アレがなんだって言うんだ？」  
「何色だったか覚えている？」

「目がチカチカするくらいのも真つ赤な色だったな」

「その通り。ここで注目してほしいのは、『武偵殺し』の凶器——車の色だよ。これだけで奴がどんな人間かを物語っている」

身の回りにある物、使っている道具は自ずとその人の性格全てを表す——凶器だって、例外じゃない。

「人は、好きな色を身につけたり、その色の持ち物を揃えたりするものだが、例えば赤は、太陽の色、炎の色であり、情熱的なエネルギーシユ、そして、よく目立つ外向的なイメージがある。実際、赤を好む人は、陽気で前向き、華やかなことが好きで自信に満ちていることが多い」

「じゃあナニか？『武偵殺し』は赤が好き——外向的で自信家な人間だということのか？使っ



ていた凶器の色で性格まで分かるなんてな……」

「まあ、そうとも言えるし、そうじゃないとも言えるね」

「なんかハッキリした物言いじゃないな」

金次君が考え込むように腕組みする。彼なりに思案しているのかな。

「なんと言えればいいかな…… 奴はパワフルで自信家だけど、どこかコンプレクスを克服したいー変身願望が強いと思うんだよね」

「と、言うത്?」

「好きな色というのは、ただ自分が好む色というだけじゃなくて、色彩心理学的に、自分が他人にこう見られたいというイメージの色を、好きな色だと思つて公言したり、身につけたりすんだよ」

アメリカの政治家は、よく赤いネクタイを締めて議会に出席したり、演説をする。日本の政治家が締めているような黒みがかつたえんじ色ではなく、やや朱の混じつたような鮮やかな赤だ。ダークスーツに赤い色のコントラストは強烈で、非常に人目を引きつけるが、これは「パワータイ」と呼ばれ、自分に力があり、積極的に覇気に満ちていること、チャレンジ精神が旺盛で、困難にあつてもくじけないことを示したいときに使われる。

「多くの人が色彩の選択をはつきりと認識し、頭を悩ませるのが、車を買うときだよ。車

は高価だから、色が気に入らないからといって簡単に買い換えることができないでしよう？ 小さな持ち物とは違って、車の色は広い面積に及んでいるし、洋服のように、シチュエーションによつて着替えるわけにはいかない。一度買ったなら、当分はその色と付き合つていかないといけないかね…… あつ、金次君。ちよつとお水ちよーだい」

私は喉が渴いたので、一旦話を区切つて、金次君に水を要求する。

「ほらよ」と、魔法瓶の水をコップに注いで手渡してくれた。

ゴクツゴクツと喉を潤す。うん、うまい。

「プハツ…… それじゃ、続きを話すね。車の色を選ぶときは誰もが慎重になり、その結果として、持ち主の性格がよく反映されるんだよ。実際にオーストラリアのとある自動車雑誌では、赤い車を選ぶ人は、エネルギーシユで外交的な性格をしている、もしくはそう見られたがつていると書いてあるしね」

再び水で喉を潤す。

寝ていたからか、ヤケに喉が乾くな。

「お得の心理学かよ…… それ聞いて安心したぜ」

金次君はホツとしたような顔をした。

「どうしたんだい？ そんな安心したような顔をして？」

「いや…… 最近、お前はおかしくなつてきたなと思つたんだが、俺の気のせいだった

ようだ。いつもの零だな。すまん」

「私は至つて正常さ。なーに、それだけは保障しよう♪」

そうさ。私は正常さ。そう、正常だとも。オカシイクなんてないさ。

「そうだ！バスジャックの件はここまでにして、別の事を話さないかい？」

私はパアン！と手を叩いてそう切り出した。

「突然だな……まあ、いいけどよ。で？何を話すんだよ。面白い話だったら期待するな。俺はそういう話ほうまくできん」

「うーん、そうだね。君のお兄さんーカナさんの話はどうかナ？なんちゃって」

「お前……ギャグの才能ないな。しかし、なんで兄さんの話をしたがる？」

「君が辛そうにしていたからさ。ハッキリ言つて、今もお兄さんの安否がわからなくて不安なんだろう？」

『武偵殺し』を追う行為は、同時に犠牲となった被害者ー金一さんの事を振り返ることに繋がる。

間近で見てきたが、捜査に乗り出すたび、君は何処か辛そうにしている。

「そんなワケねえよ……兄さんは生きてる。あの人は絶対に生きてるさ」

まるで自分に言い聞かせるようにしている。

一言でも誰かに『金一は死んでる』と聞けば、そう思ってしまうから、聞かないよう

に、必死になって耳を塞ぐような姿に思えてしまう。

私からお兄さんは生きてるって、言われても不安な部分が残っているんだ。

「金一さんは生きてるーそれは彼の思い出を自分の中だけに留めて、生かしているだけだよ」

金一さんの死の宣告するようなカタチで敢えて、そう金次君に話しかける。

「お兄さんの行方が分からず、辛いだろうが胸の内で留めておくだけじゃ、生きてるとは言わないよ」

「じゃあ……どうすればいいんだよ」

「お兄さんを真に生かしておくー生きてると信じる方法は話すことだよ……だから、話そう」

「話すことか……何処から話せばいい？」

金次君は少し考えてから、話す決心をしてくれた。

「そうだね……金一さんと一緒に事件を解決した話はどう？」

「あー、確か……現役武偵連続自殺事件か。武偵庁の武偵たちが、次々と謎の自殺を遂げてたのを、兄さんと俺らで捜査したっけな」

懐かしい事件話をキツカケに金一さんについて語り始めた。

――

ざあー、ざあー

雨足が強くなってきた。窓に当たる雨粒が音を立てて窓ガラスに当たる。

「それで事件解決後、金次君の実家に帰ったんだよね」

「ああ、そんでお前が兄さんのヒステリアモードが見たいって、言い出したんだよね」

「金一さん、心良く承諾してくれたっけ……」

遠く眺め当時は振り返る。私がお願いと、金一さん、潔く女装してくれたなー。

「違う。嫌々ながらもカナになったんだぞ。あとよ……お前、兄さんがカナになる為、別室で化粧や着替えをするのを覗こうとしたよな」

金次君がツツコミを入れた。

ヒステリアモード通称H S S。金一さんの性的興奮状態に興味を持った私は彼にカナさんに変身してほしいとお願いしたのだ。

金一さんが仕事で女装するのは聞いていたけど、実際に目にした事がなかったから、スゴク気になったんだよ。

「よく考えれば、金一さんって凄いいね。自分の女装姿に興奮するって、ある種の自慰行為だよ」

「そのワードを俺の前で軽々しく言うなよ。俺からしてみれば、特大の爆弾だ。でも言われてみれば確かに……兄さんって、スゲえな。異性も必要としないで、自分で強

くなるんだからな」

金一さんを褒める金次君の目はキラキラしている。

純粋に兄を褒めるつもりだろうが、金一さんからすれば嫌だろう。

この病室での会話を金一さんが聞いたら、ピースメーカー片手にカチコミに来るだろう。断言しよう！絶対に来る。そうなったら、金次君をスケープゴートにしよう……

金次君！ほれ！そこに魔王じゃなく、金一さんが今いるぞ。なんちやつてね♪

冗談はこれくらいで……どうか、ここでの会話が盗聴されてませんように。金一さんの耳に入りませんように。

「初めて見た金一さんの女装——カナさんを見てビックリしちゃったよ。まさに理想の女性ですよ感、ハンパないし」

「他にもカナの違う姿が見たいって、寮から大量の衣服を持ってきたな」

「ちよつとしたファッションショーになったよね」

「ファッションショーというより、コスプレ感が強かったぞ」

あの時の事は今でもハッキリと覚えている。

カナさんはノリノリで私が持ってきた変装用の衣装を嫌な顔一つせず、次々と着てくれた。

勿論、全部カナさんに合うサイズだ。

変装用の衣装？色々あるよ。ウエイター、バニーガール、メイド服、ナース、婦警、体操着、チアガール、セーラー服その他諸々。

水着も着てくれたなー、重要な部分を隠せるパレオ付きだったけどね。重要な部分つて、もちろんアレだよ。アレですよ。

金次君はカナさんが着替える度、アワアワと狼狽してたっけ。

「写真撮影もOKしてくれたけど、私が撮ろうとする度、金次君は必死になって妨害してきたっけ」

「……アレが出回ったら、兄さんが立ち直れなくなると思ったからだ」

レア画像がザックザックかと思いきや、金次君に邪魔された。

意地でも写真に残そうとする私と金次君は取っ組み合いになった。あのシチュエーションでは金次君はカナさんのマネージャー、私はパラッチかな。最終的にカメラを取られてしまったけど、頭のメモリーにちゃんんと保存されてる。

「あと、悪ノリして兄さんーカナを女性用の……公共施設にも連れ出したよな」  
「そんなこともあつたね」

さらに懐かしい事を覚えているじゃないか。

静かに目を閉じ、昔のことを振り返ってみる。

フアッションショー終了後、私とカナさん、金次君の3人で外に遊びに出掛けた。カ

ラオケやゲームセンターに行ったよね。

私は遊ぶ傍、カナさんを使ってイタズ……ゴホンツ！実験をしたくなつたのだ。内容はカナさんは女性用の公共施設を利用できるのか。

手始めに、私はカナさんにお手洗いまで同行してほしいとお願いしてみた。結果、即答で了解をもらえた。完全に心は女になっているんだー、と実感した瞬間だったよ。

同じく、お手洗いに来ていた女性の皆さんはカナさんに見惚れていたね。本当は男なのに……

次は難易度が高い銭湯に挑戦……しようとしたが、金次君に邪魔された。のれんをくぐって、いざ！一緒に女湯ー脱衣所に入ろうとしたタイミングだね。せつかく面白いことになるって時に……

「遊びに行った先ーカラオケでも一騒動があつたよね」

「あつた、あつた。デュエットや採点に飽きて、最終的に替え歌合戦になつたけな。それでお前は……」

「歌つたね。ふっふっふっふっふん、女装の星よ♪てね♪」

カラオケでは採点ゲームをした。何度やっても金次君はビリだった。

私とカナさん？いや、カナさんには勝てなかつたよ。あの人、歌もメツチャうまかつたし、音程、サビ、トーン、全てがパーフェクトだった。そんなカナさんの歌う姿



を見てー私は勝とうと躍起になっちゃったね。

あらかた歌い終えると、採点に飽きてきたので、みんなで替え歌大会をしようと提案したのだー勿論、私がね。

替え歌はカナさんと一緒に歌ったね。ワザと女装というワードを混入して、カナさんにも言わせた。本人は意味が分らないって顔をしていたがね。

「そんで家に帰った後で、HSSが解けた兄さんを宥めるの大変だったんだからな」

「あー、そうだった。布団からムックと起き上がって、一瞬にして金一さんに戻ったけ。あんなにアツサリと戻るんだって、驚いちゃったよ。まあ、カナさんに変身した時もそうだったけどさ」

カナさんは一度眠りにつくと、信じられないくらい長時間眠り続ける習性があるそう。これは神経系ー私の見立てでは脳髓に過大な負担をかけるヒステリアモードのせいとみて間違いない。その代償として自律神経系が狂い、体温調節がうまくできないのだろう。

私がいいたときはすぐに目を覚ましたし、そこまで負担はかかかっていなかったのだろう。丸一日カナさんモードだったら、もつと長く眠り続けいたね。

「兄さんは『ぐわああああ！』って、奇声を上げて、家の柱に頭を打ち付けたんだぞ。何度も何度もドンドンドンと、家が揺れるくらい。くずれるんじゃないかかって、思っちゃまっ

たよ」

そうだった……金一さんは死ぬんじゃないかって、思わずにはいられないほど頭を柱に打ち続けたーカナさん時、やり取りがよっぽど恥ずかしかったのだろう。

自己暗示だろうか、「消えろ！消えろ！忘れろ！忘れろ！」とも叫んでいた。

「うぶぶぶ、そうだったね。そんな金一さんを止めようとして、うっかりカナさんの名前を出して殴られたんだよね」

止めに入った際、カナさんの名前を出した金次君を金一さんは馬乗りなつてボコつた。

金一さんはヒステリアモードになる為にかナさんになるが、本人は超がつく程に恥ずかしいらしく、それは柱での行動がよーく物語っている。

「あれは怖かったよー、私まで殴られると思っちゃった」

「兄さんは女を殴るようなことはしないさ」

金一さんはマコトの男だからね。女性に優しい。まあ、その優しさがいつか命取りになるだろうがネ。

「今までのやり取りを笑って許してくれたけど、アレは絶対に堪えてたね。うん、確信できてるよ」

「威張るな。お前が帰った後、部屋の隅で体育座りしてブツブツとうわ言のように『俺の

「意思じゃない……俺の意思じゃない」って、何度も呟いていたぞ。あんな兄さん初めて見た」

わーお…… やっぱり応えたんだね。私が帰った後でそんなイベントが。

体育座りしてうわ言を呟く金一さんを想像する。うーむ、『なかよしキョウダイ』のネタとして使えそうだ。

粗方、金次君は話し終えると、チラツと壁時計を見て、

「さてと、俺はそろそろ帰るぜ…… 久しぶりに兄さんの話ができて嬉しかった」

金次君はよっこらせと、丸椅子から立ち上がる。

私も楽しかったよー、主にネタが手に入って。

「おっとー忘れるところだった」

病室を出ようする直前、何かを思い出したようだ。

私の元まで戻ると、ベットの下角から紙袋を取り出してきた。

「これはなんだい？」

「あー、コレはアリアからだ。キョウが、変装したお前が病院に運ばれたって聞いて、アリアから渡すよう頼まれたんだよ。アリアなりに事件解決のお礼がしたかったんじゃないか」

へえーアリアが、ね。私は紙袋を手に取り、中身を確認する。

「コレは…… お饅頭だね。しかも、あん饅」

「入っていたのは梱包されたあん饅だった。カタチはちやんとしたあん饅だ。ももまんじやない。」

「ももまんじやなくて、よかつたな」

「アリアにありがとうって、伝えておいて。勿論、キヨウからって事にしてね」

「へいへい、了解しましたよ」

それを最後に金次君は病室から出て行った。

## 推理の時間——『武偵殺し』に迫れ

零視点——

金次君を見送り——私はベットの所で、ブーツと天井を眺めながら事件を振り返ってみる。

ざあーざあーと降り続ける雨の音が非常に心地いい。落ち着いて思考できる。

バスジャック事件は一通り終わりを迎えたが、コレで終了です。とは到底思えない。奴は必ず再び襲撃してくるだろう。

私が可能な限り、妨害してきたものだから『武偵殺し』はさぞかし、ご立腹だろうね。「さて……君はこの状況をどう打開してくるのかな？ 『武偵殺し』くん？」

私は無意識に両手を合わせて口に持つてくる。同時に、これまでに収集した情報を纏めてみる。

最初の事件——チャリジャック。これは私が金次君の自転車のサドルに仕掛けられていた爆弾を回収したので、失敗に終わった。

自転車は寮の外に置かれていた——誰にでも爆弾を仕掛ける事は可能。

チャリジャックが失敗したのでカージャックに変更——UZI搭載のセグウェイで

襲撃――登校ルートは警戒も兼ねて変更していたのにも関わらず――まるで居場所が分かっていったかの様だった。

同時にアリアが現れた――本人は勘と言っていたが、武偵殺しが発信する特定の電波を傍受して駆けつけた。私の車、登校ルートもそれで掴んだ。アリアが来たせいで、私の車はボロボロの廃車となったが……

「だとしたら……通信装置はどこから流されていた？」

私の車から発信されていた？――同乗していた金次君と白雪さんに調べてもらったが、車内などに爆弾はおろか、通信装置の類は発見されなかった。

車外に仕掛けられていた？――私が点検した時には無かった。

点検した時間――金次君を迎えに行く前だ。

仕掛けたタイミング――金次君を迎えにいった後？爆弾ではなく、通信装置だけを何故？爆弾の予備を用意していなかった？

通信装置は特定の電波を発信していた――ワザと傍受しやすくした。

誰かをおびき寄せる為？――『武偵殺し』を追っている人物――私と金次君は除外――神崎・H・アリア。

「武偵殺しは何故、アリアを呼び寄せたんだろう……」

再び思考に集中する。寝起きなので少しウトウトするが、何とか堪える。

今度はアリアと武偵殺しの接点を考える。

アリアは世間では捕まったとされる『武偵殺し』は偽物だと知っていた。これは金次君のベランダから突き落とされた後で収集した情報だ。本当にヤツについて調べていたよ。

アリアの正体は武偵殺し？ー可能性としたは0%ーアリアには無理だ。あのピंक頭が自分の正体を隠す事ができるとは思えない。この結果には私の全財産賭けてもいい。爆弾しかけた人間がわざわざ来る筈がないし……

アリアが武偵殺しを追う理由ー彼女の武偵殺しを捕まえようとする志は高く、過去に『武偵殺し』で何かあったのは明白。

武偵殺しの犯行は武偵を狙ったもの。

動機ー身内、相棒を奪われた？それは誰だ？ー新宿警察署に留置されている人物。

アリアが武偵殺しを追うのは、新宿警察に留置されている人物の無実を証明する為だ。アレほど必死になる様子からして、おそらく身内である可能性が濃厚だね。

新宿警察に留置ー『武偵殺し』の偽物ーアリアの身内。

「スケープゴードK氏の味方はアリアだったのか……尊敬するなんて言っちゃった」  
過去に金次君に言った事を思い出す。今まで気付かなかった自分が恥ずかしい。あ

の時点で気付けよ!? って、自分に言い聞かせたい。

「アリアも『イ・ウー』を追っているのかな……」

勾留されているK氏の容疑は『武偵殺し』だけに留まらず、幾つもの罪状、事件に関わったとされている。これら全ての事件の裏には『イ・ウー』が暗躍して間違いない。

K氏は『イ・ウー』の関係者?—アリアの身内である人間が何故? 自分の無実を晴らそうと、今も奮闘しているアリアを嘲笑う趣味があるようには思えない。『イ・ウー』を知っているが、組織の関係者ではない? これは新宿警察署に行けばハッキリするかもしれない。

「目的は同じか。妙なトコで被ったな。まあ、それも一興かな♪」

アリアが『武偵殺し』だけでなく、『イ・ウー』も追っているなら利用できるかもしれない。

『イ・ウー』も気になるが、今は『武偵殺し』の捜査に集中したい。上手くいけば『イ・ウー』の尻尾を掴むことに繋がるかもしれない。

あの組織は本当に目障りだ。早く消したくて堪らない。何度、私の邪魔をしてきたことだが…… おっと! 思考が脱線していた。

私は気を取り直して、今度は上半身だけ起こして思考する。

「武偵殺しの目的は一体……?」



過去にヤツが犯した事件はチャチな悪戯程度であれば、ガチの冗談ではすまないモノもあった。一見して計画性がないように見えて、そうではない。愉快犯とはまるで違う――それは私が証明してある。確かな目的があつての犯行だ。

犯行の動機――ターゲットは武偵――武偵に恨みがある？個人ばかりを狙っていて効率が悪い。狙うとしたから武偵の総本山である武偵庁か武偵養成施設――武偵学校を襲撃すればいい。

個人に絞る理由――被害にあつた武偵達と『武偵殺し』との接点を調べたが、誰一人優良な繋がりはなかった。

彼らは犯行の実験台――本番に入る前のプロローグを兼ねたお遊び？ならば本編はなんだ？

『武偵殺し』の大きな事件――浦賀沖のアンベリール号沈没事故。過去の犯行で目立つモノといえばコレだ。あれ以降、暫くして『武偵殺し』は逮捕された。まあ、実際に捕まったのはK氏だったがね。

再び犯行再開――カージャック。せっかく、世間の目を誤魔化したのに関わらず。世間を騙せるメドが立った？

本当の予定はチャリジャック――本来のターゲットは金次君。彼と『武偵殺し』の繋がりといえば、兄である遠山 金一が被害にあつた事だらう。これは身内を嵌めらたア

リアと並んで、濃くハッキリとした繋がりだ。

「金一さんも『武偵殺し』を追っていたのかな？」

金一さんと『武偵殺し』の繋がりがリー金一さんは武偵庁のプロ武偵だ。世間では知られていない犯罪者・組織を追っていても不思議ではない。それは蜘蛛の糸で検証済み。自然と『イ・ウー』と関わりのある『武偵殺し』を追っていた可能性あり。もしかして、彼個人で『イ・ウー』を追っていた？

「もし、金一さんが『イ・ウー』を追って……それで『武偵殺し』に狙われてた？ いや……それだとリアが知っていないとおかしい」

そうだよ…… おかしいじゃないか。リアは『武偵殺し』が犯した事件を事細かに知っている。でないと、犯人に辿りつけないだけじゃなく、K氏の無実を晴らせない。リーシージャックも立派な『武偵殺し』の事件だ。

そんなリアが何故シージャック…… 遠山 金一という、武偵が狙われた事件を知らない？

リアが知らないワケ。金一さんの事件だけ周知していない…… これだけはある。世間ではシージャックでなく、事故となっているがリアアほど…… 認めたくないが、身内であるK氏の無実を晴らすと奮闘している彼女が取り零すミスをするはずがない。下手すれば余罪として上げられるかもしれない。

「アリアが『武偵殺し』を捕まえる方法……ヤツを追う方法か」

自分の発した最後の言葉にピンと来る。

通信装置——特定の電波か！

アリアは犯行現場で流されていた電波を傍受して、『武偵殺し』を追っていた。裏を返せば特定の電波を発している人物は『武偵殺し』と決め付けられる。電波が流されている、これはヤツの仕業だ！といった具合だろう。

「アリアがシージャックを知らなかったのは、その電波を傍受できなかった……しかし、アレは確実にヤツの犯行だ」

アリアが知らない理由——シージャックだけ特定の電波が検出されなかった。

電波が傍受されなかった——『武偵殺し』は何故シージャックに限って電波を使わなかった？金一さんがターゲットなら遠隔操作した船で自由を奪う……いや、違う！

私は手を払いのけて、推理結果を否定する。

「『武偵殺し』はバイクジャック、カージャックで事件を始めて——シージャックで金一さんを仕留めた。それは直接対決だったとしたら、電波を傍受できなかった」

『武偵殺し』は電波を出さなかった。つまり——船を遠隔操作する必要がなかった。ヤツ自身がそこにいたからだ。

おかしいとは思っていたがーあの金一さんが船を遠隔操作された位で負けるなんて変だなと思っただよなね。

かと言つて、『武偵殺し』との直接対決で遅れをとるようにも思えないが、そもそも何故、ヤツは金一さんと直接対決した？

「ますます謎が深まるね。まさか、金一さん関係でここまで深まるとは……金次君に感謝だね」

思わずニヤツと笑みが溢れる。今の私の顔は鏡で見たら酷い状態だろう。

金次君と久しぶりに、金一さん（特に女装関係）についてお喋りしたおかげかなー。安否不明な人物ーそれも金次君のお兄さんで笑っちゃうなんてイケナイネ。

「金一さんと直接対決する限り、余程の自信があつたのかな？」

今度は『武偵殺し』の人物像を考える。

陽気で前向き、華やかなことが好きで自信に満ちている。同時にそう見られたい。強い変身願望があるー今回のバスジャックでハッキリした。

シージャックでは金一さんと直接対決したー金一さんに恨みがある？そんな単純な動機とは思えない。陽気に駆られた気まぐれ？

シージャックを後にK氏逮捕ーK氏に罪を着せ、自分は姿を消した。アリアはK氏の無実を信じている。姿を消しても、アリアに追われるのは明白。

K氏に罪を着せた理由——アリアに宣戦布告。奴の事件の本編はアリアだ。

『武偵殺し』の目的——アリアに宣戦布告すること。ターゲットはアリア。

「偶然とは思えないね。K氏に罪を着せたの気まぐれではなく、明白な理由——アリアに宣戦布告する為か」

私の車に通信装置だけ取り付けたのは、アリアをおびき寄せる——電波を傍受させるだけで充分と判断。或いは、本当に爆弾の予備がなかったものね♪

しかし、まだ謎が残っている。

「1件目はバイクジャック、2件目はカージャック、3件目はシージャック。ここで一旦終わり。そして、4件目はチャリジャック……これはカージャックになったが、5件目でバスジャックか」

私は指を一本ずつ立てながら、今まで起こった事件を数える。

4件目でヤツは急に小さくなる。てつきり、ハイジャックにでもやると思ったのに……ここでハッ!と気づく——事件の法則について。

いや、4件目でなく、1件目、と考えるべきか。

「最初の1、2件は遠隔操作、3件目では直接対決。そして…… 今回の騒ぎも似ている」

最初の事件からアップダウンしている。

インターバル後の事件——1件目カージャック、2件目バスジャック。

3件目でヤツは再び直接対決をするはずだ。

直接対決する相手——宣戦布告したアリア。間違はなくヤツはアリアを狙う。

アリアを囿にすれば、ヤツを始末できるかもしれない。上手くいけば『イ・ウー』にも近づける。

「金一さんを狙った理由は？アリアが目的なら最初の事件の3件目で、直接対決すればいいのに……」

『武偵殺し』は何故、今までの武偵のように金一さんを仕留めなかった？何故、直接対決にこだわった？

隅にやった金一さんの項目を呼び戻す。

金一さんと直接対決した理由——気まぐれ…… 違う！恨み…… これも違う！  
遠隔操作できなかつた…… 違う！

見当違いの答えを手で払う。

「直接対決で負ければ捕まるのは明白だし、捕まらない自信があつた？うーむ…… 分らない」

私はガサゴソと金次君経由で貰つた——アリアからのお饅頭をあさる。一つだけ取り出し、パックと一口かじる。

うーむ、これ本当にあん饅なの？違う気がするんだけど……形はあん饅だけど、皮の色が少しピンクっぽいし。

チラッと梱包紙に視線を移す。うん、あん饅と書かれている。もしかして、買うときに店員さんが梱包紙を間違えたのかな？

梱包紙には松本屋の名前がある。そこで購入したようだ。

まあ、いいか。糖分も補給したし、改めて思考に集中しよう。

「金一さんといえば、武偵庁の特命武偵。巢鴨在住。女装が趣味……これは失礼だね」

またしても笑みが溢れる。ぷぷぷ、ダメだ……あの人、どう考えも女装関係が先に頭をよぎる。流石、金次君のお兄さん、いいや、お姉さん！うん？金次君のお兄さん？「インターバル後の最初の被害者は金次君。その次も金次君だったよね。これは偶然？バスジャックは違う人物を狙っていた……いいや、違う！」

私はベッドから立ち上がる。同時に手にピンクのあん饅を持って。

そうだよ！インターバル後の事件は、ずっと金次君が狙われていたじゃないか。

武偵殺しのターゲットはアリアだけじゃなく、金次君も含まれていた。

金次君の傍には決まってアリアがいた。アヤツは2人を引き合わせるのが目的。

その推理に行きついた瞬間、私は手に持っていたあん饅を無意識に握り潰した。ポロ

ボロとあん饅がベツトに落ちる。

アレ？私はどうしたんだろう？この推理結果が気に入らないぞ。2人が一緒になるなんて…… あー、これは置いておこう。

「アリアと金次君を引き合わせた…… 遠山 金次、神崎・ホームズ・アリア」

2人の接点はない。会ってまだ間もない。

共通するものといえば、先祖に高名な人物がいるくらいだろう。

金次君のご先祖様は遠山金四郎。北町奉行で活躍。時代劇でお馴染みの『遠山の金さん』だ。

「金さんといえば、うちのお父さん、あの時代劇を嫌そうな顔で見てたな」

昔の出来事が頭の中で蘇る。

お父さんは遠山の金さんが嫌いだった。あれが始まる度——OPが始まる時点で嫌そうにしていた。

チャンバラシーンでは、金さんに「くたばりやがれ」と笑顔で言ったり、「北町奉行所の連中に負けるなよ」と反対の南町奉行所を応援していた。特に嫌っていたのが、金さんお馴染みの桜吹雪——肌を露出させるシーンでは、「この露出狂の変態が…… お前が奉行所にしょっぱかれろ」と一際笑顔で見ていた——今思えば、アレは絶対にキレてた。お父さーん、アレは金さん本人じゃなく、役者さんだからね。



あと、お父さんに関しては何い思ひ出もある。

小さい頃、私が桜吹雪のシーンを遊びで真似たら、恐ろしい目で睨まれた。正直、殺されるんじゃないかって、思わずにはいられないくらいに……のほほんとしたお父さんには見えなかつたよ。

もうしないよって、涙目で謝つたら、急にパツと明るくなって、ヨシヨシと頭を撫でてくれたけぞき。

「ハッ！ いけない。お父さんの事は後回しにしよう」

懐かしくもあり、怖い思ひ出を振り返っていた。気を取り直し、事件に集中！  
ベツトに座りこむと、再び私は思考の渦に飲み込まれた。

次はアリアについて考えてみよう。

神崎・H・アリアのご先祖は、名探偵シャーロック・ホームズ。彼の伝記は小説にもなっている。そして、私の曾おじいさんーージェームズ・モリアーティのライバル。

母さん……あの小説でジェームズ・モリアーティが余り登場しない事に不満を持っていたわけ。「もつと登場させてもいいでしょう！ しっかり書いてよワトソン！」って、当時はモリアーティ教授のファンかと思つてたけど、純粹に自分のお爺さんの登場が少ない事に不満があつたんだ。

小説の作者はジョン・H・ワトソン。母さんの言う通り、もつと登場させてよ。彼の

経歴といえ、作家であり、アフガニスタンに従軍した軍医。特に目立つのは、シャーロック・ホームズの相棒という肩書き。

「そういえば……アリアの実家——ホームズ家の人間はパートナーが必要って、ルイスが言ってたな」

初代ホームズ&ワトソンから始まり、ホームズ一族はパートナーを持つ事で想像以上の力を発揮するそう。

『武偵殺し』がアリアと金次君を引き合わせたのは、金次君にワトソンの役割を果たさせるため？自分の真のターゲットであるアリアを敢えて、パワーアップさせるのは何故だ？仕留め難くなるだけじゃないか。

「パワーアップしたアリアじゃないと意味がない？強いアリアを倒す事が目的か……」

強いアリアでないと、意味がないのだ！さあ、パートナーと共に私を倒してみせろ！」

一芝居してみるが、虚しくなるだけだった。恥ずかしくなったきた……何が倒してみせろだ。『武偵殺し』が戦闘狂には思えないし。

『武偵殺し』の目的——アリアと金次君を引き合わせ、パートナーを持ったアリアを倒す。

倒す目的——アリアを超えるため。誰かを超越する証明に使いたがってる気がする。

ヤツは変身願望が強い。努力家で自分を誰よりも有能な存在に変えたがっている。

悲痛なまでに一途に…… 何のためにだろう？

「色彩心理学では真つ赤な色が好き。色物を揃えたがる傾向あり。赤を身につけてい  
る…… 赤？」

赤といえ、その色物を身につけている人物に、私は心当たりがあつたーりりりり  
だ。彼女は赤のランドセル・靴、フリフリのロリータファッションにも赤色が含まれて  
いた。よく目にするから自然と目で流していたよ。

「赤が好きだと言つてたつて。振り返つてみれば、あの子の海外主張任務と武偵殺しの  
犯行時期が重なるな。怪しいね」

私はりりり関係で思い出せる事を可能な限り、ピックアップしてみる。

「確か去年、相談に乗つてあげたな。内容はAさんを助けるにはどうすればいいか、だつ  
たね。アレがりりりり自信の事だったとすれば…… 助けを求めていたのか」

りりりりAさん。

彼女の家は両親が亡くなると同時に没落し、一人残つたりりりりは親戚を名乗るVと  
呼ばれる存在に引き取られ、監禁された。

何とか逃げ出したが、Vは彼女を追つてきた。りりりりは戦つたが、惨敗した。

そして、りりりりはVに「初代を越えるまでに成長し、その成長を証明できればもう  
手出しはしない」と言われたんだつて。

彼女の家は高名な一族。初代を超える証明がアリアを倒す事だとすれば……『武偵殺し』の正体はりこりんか。

まだ、早とちりかもしれないが、候補にしておくかー可能性は大だけどネ。

『武偵殺し』理子の目的ーアリアと金次君を引き合わせ、アリアを倒す事で初代を超えたという証明にする。そして、Vからの解放。

「りこりんが『武偵殺し』だとすると、残念なような……悲しいような気もするなー」  
金次君はお兄さんの仇を討ちたがっているし、その相手が同級生のりこりんだと知ったら、彼はどうなるんだろう。

兄の仇である彼女を逮捕する？それとも殺しちゃう？はたまた、彼女に殺されちゃうかな？最後のは嫌だな。金次君が殺される所なんて見たくないし。

「りこりん『武偵殺し』を結び付ける決定的な証拠がないしなー。証拠隠蔽が上手いし、コレは誰かが入れ知恵したとしか思えないね」

誰かが彼女に協力し、証拠を消している。私でも見つけられなかった。りこりんがやったとは思えない。誰かがやっている。ダレカガ……りこりんの後ろにいるお前は誰だ？何故、りこりに肩入れする？

「ちよつと、りこりにイタズラしてみるか♪」

過去の事を考えれば、りこりんは可哀想な子に思えるが、『武偵殺し』であれば、始末

するか……いや、待てよ。

始末するか、しないかは、金次君に委ねてみよう。そこで彼の本質がハッキリするかもしれないー向かう側か、こっち側かがネ。

次の犯行は3件目ー直接対決だ。そこで現行犯として現れてくれるハズだよね♪  
私は携帯を手に取り、モランに掛ける。数コールもしない内に繋がった。

「もしもし、モラン。突然で悪いんだけど、頼みたい事があるんだ」  
『構いませんよ。何でも言いつけてください』

キリツとした声が聞こえる。いつ聞いてもいい声だねー。

電話越しで直立姿勢している光景が目には浮かぶよ。

「武偵殺しの正体が分かったような気がするんだー。奴が次に狙う場所の目処が立ったし、その準備をして欲しいんだよ」

『分かりました。すぐに準備に取り掛かります。末端ー梓糸にやらせますか?』

彼女の言う末端ー梓糸というのは私の組織の階級だ。

由来は蜘蛛の網から来ている。中心から放射状に張られた糸を縦糸、縦糸に対して直角に、同心円状に張られた糸を横糸という。横糸は実際には同心円ではなく、螺旋状に張られている。網の中心付近には横糸がなく、縦糸の交わるところには縦横に糸のからんだ部分があり、これを「こしき」という。クモが網にいる場合には、普通ここに居場

所を定めている。網の外側には縦糸を張る枠にあたる糸があり、これを枠糸と呼ぶ。

縦糸はモランを始めとした信頼できる人材で固めてある。横糸は戦闘特化・情報戦・金銭管理の人材を配置。網の中心部「こしき」は私だ。モランが述べた枠糸は組織の末端、使い切りの人材だ。

「この仕事は難しいから、枠糸には荷が重いよ。プランを説明するからよく聞いてね」  
私はモランに計画を語る。

——

『畏まりました。全て主の思うがままに』

アレを有効活用する日がきたよー金次君の自転車に仕掛けられていた爆弾をね。

りこりにイタズラしよう。自分が仕掛けた爆弾でやられるのはどんな気分だろう？アリアを倒せず、自分の一族の初代を超える証明もできず、夢半ばで倒れる。死んでしまえば、Vからある意味で解放されるよ。

まあ、それはりこりんが「本当」に『武偵殺し』であつた場合だ。

これから最初にする事は、いわばテストのようなモノだーりこりんが武偵殺しか、そうじゃないかをハッキリさせる。ちよつとしたテスト♪りこりんが無実なら生き残つてみせるさ。

「それじゃ、後はよろし……」

ゴロゴロくキュピイイイー

「ぐおおおおおおおおおおおお!?」

お、お腹があああ。痛い!超痛いよ!

突然の腹痛に私は耐えらず、前屈みになりベットのシーツを握り締める。

『主!? どうされました主! 応答してください!』

モランが電話越しで叫ぶ。

お願いモラン! 叫ばないで! 漏れちゃう! 漏れちゃうよ!

『主、応答してください! 主、あるじいいいいいい!!?』

頼むから叫ばないで! 黙って…… いや、待つて!

私はお腹を抑えながら、必死の思いで電話を手取る。

「助けてモラン! 助けてよ! 助けて、助けてえええ! 何か漏れちゃうよ!!? 漏れちゃう!」

私はモランに助けを求める。

パーパリン!

病室の窓を割って、モランが駆けつけてくれた。雨の中を走ってきたのか——彼女はびしょ濡れだ。

早っ!??しかも、ここ三階だよ!??でも、助かった!

「主!どうされました!??」

モランは私の側まで来て、ガクガクと私の肩を揺さぶる。

やめてええええええええ!私に触らないでええええええええ!

私はモランの手を払い除ける。

「あ、主?」

モランは困惑している。

当然だ。今の私は前屈みになり、お腹を抑えている格好なのだから……自分で情けない姿を晒している。こんな醜態、アリアだけには見られたくない。

「う、うえええええん……!!?」

エグッ!グスツ!と涙が出てきた。アリアに見られたら、絶対に馬鹿にされる。何だか悔しいいいいいいい!

思わずモランに寄り添う。

「モラアアアアアーン!お願いいいいいいい!今すぐトイレに連れてつでええええ!」

「分かりました!」

私は泣きべそをかきながら、モランに懇願する。自分ではベットから起き上がることにすらできません。



モランは私をお姫様抱っこし、一目散にトイレに駆け込む。

## 計画始動

零視点――

私は昼過ぎに退院し、モランにタクシーを手配してもらった。

病院を出る際、そつと手をお腹に当てる。うん、今はお腹も安定している。何?……間に合ったかって? 何の事さ? 分からないよ。

取り敢えずタクシーに乗り込み、適当にその辺りを走ってもらおう。気晴らしのドライブというやつだ。

私が乗り込むと、運転手がくるつと振り返り、

「出し……退院おめでとうモリちゃん」

聞き慣れた声で話しかけてきた。この声は……

「あれ?もしかしてアップルかい?」

「アツタリー!!? そうだよ」

運転手もといアップルが乗っていた。ごく丁寧に変装までして。彼女の姿は頭に制帽、背丈は平均的な平凡な顔立ちの女性運転手だ。

どこから見てもタクシー運転手にしか見えない。いや、タクシー運転手に化けないと

不自然か。あと、退院おめでとの前に何か言わなかったかい？ 出し…… 出所かな？

「モリちゃんが病院に運ばれたって聞いて、私驚いちゃったよ」

「心配かけてゴメンね」

私の謝罪を合図に発車する。

フツと後部座の窓から空を何となく眺める。今は雨が上がっているが、また降り出しそうな曇り空だ。

「モランにタクシーを手配してもらったけど、まさかアップルが来てくれるとは思わなかったよ」

「私からモランちゃんにモリちゃんを迎えに行かせてって、お願いしたんだー。ついでにモリちゃんには内緒にしてってね☆」

キュピンとバックミラー越しにウインクしてみせるが、今の彼女の姿でやられると、不自然にしか見えない。

モランがね…… サプライズのつもりかな？

「そうなんだ…… まあ、いいけど。そのモランから聞いてると思うけど」

「勿論聞いた。『武偵殺し』を本格的にヤルんだってね。準備の方は進んでるよー。夜までは完了するってさ」

「それで炸薬量は？」

「えーっと、確かド派手にやるって事だから……ざっと2000ポンド」

「ーブツ!?」

私は思わず吹いた。に、に、に、2000ポンドって、日本の単位に直すと1トンじゃん。

『武偵殺し』どころか東京都が吹き飛ぶよ。

「因みに爆弾を魔改造したのは誰？」

「へーちゃんだよ。『どうせやるなら、ド派手にいきませんと！イタリアに負けてられるか!!』?」だっけさ」

あの人は…… 私は思わず頭に手を当てて唸る。イタリアーベレット社は爆弾を作ってたかな?あの会社は銃器がメインだった筈……

ヤバイ、頭痛がしてきたよ。誰か頭痛薬を……つていないか。

「ハア、用意してしまった物は仕方がないか……爆弾の全長は？」

「87.4インチ」

「直径は？」

「10.75インチ」

「種類は?コンポジションB?それとも、コンポジションCかい？」

「コンポジションCーC4爆弾を使用しております」

「パーフェクトだ、アツプル」

「感謝の極み！つて、コレやりたかっただけでしよう？」

某吸血鬼アニメのネタを披露する。流石、アツプル。あのシーンも見ていたか。このネタはヘルダーにやってあげると、メチャ喜ぶんだよね。その内、あの化け物拳銃を作ってしまうのではないか？ヘルダーなら、マジで作りそうだ。使用者の安全性を全く無視するし……今はどうでもいいか。

「アツプル、このまま新宿警察署に向かつて」

「あれ？てつきり、マンションに戻ると思ったのに」

「現在、新宿警察署に勾留されているK氏についてはアツプルも知ってるでしょう？」

「うん。『武偵殺し』の替え玉でしょう？その人がどうかしたの？」

「その替え玉の正体はアリアの身内なんだよ。その人から聞きたい事があつてね」

「あれれ？モリちゃん、悪そうな顔しているね〜」

バックミラー越しに私の顔を見て、アツプルがニヤニヤと笑う。

そんなに悪い顔をしていたかな？ただ、私はK氏に直接アリアについて教えて欲しい事があるだけだ。

「私はねK氏からの情報を元に……アリアを利用できないかなつて、考えているだ

「よ」

「利用って、何をやらせるの?」

「アップルは分からないという顔だ。」

私はアリアに『武偵殺し』こと、りこりんを仕留めて貰おうと考えている。最初は金次君に仕留めて貰おうと思っていたが、彼にやらせるのは嫌になった。金次君には……手を汚して欲しくないと思えてきたからだ。私情で計画を変更するとは言えない——これだけは絶対にね。

「突然で悪いけど計画変更だ。舞台は空の上——飛行機にしよう。空なら逃げ場がないからね」

「飛行機にするの? 突然だね。最初はホテルでヤルって言うたのに」

「どデカイ花火をセットしてくれたのに、私の我が儘で変更することになって、本当にごめんね。我ながら勝手だ。」

「二フロアを吹き飛ばすだけなら、良かったんだけど……ヘルダーが張り切っちゃったから、ね?」

「あー、そうだよね……うん! 分かった。計画変更って皆んなに伝えておくよ」

何とか納得してくれた。

あー、よかった。アップルは話がわかる子で助かったよ。

さて、計画変更にあたってアリアをどうするか…… 私は側頭部に手を添え思考する。

アリアをどうやって飛行機——対決の舞台におびき出すか。

りこりんの狙いはアリアだ。彼女が飛行機に乗り込めば、必然的にりこりんも乗り込むことになる。そこを仕留めればいい。

りこりんが勝とうが、アリアが勝とうが” どうでもいい”。最後はみくんが吹き飛ばすのだから。

「アップル的にはアリアと『武偵殺し』を戦わせるなから、どうやる？」

「モリちゃんが意見を求めてくるなんて、珍しいね。うくん、そうだね…… 飛行機に乗せるなから、そうなるように仕向けちゃえば？」

「ははは、成る程ね。素晴らしい意見をありがとう」

見事なまでの直球な意見だね。しかし、理にかなっている。

そうなるようか…… 再び思考する。

ホームズ一族は代々探偵の一族。探偵——推理。

アリアは推理が苦手な様子だった。そんな彼女が果たして一族の一員として認められているかと言えば、答えはNだ。

彼女はホームズ一族の中では除け者扱いされている。そういった人間がホームズ性

を名乗っているのには、訳がありそうだ

心の在りどころ又は支えー特定の身内？ー現在には勾留中。他の人物？

イギリス貴族は能力のない人間には厳しいと聞く。例えそれが身内であってもー  
ルイスからの情報なので有力だ。

貴族であり続けるのには、並み大抵の気力では務まらない。身内となれば尚更だ。

ホームズ性を名乗り続ける理由が必ずある。それは利用すればいい。

強い憧れー特定的人物ーシャーロック・ホームズ。

「アリアは初代ホームズに憧れているのかもしれない」

「ようやく戻ってきてくれた。モリちゃん、考え過……うわっ！」

アップルが叫ぶと同時に車体が大きく右に傾く。それに伴い私の身体が大きく揺れる。

ギギイイー！！？

鼓膜が破れそうなブレーキ音が鳴り響く。タクシーは反対車線をギリギリではみ出なかつた。あ、危なかつた。

「突然、どうしたのアップル？」

「なんか道路に猫が飛び出してきたんだよ」

猫？そんなの居たかな？思考する事に夢中になって気づかなかつたか……まあ、



いいか。

気を取り直し、再び思考を開始する。

初代ホームズに強い憧れを持っている。ホームズは卓越した推理力と鋭い勘の待ち主だった。自分に推理力が無くても、勘があれば曾祖父と同じとはいかなくても、少しは近づけると思っているかもしれないネ。それを心の支えにして今まで頑張ってきたか……

そこまで行き着くと思わず頬が緩くなる。

「うわー、またモリちゃん悪い顔しているよー。それって、アレだ。僕の勝ちだ、って言う前の顔になってる」

「えっ？ 私ってそんなに悪い顔してる？」

「うん。悪の顔だ。そんな顔していると死亡フラグ立つ…… うわっ!!？」

グリリイイイー!!？

今度は車体が大回転コースピンし出した。グルグルと回転し、危うくガードレールに激突しそうになるが、何とか止まった。

「今度はどうしたの？」

「分かんない。突然、ハンドルを取られちゃった」

ハンドルを取られたって、道路に油でも撒かれたのかい？ 後ろを見てみるが、道路に

は真つ黒なタイヤのブレーキ跡以外は何も無い。気のせいか？車内がやけに冷える。冷房は効いてないはず……

「…… このまま走って」

「本当に？なんかヤバそうだよ？」

引き返そうよ、と顔で訴えるアップルを無視して、私は彼女に車を走らせる。また思考し直した。

アリアはホームズに憧れている。なら、その憧れが崩れる——輝かしい英雄像がまやかしたったどうなるのやら。

この一つに行き着いたとき、私の中でプランが決まった。ルイスの協力が必要だね。

キキイ——！！？

突然アップルが急ブレーキをかけた。Gに引つ張られて、私の体は前屈みになる。

痛っ！！？前のシートに頭をぶつけちゃったよ！

「今度はなに？」

痛む頭を抑えながら、アップルに尋ねる。

「いや、ちよつと前にね…… コラー！！？危ないじゃないか！」

運転席の窓を上げて、アップルが声色を変えて怒鳴る先には女の子が道路上に倒れていた。ツインテールの金髪に、着崩した制服姿の可愛い子ギャルだ。

年頃と服装からして学生かな？でも、この辺りでは見かけない制服だ。年頃からして後輩だね。

女の子はピクリとも動かない。もしかして、アップル引いちやった？しかし、車には衝撃は走らなかつた。ギリギリで引かずにすんだかな？

暫くして、彼女はムクリと立ち上がった。よかつた〜大事に至つてないようだ。

私がホツとしていると、彼女は私の方〜後部座までやつて来て、コンコンと窓を叩き始めた。

ーなんだろう？窓を開けてみる。

「ちよつとお姉さん！危ないじゃないか！あと少しであたし引かれる所だつたよー！」

窓を開けて早々、マシンガントークが襲つて来た。これはアレかな？いわゆる当たり屋つてヤツだな。自分から車両に当たりについて、慰謝料を要求してくる手口だ。

この場合、私じゃなくアップルに要求してくるのが妥当じゃないかい？でも、これは明らかに悪質な要求だ。アップルが従う必要はない。

「君〜絶対にワザと当たりに来たでしよう？」

寄つてきた彼女をジツと観察する。うん、明らかに典型的な当たり屋だ。器用な事にギリギリ接触しない位置で車道に飛び出したね。

「違うしー！当たつてきたのはそつちだしー！」

「コラーツ！車から離れなさい！」

彼女は食い下がる。どうやら、意地でも認めない様子だ。

タクシーに張り付く彼女をアップルが注意するが、効果はない。

どうしよかなー、この場合は示談ではなく、警察に通報するのが一番だ。示談だと、後でどんな要求をしてくるか分かったものじゃない。

しかし、今は『武偵殺し』の件もあるし、警察沙汰は正直御免だ。

「ちよつとばかり、お金を恵んでくれない？さっきので、手を悪くしちゃってさー」

彼女はひらひらと手を見せびらかす。捻挫もしていない綺麗な手だ。

どこも悪くないでしょう。賭けてもいい。

まづいな〜時間をかけていると野次馬が寄ってきそうだ。

私は窓から袖をピンと伸ばして、袖の中に仕込んであるスリープガンを彼女の額に当てた。

「ひいひい！！！！、ごめんなさい！！！！どうか、ご勘弁を……！！」

彼女は悲鳴を上げて、顔を庇うように遠ざかった。

タクシーから離れたことを確認し、私はスリープガンを仕舞い込み、アップルに発進するよう指示する。

「どうしたのモリちゃん？何だか、いつものモリちゃんらしくないね」

「うん？いつものつて？」

「今日のモリちゃんはいらついてるなー、つて思ってたさ」

「あー、ちよつと色々あつてねー」

私は無意識にお腹を摩る。ここまで来る途中、カーアクションのせいか……お腹の調子が悪くなってきた。これも全て、アリアが買ってきた差し入れのせいだ。アレはあん饅に見せかけたももマンだ。間違いない！

アリアは私の変装——キョウはももマンが嫌いだとは知らない筈……誰かの差し金か？

「……なんか、興が冷めてきちゃった。やっぱり、このままマンションに戻って」

偽あん饅事件について思考していると、何かどうでもよくなってきた。早く帰ってプランの再確認をしないと……

タクシーはそのままマンション——新宿警察署のある方向とは反対に走っていった。

後日——あらゆる報道機関は一つの話題で持ちきりになった。

特にイギリス——お昼のロンドンでは、

『シャーロック・ホームズにイカサマ師の疑いが掛かる!?』

『全てはでっち上げ！解決した事件の数々はホームズによる自作自演』

『誰もが知るホームズとワトソンの初の出会い。ワトソンの経歴を当てたのは、推理ではなく予め調べてあった。動機はこいつ凄いなと思われたかったから』

『宿敵ジェームズ・モリアーティは実在しなかった。ホームズが雇った役者。犯罪組織など始めから存在せず』

『ホームズ邸に報道陣が詰め寄り、一時パニック状態に。周辺の道路が通行止めになる』  
『ホームズ家は全面的にコレを否定』

## 思い通りにいかない人

「ああ、もう！なんでこんな時に……！」

アリアは羽田空港に急ぎょうとしていた。

今日の19時発 ANA600便・ボーイング737-350、ロンドン・ヒースロー空港行きに乗るためだ。

昨日、アリアはロンドンの実家からある一報を受けた。自分が敬愛する曾祖父・シャーロック・ホームズが『イカサマ師』の疑いが掛けられたのだ。数々の難事件を解決は彼による自作自演という。

『シャーロック・ホームズ』誰もが知る世界的名探偵。武偵の祖とも言われる彼の正体がイカサマ師というのをマスコミが放っておくはずがなく、報道早々、アリアの実家であるホームズ家には多くの報道陣が詰めかけた。

この自体を重くみたまホームズ家は騒動を収めるの為、アリアにロンドンに戻って来いと連絡してきた。

これを聞いたアリアはすぐさまロンドンに戻ろうとするが、生憎と愛車はエンジントラブルを起こし、車輛科に駆け寄るが修理には時間が掛かる。今日中にはできないと

言われた。

仕方がないので武偵高の外——女子寮の前でタクシーを捕まえようと立ち往生していた。

「あたしは信じない……絶対には信じないんだから」

アリアは今にも枯れそうな声で地面にうづくまる。

代々培ってきた推理力がなく、ホームズ一族から出来損ないとして扱われてきたアリアにとって、曾祖父であるシャーロック・ホームズは憧れであり、彼女にとってのキャリアなのだ。

アリアは必死に自分に言い聞かせた。全部デタラメだ、報道自体がでっち上げだと。そうでもしないと、自分が自分でなくなりそうだったからだ。

「みんな……みんなあんな偽情報に惑わされて……バカみたい」

学校での出来事が蘇り、目元に涙が滲み出る。

武偵高では情報の伝達が恐ろしく早い。昨日の今日だというのにホームズ イカサマ師疑惑は一気に学校中に広まった。

生徒の中にはシャーロックはイカサマ師ではないと信じる者もいたが、一部ではホームズに失望したなど言い出す者まで出始めた。一時、意見の対立が原因で生徒間で乱闘にまで発展し授業停止にまで陥りかけたが、学校の生徒会と教務科の働きにより事無き



を得た。明らかに全員情報に踊らされている。

「クヨクヨしてる場合じゃないわ。しっかりしないと……。曾お爺様の無実はあたしが証明する！」

自分を励ましていると、丁度そこに一台のタクシーがやって来た。手を振って停止させる。

「羽田空港まで大急ぎで！」

タクシーに乗り込むと、運転手に一方的に目的地を指示する。

運転手は一言だけ「分かりました」と言つて、タクシーを発進させる。

同時に搭載されているカーナビに目的地。羽田空港を打ち込む。すると、カーナビの画面にザッザーと激しいノイズが走る。

アリアは何だろうと目を向けてみると、

『ハロー、始まり始まり。大好きなピンクの騎士のお話だ』

ノイズが晴れると、画面にはシルクハットを被った怪盗風の可愛らしいキャラクターが出現した。子供番組などに出て来そうな姿、能天気で明るい声をしている。キャラクターが立つ後ろの背景には子供が書いたような青空が描かれている。

「な、なんなのよコレ？」

『自慢大好きなピンクの騎士は仲間内で勇気も知恵も一番だった。しかし、自分はどん』

なに勇敢でどんなに多くのドラゴンを倒したか、自慢ばかりするので皆すぐに話に飽きてしまい……こう考えるようになったーあいつの自慢話は本当なのか?』

グイとキャラクターが画面に詰め寄る。まるでアリアに対して言い聞かせているようだ。

暫くの間、キャラクターは考え込む動作をして、

『そこで！騎士の一人がアーサー王に言った。自慢がだ〜い好きなピンクの騎士は信用できません。自分をよく見せるため話をでっち上げる嘘つきにごさいます』

わざとらしく大きく手を広げる。すると、今まで青空だった背景がゴロゴロと真つ黒な雷雲に変わった。

『すると王までもが疑い始める。だが、自慢好きのピンクの騎士にとって……それはまだ最後の問題ではなかった。お終い♪』

シリアスな雰囲気からとって変わって急に明るくなり、それを最後に映像が終わった。

「止めなさい！止めろ！」

アリアは運転手に命令する。タクシーは路肩にも寄せず急停止した。突然、タクシーが止まった事で後ろー後続の車は慌てて停止した。後続の車たちは各々クラクションを鳴らし、窓を開け文句を言う。

そんな野次など御構い無しとばかりにアリアはタクシーから降りて運転席に詰め寄る。

「今のは何なの!? 答えなさい!」

運転手に問いかける。すると、運転手はアリアの方を向いてニイと笑った。

「お代はいらないよ」

「どういう意味よ」

「早くしないと飛行機に乗り遅れるよ」

それだけ言ってタクシーはその場から走り去っていった。アリアは追いかけてやろうとするが、不意に立ち止まる。今から追いかけてあの映像は何だったのか、と運転手を尋問すべきか、もうすぐ出発するであろう飛行機に乗ってイギリス ロンドンの実家に帰るか迷ったのだ。

羽田空港まではまだ遠い…… 歩けばギリギリ間に合うが。

零視点――

時刻は午後18時30分――

現在、私はマンシヨンの自室に引きこもっている。部屋の窓にはカーテンをして、外からは中が見えない。

中央の一人がけソファに背を預け、膝に乗せたマダムの頭を指で弄る。マダムは少しだけ嫌そうだ。

すぐ向かい側のテーブルには、携帯と起動したパソコン。『スパイダー』が表示され、立ち上げた複数の画面に映る人物たちと面談中だ。

「それでアリアは予定通りに羽田に向かったかい？」

『バッチリ。少し戸惑っていたけど、すぐに歩き出したよ。今頃、羽田に到着してるよ』  
ドルマークと真つ赤な林檎のアイコンが表示されている画面から話しかけている相手はアツプルだ。彼女にはタクシー運転手に変装してアリアを羽田に誘導する役目を与えた。どうやら、うまくやってくれたようだね。

『モリちゃんって、タチが悪いね。あんな映像を見せるなんて。アリアったら血の気の引いた顔しながら眺めいたよ』

「そうかい。それはよかった」

アリアは私からのメッセージを受け取ってくれたようだ。

乗り込んだタクシーから流される自分が置かれた状況を暗示するムービー。子供番組風にしたのは洒落のつもりでやった。

あれくらいの映像の一つや二つ、私なら簡単にすぐに作れる。

ーピロン！

『スパイダー』に新しいアイコン二つの髑髏に拳銃とナイフが突きつけられたアイコンが表示された。これはボニーとクライドだね。

『おーい、モリー。暴動騒ぎはかたづいたゾー』

『メツチャ怠い仕事押し付けんよ』

二人してダルそうな声をしている。聞く限りクタクタな様子だ。

こつちも頼んでおいた仕事が付いたようだね。

「お疲れ様。リハビリにはもってこいだったらう？」

『あんなモン、リハビリの内に入るかヨ。なあ、クライド？』

『おうさ、学生の暴動騒ぎを黙らせるなんて、猿でもできるぜ』

私が2人に頼んでは、武偵高内で勃発した学生間の暴動騒ぎを収めるという依頼だ。

昨日、報道されたシャーロック・ホームズ イカサマ師疑惑。武偵同士の情報伝達って本当に早いよね。あつという間に全校生徒に広がった。

その結果、生徒間でシャーロック無実派、疑惑派という二つの派閥ができた。無実派の殆どはシャーロックに憧れて武偵になった人間。憧れの存在を信じる姿勢は素晴らしい。

疑惑派は憧れの存在が嘘つきだった事がショックのようだ。殆どの者が暴走し出し

た。あの連中の行動は憧れという感情の裏返しだろう。

この二つの派閥——武偵の暴徒化は一般の暴徒と違って骨が折れたよ。何たって銃撃戦にまで発展したし。

「清掃委員長と副委員長としては放っておけない案件だったでしょう」

ボニーとクライドは学校の委員会——清掃委員会に所属している。勿論、私がそうするよう手引きした。武偵高での清掃委員というのは、一般高の清掃委員と違って、学校の“汚物”を徹底的に排除するのが仕事だ。

『オメエが俺らを無理矢理就任させたんだらうガ』

『ヤってるコツチの身にもなれよ。面倒くせえんだぞ』

学校全体の暴動とあって、生徒会が対応する（教務科は動かなかった）羽目になったが、それだけでは収める事ができないので各委員会——機能している委員会に応援を要請した。

ボニーとクライドが所属する清掃委員会もその一つだ。2人を委員会に入れてよかったですよ。この2人は銃撃戦は大得意だからね。

「ごめん、ごめん。このお礼は今度するからさ。取り敢えず、お疲れ様。新しい指示がでるまで休んでおいて」

——ピロン♪

また新しいアイコンが表示された。今度のは可愛らしいチワワのアイコンーモラ  
ンだ。

「モラン、配置についたかい？」

『はい、予定通りに』

現在モランには東京湾に出てもらっているー丁度、19時発ANA600便・ボー  
イング737-350、ロンドン・ハースロー空港行きが真上を通過する位置に待機す  
るように。

真つ黒なボードで夜の湾内に出るので、パツと見たくらいではわからない。人目の心  
配はないだろう。

「例の装備は持つてきているよね？」

『勿論です』

簡潔に一言だけ返事が返ってくる。モランに持たせている装備とは携帯式対空ミサ  
イルーースティンガー。

飛行機を爆破するのにミサイルは必要ないと思われるが、念の為に用意した。

計画とはあらゆる事を想定して実行に移すものだ。仕掛けた爆弾が必ずしも爆発す  
るとは限らない。エリアとりこりんの戦闘で故障するか、見つかつて解体されるやもし  
れない。

まあ、解体される確率は限りなく低いが……解体する前に終わる。

「頃合いを見て、防衛省に飛行機がジャックされました。機体は致命的なダメージを受け、空港に緊急着陸するつもりですって、タレコミするから、モランが出張る必要はないかもしれないけど」

『いいえ、構いません。必要なくとも私は主の命令に従います』

武偵とはいえ高校生。防衛省はアリアが無事に緊急着陸できるとは思わないだろう。となれば、小を切り捨て大を生かす。できる限りの処置を取るだろう。

『お話し中、悪いけどモリちゃん』

「うん？どうしたんだいアップル」

『あー、そのね。飛行機ごと『武偵殺し』やるのにわざわざ爆弾を使う必要があったのかなー、つて思えてきちゃってさ』

『何ですかアップル。主の計画に不満でも？』

「ここら。2人とも画面越しで喧嘩しない。アップルの疑問は最もだね。飛行機ごと始末するなら、幾らでもやりようがある。燃料フィルターを詰まらせてエンジンを停止させ墜落させるなり、簡単な方法でもやれる」

最初に考えたプランの一つを説明する。

燃料はエンジンに供給される前に必ずフィルターを通し、不純物を取り除いた状態で



初めて供給される。

そのフィルターに砂でも詰まれば、燃料はエンジンに供給されない。燃料がなければエンジンは動かない。それだけで飛行機は簡単に墜ちる。パイロットと計器に不具合が起これば尚更だ。

墜落場所が東京湾一海なら証拠は洗い流される。あー、今にして思えば爆弾を仕掛ける必要なしだった。突発的な行動一後悔先に立たずだね。しかし、それだと爆弾を改造したヘルダーに悪いし。計画変更したら「私の出番がない!!?」日陰者は嫌だああ!!?」って、叫びそうだ。

「あえて爆弾にしたのは『武偵殺し』を懲らしめたかったからかな」

『ぶ。ぶ、何それ?爆弾使いが爆弾で吹き飛ばす様でも見たかったの?モリちゃんって本当にタチが悪いね。まさに悪女だね』

「私は悪女じゃないよ。大袈裟だよ」

『いや、説得力ないよ』

アップルの呆れ声に続いて、ボニーとクライドも『全くダ』『ドの口が言いやがる』と言い出す始末。君達……… 覚悟はできてるよね?

モランだけは『主は悪女ではない!』と庇ってくれた。優しい……… 今度一緒に遊びに行こうか。

♪♪♪

テーブルに置いてある携帯が鳴った。着信音はシューベルトのピアノ5重奏曲『鱒』だ。私はコレが気に入っている。1年の頃から変えていない。手を伸ばし取ってみると、着信画面には金次君の名前が。

「やつほー、金次君。どうしたんだい？あつ！もしかしてお休み前の電話かい。少し早過ぎない？」

『違えよ。お前に連絡したのは『武偵殺し』の次のターゲットが分かったからだ』

電話越しの彼の声は少し焦っている。息遣いも荒いし、走りながら電話しているようだ。

「へえー、そうなんだ……聞かせて」

『今までの事件は『可能性事件』だったんだ……』

金次君はそう言って語り出した。

過去『武偵殺し』にやられた人間はバイクジャックとカージャックだけではない。事故つて事になっているが実際は『武偵殺し』の仕業で隠蔽工作で分からなくなっているだけー代表的なのがお兄さんのシージャック事件。

模倣犯に成りすまし事件を起こしていたのはメッセージ。初めからアリアを狙つての犯行。ターゲットはアリア。急にロンドンに戻る事になった彼女の乗る飛行機をハ

イジャックするつもりだと。

「それでどうするだい？アリアに警告でもする？なら、私の方でやっておくけど……」  
嘘だけどね。アリアには『武偵殺し』共々消えてもらう。

『駄目だ。あいつ携帯の電源を切ってるようでも連絡が着かん。お前から連絡しても無駄だろうよ』

そりゃ、連絡が着かないだろう。君の携帯からはアリアには繋がらない。私がそうしたのだからさ。

「ならどうするんだい？空港に連絡して離陸をやめさせる？空港にはアリアが乗る飛行機だけじゃなく、他にも着陸や離陸する飛行機があるんだよ。連絡したところで無駄だよ」

『アリアを見捨てろってか？！？』

金次君が怒鳴る。今までに聞いた事のない迫力のある声だ。電話越しにも関わらずブルッと全身が強張る。

「いや……私はまだ可能性を言っただけ……」

自分の発している声とは思えないー吹けば飛ぶような覇気のない声で金次君と喋る。ど、どうしたんだろう？自分でも信じられない状況だ。落ち着け。

「金次君……君はどうしたいんだい？」

『アリアを助ける』

「ーはあ？」

彼の一言に私は頭が真つ白になった。膝に乗せたマダムが私から逃げるようにカサカサと床を這って去っていく。そんな事はどうでもいい。

『武偵憲章2条「依頼人との約束は絶対に守れ」俺はアリアにこう約束した。強襲科に戻ってから最初に起きた事件を一件だけお前と一緒に解決してやるって』

「だからって金次君が出張らなくても……」

『『武偵殺し』の件はまだ解決していない』

『武偵殺し』存在自体が金次君をこの様な行動を起こさせたのか？

「金次君がアリアを助けたいというのは分かった。それで？私にどうしろと？」

『アリアを助けるのに力を貸してくれ』

真つ直ぐとこれぼっちも迷いなどない台詞を呟く。

「はあー、分かったよ。私も成り行きとはいえ、君と一緒にアリアとの依頼を受けだからね。それで何処で落ち合おうか？まずは合流してプランを練ってから……」

正確にはプランの変更だけだね。仕掛けた爆弾もあるし、巻き添えは御免だ。

『すまんが合流は現地になるぞ』

「現地？まさか……」

私はサーツと血の気が引いていく感覚に襲われた。

『俺は羽田空港にいる』

「何をやってるんだよ君は!? プランも立てずに敵のホームグラウンドかもしれない現場に乗り込むなんて! 馬鹿なの!?」

「ああ! 馬鹿で結構だよクソつたれ!!? 体が動き出したんだから仕方ないだろう!」

猪突猛進。考え無しの行動とはこの事か……誰かが彼を発起ーヒスラせたのか? 身近で考えられそうなのは白雪さん? 彼女はS研の合宿でいないし……

「今すぐ止まちなさい! キンジstop! 私が行くまでその場で待機いいね?」

『すまん。もう羽田の第2ターミナルだ。それで……』

「……それで?」

『金属探知機なんのそのでゲートに飛び込んだところだ』

終わった……何もかも手遅れだ。全ては遅すぎた。恐らく彼の目の前には飛行機が見えているだろう。

「状況は分かかった。私も直ぐに向かうから辺りを警戒して」

それだけ言って私は携帯を切った。

「プ……プハハハハハハハハ!!? ヒヒヒヒヒ、ハハハハハ!」

『主!?』『モ、モリちゃん!?』『』どうしたモリー!?』

私はお腹を抑えながらみつともなく笑い出した。き、金次君……君つて奴は本当に私の思い通りにならない。考えつきもしない行動をすぐに実行に移すんだから。

「ハハハハハハハハハハ！ あー、あー、お腹痛い。各自その場で待機。私の指示があるまで勝手な行動に移さないでね」

全員にそう指示して『スパイダー』の電源をプツンと切る。

そして直ぐに装備を確認すると玄関に移動し、立てかけてあつた愛用のステッキを手に取り外に出た。

「うん？ 誰だい君は？」

外に出て早々、見慣れない小さな、女の子と出くわした。

10歳ぐらいに見える体躯を、大きめの古めかしい軍服で包んだ少女だ。罫の影で濃紺の瞳を隠すほど目深に被った海軍帽には、どこの国の物か分からない、見た事のない帽章がある。ダブついたコートの際が高く折られ、横顔が隠れるほどだ。髪型はアリアと同じツインテールだが、色は水色。

「会いたかったぞ」

きりつ、と私を見ながら、フランス語訛りのある英語で喋り始めた。

姿や声は10歳ぐらいなのに、不思議と大人の知性を感じさせる。

子供の体に、大人の知性。何処ぞの子供探偵を沸騰させるが、今はそれどころじゃな

い。

「悪いけど、先を急いでいるのでね」

私は英語で謝罪を述べてから、少女の横をツカツカと通り過ぎる。

去り際に少女が何か言ったような気がしたが、私の耳に入ってこなかった。

――

「教授からの言伝だ。『シャーロックは兎も角、私が役者って無いだろう。この馬鹿め  
以上だ』」

## 初めての疑い

ANA600便・ボーイング737-350、ロンドン・ヒースロー空港行きの機内にてー

機体は上空に出て、ベルト着用サインが消えた。

俺は仕方なしにアテンダントを落ち着かせてから……アリアの席、というか個室に案内してもらおう。

この飛行機のキャビン・デッキは、普通の旅客機とは明らかに異なる構造をしていた。1階は広いバーになっていて、2階、中央通路の左右には扉が並んでいる。流石、金持ち飛行機『空飛ぶリゾート』とかニュースで言われてた、全席スイートクラスの超豪華旅客機。

ふいにキョロキョロと辺りを見渡すが、零の姿はない。間に合わなかったか。突然連絡入れたから当然か。

「……キ、キンジ!?」

スイートルームでアリアが、紅い目でまん丸に見開いた。

「……さすがはリアル貴族だな。これ、チケット、片道20万ぐらいするんだろう?」



「断りもなく部屋に押しかけてくるなんて、失礼よっ！」

「お前に、そのセリフを言う権利はないだろう」

アリアは自分が俺の部屋に押しかけたことを思い出したのだろう。

うぐ、と怒りながらも黙る。

「……… なんてついてきたのよ」

「武偵憲章2条。依頼人との約束は絶対に守れ」

「………？」

「俺はこう約束した。強襲科に戻ってから最初に起きた事件を、一件だけ、お前と一緒に解決してやるー 『武偵殺し』の1件は、まだ解決してないだろう」

「ーまだ覚えてたの」

「アリア、何があつた？俺に一言もなく、『武偵殺し』の件をほっぽり出して、突然ロンドンに帰るなんて、お前らしくもない」

『武偵殺し』にもう少して追いつきそうという、このタイミングでアリアは急にロンドンに戻るーここに来る前、お台場のクラブ・エステーラで理子から聞いた時は驚いた。

「……… この前のニュース、あんた見た？」

アリアはすがりつく様な声で俺に尋ねる。

「この前のニュースって何だよ？お前がロンドンに戻る事と関係あるのか？」

「…… シャーロック・ホームズ」

まだ軽くヒスつておかげか、アリアの口からボソツと出てきた名前ですぐにピンと来た。

シャーロック・ホームズ。誰もが知る世界的なイギリスの名探偵。武偵の祖。かの有名な名探偵に先日、日本中いや世界中の武偵が注目された。

それは『シャーロック・ホームズ イカサマ師疑惑』。何処から、誰がリークしたのかは定かではないが、かの名探偵にペテン師の疑いが掛かったのだ。数々の解決した事件はホームズによる自作自演という。有名なだけに大スキャンダルだ。

「あのニュースか……」

俺の言葉の意味を悟ったのか、アリアがコクリとうなづく。

アレには俺だけじゃなく、学校の連中も驚いてたつけな。中にはシヨックを受けて暴れ出す者やソレを止める連中の対立で、一時学校が二分したが、零を初めてとした生徒会や委員会が鎮圧して事なきを得たらしいが……

「ねえ、あんたから見て曾…… シャーロック・ホームズってどんな人？」  
「どんなって……」

「あんたもペテン師だって、思ってたりにしてないわよね？」

「いいや、思ったりしてねえよ」

俺はアリアにハッキリと自分の気持ちを伝える。

「……？ その根拠は何処から来てるのよ？ それだけ言うからには、ハッキリとした根拠があるんでしょね？」

「ペテン師が世界的に有名になれるほど安いモンなのかー名探偵つてやつはよ。コレは誰にも零にさえ言つてないが、俺は武偵としてシャーロック・ホームズを慕っている。ニユースを見た時はそりゃ驚いたが、すぐに嘘ばつちだと確信したよ。如何にも世間の注目を集める事が目的つて感じだよ。だから、アリア。あんな馬鹿なニユース気にすんな。お前の前でホームズをイカサマ師呼ばわりする奴がいたら、俺がぶつ飛ばしてやる」

「強引な結論ね。でも……信じてくれて……あ、あ、あり、がとうね。あんたみたいな奴がいて、ちよつとだけホツとしたわ」

アリアは頬をちよつとだけ、ポツと染めてソツポを向く。

「それで、シャーロック・ホームズとお前に何の関係があるんだ？」

俺の言葉にアリアがズルツと、席から盛大に落ちそうになる。コントのような光景だ。

「あんた分からないの？？？ てつきり、知ってるから追いかけて来たんじゃないかと思つたのに！」

軽いヒステリモードが切れたのかー！ノーマルな思考に戻ったのが分かる。

「すまん、本当に分からねえ」

ここはキツパリと言う。

分からない事を分かっただけに見えるのは逆効果だと、前に零から教えてもらったか  
らな。ここは素直に……

ゲシッ！ゲシッ！ゲシッ！

なつたが、席から立ち上がったアリアから蹴りをお見舞いされた。

痛い！地味に痛いから！脛を蹴るな！

「まだ分からないの？！信じらんない！バカバカ！どバカ！ギネス級のバカ！バカの金  
メダル！」

言い過ぎだろうコラ。

「あたしはあんたをパートナーにして、曾お爺さまみたいに立派な『H』になるの！そう  
決めたんだから！」

癩癩を起こしたように暴れ出した。

言ってることが、まったく理解できん。突然、どうしたんだ？今のアリアは自分を奮  
い立たせてるようにも見えないー！そうでもない！と自己を確立できないかのよう。

「何なんなんだよその『H』ってのは……！」

「ああもう！あんたで決定したんだから教えてあげるわよ！あたしの名前はー」

アリアは犬歯をむくとーぐい！と。両手を腰に当て、その寄りも上がりもしない胸を張った。

「神崎・ホームズ・アリア！」

「ホー、ムズ……？」

「そう！あたしはシャーロック・ホームズ4世よ！で、あんたはあたしのパートナー、J・H・ワトソンに決定したの！もう逃さないからね！あと、レイとイチヤイチャしようとしたらー」

待て、待て。待ってくれ！

「ー風穴あけるわよ!!？」

シャーロック・ホームズ。

そういうこと、だった、のか。自分の曾祖父がペテン師扱いされたら、そりや怒るわな。俺も兄さんが似たような扱いをされたから分かる。

でも……なあ。ももまんが好物で、ことあるごとに拳銃ぶつ放して。ポン刀ぶん回して。

「こんな…… ちっこカワイイ…… ホームズって、ありえんだらう！」

「で、お前は事の真相を探る為にロンドンに戻ろうと？」

「そういうこと。事の始まりはロンドンシーイギリスのタイムズ紙が出した号外から始まったわ。『シャーロック・ホームズはイカサマ師だった』ってね」

「アリアは苦々しい思いで語り出す。

「ここだけ聞いてると、こつちまで苦々しくなるな。」

「あたしの実家、ロンドンにあるホームズ家には今尚、群衆が詰めかけてるそうよ。タイムズ紙の号外を片手にね……」

「ーいっただいどうなってるんだアリア。何故、そんな誰でも分かりそうな偽情報がマスコミに、いっただい誰がリークしたんだ？」

「そんなことあたしが知りたいわよーでも、先日イギリス中の各社が一斉に号外を出したの！それとほとんど同時にラジオ局も同じニュースを流し始めたわ！」

「イギリスでホームズはヒーロー的な存在だ。そんな人物をイギリス中の報道機関がこぞって、イカサマ師にするなんて。誰かの意図を感じるな。裏でシャーロック・ホームズを陥れたい誰かが……」

「いっただい誰があんな偽情報をこんなにタイミングよく流したの？『イ・ウー』？……いいえ、連中は曾お爺さまについてはノータッチだったし、『武偵殺し』だつてここまで



「どうやら、突発的に行動しちまったみたいだな。まあ、俺も人のことは言えんが。」

「お前がロンドンに戻ちまったら、留置されてるかなえさんはどうなるんだよ?」

「曾お爺さまの冤罪を晴らしたら、すぐにママも……!」

「裁判まで時間はあまり残されていない。それまでに解決できるのか? 名探偵の冤罪を晴らす事がーお前一人に」

「何が言いたいのよ?」

「仕方ねえから付き合っつてやるよ。お前の曾じいさんの疑惑を晴らす仕事をよ」

「乗リかかった船ならぬ乗つちまった船だな。零には悪いが、このまま行かせてもらうぜ。この飛行機に乗っていれば、『武偵殺し』にも会えるしな。」

「ー何よカツコつけちゃって。勝手にしなさい」

「アリアはふんつと、顔をそらす。俺には少しだけ笑つてるように見えた。」

強風の中、ANA600便は東京湾に出た。

アリアは腕組み足組みをして座席に座って、外を眺めている。

「アリア……前々から聞こうと思つていたんだが」

「何よ? ハッキリと言いなさい」

「お前と零は何であんなに仲悪いんだ?」



アリアと零は側から見て凄まじく仲悪い。初対面の車然り、俺の部屋然り。

車でのやり取りは、アリアが自分の愛車のフロントガラスを砕いたとはいえ、零は大気ない態度。アリアを罵る言動が目立った。対するアリアも負けていなかったけどな。

それで俺の部屋では互いに口喧嘩では済まず、取っ組み合いに発展。最後はペランダから海に転落するという、ある意味で壮絶な最期を遂げた（二人とも生還したが）

ジャジャ馬のアリアは兎も角、零は普段の冷静さのカケラもない。

キャラ崩壊を起こしている。「むぎー」とか子供みたいに叫んでたし……

「レイと顔を合わせるとムカツとしてくるのよ。特にあんたと一緒にいるところを見ると尚更ね」

なんじゃそりゃ？俺と一緒にいるのが気に入らないってか？仕方ないだろう。零とは昔からコンビを組んでいるんだから。一緒にいる事は自然なことだ。

「ーあんたとレイって、いつからコンビ組んでんのよ？」

下から俺を見上げるような形でコンビ結成について尋ねてくる。

「いつからって、そうだな……高一からコンビ……いや、正確には高一の三学期から本格的に組んだかな」

嘘であり本当である。俺もハッキリとは言えない。

コンビ結成のきっかけは兄さんの勧めが濃い。その兄さんが事故に偽造されたシージャックにあつて行方不明になつて……それからだな。一緒になつて本格的に事件を解決し回つたのは。

事件の大半は依頼人―第三者のクエスト依頼を俺が零に伝えて、それを零が解決する。

俺はというと零に引つ張り回されていた感が強い―零が犯人を追い詰めて、俺がとつ捕まえる。それで、決まつて俺だけ周りから何故かヒーロー呼ばわりされる。

あんま活躍してないのに、キラキラした尊敬の眼差しでヒーロー扱いされるのは正直キツイ。

零から持ち上げられた感があるあるだ。あいつの方がヒーロー扱いされていいのに。「ハツキリしないわね。でも、まだ一年にも満たないのね……」

アリアは俺に背を向けて、グツ！とガツツポーズする。

何故、そこで勝ち誇る？何か勝つ要素があつたか？

「あつ！あとよ。俺の部屋でのベランダのやり取り……」

もう一つ気になつていた案件―ベランダ事件を言い切ろうとした瞬間、アリアがギロツと睨んできた。怖つ！俺は蛇に睨まれた蝦蟇か。

「嫌な事をぶり返さないでよ」

本当に嫌なのか。アリアはズーンと効果音が流れそうな顔をする。美少女がそんな顔を見ると、される方も嫌な気持ちになる。

「悪い。でもよコレも聞いておかないとお互いの今後の為にならん」

お互いの心理状態の把握は大事だ。不満や要望を理解し合えば任務の遂行がスムーズに運ぶ。

「今後って……！そ、そうよね！お互いの事はちゃんと知っておかないと」

アリアはテンパった。俺は当たり前前の事は尋ねただけだぞ。

「それで？何が聞きたいのよ？」

「俺の部屋で零が言ってた作戦をパクったって何の事だ？」

あいつの作戦立案は凄い。言われた通りの時間に突入すれば、まるで魔法の様に扉が開き、邪魔者は誰一人いなかった。まさに天才だ。アレでどれだけの武偵が危険を避けられたか。特に強襲科の連中は大いに助けられた。

「昔、偶々レイの作戦を見かけて参考にした事があるのよ。本当に参考にしただけよ！そ、そりゃほんのちよこつとだけ、そのまま使った事があるけど、ほんの少しだけよ！あたしなりに改変もしたんだから！」

アリアの話を聞くかぎり怪しい。

額に似つかわしくない汗がだらだらと滲み出ているぞ。少しどころじゃなくそのま

んま使ったな。零が怒るのも無理もない——世間ではそれをパクったって言うんだぞ。「何処で見かけたんだ？」

「ロンドン武偵時代にあたしの戦姉が偶々ネットで公開されてたレイの作戦を見つけてね。ちよつと厨二病人人だったけど。偉く気に入って参考にしていたわ」

ネットで公開だと？ 零は自分の作戦を大々的にひけらかす真似はしない筈だが。さては誰かが無断で公表したな。

しかし、その話し気になるな。俺の知り得ない作戦があるかもしれん。

「どんな作戦が公開されていたんだ？」

俺は好奇心に駆られてアリアに尋ねてみた。

「次から次へと……レディに尋ねてばかりで失礼ね。まあ、いいわ。特に気に入っていたのは……」

アリアは語ってくれた。

数で大きくまさる犯罪者達に対し、弱体な武偵を突出して配置することで強力な装備の犯罪者に押し込まれても時間を稼げるようにし、その間に強力な武偵で犯罪者を蹂躪し、その後弱体な武偵戦力と合わせて犯罪者を包囲殲滅する。

同士討ち覚悟で突入し、立てこもり犯を出口に誘い込みと出口に配置した武偵と最初に突入した武偵とで強力な火器をもって挟み撃ちにする。

その他…… e t c …… 黙って聞いてみると、どれもこれも犠牲上等の様な作戦ばかりだ。

本当に零が考えたのか？ あいつは仲間が犠牲になるような作戦を考えるような奴じゃない。しかし、当の本人が立案したような言動は取った。「あんただったのねー！ 私の作戦パクったの！」って、叫んでいたし。

アリアが先に述べたー少しだけ変更して使ったという話は本当みたいだな。こいつがこんな作戦をそのまま使うとは思えん。

「あたしの戦姉はダークヒーローみたいでカッコイイって、はしゃいでいたわ」

ダークヒーロー。悪を持って悪を倒すか…… アニメやコミックでしか存在しないと思われがちだが、そんなことはない。偶に武偵崩れの中にそう呼ばれ奴がいる。しかし、行き過ぎた正義は何たらってやつだー大概はロクな最後を迎えない。

零がダークヒーローねえ…… キャラ的にピッタリな気がするな。

「そうか…… なら、俺の部屋で零に言った『あんたの方こそ！』ってのは何だよ？ あいつがお前の作戦か何かをパクったのか？」

「ええ、そうよ！ 何処で聞いたか知らないけど、レイたらあたしの作戦だけじゃなく、戦闘スタイルー双剣双銃までパクったのよ！ 転校初日に後輩達があたしと同じスタイルで戦ってるのを見て、誰に教わたのって尋ねたら、レイから習ったと確かに言った

わ」

「アリアは作戦、零は戦闘スタイルをパクったのか。どっちもどっちだな。

「それにあの子たち物凄く下手すぎ！あたしと全然似てない！見ていてイライラしてる！」

当時の光景を思い出したのか、アリアはキー！と唸る。

これは思い出し笑いの怒り版だな。自分の戦闘スタイルを真似られて、思うモノがあるだろう。アリアの気持ちも分からんことはない。

今のアリアの状態を例えるなら、スポーツの熟練者が初心者フォームを見てイライラするのは同じだろう。

「慣れない戦闘スタイルは死を招くんだけだな。あいつが何のアドバイスもなしに後輩達に教えたとは思えんが…… 何処であいつはアリアの双剣双銃スタイルを知ったんだ？」

「あたしも2つ名持ちだからある程度は名が知れてるし、そういった情報が知られても不思議じゃないわ」

ますます謎が深まる。

零は何を考えて後輩達が使いこなせない双剣双銃を伝授したんだ？まるで慣れず使えずの奴から現場で死んだほしいとばかりに…… いや、考え過ぎか。あいつに限っ

てそんなことはない。後輩の面倒もしっかりと見るし、何か考えがあつての……

「何か考えがあつての事つて、あんた今、そう思つてるでしょう？」

アリアが何の前触れもなく急に話しかけてきた。

「何で分かつたんだよ？顔にでも出てたか？」

「勘よ。思考停止した武偵はその時点で終わりよ。あいつが、パートナーが、何か思つて行動してるとか安易に思うのはやめなさい」

さつき考えていた事を訂正するかの如く、アリアは俺に注意を促す。

「零を疑えつてか？あいつに限つて……」

「ほら、それよ。すぐにそうやってーあいつは大丈夫。心配ない。やましい事なんてない。悪いヤツじゃないつて、先入観に囚われすぎ」

「ー零が影で悪きでもしてると、言いたげだな」

アリアの言動に、俺は思わずキレそうになつた。が、グツと堪える。

「そこまで言つてないわよ。ただ、あたしが言いたいのは、あんたは自分の……認めたくないけど、ずっと前から組んでるレイを疑わな過ぎ。いいえ、疑うのを怖がつてる。あたしには分かる」

俺が零を疑うのを怖がつてるだと？あいつの何処を疑がつて怖がる必要がある。

「あんただけじゃない。武偵高の皆んなもそうよ。ぶらぶらと回つてレイの印象を聞いて

て回ったけど、一様に頼りになる、信頼できる、何でも打ち明けられる、協力したくなる、そんなのばかりだったわ」

零は学年問わず、学校の連中から慕われている。

入学してからそうだったし、進級して生徒会長になって後輩ができてからは、さらに板についたとは思おうが。

「別に悪いことじゃないだろう。それだけ全員から信頼されてる証拠だ」

「いいえ、アレは信頼——カリスマ性とか、そんな単純なモノじゃないわ。あたしから見れば、みんなレイに洗脳されてるような気がする」

アリアはそこに零がいるかのようにジッと、壁の方を眺める。

「まだハッキリしてないけど、あたしの勘が言ってる。レイは何か隠してる。それも表だって言えない様なヤバい感じの」

この業界表だって言えない仕事くらいはあるが、零が俺に隠れてヤバい事に出してるって？

アリアのこの様子からして普通じゃない。明らかに零を警戒している。

「考え無しに相手を信頼し過ぎると身を滅ぼすわ。あんたも——その足りない頭の片隅にでも留めておきなさい」

足りない頭は余計だ。



確かに零は時々、隠し事をしてると匂わせる言動や行動が見て取れる。

だからなのか？アリアの意見も無視出来ずにいた。こいつの勘は当たるとは当た  
る。

最近、当てた事といえば零のもも饅下痢疑惑だったが。

できる事なら思い過ぎであつてほしいな。

## アクロバット飛行は好きかい？

零視点――

現在、私はANA600便――『空飛ぶリゾート』と言われる、全席スイートクラスの超豪華旅客機に乗っている。

金次君からこの飛行機に乗るといふ連絡を受け、私は急いでタクシーを捕まえると走る車内で変装――キョウになり、空港に到着して早々、金属探知機そっちのけで機体に乗り込むと、タイミングを見計らったかのように飛行機は滑走路に入り離陸してしまつた。

「はあー、なんでこうなつたんだろう……」

普通の飛行機とは違うキャビン・デッキ――2階にある12の個室がある通路を歩きながら愚痴をこぼす。

金次君の飛行機に搭乗するという連絡を受けたからこそ、私はここにいます。

何故か？彼が『武偵殺し』とついでにアリアを始末する舞台上がるのを阻止したかつた？

いいや、阻止しようにも金次君は既に飛行機に乗つた後だつた。

そのまま放っておく事もできたのに……考え無しに——突発的に行動し今に至る。

「これからどうしようかな…… 空港に引き返そうにも、ね」

機内を見渡ししながら、これからの事を考える。

一度離陸した飛行機が引き返しorダイバートするには、大きく分けて3つ。

パターンその1・空港（滑走路）の閉鎖——航空機のトラブルや、滑走路の緊急補修（日本ではほとんどないが、海外でたまある）、大雪による除雪、火山噴火に伴う降灰でも閉鎖されることがある。

地上にいる誰かに指示して、目的地のロンドン空港を閉鎖させ最寄りの空港に着陸させようにも、今の私には連絡する為の手段がない。

改めて自分の装備を確認する。

ウェブリー Mk 1×弾倉30発。

シングル・アクション・アーミー×弾倉20発。

右袖に仕込んだスリープガン一丁。

ワスプナイフ1本。

携帯端末×1つ。

そして愛用の仕込み杖。

うん、如何に自分が準備なしに現場に来たのかが分かるね。

果たして、これだけの装備で何処までやれる事やら……仲間なし、来たのは自分だけってね。

空港連絡に関してはコクピットに管制塔への通信装置くらいはある筈

連絡に関しては今は保留にしておこう。

パターンその2・航空機自体のトラブル、機内でのトラブルー当然外部要因ではない、運航している航空機自身のトラブルで引き返しまたはダイバートする。

例えば機材が故障した場合。国内線であれば運航距離が短いため、途中でトラブルが発生した場合でも目的地まで飛行できたり、出発空港に戻るにもそう遠くない場合がある。乗員と航空会社のオペレーション担当との協議にもなるが、乗客の利便性や代替機材の有無、その空港で機材の整備が可能かどうか、といった観点から着陸空港が決められることが多い。

……機内でトラブルを起こす事はできるーそれも飛びつきのスーパートラブルをね。

チラツと床に視線を移す。

当初のプラン通りなら、この真下ー貨物室に爆弾が仕掛けてある。飛行機どころか都市部を吹き飛ばせる2000ポンドの爆弾が。

適当な乗員に爆弾が仕掛けてあります！と伝えるか？又は貨物室に上手く誘導して爆弾を発見させるか？

爆弾騒ぎを起こせば一発で空港に引き返してくれるだろうが、その後が問題だ。

この爆弾はあくまで『武偵殺し』が仕掛けた物だという事にしなければならぬ。いや、そうあるべきなのだ。

『武偵殺し』が騒ぎを起こしてくれないと私が困る。

爆弾を有効的に使うには、まずは『武偵殺し』を見つけることから始めるか……

3・悪天候——突発的な悪天候や、予想を大きく上回る悪天候だった場合など、やむを得ず他の空港に向かうことがある。

台風も近づいているし、空港側もそれを考慮してANA600便の出発を平日より早く飛ばしている。

ガガン！ガガン！

比較的近くにあったのだろう——雷雲から、雷の音が聞こえてくる。

ガガン！ガガン！

今度のは一際デカイ。

おかしいな……… 今のは明らかにヤバかったよ。下手に直撃すれば墜落の危険性がある。

パイロットがわざわざ雷雲の側を飛ぶとは思えないが……

私が揺れる機内で疑問に思っていると、

パン！パン！

突然、音が機内に響いた。

今度のそれは雷鳴でなく、武偵高に入学してから聞き慣れた音——銃声だ。

咄嗟に私は通路の物陰に身を潜める。

同時に銃声を聞きつけたのだろう。12の個室から出てきた乗客たちと、数人のアテナンドントー文字通り老若男女が、不安げな顔でぎやあぎやあ騒いでいる。

銃声のした機体前方を見ると、コクピットの扉が開け放たれている。

「おや、おや。見かけによらずパワフルだね」

そこにいたのは、これといった特徴のない小柄なアテナンドント。

彼女が、ずる、ずる、と機長と副操縦士を引きずり出している。

2人のパイロットは麻酔で眠らされているようで、全く動いていない。

非殺傷とは優しいね。

どき、どき、と通路の床に2人を投げ捨てたアテナンドントを、物陰に隠れながら見ていると、

「——動くな！」

アテナダントに拳銃を向ける人が——金次君だ。やっぱり乗ってたか。

彼の声にアテナダントは顔を上げると、にいッ、と、その特徴の無い顔で笑った。

そして1つウイंकをして操縦室に引き返しながら、

「Attention Please. でやがります」

カージャック時、セグウェイが発した語尾を口ずさみながら、ピン、と音を立てて、胸元から取り出したカンを放り投げてきた。

「キンジッ！」

恐怖を押し殺した顔して部屋からアリアが、悲鳴を上げて出てくる。

——考え無しに出てくるなんて馬鹿なの？

シューウウウ……！！

これは——ガス缶だね。

探偵科で習った毒ガスの知識を頭の中で検索をかけるが、当てはまる物がない。

刺激臭・目眩・吐き気とうなし——だだの煙幕だ。

「——みんな部屋に戻れ！ドアを閉めろ！」

アリアを部屋に押し込めるようにしながら、金次君が叫ぶ。

積極的でヤバイシチュエーションほいけど、なんか見えていてイラッとしてくるな。

そんな私の気持ちとは裏腹に、ばたん、と扉を閉める一瞬前に——飛行機はグラリ、と

揺れ。

「ぼちん、と機内の照明が消え、乗客たちが恐怖に悲鳴を連ねた。

暗闇はすぐに、赤い非常灯に切り替わった。

煙幕が晴れるのを待ち、私は物陰から非常灯に照らされた通路に出る。

「さてさて、金次君にアリア、他の乗客は部屋に籠っっちゃたし、『武偵殺し』は何処かに消えちやっただー機内にいるのは確かだけだ」

床に投げ捨てられたパイロット2人に近づき、容態を確認する。

2人とも脈はあるし、呼吸もほぼ正常。やはり眠らされてるだけだった。

私が容態を確認し終わるとー

ポポーンポポポン。ポポーン。ポポーンポポーンポーン……

ベルト着用サインが、注意音と共に点滅をし始めた。電気系統をバックしたか。

「これは……和文モールスだね。何々……オイデ オイデ イ・ウー ハ テン  
ゴク ダヨーーオイデ オイデ ワタシ ハ イツカイ ノ バー ニ イルヨ、か。

明らかに金次君とアリアを誘ってる。あの2人なら挑発に乗りそうだ」

2人が籠っている部屋を目を細めて眺める。

暫く部屋の前に立っていると、

ガガーン！



再び雷鳴が聞こえてきた。

耳の鼓膜を破るような音を拾った瞬間、一つの疑問が浮かぶ。

現在、この飛行機は誰が操縦している？

前方の操縦室に視線を移すと、開いていた扉はいつの間にか閉ざされている。

『武偵殺し』の共犯者が操縦？ 奴は単独を好むからその線はなし。

となると、オートパイロットか？ いくら、パイロットがいないとはいえ、こうも雷雲側を飛行するだろうか？ 偶然にしては変だ……まるで故意に飛行しているかの様に。

操縦室に移動すると案の定、扉は堅く閉ざされている。

どうやら『武偵殺し』が姿を消す際に閉ざしたようだ。

「律儀に閉めたってワケじゃないし、ここには何かあるみたいだね」

倒れている機長と副操縦士から非接触ICキーを拝借し、私は操縦室に入る。

「ーガチャ！」

入室と同時に誰かがキャビン・デッキーパーツ個室から出てくる気配が……！

慌てて操縦室の扉を閉じ、通路が見えるよう少しだけ開けると、金次君とアリアが部屋から出てくるのが見えた。

「どうやら1階のバーに向かうようだ。」

2人の後を追いかけたいが、今はこつちを調べてからにしよう。追う気持ちをグツと抑え、操縦室を調べ始める。

「ふふふ、これは面白そうなモノがあるよ」

操縦席にはセグウェイの銃座にも似た機会が置かれていた。

ザツと見た限り、これで飛行機のオートパイロット機能をハックして、遠隔操作できるみたいだ。

ガガーン！ガガガーン！

雷光が操縦室を真っ白に照らす。

「ーー今夜は嵐の夜になりそうだ」

金次視点ー

ゆかに点々と灯る誘導灯に従って、俺とアリアは慎重に一階へと下りていく。

1階はーー豪華に飾り立てられたバーになっている。

その、バーのシャンデリアの下。

カウンターに、足を組んで座っている女がいた。さっきのアテンダントだ。

彼女は、武偵高の制服を着ていた。

それも、ヒラヒラな、フリルだらけの改造制服だ。

「随分と、ノロノロ来やがりましたねえ」

言いながら……ベリベリっ。

その顔面に被っていた、薄いマスクみたいな特殊メイクを自ら剥いだ。

「……理子!?」

「Bon soir」

ぱちり、と俺にウインクをしてきたのは、理子……だった。

この異常な状況に、俺は愕然とする。

俺と台場で別れてから、コイツも……この飛行機を追っていたというのか？

「アタマとカラダで人と戦う才能ってさ、けっこう……遺伝するんだよね。武偵高にも、お前たちみたいな遺伝系の天才がけっこういる。その中でも……お前の一族は特別だよ、”オルメス”」

「……」

理子に言われた単語に、アリアは電流に打たれたように硬直した。

オルメス……確かホームズのフランス語読みだったよな。

アリアの家の名を何故、コイツがわざわざフランス語に訳す？

「あんだ……一体……何者……！」

眉を寄せたアリアに、にやり、と理子が笑う。

「理子・峰・リュパン4世……それが理子の本当の名前」

リュパンだと？

確か、あれか。探偵科の教科書に載っていた、あのフランスの大怪盗。

零が熱心になってプロファイリングしていたからよく覚えている。

理子はあの、アルセーヌ・リュパンの……ひ孫だつてのかり？

「お前がリュパンのひ孫で、それで『武偵殺し』か。最強の組み合わせだな」

「『武偵殺し』？ ああ、あんなのプロローグを兼ねたお遊びだよ。本命はオルメス4

世……アリア。お前だ」

じろ、と、理子がアリアを見る。

その目は獲物を狙う、獣の目だ。

「100年前、曾お爺さま同士の対決は引き分けだった。つまり、オルメス4世を斃せ

ば、あたしは曾お爺さまを超えたことを証明できる。キンジ……お前もちやんと、

役割を果たせよ？」

「俺の役目だと……？」

「オルメスの一族にはパートナーが必要なんだ。だから条件を合わせるために、お前を

レイから引き離して、アリアとくっつけてやったんだよ」

俺にワトソンになれってか。

理子は再びいつもの軽い調子に戻って、くふ、と笑った。

「キンジのチャリに爆弾を仕掛けたんだけど、レイに邪魔されて仕方なく、レイの車からわつかりやすうーい電波だけ出してあげたの」

「…… あたしが『武偵殺し』の電波を追ってること気付いていたのね……！」

「そりゃ気づくよおー。あんなに堂々と通信科に出入りしてればねえー。でも、アリアてば爆弾が仕掛けてあると勘違いして、レイの車をスクラップにしやったよねえー」

車1台で2人を不仲にし分裂させたのか……？

こいつに、兄さんは……！

「何もかも…… お前の計画通りだったってワケかよ……！」

「それでもないよ。予想外のことばっかりだったもん。チャリジャックは失敗、バスジャックもレイに邪魔されたし」

バスジャックもこいつがやったのか。零の読み通りだったな。

「キンジの腕時計を狂わせたのに、その当日に隠されるし。おまけに自分から目覚まし時計を送りつけて、キンジ、お前をバスに乗り遅れさせないようにしやがった」

理子の口調が段々とバカ理子からキレた理子に変わる。

腕時計——理子が温室で俺の腕時計を壊したのは、わざとだったのか。

零はそれを見透かして、俺にあの目覚まし時計を送りつけたのか——電気ショックは

余計だったがな。

「それだけじゃない。バスジャックで散々あたしの邪魔しやがった。スパイダーに爆弾仕掛けるわ、伏兵使ってドローンを潰してきやがる。正直言って、あそこまでイライラしたのは初めてだよ」

ボニー&クライドによる遊撃、ビルからの狙撃の事を言ってるのか。

零よ先の先を読む行動は大したモノだ。理子がイラつくのも無理はない。

「零がいつ、あんたの邪魔したってのよ。バスジャックの時、邪魔したのはキョウだったじゃない」

「……ねえ、キンジ。アリアに話してないの？理子、不安になってきたよ」

アリアは未だにキョウの正体が、零だと気付いていない様子。

そんなアリアを見て、理子は大丈夫なのか？と、不安げだ。

アリア……いい加減に気づけよ。

「まあ、いい。忌々しい零もいないし、今度から気兼ねなくやれる」

再び獲物を狙う、獣の目で俺とアリアに向ける。

ここでおっぱじめるつもりか……！

衝動的に、俺がベレッタを握る右手に力を込めた瞬間。

パチパチパチパチ

「はいはい、ちよつと待つてもらえるかなー?」

バーカウンターの後ろから拍手をしながら、バスジャックの時に遭遇した金髪碧眼の美少女が姿を現わす。

「ツー」

見間違ひようがない。あれは零の変装した姿ーキヨウだ。

声も変声術であの時と同じ声にしている。

おまけに持ち手に『M』と刻印された愛用の杖を持つて。

来てくれたのか……!

「キヨウ……! あんたも来てたの?!?」

「まあ、ねえー。金次君から熱くいメッセージを受けたからには、駆けつけないワケにはいかないでしょう?」

アリアは突然のキヨウの登場に驚いている。

そんなアリアの様子がおかしいのか、キヨウは変装マスク越しに頬が釣りあがっている。

あつ、絶対に笑いを堪えてやがるなコイツ。

「おいッ。てめえ……その姿はなんのつもりだよ? あたしを、馬鹿にしてんのか?!」

キョウの姿で、自分の計画を散々邪魔された記憶が蘇ったのだろうか。理子がキレた。

対してキョウはどこよ吹く風とばかりに受け流して見つめているが、俺には何処か残念なモノを捉える目に見えてしかたない。

「別に馬鹿になんかしてないさ。ただ、私はりこりん。君の事を思っこそ、この姿で来たんだよ」

「ああ？」

「この姿の方が燃えるでしょう？ーリーリベンジ的に」

その瞬間、理子の顔から表情が消えた。

いいや、消えてない。浮かび上がったのは、憤怒の表情だ。

完全にキレたようだ。

「ふ……ふ、ふざけんなあああああ!!？」

雄叫びとともに小ぶりな拳銃ーランサーP99を構えた理子がキョウに突進してきた。

その姿はまるで、獅子のように。

「おっと……！」

キョウはスカートのポケットから、携帯端末を取り出すと、ピツ、と一押しして、突然



その場に杖を突き立てしやがんだ。すると、

ーぐらっ。

零がしやがむ場所とは正反対ー俺とアリア、理子が立つ場所がガクンと下がる形で、機体が大きく左に傾く。

「キャッ……！」

「アリア……！」

俺は咄嗟に宙に投げ出されそうになるアリアの手を掴むと、空いた手でバーカウナー席を掴んでどうにか耐える。

逆に宙に投げ出される形となった理子は、距離を詰め飛び掛かったキョウに蹴りをお見舞いされた。

「ぐう……！」

腕をクロスさせガードするが、小柄な理子はサッカーボールのように蹴り飛ばされ、バーカウナーに背中を打ち付けられる。

理子はカウナーを掴んで身体を起こすが、

ーぐらっ

再び機体が揺れる。

今度は飛行機全体が回転し、左翼が真下を向く形で止まり、天地が横にズレたかのよ

うな錯覚に襲われる。

同時に、バーカウンターにあった酒類がガラガラと音を立て、何本も床に転がり落ちる。

「どうしてさ……!? この機体はあたしがコントロールしてるのに……!」

「オートパイロットのプログラムを書き換えさせてもらつたよ。この機体がこれからどう機動するのか、私だけが全て知っている」

バーカウンターにしがみ付いて耐える理子に対し、キョウは余裕の表情で、いつ移動したのか機内の壁に両足をつけて、状況を説明してみせた。

「オイ、オイ!!? いつの間そんな事をやつたんだよ!!?」

飛行機のプログラムを書き換えたって、ホイホイできるモンじゃないぞ。

「他の乗員・乗客はどうした!? 俺らはともかく、こんなアクロバット飛行についていけねえぞ」

「それなら大丈夫。ここに来る前に乗客に『シートベルトを締めて、部屋から出ないでね』と、命令、してきたからさ」

「やるんなら、やるつて言いなさいよ! このバカキョウ!!? おかげで、ふ、服がめくれちゃつたじゃないの……!」

文句を言い放つアリアは、制服の上着がペラんとめくれちゃつてる。

めくれた上着の下からはトラポン柄の、し、下着が丸見えだ！

「ここ、このバカキンジイイ!!? 見てんじゃないわよ!!?」

腕を掴むアリアから爪を立てられる。

痛てえ！バカ、やめろ!!? 落としちまうだろうが！

「ああ、ごめんねー。それよりも可愛らしい下着してるネ。それって、ナニ？ 君の趣味かい？」

「余裕ぶっこいてんじゃねえぞー！」

バーカウンターから理子がワルサーを構える。

狙いはキヨウの頭部だ。危ねえ！

俺が叫ぼうとした、その時、

ーグン！

又しても、機体が大きく揺れた。今度は水平飛行になり、天地が元戻りになったが、突然の変化に理子については行けず、身体が大きく揺れる。

パァン！パァン！

キヨウの頭に向かって発砲したつもりが、彼女の右こめかみ横をすり抜けるだけに終わった。

「どうしたんだい？ 首がガラ空きだよ」

キヨウはバーカウンターに背を預ける理子に向かってダツシユし、距離を縮まると腰からナイフを抜き放ち、首を狙って刺すが、理子は床を這う形でキヨウの背後に回り、体勢を立て直すと、同時に理子を狙って刺したキヨウのナイフは、彼女がいたバーカウンターに深々と突き刺さる。

「今のつて明らかに9条違反よね？」

「あ、ああ……」

バーカウンターで戦闘を眺めて、俺たちは愕然とした。

さっきのキヨウの攻撃は明らかに9条違反だ。

しかも、あのナイフは殺傷能力抜群のワスプナイフじゃねえか。

人間に使えば、刺した箇所が氷菓子のように粉々になるぞ。

「れ……いや、今はキヨウって呼んでやるよ。さっきのは9条破りバリバリ待ったな  
しだぞ」

「だだの脅しだよ。りこりんなら躲してくれると分析済みさ」

ググウと腕に力を入れ、バーカウンターに深々と突き刺さったナイフを抜こうとする  
が、抜ける気配はない。

抜けないと悟ったキヨウは、ナイフから手を離し、改めて理子の方を向いた。

理子をジッと見つめるその目はまるで、彼女を構築する全ての情報を紐解くようにも

見えた。

「さて、りこりん。私から提案があるんだけど、イイかな？」

右手で頭を掻きながら、理子に話しかける。

「何だよ？大人しく捕まれたの……」

理子が話し終えようとした、その瞬間、

パン！

一発の銃声がバーに響き渡った。

「……ツ……！……て、てめえ……！！？」

ガクツと腹部を抑え、膝を付く理子に向かつて、キョウは右手をピンと伸ばしていた。

理子に何をした？

よく見ると、キョウの右袖から細い煙が上がっているのが分かる。

袖口から見えるのは、スリープガンか！！？

どうやら会話で理子の不意を突き、アレで防弾制服越しに彼女の腹部を撃ったよう  
だ。

「ノン。ノン。余裕ぶっこいてちゃ、ダメだぞりこりん。」

「~~~~~ツ！！？」

ワザとらしく、それも理子本人の口調に似せて煽る。

完全にご立腹な理子は、もう一丁、ワルサーP99をスカートから取り出し、ばんっ！と床を蹴ったかと思うと、2丁拳銃を構えて襲いかかる。

いける、と判断したのだろう。キョウの火器を見て。

常に防弾制服を着用している武偵同士の接近戦では、拳銃弾は一撃必殺の刺突武器になりえない。打撃武器なのだ。

となるとモノを言うのは、装弾数となる。

あの広いスカートの中に、弾が20発でも30発でも入るUZ-Iを隠し持たれていた不利だが、ワルサーP99には通常16発までしか入らない。それが2丁あるから、最大32発。

対するキョウのウエブリー Mk Iは6発。シングル・アクション・アームー通称ピースメーカーも6発。

2丁合わせても、最大12発しかない。そう12発だ。

リボルバー最大の弱点――装弾数の少なさで、圧倒的にキョウが不利だ。

向かってくる理子に、キョウは太もものホルスターから、右手にウエブリー、左手にピースメーカーを抜いて構える。

迎え撃つ気だ……！

バリバリバリバリッ！という音を上げて、理子はキョウを至近距離から撃ち始めた。

「このッ…… さっさとくたばれ！」

「えー、やだよ」

理子はキヨウを至近距離から、拳銃で撃とうとせめぎ合うが、キヨウは余裕の表情を崩さず、理子の腕を弾く。

「キヨウのやつ、一発も撃とうとしないじゃない」

「たぶん、あいつは弾を温存するのが狙いなんだろう」

バツ！ババツ！

バリバリバリバリッ！

問答無用で撃ってくる理子に対して、キヨウは射線を避け、躲し、相手の腕を自らの腕で弾くだけで、戦闘が始まってから、一発も発砲する気配がない。

リボルバーは装弾数の少なさもそうだが、リロードするまでが長い。弾切れを起こせば、隙を突かれかねない——理子がソレを見逃すはずがない。

「このッ……！撃ってこいよコラッ！」

「はっはっはっはっは。そんなに怒ってどうしたのさ？可愛い顔が台無しだよ」

バリバリバリバリッ！

ヘラヘラと可笑しそうに笑って、さらに理子を煽って、ワルサーをガンガン撃たせる。挑発させ、先に弾切れを起こさせるつもりか。

拳銃でお互いを撃とうたせめぎ合う中、キョウが弾いた衝撃で、理子のワルサーの銃口がアリアに向く。

ーバアン！

「アリア、伏せろ!!？」

「つて、ちよつと……！」

アリアを庇うようにして押し倒すー間一髪だった。

放たれた銃弾はバーカウンターの酒ビンに命中し、ビンを粉々にして中身を床にぶちまけた。

「ーよつとー！」

理子が弾切れを起こした次の瞬間、キョウはその腕で理子の両手からワルサーを叩き落とし、続け様に右手に構えたウエブリーを3発撃ち放つが、

しゅら…… しゅるるっ。

銃をなくした理子の、ツーサイドアップの、テールの片方がーまるで神話にあるメデューサの髪のように、動いてー

シヤッ！

背後に隠していたと思われるナイフを握り、キョウに遅いかかった。

その、ありえない、不気味な光景に。俺は目が離せずにした。



なんだ…… あれは!!?

「……！」

これには対峙するキヨウも驚き、一撃目は避けたがー  
ザシュツ！

反対のテールに握られたもう一本のナイフが、鮮血を飛び散らせた。

「イツ……！」

キヨウがー真後ろに飛び距離を置こうとするが、そうはさせないと理子は髪で押しのけるようにして、キヨウを突き飛ばした。

あの髪、よほど怪力なのだろうか。キヨウは驚くほどに易々と吹っ飛ばされーたが、空中でくるっと回転し、見事に着地してみせる。

しかし、側頭部を斬られている。血が、紅く、紅く、ほとぼしる。どう見ても偽物じゃない、本物の血だ。

あいつが血を流す所なんて初めて見た。

「へえー、二刀流とはやるね。カッコイイ〜」

「お前に褒められても、ちつとも嬉しくねえよ」

キヨウは側頭部を手で押さえながら、嘘か本当か、自分に一撃をいれた理子を褒める。理子は再びスカートに手を入れると、新しい2丁のワルサーP99を取り出してみせ

た。

まだ、拳銃を隠し持ってやがったのか!?!?

拳銃・ナイフ。どちらも二刀流。あれじゃ、まるでアリアのようじゃないか。

「一体そのスカートの中には何丁の銃が入っているのかな？」

「さあね…… 当ててみるよ！」

理子が掛け声と共にキョウに再び突進した。

向かってくる理子にキョウがダン！と、床を踏み鳴らした瞬間、

ーギイイーン！

又しても、機体が大きく揺れた。今までの比じゃないぞコレは！

体感でザツとだが、機体が8の字の軌道を描くように飛行している。

「ちよ、ちよつとおおおお、離さないでよキンジイー！」

振り子のように投げ出されそうになるアリアが必死に俺の手を握る。

俺は離してたまるかとはかりに、アリアの手を握る力を強める。

ービリビリビリ

くくくくくくッ…… !!?」

強烈なGにより、理子は床に這い蹲って身動きが取れずにいた。

「自分の思い通りに動けない気分はどうだい？」

チャキと身動きができない理子に2丁の銃口を向けて、見下ろすキヨウはその指を引き金にかけ、

パァン！パァン！パァン！パァン！

今度は4発続けて発砲した。

「当たらないよー！」

その場で理子は身体を捻って、ゴロゴロと床を転がる形で銃弾を躲す。

理子が躲すと同時に、機体は水平飛行に戻った。

「……チ。『小休止』のプログラムか。ここまでは君を倒して、東京に戻れると計算してたんだけど。まあ、いいか。間もなく、次のプログラムが始まる。りこりん、君は常に風下で……立つ場所は常に私より下。もう一度言うけど、どうだい、自分の思い通りに動けない気分は？」

鮮血で顔を染めて、最後にニイと笑ってみせる。

キヨウいや、零は自分が常に絶対的優位に立つ事に関しては天才的だ。

勝負事に勝つ鉄則は……敵が最も嫌がる事をやり続ける事。

そのために必要な要素・パラメーターは、類い稀なる『頭脳』。

こいつが味方で本当によかったぜ。こうも、カンに障る事をやられてたら、俺やアリアは一発でダウンだ。

「…… ケツ、精々余裕ぶっこいてろよ」

キヨウに睨みを利かせながら、ペツと床に唾を吐き捨て、理子が立ち上がる。

「うん？ どういう意味だい？」

「お前には時間がないんだらう？ あたしには分かる。そろそろ眠くなってきたんじゃないか？」

「…… さーて、何のことかな」

キヨウの睨みがウト、ウト、と、今にも閉じようとしている。

理子は俺やキヨウと同じ探偵科に在籍していたから、知っていて当然か。

キヨウもとい零にとつて最大の弱点——『脳の疲労』。

あいつは類い稀なる頭脳を持っているが、同時に異常なまでに疲労しやすい。

今のような激しい戦闘、緊迫した状況下では短時間でしか行動できない。

理子のヤツ…… キヨウに激しい戦闘をさせて、疲労して動けなくなった所を狙う

気か…… ！

「ちよつとキンジ！ どうしたつていうの？？ キヨウつたら、今にも眠ちやいそうな感じ  
 なんだけど…… ！」

「うぶぶぶぶ、ほらほら、そのまま眠ちやいなよ！ 眠りにくいなら、あたしが手伝つてやるよ——永眠のな」

瞼だけでなく、頭までもガク、ガク、と上下に揺れて、必死に踏ん張りを効かせる足は、ふらふらと揺れて頼り甲斐がなく、今にも倒れそうな雰囲気濃厚だ。

まずい、そろそろ活動限界か。

加勢に入ろうと、近づくと俺をキョウは手を広げて止まるー来るな、と言っているのか？

俺がその場に立ち止まっていると、

ーカラカラ

傾斜になっているのか、数本の酒ビンがキョウと理子の方に向かって、転がっていくと、その内の何本かが、ちょうどキョウの足元に到達し止まった。

「寝る前にアレが見たいなー」

「アレって何さ？最後の言葉として聞いてやるよ」

理子はチャキとキョウの額にワルサーを構える。

「アレだよ。アレ……えーっと何だっけ？ああ！そうだ」

その言葉と共に、突然、キョウは足元に転がった酒ビンの一本を理子に向かって、思い通り蹴っ飛ばした。

パリン！と音を立て、酒ビンは理子の額に命中。中身の酒が理子のハニーゴールドの髪を濡らす。

不意を突かれ一瞬、理子の足がフラつくが、持ちこたえてみせた。

「この…… 舐めたマネしやがって！ さっさとくたばれ！！？」

「あつ！ やめておいた方がいいよ」

キヨウの忠告を無視し、理子がワルサーの引き金を引いた。その瞬間、  
バァン！ゴオオオオオオオオ！！？

理子の顔、正しくはハニーゴールドの髪が真っ赤な炎に包まれた。

「うわあああああああアツ！！？」

突然の事に理子はパニックを起こし、ワルサーを床に落としバタバタと手を振り回すが、それでも炎は消えない。

「ああ、言わんこつちやない。さつき君が浴びた酒は、スピリタスといって、ポーランド原産のアルコール度数95度のきつくい酒だ。そんな酒を浴びた状態で、発砲したら銃の火花で引火するのは目にみえてるけど」

理子が放った銃弾を至近距離で躲したが、掠めたのだらうーキヨウの側頭部から、さらに血が、ドク、ドク、と水のように垂れ流し状態だ。

「落ち着いて説明してる場合か！！？」

「早く消すわよ！ キンジ、その上着脱ぎなさい！」

アリアはバーカウンターから飛び出ると、水割り用のミネラルウォーターを片手に、

炎に包まれ、床でのたうち回る理子にぶっかけた。

火は鎮火するかと思えたが、まだ微かに燃えている。

俺は制服の上着を脱いで、バサバサと理子の髪を叩いてやると、ようやく火は消えた。

「えーつと、この場合はなんて言うんだっけ……峰・理子・リュパン4世ー」

「ー殺人未遂の現行犯で逮捕するわー！」

「……私のセリフを取らないでよ」

キヨウはじつと目でアリアを睨むが、本人は理子に2丁のガバメントの銃口を向けるだけで相手にしない。

「……（やり過ぎじゃないか？）」

理子のハニーゴールドのツーサイドアップは真っ黒に焦げて、メデューサの髪のように蠢く様子はない。

髪だからよかったもの、顔の場合、下手したら一生火傷の痕が残っていたぞ。

理子は黙って俯いたままだったが、

「ひどいねー、キヨウたら女の子の髪に火をつけるなんて、今時、学校のいじめっ子でもやらないよ」

「いやー、ごめんね。最初はやるつもりはなかったんだけど、りこりんが問答無用で発砲してくるもんだから、ビビって思わずやつちやつた。顔は無傷だし、許してね」

キヨウが顔を指差すと——理子は…… にやあ——、満面の笑みを浮かべて俺とアリアを交互に見た。

「アリア、キンジ。キヨウにすっかり出番を取られちゃったね。本当ならアリアと戦いたかったのに——アリアアつたら、キンジに引ッ付いてばかりだったし」

「う、うるさいッ！それは、このバカキヨウが飛行機をメチャクチャに動かしたら……！」

「金次君、りこりん到手錠を」

「あ、ああ…… 峰・理子・リュパン4世。お前を逮捕する」

キヨウの指示に従い、俺は理子の腕を掴んで、その手に手錠をかけようとした。その瞬間——

「ぶわあーか」

憎憎しげに言うのと、理子は焦げた髪を…… わさわさつと全体的に蠢かせた。

その異様な光景に、対応が遅れる。

——髪の中で…… 何かを操作している!!??

「金次君!!? 取り押さええるんだ！」

キヨウが叫ぶ。

俺は理子を取り押さえようとした。その、瞬間——



ドドオオオオオツツツ!!?

轟音と共に、今までで一番激しい振動がANA600便を襲った。

突風や落雷とは明らかに違う、機体を巨大なハンマーで2発殴られたような衝撃。

「ばいばいきーん」

次の瞬間、理子は脱兎の如く俺たちの間を抜けて、バーの片隅——窓に背中をつけた。俺たちは詰め寄ろうとするが、

「くふっ。みんなー、それ以上は近づかない方がいいよー?」

に、と理子が白い歯を見せる。

壁際に理子を取り巻くようにして、丸く輪のように粘土状のもの——おそらく、爆薬——が貼り付けてあった。

いつの間にか仕掛けたんだ!?!?

「ご存じの通り、『武偵殺し』は爆弾使いですから」

俺たちが歩みを止まるのを見て、理子はスカートをちよこんとつまんで少しだけ持ち上げ、慇懃無礼にお辞儀してきた。

「ねえキンジ。この世の天国——イ・ウーに来ない?——人ぐらいならダングダムできるし、連れていってあげれるから。あのね、イ・ウーには——お兄さんも、いるよ?」

「…… 仮に兄さんに会えるとしても、俺がイ・ウーに行くなんてことはあり得ない。

俺は武偵としてやっていく。今も、これからもずっとな！」

俺はハッキリと宣言してみせる。

理子の話が本当だとして、兄さんがイ・ウーにいるなんて……何か思惑があつての事か？

兄さんの事は凄く気になるが、武偵として必ずこの疑問を解いてやる。

「ふうん、そんなに真つ直ぐな目をするなんて、そこにいるキョウウのおかげかな？」

理子は視線をキョウウに移す。

キョウウは血の垂れる側頭部を手で押さえている。

「そこからスカイダイビングでもするつもりかい？」

「逃げようたって、そうはいかないわよ！」

今すぐ取り押さえたいが、理子の背後には爆弾が仕掛けてあり、不用意に動けない。

「そんなに吠えなくても改めて決着をつけてやるよ、オルメス。あとキョウウ……いや、レイ」

獣の目で、キョウウー今度はハッキリと零の名前を呼ぶ。

『教授』はお前を高く買っているぞ。自分の仕掛けた事件を解決出来るか、試させる程にな……」

『教授』——話の素ぶりからして、イ・ウーの頭目の事か？

「へえー……：：：：： そういう事だったんだ。じゃあ、その『教授』に伝えてよ。『アナタを破滅させられるなら最高だ』ってね」

「くふっ！ そういえば『教授』から伝言を頼まれてたよ。レイがそう言ってきたら、こう返してやれて『悪巧みは止せ。近いうちに破滅するよ』って」

理子を介して『教授』と呼ばれる第三者が、この場にいるかのようだった。

「ちよつと待ちなさいよ！ 2人して何を話してるのよ!? 『教授』って、それにレイってどういう事よ!??」

「あー、もう。横からキャンキャンうるさいなく。じゃあね、キンジ。あたしたちはいつでも、みんなを歓迎するよ? ーレイ以外はな」

ドウツツツ!!!

いきなり、背後に仕掛けていた炸薬を爆発させた!

「ー！ー！ー！」

壁に、丸く穴が開く。

理子はその穴から機外に飛び出ていった。パラシュートも無しでー！

俺は手近な窓にしがみつくようにして、外を見た。

そこにはーくるくるくるるっ、と宙を舞うようにして遠ざかる理子が見えた。

ばっ。

理子が背中のリボンを解くと、スカートとブラウスがパラシュートになっていく。

そして最後には、下着姿になった理子がこっちに手を振りながら雲間に消えていった。

「用意周到だね、リュパンか彼女は……って、実際にリュパンだったね」

窓にしがみつき、消えていった理子をキョウは静かに眺める。

「くだらん事を言ってる場合か。早く窓から離れろ」

室内の空気が一気に引きずり出されるようにして、窓に向かって荒れる。

キョウを窓から離れさせ、床に据え付けられていたスツールにしがみつく、天井からは自動的に消化剤とシリコンのシートがばらまかれてきた。

とりもちのようなそのシートは空中でべたべたとお互い引っ付き合い、理子が開けた穴に蜘蛛の巣を張るようにして詰まっていく。

「これで機内の気圧減少は防げたね。これからどうしようか？」

「それよりもアンタ、大丈夫なの？ さっきから血が止まらないんだけど」

アリアの指摘通り、キョウの側頭部からは未だに血が流れてるままだ。

「あつ……忘れ……て……た」

ドサツ！

緊張が解けたのか、キョウは床に力無く仰向けにぶつ倒れた。

「オイッ！キョウ！しつかりしろ…… 目を開けるんだ！」

肩を叩いて意識確認を試みるが応答がない。

おそらく『脳の疲労』も合わさって、完全に気を失っているのだろう。

気を失っているキョウのこめかみの上、金髪のカツラの中には、深い切り傷がついていた。

まずいー側頭動脈をやられている。

「しつかりしなさい…… 傷は浅いわ！」

武偵手帳に挟んであった止血テープを塞ぐ時、俺はふつと手を止める。

キョウの顔は特殊マスクだ。マスク越しでは傷をうまく塞ぐ事ができない。

(すまん、キョウいや、零)

心の中で零に謝罪を入れ…… ベリベリッ。

その顔面に被せていた、特殊マスクを剥いだ。

中からは出てきたのはーずっと見慣れた零の顔があった。

「…… ツ！こいつ、レイじゃない!? キョウがレイって…… 理子が言ってたのは

そういう事だったのね!!? 2人してあたしを騙して……!」

「あー！気持ちは分かる。本当に分かるから今は黙っていてくれ」

キョウの正体を知ったアリアを黙らせ、零の傷をとにかく塞ぐ。

しかし、その場しのぎにしかならない。

「ちよつとキンジ！レイたら、息してないわよ」

零の口に耳を当て、呼吸を確認するアリアが血相を変えて叫ぶ。

俺も零の口に耳を当て、呼吸を確認するが……息をしていない。

「頭を押さえてくれ。心臓マッサージする」

セーラー服の胸元に、俺は手をかけてブラウスのジッパーを乱暴に下ろし、左右に開けた。

「うお……」

あの、過激で真っ黒な下着が露わになった。

真っ白な肌。薄布一枚で守られている、凛々しい、女の子の胸。

ときん、と俺の胸が跳ねる。

「いやらしい目でジロジロ見てんじゃないわよ！」

キーン！と耳元でアリアに怒鳴られ、ハッと我に返る。

こんな時に不謹慎も甚だしい。

でも、ああ、チクシヨウ。

ーグッ！グッ！グッ！グッ！

心臓マッサージの間を空けず40回繰り返すが、意識は戻らない。

簡単に死ぬると思うなよ……！！

再び心臓マツサージを開始する。

「戻ってこい……！！オイツ！戻ってこいよ！聞こえてるんだろう？！このバカヤロウ！！？」

思わず怒鳴らるが、零は目を閉じたまま動かない。

「グッ！グッ！グッ！グッ！」

「ちゃんと聞こえてるんでしよう！返事しなさいレイ！！？」

アリアも叫ぶが、零からは応答はない。

クソたれ……これで終わりなのか。一緒にイ・ウーの壊滅を見ようって、約束したじゃねえかよ。

心臓マツサージする手を止めようとした時、俺の頭の中である出来事が思い浮かぶ。

「――進級祝いだ……！！」

俺は半なヤケクソ気味に、武偵手帳のペンホルダーに指を突っ込んだ。そこから、『ZERO Razzo』と書かれた小型の注射器を取り出す。

「それラッツォ？あたしが知ってるのとは違うみたいだけど」

「零が俺にくれたモノさ」

一般のラッツォと違い――零特製のコレは彼女曰く、羊の副腎から抽出したホルモン

と牛の肝臓で作った復活薬らしい。

効果に関しては、彼女の部屋で直接、目の当たりしている。

「打つだけよ。ヘンなことしたら、風穴あけてやるんだからね」

ラッツオは心臓に直接打つ薬だ。これは必要悪だ。

零の真つ白な肌に、震える指を乗せる。

綺麗な白いキャンパスのような胸に指を這わせ、胸骨を探し当てる。

そこから指二本分、上ーここが心臓だな。

ぐさッー！

殴るように、注射器を突き立てた。そして……

「うわあああああああ!!? ああ、あああ? うおあああああああ!!?」

がぼっ！

ゾンビ映画のように飛び上がり、悲鳴を上げながら機内を走り回る。

「ああ、ヒドイ夢だった……君がアリアとレストランで、ナイフとホークを持って、私

のお腹に乗って襲ってくるんだ……私に何を打ったんだい?」

落ち着いてきたのか、零はその場に座り込んで息を整えている。

そんな零に俺は、

「進級祝、いっせ」



空になった注射器を見せてやる。

まさか、自分で作った薬を、自分に試すことになるとは夢にも思えない。

「誰か胸の上で踊ったでしよう!?!」

興奮気味の零に俺は冗談半分で「俺だよ」と言ってみよう。

「……私にバカヤロウって言ったでしよう?言ったよ!?!その顔は絶対に言った

!!?」

俺を指差し、聞いているこっちの耳が痛くなるような大声で叫ぶ。

バカヤロウって、お前やっぱり意識があつたんじゃないのか?

俺に言いたい事が空になったところで、

「……ねえ、アリア。ちよつといい?」

アリアに顔を向けて、何か言いたげだ。

どうしたんだ?

「何よ?言いたいことがあるなら、ハッキリと言いなさいよ」

「……騙っていて悪かった」

「!!?」

俺は夢を見ているのだろうか!?!

あの零がアリアに、謝罪しただと、!?!

「な、何なのよ突然…… あんた、頭でもおかしくなったの？」

アリアは動揺している。

当然だ。あの零が本当に申し訳ない態度で面と向かって、自分に謝罪を入れてきたのだから。

「それと、車での一件もごめんね。私もその…… 言い過ぎた」

「本当にどうしちやったのよ！ あんた、き、き、気持ち悪いわよ……！」

ゾワゾワ！

アリアの全身に悪寒が走るのが見てわかる。

その気持ちは俺にも分かるぞ。

こいつ、本当に零か？ まさか、誰かの変装じゃないだろうな？

思わず零の顔を抓りたくなるが、止めておく。

「本当にごめんなさい」

ぺこりと、零が頭を下げてきた。

ああ、本当に夢に思えてきたぞ。

「もう分かったわよ！ 許してあげるわ！ だから、頭を上げなさい。もう十分だから」

アリアは零の謝罪を受け入れた。いや、これ以上受け取りたくない気持ちが大きい。

「…… あたしの方も悪かったわよ。あんたの愛車ーポルシェだっけ？ 風穴だらけ

にして…… 理子に払わせたい所だけど、ふ、不本意ながらあたしの方で弁償してあげるわ」

「ふんー」とそつぽを向いて、もう何も話したくないご様子。

そこは素直になってもいいのにな。

微笑ましい光景を眺めていると、ゴソゴソと零がスカートのポケットに手を突っ込んで何かを操作している。

ーピーッ!

ん?この電子音は聴き覚えがあるぞ。

これは…… ボイスレコーダーの停止音に類似しているな。さては……

「今の発言に二言はないよね?」

「…… どういう意味よ?」

「何でもないさ♪」

イタズラが成功したようなお茶目な顔をしてアリアの質問を晒す。

こいつ…… さっきのアリアとの会話をちやつかりと、録音してやがったな。

アリアにキツチリと弁償させる為に、ボイスレコーダーまで用意するとは、本当に抜け目ない。

アリアは未だに何が何だか分からない顔だ。

後で後悔するなよ。

俺がアリアの未来を案じていると、いきなり零はスツと立ち上がって、

「さて、冗談はこのくらいにしてと……これからどうしようか？」

「オイッ!??すぐに立ち上がるな。まだ、ジツとしてろ」

慌てて俺は零の肩を掴んで床に座らせようとするが、嫌とばかりに零は抵抗を続ける。

ええい！大人しく座つてろ。また倒れては堪らん。

「いやだー金次君に襲われるー」

「三文芝居をやつてないで大人しくしろ！お前は怪我人なんだぞ」

「あんた達……あたしの前でイチヤイチヤしてんじゃないわよ!!?」

ゲシッ！ゲシッ！

俺らのやり取りが気に入らないのか、アリアが俺と零の脛に渾身の蹴りをお見舞いする。

イテッ!??ピンポイントに蹴りやがって……

あまりの痛さに俺と零は脛を抑えて、その場に蹲る。

アリアが床に伏せる俺らを見下ろすようにして、

「そのバカレイの言う通り、これからどうするか行動に移すわよ」

「アリア…… よくも蹴ったね。お父さんにも蹴られたことないのに」  
「ーだからお前はもう黙って座ってろ。」

そこは殴られた事ないのにだろうが。つて、俺は何をやってんだ。

「まあ確かに、アリアの言う通り行動に移そうか」

おふぎけがウソのように突然、零が真面目になり、指で床をトントンと叩き、何かを思考にしている。

「もうアリアも気づいているよね？この飛行機は……」

「奇遇ね。あたしも同じ事に気付いていたわ」

ガツケン

2人の会話を待つていたとばかりに、急に飛行機が揺れる。

いや、揺れだけじゃない。下に、下にと、急降下しているのだ。

「まさか…… あの一番激しい振動の正体は……！」

俺は立ち上がり、窓から祈るような気持ちで翼の方を見た。

悪夢のような連動を受けながらもーANAN600便は、何とか持ちこたえていた。

翼は2基ずつある左右のジェットエンジンのうち、内側を1基ずつ破壊されていたが、外側にある残りの2基は無事だ。

辛うじて飛んでいるが、このままではいずれ墜落する。

「早く操縦席に行くわよ。キンジ、付いてきなさい。レイはそこで大人しく待機！」  
指示を飛ばして、アリアはコックピットのある2階に走る。

俺も後を追って走ろうとすると、グツと零が制服の袖を掴んできた。

「どうした？何処かまだ痛むのか？」

「そうじゃないよ……その……えーっと」

モジモジと言葉が口の中に留まって、肝心の台詞が出てこない。

おまけに、ペタンと女の子座りして上目遣いで、俺の目をジツと見て逃さない。

か、可愛い………こんな零は見た事がない。

ーードクン。

体の中心がむくむくと強張り、ズキズキと疼くような、この感覚。

灼けたように熱いそこから、堪えきれず、何かがほとぼしりそうな気がする。

おい、こんな時にヒスるのか!?!?

「早く学校に帰ろう。このデカブツを地上に下ろしてからね。大丈夫、金次君ならでき  
るさ」

「あ、ああ、無事に下ろしてやるから大人しくしてろ」

鼻を押さえて、逃げるように零を置いてコックピットに急ぐ。

後一步でヒスるところだった。

その後、ANA600便は盛大に燃料漏れを起こしていることが発覚する。

羽田に引き返そうとするも、ハイジャックの報道を聞き付けた防衛省により、空港は封鎖。

防衛省に言われて、海上に出て千葉方面に向けて操縦桿を切ろうとしたアリアの手を握って止めた。

その際、口論になり誤ってアリアの口を、俺は。塞いだ。口で。

そしてこれは、諸刃の剣で――過去最高のヒステリモードに生まれて初めてなった。

また、騒ぎ出すかと思ったが、それはなく脱力しきっていたので、アリアに海に出たら、撃墜される、むこうは嘘をついている事を説明し、ヒステリモードの機転で横浜を飛び越え、東京都に入り学園島――空き地島に緊急着陸することを決行。

地上にいる武藤たちの協力の下、着陸を実行――成功した。

着陸後に分かった事だが、ANA600便の貨物室のハッチが誤作動なのか開いており、中に積まれていたと思われた荷物類が全て無くなっていた事が判明。

空からまた降ってきたー今度は2人して仲良く

飛行機事件から翌日、女子寮の前の温室にてー

いつも人けがなく、秘密の打ち合わせには便利な場所で私はモランに呼び出され、

「主…… 何か言うことはありますか？」

「ごめんね」

バラ園の花壇をバックにモランの前で正座していた。

別に正座は苦じやないけどさ…… チラツとモランに視線を向けてみる。

彼女はゴゴゴという効果音が聞こえてきそうな目つきで、姿勢と身長差が相まつてか私を見下ろしている。

うわー、メチャ怒ってる。原因はやっぱりアレかな……

「何の用意もなく、しかもお一人で、爆弾積んだ飛行機に乗り込むとは…… 馬鹿なのですか貴女は？」

「全くその通りです」

冷や汗が出ながらもモランから目を逸らし、思わず花壇に咲く薔薇を眺める。

薔薇が綺麗だねー、じゃなかった…… やっぱり飛行機の一件か。



「おまけに爆弾を東京湾に投下するなんて、後から回収するの大変だったんですよ」

りこりんこと峰・理子・シユパン4世が退場した後、飛行機に搭載してあった2000ポンドクラスの爆弾の始末が問題だった。

万が一、着陸が失敗すれば大惨事もとい私もお陀仏だったし、脱出しようにも生憎とスカイバイブの用意はない。

『イ・ウー』が絡んだ事件で政府からもみ消される事は知っていたが、”関わった人間の記憶には残る”。

出来るだけ証拠は残したくはない——苦肉の策としてハッチから東京湾に爆弾を投下した。

「私はその投下ポイントに居たんですよ！主の命令でステインガー片手にボートで東京湾を漂って暫くして——上空を飛行機が過ぎると同時に、いきなり爆弾が降ってきたんですからね!!?大慌てで海に飛び込こみましたよ」

「本当にごめんね！でも、爆弾の信管はダメにしておいたから、爆発はしなかったですよっ？」

今ならモランに土下座してもいいと思える。

狙ったわけでもなく、彼女の真上に投下するとはある意味で凄惨確率だ。

私の謝罪を受けたのか、モランは「はあ」と軽くため息をして、

「爆弾の件はもういいですよ。主が無事で本当によかったです」

さつきまでの怒りが嘘のように冷めていく。

おや？これは許してくる雰囲気ほいぞ。

「まあ、私も独断し過ぎたと反省してるよ」

「……… 本当ですか？」

ギロリッ！

ライオンも尻尾を巻いて逃げ出しそうな眼つきで、私を射抜くように睨みつける。

こ、怖い……… まだ許してくれてなかった。観察眼が曇ったかな？

「自分は主に自分の全てを捧げたつもりです。だから、お一人で解決せず、もっと

私……… いいえ、仲間を頼ってください」

言葉の中に私に対する気遣いが見え隠れしているのが分かる。

「主にもしもの事があれば、私だけじゃなくジャックさん、アップル、そしてあの馬鹿二

人組も悲しみます」

モランの目から涙が滲み出でている。

私は彼女に心配かけ過ぎていたのか。だから、あんなにムキになって怒っていたんだ

ね。

「本当にごめん。あの時は自分でも信じられないくらい突発的だったよ」

私は立ち上がってモランの涙を指で拭いさつてやる。

彼女の方が私より少し身長があるので、つま先立ちする形にはなるが。

「よし！じゃあ、これからはモラン達の力を大いに使わせてもらうよ。『イ・ウー』がアレで終わりにすると思えないし、ここから激戦になるだらうからさ」

「無論です。私の全ては主の為にありますから」

モランは王に忠誠を誓う騎士さながらの儀礼を試みせる。

「それはそうと……主は何故、お一人で飛行機に？」

うん？どうしたんだか、モランの雰囲気ガラリと変わったぞ。

前にもこんな現場に立ち会ったような……

「あー、それはね。金次君が突然、飛行機に乗り込むなんて言い出すからさ」

ビキツ!!?

私の説明を合図にモランの顔が死んだ。

あれ？私は何かいけない事をしたのだろうか？ただ、理由を述べているだけなのに。それからも淡々と理由を述べていく度、モランから表情が消えていく。

数十分後――

「……………まあ、そういう訳で彼がいる事で計画がパアになっちゃって」

「成る程…… 成る程…… 成る程…… 成る程…… 成る程」

私の説明を最後まで聴き終えると、モランは壊れたテープレコーダーのように同じ単語をブツブツと呟く。

モラン、少し怖いよ。

「おーい、モランちゃん、聞こえてるー?」

ブンブンと彼女の目の前で手を振ってみるが、モランは何処か上の空だ。

「ええ、聞こえてますとも…… 遠山キンジこそが主の計画を台無しに追い込んだ元凶だと」

モランの目に決心の炎が灯る。

「いやいや、別に私は気にしてないよ?寧ろ私のミスー彼の行動を頭に入れてなかった。それに金次君が原因で計画が台無しになったの今回が初めてではないよ」

「なんですって!!?やはり、遠山キンジは主の敵ではないですか!」

「だから違うって」

金次君が原因で計画が台無しになったの別に今に始まった事ではない。

彼の後先考えず突っ走る行動で計画が台無しにはなったが、寧ろそれで犯罪者を逮捕に追い込んだ。

中には始末しておきたいホシもいたが、別の形で事件を解決できた。

「金次君は関係ないよ。だから、この件はコレでお終い。いいね？」  
「……分かりました。ボソツ（遠山キンジ ブツコロス!!?）」

念を押して金次君は関係なしと述べる。

最後に余計な事が聞こえたが、気のせいだろう。

話を終えて薔薇園を後にしようとした時、モランから呼び止められた。

「あの、主……折り入ってお願いが……」

モランが顔を赤く染めてモジモジしている。

普段のキリツとした態度とは違って、可愛いく見えるね。

それにしても、モランが私にお願いとは珍しい。

「どうしのかな？ 遠慮せず話してごらん」

「は、はい！ 実は……その、今度時間が空いてる時で結構なので……私と

デー……じゃなかった、どこかに出かけませんか？」

恥ずかしがりながらモランが私を遊びに誘ってきた。

そういえば、最近仕事ばかりでモランに構ってあげられてなかったね。

頭の中でスケジュールを確認してみると、幸運な事にいくつか予定が空いていた。

「いいよ。何処に出かけようかな……そうだ！ 思い切って、○イズニールランドに行こ

うよ。2人きりで」

「2人きり……!!?約束ですよ!嘘ついたら徹甲弾1000発飲ませますからね!」

ハアハアと舌を出し、尻尾を振る犬のように私に詰め寄る。

徹甲弾1000発って、そこは針千本飲ますでしょう?どちらにしても嫌だけど。

モランとの約束を最後に今度こそ薔薇園ービニールハウスを後にしようとした、次の瞬間。

がっしやああん!

ビニールの屋根を突き破ってー金次君とアリアが降ってきた!

なんで2人が空から降ってくるのさ!?

びりがしや!

ビニールの屋根がクツシヨンになるーかと思っただが。

2人はそのまま屋根を突き破り、温室の中に落っこちるーもう離さないとばかりに、抱きついた状態で。

「……2人して何やってんの?」

「零!?なんでお前がここにいるんだよ。もう身体はいいのか?てつきりまだ病院にいるか?」

「レイですって!?ちよつと、何ジロジロこっち見てんのよ!」

2人仲良く密着した状態で心配されても嬉しくないよ。

ご心配なく、身体は完全に回復したさ。

ジーと座った目で2人を眺めていると、

「遠山キンジ……ブツコロしたらああああああああああ!!?」

モランが金次君に殴り掛かる。

ただ真直ぐに「うおおおおお」と雄叫びを上げ、金次君に突撃する。

「うわっ!!?なんだよコイツは!」

「ここで会ったが100年目!主の為に今すぐ死ネエエエエエエエ!!?」

「キンジ!何とかしなさい!この子ったら、目がイっちゃってるわよ!」

「無茶言うな!!?零、助けてくれ!」

金次君の必死のSOSに対して、

「モラン……取り敢えず、100発は殴っちゃって♪」

「分かりました。くたばりやがれエエエエエエエ!!?」

「裏切つたな零いいいい!!?」

ドゴツ、ドスツ、ボスツ、ドンツ、ボコツ、ボゴツ、ガツ!

温室内に金次君の絶叫がこだまする。

今度2人して抱きついたら、野球、させるか♪

## 魔劍殺し編

### 会いたかったのは巫女さんで

薔薇園でのやり取りがどうなったかというところ、金次君はモランから馬乗りになされ、パンチをもちに食らいまくった。

モランはそれはもう殴る、とにかく殴る。積年の恨みたつぷりとばかりに金次君を殴った。

怒りに身を任せたパンチとはいえ、ボクシング経験者の私から見てもストレートパンチは見事だった。いいセンスだ。

100発殴った辺りで、このままでは流石に金次君が死んだしもうと思いきやアリアと一緒に止めに入ったがね。

それから暫くして、アリアは金次君のヒステリアモードの切り替えの鍵を探る名目の下、なんと金次君の部屋に戻ってきてしまった。

その夜アリアから半ばパシリの形で桃マンを買いに行かされた金次君に何とか付いていった帰り道。



「イテテ……なんで俺が殴られなきやならん？」

「さあね、自分の胸に聞いてみなよ」

松本屋の桃まんとうなぎまんの入った紙袋片手に、まだ痛むのか、金次君はモランに殴られて腫れた顔を撫でながら歩く。

そんな彼を尻目に私が隣を歩いてみると、

「まさかお前、ヤキモチ焼いているのか？俺とアリアが抱きついたからって。前にも言つたが、あれは偶然が重なってだな……」

「聞こえなーい。聞こえませーん。ヤキモチ焼いてませーん」

わざとらしく話を振ってきた。

ヤキモチとな？この私ができるわけないよ。ただ、あの光景が気に入らなかつただけさ

！

「お前と薔薇園にいたあいつは誰なんだ？俺の事をやけに恨んでいたみたいだが」  
「過去に振つた女の子の一人じゃないの？」

モランの正体が気になっている様子。

そんな金次君に、私はニイと嫌味たつぷりの笑みを浮かべる。

「あんな奴は知らん。会つたこともないし、付き合つた事もねえよ。つーか、絶対に知つてるだろう」

「あの子は私の戦妹だよ。理由は知らないけど、やけに君の事を嫌ってる」

「お前に戦妹がいたなんて初耳だぞ」

「君に戦妹がいるように私にもいるさ。そういえば、君の戦妹のヒナちゃんだっけ？あの子とはうまくやってる？」

金次君には風魔ヒナという戦妹がいる。

名前から分かるように風魔という忍の末裔だそう。

忍の割にどじつ子っぽい所があつて可愛いんだよね。今度会った時あん饅あげよう。

「あー、まあな。向こうは俺の事を師匠と呼んでくるから迷惑してるが」

「そんな事を言わない。それだけ慕われてる証拠だよ」

慕われてる本人はこんなだけ。

「おい。今バカにしなかつたか？」

「気のせいさ」

ムツ……最近、やけに鋭くなってきたな。

「それはそうと、アリアはやけに上機嫌だったね。なんかいい事でもあつたのかな？」

「買い物に行く前の事を思い出す。」

アリアの晴れ晴れとしたあの顔は一体何だったのだろうか？

「話を逸らすな……何でもロンドンに帰る直前になって、自分の曾じいさんの無実が

晴らされたそうだーシャーロック・ホームズを知ってるよな?」

「勿論さ。私達武偵の始祖にして、世界唯一の顧問探偵」

探偵科で嫌という程、勉強したから知っているよ。

偶に彼の捜査方法を有意義に使わせてもらってる。

「そのシャーロック・ホームズがアリアの曾じいさんなんだが……」

金次君は歩きなが事の経緯を説明し出すーイカサマ師の疑惑を掛けられた事、それでアリアがロンドンに帰ろうとしたなど、私はそれを適当に聞き流す。

なんでかって?それは勿論、全部知っているからさー私がそう仕組んだ。

「ふくん、そうだったんだね。学校での騒ぎの原因の身内だったか」

「原因つて、ホームズを犯罪者のように言うなよな。当の本人ーアリアには特にな」

「ホームズの無実はどうやって晴らされたんだい?」

そこが一番気になった話題だ。

ロンドンのルイスの働きかけにより、これでもかとホームズをイカサマ師に仕立て上げたのに、ここ一番になって無実が晴らされたるなんて、想定外のことだ。

ルイスはロンドンでなく、他国の報道機関にも影響力が強い。そんな彼の仕立てたネタを消してみせるなんて……

「さてな。だだの武偵の俺には分からんよ。アリアに直接聞いてみるか?」

「止めておくよ。古傷を抉る真似はしたくないし」

非常に気になるが、今は止めておこう、——『イ・ウー』のこれからの動向が気になるし。

そんな風に話していると、男子寮に到着した。

金次君の部屋に上がると、リビングのソファで、

「遅い！ももまん買うだけで何分かつてるのよ。さては2人してイチャイチャしてたのね！」

コレだよ。

がーうと子ライオンの様に吠えて、人が桃まんを買ってきたのに感謝の一言もないアリアがそこにいた。

「してねえよ。お前な……それ食ったら帰れよな。ここ男子寮——」

「あたしに言う前にそのレイに言いなさいよ。それに言ったでしょう。あんたの力の秘密を解くまで帰らないって」

アリアは数多の犯罪者を手錠にかけてきた武偵である——推理の方はからきしだけどね♪

このやり取りを見る限り、意地でも帰らないつもりだ。

金次君の秘密をアリアは知らず、私だけが知っている——これぞ、まさに愉快!!?

「まあ、いいじゃないか金次君。好きにさせてあげればさ。アリアもコレ食べて機嫌直  
しつ」

ガサゴソと松本屋の押印が入った紙袋から適当に、饅頭をアリアに手渡してやる。  
「あら、気が利くじゃない」

口から鋭い八重歯を覗かせてパツクつと齧り付くと、

「ん もごっ!?こ……これ……もまんじやにやい……！」

「あつ、それ俺のうなぎまんじやねえか」

「はははははは、ひっかかった！ひっかかった！」

ふる。ふる。と震えてマヌケな顔のアリアを指差す。

私が手渡したのは桃まんではなく、金次君の買ったうなぎマンド。

「ちよツ……何ってモンを食わせんのよ！」

「金次君が買つてあげたんだがら有り難く食べなよ」

「いや、ソレは俺の分だからな」

「いいじゃないか。細かい事は気にしない。これでよし！」

「よくない！こんな磯臭いのよくも食べさせてくれたわね！」

「騙された君が悪いんだよ！バーカバーカ！」

武偵たる者騙された方が悪い。

桃まんを本当に好いているなら食べる瞬間に気づけ。

「うるさいうるさい！口答えするな奴隷2号のクセにッ！」

「いつ私が君の奴隷になったんだよ！」

アリアが身に覚えのない事を言い出したので反論する。

奴隷って、つまりは君のパーティーの一員って意味かい？断固お断りだね！

私達が睨み合いをする中、いつの間にか部屋の隅に避難していた金次君が携帯の画面を開くと急にガクガクと震え始めた。

「アリア、レイ、に、に、に、に、逃げろッ！」

「な、何よ。なに急にガクガク震えてんのよ。キ、キモいわよキンジ……………」

「そ、そうだよ。何さ狼を前にした子鹿のように震えて。大丈夫かい金次君」

「ぶ、ぶ、『武装巫女』がーうッ。マズい……………来た……………！」

どどどどどどど…………… !!?

猛牛が突進しているかのような足音が、マンションの廊下に響き渡っている。

近づいて、しゃきん!!?

金属音と共に、玄関のドアが切り開けられた。

そこから姿を現したのはー巫女装束に額金、たすき掛けという戦装束に身を固めたー

「白雪！」

さんだった。

白雪さんは息をぜーぜー切らせながら、ばつつん前髪の下の眉毛をつり上げている。

「やっぱリーーいた!!? 神崎! H! アリア!!?」

「ま、待て! 落ち着け白雪!」

白雪さんはこうやって、パーサーカーになることがある。

そしてこういう時、金次君の周囲にいる女子が攻撃を受けるのだー私は例外だよ。

「この泥棒ネコ! き、き、キンちゃんをたぶらかして汚した罪、死んで償え!!?」

白雪さんは携えた日本刀を上段に構える。

「や、やめろ白雪! 俺はどっこも汚れていない!」

汚れてないとな? 本当にく?

陥った状況とは裏腹に、そんな事が頭によぎった。

星伽白雪さんは、大和撫子だ。

つやつやした黒髪ロングのおしとやかで慎ましい、古き良き日本の乙女。

炊事・洗濯が上手で、私も大いに助けられている。特に洗濯に関しては彼女の知恵袋

を借りるくらいだ。

……  
本来はね。

その彼女が鬼の形相で今まさに、日本刀を振り上げて、

「ア、ア、アリアを殺して私も死にますうー！」

なんて叫ぶことは、決してしない子なんだけどなー。

しかし、アリアを殺すときか……殺すなら勝手に殺しなさい！私は巻き込まないでね！なんちゃって♪

「だから何であたしなのっ！やるならレイにしなさいよ！」

神崎・ホームズ・アリアにも、白雪さんが自分の命を取りにきたのか、分からないみたいだ。

どさくさに紛れて、私に振らないですよ。白雪さん、私は殺さないで！アリアは殺していいけど。

「白雪！お前、なに勘違いしてんだっうおっ!?？」  
がすっ！

弁明しようとならに出た、金次君の背中をアリアが思いつき蹴っ飛ばした。

金次君は廊下の壁にぶつかり、転倒してしまう。

何故、そこで彼を蹴るの!??



「キンジ、レイ、なんとかしなさいよ！あんた達のせいでヘンなのが湧いてきたじゃない！」

「俺（私）のせいじゃねーよ（ない）！」

心境は同じかー金次君と見事にハマった。

「そう！キンちゃんと零さんのせいじゃない！キンちゃんは悪くない！零さんも悪くない！悪いのはーアリア！アリアなんか、いなくなれえーっ！」

あつ、コレはあかんやつだ。

私はこれと似た体験をしたことがある。

あれは去年、金次君とオペラ座を観た帰りの出来事だった。私と金次君を尾行し、その様子を見ていた白雪さんが暴走したのだ。

アレと状況が似ている。私の読みが正しければ、この後、起きる事といえど……

「天誅うーっ！ーッ！」

やっぱりね！

金切り声をあげた白雪さんは、下駄をカカカツと鳴らして突進し、ぶうんっ！

いきなり、アリアの脳天めがけて刀を振り下ろした。

ああ、土足で上がっちゃダメだよ。

「みゃっ！」

ネコ科の珍獣みたいな声を上げたアリアは、ばちいいいつ！

白雪さんの日本刀を、左右の手で挟んで止めた。

ほう、真剣白刃取りか。

久しぶりに見たね。モランが実践してくれたのを見て以来だ。あの子は止める際、「がうっ！」とイヌ科みたいな声を上げるが。

「この、バカ女！」

アリアは刀をホルドしたまま、だんっ！がしっ！

スカートを思いっきり跳ね上げつつジャンプして、両脚で白雪さんの右腕を挟んだ。マズイ、このまま彼女の腕をねじり上げる気だ。

「加勢するよ白雪さん！」

「零さん！」

私は居ても立っても居られなり、即座にアリアの両脚を掴み、

「せーの……：…… おりやあああああーっ!!？」

息ぴったり白雪さんと一緒にアリアに、バックドロップを決めた。

同時に、床に思いっきり凹みができたが、敢えて気にしない。

だって、スカツとしたんだもん！

「ちよつとーなにすんのよレイ!!？」

手応えがあつた筈だが、アリアは即座に立ち上がつてきた。チイツ！技のキレが足りなかつたか。

「いなくなれ泥棒ネコっ！キンちゃんの前から消えろっ！」  
「向こうで頭を冷やしてこいっ！」

白雪さんと私は両足でアリアを思いつき蹴つ飛ばす。

プロレス技のオンパレードだ。

「きやうっ！！？」

アリアは、ごろごろっ、がしやしや！

居間のソファを瓦礫に変え、その下に埋もれてた。

ドロップキックがアリアに決まつたー！

「や、やめろ！やめるんだ3人ともうおっ！！？」

ここでレフリーの如く、金次君が止めに入るが、ばすんばすん！

瓦礫の下から這い出たアリアが2丁拳銃をぶつ放した。

ギギンッ！

白雪さんはその拳銃弾を、さも当たり前のように刀で弾き飛ばした。

おお、切るのではなく、弾き飛ばすときたか。オマケに金次君に飛び火しないよう心掛けされている。ジャック君にもできるかな？

「キレたーもろろキレたっーレイ！あんたにも風穴あけてやる！」

弾倉がカラになるまでばかすかと撃ちまくるがー白雪さんが全部弾く。

フハハハハ、無駄だよ！私には白雪さんが付いている。

仁王立ちして眺めていると、今度はクロスさせた2本の小太刀で私に切り込みをかけたが、白雪さんの平突きに邪魔される。

そして、ぎりぎり、罅迫り合いになる。

日本刀ー接近戦主体の白雪さんに刀で挑むとは愚かな。

「零さんこの女を刺して！そうすれば全部見なかったことにするよ」

それはイヤだ。手を汚すことはしたくないし。

「レイ、本当にやったら許さないわよ！キンジ！あたしに援護しなさい！」

アリアは金次君にヘルプを要求するが、彼の反応は、

「…… 勝手にしろ。心ゆくまで戦えよ」

気疲れた様子で頭を抑えながら、トボトボ……とベランダの方に歩いて行った。

何故、ベランダに退避するの？あつ、分かった。防弾製の物置に隠れて嵐が去るのを待つ気だな。

「私もー抜けたー。それじゃ、2人とも存分に戦いたまえ」

私もダッダッダと金次君の後を追ってベランダに出る。

「ちよつと、何処に行くのよつ！」

…… 煩いな。

私はガラガラと窓を閉めて、アニメ声を完全にカットする。

そのままベランダに設置されている防弾製の物置をガチャと開放する。

「つて!? なにお前まで来るんだよ！」

イタイタ。

案の定、そこには金次君が隠れていた。

ベランダで隠れられそうな場所といえばここくらいしかないし、当たり前だけどね。

「お邪魔しまーす」

私は一言断りを入れて、物置の中に飛び込んだ。

「馬鹿ツ！入ってくんない！」

ぎゆうぎゆう。ガチャ。

1人用の設計なのか物凄く狭い。先客の金次君と向かい合い、密着する形でどうにか入ることに成功した。

彼の胸板に自分の胸が押し付けられる。

うっ！意外と胸が苦しい。知らぬ間に大きくなつたのかな？

「なんで入ってくる？あの2人の喧嘩に巻き込まれたくなかつたら、他所にいけよ」

金次君の顔がすぐ間近である。暗がりだが、ほんのりと顔が赤いのが丸見えだ。  
ードクンドクン。

おまけに金次君の胸の鼓動も分かる。ヒスるのかい？

「だって安全地帯といえはここくらいしかないし」

少し拗ねた様で答えてあげる。

「外に逃げるなり、お前の頭ならすぐに行動できたらろう？」

金次君に行動を指摘された。

あつ！その手があつたか。我ながら間抜けだった。

「まあ、細かい事は気にしない。気にしない」

顔と顔との距離が更に近くなる。少し近づくだけでお互いの唇が触れそうな距離だ。

「待て待て。それ以上、近づくな」

両手で私の体を制するが、この狭い物置ではたかが知れている。

ぐにゆう。ぎゆう。

彼の両手が私の胸を掴む形になってしまった。

「おお。大胆だね。そんなに私の胸を揉みつけたのかい。このスケベ♪」

「ち、違う！これ、事故だ。そう、事故なんだ！ってか、お前の方から動いたせいで……」

！

テンパってる。テンパってる。

間近で見ていると面白い。どれ、もう少しからかってあげよう。

暗がりで見ていると金次君に顔を近づけようとしたとき、

ガシャン！ドガアアアア！

誰がベランダの窓を割り、物置を思いつきり倒した。

倒れる際、私は思いつきり頭をぶつけた。痛っ！記憶が飛ぶかと思ったよ。

ジャキジャキ！シャキーン！

物置のドアがバラバラに切られ、引っぱり出される形で金次君と私はごろごろとベランダに出された。

「ふふふふふふふふ、何してるのかなー、レイサーン」

「あたしとこのバカ女がヤツてる最中、2人して何やってんの！」

R指定の笑みを浮かべ、日本刀を構える白雪さんと、歯を剥き出しにして2丁拳銃を構えるアリアがいた。

まだ決着がついてなかったのかい。

「け、決して疚しい事なんてしてないぞ！」

金次君、余計な事は言わないでよ。

「してない？してないって事は、今まさにしようとした瞬間だったんだ」

「このヘンタイ！あんたもそうだけど、レイも何しようとしてんのよ！ふ、2人で物置に隠れてッ！」

アリアは兎も角、白雪さんが敵に回るのは非常にまずい。

私はその場から逃げようと立ち上がるが、スウと首筋に白雪さんが日本刀を添える。

い、いつの間に？添えられるまで気づかなかったよ。

「どこに行くの零さん？」

「弁明してみなさいよレイ」

チャキ！

アリアが私の後頭部に拳銃を突きつける。ここは大人しくするか。

両手を上げて抵抗する意思がないことをアピールする。

「白雪さんもアリアも大袈裟だよ。私と金次君は2人の喧嘩に巻きれないよう隠れていただけさ。この防弾製の物置にね」

コツンコツン。

足で物置を蹴るが、防弾製のストッキングを履いてるだけなどで、頑丈な物置を蹴るのは少し痛い。

「2人して入る必要ないじゃない。物置を盾にするなりできたでしょうが」

「真つ暗な物置の中で一体、キンちゃん何してたのレイさん？」



「別に何もしてないさ。ただ隠れていただけ。ねえ、金次君？」  
金次君に確認を取ろうとするも、俺に話を振ってくるなよ、とばかりに顔を逸らされた。

私を見捨てるの!?!?

「キンジが答えないってことは、少なくとも何かしてたのね!このヘンタイ女!!?」

「真つ暗な物置の中で……キンちゃん……2人して……私を差し置いてヒドイよおおおおお!!?この裏切り猫めツ!!?」

白雪さんの過大妄想がヒドイことになってる。

早くどうにかしないと……私が白雪さんに斬り捨てられる。彼女の目には切り捨て御免を本気でする炎が宿っているし。

私は打開策を見つける為、辺りを入念に観察する。

「女の子がはしたなく叫ぶものじゃないよ」

ハハハハと、愛想笑いを浮かべ時間を稼ぐ。

何でもいい。この状況を打開する解決策を見つけるのだ。

目だけを爬虫類の様にキョロキョロと動かして……見つけた。

「ところでアリア……」

「何よ?!命乞いなら聞いてやらないわよ」

ゴリゴリ

私の頭に更に拳銃を突き付けるのが分かる。これは脅しの道具じゃないんだけどなー。

「そのペアルックはなんだい？」

私は真つ赤な瞳でアリアのポケットをジッと見つめる。

そこには……謎の猫科動物こと『レオポン』のストラップが露出していた。

このぬいぐるみは微妙に大きく、ポケットに入れると外にはみ出す。

「本来ペアルックとは、よほど親しい友人か、あるいは……恋人同士でするもの。何で君と金次君がしてるのかな？」

「ペ、ペアルックうううー!!? やっぱりそういう関係だったの!」

「あたしもキンジはそういう関係じゃないわよ! こんなヤツとなんて、1ピコグラムもそういう関係じゃない!!?」

よし……白雪さんの矛先をアリアに向ける事に成功。しかし、アリアは私から拳銃を離してくれようとしなない。

ていうかピコグラムって、何故そこで重量単位が出てくるの？

「キンジ、何とかしなさい! そうしなきや後悔させてやるんだから!」

アリアは金次君に弁明するよう命令する。

よし、このまま私への注目を金次君とアリアに向ければ全て丸く収まる。

「………… えーつとだな。おい………… まず白雪」

「はいっ」

呼ばれた白雪さんは私の首筋から日本刀を離し、金次君の方に正座した。

緋色袴が汚れちゃうよ。既にアリアとの戦闘で少しボロボロだけど。

「よく聞け。俺とアリア、レイの3人は武偵同士、一時的にパーティを組んでるに過ぎないんだ」

「………… そうなの？」

「そうだぞ白雪。だいたい俺がこんな小学生みたいなチビと」

「風穴!!？」

ばきゅん!

「………… そんな仲になつたりするワケがないだろう？」

セリフの途中でアリアが発砲するが、サーツと真つ青な顔で無視して喋る。肝が据わつてるね。それとも残弾がないと高を括つていたか。

「じ、じゃあ………… キンちゃん」

おや？

金次君に従順な白雪さんが、珍しく口答えしてきた。

「なんだ？」

「キンちゃんとアリアは、そういうことはしてないのね？」

「そういうことって何だよ」

「キ、キス、とか……」

キス、ですか。

最大の議題が降りかかってきた。

金次君とねー私はまだしたことないが。

「……」

金次君とアリアは顔を見合わせ、同時に石化してしまう。

ほら、アリア君。弁明してみろよ。三分間だけ聞いてやるからさ。

「…… し…… た…… の…… ね……」

眩いた白雪さんの瞳孔が、すーっ、と何かに覚醒したかのように開いていく。

その顔はみるみる内に表情を失い、喉の奥からは、ふふ、ふふと虚ろな笑い声まで

聞こえてきた。

ホラー映画女優賞間違いなし。私が保証しようじゃないか。

「そ、そーそういうことは、したけど！」

ぐぐい！



バンバンバンバン!

更なる不意打ちの一発に床を叩いて、転げ回る。

ちよつと、ちよつとホームズ家の皆さーん、お子さんにどんな教育をしてるの?

ホームズ家は、アリアは私を笑い死にさせたいのかな?

ひひひ、探偵じゃなくお笑い芸人に転職すべきだよ。笑いで世界を取れる。

「きゆう」

白雪さんの身体から、魂が抜けていった。

慌てて私は立ち上がり、彼女の肩を叩いて魂を入れ直した。

危なかった……あとコンマ一秒遅れていたら、昇天するところだったね。

「ほら、起きてよ白雪さん」

ゆらゆら

彼女の肩を揺らして意識を取り戻させる。

「はっ!? ここは一体、私は何をやってたの?」

あまりのショックか、記憶が飛んでいるようだ。

これはチャンスだ。私に刃を向けた罰——お仕置きしてあげよう。

「白雪さん。気付いてるかもしれないけど、アリアと金次君はそれはそれは暑くて、甘い夜を2人きりで過ごしたんだ」

「おいつ！零。お前は何を言つて……………！」

「データラメも大概にしなさいよ！あたしがこんな奴と……………！」

2人して顔を真つ赤にしながら、テンパつてる。

見ているだけで滑稽だね。

「でも、キスしたのは本当でしよう？」

「そ、それは…………… その…………… 切迫した状況で」

状況で？パワーアップするためにキスしたと？よりもよつて、このピンク頭のチビと？

遠山金次に弁論の余地なし。

「先にキスしたのはどっち？もしかして、アリアとか？うわー、積極的だね」

「ち、ち、違うし！あ、あたしは…………… こ、こいつの方から……………！」

「じゃあ、その後で電気を消したのは？」

「消してねえよ！」「消す暇なんてないわ！」

「ベットに連れ込んだのはどっち？」

「連れ込んでない！」「ベットではしてない！」

「先に服を脱いだのはどっち？それとも着たまま……………」

「脱いでない！」「嘘言いなさい！あたしの下着見たクセにッ！」

「もういいよ！それ以上、聞きたくない!!?」

白雪さんは両耳を手で塞いでその場に蹲る。

シクシク。

泣き出してしまった。あちやー、2人がどこまでやったのか勝手に想像して耐えられなくなつたようだ。

そんな彼女の側に私は据えより、ポンと優しく肩に手を添える。

「これだけは言える。2人は……影で君のことを笑つてるんだよ！アーツハハハハハハハハハハ！アーツハハハハハハハハハハ!!?」

悪人さながらの高笑いで締める。我ながらよく笑えるものだ。

「あああああーっ！死んでやるうううう!!?」

カカカツ！ドボーン！

盛大に下駄を打ち鳴らし、ベランダの柵を飛び越して真下に広がる海に身投げした。

「あのバカ女なにやってんのよ!!?」

「あー、あー。どうしてこうなつたんだらう?」

「お前のせいだよッ！白雪いいいい!!?」

金次君はベランダの柵に足を掛けて、

ドボーン！



白雪さん救出の為、躊躇いなく海に飛び込んだ。

おおく、水泳選手顔負けの見事な飛び込みだね。彼なら特訓すれば金メダル間違いな

し！

## アドシールド

後日――

『何事も自ら調べて学ぶ』がモットーのARIAは、自らの保体知識が天動説並みに間違っていることを認めた。

図書館に通い詰めているARIAを偶々発見し、私に気づいたのか――その場から逃げようとしたので、捕まえてみると『赤ちゃんの作り方』と明記された本を持っていた。

自ら調べるARIAの姿勢に私は思わず爆笑……じゃなかった。感動し、親身になつて手取り足取り教えてあげたよ。

しかし、人が優しく丁寧に教えてあげるつてのに、何故ARIAは顔を真っ赤にして逃げようとしたんだろう？ 謎だ。

一方……白雪さんは、あれから生徒会に顔を出さなくなった。

私や金次君の前にも姿を現さないし、ARIAとの対決以降、明らかに姿を隠すようになってしまったのだ。

昨日の一件は、ピユアな白雪さんにはちよつと刺激が強過ぎたかな？

そんなある日の――昼休み。

「ふんふんふん！はー、モリちゃんいいニオイ☆」

食堂に向かおうする私の頭にアツプルが引つ付いていた。

偶々廊下でバツタリ会って今に至る。

周りからのジロジロと、物珍しいモノでも見るような視線を感じる。

大方、アツプルー後輩からのスキンシップを受けてる先輩と思われるのかな？

今日は猫みたいに甘えてくるね。体重が軽いから苦にならないけどさ。

「こらっ。アツプル、学校ではレイって呼んでよ」

武偵高に通う裏メンパーには、学校では私の事はレイと呼ばせている。

モリアーティを思わせるアダ名はできるだけ伏せていたいし、名前で呼ばれるのは新

鮮で楽しい。

「ごめんごめん。うっかりしてたよ☆レイちゃん」

大丈夫かな……彼女、入学したての頃にも同じことがあったし、ちよつとだけ心配

だ。

「ねえ、レイちゃん。香水使った？」

「おや？どうしてそう思うんだい？」

私の髪の毛に顔を埋めて、くんかくんかと匂いを嗅ぐ。

「うーん、香水使わないレイちゃんにしてはいい香りがするなーって、思ってたさ。くんく

ん」

流石、泥棒やってるだけに鼻がいい。

「正解。アツプルの言う通りだよ」

「珍しいね。普段はオメカシしないのに。コレは槍でも降るかな。いや、弾丸の雨が降るかも」

失礼だなー、私だってオメカシするさ。

しようと思つたのは白雪さんの影響が大きい。

決まつて金次君に会う時は必ずオメカシしているから、私も香水くらい使つてみるかなー、とね。

「この甘みのある香りはハツカに似てるけど、爽やかなグリーン系の香りがするーヒソップを使つてるでしょう?」

「大正解。鼻がイイね」

ヒソップはヨーロッパ南部〜西アジアにかけての原産で、背はやや高く、ブルーやパープルの色が印象的な花をもつハーブ。

花言葉は「浄化、清潔」

「香水でさりげなく色香を立てるだけじゃなくて、他にもオシャレしてみたら? ウチの学科においでよ。私が可愛くしてあげる☆レイちゃんなら顔パスでOKだよ」

「ははは、気が向いたらね」

特殊捜査科の実施棟——あそこは嫌いじゃないけど、今一好きになれない。何故かって？行けば最後。特殊捜査科の子達にオモチヤにされるからだよ。

そんな事を考えながら、私は学食の券売機でざる蕎麦を購入する。

それに対して、アップルはイチゴパフェを購入した。

——

アップルは同じ中等部で特殊捜査科の子と食事するらしく、彼女と別れて、ざる蕎麦を手に歩いていると、

「金次君。一緒に食事してもいいかい？」

ガヤガヤと賑やかな学食の中、ハンバーグ定食を食べる金次君を発見する。同時に彼を取り囲むように桃マンを齧るアリア、相変わらずイケメンの不知火君、ツンツンヘヤーの武藤君を視界に捉えた。

「ああ、勝手に座って食えよ。つても座る場所といつてもな……」

彼の眺める先にあるのは一つだけ空いた席が、アリアの隣だった。

「……座っていいかい？」

「絶対にイヤよ」

一様尋ねてみたが、結果は案の定予想した通りだった。

「食べるなら他所に行つて、一人で食べてなさいよ」

「私はここで食べたいんだよ」

蕎麦、桃マンを手にお互い睨み合いが続く。

「なあ、キンジ。レイの奴、どうしたんだ？神崎と何かあったのか？」

「何かどころか、毎回、2人して顔を合わせるとこの調子だよ」

「（この様子からしてただ事じゃないね。こんな顔をする零さん初めて見たよ）」

男子3人がコソコソと何か話しているが、今はどうでもいい。

「あー、アリア。とりあえず、座らせてやってくれ」

金次君の頼みを嫌々ながらも受け、アリアは私を隣に座らせる。

よりにもよつて、アリアの隣に座るなんて……なんて日だ!!?

気を紛らせるように蕎麦を啜る。

ちよつと、不知火君。そこは苦笑いしない。

「武偵高の生徒会長様がしみたれた食事ね」

「好きなんだよ、ざる蕎麦が。悪い？」

私のざる蕎麦を見て、アリアが嫌味を言ってくる。

「そう言う君は昼間から、そんな甘いモノをガツつくなんて、今にブクブク太るよ」

「あら、心配してくれてありがとう。でも、大丈夫よ。アタシ運動してるし。それに知ら

ないのかしら。麺類には炭水化物が豊富で、あなたの方が太るわよーろくに動かない  
あなたは特にね」

「勉強不足だね。確かに蕎麦は炭水化物の部類に入るけど、他の麺類と比べると炭水化  
物数値が低いんだよ」

「どんなに低くくても、食べ続ければ蓄積されていくのよ」

「ガツガツ食べまくってる君の方が絶対に先に太る」

テーブルの上にある桃マンを目指しする。

「いいえ、あなたの方が太るわ!」

「いいや、君の方が太る!」

「あー!お前らしい加減にしろ!!?」

金次君が大声で仲裁に入る。

「人が飯食って時に喧嘩すんなよ」

彼の言葉を受けて取り敢えず、お互い休戦に入る。

「ねえ、零さん。もしかして、神崎さんとはいつもこんな感じなの?」

「アリアが先に突つかかるんだよ」

「あなたの方が先に絡んでくるんでしょうが」

「なんか見ると姉妹見てえだな」

「誰が姉妹よ（だよ）!!？」

「グバア!!？」

ふざけた事をぬかす武藤君の顔面に、私とアリアはパンチをお見舞いする。

モロに決まったらしく、椅子に座ったまま伸びる。

こんな奴と姉妹だなんて、考えただけでゾツとするよ！

「武藤君…… あつ、生きてるね」

不知火君が容態を見る。

マズイ。公共の場ではしたなく暴力を振るってしまった。なんとかしないと。

「…… そういえば金次君」

伸びてる武藤君をそのままに、私は紛らせるように話題を変えることにした。

「君、アドシールドはどうするんだい？」

アドシールドとは一年に一度行われる武偵高の国際競技会で、オリピックみたいなモノである。

「まあ、音楽でもやろうかなと思ってる。得意でも不得意でもないしな」

「バンドかあ。いいね。よし、私もやろう」

頭の中で楽団を編成する。

理想としては、声が綺麗な不知火君がボーカル、私がギター、金次君がベース、伸び



てる武藤君がドラムだね。

「やろうって、意外だな。てつきりチアでもやるかと思つたのに」

「あれ？チアの方がよかつた？」

ちよつと首を傾げてみる。すると、金次君はカアアと顔を真っ赤にする。

「何デレデレしてんのよー！」

「ははは、遠山君。顔が赤いよ」

「ば、馬鹿!!? そんなワケあるか」

いつまで経っても彼の反応は見ていて飽きない。

大方、私のチアガール姿を見て興奮したのかな？

「でも、零さん。バンドをやるって言うけど、生徒会長である以上、色々忙しくないかい？」

アドシアードの様なイベントは何かと忙しくなる。生徒会長である以上、手が離せないくなる事も珍しくない。

「そこは大丈夫。生徒会長の権限を使えばチヨチヨイのチヨイさ♪」

「ソレって、職権乱用じゃないのか？」

「まあ、零さんだし、いいんじゃないかい？」

ちよつと、不知火君。ソレどういう意味だい？

「そんな時はあたしが取っ捕らえてやるわ」

「Catch me if you can (できるものなら 捕まえてご覧)」

その言葉を合図に、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。

同時に不知火君が深刻な表情を浮かべた。

どうしたのさ。私、変な事を言った？

## 新装備を貫いにいざ「工房」へ

深夜0時を回った頃、私はモランを連れて人気のない武偵高の地下最深部へと足を運んだ。

元々、この武偵高が立つ人工浮島は都市開発の折に東京湾に建設されたが、予算の都合や人手不足などで途中放棄され、それを武偵庁が学園島として安く購入したのだが、途中放棄された為、様々な欠陥も抱えている。

例えば、浮体ブロックのつなぎ合わせが甘かったり、固定する杭の本数が基準より少ない。

或いは、武偵庁・学校の教職員も把握できていない。見取り図には載っていない地下空間などだ。

モランが3重の金属板の扉を開け、そこから船のデッキみたいな多重構造を階段を使って下り、さらに下へ下へと下って行く。

地下4階、5階と下りて行き「地下8階」に到着。

武偵高の最深部とされる7階地下倉庫よりも深い場所。公式には載っていない隠し空間『地下工房』だ。

生徒会長に就任した際に、学園島を調査して発見した。私を含め限られた人間しか知らない。

電気・換気設備も充実してあるので、地下空間は明るく清潔に保つてある。

『地下工房』と名の通り、広々とした空間にはドンツカンカンと音をあげて稼働する機械類や使い込まれた工具が置かれた作業台。

そして、作業場を抜けた先にあるガラス張りの陳列棚には、装備科顔負けの銃器・仕立屋にあるような衣類が所狭しと並んでいる。

ここにある全ては“組織の活動”に必要な装備品やメンバーが個人的に使用する物資など……ここで生み出されるのは組織の粋を集めた物ばかり——他組織の一步二歩先を行くべきものとして作られた施設である。

相変わらず凄いいね〜見渡すだけで惚れ惚れするよ。

あつ！このスーツいいね！一着くらい貰っていこう。

側のハンガーラックに掛かっているダークスーツを手に取りろうとした時、

「教授ダメですよ。私の許可なく勝手に持ち出されては」

コツコツと革靴を鳴らし、黒のスリーピーススーツを着こなし、薄い金髪、目には真っ黒な遮光眼鏡、手にはグラスファイバー製の安全杖で周囲を確認しながら此方へと向かってくる男性の姿が。

「やあやあ、ヘルダー」

私達を出迎えてくれた彼こそ、『地下工房』の最高責任者フィン・ヘルダー。

遮光眼鏡と安全杖を必要しているから分かるように、完全な盲目であるが、超が付くほどの腕前を持つ銃技師でもある。

「新しい工房にはもう慣れたかい？」

「ええ。まあ、地下排水のせいで多少臭いますけど」

彼は「フフ」と陽気に笑ってみせる。

排水の臭いとな？換気はしつかりとしているはずだが……

試しにクンクンと嗅いでみるが、機械油の匂いしかしない。

匂いはさておき、3人で工房内を歩き出す。

「そういえばレインボーブリッジで使った銃どうでしたか？上手く改造しておいたので、不具合は出なかったでしょう？私が手掛けた自信作でしたし」

りこりんの一件で使用した銃の事をモランに尋ねてくる。

あの事件に際して、彼に平賀さんの銃の改造を頼んでおいた。

平賀さんの銃は決まって一つは不具合が生じるから、万全の状態で挑む必要もあり、彼女には悪いが改造は致しかねない。

ヘルダーも平賀さん特製の銃を前にした時は燃えて（物理的に）仕事に取り掛かった

し、万事OKだよ。

「壊れました。ちよつと強くトリガーを引き過ぎて」

モランの簡潔な答えにヘルダーは「ええッ!?!」と驚愕する。

「な……何て事を……!あれほど乱暴にするなって、ちゃんと伝えたじゃないですかッ

!!?只でさえ貴女馬鹿力なのに!」

「いえ、イライラしていたものですから。うっかり……」

「じゃないですよ!!?改造にどんだけ手間がかかったと思ってるんですか!?!今度壊したらブチ殺しますよ!!?」

自分の改造した銃が壊された事がショックなのか、暗いため息の後、側の壁に手をつけ、ブツブツと念仏のように何かを呟く。

銃の事となると神経質になるから仕方ないけど。

「あの……ヘルダー。本題に入ってもいいかい?」

ここで私は話題を変える為、落ち込むヘルダーに話しかけると、

「……ああ……銃の件ですね……こちらへ」

彼は察したのか、工房の一角に案内する。

ここに来た目的は遊ぶのではない——モランの新装備を受け取る為に来たのだから。

工房の一角に移ると、そこには作業台に置かれた一丁の狙撃銃が。

ソレをモランは当たり前のように手に取ると、

「エルマSR100……いや、DSR—1ですか」

「ええ。ボルトアクション式は勿論、初弾の着弾性が特出しており、様々な戦術にも直ぐに対応出来るオプションが備えられています」

ヘルダーの解説を他所にし、モランは黙々と銃の動作を確認する。

同性の自分から見ても、銃を構えるモランの姿はカッコ良く見えるね。

一通りの動作を終えると、モランがある事に気付く。

「銃身の溝が滑らかになってますよ。これでは精度が落ちてしまいます」

銃身にはライフリングと呼ばれる螺旋状の浅い溝があり、銃身内で加速される弾丸に旋回運動を与え、ジャイロ効果により弾軸の安定を図り直進性を高めるのだ。

ライフリングのない状態で実弾を発射すると、回転されない弾丸は空気抵抗を受けて横弾となったり、でんぐり返りながら飛ぶので命中精度は全く期待出来ない。

そんな疑問に目を向けるモランを尻目にヘルダーは「ふふん」と鼻で笑うと、

「この銃はコレの使用を前提に製造したのですよ」

私達の眼前に1発の銃弾を見せてくる。

外見はただの308ウィンチエスター弾だが、私は一目で銃弾の正体に気付いた。

「ああ、成る程スマート弾か」

「何ですかそれは？」

モランが説明を求めてくる。

「おや？彼女はスマート弾を知らないようだ。全くしようがないな。」

「GPSとレーザーで誘導できる銃弾の事だよ。一度ターゲットにロックオンしたら遠回りしようが、ターゲットが動いても命中するんだよ。だから……」

「独自の誘導システムがあるので銃身に溝がなくても問題ないのです」

最後の解説辺りでヘルダーが割り込みをかける。

銃の自慢がしたい気持ちは分かるけど、そこは遠慮してよね。

「説明は分かりましたが、肝心の照準システムがなければ意味がないのでは？」

「それでしたら問題ありませんよ」

モランの問いに答える否、それを待つたとはばかりにヘルダーが私に差し出してきたのは、一台のタブレット端末だった。

一般販売はまだされていないのに、もう手に入れてあるとは流石はヘルダーだね。

「その中にスマート弾の照準システムが入っていますので、調整の方はお手数ですが……」

「OK。こつちの方でやっておくよ。寧ろ、専門的なものだからさ」



武偵として培ってきた、プログラミングの見せ所だ。自然と腕がなるよ。

一通りの説明を終え、モランにケースに納めさせて工房を後にしようとした時だった。

作業台の上、正確には隅っこにぽつんと置かれたモノに私の目がいったのは。

それは手錠だった。

一般的に武偵が使用するものとは違い鉛色をしている。

手に取ってみると、輪の部分にアルファベットで「F」の刻印が。

「おや、新作の手錠だね。これも貰っていくけどいいよね？」

「またそうやって勝手に……まあ、いいですよ。それに関しての説明はいりませんか？」

「自分で使い方を調べるからいいや」

最後にそう言い残し今度こそ工房を後にしようとするが、

「教授、最後にちよつといいですか？」

ヘルダーに呼び止められる。

この流れはもしや……

「ドイツ銃は？」

「超最高でしょう？分かるよ」

「…… 本当ですか？私に隠れてベレッタを賞賛してないでしょうね？ドイツ銃を虚ろにしませんよね？馬鹿にしませんよね？時代遅れなんて思ってもませんか？あと……」

延々と呪詛のような問いかけがくる。

怖い怖い怖い!!？地下の暗がりですんな事を口走つりながら来られると超怖いんだけどさ！

「大丈夫だつて！ドイツ銃は素晴らしいよ。ねっ、モラン！」

「はい、素晴らしいの一点張りですとも」

ここでヘルダーを宥める為、モランと一緒にドイツ銃を褒めまくる。

ヘルダーはドイツ銃に関しては病的なまでに誇りに思っているのだ。

悪口など以ての外、下手したら殺されかけない。

特にベレッタ社を目の敵にしている。なんでもベレッタ社お抱えの銃技師とウマが合わないそうなの。

「ですよ。おふたりなら分かってくれると思つてました。最近は何れベレッタに人気と取られて散々な思いで…… ドイツを時代遅れ呼ばりしやがった、あのチビ絶対ぶつ殺

したる！ドイツこそ最強じゃあああ!!？ドイツ万歳！」

ヘルダーの雄叫びが工房内に響き渡る。

完全にキャラ崩壊じゃん。

いつものですます口調はどこへ？火星辺りまで飛んで行ったのかな？

「あーはいはい。分かった。分かりました。ドイツばんざーい。行くよモラン」

途中から完全に個人的な恨み言を始めたヘルダーに付き合い切れず、私とモランは逃げるように今度こそ工房を後にした。

## 何事もイメージトレーニングから

翌朝7時。

生徒会長としてアドシアードの運営・来賓歓迎準備・清掃 e t c . . . . . 上げるだけでもキリがない仕事をこなし、ある程度の区切りがついた所で見回りも兼ねて校内を歩いていると、

「あっ！金次君はっけーん」

学校のハズレに位置する通称『看板裏』。

レインボーブリッジに向けて立てかけてある看板の裏であり、体育館との間に挟まれた細い空き地に立ち尽くす金次君の姿を

挨拶をしようと彼の元に歩き出すと、

「げえ、アリア. . . . .」

金次君の背後から忍び寄るピンク頭が。アリアだ。

金次君の背後をとったアリアは背伸びをし、挨拶代わりなのか？彼に目隠しをした。

しかも、武偵高のチアガール―黒を基調にしたコスチュームを着用してる。対して私はいつもと変わらず武偵高の制服だ。

突然のアリアの登場に金次君はあまり驚いた様子がない。

まさか、ここでアリアと待ち合わせしていたのか？

しかも、チアアリアに見とれて……

そんな光景に居ても立っても居られなくなり、

「おはよう金次君!!?」

「あつ、れ……ぐぼあ!!?」

「ちよつ……キンジ!??レイあんた初っ端から何すんのよ!」

挨拶がわりにボディブローをお見舞いする。

突然の不意打ちに金次君は抵抗の間もなく、一撃をモロにくらい前のめりになる。

「易々と背後をとられたお仕置きだよ」

「もつとやり方があるでしょうが。私でも奴隷にここまでしないわよ」

身長差の関係でアリアを見下ろす形で睨む合う。

しないって、嘘つけ。感情に任せて叩くでしょうが。

それに対して私のは愛の鞭ってやつだよ。

「腹パンはねえだろうがオイ。危うく朝飯吐くとこだったぞ」

痛む腹を抱えながら金次君がふらふらと立ち上がってきた。

ほう……私の腹パンを食らっても立ち上がるとは君も強くなったね。嬉しくて涙

が出てきそうだよ。まあ、嘘だけどネ♪。

「背後を取られる君が悪いんだよ。武偵たるもの警戒を怠るなってね」

「コソコソと人の事を見るなんていい趣味ね」

と、アリアは私がやってきた方角を見渡す。

いつも？この辺りで喧嘩になるが、今日の私は機嫌がいい。何故なら、

「何だ。そのいい事ありましたよ感ありありの顔は？急にニヤついて気味悪いぞ」

気持ちが悪わず顔に出ていたようで、その事で金次君に指摘される。

女子に対して気味が悪いなんて失敬だぞ。また腹パンを喰らいたいのかい？

「ふふふ、教えてあげよう。実は昨日、私のもとに新車がね……」

顔を真顔に戻して説明してあげる。

そう、ハイジャック事件でりこりに廃車（アリアにも）された私の愛車ポルシェ3

56aが新車になって帰ってきたのさーアリアに弁償させてネ♪

あの時、私に対し弁償するのが屈辱とばかりに代金の支払いを渋る姿は何とも滑稽

だったよ！

「結局あの後、ちゃんと弁償してやったんだな」

「あたしは貴族よ。車の一台や二台しつかりと払ってやるわよ」

「あれれ？その割には支払いの時、カードを出す手がプルプルと震えてたような」

「そこ！ 払ってやったんだから、余計なことを言うんじゃないわよ！」

アリアは足蹴りを放つが、そこはひらりと躲けてみせる。

危ない……… こいつは考え無しに突発的な行動に出るから考えー攻撃パターンが読めない。

「車の件はここまでにして。なんなのアリア、そのカツコ」

「見て分かんないの？ チアよ。これはキンジを調教する間に、あたしがチアの練習をする準備なの。同時にやればムダにしないですむでしょう？」

成る程。確かに理にかなっている。

仕事の効率化は武偵には必須だしね。しかし、金次君を調教とな。

私もやってみたい………

「……… で、具体的にはどうやるの？」

「おい。お前まで交ざるのかよ」

「へー。珍しく気が合うじゃない」

チアリアはもったいぶって姿勢を正すと、わざとらしい咳払いの後、説明を開始した。

アリア曰く、金次君はSランク武偵の才能を持つてる、やればできる子。金次君は二重人格で覚醒の『鍵』ー戦闘時のストレスによって切り替わるそうなの。

戦闘時のストレスによる二重人格ね。

ふふん。その二点はハズレだよ。

ヒステリアモードは、心因性の獲得形質じゃない。神経性の遺伝形質なのだ。

話題の金次君に視線を向けると、感心したような態度で、相づちを打っている。

適当に受け流してやったな。

「だからーあんたを戦闘のストレスにさらしまくるのが、特訓の第一段階」

と言うとアリアは、いきなり、チアのカッコでも背中に隠していたらしい寸詰まりの刀を抜いた。

「ーお、おい待てっ!」

「なるほど…… それを使って金次君にストレスを与えて覚醒させるのだね」

「覚醒ってどういう事だよ」

俺のヒステリアモードが何なのかお前知ってるだろ、とばかりに助けを求めろが敢えて無視を決め込む!

アホなほどシンプルではあるが、それ故にどんな結果を招くか気になる。

「君は実に馬鹿だな。噛み砕いて言う…… アリアの攻撃時に君が覚醒し、その場で反撃する。でしよう?アリア」

「そう。だからあんたが覚えるべき技は、カウンター技なの」

「カウンター技…… って何だよ」



「君はこの状況下でまだ分からないのかい？ 刀イコール……」

「真剣白刃取りよ」

言うどアリアは、刀を振り上げた。あつ、やつぱりね。

「待——」

て！と金次君が叫ぶより早く、ヒュツ!!? という音がなり、彼の肩に刀を振り下ろし——かけたところで、寸止めしたらしい。

金次君には全然、見えなかつただろう。

「はい。今のタイミシングを500回、まずは頭の中でイメージする。制限時間は10分」

「…… イメージ？」

「要するに今の動きを元に、刀を挟み取るイメージを作るんだよ。シャドーボクシングみたいなさ」

分かりやすく、シュツ、シュツとジャブを打つてみせる。

「イメージだけやれるもんかよ」

金次君は深く溜息をつく。

イメトレを馬鹿にしてはいけないぞ。

イメトレがパフォーマンスを向上させるといふ事はすでに科学的に証明されている。

脳は「実際の経験」と「頭の中で鮮明に描いた想像上の経験」を区別するのが苦手だ。

想像上の経験でも、実際の経験でも脳は同じような領域を使って情報処理を行う。脳をだまして成功体験を生み、それによって得た自信や感触によってパフォーマンスが向上するだ。

アツプルだって仕事をする前に、想像するのは最強の自分だって言ってたし。

「イメージすれば簡単にできるよ」

「じゃあ、お前がやってみろよ」

お姉さんぽい口調で言うのと、手本を見せてみるとばかり。

あちゃー、カナさん風に喋ったのがカンに触ったか。

「OK。じゃあ、アリア早速やってよ」

「いいの？あたし車の件で、少ーし、だけアンタにイラツとしてるから、思わず力が入り過ぎるかもしれないわよ」

「御託はいいから早くきなよ」

挑発的な口調で言ってる。

肉体的には向こうが有利。精神的にはこちらが有利。

怒りに身を任せた攻撃でも流星はSランク武偵。大きな振り下ろしを見切って受け止めてみせる。

攻撃のシミュレーションを終える頃に、ヒュッ！

という金次君の時よりも早く、空気を断ち切る音が目の前で鳴った。

アリアが私の額に目掛けて刀を振り下ろし——たところで、パシッ！

イメージ通り、両手で刀を受け止めた。

「ほらね。簡単でしょう」

「——じゃねえよ！お前くらいだよ。初っ端からそんな事ができる奴は」

何をそんなに怒っているのだろうか？あつ！さてはヤキモチかな。

攻撃をイメージし、相手の手を読むのは初歩の初歩。私にできて自分ができない事が

悔しいのか。

彼の心情を察し、手を離そうとしたところで、あることに気づく。

「……ねえ、アリア。そろそろ力緩めてほしいんだけど」

「アンタが先に手を離したら緩めてあげるわよ」

「そしたら君、絶対に私の脳天に刀を叩き込むでしょうが」

「あら。そしたら、シヨックで頭が冴えて良くなるかもね」

「なワケないでしょうが。力をゆるめる・め・ろ」

「アンタが先には・な・し・な・さ・い」

ググッとお互い一步も引かず、金次君を余所に意地の張り合いが続く。

『看板裏』でお互いの攻防が終わりを迎えたのは、一限目の授業開始を知らせるチャイム

が鳴ってからだだった。

## お金の貸し借りは慎重に

「金次君どこに行つたのかな？」

私は放課後の探偵科の校舎を歩きながら金次君を探していた。

しかし、探せども彼が姿を現わす事はない。

くそ。アリアが現れてからよく金次君は姿を消すようになってしまった。

こそつと2人で待ち合わせでもしてるのかな？ 気に入らない。

心の中で愚痴をこぼしながら、搜索を打ち切ろとしていた私は……

「だ、だーれだ？」

と背後から目隠ししてきた側近ことモランに驚き、一瞬、黙ってしまった。

モランなの？ 嘘だ。あのモランが私の背後を取った上で、こ、こんな。可愛げのある

行動にでるなんて。

「その声は私のかわいい子犬ちゃん♪」

「そ、そんな子犬ちゃんだなんて!!？ 恥ずかしいですよ主〜!!？」

私の子犬ちゃん発言に、モランが「きゃー!」と黄色い声を上げ、身じろぎして恥ず

かしがる。その瞬間、

メキメキメキ!!?」

私の顔に信じられないほどの急激な圧力が加わる。

ぐわー! イタイイタイ!!? 何か出る!!? 何か出ちやうよ!!?」

あまりの痛さにモランの手をバシバシと叩き離させる。

「主!!? うわあああ! 耳から変な液体が!!?」

「だ、大丈夫だよ。これは…… そう! 水だよ。だから、心配ないから落ち着こうか」

耳から水? のような液体を垂れ流す私を見て取り乱すモランを落ち着かせ、私はポケットからハンカチを取り出し液体を拭き取る。

あ、危なかった。モランがあとコンマ数秒離すのが遅かったら、私の頭が握り潰されたトマトになるところだった。

背後を取られるとこういう結果を招く。

「本当に大丈夫ですか? 念の為、救護科に行きましょう。今すぐに!!?」

「大丈夫だつて。ほら、この通り」

健全さをアピールするため彼女の前で、シャドウボクシングをやってみせる。

少々、視界がグラつく大事無い。

「うう…… すみません。私の軽率な行動が主を…… 主をおお」

「あー、はいはい。分かったから、泣かないの」

泣き出したモランを胸の中で包む込むように「よしよし」と頭を撫でてあげる。

うんうん。分かっているよ。たまには茶目つ気を出してみたかったんだよね。

「はい。私はもう泣きません」

頭などで効いたのか？モランはいつものキリツと……いや、頬を赤らめ少しニヤついている。

マゾヒストの素質があるのかな？まあ、どうでもいいか。

「……それで、ここに来たのは私に会いに来ただけじゃないでしょう？」

私はわざとらしく姿勢を正すと、モランに訪問の目的を訊ねる。

主人の変化に敏感なモランは今度こそ態度を改め、ピシツと真面目な態度に早変わりする。

「主の警戒にあった『イ・ウー』らしき人物の姿は現在のところはありません。故意に姿を消しているのか、或いはもう既に……」

「いいんだよモラン。そんなに自分を責めなくても。君はしっかりと仕事をしているからさ」

探偵科の校舎の中でも御構い無しに『イ・ウー』の名を堂々と上げる。

放課後、探偵科の校舎に生徒（金次君以外）が残る事は、まず無いので、安心して会話ができるのだ。

『武偵殺し』こと峰 理子の一件以来、『イ・ウー』が直接――私達の周りで事件を起こす気配はない。

「私の方でもざっと生徒の経歴――りこりんのような密偵がないか調べたけどヒットしなかったね」

願わくば教務科の人間も調べたかったが、そこは俗に言うアンタツチャブルー――危険を冒してまで調べる気にはならなかったので保留。

「仮にモランが『イ・ウー』の人間だったら、武偵側にどんな事を仕掛ける?」

突発的にモランに尋ねてみた。すると、彼女は少々難しい顔で悩み、

「私ですか? 生憎とそういった予想は苦手です……」

「いいんだよ。軽い気持ちで考えて。さあ、さあ」

急かすように意見を求める。

君が山育ちで培った野生のカンは頼りになるからね。

カンによる捜査や行動が苦手な私も例外的にモランのカンは信頼しているのだ。

そんな信頼を寄せるモランは「では遠慮なく」と前置きし、

「私でしたら、将来的に組織の脅威となる人物の抹殺を行いますね。火種は大きくなる前に消すに限る、と言いますし」

成る程ね。無難な意見だと思う。



しかし、それならとつくの昔にやり終えているだろうーあの組織ならそれ位はやってのける。

因みに彼女が将来的に脅威と見做す人物も好奇心的に聞いておきたいが、今は置いておこう。

「ははは、成る程ね。抹殺、抹殺ときたか。でも、それは少し当たり前過ぎるんじゃないかい？」

「では、主には『イ・ウー』が次に何を仕掛けてくるか見当がついているのですか？」  
「残念ーまだなくにも分からないんだよね」

私がお手上げとばかりに、両手を大きく広げてオーバーアクション気味に答えてみせると、モランは釣られたようにズルツとずっこける。

ナイス・リアクション！

「まっ、今はのんびりと様子見といこうじゃないか。放つておいても必ずぶつかり合うのだし」

天体力学法則では物体同士が衝突する際、付随する物にもダメージが及ぶ。

この際は組織の犯罪者を1人でも構わない。仕留める事ができれば『イ・ウー』という組織自体にも少なからず打撃を与えられる。

のんびりとは言ったが、実は内心では早く来ないかとワクワクしている。

しかし、こればかりはモランにも言えない。

モランと一通りの段取りを終え、私は探偵科の校舎を後にする。

別れる際、モランが離れたくないとばかりーメンバーの前では絶対に見せない上目づかいで尚且つ、ウルウルと涙目になったが、そこは厳しく察に戻りなさいと諭した。

そんな事を思い出しながら、ブラブラと夕焼けをバックに歩いていると、  
「あれ？ポニーとクライドじゃないか。何やってんだろう？」

探偵科棟では見かけない顔が2つーポニー&クライドの二人組の姿が。

辺りをキョロキョロと見渡している。様子からして誰かを探しているようだ。

思わず気になったので、一声を掛けようと歩み寄ろうとするが、それより早く彼女らはお目当ての人物を見つけたようで、

「見つけぞ！キンケツ!!？」

息ピツタリ。

夕焼け空をバックに飛ぶカラスもサツと逃げ出すような大声を上げ、教務科の前に立っていた人物ー金次君目掛けて走り出した。

ついだとばかりにアリアの姿もある。彼の隣に！隣にネ！

「何だよおま……ぐえ!!？」

「ちよつ!?? ボニー、クライド! あんた達、急に現れたと思つたら、何すんのよ」  
ボニーとクライドの突然の登場に驚く間も無く、2人に襟首を掴まれ金次君は苦しうだ。

アリアはそんな金次君を助けようと3人の間に入るが、哀しきかな身長差的に無理だった。そう、無理だったよ。

まったく、見てられないよ。

やれやれとばかりに助けに行こうとした瞬間、

「借金返せ!!?」

えっ?

ボニーとクライドのセリフに思わず目が点になり、同時に足がピツタリと止まる。

ウソ。金次君……君はよりにもよつてこの2人からお金を借りたのかい?

ボニーとクライドはお金に対して、超が付くほど執着心がハンパない。借金しようものなら、サラ金も真つ青な取り立てー地の果てまで追われるぞ。

「何の事だよ? 俺はお前から金なんて……」

「オオツ? しらばつくれるてカ? コラツ!」

「トぼけんじゃぞ。今日の昼休みオレらから金借りに来ただろうがよ!」

弁明も虚しく、クライドが金次君の顔面にビシツと突きつけたのは一枚の借用書だつ

た。

遠目から見るとサイン欄には金次君の名前が。

そして、肝心の借りた金額は……… 400万円!!?

金次君へ返せる当ではあるのかい？そもそも、400万も何に使ったの？400万円は大金ですよ。

「オラッ！ちゃんと耳揃えて返せや」

「放課後必ず返すつて、お前ちゃんと言ったよな？」

「知らん！本当に知らねえぞ。オレはお前から金なんて一円も借りてねえ」

「ホッホ？ツまりはしらばつくれた上に返さないつてか？」

金次君の態度に腹を立てたのか、クライドがググツと握り拳を作り殴ろうとした瞬間、アリアがスカートから抜いた二丁拳銃をクライドとボニー両者に向ける。

「今すぐにキンジを離しなさい。幾ら何でもやり過ぎよ。話すんだつたら、ちゃんとした場を用意してから話しなさい。これは命令よ」

「アツ？」

命令。この一言でボニーとクライドの目から光が消えた。

代わりにあるのは、ドス黒い殺気のこもった瞳だけだ。

あー、あー。2人とも完全にキレたね。

金次君を地面に落とし、2人は拳銃など恐れずアリアに詰め寄る。ボーニーは腰のホルスターに、クライドはスカートの中に仕込んだナイフに手をつける。

「二丁前にオレらに命令だとヨ。どう思うクライド?」

「アあ。ウゼえし、生意気だなこのチビ」

「それ以上近づかないで。あと2人とも武器から手を離しなさい。これは警告よ」

警告、命令。

ボーニーとクライドに対し、絶対に言ってはいけない3つのワードの内、アリアは2つも言った。

間違っても最後のワードである、アレ、を口にしないですよ。

ハラハラする中、地面に倒れていた金次君が立ち上がり、

「お前らが用があるのはオレだろ。アリアは関係ないだろうが」

アリアを守るようにボーニーとクライドの前に立ちはだかる。

その姿はまさに騎士の如く。いや、あの2人相手に負けじとメンチ切る姿は極道の若頭つて、私は何を言ってるのだ!?!?

「下がりなさいキンジ。この2人……マジでヤバい感じがするわ」

教務科の前で一触即発の雰囲気醸し出す4人組にとうとう我慢できなくなった私は、

「おやおや？何をやってるのかな？4人して天下の教務科の前で」

今しがた到着したかのように装いながら彼らの前に姿を現わす。

我ながら白々しい。

突然の登場に一同驚くも、特に面白いリアクションをしなかったのは、

「零！いいところに来た。ちよつと助けてくれ」

「何ちやつかりとコイツに助け求めてんのよ」

私の登場があまりに嬉しいのか、金次君は目を光らせる。

「どういった状況なのかな？誰か説明してよ」

隠れて様子を見ていたから分かっているが、敢えて状況が飲み込めないフリをする。

私が事情を求めると、金次君は事の顛末を語り出す。

要約すると、ボニーとクライドから金を借りていない。対して、2人は金次君に金を

貸したと主張する。

そんな説明を「ふむふむ」と愛用の精油パイプを啜えながら、一通り聞き終える。

「つまり……金次君は身に覚えのない借金の返済をこの2人から求められていると」

「ああ、だから困っているな。頼む！お前の方から説明してやってくれ」

「この通りだ」とばかりに手を合わせ頼んでくる。

ほっほ。私に頼み事ね。ならば、その代わりに今度、女装して新作同人誌のモデ

ルになつてもらおうか。生でネ♪

「いいよ。助けてあげよう。このシャーロック・ホームズがネ」

「勝手に曾おじい様の名前を騙つてんじやないわよ。あと、あたしの家の名前を使うのも禁止!」

「さてと……うるさいピンク頭は放つておいて、と」

「無視すんな!!?」

私の嫌味にぐるると犬みたいに犬歯むき出しで威嚇するピンク頭は無視だ無視。

「ボニー、クライド。君たち2人は、確かに、金次君本人からお金を貸してと言われたから貸した。そうなんだね?」

「おうヨ。確かにキンケツだったぜ。なあ、クライド」

「アあ、キンケツだった。アと言つとくが、キンケツの代理人とかはないぜ」

「特に変わった様子は? 例えば声が風邪気味だったとか」

「いいヤ。別に何も無いぜ」

「いつもと変わらず、根暗なキンケツだつタ」

「根暗は余計だ」

2人の様子を見るにウソは吐いていない。

私の前でウソがつける程賢くなければ、肝も据わつてない。

「ーだそうだけど、金次君？」

「だ・か・ら。俺は一円も借りてなんかない」

金次君の証言にボニーとクライドが「ウソつけこの野郎！」とキレ出すが、何とか宥める。

うーむ、金次君のこの様子を見るに、こちらもウソをついてない。

三者の間で意見が全く異なるぞ。

「金次君は昼休みの間に何処にいたの？」

私が尋ねると彼は少し悩んだ後、「……俺は」と言いかけた所で、

「コイツはずつとアタシと一緒にいたわ!!？」

アリアが背後にドンと効果音が鳴るイキヨイで高らかに宣言。

それを聞いて金次君が「ちよっ！おま……」と動揺を隠せない。

「本当に？本当の本当に一緒にいたの？いたの？ねえ、いたの？」

「当たり前よ。ウソなんて吐いてないわ」

なんか怪しいなく彼を庇ってる？しかし、朝の一件もあるしウソとは言い切れない。

ぶかぶかとパイプを吹かして悩んでいると、

「どうしたのアリア？私の顔に何か付いてるのかい？」

「アンタ、その精油パイプどこで手に入れたのよ？似たような物を見た記憶があんだけ



ど」

「君の故郷イギリスのロンドンーベイカー街の知り合いからチェスで勝ち取った戦利品だよ」

アリアがジロジロと私の精油パイプを見つめてくるので、コレの経緯について説明してやると、アリアは何か悟った様子で黙り込んでしまった。

まったく、人の謎解きに口を挟まないでくれよ。

気を取り直し、私はボニーとクライドの承諾を受けて問題の借用書を観察する。

取引金額、借り手の署名と住所、押印、契約日、返済期日、返済方法

など必要なことが記入されている。

因みに、返済が遅れた際の取り決めは遅れた分だけ殴られるであった。怖っ!!?

「署名はパツと見た限り、金次君の間違いないね」

私の証言にボニーとクライドは「だろう!」と自信たっぷりに胸を張る。

これには金次君も信じられないとばかりに、私から借用書をぶん取ると目を見開きまじまじと見つめる。

「君の字で間違いないのかい?」

「…… ああ、信じられないが俺の字だ」

今の君の姿はギリシャ神話のゴルゴーンにでも睨まれ石にされたようだよ。

筆跡学は探偵科で習ったが、あれは個人的には学問とは呼べないのであまり真剣に取り組んでない。

「ねえ、金次君。試しにサインしてみてよ。勿論、フルネームでね」

私は武偵手帳を開き、項垂れる金次君にサインを書かせてみる。

さらさらと書かれたサインを見て気づいた。

縦線が突き出した文字の部分は、長いとリーダー気質がある。これはあつてるが、文字の右払いの長さが微妙に違う。

借用書の方は長いのに対し、金次君が書いた方は少しだけ短い。

僅かな違いと思うが、右はらいが長めなところにハートの熱さが出てくる。

金次君には少々身勝手さが出るが、借用書の署名には身勝手さが感じられない。

従って彼が書いた字ではなく、別の第三者が書いたものだ。

「これは第三者が金次君になりすまして2人からお金を騙し取ったと見て間違いないよ」

私は導き出した結論を4人に告げる。

「だったら俺は金を返さなくていいんだな?」

「勿論。誰かが勝手に金次君名義でお金を借りたとしても、その借金を返済する義務は生じない。それはたとえ友人であつても、親と子の関係であつても同様だよ」

保証人として契約書に署名していない限りは、どんな間柄であつても返済の義務が生じることはほとんどない。

今回は保証人にされてなかつたのが幸いした。

「ちよつと待つてくれヨ！ だったら、俺らはどうなるダ？？」

「キンケツになりすましたヤツを探せつてか？？」

「借用書一枚で疑いなく貸した君達にも非はあるよ。考えてみたまえ。この年から年金欠で、学食で一番安い蕎麦ばかり食べて、銃弾一発買うにも苦勞してる金次君が400万円も借りて返すアテがあると思うのかい？」

「おい。途中から完全に悪口になつてんぞ」

「あんたが蕎麦ばかり食べてる理由がなんとなく分かつた気がしたわ」

このまま一件落着の雰囲気と思いきや、そこは問屋が何たら。

「納得いかねえな」

ボニーとクライドは食い下がる。

どんな事をしてでも金を取り返す気だ。

やれやれ……手の掛かる姉妹ちゃんだネ。

「この話はこれでお終いだよ」

私は背後から2人の間に入ってポンとそれぞれの肩に手を置く。

「こんな推理ごっこで納得いくかヨ」

「オレらが貸したって言ってるんだから、貸したんだよ」

「この話はこれでお終いだよ」

まだ、食い下がる2人に同じセリフを言ってるー今度は耳元で囁くように。

「だからあ…… キンケツに貸したってんだ……」

「サがれってんなら断るぜ。コつちとら、400万も出したんだから……」

2人は一呼吸入れて、

「手え離せや」

ギンツと飛び切りの睨みを利かせる。

しかし、私はそんな2人の威嚇を無視して、

「この話はこれでお終いだよ」

オウム返し気味に、また同じセリフを吐き捨てる。

これにはとうとう2人して額に青筋を浮かべる。

「耳イ遠いのかよメスグモ!!? ヤダってー」

「これで 終わり だよ」

駄々をこねる2人の肩にグツと少し力を入れ、両者を地面に跪つかせる。

側から眺めるアリアと金次君は目を丸くし、ボニーとクライドも驚くがすぐに立て直

し、

「へっそうかヨ……」

「どうしてもってんなら……」

私の手を払いのけ、再び立ち上がる。

「今ここでオマエと闘ってもいいんだぜ？」

格闘ゲームのキャラみたいな事を言つて、

ーゴゴゴゴゴゴゴ

誰も彼もの神経を焼きつかせるような、殺気を放った。

この圧力の中、金次君とアリアは少なからず飲まれつつも、反撃できるレベルの意識を保っている。

心地いい殺気だね。また、昔みたいにボコられたいみたいだ。

ほら、かかってきなよ。君達のボスが誰なのかももう一度教えてあげる。

デスマツチよろしくのバトルが始まると思いきや、

「ハア、しょうがねえナ」

「ヒいてやる」

意外にも先に折れたのはボニーとクライドだった。

この結果は意外である。てつきり身体に教え込むことになるよばかり……

「ただし…… オレらを騙した張本人見つけろよな」

「勿論さ♪」

捨てゼリフを吐いて教務科棟を後にする2人。去り際に犯人搜索を依頼するあたり馬鹿ではない。

今度こそ一件落着と。

「さあて。やつとうるさいのが行つたね金次君」

ニペアと飛び切りの笑顔で彼の方を振り向く。

「零…… よくあの殺気の中、臆さなかつたな。こっちは張り詰めるのに精一杯だったのに」

「アンタ本当に何者？あの2人が言つたメッセージモつてどう意味よ」

「そんな事どうでもいいじゃないか。一件落着つてことでさ♪」

やばい！安心した瞬間、眠気が襲つてきた。かぐらぐら、

「金次くん。眠くなつてきたから背中におぶつて」

よいしょつとばかりに前置きもなく、彼の背中にダイブするーおまけとばかり自分の胸を押し付けて。

「つて、おい胸！背中に胸を押し付けるな!!？思い切り当たつてから」

「降りなさいよヘンタイ女!!？いいえ、そのまま動かなくていいわ。風穴開けてやる！」

私を背に乗せロデオの牛みたいに動き回る金次君、それを追いかけるアリア。

ははは、興奮してテンパってる。ついでに、太もも押し付けてやれ♪

ギャーギャーとお馴染みとなったやり取りをしていると、急にアリアが立ち止まった。

「これ見て」

「……………何だ」

「これは……………」

びしっ、とアリアが指す掲示板を3人してのぞき込むと……………

『生徒呼出 2年B組 超能力研修科 星伽白雪』

白雪さんが、教務科に呼び出しを受けていた。